國譯一切經

大東出版社藏版

LIBRARY
MAY 27 1995
UNIVERSITY OF TORONTO

CHENG YU TUNG
EAST ASIAN LIBRARY
UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY
130 St. George Street
8th FLOOR
TORONTO, CANADA M5S 1A5

律部 三

境野黃洋譯

目次

（本丁）（通頁）

四分律（自第三十三巻至第四十七巻）……〔七二七―一一三八〕……一

巻の第三十三（二分の十二）……一

受戒揵度の三……〔七二七―七五四〕……一

巻の第三十四（二分の十三）……二六

受戒揵度の四……〔七五五―七八三〕……二六

巻の第三十五（二分の十四）……五八

受戒揵度の五……〔七八四―七九七〕……五八

説戒揵度上……〔七九七―八一二〕……七一

巻の第三十六（二分の十五）……八七

説戒揵度下……〔八一三―八四二〕……八七

巻の第三十七（二分の十六）……一一六

安居揵度……〔八四二―八五九〕……一一六

自恣揵度の一……〔八六〇―八六六〕……一三四

巻の第三十八（三分の二）……一四一

自恣揵度の二……〔八六七―八八三〕……一四一

皮革揵度……〔八八三―八八九〕……一五七

巻の第三十九（三分の三）……一六四

皮革揵度の餘……〔八九〇―九〇三〕……一六四

衣揵度の一……〔九〇三―九一二〕……一七七

巻の第四十（三分の四）……一八六

衣揵度の二……〔九一三—九三六〕……一八六
卷の第四十一（三分の五）……二一一
衣揵度の三……〔九三七—九六〇〕……二一一
卷の第四十二（三分の六）……二三五
藥揵度の一……〔九六一—九八六〕……二三五
卷の第四十三（三分の七）……二六一
藥揵度の二……〔九八七—九九七〕……二六一
迦絺那衣揵度第八……〔九九七—一〇〇三〕……二七一
拘睒彌揵度第九……〔一〇〇三—一〇二〇〕……二七七
卷の第四十四（三分の八）……二九五
瞻波揵度第十……〔一〇二一—一〇三二〕……二九五
呵責揵度第十一の一……〔一〇三三—一〇四六〕……三〇六
卷の第四十五（三分の九）……三二一
呵責揵度の餘……〔一〇四七—一〇五四〕……三二一
人揵度第十二の一……〔一〇五五—一〇七六〕……三二九
卷の第四十六（三分の十）……三五一
覆揵度第十三……〔一〇七七—一〇八三〕……三五一
遮揵度第十四……〔一〇八三—一〇九四〕……三五七
破僧揵度第十五……〔一〇九四—一一〇八〕……三六八
卷の第四十七（三分の十一）……三八三
滅諍揵度第十六の一……〔一一〇九—一一二八〕……三八三

◇　◇

索引……卷末

卷の第三十三（二分の十二）

受戒揵度の三

佛迦葉に告げたまはく、『昨夜釋提桓因供養の具を持ち來りて我れを供養し、法を聽かんと欲す、是れ其の光りのみ』と。迦葉念じて言はく、「甚奇甚特なり、大沙門威德乃ち爾り、釋提桓因をして、供養の具を持ちて來りて法を聽かしむるや、大沙門神足自在にして阿羅漢を得たり、爾りと雖故ほ我が阿羅漢果を得たるには如かず」と。時に世尊彼の食を食し已りて還りて本林に詣る。時に梵天王供養を如來の所に興さんと欲し、夜闇の時大光明を放ちて四方を照すこと大火聚の如く、前光に勝りて清淨にして瑕穢なし。又手合掌して如來を禮し已りて前に在りて住す。迦葉夜起ちて林中を見るに、大光明ありて四方を照すこと大火聚の如く、清淨にして瑕穢なきこと前光に勝る。見已りて如來の所に往き、白して言さく『時已に到る、往いて食に就くべし』と。又復問うて言はく、『昨夜大光あり、前光に勝る、云何ぞ爾ることを得るや』と。佛迦葉に告げたまはく、『昨夜梵天王來りて法を聽く、是れ其の光りのみ』と。迦葉念じて言はく、「此の大沙門大神德あり、甚奇甚特なり、乃ち能く梵天王をして來りて法を聽かしむ、此の大沙門大神足ありて自在なり、阿羅漢を得たり、爾りと雖故ほ我が阿羅漢果を得たるには如かず」と。時に世尊彼の迦葉の食を食し已りて彼の林中に還る。時に大祠祀せんと欲す、摩竭國界に於て多人集會す。迦葉念じて言はく、「我れ祠祀して多人集會す、大沙門來らざるは亦快ならずや。何を以ての故に。我れ今大祠祀せんに、摩竭國の人皆集まる、大沙門は顏貌端正なり、世に希有とするところ、若し衆人見ば、必ず當さに我れを捨てゝ、彼れに事へて師と爲し、我れに承事せざるべし」と。時に迦葉の心の所念を知り、即ち鬱單越に至りて自然の粳米を取り、阿耨大泉に於て坐し、晝日の坐處す。時に迦葉復此の念を生ずら

く、「大沙門今何を以て來りて食に就かざる、我れ今大祠祀す、摩竭國の人大に集まる、寧ろ分を留むべきか」と。即ち左右に勅して分を留めしむ。明日淸旦、迦葉佛所に詣りて白して言さく、『日時已に到る、宜しく是れ時なることを知るべし』と。又復、問うて言はく、『大沙門、昨日は何を以ての故に來らざるや、我れ昨日大祀し、多人集會す。我れ是の念を作さく、「云何ぞ今日沙門來至せざるや」と、我れ即ち食分を留む』と。佛迦葉に告げたまはく、『我れ亦先きに汝の意を知る、汝自ら念じて言はく、「今日大沙門來らざれば、則ち我が大祠を成さん、何を以ての故に、我れ今大祠祀す、摩竭國多人集會す、大沙門顏貌端正なり、諸人見ば皆當さに我れを捨てゝ、彼れに事へて師と爲し、復我れに事へざるべし」と。我れ汝の心中の所念を知り已りて、便ち欝單越に至り、自然の粳米を取り、阿耨大泉に詣りて晝日坐處す』と。時に迦葉念じて言はく、「此の大沙門甚奇甚特なり、大神德あり、我が心中の所念を知り已り、乃ち欝單越に至り、自然の粳米を取り、阿耨大泉に至りて、晝日坐處す。此の大沙門大神足あり、自在に阿羅漢を得ると雖、故ほ我が阿羅漢を得るには如かず」と。爾の時世尊迦葉の食を食し已りて本の林中に還る。時に世尊一貴價の糞掃衣を得念じて言はく、「當さに如何が水を得て此の衣を浣ふべきや」と。爾の時釋提桓因佛の心中の所念を知り、即ち如來の前に於て地を指して大池となし、極めて淸淨たり、垢濁あることなし。前んで佛に白して言さく、『願はくは世尊此の水を以て衣を浣ひたまへ』と。時に世尊復是の念を作さく、「當さに何物の上に於て衣を浣ふべきや」と。爾の時釋提桓因如來の心中の所念を知り、摩頭鳩羅山に往詣して、四方の大石を取り、如來の前に置き、『唯願はくは世尊、此の石に於て衣を浣ひたまへ』と。時に世尊復是の念を作さく、「衣を浣ふこと已る、當さに何の處に於て衣を曬すべき」と。釋提桓因復世尊の心中の所念を知り、復摩頭鳩羅山に詣り、更に大方石を取りて如來の前に置き、『願はくは此の石上に於て衣を曬したまへ』と。時に世尊衣を浣曬し已りて復此の念を作さく、「我れ今寧ろ此の指

地池中に於て洗浴すべし」と。即ち衣を脱して洗浴す。世尊復是の念を作さく、「我れ今當さに何物を攀ぢて此の池を出づべき」と。時に彼の池の側に一大迦休樹あり、本より曲がりて外に向ふ。世尊此の念を生じ已りて、樹卽ち廻りて池に向ふ。世尊攀ぢて出づることを得たり。時に迦葉明日淸旦世尊の所に往いて白して言さく、『時已に到る、往いて食に就くべし』と。又問うて言はく、『大沙門、何に由りてか此の好池あり、本見ざるところなり』と。佛迦葉に告げたまはく、『我れ近く、一貴價の糞掃衣を得たり、我れ念じて言はく、「當さに云何が水を得て此の衣を浣ふべき」と。時に釋提桓因我が所念を知り、卽ち指を以て地を指し、便ち此の池あり、淸淨にして垢濁あることなし、願はくは「世尊此の池に於て衣を浣ひたまふべし」と、迦葉當さに知るべし、此の池を名けて指地池と爲す、猶ほ神樹のごとく異なることなし』と。復問うて言はく、『何に由りてか此の大方石ある、本有ることなき所なり』と。佛迦葉に告げたまはく、『我れ是の念を作す、當さに何の處に於て衣を浣ふべき」と。時に釋提桓因我が所念を知り、卽ち摩頭鳩羅山上に詣り、此の四方石を取り、來りて我れに語りて言はく、「此の上に於て衣を浣ひたまふべし」と。』復問うて言はく『此の第二の方石は、何に由りてか有る、本來見ず』と。佛迦葉に告げたまはく、『我れ衣を浣ひ已りて念じて言はく、「當さに何の處に於て衣を曬すべき」と。釋提桓因我が心中の所念を知り、復摩頭鳩羅山上に詣りて此の方石を取り、來りて我れに語りて言はく、「願はくは此の石上に於て衣を曬したまへ」と。』復問うて言はく、『此の池上の樹本より曲がりて外に向ふ、今何ぞ曲がりて內に向ふや。』と。佛迦葉に告げたまはく、『我れ衣を浣曬し已りて是の念を作さく、「我れ寧ろ此の池に入りて洗浴すべし」と。卽ち池に入りて浴す。浴し已りて念じて言はく、「何の所に攀ぢて出でん」と。是に於て此の樹卽ち廻りて、曲がりて內に向ひ、我れをして攀ぢて出づることを得しむ、是の故に爾るのみ』と。卽ち迦葉に告げたまはく、『當さに知るべし、猶ほ神樹の如く異なることなし』と。時に迦

【一】「猶ほ神樹のごとく」は、原本には「猶ほ神祠のごとく」、或は「猶ほ神祀のごとく」となつて居るのであるが、後の迦葉との問答の文に照し合せて見るに、「猶ほ神樹のごとく」であるべきであると思ふ。

葉念じて言はく、「大沙門、甚奇甚特大神力あり、釋提桓因所須を供給す、乃ち無情物をして意に隨はしむ」と。迦葉言はく、「此の大沙門、神足自在にして阿羅漢を得たり、爾りと雖ほ我が阿羅漢を得たるには如かず」と。時に世尊迦葉の食を食し已りて還りて本林に詣る。時に迦葉復此の念を生ずらく、「若し人ありて此に來至せば、我れ當さに食を與ふべし」と。時に世尊卽ち化して五百の比丘と作り、衣を著け鉢を持ちて遠きよりして至る。時に迦葉遙に五百の比丘の衣を著け鉢を持ちて、遠きよりして至るを見、此の念を生ずらく、「咄なる哉此の諸の比丘、何れよりして來る、我れ何に由りて食を得て之に與へん」と。時に世尊卽ち神足を攝し、還た五百の比丘をして現ぜざらしむ、迦葉念じて言はく、「此れ皆是れ大沙門の神力の所爲なり」と。時に迦葉復是の念を作さく、「若し人ありて此に來至せば、我れ當さに食を與ふべし」と。時に世尊復神力を以て、化して五百の螺髻梵志となり、手に澡瓶を持ちて、遠きよりして來る。時に迦葉、遙に五百の編髮の梵志の手に澡瓶を持ちて來るを見、是の念を作して言はく、「咄なる哉今五百の梵志來る、何に由りてか食を得て之に與へん」と。時に世尊卽ち神足を攝し、五百の梵志をして現ぜざらしむ。迦葉念じて言はく、「此れ大沙門の所爲なり」と。時に迦葉復此の念を生ず、「若し人ありて此に來至せば、我れ當さに食を與ふべし」と。時に世尊復化して五百の事火梵志と作り、石室を去ること遠からず、皆共に火神を祀る。時に迦葉見已りて是の念を作して言はく、「咄なる哉此れは何れより來る、我れ當さに何に由りて食を得て之に與ふべき」と。時に世尊卽ち神足を攝し、五百の梵志をして現ぜざらしむ。迦葉念じて言はく、「此れ皆是れ大沙門の所爲なり」と。時に迦葉の弟子の諸の梵志、日に三たび水に入りて浴す、極寒にして戰き堪へず。爾の時世尊卽ち五百の火爐を化作す、皆烟焰なく、諸の梵志をして各自ら炙ることを得しむ。諸の梵志念じて言はく、「此れ皆是れ大沙門の所爲なり」と。時に諸の梵志皆薪を破らんと欲し、しかも破ることを得る能はず。諸の梵志念じて言はく、「此れ皆是

れ大沙門威力の所爲なり」と。適ま破ることを得たり、便ち復念じて言はく、「是れ大沙門神力の所爲なり」と。斧を擧ぐることを得んと欲して、擧ぐることを得る能はず、念じて言はく、「是れ大沙門の所爲なり」と。適ま斧を擧ぐることを得たり、復念じて言はく、「是れ大沙門の所爲なり」と。諸の梵志斧を下すことを得んと欲し、而も下すことを得る能はず、念じて言はく、「此れ大沙門の所爲なり」と。適ま斧を下すことを得たり、念じて言はく、「是れ大沙門の所爲なり」と。諸の梵志火を然やさんと欲し、然やすことを得る能はず、念じて言はく、「皆是れ大沙門の所爲なり」と。火既に然やすことを得たり、念じて言はく、「大沙門の所爲なり」と。滅せんと欲して滅することを得る能はず、念じて言はく、「皆是れ大沙門の所爲なり」と。適ま滅することを得たり、念じて言はく、「是れ大沙門の所爲なり」と。澡瓶の水を捉りて瀉ぎ去らんと欲し、而かも出すことを得る能はず。念じて言はく、「大沙門の所爲なり」と。既に水を去ることを得たり、念じて言はく、「大沙門の所爲なり」と。諸の梵志、澡瓶の水を止むることを得んと欲し、止むることを得ず念じて言はく、「大沙門の所爲なり」と。既に止むることを得、念じて言はく、「大沙門の所爲なり」と。爾の時四面に大黑雲の起るあり、天大に雨ふり、墮つること象尿の如し、潦水腰に齊し。時に迦葉念じて言はく、「此の大沙門極めて端正たり、人中の第一なり、或は能く水の爲めに漂はされん」と。徒衆と將に一樹船に乘じ、往いて世尊を求む。世尊爾の時外に在り、露地に經行す、地燥くこと舊の如し。時に迦葉、佛の露地に經行し、地燥くこと舊の如く、猶ほ屋內の如くなるを見、念じて言はく、「此の大沙門甚奇甚特なり、無情の物をして迴轉して意の如くならしむ。此の大沙門、神足自在にして阿羅漢を得、爾りと雖ほ我が阿羅漢を得るには如かず」と。迦葉他日復世尊の所に往き白し言さく、『食時已に到る、往いて食に就くべし』と。佛言はく、迦葉並びに前に在れ、吾れ後より當さに往くべし』と。時に世尊迦葉を遣はし已りて、猶ほし力士の屈申臂の如き頃に經行地より沒し、卽ち彼

れに於て迦葉の船底を貫いて出づ。見已りて便ち是の言を作さく、『此の大沙門大神德あり、先きに我れを遣はして言はく、「後に至らん」と、今乃ち先きに船に在るや』と。佛迦葉に告げたまはく、『吾れ汝を遣はし已りて、力士屈申臂の如き頃に、經行地に沒し、汝の船底を貫いて出づ』と。迦葉是の念を作して言はく、「此の大沙門大神力あり、先きに我れを遣はし已り、後に來りて船上に湧出す。大沙門大神力ありて阿羅漢を得、爾りと雖ほ我が道の眞なるには如かず」と。爾の時世尊、迦葉心中の所念を知り、告げて言はく、『汝常に稱へて言はく、「大沙門阿羅漢を得ると雖、我が阿羅漢を得るには如かず」と。如今汝を觀るに阿羅漢に非ず、向阿羅漢道に非ず』と。迦葉念じて言はく、「此の大沙門大威神あり、我が心中の所念を知る、此の大沙門大神足あり、自在に阿羅漢を得、我れ今寧ろ彼れに從つて梵行を修すべし」と。即ち前んで佛の白さく、『我れ今如來の所に從つて梵行を修せんと欲す』と。佛迦葉に告げたまはく、『汝五百の弟子あり、汝に從つて梵行を學す、汝應さに彼れに告げて知らしむべし、若し彼れの意樂あらば、自ら樂ふ所に隨つて修行せん』と。時に迦葉即ち弟子の所に往いて告げて言はく、『汝等知るや不や、我れ今沙門瞿曇の所に從つて梵行を修せんと欲す、汝等心の樂ふ所あらば、各自ら意のまゝにせよ』と。諸の弟子白して言さく、『我等久しく已に信心あり、彼の沙門の所に於て、唯師を待つのみ』と。爾の時五百の弟子即ち螺髻と事火の具・淨衣・澡瓶を持ちて、往いて尼連禪水中に擲ち已り、來りて如來の所に詣り、頭面禮足して一面に在りて坐す。時に世尊五百人のために、漸次に爲めに勝法を說き、勸めて歡喜心を發せしむ。所謂法とは、布施・持戒・生天の法にして、欲不淨を呵し、出離の樂たることを讃嘆す。五百人即ち座上に於て、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、法を見、法を得、諸法を成就して果證を得、前んで佛に白して言さく、『我等如來の所に於て、出家して梵行を修せんと欲す』と。佛言はく、『來れ比丘、我が法中に於て快く梵行を修せば、苦際を盡すことを得ん』と、即ち名けて受具足戒と爲す。時に迦葉の

中弟を[二]那提迦葉と名づく、尼連禪水の下流にありて居る。三百の弟子あり、中に於て最も尊上たり、衆人の師首たり。時に彼の衆中に一弟子あり、尼連禪水の上に至りて看る、水中に事火具及び髮、澡瓶あり、淨衣ありて水の爲めに漂はさるゝを見る。見已りて疾々に那提迦葉の所に來至して語りて言はく、『師當さに知るべし、此の尼連禪水中に、髮と事火具と淨衣と澡瓶とあり、水の爲めに漂はさる、不審上流の大師、將た惡人の爲めに害せらるゝことなからんや』と。時に[三]鬱鞞羅迦葉の小弟を[四]伽耶迦葉と名づく。象頭山の中に居り、二百の弟子あり、中に於て師首たり。時に那提迦葉一弟子に語りて言はく、『汝速に象頭山中に往き、到り已りて伽耶迦葉に語りて言へ、「知るや不や、今尼連禪水中に、事火具の諸物、盡く水の爲めに漂はさる、汝速に來りて、共に往いて兄を看るべし、將た惡人のために害せらるゝこと無からんや」と。』時に弟子那提迦葉の語を受け已りて、伽耶迦葉の所に往き、『小師知るや不や、師に此の語あり、尼連禪水中に、澡瓶淨衣髮と諸の事火具あり、尼連禪水の爲めに漂はさる、速に來れ、共に往いて大兄を看ん、將た惡人の爲めに害せらるることなからんや』と。時に小弟其の語を聞き已りて、卽ち二百の弟子を將ひて那提迦葉の所に詣り、到り已りて、那提迦葉・伽耶迦葉、復一弟子に語りて言はく、『汝速に往いて大兄の所に至りて看よ、將た惡人の爲めに害せらるゝなからんや』と。時に彼の弟子二師の語を受け已りて、卽ち往いて大兄を見る。到り已りて問うて言はく、『云何ぞ大師、此の大沙門に從つて梵行を學修するを勝れりとせんや』と。迦葉報へて言はく、『汝等當さに知るべし、我れ世尊に從つて出家學道す、極めて勝妙と爲す』と。時に彼の弟子、還りて二師の所に至りて語つて言はく、『諸師當さに知るべし、我が大師已に諸弟子と將に大沙門の所に詣り、出家して梵行を修す』と。時に二師念じて言はく、『家より家を捨てゝ、彼れに從つて梵行を學する者は必ず虛しからず、何を以ての故に。我が兄は聰明にして垢薄く、多く智慧あり、而も諸弟子と將に彼れに從つて受學す、必ず思量して所を得る

【二】那提迦葉(Nadi-kaśyapa)。
【三】鬱鞞羅(Urvirvā)。
【四】伽耶(Gāya)。

が故に爾るのみ、而も況んや我等にして、從つて、學を受けざらんや』と。時に那提迦葉・伽耶迦葉、各諸弟子と將に大兄の所に詣り、到り已りて兄に白して言さく、『大兄、此の處勝れりや』と。兄二弟に報へて言はく、『此の處極勝なり、家より家を捨てゝ、大沙門に從つて梵行を修する者は、乃ち勝妙と爲す』と。二弟兄に白して言さく、『我等も亦大沙門に從つて梵行を學修せんと欲す』と。爾の時鬱鞞羅迦葉、二弟及び五百の弟子を將ひて世尊の所に往詣し、頭面禮足して一面に在りて坐す。時に鬱鞞羅迦葉前んで佛に白して言さく、『我れに中弟あり、那提迦葉と名づく、尼連禪水の邊に在りて住す、常に三百の弟子を教授し、人の師首たり。次ぎに第三弟は象頭山中に在りて住す。二百の弟子を教授し、人の師首たり。今各來集し、世尊に隨つて梵行を修することを求めんと欲す。唯願はくは世尊、出家して具足を受け、梵行を修することを得るを聽したまへ』と。世尊即ち聽したまひ、漸次に爲めに勝法を說く、所謂法とは、布施・持戒・生天の法と、欲不淨を呵すると、出離を樂とするを讃歎するとなり。即ち座上に於て、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、法を見、法を得、諸法を成就し、果報を得。各前んで佛に白して言さく、『唯然り世尊、我等如來法中に從つて、出家して、梵行を修せんと欲す』と。佛言はく、『來れ比丘、我が法中に於て快く梵行を修することを得、苦際を盡すことを得ん』と。即ち名けて受具足戒と爲す。時に世尊此の千梵志を度し、具足を授け已りて、將さに象頭山中に至らんとす。象頭山中に於て千の比丘僧あり、三事を以て教化す。一には神足教化、二には憶念教化、三には說法教化なり。彼の神足教化とは、或は一を化して無數となし、或は無數を還た一と爲し、內外通達し、石壁も皆過ぐること虛空に遊ぶが如く、妨礙する所なし。虛空中に於て結跏趺坐し、亦飛鳥の周旋往來するが如し。地に入ること水の如く、出沒自在、水を履むこと、地の如くにして沒溺せず。身に烟花を放つこと大火聚の如く、日月の大神德ありて、照さゞる所なきがごとし。能く手を以て捫摸すれば、身梵天に至り、往來して礙げなし。是れを世

尊の神足、千比丘を教化すといふ。憶念教化とは、教へて言はく、『汝當さに是れを思惟すべし、是れを思惟すること莫れ、當さに是れを念ずべし、是れを念ずること莫れ、當さに是れを滅すべし、當さに是れ成就すべし』と、是れを世尊憶念して千比丘に教授すといふ。說法教化とは、一切熾然なり。何等か一切熾然なる。眼熾然・色熾然・眼識熾然・眼觸熾然なり。若し復眼觸の因緣受を生じ、若しは苦、若しは樂、若しは不苦不樂なるも、亦名けて熾然と爲す。何等をか熾然と爲す。熾然とは、欲火・恚火・癡火なり。復云何が熾然と名づく。熾然とは、生老病死愁憂苦惱熾然なり。我れ此の苦の所生の處を說く。意も亦是くの如し。爾の時世尊此の三事を以て千比丘に教授す。爾の時千比丘、此の三事の教授を受け已りて、卽時に無漏心解脫、無礙解脫智生ず。爾の時世尊此の千比丘を化し已りて便ち是の念を作さく、「我れ先きに瓶沙王の請ひを許す、若し我れ成佛して一切智を得んには、先づ羅閱城に來至せんと。我れ今應さに往いて瓶沙王を見るべし」と。卽ち正服を著け、大比丘千人を將ふ、皆是れ舊學の螺髻梵志なり。皆已に定調柔を得、永く解脫を得たり。摩竭國界より遊化して漸く杖林中に至る。爾の時世尊、杖林中の善住尼拘律樹王の下に於て坐す。時に瓶沙王、沙門瞿曇の釋種より出で、出家學道し、千弟子と將に摩竭界に遊行す　皆是れ舊學の螺髻梵志にして、皆定調柔を得、永く解脫を得たり、摩竭界より遊行して杖林中に來止し、善住尼拘律樹王下に止まり坐したまふと聞く。彼の沙門瞿曇大名稱ありて聞かざる所なし、所謂名稱とは、如來・至眞・等正覺・明行足爲・善逝・世間解・無上士・調御丈夫・天人師・佛世尊なり。天及び世間人・魔、若しは魔天及び梵天衆・沙門・婆羅門衆中に於て、自ら神通智證を得ることを知り、常に自ら娛樂し、人のために說法し、上中下の言悉く善し、義味深邃にして具足演布し、諸の梵行を修したまふ。『善い哉、乃ち是くの如きの阿羅漢を見ることを得ん、我れ今寧ろ自ら往いて大沙門瞿曇を見るべし』と。時に王瓶沙萬二千の乘車に駕し、八萬四千人と將に前後圍遶せられ、王の威勢を以て羅閱城を出で、世尊

【五】熾然は、熾盛で、盛んなる有様、愛着の欲心にて外界に對すれば、主觀は煩惱熾然として起り、客觀に熾然たる煩惱の對象となり、相互の間に生ずる受も亦熾然たる煩惱の發動となり、こゝに結果として熾然たる生死苦惱起る、故に之を一切熾然と言ふのである。眼は主觀、色は客觀、觸の因緣は主客の關係、生老病死等は、結果の苦惱。

を見たてまつらんと欲す。時に王瓶沙杖林中に往き、車の所至の處を齊り、卽ち車を下りて歩して進んで林に入り、遙に世尊の顏貌殊特にして猶ほ紫金の如くなるを見、便ち歡喜心を發し、如來の所に於て、前んで頭面に足を禮し、已りて一面に在りて坐す。時に摩竭國人或は足を禮して坐するものあり、或は手を擧げて相問訊して坐するものあり、或は姓名を稱して坐するものあり、或は叉手合掌して如來に向ひて坐するものあり、或は默然として坐するものあり。時に摩竭國人是の念を作す、「大沙門欝鞞羅迦葉に從つて梵行を學すとせんや、欝鞞羅迦葉幷びに弟子衆大沙門瞿曇に從つて梵行を學すとせんや」と。時に世尊其の國人心中の所念を知り、卽ち偈を以て欝鞞羅迦葉に向つて說きたまふ。

汝等何の變をか見て　諸の事火の具を捨つる　吾今迦葉に問ふ　云何が火具を捨つる

爾の時迦葉復偈を以て世尊に報へて言さく、

飮食の諸の美味　愛欲の女及び祀　我れ今是くの如きの垢を見　故に事火の具を捨つ

世尊復偈を以て迦葉に問うて言はく、

飮食の諸の美味　中に於て樂しき所なし　天上及び世間　今何の處を樂むと說け

迦葉復偈を以て世尊に報へて言さく、

我れ[六]迹と休息を見るに　三界は所礙なし　異ならず異とす可からず　事火祀を樂まず

時に摩竭國人復是の念を生ず「大沙門二偈を說き、欝鞞羅迦葉亦二偈を說く、我等猶ほ故ほ未だ別たず、大沙門迦葉に從つて學を受くるとせんや、迦葉及び弟子、大沙門に從つて學を受くるとせんや」と。時に世尊摩竭國人の心中の所念を知り已りて、迦葉に告げて言はく、『汝起ちて、吾が爲めに背を扇げ』と。答へて言はく『爾り』と。時に佛の教を受け已りて、卽ち坐より起ちて虛空に上昇し、還た下り世尊の足を禮し、手を以て如來の足を摩捫し、口を以て之を嗚し、自ら姓字を稱

【六】迹は、業と煩惱とによりて生死輪轉すること、休息は、道を修して苦因を除きしこと、苦因卽ち集を除きて、三界生死の苦縛を脫する故、三界は所礙なしといふのである。業を除き苦を受けざる所は是れ滅諦である。滅卽ち諦理で、滅理一體なるを不異といひ、此の理を證する是れ阿羅漢、卽ち理證一なるを異とすべからずといふのである。

へ、『世尊は是れ我が師、我れは是れ弟子』と、卽ち扇を持ち、如來の後へに在りて扇ぐ。時に摩竭國人自ら相謂つて言はく、『大沙門瞿曇は、迦葉に從つて梵行を學せず、迦葉及び弟子衆、大沙門瞿曇に從つて梵行を學す』と。爾の時世尊摩竭國人の疑あることあることなきを知るが故に、漸次に爲めに說法し、歡喜心を發せしむ。所謂法とは、布施・持戒・生天の法、欲不淨を呵し、出離を樂しみと爲すことを讃歎するなり。時に摩竭國人瓶沙王を首となし、八萬四千人と十二那由他の天と、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、法を見、法を得、諸法を成就し、自ら果證を得ることを知る。前んで佛に白して言さく、『我等、佛法僧に歸依したてまつる、優婆塞となることを聽したまへ、盡形壽殺生せず、乃至飮酒せず』と。瓶沙王法を見、法を得、前んで佛に白して言さく、『自ら念ずるに、昔日太子たりし時、心に六願を生じき。一には、若し父壽終らば、我れ位に登つて王とならん。二には、我れ國を治むるの時に當り、願はくは佛世に出でたまへ。三には、我が身をして世尊を見たてまつらしめたまへ。四には、設し我れ佛を見已らば、歡喜心を如來の所に生ぜん。五には、已に歡喜心を發さば正法を聞くことを得ん。六には、法を聞き已りて尋いで信解を得んと。今我れ父王已に命終して位に登りて王と爲ることを得たり。然も我れ國を治め、正さに佛の出世に値ひ、今復自ら佛を見たてまつり、佛を見已りて歡喜心を發し、佛所に於て已に歡喜心を發して乃ち法を聞くことを得、法を聞き已りて便ち信解を得たり。今正に是れ時なり、唯願はくは世尊、羅閱城に入りたまへ』と。時に世尊默然として瓶沙王の請ひを受け已りて、卽ち座より起ち、衣を著け、千比丘を將ふ、皆是れ舊學螺髻の梵志なり、皆已に定調柔を得、永く解脫を得たり。萬二千の乘車、八萬四千衆、前後圍遶し、佛の威神を以て羅閱城に入りたまふ。爾の時天雨に値ふ。世尊の前後中は、則ち清明にして、上に雲ありて蓋へり。世尊此の變化を現じて羅閱城に入りたまふ。時に釋提桓因化して一異婆羅門となり、手に金杖・金澡瓶・金柄扇を執り、身空中に在り、地を去ること四指、如來の前

にありて引導す。復無數の方便を以て佛法僧を讃歎す。時に摩竭國人皆是の念を作さく、「是れ誰の威神、此の婆羅門形を化作し、手に金杖・金澡瓶・金柄扇を執り、身空中に在り、地を去ること四指、如來の前に在りて引導し、衆人を驅却し、復無數の方便を以て佛法僧を讃歎するや」と。時に摩竭國人、釋提桓因に向つて頌を說いて言はく、

誰か梵志を化作し、　今衆僧の前に在りて、　佛の功德を歎誦する　汝の事ふる所の者は誰ぞ

爾の時釋提桓因復偈を以て摩竭國人に報ふ。

勇猛にして一切を解す　愛欲と及び飲食と　慚愧して知足を念ず　我れは是れ彼の弟子なり。

世に與に等しきものあるなし　相似の者をも見ず　如來至眞佛　我れは是れ給使の者なり。

欲及び瞋恚を滅し　無明永く已に盡く　漏盡の阿羅漢なり　我れは是れ給使の者なり。　猶ほ溺者を度するが如し　瞿曇は是れ法船なり　最勝にして度彼岸なり　我れは是れ給使のものなり　以て四流際を度し　能く不死の法を說く　最勝の無礙法なり　我れは是れ給使の者なり。

爾の時摩竭國王瓶沙復是の念を作さく、「若し世尊をして、諸の弟子と將に羅閱城に入り、先づ園中に至らしめば、我れ當さに卽ち此の園地を以て之に施し、精舍を立つべし」と。時に羅閱城の諸園中、迦蘭陀竹園最勝なり。時に世尊摩竭王心中の所念を知り、卽ち大衆と將に竹園に詣り已る。王卽ち象を下し、自ら象上の褥を疊み、四重と作して地に敷き、前んで佛に白して言さく、『願はくは世尊坐したまへ』と。世尊卽ち座に就いて坐す。時に瓶沙王金澡瓶の水を以て如來に授けて清淨ならしめ、佛に白して言さく、『今羅閱城の諸園中、此の竹園最勝なり、我れ今如來に施す、願はくは慈愍の故に受けたまへ』と。佛、王に告げて言はく、『汝今此の竹園を持ちて佛及び四方僧に施せ、何を以ての故に、若し如來園を有たば、園物・房舍・房舍物・衣鉢・尼師檀・鍼筒は卽ち是れ塔にし

て、諸天世人魔若しは魔天、沙門・婆羅門の用ふるに堪へざる所なり』と。王言はく、『我れ今此の竹園を以て、佛及び四方僧に施す』と。時に世尊慈愍の心を以て彼の園を受け已り、即ち呪願を爲したまふ。

　諸園の樹を種植し　幷びに橋梁船を作り　園果と諸の浴池と　及び人に居止を施すと　是くの如きの人等は　晝夜に福增長し　持戒して正法に順ず　彼の人、天に生ずるを得。

　爾の時、瓶沙王、前んで世尊の足を禮し已りて、更に一小床を取り、如來の前に在りて坐し、法を聞くことを得んと欲す。時に世尊漸次に王の爲めに說法し、勸めて歡喜心を發さしむ。歡喜心を發し已りて坐より起ち、佛を禮して去る。爾の時世尊羅閱城に在り、時に城中に　刪若梵志あり、二百五十の弟子あり。優波提舍と拘律陀と上首たり。爾の時尊者　阿濕卑、如來に給侍す。時到りて衣を著け鉢を持ち、城に入りて乞食す。顏色和悅諸根寂定にして、衣服齊整行步庠序、左右を顧視せず、威儀を失はず。時に優波提舍時已に到り、園に入りて觀看す。阿濕卑の威儀是くの如きを見、便ち是の念を生ず。「今此の比丘を見るに威儀具足す、我れ今寧ろ往いて其の義を問ふべし」と。復自ら念言すらく、「此の比丘乞食の時は問義の時にあらず、今且らく彼の乞食の已るを待ち、當さに往いて義を問ふべし」と。時に優波提舍尋いで其の後へに從ふ。時に阿濕卑比丘羅閱城に入り、乞食已りて鉢を置いて地に在り、僧伽梨を疊む。優波提舍念じて言はく、「此の比丘乞食已に竟る、今正に是れ義を問ふの時なり、我れ今當さに問ふべし」と。卽ち往いて義を問ふ。『汝は誰とかする、師は誰とか字づく、何の法をか學ぶ』と。卽ち報へて言はく、『我が師は大沙門、是れ我が尊ぶところ、我れは彼れに從つて學す』と。優波提舍卽ち復問うて言はく、『汝が師大沙門は何の法をか說くや』と。報へて言はく、『我れ年幼稚にして出家し、日淺し、未だ廣く其の義を演ぶるに堪へず、今當さに略して其の要を說くべし』と。優波提舍言はく、『我れ唯聞かんことを樂ふ、要を爲せ廣略には在

【七】 刪若は、前にあり訕若毘羅吒子の派に屬するもので、刪若は Sañjaya である。

【八】 阿濕卑(Aśvajit)。

らず』と。阿濕卑言はく、『汝之を知らんと欲せば、如來は因緣生の法を說く、亦因緣滅の法を說く、若し法の[九]因つて生ずる所は、如來是れ因と說く、若し法の因つて滅する所は、大沙門亦此の義を說く、此れは是れ我が師の說なり』と。時に優波提舍聞き已りて、卽時に諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。時に優波提舍念じて言はく、「齊しく是くの如きの法に入り、無憂處に至るは、無數億百千那由他劫にも本見ざるところなり、優波提舍、拘律陀と先きに要言あり、若し先づ妙法を見るものは、當さに相告語すべし」と。時に優波提舍卽ち往いて拘律陀の所に至る。拘律陀、優波提舍の來るを見、便ち是の語を作す『汝今顏色和悅諸根寂定にして、所得あるが如し、將た法を見ざるや』と。答へて曰く、『汝の言ふ所の如し』と。問うて言はく、『何等の法をか得たる』と。報へて言はく、『彼の如來因緣生の法を說く、亦因緣滅の法を說く、若しは法の因つて生ずる所を、如來は是れ因と說く、若し法の因つて滅する所は、大沙門亦此の義を說く』と。拘律陀是の語を聞き已りて、卽時に諸の塵垢盡きて法眼淨を得たり。拘律陀念じて言はく、『齊しく此くの如きの法を得、無憂處に至ることを得るは、無數億千那由他劫にも、本見ざるところなり』と。拘律陀問うて言はく、『不審・世尊、今何れの處に在りて住したまふ』と。報へて言はく、『如來今迦蘭陀竹園に在して住したまふ』と。拘律陀、優波提舍に語りて言はく、『今日共に如來の所に往きて禮敬問訊すべし、卽ち是れ我等の師なり』と。優波提舍報へて言はく、『我等先きに二百五十の弟子あり、我が所に從つて梵行を修せり、當さに彼れに語りて知らしめ、彼の意の欲する所に隨はしむべし』と。時に優波提舍、拘律陀と諸の弟子の所に詣りて語りて言はく、『汝等知るや不や、我等二人、大沙門に從つて梵行を修せんと欲す、汝等各意の欲する所に隨へ』と。諸の弟子白して言さく、『我等諸人、皆師に從つて學を受く、今大師猶ほ彼れに從つて學す、我等豈從つて學せざらんや、若し師の得る所の者は、我等も亦當さに之を得べし』と。時に優波提舍、拘律陀幷びに諸の弟子、相與に俱に竹園に詣る。時に世尊、無數百千の衆

【九】因緣生の法は、現在の苦法で、因緣によりて生じ、空にして實體なしと說く。また此の苦法は、八正道等によりて滅諦に入る、是れ因緣滅の法である。苦は果して何より起る、是れ法の因つて生ずる所で、されば集諦である。滅の因つて生ずる所のもの、卽ち是れ道諦である。つまり是れは四諦の理を說いたものである。

に圍遶せられて、而も爲めに法を說きたまひ、遙に優波提舍、拘律陀幷びに諸の弟子の來るを見已りて、諸の比丘に告げたまはく、『彼の遠來の二人は、一を優波提舍と名づけ、二を拘律陀と名づく。此の二人は、我が諸の弟子中に於て最も上首たり、智慧無量無上にして二解脫を得ん』と。未だ竹園に至らざるに、如來已に記別を授け、二人を匹と爲したまふ。同友二人幷びに諸の弟子如來の所に到り、頭面に禮足し已りて一面に在りて坐す。時に世尊漸次に爲めに勝法を說き、歡喜心を發せしむ。所謂法とは、布施持戒生天の法、欲不淨を呵し、出離を樂ふと爲すことを讃歎するなり。卽ち座上に於て、諸の塵垢盡きて法眼淨を得、法を見、法を得、諸法を成就し、自ら果證を得ることを知り已りて、前んで佛に白して言さく、『我等如來法中に從つて出家し、梵行を修せんと欲す』と。佛言はく、『善來比丘、我が法中に於て快く梵行を修せば、苦源を盡すことを得ん』と。卽ち出家受具足戒と名づく。爾の時世尊、羅閱城に遊びたまふ。時に尊者欝鞞羅迦葉諸の弟子と出家學道す。復删若二百五十梵志あり、出家學道す。羅閱城中の諸の貴族姓子等、亦出家學道す。時に羅閱城中の諸の長者、自ら相誡勅して言はく、『汝等兒あらば、各自ら愼護せよ、婦に夫主あるものも、亦之を愼護せよ。今大沙門摩竭國界より諸梵志を度して自ら隨へ、今來りて此に至る、復當さに此の諸人を將ひ去るべし』と。爾の時、諸の比丘乞食する時、此の諸人の所說を聞く『此の大沙門諸の梵志を將ひ、自ら隨へて此に來る、今復當さに此の諸人を將ひて去るべし』と。諸の比丘聞き已りて皆慚愧を懷き、世尊の所に往き、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊諸の比丘に告げたまはく、『汝等羅閱城中に入りて乞食し、諸の長者の此の言を作すを聞かん、「大沙門國界に來至し諸の梵志を度して將に自ら隨ふ今復當さに此の諸人を度し、將ひて去るべし」と。汝等便ち此の偈を以て之に報へよ』と。

如來大勢力あり、　法を以て將ひ去る　法を以て將ひ去らんをば　汝等何ぞ憂懼するや

爾の時諸の比丘、佛の教を受け已りて羅閲城に入りて乞食す。諸の長者の此の語を說くを聞く時、卽ち此の偈を以て之に報ふ。

如來大勢力あり　法を以て將ひ去る　法を以て將ひ去らんをば　汝等何ぞ憂懼するや

時に諸の長者是の念を作さく、「我等所聞の如く、大沙門法を以て將ひ去るは、非法と爲さず」と。爾の時尊者鬱鞞羅迦葉、諸の弟子と將に出家學道す刪若の弟子も、亦二百五十の弟子と將に出家學道す。羅閲城の諸豪姓子亦出家學道す。大衆皆集まりて羅閲城に遊ぶ、時に彼の未だ教誡を被らざる者、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、或は不淨鉢食を受け、小食大食上に在りて高聲に大に喚ぶこと、婆羅門の聚會法の如し。時に一病比丘あり、弟子なく、瞻視者なくして命終す。諸の比丘此の因緣を以て往いて世尊に白す、世尊言はく、『自今已去〔一〇〕和尙あることを聽す、和尙弟子を看ること、當さに兒の意の如く看るべし。弟子の和尙を看ること、當さに父の意の如くなるべし、轉々相敬し、重ねて相瞻視すべし、是くの如くなれば、正法便ち久住し、長益廣大なることを得ん、當さに是くの如く和尙を請ふべし、請ふ時當さに教ふべし、「偏へに右肩を露はし、革屣を脫し、右膝地に著けて合掌し、是くの如きの語を作せ」と。『願はくは大德、我が爲めに和尙と作れ、我れ大德に依りて具足戒を受けん」と、第二第三も亦是くの如く說く。和尙當さに報へて「爾るべし」と言ひ、若しは是くの如しと言ひ、若しは汝に教授すべしと言ひ、若しは淸淨にして放逸なる莫れ」と言ふべし』と。佛言はく、『自今已去〔一一〕三語にして具足戒を授くることを捨てよ、自今已去〔一二〕十人を滿じて當さに具足戒を授くべきことを聽し、白四羯磨して當さに是くの如く具足戒を授くべし。戒を受けんと欲する者は、僧中に詣りて偏露右臂し、革屣を脫し、僧足を禮し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの白を作せ。「大德僧聽け、我が某甲、某甲に從つて具足戒を受けんことを求む、我が某甲今衆僧に從つて具足戒を受けんことを乞ひ、某甲を和尙と

【一〇】和尙は、梵語鄔波提耶 Upadhyāya で、依學或は親教など〻譯されて居る。『開宗記』には和上、或は和闍とあり、譯して力生といふ、ウパは和、ヂャーヤは尙、或は上となつて居るので、梵音の轉化より來りしものであらう。力士と譯する所以は不明だとあるが、相續者たる弟子を生產する力か。

【一一】三語とは、三寶に歸依して、直ちに之を受具と見做すことで、これはこの三語受具と善來受具とであつたので、善來は如來直接の受具であり、佛弟子が授戒をする時は、三語受具の法によつたのである。三語受具のことは、前に述べてある。(七二一頁)

【一二】「十人を滿じ」は、白四羯磨の法、必ず戒師和尙と、羯磨師と教授師と、外に證明師七人、合して十人具足せざれば行ふことの出來ないもので、此のことの起原は、此の時に始まるといふのである。こゝは白四羯磨受具作法の起原を說いて居るのである。

爲す。願はくは僧我れを濟度したまへ、慈愍の故に」と。是くの如く第二第三も說く。衆中當さに羯磨に堪能なるものを差し、上の如く當さに是くの如くの[一三]白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲、某甲に從つて具足戒を受けんことを求む、此の某甲今衆僧に從つて具足戒を受けんことを乞ひ、某甲を和尚と爲す、若し僧時到らば、僧某甲のために、具足戒を受け、某甲を和尚と爲すことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲、某甲に從つて具足戒を受けんことを求む、此の某甲今衆僧に從つて具足戒を受けんことを乞ひ、某甲を和尚と爲す、誰か長老、僧某甲のために具足戒を受け、某甲を和尚と爲すことを忍するものは默然せよ、誰か忍せざるものは說け」と。此れは是れ初羯磨なり、第二第三も亦是くの如く說く。僧已に某甲のために具足戒を受け某甲を和尚と爲すことを忍し竟る、僧默然たるが故に、是の事是くの如く持つ』と。

時に諸の比丘、世尊の戒を制したまひ、人に具足戒を授くることを聽したまふと知り、新學の比丘輒ち人に具足戒を授け、教授すること能はず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、或は不淨鉢食を受け、小食大食上にありて、高聲に大に喚び、婆羅門の聚會法の如し。時に諸の比丘聞く。其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり、彼の比丘を嫌責して言はく『世尊戒を制し、人に具足戒を授くることを聽したまふ、云何ぞ汝等新受戒の比丘、輒ち人に具足戒を授けて、而も教授すること能はず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、或は不淨鉢食を受け、小食大食上に在りて高聲に大に喚び、婆羅門の聚會の法の如し。』時に尊者婆先始めて[一四]二歲にして、一歲の弟子と將に世尊の所に往き、頭面禮足し已りて一面に在りて坐す。世尊知りて故らに問ひたまふ。『此れは是れ何等の比丘ぞ』と。報へて言はく、『世尊、是れ我が弟子なり』と。問うて言はく『汝今幾歲ぞ』と。報へて言はく『二歲』と。復問うて

【一三】「白を作す」とは。一白、次ぎの第一第二第三の羯磨の語は、之を三羯磨といふ、此の一白三羯磨を、白四羯磨の受具法といふので、羯磨はカルマ Karma で、作法といふ意である。

【一四】二歲といふのは、勿論普通の年齡ではない、是れは夏臘である。夏臘といふのは、夏安居を經過せし數で數へる方法で、受戒後夏安居一回を經し人は一歲である。

言はく『汝の弟子は幾歳ぞ』と。報へて言はく『一歳』と。爾の時世尊無數の方便を以て呵責したまふ『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ婆先、汝自身に未だ乳を斷ぜず、應さに人の教授を受くべし、云何ぞ人を教授せん』と。時に諸の比丘、世尊の所に往き、頭面禮足して一面に在りて坐し、此の因縁を以て具さに世尊に白す。世尊言はく『向きに婆先比丘二歳にして、一歳の弟子と將に我が所に來至し、頭面禮足一面にありて坐し、一面に坐し已りて、我れ知つて故らに問へり。「此れは是れ何等の比丘ぞ」と報へて言はく、「是れ我が弟子なり」と。問うて言はく、「汝は幾歳ぞ」と。報へて言はく、「二歳」と。「汝の弟子は幾歳ぞ」と。報へて言はく「一歳」と。我れ即ち無數の方便を以て呵責し、「汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり。云何ぞ婆先、汝自ら未だ乳を斷ぜず、應さに人の教授を受くべし、云何ぞ人を教授する』と。佛旣に人に具足戒を授くることを聽す、而も汝新受戒の比丘、輒ち人に具足戒を授け、教授することを知らず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、不淨鉢食を受け、大食小食の上にありて、高聲に大に喚ぶこと、婆羅門の聚會法の如し。時に世尊無數の方便を以て呵責し已りて、諸比丘に告げたまはく『自今已去、十歳の比丘に、人に具足戒を授くることを聽す』と。彼の諸の比丘、世尊戒を制したまひて、十歳の比丘に、人に具足戒を授くることを聽したまふと聞き、十歳の愚癡の比丘、輒ち人に具足戒を授く、而も教授することを知らず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、或は不淨鉢食を受け、大食小食上に在りて、高聲に大に喚び、婆羅門の聚會法の如し。諸の比丘聞く、其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知るものあり、彼の比丘を呵責して言はく『世尊戒を制したまひ、十歳の比丘に、人に具足戒を授くることを聽した

まふ。汝云何ぞ十歳愚癡の比丘にして、輒ち人に具足戒を授け、教授することを知らず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、或は不淨鉢食を受け、大食小食上にありて、高聲に大に喚び、婆羅門の聚會の法の如くなる』と。時に諸の比丘、世尊の所に往き、頭面禮足して一面に在りて坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊此の因緣を以て諸の比丘僧を集め、無數の方便を以て彼の比丘を呵責したまふ、『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ世尊戒を制したまひ、十歳の比丘に、人に具足戒を授くることを聽したまふ。云何が汝十歳愚癡の比丘、輒ち人に具足戒を授け、教授することを知らず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、或は不淨鉢食を受け、大食小食上に在りて、高聲に大に喚ぶこと、婆羅門の聚會の法の如くなる』と。時に世尊、無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『自今已去、十歳の智慧の比丘に、人に具足戒を授くることを聽す』と。時に諸の比丘、世尊戒を制したまひ、十歳の智慧の比丘に、人に具足戒を授くることを得と聽き、便ち自ら言へらく『我れは十歳智慧なり、人に具足戒を授くることを得。』と而も輒ち人に具足戒を授け、教授することを知らず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、或は不淨鉢食を受け、大食小食上にありて高聲に大に喚ぶ、婆羅門の聚會の法の如し。時に諸の比丘聞く、其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり、彼の比丘を呵責して言はく、『世尊戒を制したまひ、十歳智慧比丘に、人に具足戒を授くることを得と聽し給ふ。汝云何ぞ自ら智慧と言ひ、輒ち人に具足戒を授け、しかも教授することを知らず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、或は不淨鉢食を受け、大食小食上にありて高聲に大に喚び、婆羅門の

聚會の法の如くなる』と。時に諸の比丘、世尊の所に往き、頭面禮足して一面に在つて坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊此の因緣を以て比丘僧を集め、彼の比丘を呵責したまふ。『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、佛戒を制して、十歲智慧比丘に、人に具足戒を授くることを得と聽す、云何ぞ汝等自ら智慧と言ひ、輒ち人に具足戒を授け、敎授することを知らず、敎授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、或は不淨鉢食を受け、大食小食上にありて高聲に大に喚び、婆羅門の聚會の法の如くなる』と。時に世尊、無數の方便を以て呵責し已り、諸の比丘に告げ給はく、『自今已去、當さに和尙を制して、和尙法を行はしむべし、和尙は弟子の所に於て、當さに是くの如きの法を作すべく、應さに是くの如く行ずべし。若し弟子、衆僧爲めに羯磨を作し、呵責を作し、擯を作し、依止を作し、遮を作して白衣の家に至らず舉を作さんと欲せば、和尙當さに中に於て如法に料理すべし。僧をして、弟子のために羯磨を作さゞらしめ、若しは作すこと如法ならしむ。復次ぎに、若し僧、弟子のために羯磨を作し、呵責を作し、擯を作し、依止を作して遮を作し、白衣の家に至らず、舉を作する、和尙は中に於て、當さに如法に料理すべし。弟子をして僧に順從に、違逆せずして除罪を求め、僧をして速に解羯磨を與へしむ。復次ぎに若し弟子僧殘を犯さば、和尙當さに如法に料理すべし、若しは應さに波利婆沙を與ふべきは、當さに波利婆沙を與ふべし、應さに本日治を與ふべきは當さに本日治を與ふべし、應さに摩那埵を與ふべきは當さに摩那埵を與ふべし、應さに出罪を與ふべきは、當さに出罪を與ふべし、復次ぎに弟子病を得んには、和尙當さに瞻視し、若しは餘人をして看せしめ、乃ち差え、若しは命終に至るべし。弟子若し住處を樂まざれば、當さに自ら移り、若しは人をして移らしむべし。弟子若し疑事あれば、當さに法を以て、律を以て、佛の所敎の如く、如法に敎へて之を除くべし。若し惡見生ずれば、當さに

教へて惡見を捨て、善見に住せしむべし。當さに二事を以て將護すべし、法を以てと、衣食を以て將護すべし。是の中の法將護とは、應さに增戒・增心・增慧を敎へ、學問誦經せしむべし。是の中の衣食將護とは、當さに衣食床臥具病瘦醫藥を與ふべし、力の堪ふるところに隨つて爲めに辨ぜよ。自今已去和尙法を制すること是くの如し。和尙應さに行ずべし、若し行ぜざれば法の如く治す。時に和尙弟子の所に於て和尙法を行ずるに、弟子、和尙の所に於て弟子法を行ぜず、和尙に白さずして村に入り、白衣の家に入り、或は餘の比丘に從ひ、或は餘の比丘と將つて伴と爲し、或は與へ或は受け、或時は衆事を佐助し、或時は他の佐助を受け、或時は他の爲めに剃髮し、或は他の剃髮を受け、或は和尙に白さずして浴室に入り、或時は他の爲めに身を揩摩し、或時は他の身を揩摩するを受く。或時は和尙に白さずして、晝日住處の房に至り、或は塚間に至り、或は界外に至り、或は他方に至る。爾の時諸の比丘聞く、其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり、彼の諸の比丘を嫌責して言はく、云何ぞ和尙、弟子の所に於て和尙法を行ずるに、而も弟子、和尙の所に於て弟子法を行ぜず、而かも和尙に白さずして村に入り、白衣の家に入り、乃至白さずして他方に至る。時に諸の比丘世尊の所に往き、頭面禮足して一面に在りて坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時此の因緣を以て比丘僧を集め、彼の比丘を呵責して言はく『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり。云何ぞ和尙は弟子の所に於て和尙法を行ずるに、弟子は和尙の所に於て弟子法を行ぜず、和尙に白さずして、村に入り、白衣の家に入り、乃至白さずして他方に至る。爾の時世尊、無數の方便を以て彼の比丘を呵責し已り、諸の比丘に告げたまはく『自今已去當さに弟子を制すべし、弟子の所行の法の如き、弟子をして和上の所に於て、弟子法を行ぜしめ、是くの如きの行を作さしむ。若し和尙、衆僧爲めに羯磨を作し、呵責を作し、擯を作し、依止を作し、遮を

作して白衣の家に至らず、擧を作さば、弟子當さに如法に料理すべし。僧をして和尚のために羯磨を作さしめず、若しは作すも輕からしむ。復次ぎに、若し僧、和尚のために羯磨を作し、呵責を作し、乃至擧を作さんに、弟子當さに中に於て如法に料理すべし、和尚をして僧に順從に、違逆せずして除罪を求め、僧をして疾々に解羯磨を與へしむ。復次ぎに和尚僧殘を犯さば、弟子當さに如法に料理すべし。若し應さに波利婆沙を與ふべきは、當さに波利婆沙を與ふべし、應さに本日治を與ふべきは、當さに本日治を與ふべし、應さに摩那埵を與ふべきは、當さに摩那埵を與ふべし、應さに出罪を與ふべきは、應さに出罪を與ふべし。復次ぎに、和尚若し病まば、弟子當さに瞻視し、若しは餘人をして看せしめ、乃ち差え、若し命終に至るべし。若し和尚の意に住處を樂まざれば、當さに自ら移り、若しは餘人をして移らしむべし。若し和尚に疑ふ事あらば、法の如く、律の如く、佛の敎ふる所の如く、如法に之を除くべし、若しは惡見生ぜば、當さに勸めて惡見を捨て、善見に住せしむべし。當さに二事を以て將護すべし、法を以てすると、衣食を以てするとなり。法將護とは、勸めて增戒・增心・增慧・學問誦經せしむるなり。衣食將護とは、當さに衣食・床褥・臥具・醫藥・所須の物を供養し、力の堪ふる所に隨ふべし。自今已去、弟子法を制すること是くの如し。弟子應さに行ずべし、若し行ぜざれば應さに法の如く治すべし』と。時に弟子、和尚の所に於て弟子法を行ぜず、弟子、和尚に白さずして村に入ることを得ず、他家に至ることを得ず、餘の比丘に從ひ、或は餘の比丘を將つて伴と爲すことを得ず、與ふることを得ず、受くることを得ず、衆事を佐助することを得ず、他の衆事を佐助するを受くることを得ず、他をして剃髮せしむることを得ず、他の爲めに剃髮することを得ず、浴室に入ることを得ず、人の爲めに身を揩することを得ず、他の身を揩するを受くることを得ず、晝日住處の房に至ることを得ず、塚間に至ることを得ず、界外に至ることを得ず、他方に行くことを得ず、彼れ當さに淸旦に和尚の房中に入り、誦經法を受け、義を問ひ、

當さに小便器を除去すべし。若し時到ると白さば、應さに【一五】澡豆若しは牛屎にて手を淨洗すべし、若し食ふべき物あれば、當さに爲めに取るべし、若し僧中に利養あらば、當さに爲めに取るべし、當さに澡豆、楊子を以て和尙に授與し、和尙をして手を洗ひ、口を漱がしむべし、食ふべき物あれば和尙に授與せよ、僧中に別の利養あらば、當さに和尙に白して言ふべし、『如是如是の物を得たり、是れ和尙の分なる』と。彼れ當さに和尙に問うて言ふべし、『村に入らんと欲するや不や』と。若し『入らず』と言はゞ、當さに問うて言ふべし、『何の處に從つて食を取らん』と。若し和尙『某處に從つて取れ』と言はゞ、當さに勅の如く往いて取るべし。若し報へて『我れ村に入らんと欲す』と言はゞ、彼れ當さに手を洗ひ已りて、衣架上より徐々に衣を取り、倒錯せしむる勿れ。當さに安陀會を取り、舒張抖擻して見るべし、蟲蛇蜂の諸惡蟲あらしむる勿れ。次ぎに腰帶・僧祇支・欝多羅僧を取り、舒張抖擻して看、蛇蜂の諸惡蟲あらしむる勿れ、當さに和尙に授與すべし。應さに僧伽梨を疊みて、頭上若しは肩上に著くべし。復次ぎに鉢を取り、當さに澡豆、若しは灰、牛屎を以て洗ひ、絡囊若しは手巾裹、若しは鉢囊の中に盛りて持ち去るべし。應さに和尙の襯身衣を取りて疊擧すべし。復洗足の物、臥氈被を取りて之を擧せよ。若し和尙出でゝ行く時は、當さに和尙行道の革屣を捉るべし。房舍を出づる時は、當さに還り顧みて戶を閉づべし、復手を以て推して、牢とせんや不やを看よ。若し牢ならざれば、當さに更に重ねて閉づべし。若し牢にし已らば、當さに戶扇孔中の繩を取りて之を內るべし。遍く左右を觀已りて、戶鑰を持ちて屛處に著けよ。若しは人の見んことを恐れ、若しは不牢を恐れよ。若し牢ならず、若しは人見んには、當さに持ち去るべし、若しは移して深牢處に置け。和尙をして前に在りて行かしめ、若し道路に相識の人に逢はゞ、當さに共に善語し、善心憶念すべし。行く時は當さに人の道を避くべし、彼れ若し村に入らんと欲する時は、應さに小しく道を下り、鉢を安んじて一面に置くべし。頭上若しくは肩上より僧伽梨を下し、

【一五】澡豆は、手、身體等を洗ふに用ふるもの、日本にても昔し石鹼のなかつた時代には、浴室でも、或は洗濯にでも、さいかち(皂莢)の實を用ひたので、此のさいかちの實は、大きいさやにはいつた豆の樣な實で、其のさやのまゝ、水にてもめば、石鹼の如く泡が出て、淸淨に垢を洗ひ落すのである。澡豆といふのは、蓋し此のさいかちの類であらう。牛屎は、印度では淸淨なものと考へ、これにて身も手も洗ひ、登壇にも塗り、家の壁にも塗るのである。

舒張して看よ。蛇蝎百足の諸惡虫あらしむる勿れ、和尚に授與せよ。若し彼の村外に、客舍・坐肆舍、若しは作房あらば、當さに行道の革屣を以て中に置くべし。應さに和尚に問ふべし、『我れ尋いで從ふことを得んや不や』と。若し『爾るべし』と言はゞ、卽ち當さに尋いで從ふべし。若し『不、某處に在りて住すべし』と言はゞ、彼れ應さに言の如く、某處に在りて住すべし。若し和尚村に入り、[一六]時に出でざれば、彼れ當さに是くの如きの意を作すべし、「村に入りて乞食せん、此の分は和尚に與へん、此の分は我れに屬す」と。如し村を出で已らば、還つて革屣の所に至り、革屣を取りて道を下り、鉢を持つて地に置き、僧伽梨を疊んで頭上若しは肩上に著け、若し中路に相識の人を見ば、當さに善意問訊すべし。若し和尚所住の食處は、當さに掃いて淨ならしむべし。ために坐具を敷き、淨水瓶・洗浴器・盛食器を具し、復當さに和尚のために洗浴の坐、洗足石を安置し、拭脚巾を具せよ。若し遙に和尚の來るを見ば卽ち起つて奉迎し、手中の鉢を取り、鉢揞若しは鉢床の上、若しは繩上角頭若しは頭上、肩上に置け。僧伽梨を取りて舒張して之を看、脂膩沾汚あらしむる勿れ。或は塵土坌の爲め、或は泥汚の爲め、或は飛鳥糞の汚れ、若し是くの如きの汚れあらば、應さに之を去るべし。宜しく浣ふべきものは之を浣ひ、捩りて水を去り、舒張して若しは木床、若しは繩床の上に曬置せよ。復た當に和尚のために坐を敷き、革屣・洗足石・拭足巾を與て、盛水器を與ふべし。革屣を抖擻し已りて、左面に置いて之を看よ、下地濕處に在るを恐る。若し下地濕處に在らば、便ち取りて彼れを移せ。和尚のために洗足竟らば、當さに水を棄て、洗足石と拭足巾とを以て、還た本處に置くべし。復自ら手を淨洗し已りて、淨水を授けて和尚に與へて手を洗はしめ、自所に食あらば當さに取りて和尚に與ふべし。白し言はく『此れは是れ我が食分なり、食すべし』と。彼れ須ひんには當さに取るべし。若し和尚食する時は、當さに侍立して看、所須を供給すべし。若し彼れ食する時、酪漿・煎漿・苦酒・鹽・大麥漿・[一七]菜茹あらば之を授與せよ。若し熱ければ抏して冷ならしめ、若し

【一六】時に出でずとは、時食に間に合ふ樣に村より出で來らざれば、時を過ぎては自分の食もないから、自ら村に入りて乞食することゝするのである。

【一七】菜茹は、『音義』を見るに、皆茹菜とあり、茹は食ふことで、食すべき菜を茹菜といふのである。抏は正しくは撓に作るとあり、カウと發音す、撓は擾なりとあるから、熱ければ、攪き廻はして冷ますことである。

水を授けて與へよ。日時を相し、若し過ぎんと欲すれば、當さに卽ち同時に食すべし。若し和尙食し已らば、當さに手中に鉢を取り、澡漱水を行ずべし。若し自ら食し竟り、若し餘食あらば、當さに人、非人に與ふべし。若しは淨地の無草處に著き、若しは淨地の無虫水中に著け、盛食器を取りて、淨洗して還た本處に置け。坐具・洗足床・淨水瓶・澡洗瓶を取りて、還た本處に置け。食處は淨に（八）糞を掃除せよ。彼れ食鉢を以て、糞を盛りて之を棄つ。餘の比丘見るもの皆共に之を惡む。自今已去食鉢を持つて糞を盛りて之を棄つることを得ず、除糞器、若しは破器、若しは故竹筐を用ふることを聽す。若しは掃箒上にて糞を除去せよ。食鉢は當さに好淨潔に之を持つべし。復次ぎに和尙の房に入る時、當さに看るべし、塵土あらんを恐れてなり。若し塵土あらば、當さに繩床・木床・坐具・大小褥枕氍被、若しは揩、若しは地敷を出すべし。當さに本處を記し、出して外に在りて之を曬すべし。淨に房中に掃除し、糞土を去り、棄つる時は當さに若しは鐵綖、若しは刀、若しは弊故の段衣、下至一丸二丸の藥あらんを看るべし、當さに取りて現處に擧置すべし。若し主の識るものあらば、當さに取るべし。復當さに嚮上、若しは杙上、若しは龍牙杙上、若しは衣架上を拂拭すべし。若し房に破壞の處、若しは虫鼠の孔穴あり、補塞すべき者は當さに之を治すべし、泥すべきものは之を泥し、搗すべきものは便ち搗し、平治すべきものは便ち平治せよ。當さに泥漿を以て汚れたるは、灑いで極めて淨潔ならしむべし。當さに地敷を取り、曬して燥かしめ、內房の中に抖擻し、若し本より坐を敷くこと齊しからざれば、當さに更に齊整にすべし。若し本より齊整ならば、當さに本の如く齊整にすべし。先づ牀脚楷を內れて之を拂拭して當さに急なるべし。繩牀と繩牀脚を身に向つて房中に內れ、牀楷の上に安置し、大小の褥枕氍被衣を取りて、房中に內著し、先づ大褥を敷き、次ぎに小褥氍被を敷き、枕を安んじて上に置く。彼れ所著衣、不著衣を取りて幷びに一處に置くに、取る時各々錯亂す。『自今已去、所著衣、不著衣を以て幷びに一處に置くことを

【八】糞といふのは、塵芥卽ちゴミのこと。

得ざれ、應さに各々一處を別つべし。』と。彼れ鉢嚢・革屣嚢・針筒・油器を一處に置く、諸の比丘見て之を惡む。佛言はく、『爾るべからず、自今已去、應さに鉢嚢針筒を一處に置き、革屣嚢と油器とを一處に置くことを聽す。彼れ應さに房內にありては、鑰牡[一九]を安んじて看、高下せざらしむ。房外に出づれば、應さに還りて[二〇]戸を撣して中庭を觀るべし。恐らくは塵土不淨あらん。若し有らば卽ち掃除し去り、當さに水瓶を取りて淨洗すべし。已りて還た淨水を盛りて本處に置け。復當さに和尙のために、水瓶・洗浴瓶・飲水器を具ふべし。若し浴室の中に洗浴ある時は、當さに往いて和尙に問ふべし。『洗浴せんと欲するや不や』と。若し『洗浴す』と言はゞ、當さに先づ浴室の中に至り、地を看るべし。若し塵土草芥あらば當さに除去すべし。應さに灑ぐべければ便ち灑ぎ、應さに掃くべければ卽ち掃く。若し不淨澇水あり、應さに便ち棄つべきは便ち棄て、應さに水を內るべければ便ち水を內れ、應さに薪を內るべければ卽ち薪を內れ、應さに薪を破るべければ便ち薪を破り、應さに竈中に內るべければ、便ち竈中に內れ、應さに和尙のために、溫室中の瓶及び坐机、刮汗刀水器・泥土器、若しは澡豆、諸の洗浴の具を具ふべし。彼れ當さに先づ和尙に白すべし、已りて然る後に火を然やし、火を然やし已りて時到ると白す。若し和尙病羸なり、若しは老極なれば、當さに自ら扶抱すべし。若しは繩牀木牀上に、若しは衣を以て舁ぎ、溫室の中に往き、當さに和尙の手中より衣を取るべし。若し浴室中に杙若しは龍牙杙、若しは衣架あらば、當さに衣を以て是の諸處に置くべし。若し油あらば、油を以てために身に塗り、若し盛油器處々に地にあらば、當さに取りて龍牙杙、杙に貫著すべし。若し和尙病んで羸瘦老極なれば、當さに扶抱して浴室中に至るべし。至り已れば、當さに浴机牀、浴瓶、若しは刮汗刀と若しは水器と、若しは泥器、若しは澡豆と諸の洗浴の具とを取るべし。彼れ當さに先づ和尙に白し、已りて然る後に火を然やすべし。火を然やし已りて時到ると白せ。若し和尙病羸若しは老極なれば、當さに自ら扶抱すべし。若しは繩床、木床

【一九】鑰牡は、『音義』の、「關下に揷む牡なり、案ずるに、牝牡と爲して、關を封固して開かざらしむる所以なり」とあるから、鍵の揷しこむ方が牡で、穴のある方が牝であり、牡を牝にさしこんで、錠を下ろすことを、「鑰牡を安んじ」と言つたのである。

【二〇】「戸を撣す」を、底本『大正藏經』には「戸を探る」とす。これは誤りであらう。撣は『音義』によるに、串と同じ。門の串なりとあり「音撣、持なり」とある。戸を閉ぢ、摽を以て戸を開かぬ樣にして置くといふことであらう。

の上、若しは衣を以て舁いで溫室の中に往き、當さに和尚の手中より衣を取るべし。若し浴室の中に、杙、若しは龍牙杙、若しは衣架あらば、當さに衣を持つて是の諸處に置き、若し油あらば、油を持つて與へて身に塗り、若しは盛油器處々に地に在らば、當さに取りて龍牙杙上に貫著すべし。若し和尚病んで羸瘦して老極ならば、當さに扶抱して浴室の中に至るべし。至り已らば、當さに浴机床、浴瓶、若しは刮汗刀と若し水器と、若しは澡豆と、諸の洗浴の具とを取るべし。若し煙面に熏ずれば、當さに巾を持つて與へて障ふべし。若し頭背熱すれば、當さに巾を以て彼れを覆ふべし。當さに和尚に白し、已りて然る後浴室に入るべし。若し和尚先きに入り已らば、浴室中の閙しからんを恐れて敢て入らず、當さに是の念を作すべし。「我れ今自ら已れが爲めにせず、和尚の洗浴を以ての故に入る」と。是の意を作して入るべし。入り已りて、當さに和尚のために身を[三二]揩摩すべし、當さに和尚の後に立つべし。若し異人のために身を揩せんと欲し、若しは他の揩身を受けんと欲せば、當さに和尚に白して知らしむべし、然る後に當さにために揩身し、若しは他の揩身を受くべし。彼れ和尚のために洗ひ、自ら洗ひ已りて、若し和尚病みて羸瘦若しは老極なれば、當さに扶けて浴室の外に出づべし。座を取りて坐を與へ、拭身巾、若しは拭面巾、若しは拭眼巾を取り、和尚に授與し已りて、當さに洗脚石を安んじ、水を與へて脚を洗ひ、拭脚巾を取りて與へ、當さに取りて足を洗ふべし。革屣は拂拭し抖擻して授與せよ。次ぎに衣を取りて舒張して看、抖擻して授與せよ。若し眼藥若しは丸香あらば授與せよ。若し甜漿・蜜漿・黑石蜜漿あらば、手を洗ひ已りて授與せよ。若し和尚病瘦老極なれば、當さに繩床木床上を以て舁ぎ、若し衣上に舁ぎて房中に還るべし。房中に還り已りて、手にて臥處を捫摸して看、ために臥氈を敷いて臥せしめ、先づ襯身衣を與へ、次ぎに被衣を以て之を覆ひ、房を出て已りて還た向つて戸を閉ぢ、還りて浴室の中に至り、遍く水瓶・洗浴瓶・浴机・刮汗刀・盛水瓶・泥土器・細末藥、若しは澡豆、諸の洗浴物を看、還た

【三二】揩は、摩拭とあり、コスルこと、後に拭ふのである。

本處に置き、若し浴室の中に不淨潸水あらば、應さに除去すべきは便ち除去し、應さに火を滅すべければ便ち之を滅し、應さに火を覆ふべければ便ち覆ひ、應さに戸を閉づべければ便ち閉ぢ、應さに戸鑰を持ちて去るべければ便ち持ち去れ、彼れ當さに日に三たび和尙を問訊すべし、朝と中と日暮となり。當さに和尙のために二事を執るべし、勞苦も辭を設くることを得ず。一つには房舍を修理す、二つには爲めに衣服を補浣す。和尙如法に敎ふる所の事、盡く當さに奉行すべし。若し遣はし方面に往きて周旋せしむるに、辭を設くることを得ず。因緣に假托して住し、若しは辭を設くる者は、當さに法の如く治すべし。『自今已去弟子を制し、弟子法を修せしむ。弟子、和尙の所に於て弟子法を修せざれば、當さに法の如く治すべし、』と。

四分律卷第三十三

卷の第三十四（二分の十三）

受戒揵度の四

時に諸の新受戒の比丘、和尙命終して人の教授するものなし、教授を被らざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、或は不淨鉢食を受け、大食小食上にありて、高聲にして大に喚ぶこと婆羅門の聚會法の如く異なることをなし。時に諸の比丘往いて世尊に白す。時に世尊無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『自今已去、十歲の比丘、[一]人に依止を與ふることを聽す』と。彼の諸の比丘、世尊戒を制したまひ、十歲の比丘、人に依止を與ふることを聽したまふと聞き、彼の十歲の比丘、愚癡にして智慧なく、便ち人に依止を與へ、教授することを知らず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、不淨鉢食を受け、大食小食上にありて、高聲にして大に喚ぶこと、婆羅門の聚會法の如し。時に諸の比丘聞く。其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり、彼の比丘を嫌責す。『云何ぞ世尊戒を制したまひ、十歲の比丘に人に依止を與ふることを聽したまふ。而も汝等十歲と雖、人に依止を與へて教授することを知らず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、不淨鉢食を受け、大小食上に在りて、高聲に大に喚ぶこと、婆羅門の聚會法の如き』と。呵責し已りて、往いて世尊に白す。世尊此の因緣を以て比丘僧を集め、彼の比丘を呵責して言はく、『汝の所爲は非なり。威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ我れ戒を制して、十歲の比丘に、人の依止を受くることを聽す。汝等十歲と雖、愚癡にして人の依止を受けて教授することを知らざるが故に、著衣齊整ならず、乃至婆羅門の聚會法の如くな

【一】「人に依止を與ふ」とは、人の依止となり、師として教授することである。卽ち和尙は授戒師であり、依止は教授師である、敎授師を阿闍梨(Acarya)といふ。

るや』と。時に世尊無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『自今已去、十歳の智慧の比丘に、人に依止を與ふることを聽す』と。時に諸の比丘、世尊戒を制したまひ、十歳の智慧の比丘に、人に依止を與ふることを聽したまふと聽き、彼れ自ら稱して言はく、『我れは十歳にして智慧あり』と。便ち人の依止を與ふ。然るに彼れ依止を與へ已りて教授せず、教授せざるを以ての故に、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、不淨鉢食を受け、大小食上に在りて高聲は大に喚ぶこと、婆羅門の聚會法の如し。時に諸の比丘聞く、其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知るものあり、彼の比丘を呵責す。『云何ぞ世尊戒を制したまひ、十歳にして智慧ある比丘に聽し、比丘應さに人に依止を與ふべしと。而も汝輒ち自ら言はく、「我れ智慧あり」と、便ち人に依止を與へ、與へ已りて教授せず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、不淨鉢食を受け、大小食上にあつて、高聲にして大に喚び、婆羅門の聚會法の如くなるや』と。時に諸の比丘、世尊の所に往いて、頭面禮足して一面に在りて坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊此の因緣を以て比丘僧を集め、彼の比丘を呵責したまふ。『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり。云何ぞ我れ戒を制し、十歳にして智慧ある比丘に、人に依止を與ふることを聽す。而も汝自ら言ふ「智慧あり」と、人に依止を與へ、既に依止を與へてしかも教授せず、教授せざるを以ての故に、威儀を按ぜず、著衣齊整ならず、乞食如法ならず、處々に不淨食を受け、不淨鉢食を受け、大小食上に在りて高聲に大に喚び、婆羅門の聚會法の如くなるや』と。爾の時世尊無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『自今已去、當さに阿闍梨法を制し、阿闍梨法を行ぜしむべし。阿闍梨は弟子の所に於て、當さに是くの如きの法を作すべし、應さに是くの如く行すべし。阿闍梨は弟子の所に於て、阿闍梨法を行ずること、一々上の、和尚の弟子の所に於て、和尚法を行ずるが如くせよ。弟子は阿闍梨

の所に於て、弟子法を行ずること一々亦上の、弟子の和尚の所に於て、一々弟子法を行ずるが如くせよ。文同じくして異ならず、故に出さゞるのみ。

爾の時諸の弟子、和尚に承事恭敬せず、亦弟子法に順ぜず。時に諸の比丘往いて世尊に白す。世尊言はく、『自今已去、當さにために呵責を作すべし。彼れ云何が呵責せんを知らず。佛言はく、『五事を以て呵責することを聽す。和尚當さに是くの如きの語を作すべし。『我れ今汝を呵責す。汝去れ、汝我が房に入ること莫れ、汝我が爲めに使を作すこと莫れ、汝亦我が所に至ること莫れ、汝と語らず』と。是れを和尚の弟子を呵責する五事といふ。阿闍梨の弟子を呵責するに亦五事あり。語りて言はく、『我れ今汝を呵責す。汝去れ、汝我が房に入ること莫れ、我が爲めに使を作すこと莫れ、汝我れに依止して住すること莫れ、汝と語らず』と。是れを阿闍梨の、弟子を呵責するの五事と謂ふ。世尊既に呵責を聽したまふも、當さに何事を以て呵責すべきかを知らず。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『弟子に五事あれば、和尚、阿闍梨應さに與めに呵責を作すべし。無慚と無愧と教を受けざると、非威儀を作すと、恭敬せざると、弟子是くの如きの五事あらば、和尚、阿闍梨應さに與めに呵責を作すべし。復五事あり、無慚と無愧と、與に語り難きと、惡人の爲めに友となると、好んで婬女の家に往くとなり。復五事あり、無慚・無愧と、與に語り難きと、惡人と友となると、好んで婦女の家に往くとなす。復五事あり、無慚と無愧と、與に語り難きと、惡人と友と爲ると、好んで大童女の家に往くとなり。復五事あり、無慚と無愧と、與に語り難きと、惡人と友と爲ると、好んで黃門の家に往くとなり。復五事あり、無慚と無愧と、與に語り難きと、惡人と友と爲ると、好んで比丘尼精舍に往くとなり。復五事あり、無慚と無愧と、與に語り難きと、惡人と友と爲ると、好んで式叉摩那・沙彌尼の精舍に往くとなり。復五事あり、無慚と無愧と、與に語り難きと、惡人と友と爲ると、好んで往いて龜鼈を捕ふるを看るとなり。是くの如きの五事あらば、和尚阿闍梨應さにために呵責を作すべし』と。世尊既に弟子を呵責することを聽したまふ。彼れ盡形壽

呵責す。佛言はく、『盡形壽呵責すべからず』と。彼れ安居を竟るまで呵責す。佛言はく、『爾るべからず』と。彼れ病者を呵責し、和尚、阿闍梨看ず、餘の比丘も亦看ず、病者困篤す。佛言はく、『病者を呵責すべからず』と。彼れ前に在らずして呵責す。餘の比丘語りて言はく、『汝已に呵責せらる』と。彼れ言はく、『我れは呵責せられず』と。佛言はく、『不現前呵責すべからず』と。彼れ出過を與へずして呵責す、時に諸の弟子言はく、『我れ何の過を犯してか呵責せらるゝや』と。佛言はく、『其の過を出さずして呵責すべからず、當さに其の過を出して言ふべし、「汝如是如是の罪を犯す」』と。彼れ既に呵責せられ已りて、便ち供給して使を作す、佛言はく、『爾るべからず』と。彼れ與めに呵責を作し已りて、便ち供給を受けて使を作す。佛言はく、『爾るべからず』と。彼れ呵責せられ已りて、故ほ依止す。佛言はく、『爾るべからず』と。彼れために呵責を作し已りて依止を與ふ。佛言はく、『爾るべからず』と。彼れ呵責せられ已りて、懺悔せず、〔二〕和尚阿闍梨便ち去る。佛言はく、『爾るべからず』と。彼れ呵責せられ已りて、便ち餘の比丘の邊に於て住し、和尚阿闍梨のために執事せず、亦復餘の比丘のためにも執事せず。佛言はく、『爾るべからず』と。彼れ呵責せられ已りて、人の〔三〕將順を爲すなく、或は遠行し、或は休道し、或は佛法を樂まず。佛言はく、『餘人の、是くの如きの意を作して受くることを聽す。其の和尚阿闍梨の爲めに、懺悔和合せしめんと欲するが故に受く。爾の時六群比丘、他の弟子を誘將して去る。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『他の弟子を誘將し去るべからず、若し將ひ去らば、應さに法の如く治すべし』と。彼の和尚・阿闍梨、或は戒を破り、見を破り、威儀を破り、若しは擧せられ、若しは滅擯、若しは應滅擯にして、沙門の法に於て利益なし。時に諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『是くの如きの意を作すことを聽す。誘進將去する所以は、其れをして沙門法を長益せしめんと欲するが故なり』と。彼れ呵責せられ已りて、和尚阿闍梨に向つて懺悔せず。佛言はく、『呵責せられ已らば、應さに和尚阿

【二】呵責を受けしものは、和尚阿闍梨に向つて懺悔することを聽す、然るに和尚阿闍梨、其の懺悔の時を與へずして去るなり。

【三】將順は、弟子の依賴を受けて、師の所に伴ひ、之を懺悔せしむるため、仲介の男を取ることである。

闍梨に向つて懺悔すべし、當さに是くの如く懺悔すべし。偏へに右臂を露はし、革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの語を作す。「大德、我れ今懺悔す、更に復作さず」と。若し懺悔を聽さば善し、若し聽さゞれば、當さに更に日に三時に懺悔すべし。早起と日中と日暮となり。若し懺悔を聽さば善し、若し聽さずんば、當さに下意隨順すべし。方便を求めて其の所犯を解け。若し彼れ下意隨順して違逆あることなく、解過を求むれば師當さに之を受くべし、受けざれば法の如く治すべし。

時に新受戒樂靜の比丘あり、當さに依止を須むべし。彼れ房舍を觀看し、阿蘭若處に窩あるを見る。彼れ是の念を作さく、「我れ若し依止を得ば、當さに此の處に於て住すべし」と。諸の比丘に語る。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、新受戒の比丘、閑靜を樂ひ、依止を須むるものは、餘處に依止して、即日往還することを得るを聽す。若し得ざれば、新受戒の比丘靜處を樂ふものは、依止なくして住することを聽す』と。

爾の時、新受戒舊住の比丘依止を須む。彼れ是の念を作さく、「世尊制あり、依止なくして住することを得ず」と。彼れ輒ち所住の處を捨てゝ去る、住處壞る。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、新受戒舊住の比丘ありて依止を須めんに、依止なくして住することを聽す、住處を護するが爲めの故に。時に比丘あり、(四)意を決して界外に出でゝ去る、還意を作さず、而も彼れ界外に出でゝ即ち其の日に還る。諸の比丘佛に白して言さく、『此れ依止を失ふや不や』と。佛言はく、『此れ依止を失ふ』と。彼の和尙・阿闍梨意を決して界外に出でゝ去り、不還意を作して界外に出で、即ち其の日に還る。諸の比丘佛に白して言さく、『此れ依止を失ふや不や』と。佛言はく、『依止を失ふ』と。時に比丘あり、和尙・阿闍梨に白して、暫らく界外に出で、即日還る。諸の比丘佛に白して言さく、『依止を失ふとせんや不や』と。佛言はく、『依止を失はず』と。時に

【四】「意を決して」は、再び還らずと決意することで、決意によりて依止を失ふ故、即日故ありて還るも、已に依止と離るゝ故、佛は依止と失ふと判ぜらる。和尙阿闍梨も、決意界外に出づれば、此の決意により、弟子と師と依止の關係は斷絕したのである。故に即日還るも、依止を失ふといふのである。故に決意にあらずして、暫出は、依止を失はないのである。

和尙・阿闍梨念じて言はく、「暫らく界外に出でん」と。界外に出でゝ即ち其の日に還る。諸の比丘佛に白して言さく、『依止を失ふとせんや不や』と。佛言はく、『依止を失はず』と。爾の時諸の比丘、受戒人を將ひて界外に出で、六群比丘を喚び、來りて授戒せしむ。六群比丘來らず、受戒することを得ず。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、若しは波利婆沙・本日治・摩那埵・阿浮呵那を作し、羯磨を作し、若しは制を立て、若しは受戒し、若しは衆の人を差す、若し所解ある、此くの如きの衆事に、喚ばゞ應さに赴くべし、赴かざれば當さに法の如く治すべし。爾の時諸の比丘、受戒せんと欲する者を將ひ、界外に出でんとす。上座に語りて言はく、『白羯磨を作せ』と。報へて言はく、『我れ誦せず』と。復中座下座に語りて言はく、『白を作せ』と。亦言はく、『誦せず』と。便ち留難して戒を受くることを得ず。諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、五歲の比丘は當さに白羯磨を誦すべし。若しせざれば法の如く誦すべし』と。時に比丘あり、受戒者を將ひ、界外に出でんとし、上座に語りて言はく、『白を作せ』と。上座報へて言はく、『我れ曾て誦す、今利ならず』と。復中下座に語りて言はく、『白を作せ』と。亦言はく、『我れ曾て誦す、今利ならず』と。便ち戒を受くることを得ず。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、五歲の比丘、當さに白羯磨を誦し、利ならしむべし、せざれば當さに法の如く治すべし』と。爾の時比丘あり、受戒者を將ひて界外に出づ。賊の來るありと聞き、皆恐怖して坐より起ちて去り、戒を受くることを得ず。諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、八難の事及び餘の因緣あらば、一人・三人、一時に羯磨を作すことを聽す、過を得ず。所謂難處とは、一に王、二に賊、三に火、四に水、五に病、六に人、七に非人、八に失梨盜虫なり。所謂餘の因緣とは、大衆集まるも、坐具少し、若しは病人多きあれば、二人三人一時に羯磨を作すことを聽す。若し大衆集まるも、房舍少し、若し天雨ふりて漏るあらば、

二人三人一時に羯磨を作すことを聽す。』と。爾の時、尊者優波離卽ち座より起ちて偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『若し諸の重事あらば、二人三人を過ぎて、一時に羯磨を作すことを得るや不や』と。佛言はく、『過ぐることを得ず』と。彼れ使を遣はして依止を受く。佛言はく、『爾るべからず』と。彼れ使を遣はして依止を與ふ。佛言はく、『爾るべからず』と。時に和尙・阿闍梨[五]界外に出でゝ行く。弟子念じて言はく、「和尙・阿闍梨行くも、久からずして當さに還るべし、我れ卽ち依止して住せん」と。便ち依止なくして住す。諸の比丘此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、和尙・阿闍梨の界外に出で行くの日、卽日應さに依止を受くべきことを聽す、若し受けざれば法の如く治すべし。彼の諸の弟子、界外に出でゝ遠行す。彼れ自ら念じて言はく、「我等行くも久しからずして還らん、卽ち此れを以て和尙・阿闍梨に依止して住せん」と。便ち依止なくして住す。時に諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、新受戒の客比丘、依止を須むる者は、先づ足を洗ふことを得ず、先づ水を飮むことを得ず、先づ依止を受くべきことを聽す』と。爾の時、客新受戒の比丘依止を須む。彼れ是の念を作さく、『世尊制して言はく、「新受戒の客比丘依止を須めんに、先づ足を洗ふことを得ず、先づ水を飮むことを得ず、當さに先づ依止を受くべし」と。』當さに依止を受くべし、時に迷悶して地に倒れ、便ち病を得たり。爾の時、諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、客新受戒の比丘依止を須めんに、先づ足を洗ひ、先づ水を飮み、小しく停息し已りて依止を受けよ』と。彼れ人を選擇せずして依止を受け、しかも師破戒・破見・破威儀にして、若しは呵責を作し、依止を作し、擯を作し、若しは遮不至白衣家を作し、若しは擧せられて、沙門を長益するの行なし。佛言はく、『自今已去、師を選擇せずして依止を受くること得ざれ』と。彼れ選擇せずして依止を與ふ。弟子或は破戒・破見・破威儀にして、若しは呵責を作され、若しは擯し、依止を作し、遮

【五】界外に出でゝ、卽日界内に還るは依止を失はざる、遠行にて卽日還らざる時は、直ちに依止を定むべきを言ふのである。

不至白衣家を作し、擧を作す。佛言はく、『選擇せずして依止を與ふることを得ざれ』と。爾の時新受戒の比丘、病んで依止を須む。彼れ是の念を作さく、『世尊制して言はく、「依止せずして住することを得ず」と。』即日住處を捨てゝ去り、病增劇す。時に諸の比丘往いて世尊に白す。世尊言はく、『自今已去、新受戒の比丘、病みて依止を須めんに、依止なくして住することを得るを聽す』と。時に新受戒の病比丘を瞻視する者依止を須む。彼れ是の念を作さく、『世尊制して言はく、「依止なくして住することを得ず」と。』彼れ病人を捨てゝ去り、病者命終す。諸の比丘往いて世尊に白す。世尊言はく、『自今已去、新受戒の病比丘を瞻視する者は、依止なくして住することを得るを聽す』と。彼の諸の比丘の和尙・阿闍梨、衆僧ために羯磨を作し、ために呵責を作し、擯を作し、依止を作し、遮不至白衣家を作し、擧を作す。諸の比丘念じて言はく、「依止を失ふとせんや不や」と。佛言はく、「依止を失はず」と。彼の諸の弟子、衆僧與めに羯磨を作し、呵責を作し、乃至遮不至白衣家を作し、擧羯磨を作す。諸の比丘念じて言はく、「依止を失ふとせんや不や」と。佛言はく、『依止を失はず』と。彼の和尙・阿闍梨、衆僧爲めに滅擯羯磨を作す。諸の比丘念じて言はく、「依止を失ふとせんや不や」と。佛言はく、『依止を失ふ』と。彼の諸の弟子、衆僧爲めに滅擯羯磨を作す。諸の比丘念じて言はく、「依止を失ふとせんや不や」と。佛言はく、『依止を失ふ』と。爾の時世尊羅閱城に遊ぶ。時に鬱毘羅迦葉、諸の徒衆を將ひて、家を捨てゝ學道す。刪若の弟子、二百五十の弟子を將ひて、家を捨てゝ學道す。羅閱城中に大富豪貴家に子あり、亦出家學道す。此くの如きの大衆等羅閱城に住す。時に諸の大臣、自ら相謂つて言はく、『今諸の外道出家學道し、春秋冬夏人間に遊行す。此の沙門釋子此の間に聚まり住して、餘處に遊行せず、將た此の處を最勝と爲すが故か。』爾の時諸の比丘聞き已りて、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時阿難に告げたまはく、『汝房々に往きて、諸の比丘に勅して言はく、「世尊今南方に至り、人間に遊行せんと欲したまふ。侍從せ

んと欲するものあらば、各意に隨へ」と。』阿難教を受け、房々に往いて諸の比丘に語りて言はく、『世尊今南方に往いて遊行したまはんと欲す、諸の比丘若し侍從せんと欲するあらば、各意に隨へ』と。時に新樂ある新受戒の比丘、阿難に白して言さく、『若し我等の和尚・阿闍梨も去らば、我れも當さに去るべし、若し去らずんば我等も去らず。何を以ての故に、我等新受戒の比丘、若し去りて依止を須めんに、此に還りて復當さに依止を受くべし、人は當さに謂ふべし。我れは輕躁にして志なし』と。爾の時世尊少比丘と將に南方に遊行し、後に王舍城に還る。時に世尊、南方遊行の比丘衆少きを觀、知りて故らに阿難に問ひたまふ。『諸の比丘、何を以ての故に少き』と。阿難具さに上の事を以て世尊に白す。世尊爾の時此の因緣を以て比丘僧を集めて告げて言はく、『自今已去、五歲にして智慧ある比丘と十歲にして智慧ある比丘とに聽す、五歲の比丘は、十歲の比丘に從つて依止を受くべし、若し愚癡にして智慧なければ、盡形壽依止せよ』と。五法ありて依止を失ふ。一には師呵責す。二には去る。三には休道す。四には依止を與へず。五には戒場の上に入る。復五事あり、一には死す。二には去る。三には休道す。四には依止を與へず。五には若しは五歲若しは過五歲なり。復五事あり、若しは死す、若しは去る、若しは休道す、若しは依止を與へず、若し本の和尚を見る。復五事あり、若しは死す、若しは去る、若しは休道す、若しは依止を與へず、若しは和尚・阿闍梨休道す。復五事あり、若しは死す、若しは去る、若しは休道す、若しは依止を與へず、若しは弟子休道す。復五事あり、若しは死す、若しは去る、若しは休道す、若しは依止を與へず、若しは和尚・阿闍梨、命終す。復五事あり、若しは死す、若しは去る、若しは休道す、若しは依止を與へず、若しは弟子命終す。復五事あり、若しは死す、若しは去る、若しは休道す、若しは依止を與へず、若しは還りて和尚の目下に在りて住す。是れを五事依止を失ふと爲す。五法不成就ありて、人に具足戒を授くることを得ず、戒成就せず、定成就せず、智慧成就せず、解脫成就せず、解脫

知見成就せず、此の五法不成就なれば、人に具足戒を授くることを得ず。若し五法を成就すれば、人に具足戒を授くることを得。卽ち上の句に反する是れなり 復五法成就ありて、人に具足戒を授くることを得ず。自身に戒成就せずして、人に戒に堅住することを敎ふる能はず、自身に定・智慧・解脫・解脫知見成就せずして、人に定・智慧・解脫・解脫知見に堅住することを敎ふる能はず。此の五法を成就すれば、人に具足戒を授くることを得ず。五法成就すれば、人に具足戒を授くることを得。卽ち上の句に反する是れなり 復五法成就ありて、人に具足戒を授くることを得ず。無信と無慚と無愧と、嬾墮と多忘となり、此の五法を成就すれば、人に具足戒を授くることを得ず。五法成就ありて、人に具足戒を授くることを得。卽ち上の句に反する是れなり 復五法成就ありて人に具足戒を授くることを得ず。增上戒を破せると、增上見を破すると、增上威儀を破すると、少聞と、無智慧となり。此の五法を成就すれば、人に具足戒を授くることを得ず。五法成就ありて、人に具足戒を授くることを得。卽ち上の句に反する是れなり 復五法成就ありて、人に具足戒を授くることを得ず。病弟子を瞻視すること能はず、人をして瞻視せしむること能はず、乃至差し、若しは命終す。若しは弟子住處を樂まざれば、方便して當さに異處に移るべし。若しは疑事を生ずるあるも、其の意を開解して、法の如く、律の如く、佛の所敎の如く、如法に之を除くこと能はず。敎へて惡見を捨てゝ善見に住せしむる能はず。若しは滅十歲なり。此の五法を成就すれば、人に具足戒を授くることを得ず。五法成就ありて、人に具足戒を授くることを得。卽ち上の句に反する是れなり 復五法成就あり、人に具足戒を授くることを得ず。犯を知らず、不犯を知らず、若しは輕若しは重を知らず、滅十歲なり。此の五法を成就すれば、人に具足戒を授くることを得ず。若し五法を成就すれば、人に具足戒を授くることを得。卽ち上の句に反する是れなり 復五法成就あり、人に具足戒を授くることを得ず。弟子に、增上威儀・增上淨行・增上波羅提木叉・白羯磨を敎授することを知らず。此の五法を成就する者は、人に具足戒を授くることを得ず。五法を成就すれば、人に具足戒

を授くることを得。即ち上の句に反する是れなり復五法成就ありて、人に具足戒を授くることを得ず。增戒・增心・增智慧を知らず、白を知らず、羯磨を知らず、此の五法を成就すれば、人に具足戒を授くることを得ず。五法を成就すれば、人に具足戒を授くることを得。增戒・增心・增智慧を知り、白と羯磨とを知る。此の五法を成就すれば、人に具足戒を授くることを得。是くの如く、依止を與ふることを得ざると、依止を與ふることを得ると、沙彌を畜ふることを得ざると、沙彌を畜ふることを得ると、盡く上の如し。

爾の時、佛羅閲城にあり、時に城中に裸形外道あり、布薩と名づく、善く論議す。常に自ら稱說して言はく、『此の間若し沙門釋子あり、能く我れと論ずる者は來れ』と。時に舍利弗言はく、『我れ汝と論ずるに堪ゆ』と。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『論に四種あり、或は論ずるものあり、義盡きて文盡きず、或は文盡き義盡きず、或は文義倶に盡くるあり。或は文義倶に盡さゞるあり。四辯あり、法辯・義辯・了々辯・辭辯なり。若し論師此の四辯ある者は、而も言に文義倶に盡くとは、是の處あることなし。今舍利弗此の四辯を成就す、而も言に文義倶に盡くとは、是の處あることなし。』と。彼の裸形即ち舍利弗の義を難問す。舍利弗即ち還答して遣る。時に彼の裸形五百の迫難を以て舍利弗を難ず。舍利弗即ち彼の五百の迫難に稱へ、而も更に深義を以て難問す。而も彼の裸形難問を得て解せず。時に彼の裸形即ち念を生じて言はく、「甚奇甚特なり沙門釋子、極めて智慧聰明と爲す。我れ今寧ろ彼れに從つて出家學道すべきや」と。即ち僧伽藍の中に往き、遙に跋難陀釋子を見、此の念を生ず。「沙門釋子、少智識の者猶ほ智慧乃ち爾り、況んや多智識の者、豈多からざるを得んや」と。前んで跋難陀釋子の所に至り、白して言さく、『我れ出家學道せんと欲す』と。時に跋難陀即ち度して弟子と爲し、具足戒を授く。後異時に於て跋難陀に義を問ふ、而も答ふること能はず。時に彼の裸形復此の念を生ず。「沙門釋子愚闇にして知ると

ころなし、我れ今宜しく休道すべし」と。即ち袈裟を著けて外道の衆中に入る。時に諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、外道に衆僧中に〔六〕四月共住白二羯磨を與ふることを聽す』と。當さに是くの如く與ふることを作すべし。先づ剃髮し已りて袈裟を著け、革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作す。「『大德僧聽け、我れ某甲外道、歸依佛・歸依法・歸依僧す、我れ世尊の所に於て、出家を求めて道を爲す、世尊は卽ち是れ我が如來至眞等正覺なり』と。是くの如く第二、第三も說く。「我れ某甲外道佛法僧に歸依し已り、如來に隨つて出家學道す、如來は是れ我が至眞等正覺なり」と。是くの如く第二、第三も說かば、當さに受戒を敎ふべし。『盡形壽殺生せず。是れ沙彌の戒、乃至盡形壽金銀寶物を畜へず、是れ沙彌の戒なり、此れは是れ沙彌の十戒なり、盡形壽犯すことを得ず』と。彼の外道應さに先づ衆僧中に至り、偏へに右臂を露はし、革屣を脫し、僧足を禮し已りて右膝地に著け、合掌して是くの如く說くことを作さしむ。『大德僧聽け、我れ某甲外道、衆僧に從つて四月共住を乞ふ、願はくは僧慈愍の故に、我れに四月共住を與へよ』と。是くの如く第二第三も說き已りて、彼の外道を、眼見耳不聞處に安んじ、衆中應さに羯磨を作すに堪能なるものを差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。『大德僧聽け、彼れ某甲外道、今衆僧に從つて四月共住を乞ふ、若し僧時到らば、僧彼の某甲外道のために、四月共住を與ふることを忍聽せよ、白すること是くの如し』と。『大德僧聽け、彼の某甲外道、衆僧に從つて四月共住を乞ふ、僧今四月共住を與ふ、誰か諸の長老、僧彼れに四月共住を與ふるものは默然せよ、誰か忍せざるものは說け』と。僧已に忍す、彼の外道に四月共住を與へ竟る、僧默然たるが故に、是の事是くの如く持つ。彼の外道共住を行じ竟れば、諸の比丘をして心喜悅せしむ。然る後當さに衆僧中に於て具足戒・白四羯磨を受くべし。云何が外道、諸の比丘をして心喜悅せしむること能はざる。彼の外道の心、故ほ外道白衣の法を執持し、比丘に親まずして外道に親しみ、比丘に隨順する

【六】四月共住といふのは、外道より轉じて出家せんとするものには、其の志操の堅固にして、容易に他の外道に轉ずる等の、輕跳の進退出入を防過するために、四月間僧と共住せしめて、其の志を試すのである。『毘尼母經』等には、四月別住と言つて共住とは言はないが、眼見不聞處に安んじて、之を監視することは、つまり同一事であらう。

こと能はず、異論を誦習し、若し人の外道の不好の事を説くを聞けば、便ち瞋恚を起し、若し人の外道師の教を毀呰するを聞けば、亦瞋恚を起し、佛法僧の非法の事を説くを聞けば、便ち踊躍歡喜し、若し異外道の來るあれば、外道の好事を讃歎し、歡喜踊躍し、若し外道師の來るありて、外道の事を讃歎するを聞けば、亦歡喜踊躍し、若し佛法僧の非法の事を説くを聞けば、亦歡喜踊躍す。是れを外道諸の比丘をして喜悦せしむる能はずと謂ふ。云何が外道能く比丘をして喜悦せしむる。即ち上の句に反する是れなり。是れを外道共住して、心意を和調し、諸の比丘をして喜悦せしむるといふ。爾の時一の外道あり、衆僧四月共住を與ふ。共住を與ふる時に當り、正決定心を得たり。時に諸の比丘此の因縁を以て往いて佛に白す。佛言はく、『若し正決定心を得るものは、當さに白四羯磨してために具足を授くべし』と。時に裸形布薩此の語を聞き、便ち是の念を作さく、「沙門釋子智慧聰明なり、我れ今寧ろ彼れに還りて出家學道すべきか」と。即ち僧伽藍の中に至り、諸の比丘に語りて言はく、『我れ出家學道せんと欲す』と。時に諸の比丘、此の事を以て佛に白す。佛言はく、『此れ内外道を壞する者、我が法中に於て長益する所なし、若し具足戒を受けずんば、ために具足戒を授くべからず、已に受くれば、當さに滅擯すべし』と。

爾の時、世尊羅閲城に遊ぶ。時に摩竭王瓶沙、國に告げ語りて言はく、『沙門釋子の中に於て、能く出家學道せんと欲する者は、如來法中善く梵行を修し、諸の苦際を盡すことを聽す』と。時に一奴あり、僧伽藍の中に來詣し、諸の比丘に語りて言はく、『我れ出家して比丘と作らんと欲す』と。時に諸の比丘、即ち出家を與へて道を爲す。漸々に人間に乞食して、本主のために捉へらる。聲を擧げて喚んで言はく、『止みね、我れを捉ふること莫れ、止みね、我れを捉ふること莫れ』と。左右の諸居士問うて言はく、『何が故に喚ぶや』と。報へて言はく、『此の人我れを捉ふ』と。即ち彼の人に問うて言はく、『何が故に捉ふるや』と。報へて言く、『是れ我が家の奴なり』と。諸居士語りて言は

く、『汝放ち去れ、捉ふべからず、汝或は此の人を得る能はず。或は官の爲めに罰せられん。何を以ての故に知る、摩竭王瓶沙先きに敎令あり、「若し能く沙門釋種の中に於て出家學道するものあらば、如來法中に善く梵行を修し、苦際を盡すことを得るを聽す」と。留難あること莫れ』と。其の主卽ち放ち、大に喚んで瞋恚して言はく、『禍なる哉是れ我が奴なり、而も自由にするを得ず、如今之を觀るに、沙門釋子は、盡く是れ奴の聚なり』と。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、奴を度することを得ざれ、若し度する者は、當さに法の如くに治すべし』と。

爾の時、賊囚あり、獄を突いて逃走し、來りて園中に至り、諸の比丘に語りて言はく、『我れ出家學道せんと欲す』と。時に諸の比丘、輒ち度して出家せしめ、與へて具足を受けしむ。時に監獄官名簿を撿挍し、守獄の者に問うて言はく、『某甲賊囚は、今所在とせんや』と。守獄の者報へて言はく、『某甲賊囚は獄を突いて逃走し、沙門釋子に從つて出家す』と。時に監獄官皆嫌うて言はく、『沙門釋子は慚愧を知らず、外に自ら稱して言はく、「我れ正法を知る」と、是くの如きは、何くに正法かあらん、今此の沙門釋子を見るに、盡く是れ賊聚なり』と。爾の時諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、賊を度することを得ざれ、若し度する者は、當さに法の如く治すべし』と。

爾の時、負債の人あり、債主を逃避して、來りて園中に至り、諸の比丘に語りて言はく、『我れを度して出家し道を爲さしめよ』と。時に諸の比丘輒ち出家を與ふ。具足を受け已りて人間に乞食し、財主のために捉へらる。高聲に喚んで言はく、『止みね、我れを捉ふること莫れ、止みね、我れを捉ふること莫れ』と。左右の諸居士聞く、卽ち問うて言はく、『何が故に喚ぶや』と。報へて言はく、『此の人我れを捉ふ』と。其の人に問うて言はく、『汝何が故に捉ふるや』と。報へて言はく、『我が債物を負ふ』と。諸人語りて言はく、『汝放ち去れ、捉ふること莫れ、汝既に財を得ず、或は官のため

に罰せられん。何を以ての故に。摩竭國王瓶沙先きに教令あり、「若し能く出家學道するものあらば、善く梵行を修し、苦際を盡すことを得るを聽す」と。意に隨へ、留難あること莫れ』と。財主卽ち之を放ち、而も瞋恚を生じて言はく、『我が財物を負ひ、而も得ること能はず、此れを以て之を推ずに、沙門釋子は、盡く是れ負債人なり』と。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、負債人を度して出家せしむることを得ざれ、若し度する者は法の如く治す』と。

爾の時、佛羅閱城迦蘭陀竹園に遊びたまふ。時に十七群童子あり、共に親厚たり。最も大なるものは年十七、最も小なるものは年十二、最も富めるものは八十百千、最も貧しきものは八十千なり。中に一童子あり優波離と名づく。父母唯此の一子あり、之を愛して未だ曾て目前を離れず。父母念じて言はく、「我れ當さに此の兒を敎へて、何等の技術を學ばしむべき、我等の死して後、快より生活することを得て、乏短する所なけん」と。卽ち自ら念じて言はく、當さに先づ書を學ぶことを敎ふべし、我等死して後、快よく生活することを得て、乏短する所なく、身力をして疲苦せしめず」と。復是の念を作す、「兒を敎へて書を學ばしむれば、亦身力の疲苦あるのみ、更に何等の技術を學ぶことを敎へば、我等死して後快よく生活することを得て、乏短する所なく、身力疲苦せざる」と。念じて言はく、「今當さに此の兒を敎へて、算數の技術を學ばしむべし。我等死して後、快よく生活することを得て、乏短するところなく、身力疲苦せざらん」と。父母念じて言はく、「今兒童を敎へて算數を學ばしめんに、亦身力の疲苦あるのみ、今當さに更に此の兒を敎へて、何等の技術をか學ばしめば、我等死して後、快よく生活することを得て、乏短する所なく、身力疲苦せざる、今當さに此の兒に畫像の技術を學ぶことを敎ふべし。我等死して後、快よく生活することを得て乏短する所なけん」と。復念じて言はく、「今此の兒を敎へて、畫像の技術を學ばしめんに、恐らくは兒の眼力疲苦せん、當さに此の兒を敎へて、更に何等の技術をか學ばしむべき、我等死して後、快よく生

活することを得て、乏短するところなく、眼力疲苦せざる」と。即ち念じて言はく、一沙門釋子善く自ら身を養ひ、安樂にして衆の苦惱なし、若しは此の兒に、當さに沙門釋子の法の中に於て出家し、道を爲すことを敎ふべし、我等死して後、快よく生活することを得て、乏短する所なく、身疲苦せず」と。後異時に於て、十七群童子、優波離童子に語りて言はく、『汝我等に隨つて出家して道を爲すべし』と。答へて言はく、『我れ何ぞ出家を用ふることをせん、汝自ら出家せよ』と。十七群童子、第二第三に優波離に語りて言はく、『共に出家して道を爲すべし、何を以ての故に、我等今共に相娯樂す、彼れに於ても、當さに是くの如く嬉戲して、共に相娯樂すべし』と。時に優波離童子諸童子に語りて言はく、『汝等小しく待て、我れ父母に白すべし』と。優波離童子即ち父母の所に往いて白して言はく、『我れ今出家して道を爲さんと欲す、願はくは聽許せられんことを』と。父母報へて言はく、『我等唯汝一子のみあり、心甚だ愛念す、乃至死別せしめんことをすら欲せず、況んや生別すべけんや』と。優波離是くの如く再三父母に白して言はく、『願はくは我れに出家を聽したまへ』と。父母も亦是くの如く報へて言はく、『我等唯汝一子のみあり、心甚だ愛念す、乃至死別せしめんことをすら欲せず、況んや生別すべけんや』と。爾の時父母、優波離童子の再三慇懃なることを得て、是くの如きの念を作す、「我等先きに已に此の意あり、當さに此の兒を敎へて何の技術を學ばしむべき、我等死して後、兒をして快よく生活することを得、乏短するところなからしめ、身力をして疲苦せしめざる」と。即ち是の念を作さく、「若しは書乃至畫像を學ぶことを敎へ、我等死して後、快よく生活することを得て乏短する所なく、身力をして疲苦せしめず」と。而も兒の身力眼力を勞して以て疲苦を致さんことを恐れ、念じて言はく、「唯沙門釋子あり、善く自ら身を養ひて衆の苦惱なし、若此の兒をして中に在りて出家せしめんには、快よく生活することを得て、衆苦あることなけん」と。時に父母兒に報へて言はく、『今正さに是れ時なり、汝の出家を聽す』と。時に優波離還りて十

七群童子の所に至り、語りて言はく、『我が父母我れに出家を聽す、汝等去らんと欲すれば、今正さに是れ時なり』と。時に諸の童子、卽ち僧伽藍の中に往き、諸の比丘に白して言はく、『大德、我れ出家學道せんと欲す、願はくは諸大德、出家して道を爲すことを與へられよ』と。爾の時諸の比丘卽ち出家を與へ、具足戒を受けしむ。諸の童子小より來樂を習ひ、一食に堪へず、中夜に至りて飢を患へ、高聲に大に喚んで言はく、『我れに食を與へよ、我れに食を與へよ』と。諸の比丘語りて言はく、『汝小しく待て、須らく天明くべし、若し衆僧食あらば、當さに汝と共に食すべし、若し無ければ、當さに汝と共に乞食すべし。何を以ての故に、此の中先きに都べて作食處なし』と。爾の時世尊夜靜處に在して思惟したまひ、小兒の啼聲を聞き、知りて故らに阿難に問ひたまふ。『中夜何等の小兒の啼聲ぞ』と。阿難此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊阿難に告げたまはく、『年二十に滿たざるものには、具足戒を授くべからず、何を以ての故に、若し年二十に滿たざれば、寒熱・飢渇・風雨・蚊虻・毒虫に堪忍せず、及び惡言に忍びず、若し身に種々の苦痛あるも堪忍せず、又持戒及び一食に堪へず。若し度して出家せしめ、具足戒を受けしむる者は、當さに法の如く治すべし。年二十に滿ずる者は、上の如きの衆事に堪忍す』と。

爾の時摩竭國界に五種の病出づ。一には癩、二には癰、三には白癩、四には乾痟、五には顚狂なり。彼の國人此の病あるものは、皆耆婆童子の所に詣りて語りて言はく、『唯願はくは爲めに治せられよ、我等當さに如是如是の財物を與ふべし』と。耆婆童子報へて言はく、『我れ汝を治すること能はず』と。時に病者復語りて言はく、『唯願はくは救濟せよ、我等當さに家の一切の所有、身及び妻子を以て供給し、使令すべし』と。耆婆報へて言はく、『我れ汝の患を療治すること能はず』と。時に諸の病者自ら相謂つて言はく、『此の人の意は正なり、必ず我等のために病を治せず、我曹當さに往いて、彼の欲樂する所の治處に往くべし』と。時に諸の病者、僧伽藍の中に來至し、諸の比丘

に語りて言はく、『我れ出家學道せんと欲す』と。時に諸の比丘輒ち度して出家せしむ。時に、耆婆童子佛及び比丘僧を療治し、吐下藥を給與し、或は羹を與ふべきものには作りて與へ、與ふべからざる者には、ために作らず、或は野鳥の肉を與へて羹を作らしめ、病者の食する所に隨つて此れを蒙らしめ、轉た除差することを得たり。既に除差することを得已りて、皆還た休道す。時に耆婆童子、道に在りて行き、罷道の道人の道にありて來るを見、見已りて語りて言はく、『汝先きに出家せずや、』と。報へて言はく、『出家せり』と。問うて言はく、『汝何が故に休道する』と。報へて言はく、『我れ先きに病あり、汝の所に詣りて治を求めて言はく、「當さに汝に如是如是の財物を與ふべしと。」而かも汝我れに報へて言はく、「我れ治すること能はず」と。我れ復重ねて汝の治を求め、「當さに家の一切の所有と、及び身と妻子とを以て、供給使令すべし」と。而も汝猶ほ意は正にして、爲めに治せられず、我等自ら相謂つて言はく、「此の人意正なり、必ず我等がために病を治せず、我曹當さに更に往いて、彼の所樂の治處に至るべし、而も必ず我が爲めに治せん」と。我等此の病の爲めの故に僧伽藍の中に往き、權りに出家を求めて病を治す、本より佛法衆の所に信心なくして出家す』と。時に耆婆聞き已りて悅ばず、卽ち世尊の所に往き、頭面禮足して一面にありて坐し、世尊に白して言さく、『昔し我れ先きに衆僧の病を療治するが故に王事を捨つ、而も諸の比丘五種の病者、癩・癰・白癩・乾痟・顚狂を度す。唯願はくは世尊、愍まれて爲めに諸の比丘に勅したまひ、自今已去復此の五種の病者を度して道を爲さしむる勿れ』と。時に世尊默然として之を可したまふ。時に耆婆、世尊の默然として可したまふを知り已り、坐より起ちて足を禮し、遶ること三匝にして去る。爾の時、世尊此の因緣を以て比丘僧を集め、諸の比丘に告げたまはく、『汝等當さに知るべし、耆婆童子先きに衆僧の病苦を療治するが故に王事を捨つ。而も諸の比丘輒ち五種の病人を度す。自今已去、五種の病人を度して、具足戒を授くることを得ざれ、若し度する者は法の如く治すべし。

爾の時、佛羅閱城に在しき。城中に一比丘あり難提と字づく。常に坐禪を樂み、世俗の定心解脱を得たり。彼れ四禪より起つ。時に魔女來りて前に在りて立つ。彼の比丘捉へて犯さんと欲す、魔卽ち外に出づ、比丘亦隨つて外に出づ、彼の魔屋欄の外に出づ、比丘亦隨つて屋欄の外に出づ、彼れ中庭に出づ、比丘も亦中庭に至る、魔復出でゝ寺外に至る、比丘も亦寺外に至る、寺外に死騲馬あり、時に魔死馬の所に至りて卽ち滅して天身現ぜず。時に難提比丘卽ち此の死馬の所に於て不淨行を作す。不淨を行じ已りて都べて覆藏の心なし、便ち是の念を作さく、「世尊比丘のために戒を制したまふ、「若し比丘不淨行を作さば波羅夷不共住なり」と。我れ今不淨行を犯し、覆藏の心あることなし、將た波羅夷を犯さゞるや、我れ今如何がすべき」と。卽ち親友の比丘に語りて言はく、『世尊比丘のために結戒したまふ、「若し不淨行を犯すものは波羅夷不共住を得」と。今我れ婬不淨行を犯し、都べて覆藏の心なし、將た波羅夷を犯すことなからんや、善い哉長老我がために世尊に白せ、若し敎勅したまふあらば、我れ當さに奉行すべし』と。時に諸の比丘此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊此の因緣を以て比丘僧を集めて告げて言はく、『僧今難提比丘に、波羅夷戒白四羯磨を與へよ』と。是くの如きの與を作す。難提比丘をして僧中に到らしめ、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの白を作す。『大德僧聽け、我れ難提比丘不淨行を犯す、都べて覆藏の心なし、今僧に從つて波羅夷戒を乞ふ、願はくは僧我れに波羅夷を與へよ、慈愍の故に』と。是くの如く第二第三說く。衆中羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。『大德僧聽け、此の難提比丘不淨行を犯す、覆藏の心なし、今僧に從つて波羅夷戒を乞ふ、若し僧時到らば、僧今難提比丘に波羅夷戒を與ふることを忍聽せよ、白すること是くの如し』と。『大德僧聽け、此の難提比丘不淨行を犯す、覆藏の心なし、今僧に從つて波羅夷戒を乞ふ、僧今難提比丘に波羅夷戒を與ふ、誰か諸の長老、僧難提比丘に波羅夷戒を與ふることを忍する者は默然

【七】騲は、辭書によると、音は草で、總べて牝畜のことだとある。然らばこゝで騲馬は牝馬のことである。

せよ、誰か忍せざるものは說け』と。是れ初羯磨なり、第二第三も亦是くの如く說く。僧已に難提比丘に波羅夷戒を與ふることを忍し竟る。僧忍して默然するが故に是の事是くの如く持つ。波羅夷戒を與へ已りて、當さに事々に隨順して之を行ずべし。隨順の行法とは、人に具足戒を授くることを得ず、人の依止を與ふることを得ず、沙彌を畜ふることを得ず、差して比丘尼を敎誡するに受くることを得ず、設ひ差すとも往いて敎誡すべからず、僧の爲めに說戒すべからず、僧中に在りて毘尼を問答すべからず、僧の差使を受けて知事人と作るべからず、僧の差を受けて、別處に斷事すべからず、僧の差を受けて使命すべからず、早く聚落に入り、暮に還るべからず、比丘に親近すべし、外道白衣に親近すべからず、當さに比丘法に順從すべし、餘の世俗の語を說くことを得ざれ、衆中に律を誦することを得ざれ、若し能く誦するものなければ聽す、更に此の罪を犯すことを得ざれ、餘も亦應ぜず、若しは相似、若しは此れより生じ、若しは此れより惡しき者にして、非僧羯磨及び作羯磨を得ざる者なり。淸淨比丘の敷坐・洗足水・拭革屣・揩摩身、及び禮拜・迎通・問訊を受くることを得ざれ、淸淨比丘の捉れる衣鉢を受くべからず、淸淨比丘を擧して、作憶念、作自言治を爲すべからず。人事を證正すべからず、淸淨比丘の說戒、自恣を遮することを得ざれ、淸淨比丘と共に諍ふことを得ざれ、波羅夷比丘のために、僧戒及び羯磨を說く時は、來ると來らざると、衆僧は無犯なり。諸の比丘是の言を作す。『若、波羅夷戒を與ふる比丘、重ねて婬不淨行を犯さば、復更に波羅夷戒を與ふるを得るや不や』と。佛言はく、『爾るべからず、應さに滅擯すべし』と。

爾の時、佛釋翅搜迦維羅衞城尼拘律園に在しき。時に世尊時到りて衣を著け、鉢を持ちて迦維羅衞城に入りて乞食す。乞食已りて還つて城を出づ。時に於て羅睺羅の母、羅睺羅と高閣上に在りて、佛の來りたまふを見、羅睺羅に語りて言はく、『彼の來る者は、是れ汝の父なり』と。爾の時羅睺羅疾々に樓を下りて如來の所に至り、頭面禮足して一面に在りて立つ。時に世尊手を以て羅睺羅の頭

を摩でたまふ。羅睺羅自ら念ずらく、「生れてより已來、未だ曾て是くの如きの細滑柔軟の樂を得ず」と。佛問うて言はく、『汝能く出家學道するや不や』と。答へて言はく、『我れ能く出家す』と。爾の時、佛一指を舒べして羅睺羅に與へ、捉いて將さに僧伽藍の中に至らんとす。舍利弗に告げて言はく、『汝此の羅睺羅童子を度せよ、當さに是くの如く度すべし。剃髮を與へ、袈裟を著くることを教へ、偏へに右の肩を露はし、革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して當さに是くの如く說かしむべし。「我れ羅睺羅、歸依佛・歸依法・歸依比丘僧、我れ如來の所に於て出家學道す、如來は是れ我が至眞等正覺なり」と。是くの如し第二第三も說く。「我れ羅睺羅、佛法僧に歸依し竟る、如來の所に於て出家學道す、如來は卽ち是れ我が至眞等正覺なり」と。是くの如く第二第三も說く。當さに受戒の言を教ふべし。「盡形壽殺すことを得ず、是れを沙彌戒と謂ふ。乃至金銀寶物を捉らず、是れを沙彌戒と謂ふ。此れは是れ沙彌の十戒なり、盡形壽犯すことを得ず」と。』時に舍利弗答へて言さく、『是くの如く教を受く』と。羅睺羅童子を度し已りて、將ひて如來の所に至り、頭面禮足し已りて一面に在りて立つ。時に舍利弗世尊に白して言さく、『我れ已に羅睺羅を度し竟る、云何が沙彌の房舍臥具を與へん』と。佛言はく、『自今已去、大比丘より下次第に與へよ』と。時に小沙彌等大小便吐して織繩床座臥具を汚泥す。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、沙彌をして、此の織繩床上に坐せしむることを得ず、若し能く愛護して汚さゞれば、座臥することを聽す』と。舍利弗佛に白して言さく、『若し衆僧施物を得る時は、云何が沙彌の分を與へん』と。佛舍利佛に告げたまはく、『若し衆僧和合すれば、應さに等しく與ふべし、若し和合せざれば、當さに半ばを與ふべし、若し復和合せざれば、當さに三分して一分を與ふべし。若し爾らざれば、衆僧分つことを得ず、若し分たば、當さに法の如く治すべし』と。舍利弗佛に白して言さく、『小食大食は、云何が沙彌に與へん』と。佛言はく、『大僧に隨つて次第に與へよ』と。爾の時[八]輸頭檀那王、佛の羅睺羅を度し

【八】輸頭檀那(Śuddhodana)は、卽ち淨飯王のこと。

て出家せしむると聞き、悲泣して僧伽藍の中に來りて世尊の所に至り、到り已りて頭面禮足して一面に在りて坐す。一面に坐し已りて世尊に白して言さく、『世尊出家したまふも、我れに少望心ありき、而も「難陀童子當さに家業を爲すべし」と。而も世尊復度して出家せしむ。難陀既に出家し已りて、我れに復少望心ありき、「羅睺羅當さに家業を爲すべし、紹嗣絶えず」と。而も今世尊復度して出家せしめたまふ。父母は子に於て饒益する所多し。乳養贍視して其の成長に逮ぶは、世人の觀る所なり。而も諸の比丘、父母聽さゞるに輙く便ち之を度す。唯願はくは世尊、自今已去、諸の比丘に勅したまへ、父母聽さゞれば、度して出家せしむることを得ず」と』。爾の時、世尊默然として王の語を受けたまふ。王世尊の默然として語を受けたまふを見已りて、即ち坐より起ち、頭面に足を禮し、遶ること三匝にして去る。爾の時世尊此の因緣を以て比尼僧を集め、諸の比丘に告げたまはく、『父母は子に於て饒益するところ多し、養育乳哺して其の長大を冀ふは世人の觀る所なり、而も諸の比丘、父母聽さゞるに、輙く便ち之を度す。自今已去、父母聽さゞれば、度して出家せしむることを得ず、若し度すれば、法の如く治すべし』と。

爾の時佛、拘睒毘瞿師羅園中に遊びたまふ。時に巧師家の兒あり、來りて僧伽藍の中に至り、諸の比丘に出家して道を爲さんことを求む。諸の比丘輙ち出家を與へて度して道を爲さしむ。時に其の父母涕泣して僧伽藍の中に來り、諸の比丘に問ふ。『頗し是くの如きの小兒の來るを見るや不や』と。見ざる者報へて言はく、『見ず』と。卽ち諸の房中に於て求覓して得たり。時に諸の長者皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子慚愧を知らず、而も妄語を作し、外自ら稱して言はく、「我れ正法を修す」と、是くの如きは何の正法かある、今我が小兒を度し已りて、皆言ふ「見ず」と』。時に諸の比丘、此の因緣を以て往いて世尊に白す。世尊言はく、『汝等善く聽け、自今已去、僧伽藍の中に在りて剃髮せんと欲せば、當さに一切の僧に白すべし、若し和合することを得ざれば、房々に語りて

知らしめ、已りて剃髪を與へよ。僧若し和合せんには、當さに白を作すべし、白し已りて然る後に剃髪を與へよ、當さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、某甲の剃髪を求めんと欲す、若し僧時到らば、僧某甲に剃髪を與ふることを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。若し僧伽藍の中にて、度して出家せしめんと欲せば、當さに一切の僧に白すべし、白し已りて出家を與ふることを聽す。當さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲、某甲に從つて出家す、若し僧時到らば、僧某甲に出家を與ふることを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。是くの如きの白を作し已りて出家を與へ、敎へて袈裟を著けしめ、偏へに右の臂を露ぎ、革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの語を作さしむ。「我れ某甲、歸依佛・歸依法・歸依僧、如來に隨つて出家し、某甲を和尚と爲す、如來至眞等正覺は、是れ我が世尊なり」と。是くの如く第二第三も說く。「我れ某甲歸依佛法僧、如來に隨つて出家し竟る、某甲和尚と爲す、如來至眞等正覺は、是れ我が世尊なり」と。是くの如く第二第三も說く。當さに戒を受くべし、「盡形壽殺生せず、是れを沙彌戒と謂ふ、能くせば報へて「能くす」と言へ。盡形壽盜まず、是れを沙彌戒と謂ふ、能くせば報へて「能くす」と言へ。盡形壽婬せず、是れを沙彌戒と謂ふ、能くせば報へて「能くす」といへ、盡形壽妄語せず、是れを沙彌戒と謂ふ、能くせば報へて「能くす」と言へ、盡形壽飲酒せず、是れを沙彌戒と謂ふ、能くせば報へて「能くす」と言へ、盡形壽花鬘を著け、香を身に塗ることを得ず、是れを沙彌戒と謂ふ、能くせば報へて「能くす」と言へ、盡形壽歌舞倡伎し、及び往いて觀聽することを得ず、是れを沙彌戒と謂ふ、能くせば報へて「能くす」と言へ、盡形壽高廣大床の上に坐することを得ず、是れを沙彌戒と謂ふ、能くせば報へて「能くす」と言へ、盡形壽非時食することを得ず、是れを沙彌戒と謂ふ、能くせば報へて「能くす」と言へ、盡形壽生像金銀寶物を執持することを得ず、是れを沙彌戒と謂ふ、能く持たば報へて「能くす」と言へ、此れは是れ沙彌の十戒なり、盡形壽犯することを得

ず、能く持たば報へて「能くす」と言へ』と。時に小沙彌あり、衆僧近村の寺及び阿蘭若處に入りて住することを聽さず、沙彌遂に豹のために害せらる。諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『兩邊に小沙彌を遮することを得ざれ』と。彼の時或村邊の寺に阿蘭若處なし、沙彌を遮す。佛言はく、『爾るべからず』と。彼の阿蘭若處に村邊の寺なし、彼れ沙彌を遮す、佛言はく、『爾るべからず』と。彼れまた沙彌を遮して、多人處、溫室・食堂・經行堂に至ることを聽さず、沙彌止宿の處あることなし。佛言はく、『多人處、乃至經行堂處、若しは閣上の多人宿處、閣下の多人行處、閣下の多人宿處、閣上の多人行處に入るを遮すべからず、語りて『我が宿處に入る莫れ』と言ふを聽す。時に沙彌、和尚阿闍梨の爲めに作使せず、亦餘人の爲めに作使せず、而も彼れ遮して沙彌に僧中の利養物を與へず。佛言はく、『遮すべからず、此れは是れ施主の物なり』と。佛言はく、『自今已去、應さに沙彌に語りて言ふべし、「汝應さに如法に和尚阿闍梨及び衆僧に供給し、若し僧の作使の次至らば應さに作すべし。爾の時長老比丘あり、兒と將に出家し已り、將ひて村に入りて乞食す。若し諸市肆の前に到り、餅飯あるを見、手を舒べて言はく、『我れに餅を與へよ、我れに飯を與へよ』と。時に諸の長者見已りて、皆共に之を嫌ふ、『沙門釋子慚愧を知らず、梵行を犯す、外自ら稱して言はく、「我れ正法を知る」と。云何ぞ出家にして、故ほ兒を生んで將に自ら隨ふや。是くの如きは何の正法かある』と。時に諸の比丘、此の因緣を以て往いて世尊に白す。世尊言はく、『自今已去、年減十二の者を度することを得ず』と。

爾の時阿難、檀越家あり、死し盡して唯一小兒の在るあり、將ひて佛所に至り、頭面禮足して一面に在りて坐す。佛知りて故らに問ひたまふ、『此れは是れ何等の小兒ぞ』と。阿難此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊告げて言はく、『何が故に度して出家せしめざる』と。答へて言はく、「世尊先きに制あり、年減十二の者を得度せざれ」と。是を以て度せず』と。佛阿難に問ひたまふ、『此

の小兒能く烏を驅るや、能く戒を持つや、能く一食なるや不や、若し能く是くの如くならば、出家せしむることを聽す』と。阿難報へて言はく、『此の小兒能く烏を驅り、能く戒を持ち、能く一食す』と。佛阿難に告げたまはく、『若し此の小兒盡く能く爾らば、度して出家せしむることを聽す』と。

爾の時、跋難陀比丘に二沙彌あり、一を罽那と名づけ、二を摩伽と名づく。無慚無愧にして、更互に不淨行を犯す。時に諸の比丘佛に白す。爾の時跋難陀を呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『自今已去、二沙彌を畜ふべからず』と。爾の時一比丘の兒あり、來りて僧伽藍の中に至りて看る。時に比丘卽ち爲めに說法して言はく、『當さに知るべし、地獄の苦、畜生の苦、餓鬼の苦を。佛の出世は値ひ難きこと、優曇鉢花の、時に乃ち一たび出づるが如きのみ汝何ぞ出家して道を爲さゞるや』と。彼れ報へて言はく、『若し大德卽ち爲めに和尙とならば、我れ當さに出家すべし』と。而かも彼の比丘先きに沙彌あり、念じて言はく、「世尊戒を制したまふ、二沙彌を畜ふることを得ず」と。彼れ疑つて二沙彌を畜へず。時に諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『若し能く持戒・增心・增慧・學問・諷持を敎ふれば畜ふることを聽す』と。爾の時年二十に滿ぜざる者あり、具足を受け已りて後便ち疑を生ず。諸の比丘往いて佛に問ふ。佛言はく、『自今已去、若し具足を受け已りて是くの如きの疑あらば、胎月を數へ、若しは閏月を數へ、若しは十四日說戒日を數ふることを聽す。若し阿羅漢を得れば、卽ち名けて出家受具足と爲す。時に戒を受けんと欲するものあり、界外に至る。六群比丘往いて受戒を遮す。諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、自今已去、不同意の未だ界を出でざるに、界外に在らば、疾々に一處に集まりて小界を結せよ、白二羯磨を作し已りて戒を授けよ。衆中當さに羯磨を能くするに堪へたるものを差すこと上の如くし、是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、僧一處に集まりて小界を結す、若し僧時到らば、僧小界を結することを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、今此

の僧一處に集まつて小界を結す、誰か諸の長老、僧一處に集まつて小界を結することを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に小界を結することを忍し竟る、僧默然するが故に、是の事是くの如く持つ。若し不同意の者、界外に在りて遮するも遮を成ぜず』彼れ界を解かずして去る、餘の比丘疑つて佛に白す。佛言はく、『自今已去、應さに界を解いて去るべし、界を解かずして去るべからず、白二羯磨を作して解け。衆中當さに羯磨を能くするに堪へたるものを差すこと上の如くし、是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、今衆僧集まりて界を解く、若し僧時到らば、僧界を解くことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、今衆僧集まりて界を解く、誰か長老、僧集まりて界を解くことを忍するものは默然せよ、誰か忍せざる者は解け」と。僧已に界を解くことを忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是の事是くの如く持つ』と。

爾の時、和尙なくして具足戒を受く。佛言はく、『戒を受くることを得ず』と。『二和尙にして戒を受くることを得るや不や』と。佛言はく、『戒を受くることを得ず』と。『三和尙にして戒を受くることを得るや不や』と。佛言はく、『具足を受くることを得ず』と。『衆多和尙にして戒を受くることを得るや不や』と。佛言はく、『具足戒を受くることを得ず』と。爾の時和尙九歲にして受戒す、受具足戒と名づくることを得、而も衆僧罪あり。

爾の時佛、波羅㮈國に遊びたまふ。時に國土飢儉にして米穀勇貴し、乞求得難く人民飢色あり。時に佛及び衆僧多く供養を得たり。一年少の外道あり、佛衆僧の多く供養を得たるを見、見已りて便ち自ら剃髮し、袈裟を著けて出家受戒す。後僧供養斷ず。諸の比丘語つて言はく、『汝往いて村に入りて乞食せよ』と。問うて言はく、『衆僧食なきや』と。報へて言はく、『食なし』と。彼れ言はく、『我れ當さに云何がすべき』と。比丘報へて言はく、『汝當さに乞食すべし』と。彼れ言はく、『若し乞食せんには、此れも亦乞ひ彼れも亦乞ひ、我れ當さに彼の間に乞食すべし』と、其の人卽ち

休道す。爾の時諸の比丘此の因縁を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、先きに(九)四依を與ふることを聽す』と。爾の時復一年少の外道あり、僧伽藍の中に來詣し、諸の比丘に語りて言はく、『我れ出家せんと欲す』と。諸の比丘即ち出家を與ふ。先づ四依法を與ふ。彼の外道報へて言はく、『大徳、我れ二依を受くるに堪へたり、乞食依と樹下坐と、我れ此の二事に堪ゆ、納衣と腐爛藥とは、我れ此の二事に堪へず、何を以ての故に、誰か能く自ら已物に觸るゝ』と。即ち休道して出家せず。諸の比丘此の因縁を以て往いて佛に白す。佛言はく、『此の外道出家せずして大に所失あり、若し出家せんには、當さに道證を得べし』と。佛言はく、『自今已去、先づ戒を受け已りて、後に四依を受けよ』と。

爾の時、佛舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。(一〇)時に一勇健の大將あり、僧伽藍の中に來至し、諸の比丘に語りて言はく、『我れ出家して道を爲さんと欲す』と。時に諸の比丘即ち出家を與へ、具足戒を受けしむ。異時に於て波斯匿王の土界の人民反叛す。即ち軍を遣はして往いて伐たしむ、逆つて彼れの爲めに破らる、重ねて軍を遣はして往かしむるに、復彼れの爲めに破らる。王即ち問うて言はく、『我が健將某甲今所在とせんや』と。報へて言はく、『沙門釋子に從つて出家して道を爲す』と。時に王即ち譏嫌して言はく、『沙門釋子慚愧を知らず、多欲にして厭くなし、外自ら稱して言はく、「我れ正法を知る」と。云何ぞ我が勇健の大將を度し、出家して道を爲すや、是くの如きは何の正法かある、此れを以て之を推すに、沙門釋子は盡く是れ官人ならん』と。時に諸の比丘、此の因縁を以て具さに佛に白す。佛言はく、『自今已去、官人を度することを得ざれ、若し度するものは、當さに法の如く治すべし』と。爾の時、(一一)衣鉢なき者に出家を與へ、具足戒を受けしむ。諸の比丘語りて言はく、『汝村に入りて乞食せよ』と。彼れ言はく、『我れに衣鉢なし』と。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、衣鉢なき者は具足戒を受くることを得ず』と。時に他の

〔九〕四依といふのは、乞食と樹下坐と納衣と腐爛藥とである。

〔一〇〕受戒者の資格を定むるにつき、其の受戒を許されないものを數ふ、即ち所謂十遮と稱するものである。今は其の中の官人は受戒することを得ずといふもの、即ち十遮中の一に數へらるゝ官人である。

〔一一〕これも十遮の中の一つで衣鉢不具。

衣鉢を借りて具足戒を受くるものあり、受戒し已りて、其の主還取す、裸形にして蹲まりて羞慚す。時に諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、他の衣鉢を借りて具足戒を受くることを得ず。若し衣を與ふるは、當さに乞ひて與へしむべし、與へざるは、當さに價直を與ふべし』と。

爾の時、衆多の比丘、拘薩羅國より道路を行く。黑闇河の側に往く。其の中の一比丘言はく、『此の中に曾て白衣あり、袈裟を著くるものと共に婬を行ず』。衆人問うて言はく、『汝云何が知る』と。答へて言はく、『我れは卽ち彼れの一數なり』と。爾の時、諸の比丘、此の因緣を以て佛に白す。佛言はく、『若し〔二〕比丘尼を犯す者は、我が法律の中に於て長益するところなし、出家を與へて大戒を受けしむべからず、若し出家して大戒を受くれば、應さに滅擯すべし』と。

爾の時、佛波羅㮈國に在しき。時に國界米穀勇貴す、乞求得難し、人皆飢色あり。時に佛及び比丘僧多く供養を得たり。時に一年少の外道あり、佛と及び僧と多く供養を得たるを見、便ち此の念を生ず。「當さに何の方便を以て此の食を得て、しかも出家せざるべきや」と。彼れ卽ち自ら剃髮して袈裟を著け、手に鉢を執りて衆中に入りて食す。諸の比丘問うて言はく、『汝幾歲とか爲す』と。彼れ知らず。復問ふ、『汝何時か出家する』と。彼れ言はく、『知らず』と。『汝の和尙は誰ぞ、阿闍梨は誰ぞ』と。亦言はく、『知らず』と。復問うて言はく、『汝は是れ誰ぞや』と。答へて言はく、『我れは是れ某甲外道なり、佛及び僧の大に供養を得るを見、見已りて便ち此の念を生ず、「何の方便を以て此の食を得て、しかも出家せざる」と。是の故に我れ便ち自ら鬚髮を剃り、袈裟を著け、衆中に入りて食を求む』と。時に諸の比丘、此の因緣を以て具さに佛に白す。佛言はく、『自今已去〔三〕賊心入道するものは、我が法中に於て長益するところなし、出家受具足を與ふべからず、若し出家して具足戒を受くれば滅擯すべし』と。是の中賊心入道の者は、一比丘・二比丘・三比丘、衆僧の所に至

〔二〕總べて受具を聽されないものに十遮と十三難とある。今此の條は、十三難の中に數へらるゝ一つで、犯比丘尼である。

〔三〕十三難中の一つの賊心である。賊心といふのは、外道が、心に佛法を信ぜず、唯利養のために、佛教に入りて、比丘の形をなして居るものである。

り、共に羯磨して說戒す。或は一比丘・二比丘・三比丘、衆僧の所に至りて、共に羯磨して說戒せず、或は一比丘・二比丘・三比丘の所に至りて、衆僧の所に至らず、共に羯磨說戒せず、或は一比丘・二比丘の所に至りて、三比丘、衆僧の所に至らず、共に羯磨說戒せず、或は一比丘の所に至り、二比丘・三比丘、衆僧の所に至らず、共に羯磨說戒せず、是の中賊心入道の者、一比丘の所に至り、二比丘・三比丘、衆僧の所に至らず、共に羯磨說戒せず、是くの如き人の、若し未だ出家して具足戒を受けざれば、出家受具足戒を與ふべからず、若し已に出家受具足戒を與ふれば、即ち出家受具足戒と名づくることを聽す。是の中賊心入道の者、一比丘、二比丘の所に至り、三比丘若しは衆僧の所に至らず、共に羯磨說戒せず、若しは未だ出家して具足戒を受けざれば、出家受具足戒を與ふることを得ず。若し已に出家受具足戒を與ふれば、即ち名づけて出家受具足戒と爲すことを聽す。是の中賊心入道の者、一比丘・二比丘・三比丘の所に至り、衆僧の所に至らず、共に羯磨說戒せず、若しは未だ出家して具足戒を受けざれば、出家受具足戒を與ふることを得ず、若し已に出家受具足戒を與ふれば、即ち名づけて出家受具足戒と名づくることを聽す。是の中賊心入道の者、一比丘・二比丘・三比丘、若しは衆僧の所に至り、共に羯磨說戒せず、若しは未だ出家して具足戒を受けざれば、出家受具足戒を與ふることを得ず。若し已に出家受具足戒を與ふれば、即ち出家受具足戒と名づくることを聽す。是の中の賊心入道の者、一比丘・二比丘・三比丘、衆僧の所に至り、共に羯磨し、共に說戒せず、若し未だ出家して具足戒を受けざれば、出家受具足戒を與ふることを得ず。若し已に出家受具足戒を與ふれば、應さに滅擯すべし。是の中賊心入道の者、一比丘・二比丘・三比丘、衆僧の所に至り、羯磨說戒す、若し未だ出家し具足戒を受けざれば、出家受具足戒を與ふることを得ず。若し已に出家受具足戒を與ふれば、應さに滅擯すべし。」

四分律卷第三十四

卷の第三十五（二分の十四）

受戒揵度の五

爾の時、[一]黄門あり、僧伽藍の中に來至し、諸の比丘に語りて言はく、『我れ出家して具足戒を受けんと欲す』と。諸の比丘卽ち出家受具足戒を與ふ。具足戒を受け已りて諸の比丘に語りて言はく、『我れと共に如是如是の事を作し來れ』と。比丘答へて言はく、『汝滅し去れ、失し去れ、何ぞ汝を用ふることをせん』と。彼れまた守園人及び沙彌の所に至り、語りて言はく、『我れと共に如是如是の事を作し來れ』と。守園人と沙彌と語りて言はく、『汝滅し去れ、失し去れ、何ぞ汝を用ふることをせん』と。彼の黄門寺外に出で、放牛羊人と婬欲の事をなす。時に諸の居士見已りて譏嫌して言はく、『沙門釋子は幷びに是れ黄門、中に男子あれば、共に婬欲の事を作す』と。諸の比丘此の因緣を以て佛に白す。佛言はく、『黄門は我が法の中に於て長益する所なし、出家受具足戒を與ふることを得ず。若し已に出家して具足戒を受くれば、應さに滅擯すべし』と。是の中の黄門とは、生黄門・犍黄門・妬黄門・變黄門・半月黄門なり。生とは、生れて已來の黄門なり。犍とは、生れ已りて、都べて截り去りて黄門と作る。妬とは、他の婬を行ずるを見已りて婬心の起るあり。變とは、他と婬を行ずる時、男根を失ひて變じて黄門と爲る。半月とは、半月は能男にして、半月は不能男なり。爾の時佛波羅㮈國に遊びたまふ。善現龍王壽極めて長し、厭離心を生じて是の念を作さく、『今此の長壽龍の中に生る、何時か此の身を離るゝことを得ん』と。復是の念を生ず、『此の沙門釋子清淨行を修す、我れ今寧ろ彼れについて出家を求めて道を爲すべし、此の龍身を離るゝことを得べけん』と。卽ち身を變じて一年少外道の形を作し、往いて僧伽藍の中に至り、[二]諸の比丘に語りて言はく、『我れ出家して具足戒を受けんと欲す』と。時に諸の比丘其の本を觀ぜず、輒ち出家受具足

【一】十三難の一つ、黄門。

【二】十三難の一、畜生。

戒を與ふ。一比丘と同一房に住す。時に彼の比丘外に出でゝ小行す。善現龍王放身して睡眠す。諸龍の常法に二事ありて本形を離れず。若しは睡る時、若しは婬する時は本形を離れず。時に龍王の身房中に脹滿し、窓戸嚮孔の中より、身皆突出す。時に彼の比丘還り、手を以て戸を排す。手龍身に觸れ、内に異あるを覺り、卽ち高聲に唱へて言はく、『蛇、蛇』と。比房の比丘其の聲を聞き、便ち問うて言はく、『何が故に大に喚ぶ』と。卽ち此の事を以て具さに爲めに之を說く。時に彼の龍王も亦比丘の喚聲を聞き、卽ち還た覺めて、結跏趺坐し、直身正意にして繫念して前に在り。時に比丘卽ち入りて問うて言はく、『汝は是れ誰ぞ』と。答へて言はく、『我れは是れ善現龍王なり、我れ長壽龍中に生れ、此の身を厭離して此の念を作さく、「我れ何の時か、當さに此の龍身を離るゝことを得べき」と。復此の念を生ず「沙門釋子淸淨行を修す、我れ今寧ろ其れに從つて出家學道し、此の龍身を免るべし」と。』時に諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『畜生は、我が法中に於て長益するところなし、若し未だ出家せざれば、出家受具足戒を與ふることを得ず、若し已に出家受具足戒を與ふれば、當さに滅擯すべし』と。

爾の時に一年少の外道あり、故らに〔三〕母を殺し、既に殺し已りて常に愁憂を懷く。念じて言はく、『誰か能く我が爲めに此の憂苦を除くものぞ』と。卽ち復念じて言はく、「此の沙門釋子多く善法を修す、我れ今寧ろ其れに從つて出家し學道すべし、此の罪を滅することを得ん」と。卽ち僧伽藍の中に來詣し、諸の比丘に語る、『我れ出家學道せんと欲す』と。時に諸の比丘、見已りて復謂へらく、「是れ善現龍王なり」と。卽ち問うて言はく、『汝は是れ何等の人ぞ』と。答へて言はく、『我れは是れ某甲外道なり、我れ故らに母を殺し、殺し已りて常に愁憂を懷く、念じて言はく、「誰か能く我が爲めに、此の憂苦を除くものぞ」と。復是の念を作さく、「沙門釋子多く善法を修す、我れ今寧ろ其れに從つて出家學道すべし、此の罪を滅することを得ん」と。是の故に來りて出家を求む』と。時

【三】十三難中には、五逆罪を加ふ。卽ち殺父・殺母・殺阿羅漢・破和合僧・出佛身血である。今は其の中の殺母。

に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『母を殺す者は、我が法中に於て長益する所なし、若し未だ出家せざれば、出家受具足を與ふることを得ず、若し出家を與へて、具足戒を受くれば、當さに滅擯すべし』と。時に一外道あり、故らに[四]父を殺し、既に殺し已りて常に愁憂を懷く。念じて言はく、『誰か能く我が爲めに此の憂苦を除くものぞ』と。即ち念じて言はく、『沙門釋子多く善法を修す、我れ今寧ろ其れに從つて出家學道すべし、此の罪を滅することを得べけん』と。即ち僧伽藍の中に往き、諸の比丘に語りて言はく、『我れ出家して道を爲さんと欲す』と。諸の比丘見已りて、謂うて善現王と爲す。問うて言はく、『汝は是れ何等の人ぞ』と。答へて言はく、『我れは是れ某甲外道なり、故らに父を殺し、既に殺し已りて常に愁憂を懷く、念じて言はく、『誰か能く我が爲めに此の憂苦を除く』と。即ち復念じて言はく、『沙門釋子多く善法を修す、我れ今寧ろ其れに從つて出家學道すべし、此の罪を滅することを得べけん』と。是の故に來りて出家を求む』と。時に諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『父を殺す者は、我が法中に於て長益する所なし、若し未だ出家せざれば、出家受具足戒を與ふることを得ず、若し出家受具足戒を與ふれば、應さに滅擯すべし』と。時に衆多の比丘あり、拘薩羅國より道に在りて行く。阿蘭若處あるを見、自ら相指示して言はく、『此れは是れ某甲阿蘭若處なり、中に於て[五]阿羅漢を殺す』と。中に一人ありて言はく、『此れ實に阿羅漢なり、何を以ての故に、殺す時に當りて心に異あることなし』と。人ありて問うて言はく、『云何が知る』と。答へて言はく、『我れは是れ其人の一數なり』と。時に諸の比丘、此の事を以て具さに佛に白す。佛言はく、『阿羅漢を殺す人は、我が法中に於て長益する所なし、若し未だ出家せざれば、出家受具足戒を與ふることを得ず、若し出家受具足戒を與ふれば、應さに滅擯すべし』と。時に尊者優波離坐より起ち、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して佛に白し言さく、『[六]若し僧を破壞する者あらば、當さに云何がすべき』と。佛言はく、『提婆達多の如き、

【四】五逆罪の中の殺父。

【五】五逆罪の中、殺阿羅漢。

【六】五逆罪の中、破和合僧。

若し未だ出家し具足戒を受けざれば、出家受具足戒を與ふることを得ず、若し出家受具足戒を與ふれば、當さに滅擯すべし』と。又問ふ、『惡心出佛身血の者は、當さに云何がすべき』と。佛言はく、『提婆達多の如き、若し未だ出家し具足戒を受けざれば、出家受具足戒を與ふることを得ず、若し出家受具足戒を與ふれば、應さに滅擯すべし』と。爾の時一比丘あり、[八]變じて女形と爲る。諸の比丘念じて言はく、「應さに滅擯すべきや不や」と。佛言はく、「滅擯すべからず、卽ち先きに具足戒を受くるを以て、年歳の和尙阿闍梨、比丘尼衆中に送置することを聽す。爾の時一比丘尼あり、變じて男子形となる。諸の比丘尼念じて言はく、「應さに滅擯すべきや不や」と。佛言はく、『應さに滅擯すべからず、卽ち先きに戒を受くるを以て、年歳の和尙阿闍梨、當さに比丘衆中に安置すべし』と。爾の時一比丘あり、變じて男女二形となる。諸の比丘念じて言はく「應さに滅擯すべきや不や」と。佛言はく、『應さに、滅擯すべし』と。爾の時一比丘尼あり、變じて男女二形となる。諸の比丘尼念じて言はく、「應さに滅擯すべきや不や」と。佛言はく『應さに滅擯すべし』と。爾の時比丘あり、賊に其の男根幷びに卵を截らる。諸の比丘念じて言はく、「應さに滅擯すべきや不や」と。佛言はく、『滅擯すべからず』と。爾の時比丘あり、怨家の爲めに其の男根及び[九]卵を截らる。諸の比丘念じて言はく、「應さに滅擯すべきや不や」と。佛言はく、『應さに滅擯すべからず』と。爾の時比丘あり、惡獸の爲めに、男根及び卵を嚙まる。諸の比丘念じて言はく、「應さに滅擯すべきや不や」と。佛言はく、『應さに滅擯すべからず』と。爾の時比丘あり、業報の因緣にて男根自ら落つ、諸比丘念じて言はく、「應さに滅擯すべきや不や」と。佛言はく、『應さに滅擯すべからず』と。爾の時比丘あり、自ら其の男根を截る。諸の比丘念じて言はく、「應さに滅擯すべきや不や」と。佛言はく、『應さに滅擯すべし』と。

爾の時、具足を受けんと欲するものあり、將さに界外に出でんとす。諸の比丘問ふ、『汝は是れ誰

【七】五逆罪の中、出佛身血。

【八】十三難の一つ、二形。

【九】截卵、是れは十三難十遮中には數へられてない。卵は睾丸のこと。

ぞ』と。[一〇]自ら字を稱せず。復問うて言はく、『汝の和尙は是れ誰ぞ』と。復和尙の名を稱せず、戒を乞ふことを敎へて乞はず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、三種の人あり、名けて具足戒を受くることを得ずと爲す。自ら字を稱せざると、肯て和尙の名を稱せざると、戒を乞ふことを敎ふるに而も乞はざると、是れを三種の人、具足戒を受くることを得ずと爲す。爾の時[一一]白衣の衣服を著けて具足戒を受くるあり、具足戒を受け已りて、卽ち著けて村中に入りて乞食す。諸の居士見て問うて言はく、『汝は是れ誰ぞ』と。答へて言はく、『我れは是れ沙門釋子なり』と。居士言はく、『沙門釋子は是くの如くならず』と。佛言はく、『白衣の衣服を著けて、具足戒を受くることを得ず』と。爾の時復[一二]外道の衣服を著けて具足戒を受くるなり、具足戒を受け已りて村に入りて乞食す。諸の居士見て問うて言はく、『汝は是れ何等の人ぞ』と。答へて言はく、『我れは是れ沙門釋子なり』と。居士言はく、『沙門釋子は是くの如くならず』と。佛言はく、『外道の衣服を著くる者には、受具足戒を與ふべからず』と。爾の時衆の[一三]莊嚴身具を著くるものあり、具足戒を受く。具足戒を受け已りて村に入りて乞食す。諸の居士見て問うて言はく、『汝は是れ何等の人ぞ』と。答へて言はく、『我れは是れ沙門釋子なり』と。居士言はく、『沙門釋子は是くの如くならず』と。佛言はく『衆の莊嚴身具を著くる者は、受具足戒を與ふることを得ず』と。三種の人あり、名けて受具足戒を爲さず、俗服と外道服と衆莊嚴身具とを著くる、是れを三種の人、受具足戒を成ぜずといふ。

爾の時、[一四]眠人に受具足戒を與ふるあり。覺め已りて家に還る。諸の比丘言はく、『止まれ、家に還ること莫れ、汝已に具足戒を受く』と。彼れ答へて言はく、『我れ具足戒を受けず』と。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『眠者に具足戒を授くることを得ず』と。爾の時、[一五]醉者に受具足戒を與ふるあり、酒解け已りて卽ち家に還る。諸の比丘言はく、『汝已に具足戒を受く、止まれ家に還ること莫れ』と。答へて言はく、『我れ具足戒を受けず』と。佛言はく、『醉者に具足戒を授くることを得

【一〇】十遮の中に數へらるゝ不自稱名字、不稱和尙名のこと、こゝには不乞を擧げて居る。不乞は、自ら受戒を乞はないのであるから、之を授くることは不可能なので、前の二とは、自ら別である。

【一一】著白衣受具。

【一二】著外道衣受具。

【一三】著莊嚴身具受具。

【一四】受戒の意志なきものに、授戒するを禁ず。眠人授戒。

【一五】醉者授戒。

ず』と。爾の時、[一六]狂者に授具足戒を與ふるあり、狂者心を得已りて便ち家に還る。諸の比丘言はく、『汝止まれ、去ること莫れ、汝已に具足戒を受く』と。答へて言はく、『我れ具足戒を受けず』と。佛言はく、『狂者に受具足戒を與ふるを得ず』と。三種の人あり、具足戒を受くることを得ず、眠と醉と狂と、是れを三種の受具足戒を得ざるものといふ。

爾の時、[一七]裸形人あり具足戒を受く。後に衣服を得已りて家に還る。諸の比丘言はく、『汝已に具足戒を受く、止まれ家に還ること莫れ』と。答へて言はく、『我れ具足戒を受けず』と。佛言はく、『裸形人に受具足戒を與ふることを得ず』と。爾の時、[一八]瞋恚の人に受具足戒を與ふ。後に瞋恚止みて家に還る。諸の比丘語りて言はく、『汝已に具足戒を受く、家に還ること莫れ』と。答へて言はく、『我れ具足戒を受けず』と。佛言はく、『瞋恚の人に受具足戒を與ふることを得ず』と。爾の時[一九]強えて人に具足戒を授くるあり。後に便ち逃走して家に還る。諸の比丘言はく、『汝已に具足戒を受く、止まれ、家に還ること莫れ』と。答へて言はく、『我れ具足戒を受けず』と。佛言はく、『強えて人に具足戒を授くることを得ず』と。三種の人あり、具足戒を受くるに非ず。裸形と瞋恚と強與受具足戒とは、是れを三種の人、具足戒を受くるに非ずといふ。是くの如く、[二〇]手を截り、脚を截り、手脚を截り、或は耳を截り、或は鼻を截り、或は耳鼻を截り、或は男根を截り、或は卵を截り、或は男根と卵とを截り、或は臂を截り、或は肘を截り、或は指を截り、或は常に疥瘡を患ひ、或は死相現ず、或は身に[二一]瘻あり、或は身女身の如し、或は名籍あり、或は官の租賦を避け、或は癰瘡あり、或は身に[二二]駮あり、或は尖頭、或は左臂壞す、或は右臂壞す、或は[二三]擧齒、或は虫身、或は虫頭、或は頭髮[二四]痲瘓、或は曲指、或は六指、或は[二五]縵指、或は一卵あり、或は無卵、或は[二六]瘄、或は身內曲し、或は身外曲し、或は內外に曲る、或は上氣の病あり、或は[二七]瘊病、或は吐沫病あり、或は病み、或は諸の苦惱あり、或は男根の病、或は靑眼、或は黃眼、或は赤眼、或は爛眼、或は有紅眼、或は

【一六】狂人授戒。
【一七】衣服を得るために裸形人受具。
【一八】瞋恚人受具。
【一九】強與具足。
【二〇】以下受具を聽されざる人を擧ぐ。
【二一】瘻はコブ。
【二二】駮は、駁に同じ、ブチのこと。
【二三】擧齒は、ソッ齒、齒の前に出て居ること。
【二四】痲瘓は、辭書には、病貌とあるのみである。
【二五】縵指は、指と指の間の切れてないこと。
【二六】瘄は、陰病とある。
【二七】瘊は、疣にて、イボの小なる者。

黃赤色眼、或は青翳眼、或は黃翳眼、或は白翳眼、或は水精眼、或は極深眼、或は三角眼、或は彌離眼、或は大張眼、或は凸眼、或は一眼、或は睞眼、或は盲眼、或は尖出眼、或は斜眼、或は瞋怒眼、或は瞯眼、或は眼口瘡患あり、或は身口班あり、或は身に疥瘙あり、或は身に侵婬瘡あり、或は瘂、或は聾、或は瘂聾、或は捲足指、或は跛、或は曳脚、或は一手一脚一耳、或は無手無脚無耳、或は無髮無毛、或は無齒、或は青髮、黃髮、白髮、大長、大短、或は婦女蹲、天子、阿修羅子、犍闥婆子、或は象頭あり、或は馬頭あり、或は駱駝頭あり、或は牛頭あり、或は驢頭あり、或は猪頭あり、或は羖羊頭あり、或は白羊頭あり、或は鹿頭あり、或は蛇頭あり、或は魚頭あり、或は鳥頭あり、或は二頭あり、或は三頭あり、或は多頭あり、一切青、一切黃、一切黑、一切赤、一切白、一切獼猴色なるあり、或は風病あり、或は熱病あり、或は痰癊病あり、或は癖病あり、或は喉戾あり、或は兎缺あり、或は無舌、或は截舌、或は好惡を知らず、或は身前凸し、或は後凸し、或は前後凸し、或は蟲病あり、或は水病あり、或は內病、或は外病、或は內外病、或は癖病、常臥不轉病あり、或は常老極あり、或は乾痟病あり、或は威儀を失つて行くあり、下極は一切衆僧を汚辱す、此くの如き人は、度して具足戒を受くることを得ず。

爾の時、神足あり、虛空中に在つて具足戒を受く。佛言はく、『具足戒を受くると名けず』と。和尙虛空中に在り、下人に受具足戒を與ふ。佛言はく、『具足戒を受くると名けず』と。神足の虛空中に在り、足數具足戒を受く。佛言はく、『具足戒を受くると名けず』と。爾の時隱沒不現の者ありて具足戒を受く、佛言はく、『具足戒を受くると名けず』と。和尙隱沒して具足戒を受く。佛言はく、『具足戒を受くると名づけず』と。足數の比丘隱沒して具足戒を受く。佛言はく、『具足戒を受くると名けず』と。爾の時見聞處を離れて具足戒を受く。佛言はく、『具足戒を受くると名けず』と。和尙見聞處を離れて具足戒を受く。佛言はく、『具足戒を受くると名けず』と。足數の人見聞處を離れ

て具足戒を受く。佛言はく、『具足戒を受くると名けず』と。爾の時界外に在りて具足戒を受く。佛言はく、『具足戒を受くると名づけず』と。和尚界外に在りて具足戒を受く。佛言はく、『具足戒を受くると名けず』と。足數の人界外に在りて具足戒を受く。佛言はく、『具足戒を受くると名けず』と。沙彌戒を與へずして、便ち具足戒を受くるなり。佛言はく、『具足戒を受くることを得』と。衆僧犯すあり、世尊是くの如きの教あり、「一切衆僧を汚辱する者は具足戒を受くることを得ず」と。時に戒を受けんと欲する者あり、彼れ將ひて界外に至り、衣を脱して看る。受戒の者慚耻し、受戒の事を稽留す。爾の時諸の比丘、此の事を以て往いて、世尊に白す。世尊言はく、『是くの如く露形にして看て、授戒を爲すことを得ず。自今已去、十三難事を問ふことを聽す、然る後に具足戒を授けよ。白四羯磨して、當さに是くの如きの問ひを作すべし。「汝 邊罪を犯さゞるや、汝賊心入道に非るや、汝壞二道に非るや、汝黃門に非ざるや、汝殺父殺母に非るや、汝殺阿羅漢に非るや、汝破僧に非るや、汝惡心出佛身血に非るや、汝は是れ非人に非るや、汝は畜生に非るや、汝は有二形に非るや」と。』佛言はく、『自今已去、先づ十三難事を問ひ、然る後に具足戒を授くることを聽す。當さに白四羯磨を作して、是くの如く具足戒を授くべし』と。爾の時立ちて具足を受けんと欲する者は、眼見耳不聞處に置け。時に戒師當さに白羯磨を作して言ふべし。『大德僧聽け、彼れ某甲、某甲に從つて具足戒を受けんことを求む。若し僧時到らば、僧某甲を教授師と爲すことを忍聽せよ、白すること是くの如し』と。時に教授師當さに彼れに往いて語りて言ふべし。『此の安陀會・欝多羅僧・僧伽梨・鉢、此の衣鉢は是れ汝の有なりや不や』と。彼れ答へて言はく『是なり』と。應さに語りて言ふべし、『善男子諦かに聽け、今は是れ至誠の時なり、我れ今當さに問ふべし、汝我が問ひに隨つて答へよ、若し實ならざれば、當さに實ならずと言ふべし。若し實ならば、當さに實なりと言ふべし。汝の字は何等ぞ、和尚の字は誰ぞ、年二十に滿つるや不や、衣鉢具足するや不や、父母汝に聽すや不

【三八】 邊罪・賊心・壞二道・黃門・殺父・殺母・殺阿羅漢・破僧・出佛身血・非人・畜生・二形を十三難事とする。前に其の内の二三を出した。

や、汝は負債人に非ざるや不や、汝は奴に非るや不や、汝は官人に非るや不や、汝は是れ丈夫なりや不や、丈夫に是くの如きの病あり、癩癰疽白癩乾痟癲狂病なり、汝今此の諸病ありや不や。若し無ければ、答へて「無し」と言ひ、應さに語りて言ふべし。我れ今汝に問ふが如く、僧中にも亦是くの如く問ふべし。汝向きに我れに答ふるが如く、衆僧中にも亦當さに是くの如く答ふべし』と。敎授師是くの如し問ひ已りて、還りて衆僧中に來り、常の威儀の如く、相去ること舒手及處に立ち、當さに是くの如く白すべし。『大德僧聽け、彼の某甲、某甲に隨つて具足戒を受けんことを求む、若し僧時到らば、我れ已に問ひ竟り、將ひ來ることを聽すことを忍聽せよ、白すること是くの如し』と。彼れ喚んで言はく、『汝來れ』と。彼れ來り已らば、當さに爲めに衣鉢を捉り、僧足を禮することを敎ふべし。已つて戒師の前に在りて、右膝地に著け、合掌することを敎へよ。當さに敎へて是くの如きの語を作すべし。『大德僧聽け、我れ某甲、某甲に從つて具足戒を受けんことを求む、我れ某甲、今衆僧に從つて具足戒を受けんことを乞ふ、某甲を和尙と爲す、願はくは僧慈愍の故に我れを拔濟せよ』と。第二第三も亦是くの如く說く。時に戒師當さに白羯磨を作すべし、是くの如く白せよ。『大德僧聽け、此の某甲、某甲に從つて具足戒を受けんことを求む、此の某甲今衆僧に從つて具足戒を受けんことを乞ふ、某甲を和尙と爲す、若し僧時到らば、僧我が諸の難事を問ふことを忍聽せよ、白すること是くの如し』と。『善男子聽け、今は是れ至誠の時、實語の時なり、我れ今汝に問ふ、汝當さに誠實に我れに答ふべし。汝の字は何等ぞ、和尙の字は誰ぞ、汝年二十に滿つるや、未だしや、三衣鉢具するや不や、父母汝に聽すや不や、汝負債せざるや不や、汝奴に非るや不や、汝、官人に非るや不や、汝は是れ丈夫なりや不や、丈夫に是くの如きの病あり、癩癰疽白癩乾痟癲狂病なり、汝今是くの如きの病ありや無しや』と。若し『無し』と言はゞ、當さに白四羯磨を作すべし。應さに是くの如く白すべし。『大德僧聽け、此の某甲、某甲に從つて具足戒を受けんことを求

む、此の某甲今僧に從つて具足戒を受けんことを乞ふ、某甲を和尚と爲す、某甲自ら淸淨にして諸の難事なしと說く、年二十に滿ち、衣鉢具す、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今某甲に具足戒を授け、某甲を和尚と爲すことを、白すること是くの如し』と。『大德僧聽け、此の某甲、某甲に從つて具足戒を受けんことを求む、此の某甲今僧に從つて具足戒を受けんことを乞ふ、某甲を和尚と爲す、某甲自ら淸淨にして諸の難事なしと說く、年二十に滿ち、衣鉢具す、僧今某甲に具足戒を授け、某甲を和尚と爲す、誰か長老、僧某甲のために具足戒を授け、某甲を和尚と爲すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざるものは說け』と。此れは是れ初羯磨なり、第二第三も亦是くの如く說く。僧已に某甲のために具足戒を受けしめ、某甲を和尚と爲すことを忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是の事是くの如く持つ。時に比丘あり、具足戒を受け已りて、衆僧盡く捨て去る。時に具足戒を受くる人の本二、彼れを去ることを遠からず。卽ち前んで問うて言はく『汝向きに何の爲す所ぞ』と。答へて言はく『我れ具足戒を受く』と。本二語りて言はく『汝今共に如是如是の事を作すべし、最後に如是如是の事を作すと謂ふべし』と。時に具足を受くる者、卽ち共に不淨を行じ已り、後還りて衆中に詣る。諸の比丘問ふ『汝何が故に後に在る』と。彼れ卽ち此の因緣を以て、具さに諸の比丘に向つて說く。諸の比丘語りて言はく、『汝速に滅し去れ失し去れ、何ぞ汝を用ふることをせんや、應さに此に住すべからず』と。其の人言はく『我が作す所の事、爾るべからざるや』と。諸の比丘報へて言はく、『爾るべからず』と。其の人語りて言はく『汝何ぞ先きに我れに語らざる、我れ當さに之を避けて作さゞるべし』と。爾の時諸の比丘、此の事を以て往いて世尊に白す。世尊言はく『自今已去、羯磨を作し已らば、當さに先づ四波羅夷法を說くべし』と。善男子聽け、如來至眞等正覺は四波羅夷法を說きたまふ、若し比丘一々の法を犯さば、沙門に非ず釋種子に非ず、汝一切婬を犯し、不淨行を作すことを得ざれ、若し比丘不淨行を犯し、婬欲の法を受けて乃ち畜生に至る

は、沙門に非ず釋種子に非ず、爾の時世尊、ために譬喩を說きたまふ。『猶ほ人ありて、其の頭を截るが如し、還た活くること能はず、比丘も亦是くの如し、波羅夷法を犯し已れば、還た比丘行を成ずること能はず』と。汝是の中盡形壽作すことを得ざれ、能く持つや不や。答へて『能くす』と言へ。一切盜むことを得ざれ、下草葉に至る、若し比丘、人の五錢若しは過五錢を盜み、若しは自ら取り、人をして取らしむ、若しは自ら破り、人をして破らしむ、若しは自ら斫り、人をして斫らしむ、若しは燒き、若しは埋め、若しは色を壞する者は、彼れ沙門に非ず釋種子に非ず、譬へば多羅樹の心を斷ずれば、終に復更に生長せざるが如し、比丘波羅夷を犯すも亦是くの如し、終に還た比丘行を成ぜず、汝是の中盡形壽作すことを得ざれ、能く持つや不や、答へて『能くす』と言へ。一切衆生の命を斷ずることを得ざれ、下蟻子に至る。若し比丘故らに自手にて人の命を斷じ、刀を求めて人に授與し、死を教へ、死を歎じ、死を勸め、人に非藥を與へ、若しは墮胎し、若しは厭禱して殺し、自ら方便を作し、人をして作さしむるは、沙門に非ず、釋種子に非ず、譬喩とは說いて言はく、譬へば鍼鼻の決して、復用ふるに堪へざるが如し。比丘も亦是くの如し、比丘波羅夷法を犯せば、復比丘行を成ぜず、汝是の中盡形壽作すことを得ざれ、能く持つや不や』と。答へて、『能くす』と言へ、一切妄語することを得ざれ、乃至戲笑なり。若し比丘、眞實に非ず已有に非るに、自ら說いて言はく、「我れ上人法を得たり、禪を得たり、解脫を得たり、定を得たり、四空定を得たり、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得たり、天來り、龍來り、鬼神來る」と。彼れ沙門に非ず釋種子に非ず、譬喩とは說く、譬へば大石の破れて二分と爲るが如し、終に還た合すべからざるが如し。比丘も亦是くの如し、波羅夷法を犯せば、還た比丘行を成ずべからず。汝是の中盡形壽作すことを得ざれ、能く持つや不や。能くせば『能くす』と言へ。善男子聽け、如來至眞等正覺は四依法を說きたまふ、比丘此れに依りて、出家して具足戒を受け、比丘法を成ずることを得。比丘糞掃衣に依る、此

れに依りて出家して具足戒を受け、比丘法を成ずることを得、是の中盡形壽能く持つや不や。答へて『能くす』と言へ。若し長利を得ば、檀越施衣、割壞衣受くることを得。比丘乞食に依る、比丘是れに依りて、出家して具足を受け、比丘法を成ずることを得。是の中盡形壽能く持つことを得るや不や、答へて『能くす』と言へ。若し長利を得れば、若しは僧差食、檀越送食、月八日食、十五日食、月初日食、若しは僧の常食、檀越の請食受くることを得。樹下に依りて坐す。比丘此れに依りて出家して具足を受け、比丘法を成ずることを得、是の中盡形壽能く持つや不や、答へて『能くす』と言へ。若し長利を得ば、若しは別房の尖頭屋、小房の石室、兩房一戸受くることを得。腐爛藥に依る。比丘此れに依りて具足を受け、比丘法を成ずることを得。是の中盡形壽能く持つや不や、答へて『能くす』と言へ。若し長利を得ば、酥油生酥蜜石蜜受くることを得。汝戒を受け已りて、白四羯磨如法に成就して處所を得たり、和尙如法、阿闍梨如法、衆僧具足して滿ず、汝當さに能く敎法を受くべし。應さに勸化して福を作し、塔を治め、佛法衆僧和尙阿闍梨を供養すべし、一切法敎の如く、違逆することを得ざれ。應さに學問誦經し、勤めて方便を求め、佛法の中に於て、須陀洹果・斯陀含果・阿那含果・阿羅漢果を得べし。汝始めて發心し出家す、功唐捐ならず、果報絶えず、餘の未だ知らざるところは、當さに和尙阿闍梨に問ふべし。自今已去、具足を受くる者は、前に在りて去らしめよ。

爾の時、比丘あり、衆中に擧せられ已りて卽ち休道す。後僧伽藍に來至して諸の比丘に語りて言はく、『我れ還た出家せんと欲す』と。時に諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく、『當さに彼の人に問ふべし、「汝自ら罪を見るや不や」と。若し報へて、「我れ罪を見ず」と言はゞ、出家を與ふべからず、若し「我れ罪を見る」と言はゞ出家を與へよ。出家を與へ已りて、復當さに問うて言ふべし、「汝罪を見るや不や」と。若し「罪を見ず」と言はゞ、受具足戒を與ふべからず。

若し罪を見ると言はゞ、應さに受具足戒を與ふべし。受具足戒を與へ已りて、當さに語りて言ふべし。「汝能く懺悔するや不や」と。若し「懺悔すること能はず」と言はゞ、解羯磨を與ふることを得ず、若し能く懺悔すと言はゞ、當さに解羯磨を與ふべし。解羯磨を與へ已りて、當さに語りて言ふべし、汝罪を懺悔せよ」と。若し懺悔すれば善し、せざれば若し僧和合することを得んには、更にために擧を作せ、若し僧和合せざれば、ために共に住止するも無犯なり』と。

爾の時、舍利弗座より起ちて、偏袒右肩にして右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『年二[二九]十に滿ぜずして具足戒を受けんに、當さに是れ受具足人と言ふべきや不や』と。佛言はく、『是れ受具足人なり』と。復問ふ、『具足を授くる所の人、是れ善授なりや不や』と。佛言はく、『是れ善授なり』と。『羯磨を作す者は、是れ善作羯磨なりや不や』と。佛言は、『善作羯磨なり。制してより已後、是くの如くにして具足戒を受くるは、善受具足戒と名づけず』と。復問ふ、『三語受具足戒は、是れ受具足戒なりや不や』と。佛言はく、『是れ受具足戒なり』と。『具足戒を授くるところの者は、是れ善授なりや不や』と。佛言はく、『是れ善授なり』と。『作羯磨は、是れ善作羯磨なりや不や』と。佛言はく、『是れ善作羯磨なり』と。制してより已後は、是くの如くにして具足戒を受くる者は、受具足戒と名けず』と。又問ふ、『十三難事を問はずして具足戒を受くるは、當さに是れ受具足戒と言ふべきや不や』と。佛言はく、『是れ善受具足戒なり』と。問うて言はく、『具足を授くるところの者は、善授具足戒と爲すべきや不や』と。佛言はく、『是れ善授具足戒なり』と。問うて言はく、『作羯磨は、是れ善作羯磨なりや不や』と。佛言はく、『善作羯磨なり、制してより後は、是くの如きの受具足は、受具足戒と名づけず』と。爾の時阿難卽ち座より起ちて偏露右肩して右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『若し、和尚、十三難事中、一々の事あり、弟子に具足戒を授けんに、當さに善受具足と言ふべきや不や』と。佛言はく、『善受具足なり』と。問うて言はく、『具足を授くると

〔二九〕年不滿二十受具は、十遮の一つ。

ころの人は、名けて善授具足戒と爲さんや不や』と。佛言はく、『是れ善授なり』と『羯磨を作さんに善作羯磨なりや不や』と。佛言はく、『是れ善作羯磨なり、制してより後は、若し是くの如くにして、人に具足戒を授けんには、衆僧罪あり。』

爾の時、不持戒和尚に從つて具足戒を受くるものあり、後に疑ひあり。佛問うて言はく、『汝和尚持戒せざるを知るや不や』と。答へて言はく、『知らず』と。佛言はく、『受具足戒を名づくることを得』と。復不持戒和尚に從つて具足戒を受くるあり、後に疑あり。佛問うて言はく、『汝和尚の不持戒を知るや不や』と。報へて言はく、『知る』と。『汝此くの如き人に從つて具足戒を受くべからさることを知るや不や』と。報へて言はく、『知らず』と。佛言はく、『此れ受具足戒を得たり』と。爾の時復不持戒和尚に從つて、具足戒を受くるあり、後に疑あり。佛問うて言はく、『汝和尚の不持戒を知るや不や』と。答へて言はく、『知る』と。『汝此くの如きの人に、從つて具足戒を受くべからざることを知るや不や』と。答へて言はく、『知る』と。佛言はく、『汝此くの如きの人に從つて具足戒を受け、具足戒を得ざることを知るや不や』と。報へて言はく、『知らず』と。佛言はく、『受具足戒と名づくることを得』と。爾の時不持戒和尚に從つて具足戒を受くるものあり、後に疑あり。佛問うて言はく、『汝和尚の不持戒を知るや不や』と。答へて言はく、『知る』と。佛言はく、『汝此くの如きの人に、從つて具足戒を受くべからざることを知るや不や』と。答へて言はく、『知る』と。佛問うて言はく、『汝此くの如き人に從つて具足戒を受け、受具足戒を成ぜざることを知るや不や』と。答へて言はく、『知る』と。佛言はく、『受具足戒と名づけず』と。(受戒犍度具足し竟る。)

說戒犍度上

爾の時、佛羅閱城に在しき。時に城中の諸の外道梵志、月に三時に集會す、月の八日と十四日と

十五日となり。衆人大に集まりて來往周旋し、共に知友の爲めに飲食を給與し、極めて相愛念し、日を經て供養す。時に瓶沙王閣堂の上にありて、遙に大衆の、梵志の聚會の處に往詣するを見、卽ち左右の人に問うて言はく、『今此の諸人何處にか至らんと欲すとせんや』と。答へて言はく、『王今之を知れ、此の城中の梵志は月に三たび集會す。八日と十四日と十五日となり、衆人來往周旋して、共に知友の爲めに飲食を給與して極めて相愛念す、是の故に衆人梵志の聚集の處に往詣す』と。時に瓶沙王卽ち閣堂を下り、往いて世尊の處に詣り、頭面に禮足し已りて一面に在りて坐し、佛に白して言さく、『今此の羅閱城中の諸の梵志、月に三時に集會す。八日と十四日と十五日となり、周旋往返して、共に知友の爲めに飲食を給與す、善い哉世尊、今諸の比丘に勅したまひ、月三時に集會せしめ、八日と十四日と十五日とせん。亦當さに衆人をして周旋往來せしめ、知友の爲めに飲食を給與せしむべし、我れ及び群臣亦當さに來集すべし』と。時に世尊默然として、王瓶沙の語を受け給ふ。王世尊の默然として、語を受けたまふを見已り、卽ち座より起ちて、頭面禮足し遶り已りて去る。時に世尊此の因緣を以て比丘僧を集めて告げて言はく、『此の羅閱城中の諸の梵志、月三時に會す。八日と十四日と十五日となり、共に相往來周旋して、共に知友の爲めに飲食を給與し、極めて相愛念す。汝も亦月三時に會し、八日と十四日と十五日とに集まれ。亦衆人をして來往周旋し、共に知友の爲めに飲食を給與せしめよ。瓶沙王及び群臣亦當さに來集すべし』と。答へて言はく、『是くの如し世尊』と。時に諸の比丘教を受け已りて、月三時に集まる八日と十四日と十五日となり。時に大衆集まりて周旋往來し、共に知友のために飲食を給與す。王瓶沙も亦諸の群臣大衆を將ひて來集す。時に諸の比丘來集し已りて、各々默然として坐す。諸の長者、諸の比丘に白して言さく、『我等說法を聞かんと欲す』と。諸の比丘敢て說かず、此の事を以て佛に白す。佛言はく、『汝等ために說法することを聽す』と。旣に聽し已りて、當さに何の說法をくべきかを知らず。佛言はく、

『自今已去、契經を說くことを聽す』と。時に諸の比丘分別して義を說かんと欲す。當さに義を說くべき時に當り、具さに文句を說かず、各自に疑ひを生ず。佛言はく、『義を說いて、具さに文句を說かざることを聽す』と。時に二比丘、共に一高座に法を說く。佛言はく、『爾るべからず』と。二比丘同一高座に說法して共に諍ふ。佛言はく、『爾るべからず』と。彼れ相近く高座を敷きて義を說き、互に長短を求む。佛言はく、『爾るべからず』と。彼れ義を說くによりて、共に相逼切す。佛言はく、『爾るべからず』と。時に諸の比丘二人、共に聲を同じうして唄を合す。佛言はく、『爾るべからず』と。時に諸の比丘、歌詠の聲にて說法せんと欲す。佛言はく、『聽す』と。時に一比丘あり、世尊を去ること遠からず、極めて過差歌詠の聲にて說法す。佛聞き已りて卽ち此の比丘に告げたまふ、『汝是くの如く說法すること莫れ、汝當さに如來處中の說法の如くすべし。凡世人と同ずること勿れ。說法せんと欲する者は、當さに舍利弗、目犍連の如く平等に說法すべし、凡世人と同じく說法すること勿れ。諸の比丘、若し過差歌詠の聲にて說法すれば、五の過失あり、何等をか五と爲す。若し比丘、過差歌詠の聲にて說法すれば、便ち自ら貪著を生じ、音聲を愛樂す、是れを第一の過失と謂ふ。復次ぎに、若し比丘過差歌詠の聲にて說法すれば、其の聞くある者貪著を生じ、其の聲を愛樂す、是れを比丘の第二の過失と謂ふ。復次ぎに、若し比丘過差歌詠の聲にて說法すれば、其の聞くあるもの、共れをして習學せしむ、是れを比丘第三の過失といふ。復次ぎに、比丘過差歌詠の聲にて說法すれば、諸の長者、聞いて皆共に譏嫌して言はく、『我等所習の歌詠の聲は、比丘も亦是くの如く說法す』と。便ち慢心を生じて恭敬せず、是れを比丘の第四の過失と謂ふ。復次ぎに、若し比丘、過差歌詠の聲にて說法すれば、若し寂靜の處に在りて思惟せんに、音聲を憶するによりて以て禪定を亂す、是れを比丘第五の過失と謂ふ』と。時に諸の比丘、夜一處に集まりて說法せんと欲す。佛言はく、『說くことを聽す』と。諸の比丘、何の日に集まらんを知らず。佛言はく、『十五日、

十四日、十三日、若しは十日、若しは九日、若しは八日、若しは五日、若しは三日、若しは二日、若しは日々說くことを聽す』と。若し說法の人少ければ、應さに次第に請じて說くべし。彼れ肯て說かず。佛言はく、『爾るべからず、極少は下至一偈を說くべきことを聽す。一偈とは、「諸惡莫作・諸善奉行・自淨其意・是諸佛敎」なり。若し肯んぜざれば、當さに法の如く治すべし』時に諸の比丘、夜集まつて說法せんと欲す。時に卑座に坐し、疑ひあり。佛言はく、『若し夜集まりて說法せんには、座の高卑あることなし』と。時に諸の比丘、夜集まりて坐禪せんと欲す。佛言はく、『聽す』と。時に諸の比丘睡眠す。佛言はく、『比坐の者當さに之を覺ますべし、若し手にて相及ばざる者は、當さに戸鑰、若しは拂柄を持つて之を覺ますべし。若し與に同意の者は、革屣を持つて之に擲つべし。若し猶ほ故ほ睡眠せんには、當さに禪杖を持つて之を覺ますべし。中に禪杖を得、覺め已りて呵するに受けざるあり。佛言はく、『爾るべからず、若し呵して受けざるものは、當さに法の如く治すべし』と。若し復睡眠せんには、佛言はく、『水を以て之に灑ぐことを聽す』と。其の中水灑を得る者あり、若し呵するも受けざれば、亦當さに法の如く治すべし。若し故ほ復睡眠せば、佛言はく、『當さに眼を〔三〇〕拭し、若しは水を以て面を洗ふべし』と。時に諸の比丘、猶ほ故ほ復睡眠す。佛言はく、『當さに自ら耳鼻を摘し、若しは額上を摩すべし』と。若し復睡眠せば、欝多羅僧を披張し、手を以て其の身を摩捫すべし。若しは當さに起ちて戸外に出で四方を瞻視し、仰いで星宿を觀るべし。若しは經行の處に至り、諸根を守攝し、心をして散ぜざらしむべし。

爾の時、世尊閑靜の處に在して思惟し、是の念を作して言はく、「我れ諸の比丘のために結戒し、波羅提木叉を說く、中に信心の新受戒の比丘あり、未だ戒を聞くことを得ず、云何が戒を學すべきかを知らず。我れ今寧ろ諸の比丘に、集まりて一處に在りて、波羅提木叉戒を說くことを聽すべし」と。爾の時世尊靜處より出でたまひ、此の因緣を以て諸の比丘を集めて告げて言はく、『我れ向きに

【三〇】拭は、拭ふこと、或は摩することの意味であるから、こゝでは、眼をこすることである。

靜處にありて思惟し、心に念じて言はく、「我れ諸の比丘のために結戒し、及び波羅提木叉戒を說く。信心の新受戒の比丘あり、未だ戒を聞くことを得ず、云何が戒を學すべきかを知らず」と。復自ら念じて言はく、「我れ今寧ろ諸の比丘に、集まりて一處に在りて、波羅提木叉を說くことを聽すべし」と。是を以ての故に、諸の比丘共に集まりて一處に在りて、波羅提木叉戒を說くことを聽す』と。是くの如きの說を作せ『諸の大德、我れ今波羅提木叉戒を說かんと欲す、汝等諦に聽け、善く心に之を念ぜよ、若し自ら犯すあるを知らば、卽ち應さに自ら懺悔すべし、犯さゞれば默然せよ、默然せば、諸大德の清淨なることを知る、若し他の問ふものあらば、亦是くの如く答へよ』と。是くの如く比丘衆中に在りて、乃至三問せよ。罪あることを憶念するも懺悔せざれば故妄語罪を得、故妄語は、佛障道の法と說きたまふ。若し彼の比丘、罪あることを憶念し、淸淨を求めんと欲せば應さに懺悔すべし。懺悔すれば安樂なることを得。波羅提木叉とは戒なり、自ら威儀を攝持し、住處行根面首に諸の善法を集め、三昧成就し、我れ當さに說くべく、當さに結すべく、當さに發起し演布し開現し、反復分別すべし。是の故に諸の大德、我れ當さに戒を說くべし。共に集まりて一處に在りとは、同羯磨に集まりて一處に在り、應さに與欲すべき者は欲を受けて來り、現前に呵すべき者は呵せず、是の故に言ふ。應さに集まりて一處に在るべしと。諦かに聽け、善く心に念ぜよとは、端意專心にして法を聽くが故に、諦かに聽け、善く心に之を念ぜよといふ。犯すありとは、所作の犯事未だ懺悔せざるなり。犯すなければ不犯なり、若し犯し已らば懺悔せよ。若し他の問ふあらば、亦是くの如く答へよとは、譬へば一々の比丘の、相問答するが如し。故妄語は、佛障道の法を說きたまふとは、何等の道をか障ふる。初禪・二禪・三禪・四禪・空・無相・無願を障へ、須陀洹果乃至阿羅漢果を障ふ、懺悔すれば則ち安樂なり。何等の安樂をか得る。初禪乃至四禪・空・無相・無願を得、須陀洹果乃至阿羅漢果を得、故に懺悔すれば則ち安樂なりといふ。時に諸の比丘、歌詠聲にて說戒せんと

欲す。佛言はく、『歌詠聲にて說戒することを聽す』と。時に諸の比丘、日に說戒して疲倦す。佛言はく、『日々說法すべからず、自今已去、布薩の日に說戒することを聽す』と。時に諸の長者、比丘に問うて言はく、『今日は是れ何の日ぞ』と。比丘言はく、『知らず』と。皆慚愧す。時に諸の比丘、此の因緣を以て佛に白す。佛言はく、『自今已去、當さに日を數ふべし』と。旣に日を數へて多く忘る。佛言はく、『當さに數法を作るべし』と。時に諸の比丘寶を以て數法を作る。佛言はく、『爾るべからず、骨牙角若しは銅鐵鉛錫白鑞石泥丸を以て作ることを聽す』と。諸の比丘數法の零落するを患ふ。佛言はく、『孔を作り繩縷を以て貫き、僧の常に大食小食する處、夜集する處、說戒の處に置き、若しは杙上、若しは龍牙杙上に置き、若しは一日過ぐることを聽す。一時諸の長者來りて比丘に問うて言はく、『今日は是れ黑月か、是れ白月か』と。諸の比丘知らず、皆慚愧を懷く。此の事を以て、往いて佛に白す。佛言はく、『三十數法を作ることを聽す』と。十五は黑月に屬し、十五は白月に屬す。時に諸の比丘、數法を用ひて錯亂し、黑月の數法、白月數法の中に墮ち、白月數法、黑月數法の中に墮つ。佛言はく、『自今已去、黑月數法は染めて黑ならしめ、白月數法は染めて白ならしめよ』と。若しは數法相雜はりて破壞する者あるを患ふ。佛言はく、『中間に隔を安んずることを聽す』と。時に諸の比丘、十四日若しは十五日に說戒せんと欲す。佛言はく、『若し王或は日を改めんには、王者の法に隨へ』と。時に諸の比丘、今日說戒を爲さんや、明日說戒を爲さんやを知らず、往いて佛に白す。佛言はく、『上座布薩の日には唱へて言ふべし、『今日衆僧說戒す」と。』時に諸の比丘、何時なるを知らず。佛言はく、『時若しは量影時を作すことを聽す。若しは破竹の聲、若しは地を打つ聲を作し、若しは烟を作し、若しは貝を吹き、若しは鼓を打ち、若しは[三]揵稚を打ち、若しは告げて語つて言へ、「布薩說戒の時到る」と。』時に六群比丘、世尊の說戒を聽したまふと聞き、便ち自ら園中、若しは別房の中に於て、和尙、阿闍梨、若しは同和尙、同阿闍梨、親厚知識と、別部にして戒を說か

【三】揵稚(Ghaṇṭā)。

んかと。爾の時〔三二〕大迦賓兎仙人住處黒石山側に在り、靜處に在りて思惟す、而も此の念を作さく、「我れ今若しは往いて戒を説かんも、若しは往かざるも、我は常に第一清淨なり」と。爾の時世尊、長老大迦賓兎心中の所念を知り、譬へば如力士屈伸臂の頃に、耆闍崛山より忽然として現ぜず、乃ち仙人住處黒石山側に在り、迦賓兎の前に在りて座を敷いて坐す。時に迦賓兎、世尊の足を禮し已りて一面にありて坐す。時に世尊知りて故らに問ひたまふ。『汝此の閑靜處にありて思惟し、心に是の念を作す、「我れ今若しは往いて戒を説かんも、若しは往かざるも、我れは常に第一清淨なり」と。爾なし已るや不や』と。答へて言はく、『爾り』と。佛言はく、『是くの如し是くの如し迦賓兎、汝の言ふ所の如し。汝若しは往いて就いて戒を説く、若しは往かず、汝は常に第一清淨なり。然かも迦賓兎、説戒の法、當さに恭敬し尊重して承事すべし。若し汝布薩を恭敬し、尊重して承事せずんば、誰か當さに恭敬し尊重して承事すべき。是の故に汝應さに往いて説戒すべし、往かざるべからず。應さに歩して往くべし、神足に乘じて往くべからず。我れも亦當さに往くべし』と。爾の時迦賓兎默然として佛の教勅を受く。時に世尊、此の因縁を以て迦賓兎に告げ已りて、譬へば如力士屈申臂の頃に、仙人住處黒石山に沒して耆闍崛山に還りたまひ、座に就いて坐したまふ。爾の時諸の比丘、往いて佛所に至り、頭面禮足して一面に在りて坐し、此の事を以て佛に白す。佛具さに上の事を以て爲めに説き已る。佛諸の比丘に告げたまはく、『我れ諸の比丘に、一住處和合説戒を聽す。汝等云何ぞ和尚、阿闍梨、同和尚、同阿闍梨、親厚知識と別部説戒するや。若し一住處にして不和合説戒するは突吉羅を得。自今已去、一處に集まりて説戒することを聽す』と。爾の時、諸の比丘、世尊の一處説戒を聽したまふを知り、或は仙人所住山黒石處に在りて相待つ。或は毘呵勒山七葉樹窟にありて相待つ。或は塚間に在りて相待つ。或は溫泉水邊に在りて相待つ。或は竹園迦蘭陀所に在りて相待つ。或は耆闍崛山に在りて相待つ。或は大堂食堂經行堂河邊樹下生軟草處に在りて相待つて疲

【三二】大迦賓兎（Mahākappina）。大迦賓兎の言は、自ら清淨なるを信じ、我れ説戒に赴くも、赴かざるも、我れは清淨であると言つてる意味である。

倦す。時に諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、所住の處の人の多少に隨ひ、共に一處に集まりて說戒せよ』と。諸の比丘、當さに何處に於て說戒すべきかを知らず。佛言はく、『說戒堂を作り、白二羯磨することを聽す。是くの如きの白を作せ。當さに名處所を稱ふべし、大堂、若しは閣上堂、經行堂、若しは河側、若しは樹下、若しは石側、若しは生草處なり。衆中應さに羯磨に堪能なるものを差すべし、上の如く當さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧某甲處に在りて、說戒堂を作ることを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、今衆僧某甲處に在りて、說戒堂を作ることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。『僧已に某甲處に在りて說戒堂を作ることを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。爾の時耆闍崛山中に於て、先きに說戒堂を立て、復迦蘭陀竹園に於て、說戒堂を立てんと欲す。時に諸の比丘、往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、前の說戒堂を解き、然る後更に結することを聽す。白二羯磨して解け。衆中應さに羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧某處の說戒堂を解くことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、今僧某處の說戒堂を解く、誰か諸の長老、僧某處の說戒堂を解くことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざるものは說け」と。『僧已に忍して、某處の說戒堂を解くことを聽し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に一住處に二說戒堂を作る。經營の者二人共に諍ひ、二人各言ふ『衆僧先づ我が堂に於て說戒すべし』と。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、二人更互に聽す、上座に從つて始めと爲す』と。爾の時住處あり、布薩の日大衆集まる、而かも說戒堂小にして相容受せず。諸の比丘念じて言はく、『世尊戒を制したまふ、「說戒堂を結せずして說戒することを得ず、今當さに云何がすべき」と。』諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『僧自在にすることを得、若しは結し、若しは結せざる、說

戒することを得』と。時に上座の比丘先づ說戒堂に至り、掃灑して座を敷き、淨水瓶を具し、洗足瓶を具し、燃燈し、舍羅を具して疲極す。諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、年少の比丘應さに作すべし』と。年少比丘、布薩の日に於て、應さに先づ說戒堂中に至り、掃灑して座具を敷き、淨水瓶、洗足瓶を具し、燃火を然し、[三三]舍羅を具すべし。若し年少比丘知らざれば、上座當さに敎ふべし。若し上座敎へざれば、突吉羅なり、若し上座の敎に隨はざれば亦突吉羅なり。時に上座說戒竟り、後にありて自ら床座・水瓶・洗足瓶及び燈火具、舍羅を收攝し、本處に復し疲極す。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、說戒竟らば、年少比丘應さに、水瓶・洗足瓶・燈火及び舍羅を攝め、本處に復すべし。若し年少比丘知らざれば、上座當さに敎ふべし。上座敎へざれば突吉羅なり、上座の敎に隨はざるものも亦突吉羅なり。時に六群比丘說戒の日に於て、諸の白衣と言語問訊し、羯磨說戒說法を作す。爾の時諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『此れは是れ上座應さに作すべし』と。爾の時一住處あり、癡和上上座となる。彼れ說戒の日に於て、白衣のと言談問訊し、羯磨說戒說法すること能はず。爾の時諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『能く作す者を請ふことを聽す、若し上座、能くする者を請はざれば突吉羅なり、若し上座の請ひを受けざれば突吉羅なり』と。時に諸の白衣比丘に問ふ、『說戒の時に幾人ありや』と。問ひ已りて知らず、慚愧あり。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『比丘を數ふることを聽す』と。數ふと雖猶ほ復忘る。佛言はく、『當さに舍羅を具すべし』と。彼れ寶を以て作る。佛言はく、『寶を以て作ることを得ざれ、當さに骨牙若しは銅鐵白鑞鉛錫葦、若しは竹若しは木を以て作るべし。』零落を患ふ。佛言はく、『當さに繩にて纏ふべし』と。纏ふと雖猶ほ故ほ零落す。佛言はく、『當さに函筒を作して盛るべし」と。彼れ寶を用ひて筒を作る。佛言はく、『爾るべからず當さに骨牙角銅鐵白鑞鉛錫葦竹木を用ふべし』と。若しは

【三三】 舍羅(Śalākā)。

筒中より出づ。佛言はく『當さに蓋を作るべし』と。彼れ寶を用ひて蓋を作る。佛言はく『爾るべからず、當さに骨牙角銅鐵白鑞鉛錫葦竹木を以てすべし』と。筒を何處に安んぜんかを知らず。佛言はく『繩床若しは木床の下に安んじ、若しは杙上若しは龍牙杙上衣架上に懸著すべし』と。

爾の時、諸の比丘、佛の諸の比丘に、羅閱城に詣りて說戒することを聽したまふと聞き、諸方にありて聞く者、來り集まりて戒を說き、疲極す、時に諸の比丘佛に白す。佛言はく『自今已去、所住の處に隨ひ、若しは村、若しは邑の境界處に說戒せよ、結界白二羯磨することを聽す。當さに是くの如く結し、界方相を唱ふべし。若しは空處、若しは樹下、若しは山、若しは谷、若しは巖窟、若しは露地、若しは草積處、若しは近園邊、若しは塚間、若しは水澗、若しは石積處、若しは樹杌、若しは荊蕀の邊、若しは汪水、若しは渠側、若しは池、若しは糞聚所、若しは村、若しは村界と。彼れ四方相を唱へ已らば、衆中應さに羯磨に堪能なる者を差すべし、上の如く當さに白を作すべし。「大德僧聽け、所說の界相の如く、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、此の一住處に於て、一說戒結界することを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、所說の界相の如く、僧今此の一住處に於て一說戒結界す、誰か長老、僧此の一住處に於て、一說戒結界することを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。『僧已に此の一住處に於て、一說戒結界することを忍し竟る。僧忍じて默然するが故に、是の事是くの如く持つ。佛言はく『自今已去、結界するに、應さに是くの如く結すべきことを聽す、當さに座を敷くべし、當さに揵稚を打つべし、盡く共に一處に集まりて受欲することを聽さず、是の中の舊住の比丘應さに大界四方相を唱ふべし、若し東方に山あらば山を稱へ、塹あらば塹を稱へよ、若しは村若しは城、若しは疆畔若しは園、若しは林若しは池、若しは樹若しは石若しは垣牆、若しは神祀舍。東方相の如く餘方も亦爾なり。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差すべし、上の如く當さに是くの如く白すべし「大德僧聽け、此の住處の比丘、四方大界相を唱ふ、若

し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今此の四方相內に於て大界を結し、同一住處同一說戒なることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の住處の比丘四方大界相を唱ふ、僧今此の四方相內に於て大界を結し、同一住處同一說戒なり、誰か諸の長老、僧此の四方相內に於て大界を結し、同一住處同一說戒なることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。』僧已に此の四方相內に於て、同一住處同一說戒なることを忍し、大界を結し竟る、僧忍して默然するが故に是の事是くの如く持つ。〔三四〕時に諸の比丘、四人衆を須ふる羯磨事起るなり、五比丘衆、十比丘衆、二十比丘衆羯磨事起る。是の中大衆集會し疲極す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『戒場を結することを聽す。當さに是くの如く結すべし。白二羯磨して四方界相を稱へよ、若しは杙、若しは石を安んじ、若しは疆畔を齊限と作せ。衆中當さに羯磨に堪能なる人を差すこと上の如くすべし。大德僧聽け、此の住處の比丘、四方小界相を稱ふ、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今此の四方小界相內に於て、結して戒場を作すことを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の住處の比丘、四方小界相を稱ふ、今僧此の四方小界相內に於て戒場を結す、誰か諸の長老、僧此の四方相內に於て、戒場を結することを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。』僧已に此の四方相內に於て、戒場を結し已る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に諸の比丘、意廣く界を作さんと欲する者あり、狹く作さんと欲する者あり。佛言はく、『自今已去、若し改め作さんと欲する者は、先づ前界を解き、然る後に廣狹に作さんと欲せば意に從へ。當さに白二羯磨を作して解くべし。衆中當さに羯磨に堪能なる人を差すこと上の如し是くの如く白を作すべし。『大德僧聽け、今此の住處の比丘、同一住處同一說戒若し僧時到らば、僧界を解くことを忍聽せよ、白すること是くの如し』と。『大德僧聽け、此の住處の比丘、同一住處同一說戒、今界を解く、誰か諸の長老、僧今同一住處同一說戒、界を解くことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け』と。僧已に同一住處同一說戒の界を解くこ

〔三四〕少數比丘にて不足なき場合は、大界內の僧衆の來聚を要せぬ、故に特に小界を結するのである。

とを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に厭離の比丘あり、阿蘭若處を見る、一好窟あり、自ら念じて言はく、「我れ若し離衣宿することを得ば、卽ち此の窟に於て住することを得ん」と。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、當さに不失衣界を結すべし、白二羯磨して結せよ、衆中當さに羯磨に堪能なる者を差すこと、上の如くし是くの如きの白を作すべし、「大德僧聽け、此の住處は同一住處同一說戒なり、若し僧時到らば、僧不失衣界を結することを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の住處は同一住處同一說戒なり、今僧不失衣界を結す、誰か諸の長老、僧今同一住處同一說戒に不失衣界を結することを忍する者は默然せよ誰か忍せざる者は說け」と。僧已に此の住處の同一住處同一說戒に不失衣界を結することを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に諸の比丘、衣を脫して白衣の舍に置く、脫衣を著する時に當り、形露はる。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、比丘不失衣界を結することを聽す。村と[三五]村の外界とを除く、白二羯磨せよ。衆中當さに羯磨に堪能なる者を差すこと上の如くすべし、當さに是くの如く白をなすべし。「大德僧聽け、此の住處は同一住處同一說戒なり、若し僧時到らば、僧不失衣界を結し、村と村の外界とを除くことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の住處は、同一住處同一說戒なり、今僧不失衣界を結す、村と村の外界とを除く、誰か長老、僧此の住處の同一住處同一說戒に於て、不失衣界を結し、村と村の外界とを除くことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に同一住處同一說戒に不失衣界を結し、村と村の外界とを除くこと忍聽し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に諸の比丘二界相接す。佛言はく、『爾るべからず、當さに幖幟を作すべし』と。彼の二界共に相錯沒す。佛言はく、『爾るべからず、應さに中間を留むべし』と。彼の諸の比丘、先きに大界を解き、却つて不失衣界を解く。佛言はく、『爾るべか

【三五】村と村の外界とを除くといふのは。界內に白衣の住して居る所があれば、それは除いて界內とはしないのである。

らず、先きに不失衣界を解き、却つて大界を解け』と。時に駛流の河水を隔てゝ、外に不失衣界を結す。諸の比丘、往いて衣を取り、水の爲めに漂はさる。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、駛流水を隔てゝ外に、不失衣界を結することを得ざれ、橋あるものを除く』と。

爾の時、二住處あり、別利養別說戒なり、諸の比丘、共一說戒共一利養を結せんと欲す。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、解界し已りて、然る後結することを聽す。白二羯磨して是くの如く解け。彼此各自に界を解き、應さに盡く一處に集まるべし、愛欲することを得ず。當さに四方相を唱ふべし。阿蘭若處・樹下・空處、若しは山、若しは谷、若しは巖窟、露地、草積園林、塚間、河側、若しは不藉、若しは杌樹、若しは荊蕀、若しは塹、若しは渠、若しは池、若しは糞聚、若しは村、村界、界の齊限處を唱へ已り、衆中當さに羯磨に堪能なる者を差すこと上の如くし、是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、所說の界相の如く、若し僧時到らば、僧彼處此處に於て、同一利養同一說戒を結することを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、所說の界相の如く、今僧此處彼處に於て、同一說戒同一利養を結す、誰か長老、僧此處彼處に於て、同一說戒同一利養を結し、結界することを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。』僧已に此處彼處に於て、同一說戒同一利養結界することを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。爾の時二住處あり、別說戒別利養なり。時に諸の比丘、一同一處に說戒し、別利養せんと欲す。佛言はく、『自今已去、界を解き已りて、然る後に結することを聽す、白二羯磨せよ。彼此各自に解いて、應さに盡く一處に集まり、受欲することを得ず。當さに界方相を唱ふべし、若しは阿蘭若空處乃至村界上の如し。二住處の名を稱へよ。衆中當さに羯磨に堪能なる者を差すこと上の如くし、是くの如きの白を作せ、「大德僧聽け、所說の界方相の如く、若し僧時到らば、僧此處に於て同一說戒別利養を結することを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、所說の界方

相の如く、僧今此處に於て、同一說戒別利養を結す、誰か諸の長老、僧此の界四方相內に於て、同一說戒別利養を結することを、忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。』僧已に此の界四方相內に於て、同一說戒別利養を結することを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に二住處あり、別說戒別利養なり。時に諸の比丘、別說戒同一利養を得んと欲す、住處を守護せんと欲するが故に。佛言はく、『白二羯磨して結することを聽す。衆中當さに羯磨に堪能なる者を差すこと上の如し、是くの如きは白を作すべし。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧此彼の住處に於て、別說戒同一利養を結することを忍聽せよ、住處を守護せんと欲するが爲めの故に。白すること是くの如し」と。大德僧聽け、今僧此彼の住處に於て、別說戒同一利養を結す、住處を守護するが爲めの故に。誰か諸の長老、僧此彼の住處に於て、別說戒同一利養を結することを忍せよ、住處を守護するが爲めの故に。僧忍する者は默然せよ、誰か忍せざるものは說け」と。』僧已に此彼の住處に於て、別說戒同一利養を結し、住處を守護するが爲めの故にすることを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に二住處あり、同一說戒同一利養なり。時に諸の比丘、別說戒別利養を得んと欲す。佛言はく、『自今已去、集まりて一處に在り、界を解き已りて、彼所住處に隨つて、各自更に結界することを聽す』と。爾の時二住處あり、相去ること遠し、同一說戒同一利養なり。若し彼れ少飲食供養を得んに具さに持ちて此に來至すれば、日時已に過ぐ。若しは此に利養を得、持ちて彼れに至れば、日時已に過ぐ。時に諸の比丘佛に白す。佛言はく、『相去ること遠き處は、同一說戒同一利養するを得ざれ』と。佛言はく、『自今已去、是くの如きの語を作すことを聽す。「若し此處に少飲食供養を得んには、卽ち此處に於て分ち、若し彼れに少供養を得んには、彼處に於て分つ」と。』爾の時布薩の日に、衆多の比丘あり、無村曠野の中に於て行く。心に自ら念じて言はく、「世尊法を制したまひ、當さに一處に集まりて、和合說戒すべしと。我等當さに如

何がすべき」と。此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく『比丘善く聽け、若し布薩日に、無村曠野の中に於て行かんに、衆僧應さに和合して集まりて一處に在り、共に說戒すべし。若し僧和合することを得ざれば、同和尙同阿闍梨善友知識に隨つて、當さに道を下りて一處に集まり、小界を結して說戒すべし。白二羯磨して當さに是くの如く結界を作すべし。衆中當さに羯磨に堪能なる者を差すこと上の如くすべし、當さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、今爾許の比丘ありて集まる、僧時到らば、僧小界を結することを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、今爾許の比丘あり、集まりて小界を結す、誰か諸の長老、今爾許の比丘あり、集まりて小界を結することを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。』僧已に爾許の比丘の、集まりて小界を結することを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に諸の比丘、結界して解かずして去る。餘の者嫌責して往いて佛に白す。佛言はく、『解かずして去るべからず、白二羯磨を作して解け。衆中當さに堪能なる者を差すこと上の如くし、是くの如きの白を作せ。「大德僧聽け、今爾許の比丘ありて集まる、若し僧時到らば、僧此處の小界を解くことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、今爾許の比丘ありて集まる、此處の小界を解く、誰か諸の長老、僧此處の小界を解くことを忍する者は默然せよ、忍せざる者は說け」と。』僧已に此處の小界を解くことを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。

時に天暴雨し、河水大に漲る。時に諸の比丘、河水を隔てゝ同一住處同一說戒を結す。十五日往いて彼れに就いて說戒せんと欲す。而も渡ることを得る能はず、卽ち說戒を成就せず。諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『河水を合せて同一說戒界を結することを得ず、船と橋梁とあるをば除く』と。時に二住處あり、相去ること遠くして、同一說戒を結す。時に諸の比丘、十五日往いて相就いて說戒せんと欲して能はず、卽日彼れに達し、說戒を成就せず。諸の比丘往いて佛

に白す。佛言はく、『住處相去ること遠ければ、同一說戒を結することを得ず』と。若し住處に河水を隔て、相去ること遠くして、同一住處同一說戒を結せば、諸の比丘、十五日說戒は、應さに十四日に先づ往くべし。十四日說戒には、十三日に應さに先づ往くべし、受欲することを得ず。

爾の時、說戒の日、住處に一比丘あり、房に入り戶を閉ぢて眠る。諸の比丘說戒已り、座より起ちて去る。時に眠る者聲を聞いて卽ち起き、諸の比丘に問うて言はく、『諸大德、何處に去らんと欲する、說戒せざるや』と。諸の比丘報へて言はく、『我等已に說戒す』と。卽ち問ふ、汝向きに何處より來れるや』と。報へて言はく、『我れ白日自房に在り、戶を閉ぢて眠るのみ』と。諸比丘往いて佛に白す。佛言はく、『說戒の日に於て、房中に在りて眠ることを得ざれ、自今已去、比坐の者當さに共に相檢校し、來る者來らざる者あるを知るべし。自今已去、先づ白して然る後に說戒することを聽す。是くの如きの白を作せ、「大德僧聽け、今十五日衆僧說戒す。若し僧時到らば僧和合說戒することを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。是くの如きの白を作し竟りて、然る後に說戒せよ』と。

四分律卷第三十五

卷の第三十六（二分の十五）

説戒揵度下

爾の時、説戒の日に、一比丘ありて住處す。心に自ら念じて言はく、「佛戒を制したまふ、應さに和合して一處に集まり、説戒すべし」と。「我今當さに云何がすべき」と。卽ち諸の比丘に語る。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し説戒日に、一比丘ありて住せば、應さに説戒堂に詣り、掃灑して淨ならしめ、座具を敷き、澡水瓶・洗足瓶を具し、燈火を然やし、舍羅を具すべし。若し客比丘ありて來らんに、若しは四、若しは過四ならば、應さに先づ白し已りて、然る後説戒すべし。若しは三人あらば、各々相向つて説け。『今僧十五日説戒なり、我れ某甲清淨なり』と。是くの如く三説せよ。若し二人あらば、亦相向つて説け、『我れ某甲清淨なり』と。是くの如く三説せよ。若し一人あらば、應さに心に念じ口に言ふべし、『今日衆僧十五日説戒なり、我れ某甲清淨なり』と。是くの如く三説せよ。若し三人ならば、第四人の欲清淨を受けて、白説戒することを得ず。二人は第三人の欲清淨を受くることを得ず。應さに各々三語説すべし。若し一人は、第二人の欲清淨を受くることを得ず、應さに心念三説すべし。時に六群比丘、非法別衆羯磨説戒し、非法和合衆、法別衆羯磨説戒す。爾の時諸の比丘往いて世尊に白す。世尊言はく、『非法別衆羯磨説戒することを得ざれ、非法和合衆、法別衆羯磨説戒することを得ざれ。説戒に四種あり、時に諸の比丘、非法別衆・非法和合衆・法別衆・法和合衆羯磨説戒す。若し彼の比丘、非法別衆羯磨説戒すれば、彼れ説戒を成ぜず。若し非法和合衆、法別衆羯磨説戒すれば、説戒を成ぜず、法和合衆羯磨説戒すれば、此れを名づけて説戒と爲す。應さに是くの如く説戒すべし、是れ我が所説の敎法なり』と。

時に說戒の日に衆僧集まりて僧事あり、世尊告げたまふ。『諸の比丘寂靜にして、今僧に事あり』と。異比丘あり、佛に白して言さく、『大德、病比丘ありて來らず』と。佛言はく、『自今已去、與欲することを聽す。受欲の人、當さに往いて受欲し來るべし、彼れ應さに是くの如く與欲すべし。若し汝に欲を與ふと言はば與欲を成ず、若し我れ欲を說くと言はゞ與欲を成ず、若し我が爲めに欲を說けと言はゞ與欲を成ず、若し身相を現じて與欲すれば、與欲を成ず、若し廣く與欲を說くと言はゞ與欲を成ず。若し身相を現ぜず、口に欲を說かざれば與欲を成ぜず、當さに更に與欲すべし。若し受欲の比丘、病比丘の所に往きて受欲し、受欲し已りて【一】命過し、若しは餘處に行き、若しは道を罷め、若しは外道衆に入り、若しは【二】別部衆に入り、若しは戒場上に至り、若しは明相出で、若しは自ら邊罪を犯す、若しは比丘尼を犯す、若しは賊心沙門と作る、若しは二道を破す、若しは黃門、若しは殺父母、若しは殺阿羅漢、若しは鬪亂衆僧、若しは惡心出佛身血、若しは非人、若しは畜生、若しは二形と言ひ、若しは被擧、若しは滅擯、若しは應滅擯、若しは神足空に在り、若し見聞處を離るゝは與欲を成ぜず、應さに更に餘者に欲を與ふべし。若しは中道に至り、若しは僧中に至るも、亦是くの如し。若し受欲の人、若しは睡り、若しは入定し、或は忘るゝは、若しは不故作ならざれば、是くの如きを名づけて、與欲を成ずと爲す。若し故らに說かざれば突吉羅なり。若し能く是くの如くするものは善し、若し是くの如くすること能はざるものは、彼の比丘應さに病比丘を扶け將ひ、若しは床、若しは繩床の上に舁いで僧中に來至し、若し此の病比丘、或は能く病を動かし、或は能く死せんを慮らば、一切の衆僧、應さに病比丘の所に往き、圍遶してために羯磨を作すべし。若し病者衆多ならば、能く一處に集まらば善し、若し能はざれば、諸の比丘、當さに界外に出でゝ羯磨を作すべし、更に方便して、別衆作羯磨を得ることなきが故に。

爾の時、說戒の日、衆僧一處に集まり說戒せんと欲す。時に世尊 諸の比丘に告げたまはく、『汝

【一】命過以下離見聞處まで二十七種を擧げて居る。命過より明相までは七種である。邊罪より二形までは十三難、其の下が被擧と二滅で、次ぎにまた神足空等の二種ある。被擧には三種の別があり、之を三擧といふ。

【二】別部衆は、僧團分裂して別立せる團體、卽ち提婆の黨の如き、是れ別部である。戒場上に至るとは、一旦界外に出で、戒場に至りしものゝことで、法礪の『疏』にも『今戒場失と言ふは、實に是れ出界なり』と釋し、已に一たび界外に出でしが故與欲の效果を失ふので、出界至場の意味である、之を戒場失といふのである。明相出とは、後夜に受欲し、明相出づれば、效果を失ふのである。

等寂靜にして、今說戒せんと欲す』と。時に異比丘あり、世尊に白して言さく、『今病比丘ありて來らず』と。佛言はく、『自今已去、與清淨を聽す。比丘往いて清淨を受くることを聽す。彼れ應さに是くの如く與ふべし。若し清淨なりと說かば與清淨を成ず、若しは乃至廣く與清淨を說くこと、上の與欲法の如く與清淨を成ず。若し身を動かさず、口に清淨と言はざれば與清淨を成ぜざること、亦上の與欲法の如し、當さに更に清淨を與ふべし。若し受清淨の人、病比丘の所に到り、清淨を受け已りて便ち命終し、若し餘道に行く、若しは休道し、若しは外道衆に入り、若しは別部衆に入り、或は戒場上に至り、若しは明相出で、若しは自ら邊罪を犯す、若しは比丘尼を犯す、若しは賊心沙門と作り、若しは破二道、若しは黃門、若しは殺母殺父、若しは殺阿羅漢、若しは鬪亂衆僧、若しは惡心出佛身血、若しは非人、若しは畜生、若しは二形と言ふ。若しは被擧、若しは滅擯、若しは應滅擯、若しは神足空に在り、若しは見聞處を離るゝは與清淨を成ぜず、當さに更に餘者に與ふべし。是くの如く若しは中道に至り、若しは衆中に至るも亦是くの如し。受清淨の人、若しは眠り、若しは入定し、若しは忘るゝも、若し故作ならざれば與清淨を成ず。若し故らに說かざれば突吉羅なり。若し能く是くの如くなるは善し、是くの如くすること能はざる者は、當さに病人を扶け、若しは床、若しは繩床、若しは輿の上に舁ぎ、來りて僧中に至るべし。時に諸の比丘是の念を作さく、「病比丘を舁ぎ來らば、恐らくは病增動し、或は便ち命終するに至らざるかを、我等當さに往き就いて、ために羯磨說戒を作すべし」と。若し衆多の病者あらば、一處に集まらば善し、若し集まることを得ずんば、諸の比丘應さに界外に出でゝ羯磨說戒を作すべし。若し界外に出でざれば、別衆に羯磨說戒を作すことを得ざれば、更に方便して、別衆に羯磨說戒を作すことなし。

爾の時、六群比丘與欲して與清淨せず、僧中事の起るあるも說戒することを得ず。時を欲を持ち

來れる、比丘言はく、『我れ欲を持ちて來る、清淨を得ず』と。而も〔三〕稽留して羯磨說戒す。諸の比丘皆疲倦す。時に諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、與欲の時應さに與清淨すべし、應さに是くの如く言ふべし。「我れ汝に欲と清淨を與ふ」と』。時に六群比丘〔四〕事を稱へて言はく、『我れ此の事を以て汝に欲と及び清淨を與ふ』と。僧中に餘事の起るあり、時に持欲の比丘言はく、『我れ某事の欲清淨を持ちて來る、餘事の欲清淨を持ち來らず、此の事を以ての故に稽留あり、諸の比丘皆疲倦す。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『事を稱へて欲清淨を與ふべからず、如法僧事に欲清淨を與ふることを聽す』と。時に受欲清淨の比丘戒は命終し、或は休道し、或は外道衆に入り、或は別部衆に入り、或は戒場上に至り、若しは明相出づ。諸の比丘念じて言はく、「與欲清淨を失ふとせんや不や」と。佛言はく、『失ふ』と。時に受欲清淨の比丘、道路隔塞に遇ひ、賊難あり、惡獸難あり、若しは河水大に漲りて至ることを得ず、便ち界外より僧中に來至し、與欲清淨す。諸の比丘念じて言はく、「與欲清淨を失ふとせんや不や」と。佛言はく、『失はず、自今已去、與欲清淨の比丘に、若しは命難梵行難には、若し界內僧中に至るを得ざることを聽す。界外より僧中に來至して與欲清淨することを聽す、是くの如きは與欲清淨を失はず、是れ我が所說なり』と。時に諸の比丘、一人の與欲清淨を受け已りて、疑ひて二人の欲清淨を受けず。佛言はく、『受くることを聽す』と。彼れ二人の欲清淨を受け已りて、復疑つて三人の欲清淨を受けず。佛言はく、『受くることを聽す』と。彼れ三人の欲清淨を受け、疑つて四人の欲清淨を受けず。佛言はく、『受くることを聽す』と。佛言はく、『若し能く盡く字を記識せば、能憶の多少に隨つて受けよ。若し字を憶する能はざれば、當さに姓を稱すべし、姓を記識する能はざれば、當さに相貌を稱すべし、若し相貌を記する能はざれば、但言へ、「衆多の比丘如法僧事與欲清淨」と。』時に說戒の日に、一處に大衆ありて來り集まる。說戒の者聲音小にして大衆悉く聞かず。諸の比丘

〔三〕稽留は、更に清淨を得來るまで、衆僧を留めて置くこと。

〔四〕事を稱へるとは、其の自分の代理をさせる事件を特に擧げて委托することである。故に他の事件が突發しても、それには與欲與清淨がないので、代理することが出來ないのである。

往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、當さに衆中に在りて、立ちて說戒すべきことを聽す。猶ほ故ほ聞かずんば、應さに衆中に在り、高座を敷いて極めて高好ならしめ、座上にて說戒すべし。猶ほ故ほ聞かずんば、應さに轉輪高座を作り、平に手を立て、及び座上に在りて說戒すべし』と。誦する時若し忘誤すれば、次座の比丘當さに授語すべし。若し故ほ忘るれば、次ぎに第二比丘當さに代りて說くべし。卽ち次を以て說き、重ねて說くことを得ざれ。爾の時持欲清淨の比丘、事の起るあり、或は僧事・佛事・法事・病比丘事あり。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、欲清淨を轉授することを聽す。餘の比丘に與へて、當さに是くの如きの言を作すべし。「我れ衆多比丘のために、欲清淨を受く、彼れ及び我が身、如法僧事與欲清淨なり」と』。時に六群比丘、『汝の和尙阿闍梨の字』と。時に諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝の和尙阿闍梨は、字を稱ふることを得ざれ』と。時に諸の比丘相問ふ、『汝の和尙阿闍梨の字は何等ぞ』と。疑つて敢て字を稱へず。諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『若し問ふ者あれば、和尙阿闍梨の字を稱ふることを聽す。若し比丘、波利婆沙、本日治、若しは摩那埵、阿浮呵那を行ずる時、若しは羯磨、若しは立制の時、若しは受戒の時、若しは差人の時、若しは解の時は、應さに和尙阿闍梨の字を稱ふべし』と。時に比丘事の因緣あり、應さに字を稱ふべし、疑つて敢て和尙阿闍梨の名字を稱へず。時に諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『若し事の因緣あらば、和尙阿闍梨の字を稱することを聽す。若し比丘、事の爲めの故に與欲清淨す。與欲已りて事休む、便ち疑を生じ、敢て說戒處に就かず。諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『若し事休むも應さに往くべし、若し往かざれば法の如く治すべし』と。時に六群比丘、是くの如きの念を作す。「說戒處に往かず、恐らくは餘の比丘、我が爲めに羯磨を作し、我が說戒を遮せん」と。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『爾るべからず』と。彼れ復是くの如きの念を作す、『我れ說戒處に往かず、

【五】平に手を立てとは、聾の聞えないものには、其の說いてるもの丶見ゆる樣に手を立てるのである。これは『行事鈔』にも「此れは則ち見て聞かざるなり」と釋して、說戒の形相のみを望見して、其の語を聞かなくとも失法ではないといふ意味である。

恐らくは我が親厚知識の爲めに羯磨を作し、若しは說戒を遮せん」と。佛言はく、『爾るべからず』と。復是くの如きの念を作す。「我れ說戒處に往くも坐せず、恐らくは餘の比丘我が爲めに羯磨を作さん、若しは說戒を遮せん」と。佛言はく、『爾るべからず』と。若しは親厚知識の爲めに、說戒處に往きて坐せざるも亦是くの如し。爾の時に住處あり、說戒の日衆僧大に集まりて說戒せんと欲す。時に賊の來るあるを聞き、皆恐怖して座より起ちて去り、說戒を成ぜず。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、聽す。八難事起り、若しは餘緣あらば、略して戒を說くことを聽す。八難とは、若しは王、若しは賊、若しは火、若しは水、[六]若しは病、若しは人、若しは非人、若しは惡蟲なり。餘事の緣とは、若しは大衆の集まるあるも、床座少し、若しは衆多病まば、略して戒を說くことを聽す。若しは大衆の集まるあるも、座上覆蓋周からず、或は天雨ふらば、略して戒を說くことを聽す。若しは布薩多くして、夜已に久し、或は鬪諍の事あり、或は阿毘曇毘尼を論じ、或は說法夜已に久しきは、自今已去、一切の衆未だ起きず、明相未だ出でざるに、應さに羯磨說戒を作すべし。更に方便して宿を得て、欲清淨を受け、羯磨說戒すべきなし』と。彼の比丘是の念を作さく、「今此の難因緣を以て、略して戒を說くことを聽したまふ、難來ること猶ほ遠くして未だ至らざれば、我等廣く戒を說くことを得べし」と。時に彼の比丘、應さに廣く戒を說くべし、廣く說かざれば法の如く治す。時に彼の比丘是の念を作さく、「此の難事近し、我曹廣く戒を說くことを得ず、說いて[八]九十事に至るべし」と。彼の比丘應さに說いて九十事に至るべし、若し說かざれば法の如く治すべし。時に諸の比丘是の念を作さく、「此の難事近し、我等廣く說いて九十事に至るを得ず、說いて[九]三十事に至るべし」と。應さに廣く說いて三十事に至るべし、說かざれば當さに法の如く治すべし。時に諸の比丘是の念を作さく、「此の難事近し、我等廣く說いて三十事に至ることを得ず、說いて二不定に至るべし」と。比丘應さに說いて二不定法に至るべし、若し說かざれば法

【六】若しは病とは、說戒師が病にかゝる時のことである。人とは、住處に白衣の人多くして、說戒を妨ぐる等の如き場合を言ふのである。

【七】餘事の緣とは、こゝに七種の場合を擧げて居る。此の場合に略說戒を聽す故、之を七略といふのである。卽ち床坐少・衆多病・天雨・布薩多・鬪諍・論毘尼論・說法夜久である。

【八】九十事は、九十波逸提のこと。

【九】三十事は、三十捨墮。

の如く治すべし。時に諸の比丘是の念を作さく、「難事近し、我等廣く說いて二不定法に至ることを得ず、【一〇】十三事を說くべし」と。彼れ應さに說いて十三事に至るべし、若し說かざれば法の如く治すべし。彼の諸の比丘是の念を作さく、「此の難事近し、廣く說いて十三事に至ることを得ず、【一一】四事を說くべし」と。彼の比丘、應さに四事を說くべし、若し說かざれば法の如く治す。彼の比丘是の念を作さく、「此の難事近し、我等四事を說くことを得ず、戒序を說くべし」と。彼れ應さに戒序を說くべし、若し說かざれば法の如く治す。時に諸の比丘是の念を作さく、「此の難事近し、我等戒序を說くことを得ず」と。諸の比丘此の難事の因緣を以て、應さに卽ち座より起ちて去るべし。

五種の說戒あり、序を說き已らば、餘は應さに『僧常に聞く』と言ふべし。若し序と四事とを說き已らば、餘は應さに『僧常に聞く』と言ふべし。若し序と四事と十三事とを說き已らば、餘は『僧常に聞く』と言ふべし。若し序と四事と十三事と二事とを說き已らば、餘は『僧常に聞く』と言ふべし。廣く第五を說く、是れを說戒の五種といふ。復五事あり、序と四事を說く、餘は應さに『僧常に聞く』といふべし。序と四事と十三事とを說き已り、餘は應さに『僧常に聽く』といふべし。序と四事と十三事と二事とを說き已りて、餘は應さに『僧常に聞く』と言ふべし。序と四事と十三事と二事と三十事とを說き已り、餘は應さに『僧常に聞く』と言ふべし。廣く第五を說く。復五事あり、序と四事と十三事とを說き已り、餘は應さに『僧常に聞く』と言ふべし。序と四事と十三事と二事とを說き已り、餘は應さに『僧常に聞く』といふべし。序と四事と十三事と二事と三十事とを說き已り、餘は應さに『僧常に聞く』と言ふべし。序と四事と十三事と二事と三十事と九十事とを說き已り、餘は應さに『僧常に聞く』と言ふべし。廣く第五を說く。是れを說戒の五種といふ。

爾の時、世尊羅閱城耆闍崛山中に在しき。時に一比丘あり、那那由と名づく。心亂狂癡にして、或時は說戒を憶し、或は說戒を憶せず。或時は來り、或は來らず。時に諸の比丘此の事を以て往い

【一〇】十三事は、十三僧殘。
【一一】四事は、四波羅夷。

て佛に白す。佛言はく、『自今已去、那那由比丘のために、心亂狂癡白二羯磨を作せ、是くの如きの與を作せ。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差すこと上の如くすべし。當さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の那那由比丘、心亂狂癡にして、或は說戒を憶し、或は說戒を憶せず。或は來り或は來らず。若し僧時到らば、僧此の比丘のために、心亂狂癡羯磨を作せ、若しは憶し、若しは憶せず、若しは來る、若しは來らざるも、僧羯磨說戒を作せ、白すること是くの如し」と。大德僧聽け、此の那那由比丘、心亂狂癡にして、或は說戒を憶し、或は憶せず。或は來り或は來らず。今僧那那由比丘のために心亂狂癡羯磨を作す。若しは憶し、若しは憶せず、或は來り或は來らざるも、羯磨說戒を作す、誰か諸の長老、此の那那由比丘のために、狂癡心亂を作し、憶と不憶と、或は來と不來と、羯磨說戒を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざるものは說け」と』。僧已に那那由比丘のために、狂癡心亂を作し、憶と不憶と、來と不來と、羯磨を作すことを忍し竟る。僧忍して默然たるが故に、是の事是くの如く持つ。三種の狂癡あり、一には說戒の時に、憶し憶せず來り來らず。二には或は狂癡あり、說戒を憶して來る。三には或は狂癡あり、說戒を憶せずして來らず。是れを三種の狂癡といふ。是の中說戒を憶し、說戒を憶せざるあり、來り來らざるあり、是くの如きの比丘は、衆僧應さにために癡狂羯磨を作すべし。彼れ說戒を憶して來る者は、衆僧ために癡狂羯磨を作すべからず。彼れ狂癡にして、說戒を憶せず、亦來らざる者は、ために癡狂羯磨を作すべからず。彼の比丘ために羯磨を作し已り後、狂癡病止みて是の念を作して言はく、「我れ今當さに云何がすべき」と。卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『若し狂者、ために羯磨を作し已りて、後に狂病已まば、應さにために白二羯磨を作して解くべし。應さに是くの如きの解を作すべし。那那由比丘應さに衆僧中に往き、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して白すべし。「大德僧聽け、我れ那那由比丘、先きに狂癡病を得、說戒の時、或は憶し或は憶

せず、或は來り或は來らず、衆僧我がために狂癡病羯磨を作す。作し已りて還た止むことを得たり。今狂癡羯磨を解かんことを求む」と。是くの如く三たび說く。衆中當さに羯磨に堪能なる者を差すこと上の如くし、是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の那那由比丘、先きに狂癡病を得、彼れ說戒の時、或は憶し或は憶せず、或は來り或は來らず、衆僧ために狂癡羯磨を作す。ために作し已りて狂癡病還た止むことを得たり。今解狂癡病羯磨を求む。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧解狂癡病羯磨を與ふることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の那那由比丘、先きに狂癡病を得、說戒の時、或は憶し或は憶せず、或は來り或は來らず。衆ために狂癡病羯磨を作す。ために作し已りて狂癡病還た止むを得たり、今衆僧に解狂癡病羯磨を求む。誰か長老、那那由比丘に、解狂癡病羯磨を與ふることを忍聽する者は默然せよ、誰か忍せざるものは說け」と』。僧已に那那由比丘に、解狂癡病羯磨を與ふることを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に諸の比丘、各心に念じて言はく、「狂癡病者のために羯磨を作し已り、後還た止むを得て解狂癡羯磨を得たり。若しまた更に狂癡ならんには、後にために羯磨を作すを得るや不や」と。佛言はく、『自今已去、狂癡病の時に隨つてために羯磨を作せ、狂止まば還た解け』と。

爾の時、世尊瞻婆國伽伽河側に在し、十五日說戒の時、世尊露地に坐し、衆僧前後に圍遶す。時に阿難、初夜過ぎて中夜の初め、座より起ちて偏へに右の肩を露はし、革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『初夜已に過ぐ、願はくは世尊說戒したまへ』と。世尊默然たり。阿難世尊の默然たるを見たてまつりて還りて座に就く。阿難初夜中夜過ぎ已りて、座より起ちて偏へに右の肩を露はし、革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『初夜中夜已に過ぎたり、願はくは世尊說戒したまへ』と。世尊默然たり。阿難世尊の默然たるを見たてまつり、還りて座に就く。阿難初夜過ぎ中夜過ぎ後夜已に過ぎ、明相出で衆鳥鳴く。阿難座より起ちて偏へに右の肩を

露はし、革屣を脱し、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『初中後夜已に過ぐ、明相已に出で〻衆鳥鳴く、衆僧坐すること久し、願はくは世尊說戒したまへ』と。佛阿難に告げたまはく、『衆中不淨の者あり、若し衆中に不淨の者あれば、如來をして中に於て、戒を說かしめんと欲するは、此の理なきなり』と。時に阿難默然として坐に還る。時に尊者大目連是の念を作さく、『今衆中何者か不淨なる、如來乃ち說いて言はく、「衆中に不淨の者あり、しかも中に於て戒を說くは此の理なし」と』。時に目連即ち衆人の心を觀じ、不淨の人あり、如來を去ること遠からずして坐するを見る。既に沙門にあらずして沙門と稱し、梵行にあらずして梵行と言ひ、犯戒惡法不淨汚穢にして、邪見惡業を覆藏し、內に腐爛を懷くこと、猶ほ空樹の如し。見已りて念じて言はく、『佛正さに此の人の爲めの故に、阿難に語りて言はく、「衆中に不淨あり、如來中に於て戒を說かば此の理なし」と』。時に目連即ち其の人の所に往いて語りて言はく、『汝起て、如來已に汝を見、已に汝を知りたまふ、起ちて去れ、此に住すべからず』と。時に目連手を捉りて門外に牽き出し已り、還りて世尊の所に至り、頭面禮足して佛に白して言さく、『衆僧已に淸淨なり、願はくは世尊說戒したまへ』と。佛目連に語りて言はく、『汝今爲すべからず、後も亦爲すべからず、目連、自今已去、自言治を作すことを聽す、若し自言せざれば治すべからず。自今已去、汝等自ら羯磨說戒を作せ』と。

佛目連に告げたまはく、『此れ如來最後の說戒なり。何を以ての故に。犯す者あれば、ために說戒すべからず、犯す者あれば、說戒を聞くことを得ず、戒を犯す者に向つて罪を解くことを得ず、罪ある者は、他の解罪を受くることを得ず』と。佛目連に告げたまはく、『海水に八奇特の法あり、阿修羅の娛樂して住する所以は、此の八事を以ての故なり。何等をか八と爲す。諸の一切の衆流、皆往いて之に投ず、是れを一奇特と謂ふ。阿修羅の娛樂する所なり。復次ぎに目連、海水は常住にして潮法を失はず、是れを目連、海水の二奇特といふ。阿修羅の娛樂する所なり。復次ぎに目連、

今五大河、恒河・閻摩那・薩羅・阿夷羅・婆提摩河、皆海に投じて本名を失ふ、之を名けて海と爲す。是れを目連、海水の三奇特といふ、阿修羅の娛樂する所なり。復次ぎに目連、此の五大河及び天雨、盡く海に歸して、海水に增減あることなし、是れを目連、海水の四奇特といふ、阿修羅の娛樂する所なり。復次ぎに目連、海水は盡く鹹くして同じく一味たり、是れを目連、海水の五奇特といふ、阿修羅の娛樂する所なり。復次ぎに目連、海水は死屍を受けず、設ひ死屍あるも、風飄出して岸上に置く、是れを目連、海水の六奇特といふ、阿修羅の娛樂する所なり。復次ぎに目連、海水多く珍奇異寶を出す、陸地に有るなきところ、盡く海に出づ。所謂寶とは、金銀・眞珠・琉璃・珊瑚・車渠・馬瑙なり。是れを目連、海水の七奇特といふ、阿修羅の娛樂する所なり。復次ぎに目連、大海水は大形の者の所居の處なり、所謂大形の者とは、身長百由旬・二百由旬・三百由旬、乃至七百由旬なり、是れを目連、海水の八奇特といふ、阿修羅の娛樂する所なり、是れを目連、大海水に八の奇特ありて、阿修羅の娛樂する所と謂ふ。是くの如く目連、我が法中にも亦八の奇特あり、諸の弟子をして、見已りて中に於て娛樂せしむ。何等をか八と爲す。彼の大海水は、一切の衆流皆往いて之に投ずるが如く、是くの如く目連、我が諸の弟子、漸次に戒を學んで皆我が法に歸し、中に於て諸の善法を學す、是れを目連、我が法中の一の奇特といふ、諸の弟子をして、見已りて自ら娛樂せしむ。目連、大海の常住に潮法を失はざるが如く、我が諸の弟子戒中に住し、乃至死に至るまで戒を犯さず、是れを我が法中に於ける二の奇特といふ、諸の弟子をして、見已りて自ら娛樂せしむ。目連、猶ほ五大河の盡く海に歸して其の本名を失ひ、之を名けて海と爲すが如く、是くの如く目連、我が法中に於て、四種の姓、刹帝利・婆羅門・毘舍首陀・信堅固を以て家より家を捨てゝ學道し、本名を滅して皆稱して沙門釋子と爲す、是れを目連、我が法中に於ての三の奇特といふ、諸の弟子をして、見已りて自ら娛樂せしむ。目連、五大河及び天雨皆海に歸して、而かも海水に增減あることなきが如く、是

くの如く目連、我が法中に於て諸の族姓子、信堅固を以て家より家を捨てゝ學道し、無餘涅槃界に入り、而も無餘涅槃界增なく減なし、是れを目連、我が法中に於ての四の奇特といふ、諸の弟子をして、見已りて自ら娛樂せしむ。猶ほ目連、大海水の鹹きこと同一味なるがごとく、我が法中に於ては、同一解脫味なり、是れを目連、我が法中に於ける五の奇特といふ、諸の弟子をして、見已りて自ら娛樂せしむ。目連、大海の死屍を受けず、設ひ死屍あるも、大風に飄はされて岸上に置くが如く、我が法中に於ても亦復是くの如し、死屍を受けず、所謂死屍とは、沙門にあらずして自ら稱して沙門となし、梵行にあらずして自ら稱して梵行と爲し、犯戒惡法不淨汚穢にして、邪見善業を覆障し、内に腐爛を懷くこと〔二〕空中樹の如し、衆中に在りて坐すと雖、常に衆僧を離れ、衆僧に遠く、亦彼れを離れて遠し、是れを目連、我が法中に於ける六の奇特といふ、諸の弟子をして、見已りて自ら娛樂せしむ。猶ほ目連、大海水中に、珍奇の異寶を出し、陸地の有るなき所なり、所謂珍寶とは、金銀・眞珠・琉璃・珊瑚・車渠・馬瑙なるが如く、我が法中に於ても、亦多く珍寶を出す。所謂珍寶とは、〔三〕四念處・四正勤・四如意足・四禪・五根・五力・七覺意・賢聖八正道なり、是れを目連、我が法中に於ての七の奇特といふ、諸の弟子をして、見已りて自ら娛樂せしむ。猶ほ目連、大海水は大形所居の處にして、所謂大形とは、百由旬乃至七百由旬なるが如く、是くの如く目連、我が法中に於ても、亦大形を受く、所謂大形とは、衆僧中の向須陀洹・得須陀洹乃至向阿羅漢・得阿羅漢なり、是れを目連、我が法中に於ける八の奇特といふ、諸の弟子をして、見已りて自ら娛樂せしむ』と。

爾の時、說戒の日に、衆多の癡比丘一處に集まりて住し、上座に語りて言はく、『戒を說きたまへ』と。答へて言はく、『我れ先きに戒を誦せず』と。次ぎに中座、下座に語る、『戒を說きたまへ』と。皆言ふ、『誦せず』と。卽ち說戒を成ぜず。爾の時諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『衆多の癡比丘、共に一處に集まるべからず、旣に戒を知らず、復說戒を知らず、布薩を知

〔二〕空中樹は、前に空樹とあり、內部腐爛したる空洞の樹である。此の第六の奇特が、卽ち前の說戒中に居りし不淨の人に比喩せらるゝのである。

〔三〕四念處以下は、四禪を除けば、一般にいふ三十七科の道品である。四禪を加へて居るから、四十一の數をなして居る。七の奇特とあるが、四念處以下八正道まで八になつて居る。海中の珍寶も七つで、所謂七寶といふのであるから、之に相對して三十七道品の七である方がよいと思ふ。恐らくは、五根の前に四禪を加へたのは、誤謬ではあるまいか。

らず、布薩羯磨を知らず。自今已去、五歳比丘戒羯磨を誦することを制す、若し戒羯磨を誦せざるものは、法の如く治す』と。爾の時衆多の癡比丘あり、共に一處に集まりて住す。上座に語りて言はく、『戒を説きたまへ』と。報へて言はく、『我等先きに誦するも、今は悉く忘れたり』と。次ぎに中座、下座に問ふ。皆言ふ、『先きに誦せしも、今は悉く忘る』と。即ち説戒を成ぜず。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『衆多の癡比丘集まりて一處に在るべからず、既に戒を知らず、復説戒を知らず、布薩を知らず、布薩羯磨を知らず。自今已去、五歳比丘、當さに戒を誦し、羯磨を誦して利ならしむべきことを制す。若しせざれば法の如く治す。自今已去、能誦戒の比丘に依りて、夏安居することを聽す』と。爾の時比丘あり、誦戒者に依りて夏安居す。誦戒者安居中に命終す。諸の比丘念じて言はく、『我等當さに云何がすべき』と。即ち諸の比丘に白す。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等能く聽け、若し比丘あり、誦戒の比丘に依りて夏安居す、安居中に誦戒者命終し、若しは遠行し、若しは休道し、若しは外道衆に入り、若しは別部衆中に至り、若しは邊罪を犯し、若しは比丘尼を犯し、若しは賊心沙門と作り、若しは懷二道、若しは黄門、或は殺父母、或は殺阿羅漢、或は闘亂衆僧、或は惡心出佛身血、若しは非人、若しは畜生、若しは二形、若しは後安居未だ至らざれば、當さに比近の處に詣りて後安居を結すべし。若ししからざれば、當さに比近の能誦戒者を請ひ來りて、安居を過すべし。若し已に後安居を結せば、諸の比丘、應さに比近の處、序を學誦する者、若しは四事を誦する者、若しは十三事の者、若しは二不定の者、若しは三十事の者、若しは九十事の者、若しは餘殘の法を誦する者に詣るべし。彼れ各所得を誦し已りて、還りて本住處に至り、一人をして誦せしめ、若し一人にて盡く誦する能はざれば、先き誦得する所に隨つて、各次第に誦して、重ねて誦することを得ざれ。若し爾する者は善し、せざる者は、但説法誦經するのみにして、坐より起ちて去れ』と。爾の時難陀に弟子あり聰明

なり、能く事を營む。時に跋難陀語りて言はく、『汝我れと人間に遊行せよ』と。其の人報へて言はく、『小しく留まりて我れを待て、往いて和尙に問はん』と。還りて卽ち難陀の所に往き白して言はく、『我れに跋難陀と人間に遊行することを聽したまへ』と。難陀報へて言はく、『汝の意に隨へ』と。時に諸の比丘聞く。其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知るものあり、難陀を嫌責す。『汝云何ぞ弟子に、跋難陀に隨つて、人間に遊行することを聽すや。此の人癡にして戒を知らず、說戒を知らず、布薩を知らず、布薩羯磨を知らず。』と。爾の時諸の比丘、往いて佛所に詣り、頭面禮足して一面に在りて坐す。此の事を以て具さに佛に白す。佛爾の時此の事を以て比丘僧を集め、知りて故らに難陀に問うて言はく、『汝實に弟子をして、跋難陀と人間に遊行せしむるや、跋難陀は癡人にして、戒を知らず、說戒を知らず、布薩を知らず、布薩羯磨を知らず』と。答へて言はく、『是くの如し』と。時に世尊無數の方便を以て難陀を呵責して言はく、『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ難陀、汝弟子を遣はして、跋難陀と人間に遊行せしむるや。癡人旣に戒を知らず、說戒を知らず、布薩を知らず、布薩羯磨を知らず』と。爾の時世尊、無數の方便を以て難陀を呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『汝等善く聽け、若し弟子あり、和尙師に辭して方面に遠行せんには、和尙當さに弟子に問ふべし、「汝何事の爲めに行く、同伴は是れ誰ぞ、何處に詣るとやする」と。若しは所營の事非、若しは同伴其の人にあらず、及び所詣の處非ならば、當さに遮して去るなからしむべし。若し所營の事非、所詣の處亦非ならば、同伴好しと雖、亦遮して去ることなからしむべし。若し所營の事非、所詣の處好きも、同伴善からざれば、亦當さに遮して去ることなからしむべし。若し所營の事非、所詣の處好く、同伴善きも、亦當さに遮して去ることなからしむべし。若し所營の事好く、所詣の好からず、同伴も亦善からざれば、當さに遮して去ることなからしむべ

し。所營の事好く、所詣の所好く、同伴好からざれば、亦遮して去ることなからしむべし。若し所營の事好く、所詣の處好く、同伴亦好きは、當さに聽して去らしむべし。

爾の時、一住處あり、衆多の癡比丘共に一處に集まる。時に尊者優波離、客となりて來りて此の衆中に至る。而も諸の癡比丘都べて瞻視迎逆承事せず。優波離瞻視迎逆承事せざるを以て、即ち其の日に於て、彼の處を離れて去る。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『善く聽け、若し住處あり、衆多の癡比丘ありて共に一處に集まる。若し客比丘ありて來至して、能く說法し、律を持し摩夷を持し、能く契經の義を說かん、諸の比丘聞かば、當さに往いて半由旬に至り、迎逆承事瞻視し、安處し洗浴し、其の所須の飲食を給すべし、若し爾せざる者は、當さに法の如く治すべし。爾の時住處あり、一比丘說戒の日に當りて罪を犯す。心に自ら念じて言はく、「世尊戒を制したまふ、「犯す者は說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯戒者に向つて懺悔することを得ず、犯す者は他の懺悔を受くることを得ず」と。我れ今當さに云何がすべき』と。即ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し說戒の日、比丘罪を犯すものあり、自ら念じて言はく、「世尊戒を制したまふ、若し犯すある者は、說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯者に向つて懺悔することを得ず、犯す者は他の懺悔を受くることを得ず」と。彼の比丘當さに淸淨比丘の所に詣り、偏へに右臂を露はし、革屣を脫し、右膝地に著けて合掌し、若し上座は應さに足を禮すべし、自ら所犯の名字を稱へ、口に是の說を作せ。「大德、憶念するに我れ某甲比丘、某甲の罪を犯す、今大德に向つて懺悔す、敢て覆藏せず、懺悔すれば則ち安樂なり、懺悔せざれば安樂ならず、犯すことを憶念して發露す、知りて覆藏せず、願はくは長老、我が淸淨戒身を憶し、淸淨布薩を具足せよ」と、是くの如く三說せん。彼れ應さに語りて言ふべし、「汝當さに厭離心を生ずべし」と。彼れ當さに報へて言ふべし、『爾り』と。作すこと是くの如くし已りて、

說戒を聽くことを得」と』。爾の時說戒の日、一比丘あり、犯中に於て疑を生ず。彼れ自ら念じて言はく、『世尊戒を制したまふ、「犯す者あれば說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯者に從つて懺悔することを得ず、犯者は他の懺悔を受くることを得ず」と。我れ今云何がすべき』と、卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、說戒の日、若し比丘犯に於て疑ふ者あり、自ら念じて言はく、「世尊戒を制したまふ、若し犯すある者は說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯者に向つて懺悔することを得ず、犯者は他の懺悔を受くることを得ず」と。彼の比丘當さに清淨比丘の中に詣り、偏へに右臂を露はし、革屣を脫し、右膝地に著けて合掌し、若し上座は足を禮し已りて、所犯の名字を稱へ、口に是の言を作す。「我れ某甲、所犯の罪に於て疑を生ず、今大德に向つて自ら說く、後疑なき時を須つて、當さに如法に懺悔すべし」と。是くの如くし已りて聞戒することを得」と』。爾の時說戒の日に、衆僧集まりて一處に在り、說戒せんと欲す。時に比丘あり罪を犯す。彼れ卽ち是の念を作す、「世尊戒を制したまふ、犯者は說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯者に向つて懺悔することを得ず、犯者は他の懺を受くることを得ずと。我れ今當さに云何がすべき」と。彼の說戒の人に語つて言はく、『小しく止めよ、說戒すること莫れ、我れ某甲の罪を犯す、我れ長老に從つて懺悔せんと欲す』と。此の語を作す頃に擧衆鬧亂す。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し異處あり、衆僧集まりて一處にあり、說戒せんと欲す。說戒の時に當り、比丘あり罪を犯す。彼の比丘、若しは人ありて擧し、若しは擧せず、若しは憶念を作し、憶念を作さず、其の人自ら罪を憶して發露し、自ら是の罪あることを知る、彼の比丘當さに邊人に語りて言ふべし、「我れ某甲の罪を犯す、今長老に向つて懺悔す」と。復是の念を作す、「設し傍人に語らば恐らくは衆僧を鬧亂し、說戒を成ぜず」と。彼の比丘當さに心に念ずべし、「須らく坐を罷め已りて、當さに如法に懺すべし」と。作

すこと是くの如くにして說戒を聽くことを得』と。爾の時衆僧集まりて一處にあり、說戒の時に當り、比丘あり、罪に於て疑あり、彼れ是の念を作して言はく、「世尊戒を制したまひ、說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯者に向つて懺悔することを得ず、犯者他の懺悔を受くることを得ず、我れ今云何がすべき」と。卽ち說戒人に語りて言はく、『汝小しく止めよ、我れ某甲の罪を疑ふ、長老に向つて說かんと欲す』と。是の語を作し已りて、擧衆閙亂す。時に諸の比丘、此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し衆僧集まりて一處にあり、說戒せんと欲す。說戒の時に當り、比丘あり罪に於て疑あり、而も彼の比丘、擧あり不擧あり、憶念を作す、憶念を作さゞるあり、彼れ自ら過を憶せば、當さに比座に語りて言ふべし。「我れ罪に於て疑あり、今長老に向つて說く、座を罷め已つて疑なき時を須つて、當さに如法に懺悔すべし」と。若し復是の念を作さく、「我れ比座に向つて語らば、恐らくは衆僧閙亂し、說戒を成ぜず」と。彼れ應さに心に念ずべし、「座罷み已りて疑なき時を須つて、如法に懺悔せん」と。作すこと是くの如きものは說戒することを得』と。

爾の時、說戒日に當り、異の住處あり、一切の僧盡く有犯なり、皆自ら念じて言はく、「世尊戒を制したまふ、有犯の者は說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯者に從つて懺悔することを得ず、犯者は他の懺を受くることを得ず、我等當さに云何がすべき」と。卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し異の住處あり、一切の僧盡く犯なり、皆自ら念じて言はく、「世尊戒を制したまふ、犯すある者は說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯者に從つて懺悔することを得ず、犯す者は他の懺を受くることを得ず」と。若し客比丘の來るあり、淸淨にして無犯ならば、當さに彼所に至り、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著けて合掌し、若し上座ならば足を禮し已りて、口に自ら所犯の戒の名を稱へ、是の言を作す、「我れ某

甲、某甲の罪を犯す、今大德に向つて說く」と。彼れ當さに語りて言ふべし、「厭離の心を生ぜよ」と。此れ報へて言はく、「爾り」と。若し客比丘の來るなければ、卽ち當さに二三人を差し、比近の清淨比丘衆の中に詣り、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著けて合掌し、自ら所犯の戒の名を稱へ、口に是の言を作す。「我れ某甲の罪を犯す、今大德に向つて說く」と。彼れ當さに語りて言ふべし、「汝厭離の心を生ぜよ」と。報へて言はく、「爾り」と。此の比丘當さに還り來りて所住の處に至る。所住の處の諸の比丘、當さに此の比丘に向つて犯を說くべし、作すこと是くの如くにし已りて、當さに說戒すべし』と。爾の時一異住處あり、一切の僧罪に於て疑あり、各是の念を作す、「世尊戒を制したまふ、犯すある者は說戒するを得ず、聞戒するを得ず、犯者に從つて懺悔するを得ず、犯者は他の懺を受くることを得ず、我等當さに云何がすべき」:と。卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し異の住處の一切の僧、罪に於て疑あり、各是の念を作す、「世尊戒を制したまふ、有犯の者は說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯者に從つて懺悔することを得ず、犯者は他の懺を受くることを得ず」と。若し客比丘ありて來り、清淨にして無犯ならば、當さに往いて彼所に詣るべし、偏露右肩にして革屣を脫し、若し上座は足を禮し已り、右膝地に著け、合掌して自ら所犯の戒名を稱へ、口に是の語を作す、「我れ某の罪に於て疑を生ず今大德に向つて說く、後に疑なき時を須つて、當さに如法に懺悔すべし。若し客比丘あることなければ、當さに三比丘を遣はし、比近の清淨比丘衆中に詣るべし、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著けて合掌し、若し上座は足を禮し已り、自ら所犯の戒名を稱し、口に是の語を作す。「我れ某罪に於て疑を生ず、今大德に向つて說く、後疑なき時を須つて、當さに如法に懺悔すべし」と。彼の比丘當さに本住處に還るべし。諸の比丘當さに此の比丘に向つて犯戒の名を說くべし。作すことを是くの如くし已りて、然る後に說戒せよ』と。爾の時衆僧集まりて一處に在り、說戒せんと欲す。

說戒の時に當り、一切の衆僧盡く罪を犯せり。各是の念を作さく、「世尊戒を制したまふ。有犯の者は說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯比丘に向つて懺悔することを得ず、犯者は他の懺悔を受くることを得ず、我等今當さに云何がすべき」と。即ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、衆僧集まりて一處に在り、說戒せんと欲す、說戒の時に當り、一切の衆僧盡く罪を犯す、彼れ各々是の念を作さく、「世尊戒を制したまふ、犯者は說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯者に向つては懺悔することを得ず、犯者は他の懺を受くることを得ず』と、彼の比丘白し已りて當さに懺悔すべし。當さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の一切の衆僧罪を犯す、若し僧時到らば、僧此の一切の僧の懺悔を忍聽せよ、白すること是くの如し」と。此の白を作し已りて、然る後に說戒せよ』と。爾の時衆僧集まりて一處に在り、說戒せんと欲す。說戒の時に當り、一切の衆僧罪に於て疑あり、彼れ各是の念を作さく、「世尊戒を制したまふ、「犯すあるものは說戒することを得ず、聞戒することを得ず、犯者に向つては懺悔することを得ず、犯者は他の懺悔を受くることを得ず」と、我等當さに云何がすべき」と。即ち諸の比丘に語る。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し衆僧集まつて一處に在り、說戒せんと欲す。說戒の時に當り、一切の僧罪に於て疑あり、各念じて言はく、「世尊戒を制したまふ、犯すある者は說戒するを得ず、聞戒するを得ず、犯者に向つては懺悔するを得ず、犯者は他の懺を受くることを得ず」と。彼の一切の僧、白を作し已りて、應さに其の罪を說くべし、當さに是くの如きの白を作すべし、「大德僧聽け、此の一切の僧罪に於て疑あり、若し僧時到らば、此の衆僧自ら罪を說くことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。是くの如きの白を作し已りて、然る後に說戒することを得』と。爾の時說戒日に、一切の僧盡く罪を犯す、然も所犯の罪名を識らず、罪相を識らず、諸の比丘是の念を作さく、「我等當さに云何がすべき」と。即ち諸の比丘に告ぐ。諸

の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、說戒日に一切の僧盡く罪を犯す、而も罪名を識らず、罪相を識らずと。若し客比丘ありて來り、若し持法持律持摩夷ならば、當さに彼の所に往き、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著けて合掌して白して言はく、「大德、若し比丘あり、如是如是の罪を犯さば何等をか犯せる」と。彼の持律報へて言はく、「如是如是の罪を犯す」と。客比丘、彼の比丘の敎授し易きを知らば、將に屛處に在り、餘の比丘をして、眼見耳不聞處に立たしめ、敎へて如法に懺悔せしめ、懺悔し已りて、還りて彼の比丘の所に至り是の言を作す、「此の比丘所犯の罪は今已に懺悔す」と。餘の比丘是くの如きの比丘の懺悔を信ずる者は善し、若し懺悔を信ぜざれば、餘の比丘强逼して懺悔せしむることを得ず。』

爾の時、說戒日に、客比丘ありて至る。彼の客比丘[一四]十四日說戒し、舊比丘十五日說戒す。諸の比丘云何せんを知らず、卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し住處ありて、說戒の日に客比丘ありて來ること少し。客比丘は十四日、舊比丘は十五日ならば、客比丘は少し、當さに舊比丘に從ふべし、若しせざれば法の如く治せよ』と。爾の時住處あり、說戒日に客比丘ありて來る、舊比丘と等し。客比丘とは十四日說戒、舊比丘は十五日ならば、客比丘は等し、當さに舊比丘に從ふべし、若し從はざれば、當さに法の如く治すべし。若し說戒の日、客比丘ありて來ること多し、客比丘十四日說戒、舊比丘十五日ならば、舊比丘は少し、應さに客比丘に從つて和合を求むべし。若し彼れ與に和合すれば善し、若し與に和合せざれば、舊比丘は、應さに界外に出でゝ說戒すべし。時に說戒日に異住處あり、客比丘來ること少し、客比丘十五日、舊比丘十四日ならば、客比丘は少し、當さに舊比丘に從つて和合を求むべし。若し與に和合すれば善し、若し與に和合せざれば、客比丘は應さに界外に出でゝ說戒すべし。時に說戒日に、異住處あり、客比丘來りて舊比丘と等し、客比丘十五日、舊比丘十四日ならば、應さに舊比丘に從つて和合を求む

【一四】客比丘十四日、舊比丘十五日說戒について、少・等・多の區別あり、故に、客比丘に少・等・多で六句となる。之をまた、客比丘十五日、舊比丘十四日とすれば、之にてまた六句ある。故に合して總べて十二句を爲すわけである。

べし、若し與に和合すれば善し、若し與に和合せざれば、客比丘應さに界に出でゝ說戒すべし。時に說戒日に、異住處あり、客比丘來ること多し。客比丘十五日、舊比丘十四日ならば、舊比丘は少し、應さに客比丘に從つて和合を求むべし、若し從はゞ善し、若し從はざれば法の如く治す。說戒の日に當り、客比丘來る少し、客比丘十六日、舊比丘十五日ならば亦是くの如し。[一五]時に說戒日に住處あり、舊比丘集まりて說戒せんと欲す。說戒の時客比丘來ること少し、彼れ是くの如きの念を作す、「我等當さに云何がすべき」と。即ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、「若し說戒日に、住處あり、舊比丘集まりて說戒せんと欲す。說戒の時客比丘來ること少し。舊比丘若し已に戒序を說き竟らば、客比丘當さに淸淨を告ぐべし。餘は當さに次第に聽くべし。若し說戒竟りて、擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起たんに、客比丘來ること少ければ、當さに淸淨を告ぐべし、告げざれば法の如く治す。爾の時說戒日に、舊比丘說戒せんと欲す、客比丘來ること等しければ、舊比丘當さに更に與に說戒すべし。說かざれば法の如く治す。若し說戒竟り、若し擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起たんに、客比丘來ること等しければ、舊比丘當さに更にために說戒すべし、せざれば應さに法の如く治すべし。爾の時說戒日に、一住所あり、舊比丘集まりて說戒せんと欲す、時に客比丘ありて來ること多し。舊比丘應さに更にために說戒すべし、せざれば法の如く治せよ。若し說戒竟りて、擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起たんに、客比丘來ること多ければ、舊比丘應さに更にために說戒すべし、せざれば法の如く治せよ。爾の時住處あり、說戒の日、客比丘坐して說戒せんと欲す、舊比丘來ること少し。客比丘若し已に戒序を說き竟らば、當さに淸淨を告ぐべし、餘は當さに次第に聽くべし。若し說戒竟りて、擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起たんに、舊比丘來る少ければ、當さに淸淨を告ぐべし、せざれば法の如く治す。爾の時住

【一五】客比丘說戒に戒序・說戒竟の二とし、舊比丘とゝに來るに少・等・多あり、六句を成す。舊比丘說戒の場合も亦之と等しく六句を成し、合して十二句となる。

處あり、說戒日に、客比丘坐して說戒せんと欲す。舊比丘來ること等しければ、客比丘應さに更にために說戒すべし、せざれば法の如く治す。若し說戒竟りて、擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起たんに、舊比丘來ること等しければ、客比丘更にために說戒すべし、せざれば法の如く治す。爾の時住處あり、說戒日に、客比丘坐して說戒せんと欲す。舊比丘來ること多ければ、客比丘應さに更にために說戒すべし、せざれば法の如く治す。若し說戒竟りて、擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起たんに、舊比丘來ること多ければ、客比丘應さに更にために說戒すべし、せざれば法の如く治す。舊比丘說戒し、舊比丘來るも亦是くの如し。客比丘說戒し、客比丘來るも亦是くの如し。爾の時異住處あり、說戒日に、[一六]客比丘ありて來り、舊比丘の未だ來らざるを知るも、「我等若しは四人あり、若しは過四人なれば、羯磨を作し、共に說戒すべし」と、卽ち羯磨を作し、共に說戒す。羯磨說戒を作す時に舊比丘來る。客比丘是の念を作す、「我等當さに云何がすべき」と。卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し說戒の日、住處あり、客比丘の來るあり、舊比丘の未だ來らざるあるを知り、「我等四人若しは過四人あらば、羯磨を作し、共に說戒すべし」と、彼人共に羯磨を作し說戒す。羯磨を作し說戒する時、舊比丘來ること少く、若し已に戒序を說かば、當さに淸淨を語るべし、餘は當さに次第に聽くべし。若し說戒竟り、擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起たんに、舊比丘來ること少ければ、當さに淸淨を告ぐべし、せざれば法の如く治す』と。時に住處あり、說戒の日に客比丘ありて來至す。舊比丘未だ來らざるあるを知り、「我等四人、若しは過四人あれば、羯磨を作し、說戒すべし」と。羯磨說戒を作す時、舊比丘來ること等しければ、客比丘應さに更に說戒すべし、若しせざれば法の如く治す。若し說戒竟り、擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起たんには、舊比丘來ること等しければ、客比丘應さに更に說戒す

【一六】客比丘四人、過四人にて、羯磨說戒の時、舊比丘來る、これに少・等・多あり、戒序・說戒竟に配して總べて六句あり。舊比丘四人過四人も之に同じく六句あり、以上の三種の、合して十二句を成す。總じて三十六句となること知るべし。

べし、せざれば當さに法の如く治すべし。爾の時住處あり、說戒日に、客比丘の來るあり、舊比丘未だ來らざるを知り、「我等四人、若しは過四人あれば、羯磨を作し說戒すべし」と。卽ち羯磨說戒を作す。羯磨說戒を作す時、舊比丘來ること多ければ、客比丘應さに更に說戒すべし、若しせざれば法の如く治すべし。若し說戒竟り、擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起たんに、舊比丘來ること多ければ、客比丘應さに更に說戒すべし、せざれば法の如く治す。爾の時住處あり、說戒日に、舊比丘來り、客比丘の未だ來らざるを知り、若しは少、若しは等、若しは多、亦是くの如し。客比丘說戒に客比丘來るも、亦是くの如し。舊比丘說戒に、舊比丘來るも亦是くの如し。或は言ふ「應さに說戒すべし」と、或は言ふ、「說戒すべからず」と。「若し來らざるものは〔一七〕失し去れ滅し去れ」と。種々の方便を作して他を破壞し、便ち說戒羯磨を作す、偸蘭遮を得。

爾の時、說戒の日に、客比丘ありて來り、舊比丘の住處房舍と舊〔一八〕比丘の相と敷繩床・木床・座具・氈褥・枕・洗足石・淨水・淨水瓶とを見る。相あるを見て求めず、便ち羯磨說戒を作すは、若し成すも羯磨說戒を成ぜず、罪あり。相を見て便ち求め、求めて得ざれば卽ち應さに喚ぶべし、若し喚ばずして羯磨說戒を作すは、羯磨說戒を成ぜず、罪あり。相を見て便ち求め、求めて得ず、求めて既に得ず、便ち言ふ「滅し去れ失れ去れ」と、種々の方便を作して他をして破壞せしめんと欲し、便ち羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨を成ぜず、偸蘭遮を犯す。相を見て便ち求め、求めて得ず、得ざれば便ち喚ぶ、喚び已りて羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨を成ぜず、不犯なり。相を見て便ち求め、求めて之を得、和合して羯磨說戒を作すは、羯磨說戒を成ず無犯なり。見疑も亦是くの如し。〔一九〕

爾の時、住處あり、舊比丘來り、客比丘の相を見、衣鉢針筒尼師壇洗脚處を見、見已りて求めず、便ち羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ぜず、罪あり。若し相を見て便ち求め、求めて得ざれば卽ち應さに喚ぶべし。若し喚ばずして便ち羯磨說戒を作すは、羯磨說戒を成ぜず、罪あり。相

【一七】「失し去れ滅し去れ」は、自暴自棄の語で、「どうでもなれ」とか、「勝手にしろ」とかいふ意味に當る。他の破壞のために、種々の言を設けて、羯磨說戒することをこゝには言つてるのである。

【一八】比丘の相といふのは、その住處や形相、其の他の物により、そこに比丘に住して居ることを知り、其の形相を見たことをいふのである。しかも之を見て居りながら、之を求めて共に羯磨說戒をなさないのである。

【一九】以上客比丘の舊比丘に對する場合は見相不求・求不喚・不得破壞・喚已・和合說戒の五句になつて居るのである。此の見相と同じく、見疑・聞・聞疑にも各五句あるのである。また舊比丘が客比丘に對する場合も、見・見疑・聞・聞疑となるから、合して八段となり、八段に各五句あり合して四十句を成すものである。

を見て便ち求め、求めて得ざれば便ち言ふ、「失れ去れ滅し去れ」と。種々に方便して、他をして破壞せしめんと欲し、便ち羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨を成ぜず、偸蘭遮を犯す。相を見て便ち求め、求めて見ず、得ざれば便ち喚ぶ、喚び已つて羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ぜず、不犯なり。相を見て便ち求め、求めて和合を得、羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ず、無犯なり。見疑も亦是くの如し。爾の時說戒日に、一異住處あり、客比丘來り、舊比丘の聲、經行の聲、謦欬の聲を聞き、誦經の聲を聞き、說法の聲を聞き、聞き已りて求めず、便ち羯磨說戒を作す。羯磨說戒を作す時、舊比丘來る、彼れ云何せんを知らず、卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し說戒日に、一住處あり、客比丘來る。舊比丘の聲、經行の聲、謦欬の聲、誦經の聲、說法の聲を聞き、聞き已りて求めず、便ち羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ぜず、罪を得。若し聞き已りて求め、求め已りて得ず、喚ばずして羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ぜず、罪を得。若し聞き已りて求め、求め已りて得ず、得ずして復喚ばず。既に喚ばずして便ち言ふ、「失し去れ滅し去れ」と。種々に方便して、他をして破壞せしめ、便ち羯磨說戒を作すは、「彼の比丘羯磨說戒を成ぜず、偸蘭遮を得。聞き已り求め、求め已りて得ず、得ざれば便ち喚び、喚び已りて羯磨說戒を作すは、彼の比丘の羯磨を成ぜず罪なし。聞き已り求め、求め已りて得、得已りて和合して共に羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪なし。若し聞疑も亦是くの如し。時に一住處あり、說戒の日舊比丘來り、客比丘の聲、經行の聲、謦欬の聲、誦經の聲、說法の聲、抖擻衣の聲を聞き、聞き已りて求めず、便ち羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ぜず、罪あり。聞き已り求め、求め已りて得ず、得ず已りて喚ばず、羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ぜず、罪あり。聞き已り求め、求めて得ず、得ず已りて喚はず、喚ばず已り便ち言ふ、「失し去れ滅し去れ」と、種々に方便して、他をして破壞せしめんと欲し、便ち

羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ぜず、偸蘭遮を得。聞き已り求め、求め已りて得ず、得ず已りて便ち喚ぶ、喚び已りて羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ぜず、罪なし。聞き已りて求め、求め已りて得、得已りて和合して共に羯磨說戒を作すは、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪なし。聞疑も亦是くの如し。

爾の時、一異住處あり、說戒日に客比丘來り、舊比丘の[二〇]界場の上に在るを見、見て求めず、便ち羯磨說戒を作す。諸の比丘是の念を作さく、「我等當さに云何がすべき」と。卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等善く聽け、若し異住處あり、說戒の日に客比丘來り、舊比丘の界場の上に在るを見、見て求めずして便ち羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨說戒を作すは罪あり。若し見已りて便ち求め、求めて得ず喚ばず、便ち羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪あり。見已りて求め、求め已りて喚び、喚び已りて羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪なし。見疑も亦是くの如し。爾の時異住處あり、說戒の日に、舊比丘來る、客比丘の戒場の上にあるを見、見て求めず、便ち羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪あり。若し見已りて便ち求め、求め已りて得ず、而も羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪あり。見已りて求め、求め已り喚び、喚び已り羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪なし。見疑も亦是くの如し。爾の時異住處あり、舊比丘の界場の上に在るを聞き、聞き已りて求めず、便ち羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪あり。聞き已りて求め、求め已りて喚ばず、喚ばず已りて便ち羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪あり。聞き已りて求め、求め已り喚び、喚び已りて羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪なし。聞疑も亦是くの如し。舊比丘來り、客比丘の界場の上に在るを聞くも亦是くの如し。聞疑も亦是くの如し』と。

[二一]爾の時、一異住處あり、說戒の日に、客比丘來り、舊比丘の界內に在るを見、見て求めずして便

【二〇】界場は、大界戒場である。之にまた見聞疑あること、總べて前に準じ、合して二十四句を成すのである。卽ち客比丘に十二句、舊比丘に十二句である。卽ち不求・不喚・喚已の三句に、見・見疑・聞・聞疑あるが故十二句を成すことは知るべきである。

【二一】以下界內堺外の二十四句である。前に準じて知るべし。堺外は、言ふまでもなく僧伽藍の外を指す。

ち羯磨說戒を作し、羯磨說戒を作す時舊比丘來る、彼れ是の念を作さく、「我等當さに云何がすべき」と。即ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『汝等能く聽け、若し一異住處あり、說戒の日に客比丘來り、舊比丘の界内に在るを見、見て求めず、便ち羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨を成せず、罪あり。見て求め、求めて喚ばず、便ち羯磨說戒を作さば、羯磨說戒を成ぜず、罪あり。見て便ち求め、求め已りて喚び、喚び已りて和合して羯磨說戒を作さば、彼の比丘羯磨說戒を成ず、罪なし。見疑も亦是くの如し。爾の時住處あり、說戒の日に、舊比丘ありて來り、客比丘の界内に在るを見るも亦是くの如し。見疑も亦是くの如し。客比丘、舊比丘の界内に在る聞くも亦是くの如し。聞疑も亦是くの如し。舊比丘、客比丘の界内に在るを聞くも亦是くの如し。聞疑も亦是くの如し』と。

時に六群比丘是くの如きの念を作す。「有比丘有住處より、無比丘無住處に至らんに、恐らくは餘の比丘、我等の爲めに羯磨を作し、若しは說戒を遮せん」と。時に諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、「有比丘有住處より、無比丘有住處に至らんに、恐らくは餘の比丘我等が爲めに羯磨を作し、若しは說戒を遮せん」と』。彼の比丘是の念を作す、「有比丘有住處より、無比丘無住處に至らんに、恐らくは餘の比丘我等が爲めに羯磨を作し、若しは說戒を遮せん」と。佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、有比丘有住處より無比丘有住處に至らんに、恐らくは餘の比丘我等がために羯磨を作し、若しは說戒を遮せん』と。彼の比丘是の念を作す、「有比丘有住處より、無比丘無住處に至らんに、恐らくは餘の比丘我等がために羯磨を作し、若しは說戒を遮せん」と。佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、有比丘有住處より無比丘無住處に至らんに、恐らくは餘の比丘我等が爲めに羯磨を作し、若しは說戒を遮せん』と。彼の比丘是の念を作す、「我れ有比丘有住處無住處に至り、若しは比丘界場上に往かんに、恐らくは

餘の比丘、我が爲めに羯磨を作し、若しは說戒を遮せん」と。佛言はく、『是の念を作すべからず、有比丘有住處より、無比丘有住處無住處に至り、若しは比丘界場上に往かんに、恐らくは餘の比丘、我が爲めに羯磨を作し、若しは說戒を遮せん』と。若しは僧と共に去るなく、若しは難事なきに去るは突吉羅なり。有比丘無住處より、無比丘有住處に至るも亦是くの如し。有比丘無住處より、無比丘無住處に至るも亦是くの如し。有比丘無住處より、無比丘有住處無住處に至るも亦是くの如し。有比丘有住處無住處より、無比丘有住處に至るも亦是くの如し。有比丘有住處無住處より、無比丘無住處に至るも亦是くの如し。有比丘有住處無住處より無比丘有住處無住處に至るも亦是くの如し。若しは親厚智識の爲めにするも亦是くの如し。

時に六群比丘尼是くの如きの念を作す。「寺內に往き餘の比丘を遮して言はん、「六群比丘の爲めに羯磨を作し、說戒を遮する勿れ」と。爾の時諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『比丘尼是くの如きの念を作すべからず、「寺內に往き、餘の比丘を遮して言はん、「六群比丘の爲めに羯磨を作し、說戒を遮する勿れ」と。亦比丘尼の前に於て羯磨を作し、若しは說戒を遮すべからず』と。時に諸の比丘尼・式叉摩那・沙彌・沙彌尼を遣はし、寺內に至りて餘の比丘を遮す、『六群比丘の爲めに羯磨を作し、說戒を遮する勿れ』と。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『比丘尼是の念を作すべからず、式叉摩那・沙彌・沙彌尼を遣はし、寺內に至りて餘の比丘を遮し、六群比丘の爲めに羯磨を作し、說戒を遮する勿らしめ、亦式叉摩那・沙彌・沙彌尼の前に在りて羯磨を作し、說戒を遮すべからず』と。彼の諸の比丘尼、復是の念を作す、「白衣の智識を遣はし、寺內に往いて餘の比丘を遮し、六群比丘の爲めに羯磨を作し、說戒を遮するなからしめん」と。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『比丘尼是くの如きの念を作すべからず、「白衣の智識を遣はし、寺內に往いて餘の比丘を遮し、六群比丘の爲めに羯磨を作し、說戒を遮するなからしめん」と。白衣の前に在りて

羯磨を作し、若しは説戒を遮すべからず』と。

爾の時、摩竭國瓶沙王、佛と衆僧の爲めの故に、諸將を遣はして僧伽藍を守護せしむ。時に諸の比丘諸將に語りて言はく、『汝等且らく出で、外に在れ、我等羯磨説戒を作さんと欲す』と。諸將報へて言はく、『王瓶沙に遣來せらる、佛と衆僧の爲めの故に守護す、王の意犯し難し、我等外に出づること能はず』と。爾の時諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『當さに和喩して語り、出でしむべし。若し出づれば善し、若し出でざれば、汝等自ら相將に出で、不見不聞處に至り、羯磨を作し、共に説戒せよ。未受大戒人の前に在りて、羯磨説戒を作すべからず』と。時に天龍鬼神あり、來りて説戒を聽く、天眼を得る比丘あり、之を見て皆畏愼の心を生じ、念じて言はく、「世尊戒を制したまふ、我等大戒人の前に於て、羯磨説戒を作すことを聽さず」と。爾の時諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、人の未受大戒を除いて、餘は前に在りて羯磨説戒を作すことを聽す』と。

爾の時、拘睒彌の衆僧破れて二部と爲る。時に諸の比丘、舍衞に於て和合せんと欲す。佛言はく、『自今已去、白し已りて然る後に和合することを聽す、當さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、所由の諍事僧をして鬪諍せしめ、彼此和せず、彼の人罪を犯す、爲めに擧を作し已りて還た解罪を爲し、僧塵垢已に滅す。若し僧時到らば、僧、僧の和合を忍聽せよ、白すること是くの如し」と。應さに是くの如きの白を作すべし、已りて和合を作せ』と。

爾の時、尊者優波離、座より起ちて偏露右肩にして革屣を脱し、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『世尊、所因の事僧をして鬪諍せしめ、而も和合せずして衆僧破壞し、僧をして塵垢せしめ、僧をして別異せしめて分れて二部となり。而も此の事未だ決斷除滅せず、衆僧如法和合を成ぜんと爲んや不や』と。佛優波離に告げたまはく、『若し衆僧所因の事僧をして鬪諍せしめ、和合せ

ずして衆僧破壞し、僧をして塵垢ならしめ、僧をして別異ならしめて二部と爲る。若し能く中に於て改悔し、相發擧せざれば、此れ則ち名けて、衆僧法を以て和合すと名づく。自今已去、先づ白して然る後に說戒すべし。當さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、衆僧所因の諍事、僧をして鬪諍せしむ、而も和合せずして衆僧をして破壞せしめ、僧をして塵垢ならしめ、僧をして別異ならしめ、分ちて二部と爲る。彼の人自ら犯罪の事を知る、今已に改悔して僧垢を除滅す、若し僧時到らば、僧の和合說戒を忍聽せよ、白すること是くの如し。是くのごときの白を作し已りて、然る後に和合說戒すべし』と。(說戒揵度竟る。)

四分律卷第三十六

說戒揵度下

八四一

巻の第三十七（二分の十六）

安居揵度

爾の時、佛、舎衞國祇樹給孤獨園に在しき。時に六群比丘、一切の時【一】春夏冬に於て人間に遊行す。時に夏月天暴雨にして、水大に漲り、衣鉢・坐具・針筒を漂失し、生草木を踏殺す。時に諸の居士見て皆共に譏嫌す『沙門釋子慚愧を知らず、外自ら稱して言はく「我れ正法を知る」と、是くの如きは何れに正法かある。一切の時春夏冬に於て人間に遊行し、夏天暴雨して水大に漲り、衣鉢・坐具・針筒を漂失し、草木を踏殺し、他の命根を斷ず、諸の外道の法すら、尙ほ三月安居す、此の諸の釋子、而も一切の時春夏冬に於て人間に遊行し、天暴雨して水大に漲り、衣鉢・坐具・針筒を漂失し、生草木を踏殺し、他の命根を斷ず。蟲鳥に至るも尙ほ巢窟止住の處あり、沙門釋子一切の時春夏冬人間に遊行し、天暴雨して水大に漲り、衣鉢・坐具・針筒を漂失し、生草木を踏殺し、他の命根を斷ず』と。時に諸の比丘聞く、其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり、六群比丘を呵責して言はく『汝云何ぞ一切の時春夏冬に於て人間に遊行し、夏天暴雨して水大に漲り、衣鉢・坐具・針筒を漂失し、生草木を踏殺する。諸の居士草木の中に於て命根の想あり、居士をして譏嫌すが故に罪を得しむるや』と。時に諸の比丘世尊の所に往き、頭面に佛足を禮して一面に在りて坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時此の因緣を以て比丘僧を集め、無數の方便を以て六群比丘を呵責したまふ『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ六群比丘、一切の時春夏冬に於て人間に遊行し、夏天暴雨して水大に漲り、衣鉢・坐具・針筒を漂失し、生草木を踏殺する、居士草木に於て命根の想あり、譏嫌するが故に居士をして罪を得しむ』と。無數の方便を以て

【一】春夏冬は、印度は一年四期でなく、三期に分つ故、此の春夏冬で一年中といふことになる。

六群比丘を呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『汝一切時春夏冬に於て人間に遊行すべからず、今より已去、諸の比丘三月夏安居することを聽す、所依の人に白して言へ、「我れ此處に於て夏安居す。長老一心に念ぜよ、「我れ某甲・某甲聚落・某甲僧伽藍・某甲房前に依りて三月夏安居す、房舍破れて修治の故に」と。第二第三說く、後三月夏安居の法も亦是くの如し』と。時に諸の比丘の住處に所依の人なし、何の所に白さんを知らず、諸の比丘疑あり、安居を成ずるや不やを知らず、卽ち世尊に白す。世尊言はく、『發意して安居を爲すが故に、便ち安居を成ずることを得、今日より、諸の比丘若しは所依の人なきも、心に安居を念ずることを聽す』と。爾の時比丘、住處に於て安居せんと欲す。所依人なく白す處なく、忘れて心に安居を念せず、疑あり、安居を成ずるや不やを知らず、往いて世尊に白す。世尊言はく、『若し安居の爲めの故に來らば、便ち安居を成ず』と時に諸の比丘、安居の處に往き、安居せんと欲して界內に入り、便ち明相出づ、彼れ疑あり、安居を成すとせんや不やと。卽ち世尊に白す。世尊言はく、『若し安居の爲めの故に來らば、便ち安居を成ず。爾の時比丘安居の處に往き、安居せんと欲し、僧園內に入りて明相出づ、彼れに疑あり、安居を成ずとせんや不やを知らず、卽ち世尊に白す。世尊言はく、『若し安居の爲めの故に來らば、便ち安居を成ず』と。爾の時比丘、住處に往き安居せんと欲し、一脚界に入り、一脚界外に在りて明相出づ、疑あり、安居を成ずるや不やを知らず、卽ち世尊に白す。世尊言はく、『若し安居の爲めの故に來らば、便ち安居を成ず』と。時に諸の比丘、住處に往いて安居せんと欲し、一脚僧園內に入り、一脚僧園外に在りて明相出づ、疑あり安居を成ぜんや不やを知らず、卽ち世尊に白す、世尊言はく、『若し安居の爲めの故に來らば、便ち安居を成ず』と。若し安居竟れば客比丘來りて舊比丘を移す。佛言はく、『移すべからず、亦去るべからず』と。時に諸の比丘、住處に於て房舍臥具を看ずして便ち房を受け、不好房惡臥具を得、便ち舊住の比丘を瞋りて言はく、『汝心不平等なり、喜ぶ所の者には

【二】明相出づとは、そこに到着した時からの安居の日に數へらるゝや否やといふことである。安居は四月十六日より、七月十五日まで三ケ月間を規定するから、安居の場所に四月十六日の朝到着し、此の時夜が明けても、安居が開始された日に數ふることを許さるゝや否やといふのである。

便ち好房好臥具を與へ、喜ばざる者には、便ち惡房惡臥具を與ふ。我れを喜ばざるが故に、我れに惡房惡臥具を與ふ。時に諸の比丘、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊諸の比丘に告げたまはく、『若し比丘、住處に於て安居せんと欲せば、應さに先づ自ら往いて、房舍臥具を看、然る後に房を受けよ。今より已去、分房分臥具することを聽す。應さに分房分臥具人を差し、白二羯磨すべし。五法ありとは、差して房舍臥具を分つべからず、若しは愛、若しは瞋、若しは怖、若しは癡、若しは可分不可分を知らず、是くの如きの五法あり、差して臥具房舍を分つべからず、五法あり、差して房舍臥具を分つべし。若しは不愛・不瞋・不怖・不癡、可分不可分を知る、是くの如きの五法あり、應さに差して房舍を分ち、臥具を分つべし。應さに是くの如く羯磨に堪能なる者、若しは上座、若しは次座、若しは誦律、若しは誦律せざるも羯磨を作すに堪能なる者を差すべし。應さに是くの如く白すべし。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧某甲比丘を差し、臥具房舍を分つことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、僧某甲比丘を差し、臥具房舍を分つ、誰か諸の長老、僧某甲比丘を差し、房舍臥具を分つことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に僧某甲比丘を差して、房舍臥具を分つことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。分房舍臥具人を差し竟らば、應さに房舍を數へ、臥具を數ふべし。彼れ應さに幾房に人ありて住し、幾房か空しく、幾房か臥具あり、幾房か臥具なき、幾房か被あり、幾房か被無き、幾房か利養あり、幾房か利養なき、幾房か器物あり、幾房か器物なき、幾房か檀越施衣あり、幾房か檀越施衣なき、幾房か福饒あり、幾房か福饒なき、誰か是れ經營の房主。若し經營の者あれば應さに問ふべし『長老何處の房に住せんと欲し、何處の房には住せざる』と。彼れ盡く房舍臥具を數へ竟り、上座の前に至りて是くの如きの言を作す。『大德上座、是くの如きの房舍臥具意の所樂に隨つて便ち取れ』と。先づ上座の房を與へ竟りて次ぎに第二上座に與へ、第二上座竟りて次ぎに第三

上座に與へ、第三上座竟りて次ぎに第四上座に與ふ。是くの如く展轉して乃至下座は、若し餘の房舍臥具座あれば、應さに上座より更に分つべし。若し復餘の房舍あれば、復應さに更に上座より分つべし。若し餘故ほ多ければ、應さに客比丘の住處を開すべし。若し客比丘ありて來らば應さに與ふべし。若し惡比丘來らば與ふべからず、善比丘來らば應さに與ふべし、若し餘あらば留むべし。若し留房は遮すべからず、若し遮すれば、應さに法の如く治すべし。時に比丘あり、缺壞の房を得、心に念ずらく、「我れ是の房を受けず、恐らくは我れをして修治せしむ」と。諸の比丘即ち世尊に白す。世尊言はく、『應さに受くべし、力に隨つて當さに治すべし』と。時に諸の比丘、僧集處、若しは溫室、若しは夏堂、若しは經行堂を分つ。客比丘來りて房を得ず、住する處なし。諸の比丘此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊言はく、『僧の都集處、若しは溫室、若しは夏堂、若しは經行堂を分つべからず、若し閣下の堂是れ衆集處ならば、閣上は應さに分つべし。若し閣上の堂是れ衆集處ならば、閣下の堂は應さに分つべし』と。時に諸の比丘遍く房舍を看、阿練若窟を見る。彼れ自ら念じて言はく、「我れ當さに此の處に於て安居すべし」と。後に更に餘の比丘あり、阿練若窟を見て、彼れ是くの如く言ふ、『我れ當さに此の處に於て安居すべし』と。初め十六日、衆多の比丘共に集まりて窟內に在り、住處迮狹にして諸の疾病多し、諸の比丘即ち世尊に白す。世尊言はく、『若し比丘、是くの如き處に在りて安居せんと欲せば、先づ往いて相を作し、若しは手迹を作し、若しは輪を作し、若しは摩醯陀羅の像をなし、若しは藤像を作し、若しは葡萄蔓像を作し、若しは華を作し、若しは五色を作し、若しは書して名字を作し、「某甲此に於て安居せんと欲す」と。佛先きに相を作す者の住することを聽したまふ。此の比丘若しは此の住處に於て去るに、名字を滅せずして便ち去る。餘の比丘見已りて、先きに已に占むる者ありと、敢て住せず。諸の比丘此れを以て佛に白す。佛言はく、『名を滅せずして便ち去るべからず、應さに名を滅して去るべし』と。

爾の時、波斯匿王、邊國の人民反叛す。時に自ら軍を領して往いて討つ。諸の比丘邊國に往く。彼の間房舍迮狹にして相容受せず、諸の比丘是くの如きの言を作す『佛我等に勅して、應さに臥具を分つべし』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく『床を齊りて分つべし、若し容受せずんば、應さに等しく繩床を分つべし、若し故ほ容受せずんば、應さに等しく臥處を分つべし、若し故ほ容受せずんば、應さに共に座處を分つべし』と。彼の比丘、此の定床褥臥具を移して、餘の房中に置く。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく『移轉すべからず』と。或は房あり、臥具多し、或は房あり、臥具少し。諸の比丘此の因緣を以て佛に白す。佛言はく『諸の比丘に、舊住人、若しは佛圖主、若しは經營人に語り、若しは三月安居に房を得る者あらば、是くの如き人等に語り、然る後に臥具を移轉することを得』と。諸の比丘、臥具を還復して本處に著かず、便ち去る。後に比丘來りて、是れは此の房の臥具を謂ひて便ち用ふ。諸の比丘、此の因緣を以て往いて佛に白す。佛言はく『臥具を還復せずして便ち去るべからず、應さに臥具を還復して去るべし、若しせざれば法の如く治すべし』と。時に房舍ありて缺壞す。諸の比丘畏愼あり『佛は臥具を轉移して、此の房より彼の房に至ることを聽したまはず』と。諸の比丘此の因緣を以て佛に白す。佛言はく『若し房舍破壞すれば、此の房の臥具を移して、餘の房に置くことを聽す』と。彼れ臥具を移して用ひず、而かも虫爛壞す。諸の比丘佛に白す。佛言はく『應さに用ふべし』と。佛既に用ふることを聽したまふ、彼れ洗脚せず、拭脚せず、用ひて襯體衣を作す、諸の比丘此の因緣を以て佛に白す。佛言はく、洗脚せず、拭脚せず、及び襯體衣を作すべからず』と。諸の比丘畏愼して、此れを以て佛に白す。『佛言はく「用ひて襯體衣を作すべからず」と。故に敢て手脚に觸れず』と。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく『膝已上、腋下は、體に襯することを得ざれ、手脚は觸るゝも苦なし』と。時に諸の檀越、諸の比丘に襯體衣を布施するあり、諸の比丘畏愼して敢て受けず『佛は襯體衣を用ふることを聽し

たまはず」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『檀越の施意に隨ふことを聽す』と。

若し房舍を治め竟り、先きの此の房の臥具を、還し移して本處に來らず。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『若し房舍を治め竟らば、應さに還た臥具を移して本處に著くべし、せざれば應さに法の如く治むべし。彼の比丘、此の寺の定臥具を移して餘寺に著く。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『此の寺の定臥具を移して、餘寺に著くべからず』と。若しは恐怖あり、若しは怨家あり、若しは人民反叛し、若しは國邑荒壞し、人民破喪し、住處も亦壞す。諸の比丘畏愼す、「佛は此の寺の定臥具を移して彼の寺に著くことを聽したまはず」と。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『若しは恐怖怨家あり、若しは反叛あり、國邑荒壞人民破喪し、住處亦壞せんには、餘處に移して臥具を移すことを聽す』と。時に諸の比丘畏愼す、佛は敎へて「僧の臥具を以て體に襯することを聽したまはず」と。故に好覆藏を得ず。諸の比丘此の因緣を以て佛に白す。佛言はく、『宜しきに隨つて覆藏して應さに移すべし、若し餘の比丘ありて索むるも、索むべからず、亦與ふべからず、可信を除く、後に必ず還得する者は應さに與ふべし。後國邑還た靜かに、人民還た復し、寺舍還た成るも、臥具を還さず。比丘此の事を以て佛に言す。佛言はく、『若し國邑已に靜にして、人民還た復り、寺舍已に成らば、應さに臥具を還すべし、若し還さゞれば、應さに法の如く治すべし。

爾の時、住處あり、四方の衆僧大に不定臥具・繩床・木床・麁細褥枕・毾㲪氍毹・地敷・澡瓶杖扇を得たり。諸の比丘、云何が處分せんを知らず、此の事を以て佛に白す。佛言はく、『房中に臥具なき者は付與することを聽す。若し餘りあらば上座より付與せよ』と。爾の時舍利弗・目連、世尊と共に安居せんと欲し、十五日に所住の處より往き、十七日に乃ち至る、當さに云何すべきかを知らず、卽ち諸の比丘に白す。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『後安居を聽す』と。二種

【三】毾㲪は、「名義標釋」には「毛席也」とある。又「之を大床の前、大榻の上に施し、上床に登る所以のものなり、因つて以て名と爲す」と解して居る。氍毹は、字書には、「織毛の褥」として居る。「名義標釋」によるに、氍は、音は舒とあり、字書には、音衢としてある。

の安居あり、前安居あり後安居あり。若し前安居にありては、應さに住すること前三月なるべし、若し後安居は、應さに住すること後三月なるべし。前安居の者自恣せんと欲す。後安居の者、自恣を得るや不やを知らず、此の事を以て佛に白す。佛言はく、『自恣を受くることを聽す』と。住して日足るを待ち、前安居の人歳を數ふ、後安居の人、歳を數ふるを得るや不やを知らず、諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『三月未だ足らざれば、歳を數ふべからず』と。前安居の者自恣し竟り、後安居の者を驅遣す。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『遣るべからず、亦去るべからず』と。前安居の人自恣竟りて、夏の所得物を分つ、後安居の者、畏愼して敢て分を受けず、「佛我等に、三月未だ竟らざるに、乞求して物を受くることを聽したまはず」と。諸の比丘、此の事を以て佛に白す。佛言はく、『比丘の受くることを聽す、餘日は應さに足して滿ぜしむべし』と。前安居の者自恣竟りて臥具を分つ、後安居の者、畏愼して敢て受けず、夏三月の日、未だ滿ぜざるを以ての故に。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『未來の爲めの故に受くることを聽す』と。爾の時諸比丘露處に安居す、風飄日曝を得て形體黑瘦し、皮膚剝裂し、往いて佛所に詣り、頭面禮足して却いて一面に坐す。世尊知りて故らに問ひたまふ『汝等何が故に形體黑瘦し、皮膚剝裂するや』と。諸の比丘佛に白して言さく、『露地に在りて安居するが故に爾り』と。佛言はく、『露地に在りて安居すべからず、自今已去、諸の比丘、覆障處を作りて安居することを聽す』と。爾の時諸の比丘樹上に安居す。卽ち樹上に在りて大小便利す。時に樹神瞋嫌し、其の便を伺つて命根を斷ぜんと欲す。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『自今已去、比丘樹上に在りて安居することを聽さず、亦樹に上るべからず、人頭に齊しきを除く。樹の左右を遶るべからず、大小便利澆潛して、樹を汚す』と。

爾の時、諸の比丘拘薩羅國に在り、人間に遊行あり、道に惡獸あり。時に諸の比丘、樹に上るこ

【四】「未來の爲めの故」とは、未だ日は三月に滿ちて居ないけれども、將來は必ず九十日を滿足するものであるといふ理由で、受くることを聽されるのである。つまり後安居は、前安居よりも後るゝ故、前安居結了よりも、後れて終るわけである。

と人に過ぐ。畏愼して還た下る、「佛我等に、樹に上りて人に過ぐることを聽したまはず」と。遂に惡獸の爲めに害せらる。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『自今已去、命難・淨行難の爲めの故に、樹に上りて、人頭を過ぐることを得るを聽す』と。諸の比丘、樹上の乾薪を取らんと欲す。鉤々を作りて取ることを聽す、梯を作りて取り、若しは繩羂にて取ることを聽す。後に諸の比丘畏愼して、敢て乾樹の上に上らず。佛言はく、『若し樹通身乾れたるは上ることを聽す』と。爾の時諸の比丘、樹下に於て安居せんと欲し、往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、樹下に在りて安居することを聽す。若し樹高くして人頭を過ぐれば、枝葉一坐を覆蔭するに足る』と。

時に六群比丘、蠟蜜を用ひて帳に塗り、中に坐して安居す。彼れ是くの如きの心を作す。「我等夜中に在りて宿し、朝は則ち藏擧す、其の見るあらん者は、當さに我等を神通を得たる人と謂ふべし」と。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『自今已去、蠟蜜を以て帳を塗り、中に在りて安居することを聽さず、亦諂曲して、身の爲めの故に、常の威儀を改むることを得ざれ』と。爾の時比丘、小屋內に在りて安居せんと欲す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、「自今已去、諸の比丘小屋內に在りて安居することを聽す、起ちて頭を礙へず、坐しては趣ち膝を容れ、亦水雨を障ふるに足る』と。

爾の時比丘、山窟中に在りて安居することを欲す、卽ち往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、山窟中に在つて安居することを聽す。起ちて頭を礙へず、坐しては趣ち膝を容れ、亦水雨を障ふるに足る』と。爾の時比丘、自然山窟の中に於て安居せんと欲す。時に諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、比丘自然山窟の中に在りて安居することを聽す、起ちて頭を礙へず、坐しては趣ち膝を容れ、亦水雨を障ふるに足る』と。爾の時比丘、樹空の中に於て安居せんと欲す。諸の比丘、佛に白す。佛言はく、『自今已去、諸の比丘樹空中に在りて安居することを聽す、起ちて頭を礙へず、坐しては膝を容れ、亦水雨を障ふるに足る』と。爾の時比丘、牧牛者に依りて安居せんと

欲す。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、牧牛者に依りて安居することを聽す、安居中に移從し、牧牛者の所去の處に隨ひ、應さに去るべし』と。爾の時諸の比丘、壓麻油人に依りて安居せんと欲す、往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、壓麻油人に依りて安居することを聽す。安居中に移從し、壓油人所居の處に隨ひて應さに去るべし』と。爾の時比丘、船上に於て安居せんと欲す。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、諸の比丘船上に在りて安居することを聽す。安居中に移從し、船所去の處に隨ひて應さに去るべし』と。爾の時比丘、斫材人に依りて安居せんと欲す。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、諸の比丘、斫材人に依りて安居することを聽す、安居中に移從して、斫材人の所去の處に隨ひて應さに去るべし』と。爾の時比丘、聚落に依りて安居せんと欲す。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、聚落に依りて安居することを聽す。安居中に、若し聚落分れて二分と爲らば、所供給、所須具足の處に隨つて住せよ、安居中移從すれば、所去の處に隨つて應さに去るべし』と。

爾の時、檀越あり、比丘を請じて言はく、『我れ布施せんと欲し、房舍に及ぶ』と。彼の比丘自ら念ずらく、「彼の處遠くして卽日還ることを得ず、佛未だ是くの如きの因緣ありて、去ることを得るを聽したまはず」と。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、七日を受けて去ることを聽す、專ら飮食の爲めの故に、七日を受けて去るべからず、餘の因緣を除く。若しは衣鉢坐具針筒乃至藥草の爲めにせば、第七日に至りて應さに還るべし』と。爾の時諸の比丘、餘の比丘長老を請じ來り、『我等僧殘を得たり、我が爲めに覆藏法・本日治・摩那埵、出罪を治せよ』と。比丘自ら念ずらく、「彼の處遠し卽日還ることを得ず、佛未だ是くの如きの因緣ありて、去ることあるを聽したまはず」と。諸の比丘、此の事を以て佛に白す。佛言はく、『是くの如きの事あらば、七日を受けて去り、七日に及びて還ることを聽す』と。爾の時、比丘尼、比丘皆長老を請じ來り「我等僧殘を得たり、

我が爲めに摩那埵、出罪を爲せ」と。比丘自ら念ずらく、「彼の處遠し、即日還るに及ばず、佛未だ是くの如き事ありて去るを聽したまはず」と、往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、是くの如き事あらば、七日を受けて去り、七日にして還ることを聽す』と。爾の時式叉摩那あり、比丘を請じて言はく、『長老來れ、我等戒を犯す、我等がために懺悔し、更に戒を受けしめよ、若しは大戒を受けしめよ』と。比丘自ら念ずらく、「彼の處遠し、即日還るに及ばず、佛未だ是くの如き事ありて去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、是くの如きの事あり、七日を受けて去り、七日に及びて還ることを聽す』と。爾の時沙彌あり、比丘を請ず、『長老來れ、我れ戒を受けんと欲す』と。比丘自ら念ずらく、「彼の處遠くして即日還るに及ばず、佛未だ是くの如きの事ありて去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、是くの如きの事あらば、七日を受けて去り、七日に及びて還ることを聽す』と。爾の時沙彌尼あり、比丘を請ず、『大德來れ、我れ六法を受けんと欲す』と。比丘自ら念ずらく、『彼の處遠し、即日還るに及ばず、佛未だ是くの如きの事ありて去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、是くの如きの事あらば、七日を受けて去り、七日に及びて還ることを聽す』と。爾の時不信樂の大臣あり、比丘大德を請じ來る、「我れ相見んと欲す」と。比丘自ら念ずらく、「彼の處遠し、即日還るに及ばず、佛未だ是くの如きの事ありて去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、是くの如きの事あらば、七日を受けて去り、若しは益あるも若しは益なきか、七日に及びて還れ』と。爾の時信樂の大臣あり、比丘を請じ、『大德來れ、我れ相見んと欲す』と。比丘自ら念ずらく、「彼の處遠し、即日還るに及ばず、佛未だ是くの如きの事ありて去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、是くの如き事あらば、七日を受けて去ることを聽す。此の信樂の優婆塞若しは病み、若しは諸の憂惱の事あり、若しは利養の爲めの故ならば、七日

に及びて應さに還るべし。爾の時不信樂の父母ありて比丘を請ず『大德來れ、我れ相見んと欲す』と。比丘自ら念ずらく、「彼の處遠し、卽日還ること能はず、佛未だ是くの如きのことありて去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく『自今已去、是くの如きのことあらば、七日を受けて去ることを聽す。若し不信樂を敎へて信樂ならしめ、若しは惡戒を敎へて持戒ならしめ、若しは慳貪を敎へて布施せしめ。若しは無智を敎へて有智ならしむるも、七日に及ばゞ應さに還るべし』と。爾の時信樂の父母あり、信を遣はして比丘を請ず『大德來れ、我れ相見んと欲す』と。比丘自ら念ずらく、「彼の處遠くして卽日還るに及ばず、佛未だ是くの如き事あるありて、去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく『自今已去、是くの如きの事あらば、七日を受けて去るべし。若しは信樂の父母、若しは病み、若しは諸の憂惱の事あり、若しは利益の事あらんに、七日に及びて應さに還るべし』と。爾の時母あり比丘を請ず『大德來れ、我れ相見んと欲す』と。比丘自ら念ずらく、「彼の處遠し、卽日還るに及ばず、佛未だ是くの如きことありて、去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく『自今已去、是くの如きの事あらば、七日を受けて去ることを聽す、七日に及びて應さに還るべし』と。爾の時父あり、比丘を請ずること亦是くの如し。兄弟・姉妹及び諸の親里・智識も亦是くの如し。爾の時比丘あり、六十種の經を誦す、梵動經の如し。日誦の人を求めんがための故に、人間に遊行せんと欲す。比丘自ら念ずらく、「彼の處遠し、卽日還るに及ばず、佛未だ我等に是くの如きの事ありて、去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく『自今已去、是くの如きの事あれば、七日を受けて去り、七日に及びて還ることを聽す』と。爾の時【五】經勞の比丘あり、作事ありて林樹の間に往くべし、自ら念ずらく、「彼の處遠し、卽日還るに及ばず」と、往いて佛に白す。佛言はく『自今已去、是くの如きの事あらば、七日を受けて去り、七日に及びて還ることを聽す』と。爾の時波斯匿王、邊國の人民反叛し、王自ら軍

【五】經勞は、一本經營とす、其の方が意味は解しやすい。建築其の他寺や房舍の作事等に從ふ比丘である。

を領して往いて討つ。王佛及び衆僧に供養するところの、衣被飲食所須の物を、不信樂の大臣奪つて與へず、諸の比丘往いて王に白さんと欲す。自ら念ずらく、「彼の處遠し、即日還るに及ばず、佛未だ是くの如きの事ありて、去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、是くの如きのことあらば、七日を受けて去り、七日の及びて還ることを聽す』と。爾の時波斯匿王、邊國の人民反叛す。時に王自ら軍を領して往いて討つ。爾の時不信樂の大臣あり、嫉妬の惡心を懷き、祇洹を鑿ちて渠を通ぜんと欲す。比丘往いて王に白さんと欲す。自ら念ずらく、「彼の處遠し、即日還るに及ばず、佛未だ是くの如きの事ありて、去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、是くの如きの事あらば、七日を受けて去り、七日に及びて還ることを聽す』と。爾の時檀越あり、信を遣はして比丘を請ず、「大德來れ、我れ布施せんと欲し、房舍に及ぶ」と。比丘自ら念ずらく、『彼の處遠し、七日に及ぶも還らず、佛未だ是くの如きの事ありて去ることを聽したまはず」と。往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、是くの如きの事あれば、過七日法を受け、若しは十五日、若しは一月、白二羯磨し、是くの如く羯磨に堪能なることの、若しは上座、若しは次座、若しは誦律、若しは不誦律を差し、能く羯磨を作す者は、應さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧某甲比丘の、過七日法若しは十五日、若しは一月を受け、界外に出づることを忍聽せよ、某甲事の爲めの故に、還りて此の中に安居す、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、某甲比丘、過七日法、若しは十五日、若しは一月を受けて界外に出づ、某甲事の爲めの故に。還りて此の中に安居す。誰か長老、僧某甲比丘の、過七日法、若しは十五日、若しは一月受けて、界外に出づ、某甲事の爲めの故に。還りて此の中に安居することを忍する者は默然せよ、誰か忍せざるものは說け」と。』僧已に某甲比丘の、過七日法、若しは十五日、若しは一月を受けて界外に出づ、某甲事の爲めの故に。此の中に還りて安居することを忍し竟る。僧忍して默然する

が故に、是の事是くの如く持つ。比丘信を遣はし、比丘を請じ、過七日羯磨を受くるも亦是くの如し。比丘尼、比丘を請じて過七日羯磨を受くるも亦是くの如し。式叉摩那、比丘を請ずる羯磨も亦是くの如し。沙彌、比丘を請じて受戒するも亦是くの如し。沙彌尼、比丘を請じて、過七日羯磨を受くるも亦是くの如し。不信の大臣、比丘を請じ、過七日羯磨を受くるも亦是くの如し。識信の大臣の羯磨するも亦是くの如し。不信の父母、信父母、兄弟、姉妹、諸の親里、智識、六十種經を誦する比丘、經營事の比丘、不信樂の大臣の、供養を奪ひ、渠を通ずるも亦是くの如し。一切の過七日羯磨法を受くるは、盡く上に同じ。

爾の時、世尊拘睒彌國に在しき。時に大臣あり、勇健にして能く鬪ふ。往いて佛所に詣り、信を以て家を捨てゝ道を爲す。時に優塡王語りて言はく、『汝何ぞ休道せざる、當さに汝に婦と資生の田宅財寶とを與ふべし』と。比丘自ら念ずらく、『我れ此に在りて安居す、必ずや我が淨行のために留難を作さん』と。此の念を作し已りて往いて佛に白す。佛言はく、『若し此の難事あらば、便ち應さに去るべし』と。爾の時比丘あり、住處に於て安居す。時に大童女あり、來りて比丘を誘調す。『汝何ぞ休道せざる、我れ當さに汝がために婦と作るべし』と。彼の比丘自ら念ずらく、『我れ此に在りて安居せば、必ず淨行のために留難を作さん』と。此の念を作し已りて往いて佛に白す。佛言はく、『若し此の難事あらば應さに去るべし』と。爾の時比丘あり、住處に在りて安居す。時に婬女あり。來りて比丘を誘調す。『汝休道すべし、我れ當さに汝が爲めに婦と作るべし、或は女を嫁して汝に與へん』と。彼の比丘自ら念ずらく、『我れ此に在りて安居せば、必ず淨行の爲めに留難を作さん』と。此の念を作し已りて往いて佛に白す。佛言はく、『若し此の難あらば、應さに去るべし』と。爾の時比丘あり、住處に在りて安居す。黃門あり、比丘を貪愛するが故に、數ば比丘を喚び、『共に不淨を行ぜん』と。比丘自ら念ずらく、『我れ此に在りて安居せば、我が淨行の爲めに留難

を作さん」と。此の念を作し已りて往いて佛に白す。佛言はく、『若し此の事あらば應さに去るべし』と。爾の時比丘あり、住處に在りて安居す、時に鬼神あり、比丘に語りて言はく、『此の中に伏藏あり』と。比丘自ら念ずらく「我れ此に在りて安居せば、必ず我が淨行の爲めに留難を作さん」と。此の念を作し已りて往いて佛に白す。佛言はく、『若し此の事あらば應さに去るべし』と。爾の時比丘あり、住處にありて安居す。時に鬼神あり、比丘の便を伺ひ、其の命根を斷ぜんと欲す。比丘自ら念ずらく「我れ此に在りて安居す、必ず命の爲めに留難を作さん」と。此の念を作し已りて往いて佛に白す。佛言はく、『若し此の事あらば應さに去るべし』と。爾の時比丘あり、住處に在りて安居す。賊あり、比丘の便を伺ひ、命根を斷ぜんと欲す。比丘自ら念ずらく「我れ此に在りて安居す、必ず我が命を斷ぜん」と。此の念を作し已りて往いて佛に白す。佛言はく、『若し此の事あらば應さに去るべし』と。爾の時比丘あり、住處に在りて安居す。毒蛇瞋恚して比丘の便を伺ひ、命根を斷ぜんと欲す。比丘自ら念ずらく「我れ此に在りて安居す、必ず斷命の留難あらん」と。此の念を作し已りて往いて佛に白す。佛言はく『若し此の事あらば應さに去るべし』と。爾の時比丘あり、住處に在りて安居す。諸の惡獸瞋りて比丘の便を伺ひ、命根を斷ぜんと欲す。比丘自ら念ずらく、「我れ此に在りて安居す。必ず斷命の留難あらん」と。此の念を作し已りて往いて佛に白す。佛言はく『若し此の事あらば應さに去るべし』と。爾の時比丘あり、住處に在りて安居す。意の如く飮食することを得ず、隨意に醫藥を得ず、隨意に使人を得ず。彼れ自ら念じて言はく「我れ當さに云何がすべき」と。卽ち諸の比丘に白す。諸の比丘往いて世尊に白す。世尊言はく『若し比丘安居の處に於て、若し隨意に飮食を得ず、隨意に醫藥を得ず、隨意に使人を得ざれば、卽ち應さに此の事を以て去るべし』と。爾の時比丘あり、住處に在りて安居す。經行の處諸の毒蟲多し。此の比丘經行に狎習し、經行すれば體安し、經行せざれば安からず。彼の比丘自ら念ずらく「我れ此に在りて

住せば、必ず我が命の爲めに留難を作さん」と。此の念を作し已りて往いて佛に白す。佛言はく、『若し此の事あらば應さに去るべし』と。爾の時比丘あり、住處に在りて安居す。比丘あり、方便を作して僧を破せんと欲するを見る。時に彼れ自ら念じて言はく、「破僧の事は重し、甚だ醜惡たり、我が爲めの故に僧を破すること莫れ、我れ當さに云何すべき」と。即ち諸の比丘に白す。諸の比丘、此の事を以て佛に白す。佛言はく、『若し比丘、住處に於て安居し、比丘あり、勤めて方便して僧を破せんと欲するを見る。時に彼れ是くの如きの念を作さく、「破僧の事は重し、甚だ醜惡たり、我が爲めの故に僧を破すること莫れと。彼の比丘、即ち應さに此の事を以て去るべし」と。爾の時比丘あり、住處に在りて安居す。比丘尼あり、勤めて方便して僧を破せんと欲す。彼れ是くの如く念ずらく、「破僧の事は重し、甚だ醜惡たり、我が爲めの故に僧を破すること莫れと。彼れ即ち應さに此の事を以て去るべし」と。若し比丘住處に於て安居す。時に比丘あり、勤めて方便して僧を破せんと欲すと聞く。彼れ是くの如く念ずらく、「破僧の事は重し、甚だ醜惡たり、我が爲めの故に僧を破すること莫れと。彼れ即ち應さに此の事を以て去るべし」と。』若し比丘住處に於て安居す。比丘尼あり、方便して僧を破せんと欲すと聞き彼れ是くの如く念ず、「破僧の事は重し、甚だ醜惡たり、我が爲めの故に僧を破すること莫れ、彼れ即ち應さに此の事を以て去るべし」と。』爾の時比丘あり、住處に於て安居す。彼れ比丘あり、方便して僧を破せんと欲すと聞き、彼れ自ら念じて言はく、「我れ若し往いて呵諫して[六]責數すれば、必ず我が言を用ひて、止めて僧を破せず」と。僧復此の念を作さく、「若し我れ自ら往き、或は我が語を用ひず、其の破僧事を止むること能はざれば、我れに親友あり、能く彼れの破僧事を止めん、我れ若し彼れに語らば、我が言を用ひ、我が爲めに彼の破僧事を止めん。我れ當さに云何がすべき」と。即ち諸の比丘に語る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し比丘住處に於て安居し、比丘あり方便して僧を破せんと欲す、比丘自ら念ずらく、「我れ若し自ら

【六】責數の數は、セメル、ナジル意味である。

彼れに往いて、責數せば、必ず我が言を用ひ、共れをして止めて僧を破せざらしめん」と。復是の念を作さく、「我れ或は彼の諍事を止むること能はざれば、我れに親友あり、能く彼の諍事を止めん、我れ當さに彼れに語りて、破僧事を止めしむべし」と。彼れ卽ち應さに此の事を以て去るべし』と。若し比丘住處に安居し、彼れに比丘尼あり、勤めて方便して僧を破せんと欲すと聞き、彼の比丘自ら念ずらく、「彼れ若し彼れに往いて、呵諫責數すれば、必ず我が言を用ひて破僧事を止めん」と。復是の念を作さく、「我れ或は能くせざれば、我れに親友あり、能く彼の諍を止めん、若し我れ彼れに語らば、必ず能く我が爲めに破僧事を止めん」と。彼れ卽ち應さに此の事を以て去るべし、若し比丘是の中に安居し、彼の僧破を聞かんに、比丘自ら念ずらく、「我れ若し彼れに往いて呵諫責數すれば、必ず我が言を用ひ、僧をして和合せしめん」と。復是の念を作さく、「我れ或は能くせざれば、我れに親友あり、能く彼の諍を止めん、我れ若し彼れに語らば、必ず我が言を用ひて彼の僧を和合せしめん」と。比丘卽ち應さに此の事を以て去るべし。若し比丘是の中に安居し、彼の比丘尼の僧破を聞かん、「我れ若し彼れに往いて呵諫責數せば、必ず我が言を用ひて僧をして和合せしめん」と。復是の念を作さく、「我れ或は能くせず、我れに親友あり、能く彼の諍を止めん、若し我れ彼れに語らば、必ず我が言を用ひて彼の僧を和合せん」と、彼れ卽ち應さに此の事を以て去るべし。

爾の時比丘あり、七日を受けて界外に出で、其の母の爲めに留められ、至意還らんと欲するも、而も遂に七日に及ばず。彼れ自ら念じて言はく、「失歲とせんや、不失歲とせんや」と。卽ち諸の比丘に白す。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『失歲せず。父母・兄弟・姉妹・本二、若しは本私通の者、若しは夜叉鬼神の難と亦是くの如し。爾の時比丘、七日を受けて界外に出でゝ住す。水陸の道通ぜず、若しは賊難、虎狼師子の諸難あらんに、是くの如きの念を作さく、「我れ失歲とせんや、不失歲とせんや」と。卽ち諸の比丘に白す。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『失歲せず』と。

爾の時佛拘睒彌國瞿師羅園に在しき。爾の時、王憂陀延、跋難陀釋子と親友たり。跋難陀を請うて夏安居す。跋難陀拘睒彌國に安居を結し、餘の住處に、大に利養を得、大に衣物を得ると聞き、卽ち彼の住處に往き、小しく彼れに住し已りて復拘睒彌に還る。時に王憂陀延聞き已りて嫌つて言はく、『云何ぞ跋難陀釋子、我が請を受けて、此に在りて住して夏安居し彼の住處に大に利養を得、大に衣物を得ると聞き、便ち往いて彼れに至り、彼れに在りて住し已り、復還つて此に來るや』と。諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、慚愧を知り、戒を學せんことを樂ふものあり、跋難陀釋子を呵責す『云何ぞ汝彼れにありて夏安居し、異住處に大に利養を得、大に衣物を得ると聞き、便ち彼れに往いて住し、住すること旣に久しからずして此に還るや』と。卽ち佛所に往いて頭面に禮足し、各一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊此の因緣を以て比丘僧を集め、無數の方便を以て跋難陀を呵責して言はく、『汝無知なり、威儀に非ず、淨行に非ず、沙門の法に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ跋難陀、汝拘睒彌に於て夏安居し、彼の異處にて大に利養を得、大に衣物を得ると聞き、便ち彼れに往いて住し、而も復拘睒彌に還るや』と。呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『若し比丘、前安居の處に在り、彼の處に大に利養を得、大に衣物を得ると聞き、卽ち彼れに往かば、彼の比丘前歲を得ず、本要に違ひ罪を得、若し比丘、此に於て他の前安居の請を受け、界外に至りて布薩し、已りて便ち餘處に往かば、彼の比丘前安居を破し、本要に違ひ罪を得。若し比丘、他の前安居の請を受け、界外に在りて布薩し、已りて請處に來至し、卽日還り去らば、彼の比丘前安居を破し、本要に違ひ罪を得。若し比丘、他の前安居の請を受け、界外に布薩し、已りて請處に來至し、房舍臥具を受け、事なくして便ち去らんに、彼れ便ち前安居を破し、本要に違ひ罪を得。若し比丘、他の前安居の請を受け、界外に布薩し、已りて住處に來至し、七日を受けて界外に出で、意來らんと欲して七日を過ぐるは、彼の比丘前安居を破し、

本要に違ひ罪を得。若し比丘、他の前安居の請を受け、界外に在りて布薩し、已りて住處に來至し、七日を受けて界外に出で、七日に及びて還らば、彼比丘前安居を成じ、本要に違はず罪なし。若し比丘、他の前安居の請を受け、界外に在りて布薩し、已りて住處に來至し、末後に七日を受けて界外に出で、彼の比丘住處に若しは來り若しは來らざるも、彼の比丘前安居を成じ、本要に違はず罪なし。若し比丘、他の前安居の請を受け、界內に來至し、布薩已りて住處に到り、卽日還り去らば、彼の比丘前安居を破し、本要に違ひ罪を得。若し比丘、他の前安居の請を受けて界內に來至し、布薩已りて住處に到り、房舍臥具を受け、事なくして便ち去らば、彼の比丘前安居を破し、本要に違ひ罪を得。若し比丘、他の前安居の請を受け、界內に來至し、布薩已りて住處に至り、七日を受けて界外に出で、意還らんと欲して七日に及ばず、彼の比丘前安居を破し、本要に違ひ罪を得。若し比丘、他の前安居の請を受け、界內に來至し、布薩し已りて住處に到り、七日を受けて界外に出で、七日に及んで還らば、彼の比丘前安居を破せず、本要に違はず罪なし。若し比丘、他の前安居の請を受け、界內の布薩已りて住處に到り、末後に七日を受けて界外に出で、住處に若しは還るも若しは還らざるも、前安居を破せず、本要に違はず罪なし。後安居も亦是くの如し』と。

爾の時、比丘あり、他の前安居の請を受け、彼れにありて命難若しは淨行難あるを見、彼れ是くの如きの念を作さく、「我れ當さに云何がすべき」と。卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『若し比丘住處にあり、若しは前安居、後安居を受け、命難若しは梵行難あるを見ば、彼の比丘若しは自ら往き、若しは信使を遣はして、往いて檀越に白し、移去せんことを求めよ。若し聽かば善し、若し聽かずんば、便ち應さに去るべし。（安居揵度竟る）

自恣揵度の一

爾の時、佛、舍衞國祇樹給孤獨園に在しき。時に衆多の比丘あり、拘薩羅國に在りて、異住處に於て夏安居す。彼れ是くの如きの念を作す。「我曹當さに云何して安樂に住し、飮食を以て疲苦と爲さゞることを得べき」と。彼れ是くの如きの語を作す。『我等當さに共に制を作し、安居を結すべし、共に語り、禮拜問訊することを得ず、若し先きに聚落に入りて乞ふ者は、先きに還りて食處を掃除し、座具を敷き、水器を具し、洗足器を具し、盛食器を具し、各自に食を持ち來りて食處に置き、若し食を得ること多き者は、先づ應さに減じて留め、若しは足して便ち食ふべし。食し訖りて默然として房に還る。次ぎに聚落に入りて乞ふ者あり、食を得て便ち還り、食を持ちて食處に至り、若し食を得ること多き者は、應さに先づ減じて留め、若しは足して便ち食ふべし。若し足らざる者は、先きに留むる所の食を取りて足して食ひ、食し訖りて默然として房に還る。若し末後に聚落に入りて乞ふ者は、食を得て便ち還り、食を持ちて食處に至り、若し食を得ること多き者は、先づ應さに減じて留め、若し足食は便ち食ふ。若し不足ならば、先きに留むるところの者を取り、足して之を食ふ。餘殘の食あらば、若しは乞人若しは非人に與ふ、若し與ふるところなければ、應さに淨地無草の處に置き、若しは無蟲水中に置くべし。き、食器を洗治して本處に還復すべし。臥具水器洗足器及び座具も本處に還復せよ。食處を掃除し、若し水器洗足器の空しきを見ば、若し能く勝へんには、卽ち應さに持ちて還るべし、若し能く勝へざれば、手を以て伴を招ぎ、共に器を持ちて本處に還復し、默然として房に還る。此の因縁を以て說く所あるべからず、是くの如くにして、我等安樂に住し、食飮を以て苦と爲さゞることを得べし。』と。是くの如きの制を作して、安居を結し、自恣竟りて舍衞國祇桓中に詣り、佛所に至りて頭面禮足し、各一面に坐す。時に世尊諸の比丘を慰勞したまひ、

『汝曹安樂なりや不や、飲食足るや不や、住止和合するや不や、飲食を以て疲苦と爲さゞるや』と。諸ゝ比丘佛に白して言さく、『住止安樂にして、飲食乏しからず。彼此和合して飲食を以て苦と爲さず』と。佛諸の比丘に問ひたまはく、『汝等何の方便を以て住止安樂に、彼此和合し、飲食を以て苦と爲さゞるや』と。諸の比丘向きの因縁の事を以て具さに佛に白す。佛諸の比丘に告げたまはく、『汝曹癡人、自ら以て樂と爲すも、其の實は是れ苦なり。汝曹癡人、自ら以て患なしとす、其の實は是れ患なり。汝曹癡人、共に住して怨家の如似し、猶ほし白羊の如し、何を以ての故に、我無數に方便して諸の比丘を教ふ、彼此相教へて共に相受語し、展轉して覺悟せしむ。汝曹癡人、外道に同じ、共に瘂法を受く。是くの如きの瘂法を行ずべからず、若し瘂法を行ずれば突吉羅なり。時に六群比丘、是くの如きの言を作す、佛諸の比丘を教へ、「彼此相教へて共に相受語し、展轉して覺悟せしむ」と。便ち他の清淨比丘の罪を擧す。諸の比丘往いて世尊に白す。世尊言はく、『他の無罪比丘事を擧すべからず、若し有事の比丘を擧せんと欲せば、應さに先づ語りて知らしむべく、求聽すべし、然る後に應さに擧すべし』と。時に六群比丘佛の應さに先づ語りて知らしむべく、求聽すべし、然る後に擧すべしと教へたまふを聞く。先きの清淨比丘、曾て六群比丘に從つて求聽す、六群比丘嫌ふを以ての故に覆ひ、復清淨比丘に從つて求聽す。諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『先きの清淨比丘、曾て六群比丘に從つて求聽すべからず、六群比丘も、嫌ふを以ての故に、復清淨比丘に從つて求聽すべからず。自今已去、五法を具して求聽することを得るを聽す。何等か五なる。時を知りて非時を以てせず、如實にして虛妄を以てせず、利益ありて無利益を以てせず、柔軟にして麁獷を以てせず、慈心にして瞋恚を以てせず。彼の六群比丘内に五法なく、餘の清淨比丘五法を具足せば、六群比丘に從つて求聽せよ』と。六群比丘聽さず、諸の比丘此の因縁を以て往いて佛に白す。佛言はく、『比丘五法を具足する者、若し求聽せんには、聽に應ずることを聽す』と。時に六群比丘、

他に從つて求聽し已りて去る。或は他に聽を與へ已りて、便ち住處を離れて去る。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく『他の聽を求め既に聽し已りて便ち去るべからず、亦他に聽を與へ已りて便ち去るべからず。自今已去、言要を聽す、去ること莫れ』と。六群比丘便ち他を要し已りて自ら去る、或は他に言要を與へて復自ら去る。諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく『他を要し已りて自ら去るべからず、他に言要を與へ已りて復去るべからず。自今已去、安居竟りて自恣することを聽す。自恣を遮することを聽す、求聽すべからず、何を以ての故に、自恣は卽ち是れ聽なればなり。諸の比丘是の念を作さく「佛諸の比丘に自恣することを聽したまふ」と。諸の比丘一時に自恣して閙亂す。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく『一時に自恣すべからず、自今已去、一々自恣することを聽す』と。諸の比丘、次第を求めずして隨意に自恣し、上座疲極す。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『隨意に自恣すべからず、應さに上座に從つて自恣すべし、受自恣人を差し、白二羯磨することを聽す。若し五法あらば、作受自恣人を差すべからず。若しは愛、若しは瞋、若しは怖、若しは癡にして、自恣と未自恣とを知らず、是くの如きの五法を具する者は受自恣を差すべからず。五法あるものは、應さに作受自恣人を差すべし、若しは不愛・不瞋・不怖・不癡・自恣と未自恣とを知る。是くの如きの五法を具する者は、應さに受自恣を差すべし。應さに是くの如く堪能の人。若しは上座、若しは次座、若しは誦律、若しは不誦律羯磨に堪能なる者を差すべし。白二羯磨は當さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧某甲比丘を差して、受自恣人と作すことを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、僧某甲比丘を差して受自恣人と作す、誰か諸の長老、僧某甲比丘を差し、受自恣人と作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざるものは說け」と。僧已に某甲比丘を差して受自恣人と作すことを忍し竟る、僧默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に諸の比丘座上に在りて自恣す。諸の比

丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『座上に在りて自恣すべからず、座を離れて胡跪して自恣すべし。時に上座、座を離れて自恣す。一切の僧故ほ座に在りて自恣す。佛言はく、『若し上座、座を離れて胡跪せば、一切の僧亦應さに座を離れて胡跪すべし』と。時に上座自恣竟りて胡跪す、乃至一切のの僧の自恣竟る。上座疲極す。時に諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『自恣竟るに隨つて復坐することを聽す』と。時に六群比丘念じて言はく、「我曹竊に自恣を語らん、彼の比丘或は能く我が爲めに羯磨を作し、若しは我が自恣を遮せん」と。諸の比丘此の事を以て往いて佛に白す。佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、「竊に自恣を語らん、恐らくは餘の比丘我が爲めに羯磨を作し、若しは我が自恣を遮せん」と。應さに了々に自恣し、他をして聞かしむるに足るべし』と。彼の六群比丘復是の念を作さく、「我れ當さに疾々に自恣すべし、恐らくは餘の比丘、我が爲めに羯磨を作し、或は自恣を遮せん」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、「我れ當さに疾々に自恣すべし、恐らくは餘の比丘、我がために羯磨を作し、若しは我が自恣を遮せん」と。自今已去、安居已りて徐々に自恣することを聽す。彼の六群比丘是の念を作さく、「我れ當さに一たび自恣を説くべし、恐らくは餘の比丘我がために羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『此の念を作すべからず、「我れ當さに一たび自恣を説くべし、恐らくは餘の比丘我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と。』彼の六群比丘自ら念ずらく、「我れ當さに再び自恣を説くべし、恐らくは我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、「我れ當さに再び自恣を説くべし、恐らくは餘の比丘我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と、自今已去、諸の比丘三たび自恣を説くことを聽す』と。時に六群比丘反抄衣にして自恣す。衣纒頸にして自恣す。裹頭にして自恣す。通肩披衣にして自恣す。著革屣にして自恣す。若しは地に坐して自恣す。若しは床上に坐して自恣す。

諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『反抄衣・纏頸・裹頭・通肩・披衣・著革屣、若しは地座、若しは床上座にして自恣すべからず、自今已去、諸の比丘、偏露右肩にして革屣を脱し、胡跪合掌して是くの如きの語を作す。『大德、衆僧今日自恣す。我れ某甲比丘も亦自恣す。若し見聞疑の罪あらば、大德長老哀愍の故に我れに語れ、我れ若し罪を見ば、當さに如法に懺悔すべし」と。是くの如く第二第三も說く』と。時に病比丘あり、偏露右肩にして革屣を脱し、胡跪合掌す。時頃久しうして病卽ち更に增す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自今已去、病比丘は、身の安んずる所に隨つて自恣を受くることを聽す。爾の時異住處の比丘ありて自恣す、比丘あり、說戒堂の外に在り。諸の比丘自恣し竟り、起つて出で丶外に去る。比丘問うて言はく、『長老何處にか去る、自恣せざるや』と。彼れ答へて言はく、『我れ已に自恣し竟る、汝何れより來る』と。答へて言はく、『我れ說戒堂の外に在り』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自今已去、自恣の時は、說戒堂の外に在るべからず、比座に聽いて、應さに若しは來るや、若しは來らざるやを知るべし。先づ白し已りて、然る後に自恣することを聽す。是くの如く白せよ。『大德僧聽け、今日衆僧自恣す、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧和合して自恣することを、白すること是くの如し」と。是くの如く白し已りて自恣せよ』と。六群比丘、非法別衆自恣す、非法和合自恣す、法別衆自恣す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『非法別衆自恣、非法和合自恣、法別衆自恣すべからず。四種の自恣あり、若し比丘、非法別衆自恣、非法和合自恣・法別衆自恣・法和合自恣なり。若し比丘、非法別衆自恣・非法和合自恣・法別衆自恣、是くの如きは自恣すべからず、法和合自恣は、應さに是くの如く自恣すべし、是れ我が聽す所の自恣なり』と。

爾の時、自恣の時、異住處の前安居・後安居の人雜住し、云何せんを知らず、前安居に隨はんや、後安居に隨つて自恣すとせんや。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『上座所在の處に隨つて自恣せよ。上座或は前安居、或は後安居ならば、應さに舊住の者に隨つて自恣すべし。舊住の者も亦前安居あ

り後安居あらば、多き者に隨つて應さに自恣すべし』と。時に諸の比丘、十四日十五日自恣せんと欲す。佛言はく、『是くの如く自恣することを聽す。若し王日時を改めんには、應さに時に隨ふべし』と。諸の比丘、今日自恣せんか、明日自恣せんかを知らず。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、若しは小食上、中食上に、上座をして唱令せしむ、今日衆僧自恣す」と。復何の時を用ひんかを知らず。佛言はく、『時相を作すことを聽す。若しは揵稚を打ち、若しは貝を吹き、鼓を打ち、若しは烟を起し、若しは影を量る。若しは唱へて言へ、今自恣時到る』と。六群比丘、佛の自恣を聽したまふと聞き、便ち別房の中に於て、同和尚・阿闍梨、親厚の同學意を得る者と共に、別部にして自恣を作す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『別房に於て、同和尚・阿闍梨、親厚の同學の意を得る者と共に、別部にして自恣を作すべからず。自今已去、一處に和合して自恣せよ』と。諸の比丘復何處に在りて自恣せんやを知らず、佛に白す。佛言はく、『說戒處に在りて自恣することを聽す』と爾の時衆多の比丘あり、自恣日に於て、非村阿練若・未結界處の道路に在りて行く。諸の比丘自ら念ずらく、「佛我等に和合自恣を敎へたまふ、我等當さに云何がすべき」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し衆多の比丘、自恣日に於て、非村阿練若、若しは未結界處の道路に在りて行かんに、諸の比丘、若し和合して自恣することを得ば善し、若し和合することを得ざれば、所同の和尙、阿闍梨に隨ひ、親厚同意に隨ひ、異處に移りて小界を結し、自恣を作せ、白二羯磨應さに是くの如く小界を結すべし、堪能者若しは上座、若しは次座、若しは誦律、若しは不誦律・羯磨に堪能なる者を差し、是くの如く白せよ。「大德僧聽け、諸の比丘坐處已に滿てり、是くの如き比丘の坐處を齊り、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧此の處に於て小界を結することを、白すること是くの如し」と。大德僧聽け、是くの如き比丘の座處を齊り、僧此の處に於て小界を結す、誰か諸の長老、是くの如きの比丘の座處を齊り、僧中に於て小界を結することを忍する者は默然せよ、誰か忍せざるも

のは說け」と。』僧已に是くの如きの比丘の座處を齊り、小界を結することを忍し竟る、僧默然たるが故に、是の事是くの如く持つ。時に比丘、界を捨てずして便ち去る。諸の比丘喜ばず、卽ち往いて佛に白す。佛言はく、界を捨てずして去るべからず、應さに界を捨て竟りて然る後に去るべし。應さに是くの如く捨てゝ白二羯磨すべし。堪能人若しは上座、若しは次座、若しは誦律、若しは不誦律、羯磨を作すに堪能なる者を差し、應さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、是くの如き比丘の座處を齊り、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧此の處の小界を解くことを。白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、是くの如き比丘の座處を齊り、僧中に於て小界を解く、誰か長老、僧是くの如き比丘の座處を齊り、小界を解くことを忍する者は默然せよ誰か忍せざるものは說け」と。』僧已に是くの如き比丘の座處を齊り、小界を解くことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。

四分律卷第三十七

巻の第三十八（三分の二）

自恣揵度の二

爾の時、自恣日に、異住處あり、一比丘ありて住す。彼れ自ら念じて言はく、「世尊教あり、一處に和合して自恣せよと、我れ當さに云何がすべき」と、即ち諸の比丘に白す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自恣日に、異處に於て一比丘ありて住せば、彼れ應さに説戒處に往き、掃灑して座具を敷き、盛水器を具し、洗脚器を具し、然燈して舍羅を具し、客比丘の爲めにすべし。若し客比丘來ること五人、若しは過五人ならば、應さに白羯磨を作し、受自恣人を差すべし。若し四人あらば、更互に自恣を爲して言へ、「今日衆僧自恣す、我れ某甲比丘亦自恣清淨なり」と、第二第三も亦是くの如し。若し三人二人あらば、亦是くの如く自恣せよ。若し一人ならば、心念口、言自恣せよ、「今日衆僧自恣す、我れ某甲比丘自恣清淨なり」と。第二第三も亦是くの如く説く、若し〔一〕五人あり、一人受欲すれば、白して受自恣人を差すことを得ず。若し四人あれば、第五人の欲を受くることを得ず、更互に自恣せよ。若し三人あれば、第四人の欲を受くることを得ず、更互に自恣せよ。二人あらば、第三人の欲を受くることを得ず、更互に自恣せよ。若し一人あらば、第二人の欲を受くることを得ず、心念自恣せよ』と。爾の時自恣日に、衆僧集聚して自恣せんと欲す。佛諸の比丘に告げたまはく、『寂靜なり今日衆僧自恣せよ』と。餘の比丘佛に白して言さく、『病比丘ありて來らず』と。佛言はく、『自恣を與ふることを聽す、自恣を囑授することを聽す。應さに是くの如く與へて言ふべし。病人言はく、「汝に自恣を與ふ」と。若しは「我れ汝に自恣を語る」と言ひ、若しは「我が爲めに自恣を説け」と言ひ、若しは動身して自恣を與へ、若しは廣く自恣を説く。是くの如きを名けて自恣を與ふと爲す。若しは動身せず、若しは口言せざれば、自恣を與ふることを成ぜず、應さ

【一】五人の中一人受欲すると、四人にして第五人の受欲とは、事實同一のことの樣であるが、前は白して受自恣人を差すといふ作法について、言ひ、後のは更互自恣について言つて居るのである。五人なれば、羯磨作法を行ひて自恣するのである。四人なれば、作法自恣は出來ないので更互自恣である。之を對首自恣ともいふので、一人なれば心念自恣、詳に言へば、心念口言自恣ともいふのである。

に更に自恣を與へ、比丘に囑授すべし。若し病人の所に到るに、便ち命過す、若しは界を出でて去る、若しは休道し、若しは外道所住の處に至る、若しは破僧の件黨に入る、若しは戒場上に至る、若しは明相出づ、若しは自ら邊罪を犯す、若しは比丘尼を犯す、若しは賊心入道す、若しは外道中より還る、若しは黃門、若しは殺父母、若しは殺阿羅漢、若しは破僧、若しは惡心出佛身血、若しは是れ非人、若しは是れ畜生、若しは二根人、若しは他のために擧せらる、若しは滅擯、若しは應與滅擯なりと言はゞ、若し是くの如き人に與ふるも、囑授自恣を成ぜず、應さに更に餘人に與ふべし。若しは道中に在り、若しは僧中に在りて是くの如きの事起るあらん。若しは僧爲めに不見罪羯磨を作し、若しは不懺悔罪羯磨を作し、若しは不捨惡見羯磨を作す、是くの如きは囑授自恣を成ぜず、應さに更に餘人に與ふべし。若しは眠りて說かず、若しは入定し、若しは妄誤し、若しは故作せずして自恣處に到れば、是れを囑授自恣到ると爲す。若し故らに說かざれば突吉羅なり。若し能く是くの如く作す者は善し、爾する能はざる者は、應さに病比丘を扶け將ひて去るべし。若しは繩床・木床を以て、若しは衣にて舁ぎ去りて自恣處に至るべし。彼の比丘是くの如きの念を作さん、「我等病比丘を扶け將ひ、或は能く病を增し、或は能く死せん」と。衆僧應さに盡く病人の所に來りて羯磨自恣を作すべし。若し多くの比丘ありて病まんに、集まりて一處に在らば善し、若し能くせずんば、諸の比丘應さに界外に出でゝ羯磨自恣を作すべし、別衆自恣すべからず』と。

爾の時、比丘あり、囑授自恣を受け、便ち命過し、若しは休道し、若しは戒場上に至り、或は明相出づるに至る。諸の比丘自ら念ずらく、「囑授自恣を失ふとせんや不や」と。佛言はく『失ふ』と。爾の時比丘あり、囑授自恣に、二道斷え、賊虎狼師子の難、水大に漲り、道斷えて往くことを得ず、界外に出でゝ囑授自恣を持ち來る。諸の比丘是くの如きの念を作す、「聽授自恣を失はざるや不や」と。佛言はく、『失はず。自今已去、囑授自恣を受くる比丘、若しは命難・淨行難あり、界内

に道なければ、界外より囑授自恣を持ち來ることを聽す、我れ囑授自恣を失はずと說く』と。諸の比丘、一人の囑授自恣を受け、畏愼して敢て復受けず、即ち佛に白す。佛言はく、『受くることを聽す』と。時に比丘二人の囑授自恣を受け、畏愼して敢て復受けず。即ち佛に白す。佛言はく、『受くることを聽す』と。時に比丘、三人の囑授自恣を受け、畏愼して敢て四人の囑授自恣を受けず、即ち佛に白す。佛言はく、『受くることを聽す、乃至能く字を憶するの多少に隨ひて應さに受くべし。若し字を憶せば、盡く應さに字を說くべし。若し字を憶せずんば、應さに姓を說き、若しは相貌を說き、若しは「我れ衆多比丘の囑授自恣を受く、彼れ如法僧事ありて與欲して自恣を說く」と言ふべし。年少の比丘自恣を知らず、諸の比丘に告ぐ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自今已去、和尙、阿闍梨教詔すべし。若し教ふるも、憙く忘れて憶せざれば、應さに受自恣者をして教詔せしむべし。若し故ほ復忘れんには、應さに共に句句に說くべし。若し比丘囑授自恣を受け已りて、事の起るあり、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自今已去、更に轉じて餘人に與ふることを聽す。應さに是くの如く與ふべし。「我れ衆多の比丘の爲めに囑授自恣を受く、我れ今事あり、彼れがために與欲す。幷びに復自ら與欲す、如法僧事あり、與欲して自恣を說く」と』。彼の比丘與欲し竟りて事還た息む。彼れ畏愼す、「我れ已に轉じて自恣を囑授し竟る、知らず云何がせんと。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『事還た息まば應さに往くべし。若し往かずんば、應さに法の如く治すべし』と。時に六群比丘是の念を作さく、「我れ自恣處に往かず、恐らくは我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、「我れ自恣處に往かず、恐らくは諸の比丘、我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と』。若し知識親厚の爲めに自恣處に往かざるも亦是くの如し。時に六群比丘是の念を作さく、「我れ自恣處に往いて坐せず、恐らくは諸の比丘、我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と。諸の比丘往いて佛に白す。

佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、「我れ自恣處に往いて坐せず、恐らくは諸の比丘我がために羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と』。若し知識親厚の爲めにするも亦是くの如し。彼れ是くの如きの念を作す。「我れ若し彼れに往くも自恣を說かず、恐らくは諸の比丘我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、「我れ彼れに往いて自恣を說かず、恐らくは諸の比丘、我が爲めに羯磨を作さん、若しは自恣を遮せん」と』。若し知識親厚の爲めにするも亦是くの如し。

爾の時自恣日に、異住處あり、衆僧和合して自恣せんと欲す。賊の來るありと聞き、恐怖して座を離れて去り、竟に自恣せず。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『聽け、若し八の難と事と來るあらば、略して自恣を說くことを聽す。是の中の難とは、王難・賊難・火難・水難・病難・人難・非人難・毒蟲難なり。是の中の事とは、若し衆僧多くして坐處迮し、若しは多人病まば、應さに略して自恣を說くべし。若しは衆僧多く、若しは房屋少く、若しは天雨ふらば、應さに略して自恣を說くべし。若しは布薩の夜過多なり、若しは鬪諍の事あり、若しは阿毘曇を論じ、若しは毘尼折喩し、若しは說法夜已に久しきなり。衆僧未だ起きず、明相未だ出でざるに、應さに羯磨自恣し、他の囑授自恣を受くべし。明相出づるに至ることを得ざれ、若し明相出づるに至らば、羯磨自恣することを得ざれ』と。諸の比丘是くの如きの言を作す。『難事の爲めには略して自恣を說く、而も難事は尙ほ遠し、我等廣說自恣することを得べし』と、彼等應さに廣說自恣すべし、若し廣說せずんば、應さに法の如く治すべし。諸の比丘是くの如きの言を作す、『難事の爲めには、略して自恣を說く、今難事遠からず、我曹廣說三語自恣することを得ず、當さに再說自恣すべし』と。若し再說せざれば、應さに法の如く治すべし。諸の比丘是くの如く言ふ。『難事の爲めには、略して自恣を說く、今難事近し、再說自恣することを得べからず、一說自恣すべし』と。彼の比丘卽ち應さに一說自恣す

べし、若しせざれば法の如く治すべし。諸の比丘是くの如きの言を作す。『難事の爲めの故には、略して自恣を說く。難事近し、一說自恣すべからず、我等各々共に三語自恣すべし』と。諸の比丘卽ち應さに、白を作して各々共に三語自恣すべし。應さに是くの如く白すべし。『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今各々共に三語自恣す、白すること是くの如し』と。是くの如く白し已りて、各々共に三語自恣す。再說、一說も亦是くの如し。諸の比丘是くの如きの言を作す『難事の爲めの故には、各々共に三語自恣す。難事近し、各々共に三語自恣することを得ず、亦白することを得ず』と。彼の比丘卽ち應さに此の難事を以て去るべし。

爾の時、異住處の比丘あり、僧殘を犯す。彼れ云何せんを知らず。諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『若し比丘、異住處に於て僧殘を殘さば、彼の比丘若し應さに覆藏を與ふべくんば、當さに覆藏を與ふべし。覆藏羯磨を與へ竟らば、應さに自恣すべし。應さに本日治を與ふべくんば、當さに本日治を與ふべし。本日治を與へ竟らば、應さに自恣すべし。應さに摩那埵を與ふべくんば、當さに摩那埵を與ふべし。摩那埵羯磨を與へ竟らば、應さに自恣すべし。應さに出罪を與ふべくんば、當さに出罪を與ふべし。出罪羯磨を與へ竟らば、應さに自恣すべし』と。爾の時自恣日に、異住處に比丘あり、波逸提を犯す。或は波逸提を犯すと言ひ、或は波羅提々舍尼を犯すと言ふ。彼れ是くの如きの言を作す。『我等當さに云何がすべき』と。卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し自恣日に、異住處に比丘あり、波逸提を犯す。是の中の比丘或は波逸提を犯すと言ひ、或は波羅提々舍尼を犯すと言ふ。若し波逸提を犯すと知らば、卽ち應さに此の人を將ひ、一處に在りて彼れをして言はしむべし。波羅提々舍尼を犯さば、眼見不聞處にて、敎へて懺悔せしめ、已りて彼の波羅提々舍尼を犯すと言ひし比丘の所に到り、語りて言はく、『彼の犯罪の比丘、我れ懺悔せしめ已る』と。應さに是くの如き方便を作し已りて自恣すべし』と。爾の

時自恣日に、異住處に比丘あり、偸蘭遮を犯す。諸の比丘、或は偸蘭遮を犯すと言ひ、或は波羅夷を犯すと言ふ。偸蘭遮を犯すと言ふ者は、皆是れ多聞にして、阿含、阿毘曇に通じ、持律多智識の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私、若しは王、若しは大臣、若しは種々の外道の沙門、梵志なり。波羅夷を犯すと言ふ比丘も、亦是れ多聞にして阿含、阿毘曇に通じて持律なり。亦復多智識の比丘・比丘尼・乃至沙門・梵志なり。諸の比丘是くの如きの言を作さく、『若し今日自恣せば、衆僧必ず當さに諍事あり、或は能く僧を破し、或は僧の塵垢を生じて衆僧を汚染せしめ、僧をして別異ならしむべし、我等當さに云何がすべき』と。卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『若し自恣日に、異住處に比丘あり偸蘭遮を犯す。諸の比丘或は偸蘭遮を犯すと言ひ、或は波羅夷を犯すといふ。偸蘭遮を犯すと言ふ者は、皆是れ多聞にして、阿含、阿毘曇に通じ、持律多智識の比丘・比丘尼・優婆塞・優婆私、若しは王、若しは大臣、若しは種々の外道の沙門・梵志なり。波羅夷を犯すと言ふ者も、比丘亦是れ多聞にして、阿含、阿毘曇に通じて持律なり。亦復多智識の比丘、比丘尼乃至沙門、梵志なり。諸の比丘是くの如きの言を作す。「若し今日自恣せば、衆僧必ず當さに諍事あるべし、或は能く僧を破し、或は僧の塵垢を生じて衆僧を汚染し、僧をして別異ならしめば、若しは破僧せんことを畏る、卽日に自恣すべからず、應さに小しく停まりて自恣すべし」と。自恣の時、六群比丘佛の自恣を遮するを聽したまふと聞き、卽ち淸淨比丘を遮して自恣せしめず。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『淸淨比丘の自恣を遮すべからず、若し遮するも、猶ほ遮せざるが如し。若し無根不作者を遮すれば、是れを自恣を遮せずといふ。若し有根有作者を遮すれば、是れを自恣を遮すると謂ふ。若し無根有餘不作者を遮すれば、是れを自恣を遮せずといふ。若し有根有餘作者を遮すれば、是れを自恣を遮すといふ。若し無根無餘不作者を遮すれば、是れを自恣を遮せずといふ。若し有根無餘作者を遮すれば、是れを自恣を遮すといふ。未だ三語自恣を說かざるに、若し遮

すれば、是れを自恣を遮せずといふ。三語自恣を說き竟りて、若し自恣を遮すれば、是れを自恣を遮せずといふ。三語自恣する時に當り、若し自恣を遮すれば、是れを自恣を遮すといふ。一說再說も亦是くの如し。遮自恣人、若し身業不清淨・口業不清淨・意業不清淨・無智不分明、問ひを知らず、答ふる能はずんば、餘の比丘應さに此の比丘に語るべし。『止めよ長老、此の鬪諍の事を起すべからず』と。此の比丘の語を用ふること莫れ、便ち應さに自恣すべし。若し遮自恣人・身業清淨・口意業不清淨・無智不分明にして、問ひを知らず答ふる能はざれば、餘の比丘此の比丘に語れ、『止めよ長老、此の鬪諍の事を起すべからず』と、此の比丘の語を用ふること莫れ、便ち應さに自恣すべし。若し遮自恣人・身口清淨・意業不清淨にして無智不分明、問ひを知らず答ふる能はざれば、餘の比丘此の比丘に語れ、『止めよ長老、此の鬪諍の事を起すべからず、』と、此の比丘の語を用ふること莫れ、便ち應さに自恣すべし。若し遮自恣人、身口意業清淨に、有智分明、能く問ひ能く答ふるは、餘の比丘此の比丘に語りて言へ、『汝何事を以ての故に、此の比丘の自恣を遮するや、犯戒を以ての故に遮す、破見の故に遮す、破威儀の故に遮すとせんや』と。若し答へて、『犯戒を以ての故に遮す』と言はゞ、應さに『何等の戒を犯す』と問ふべし。若しは『波羅夷を犯す、若しは僧殘、偸蘭遮を犯す』と言はゞ、是れを犯戒といふ。若し『破戒を以ての故に遮せず、破見を以ての故に遮す』と言はゞ、應さに『云何が破見なる』と問ふべし。若し『六十二見の諸の邪見なり』と言はゞ、是れを破見といふ。若し『破見を以てせず、破威儀を以ての故に遮す』と言はゞ、應さに『云何が破威儀なる』と問ふべし。若し『波逸提・波羅提々舍尼・突吉羅・惡說を犯す』と言はゞ、是れを破威儀といふ。復應さに問ふべし、『何の事を以ての故に他の自恣を遮するや、見を以ての故か、聞の故か、疑の故か』と。若し『見の故に』と言はゞ、應さに問ふべし、『何事を見るや、云何が見るや、汝何に因りての故に見るや、彼の比丘復何の因緣を以て、汝をして見せしむるや、汝何の處に在り

て住し、彼れも復何の處に在りて住し、何事をか見て波羅夷を犯すと爲し、僧殘と爲し、波逸提となし、波羅提々舍尼・偸蘭遮・突吉羅・惡說と爲すや』と。若し『見ず、聞を以ての故に』と言はゞ、『何事をか聞く、云何が聞く、誰より聞く、比丘より聞くとせんや、比丘尼・優婆塞・優婆夷に聞くや。何事をか犯せりと聞くや、波羅夷とせんや僧殘とせんや、乃至惡說なりや』と。若し『聞かず、疑ひを以ての故に』と言はゞ、應さに『何事をか疑ひ、云何が疑ひ、誰より聞いて疑ひを生ずる、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷に聞くとせんや、何事を疑ふ、波羅夷・僧殘、乃至惡說を疑ふとせんや』と問ふべし。若し遮自恣人、有智人に答ふる能はざれば、若し波羅夷を以て遮すれば、應さに僧殘の罪を與へ、然る後に僧自恣すべし。若し僧殘の罪を以て遮すれば、應さに波逸提の罪を與へ、然る後に僧自恣すべし。若し波逸提の罪を以て遮すれば、應さに餘罪を與へ、然る後に僧自恣すべし。若し餘罪を以て遮すれば、應さに法の如く治し、然る後に僧自恣すべし。若し遮自恣人、能く有智人に答ふれば、若し波羅夷を以て遮すれば、應さに滅擯し已りて、然る後に自恣すべし。若し僧殘を以て遮すれば、應さに波利婆沙、若しは本日治、若しは摩那埵、若しは出罪を與ふべし。與へ已りて應さに自恣すべし。若し波逸提を以て遮すれば、懺悔し已りて、應さに自恣すべし。若し餘事を以て遮すれば、應さに法の如く治し、然る後に自恣すべし。爾の時自恣日に住處あり、病比丘、病比丘の自恣を遮す。彼れ云何せんを知らず、即ち諸の比丘に告ぐ、諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『若し住處あり、自恣日に、病比丘、病比丘の自恣を遮せんに、彼の比丘、此の比丘に語りて言へ』、『佛是くの如く語りたまふ、「今日病比丘遮すべからず、須らく此の病の差ゆるを待つべし、長老應さに如法に說くべし、彼れも亦當さに如法に說くべし。是くの如く作し已りて然る後に自恣せよ」と』。爾の時住處あり、自恣日に、病比丘、無病比丘の自恣を遮す。彼の比丘此の比丘に語りて言はく、『長老、佛是くの如く說きたまふ、「須らく病の差ゆるを待つべし、應さに如法に說

くべし、彼れも亦當さに如法に說くべし、是くの如く作し已りて然る後に自恣せよ」と』。爾の時住處あり、自恣日に無病の比丘あり、病比丘の自恣を遮す。彼の比丘此の比丘に語りて言はく、『佛是くの如く語りたまふ、「須らく病差ゆるを待つべし、長老應さに如法に說くべし、彼れも亦當さに如法に說くべし。是くの如く作し已りて然る後に自恣せよ」と』。爾の時異住處あり、衆多の比丘安居を結す。精勤に行道して、果證を增上することを得たり。彼れ是くの如きの念を作す、「我等今日自恣せば、便ち當さに移りて餘處に住すべし、恐らくは是の如きの樂を得ず、我曹當さに云何がすべき」と。即ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『若し住處あり、衆多の比丘安居を結す。精勤に行道して果證を增上することを得たり。諸の比丘是くの如きの念を作す、「我曹若し今日自恣せば、便ち當さに移りて餘處に住すべし、恐らくは是くの如きの樂を得ず」と。彼の比丘即ち應さに白を作して自恣を增益すべし、是くの如きの白を作せ。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今日自恣せず、四月滿じて當さに自恣すべし、白すること是くの如し」と。是くの如きの白を作して、四月に自恣すべし』と。爾の時異住處あり、衆多の比丘共に住す。自恣日に諸の比丘、彼の住處の比丘鬪諍して和合せず、此に來りて自恣せんと欲すと聞く、「我曹當さに云何がすべき」と。即ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『若し住處あり、衆多の比丘共に住す。自恣日に、異住處の比丘鬪諍して和合せず、此に來りて自恣せんと欲すと聞く。彼の比丘應さに若しは二、若しは三、減日自恣すべし。若し十五日自恣ならば、減じて十四日に作せ。若し十四日自恣ならば、減じて十三日に作せ。若し今日來ると聞かば、便ち應さに僧を集めて疾々に自恣すべし。若し聞き已りて界內に至らば、便ち應さに外に出でゝ自恣すべし。若し聞き已りて寺內に入らば、應さに爲めに洗浴の器を具すべし。應さに浴床、浴瓶を具し、刮垢刀・水器・泥器・澡豆・藥草を具すべし。上座に白し、然火し、僧を請じて浴室に入らしめ、舊比丘は應さに、密かに浴

室より、一々出でて界外に至りて自恣すべし。若し客比丘『自恣』と喚ばゞ、應さに答へて、『我曹已に自恣し竟る』と言ふべし。若し舊比丘自恣竟れば、客比丘自恣を遮するも遮することを得ず。客比丘自恣する時は、舊比丘遮すれば遮することを得。若し能く是くの如く方便して、作すことを得れば善し、能くせざれば、彼の比丘應さに白を作して增上自恣すべし。是くの如きの白を作せ、「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今日自恣せず、黑月十五日に至り、當さに自恣すべし、白すること是くの如し」と。是くの如きの白を作して、增上自恣すべし。若し客比丘、住して黑月十五日に到らば、舊比丘應さに白を作して、第二增上自恣すべし。是くの如きの白を作せ。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今日自恣せず、後白月十五日當さに自恣すべし、是くの如く白す」と。應さに是くの如きの白を作し、第二增上自恣すべし。若し客比丘去らざれば、舊比丘應さに法の如く律の如く、强えて和合して自恣すべし』と。

爾の時、自恣日に住處あり、自恣の時罪を識らず、人を識らず、自恣し竟りて罪を識り、人を識る。彼れ是くの如きの念を作さく、「我曹當さに云何がすべき」と。卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『住處あり、自恣の時、罪を識らず人を識らず、自恣し竟りて、罪を識り人を識る。若し自恣し竟れば、前[二]を以て他の罪を擧することを聽すべからず。爾の時住處あり、自恣の時罪を識るの人を識らず、自恣し竟りて、罪を識り人を識る、若し自恣し竟れば、前を以て他の罪を擧することを聽すべからず。爾の時異住處あり、自恣の時罪を識り人を識らず、自恣し竟りて、罪を識り人を識る。若し自恣し竟れば、前を以て他の罪を擧することを聽すべからず。爾の時異住處あり、自恣日に客比丘ありて來る、十四日なり、舊比丘は十五日なり、諸の比丘云何せんを知らず、卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し住處あり、自恣日に、客比丘ありて來ること少なければ、客比丘十四日、舊比丘十五日ならば、客比丘應さに舊比丘に從ふべし。

【二】前を以ては、自恣以前を指すのである。自恣以前に溯りて、他の罪を擧すべからずといふのである。

若し從はざれば法の如く治すべし、若し住處あり、自恣の時、客比丘ありて來り、舊比丘と等しければ、客比丘十四日、舊比丘十五日ならば、客比丘等應さに舊比丘に從ふべし、若し從はざれば、法の如く治すべし。若し自恣の時、住處あり、客比丘ありて來ること多く、客比丘十四日、舊比丘十五日ならば、舊比丘は少し、應さに客比丘に從つて和合を求むべし。若し彼れ與に和合すれば善し、若し與にせざれば、舊比丘は應さに界外に出でて自恣すべし。若し自恣の日に、異住處あり、客比丘ありて來ること少く、客比丘十五日、舊比丘十四日ならば、客比丘は少し、應さに舊比丘に從つて和合を求むべし。若し與に和合すれば善し、若し與にせざれば、應さに界外に出でゝ自恣すべし。若し自恣日に、異住處あり、客比丘ありて來り、此の舊比丘と等しく、客比丘十五日、舊比丘十四日ならば、客比丘は等し、應さに舊比丘に從つて和合を求むべし。若し與に和合すれば善し、若し與にせざれば、應さに界外に出でて自恣すべし。若し自恣日に、異住處あり、客比丘來ること多く、客比丘十五日、舊比丘十四日ならば、舊比丘は少し、應さに客比丘に從ふべし、若し從はざれば法の如く治すべし。十五日十六日も亦是くの如し。

爾の時住處あり、自恣日に客比丘來る。客比丘、舊比丘の未だ來らざるを知り、『我等若し五人過五人あらば、羯磨自恣を作すべし』と。卽ち羯磨自恣を作す。時に舊比丘の來るあり、客比丘自ら念ずらく、「我れ當さに云何がすべき」と。卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し自恣日に、住處あり、客比丘來る。客比丘、舊比丘ありて未だ來らざるを知る。「我等若しは五人、若しは過五人、羯磨自恣を作すべし」と、比丘卽ち羯磨自恣を作す。羯磨自恣を作す時、舊比丘來ること少ければ、舊比丘の上座は、上座の次に隨つて自恣し、若し下座は、下座の次に隨つて自恣す。若し自恣し竟りて擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起ち、舊比丘來ること少ければ、舊比丘應さに清淨自恣を說くべし。若し說かざれば、法の如く治す。爾の時住處

あり、自恣の日に客比丘來る。客比丘、舊比丘の未だ來らざるを知り、「我等五人若し過五人ならば、羯磨自恣を作すべし」と、卽ち羯磨自恣を作す。羯磨自恣を作す時、舊比丘來ること等しければ、客比丘應さに更に自恣すべし、若しせざれば法の如く治す。自恣を作し竟りて、擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起ち、舊比丘來ること等しければ、客比丘應さに更に自恣すべし、若しせざれば法の如く治す。爾の時住處あり、自恣日に客比丘來る。客比丘、舊比丘の未だ來らざるを知り、「我等若しは五人、若し過五人ならば、共に羯磨自恣すべし」と、卽ち羯磨自恣を作す。羯磨自恣を作す時、舊比丘ありて來ること多ければ、客比丘應さに自恣すべし、若しせざれば法の如く治す。若し自恣竟り、擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起ち、舊比丘來ること多ければ、客比丘應さに更に自恣すべし、若しせざれば法の如く治す。爾の時住處あり、自恣日に舊比丘來る、舊比丘、客比丘の未だ來らざるを知り、「我等五人若しは過五人ならば羯磨自恣を作すべし」と、羯磨自恣を作す時、客比丘ありて來ること少なければ、客比丘の上座は、上座に隨つて自恣し、下座は下座に隨つて自恣す。若し自恣竟りて擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起ち、客比丘來ること少なければ、應さに清淨自恣を說くべし、若し說かざれば法の如く治す。爾の時住處あり、自恣日に舊比丘ありて來る。舊比丘、客比丘ありて未だ來らざるを知る。「我等五人、若し過五人ならば、羯磨自恣を作すべし」と。羯磨自恣を作す時、客比丘來ること等しければ、舊比丘應さに更に自恣を作すべし、若しせざれば法の如く治す。自恣竟りて、若し擧衆未だ起たず、若しは多く未だ起たず、若しは都べて已に起たば、舊比丘應さに更に自恣すべし、若しせざれば法の如く治す。爾の時住處あり、自恣日に舊比丘來る。舊比丘、客比丘ありて未だ來らざるを知り、「我等五人、若しは過五人なれば、羯磨自恣を作すべし」と。羯磨自恣を作す時、客比丘來ること多ければ、舊比丘應さに更に自恣すべし、若しせざれば法の如く

治す。客比丘に客比丘來るも亦是くの如く、舊比丘に舊比丘の來るも亦是くの如し。或は言ふ『應さに自恣すべし』と、或は言ふ『應さに自恣すべからず』と。若し來らざれば『失し去れ滅し去れ』と、種々の方便を作さんと欲し、他を破壞せんと欲し、便ち羯磨自恣を作さば、彼れ若し羯磨を作すも、彼の比丘羯磨を成ぜず、偸蘭遮を得。

爾の時、自恣日に、若し客比丘來り、舊比丘の相、敷縄床・木床・敷具・氈褥・枕具・洗脚處あるを見る。相あるを見て求覓せず、便ち羯磨自恣を作さん、羯磨自恣を作す時に、舊比丘來らば、客比丘自ら念ずらく、「我れ當さに云何がすべき」と。即ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し自恣日に、客比丘ありて來り、舊比丘の相と敷縄床・木床・敷具・氈褥・枕具・洗脚處あるを見、相あるを見て求覓せず、便ち羯磨自恣を作さば、若し羯磨自恣を作すも羯磨自恣を成ぜず、罪あり。相を見て便ち求め、求めて得ざれば即ち應さに喚ぶべし。若し喚ばずして羯磨自恣を作さば、羯磨自恣を成ぜず、罪あり。相を見て便ち求め、求めて得ず、求めて既に得ず、便ち言ふ「失し去れ滅し去れ」と、種々の方便を作し、他をして破壞せしめんと欲し、便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨を成ぜず、偸蘭遮を得。相を見て便ち求め、求めて得ず、得ずして便ち喚び、喚び已りて羯磨自恣を作さば、彼の比丘の羯磨成ぜず、罪を犯さず。相を見て便ち求め、求めて之を得、和合して羯磨自恣すれば、彼の比丘羯磨自恣を成ず、罪を得ず。見疑も亦是くの如し。爾の時住處あり、自恣日に、舊比丘來りて客比丘の相を見、衣・鉢・座具・針筒・洗脚處を見、而も求覓せず、便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨自恣を成ぜず、罪を得。相を見て便ち求め、求めて得ざれば、即ち應さに喚ぶべし。若し喚ばずして羯磨自恣を作さば、羯磨自恣を成ぜず、罪あり。相を見て便ち求め、求めて得ず、既に求めて得ざれば、便ち「失し去れ滅し去れ」と言ふ。種々に方便して、他をして破壞せしめんと欲し、便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨を得ず、偸蘭遮を得。相を見て

便ち求め、求めて得ず、得ずして便ち喚び、喚び已つて羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨自恣を成ぜず、罪を犯さず。相を見て便ち求め、求めて之を得、和合羯磨して自恣すれば、彼の比丘羯磨自恣を成ず、罪を得ず。見疑も亦是くの如し。爾の時自恣日に住處あり、客比丘來りて、舊比丘の聲、經行の聲、謦欬の聲、誦經の聲、言論の聲を聞き、聞いて求めず、便ち羯磨自恣を作す。羯磨自恣を作す時舊比丘來る。彼に云何せんを知らず、卽ち諸の比丘に告ぐ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し自恣日に、住處あり、客比丘來り、舊比丘の聲、經行の聲、謦欬の聲、誦經の聲、言論の聲を聞き、聞いて求めず、便ち羯磨自恣を作すも、羯磨自恣を成ぜず、罪を得。聞くに從つて求め、乃至和合自恣も亦是くの如し。聞疑も亦是くの如し。爾の時住處あり、自恣日に舊比丘の來るあり、客比丘の來る聲、經行の聲、謦欬の聲、誦經の聲、言論の聲、衣を抖擻するの聲を聞き、聞いて求めず、便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨を成ぜず、罪あり。聞くに從つて求め、乃至和合自恣も亦是くの如し。聞疑も亦是くの如し。爾の時住處あり、自恣日に客比丘ありて來る。舊比丘の戒場上にあるを見、見て求めず、諸の比丘便ち羯磨自恣を作す。諸の云何せんを知らず、卽ち佛に白す。佛言はく、『住處あり、自恣日に客比丘あり、舊比丘の戒場上に在るを見、見て求めず、諸の比丘便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨を成ず、罪あり。若し見て便ち求め、求めて喚ばず、便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨自恣を成ず、罪あり。若し見て求め、求めて喚び、羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨を破せず、罪なし。見疑も亦是くの如し。爾の時住處あり、自恣日に舊比丘來るあり、客比丘の戒場上に在るを見、見て求めず、諸の比丘羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨自恣を成ず、罪あり。若し見て便ち求め、求めて喚ばず、便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨自恣を成ず、罪あり。若し見て求め、求めて喚び、羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨を成ず、罪なし。見疑も亦是くの如し。客比丘、舊比丘に聞くも亦是くの如し。聞疑も亦是くの如し。舊比

丘、客比丘に聞くも亦是くの如し。聞疑も亦是くの如し。爾の時住處あり、自恣日に客比丘ありて來る。舊比丘の界內に在るを見、見て求めず、便ち羯磨自恣を作さば、羯磨自恣を作す時、舊比丘の來るあるを見、云何せんを知らず、卽ち諸の比丘に告ぐ、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し住處あり、自恣日に客比丘ありて來る、舊比丘の界內に在るを見、見て求めず、便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨を成ぜず、罪あり。見て求め、求めて喚ばず、便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨を成ぜず、罪あり。見て便ち求め、求め已りて喚び、和合して羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨を成ず罪なし。見疑も亦是くの如し。爾の時住處あり、自恣日に、舊比丘ありて來り、客比丘の界內に在るを見、見て求めず、便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨自恣を成ぜず、罪あり。若し見て便ち求め、求めて喚ばず、便ち羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨自恣を成ぜず、罪あり。若し見て求め、求めて喚び、和合して羯磨自恣を作さば、彼の比丘羯磨自恣を成ず、罪なし。見疑も亦是くの如し。客比丘、舊比丘を聞くも亦是くの如し。聞疑も亦是くの如し。舊比丘、客比丘を聞くも亦是くの如し。聞疑も亦是くの如し。時に六群比丘是くの如きの念を作す。「有比丘有住處より、無比丘有住處に至らば、恐らくは餘の比丘、我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と。諸の比丘卽ち佛に白す。佛言はく、『是くの如きの意を作すべからず、「有比丘有住處より無比丘有住處に至らば、恐らくは餘の比丘、我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と』。彼の比丘是くの如きの念を作す、「有比丘有住處より、無比丘無住處に至らば、恐らくは餘の比丘、我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と。佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、「有比丘有住處より無比丘無住處に至らば、恐らくは餘の比丘、我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と』。彼の比丘是くの如きの念を作す。「有比丘有住處より、無比丘有住處無住處に至り、若しは比丘戒場上に往かば、恐らくは餘の比丘、我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と。佛言はく、

『是くの如きの意を作すべからず、有比丘有住處より無比丘有住處無住處に至り、若しは比丘戒場上に往かば、恐らくは餘の比丘、我が爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮せん」と』。若し伴なくして共に去り、難事なくなして去る者は突吉羅を得。有比丘無住處より、無比丘有住處に至るも亦是くの如し。有比丘無住處より、無比丘無住處に至るも亦是くの如し、有比丘無住處より、無比丘有住處無住處に至るも亦是くの如し。有比丘有住處無住處より、無比丘有住處に至るも亦是くの如し。有比丘有住處無住處より、無比丘無住處に至るも亦是くの如し。有比丘有住處無住處より、無比丘有住處無住處に至るも亦是くの如し。若し親友智識の爲めにするも亦是くの如し。爾の時六群比丘尼、是くの如きの意を作す。「寺内に住して餘の比丘を遮し、六群比丘の爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮すること莫れ」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『比丘尼是くの如きの意を作すべからず、寺内に往いて餘の比丘を遮して言はく、「六群比丘の爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮すること莫れ」と。比丘尼の前に在りて羯磨を作し、若しは自恣を遮すべからず』と。時に諸の比丘尼・式叉摩那・沙彌尼を遣はし、寺内に至りて餘の比丘を遮し、六群比丘の爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮するなからしむ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『比丘尼・式叉摩那・沙彌尼を遣はし、寺内に至りて餘の比丘を遮すべからず、「六群比丘の爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮する莫れ」と。式叉摩那、沙彌尼の前に在りて羯磨を作し、若しは自恣を遮すべからず』と。彼の諸の比丘尼、復白衣の智識を遣はし、寺内に往いて餘の比丘を遮し、六群比丘の爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮する莫らしむ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『比丘尼是くの如きの念を作すべからず、白衣の智識を遣はし、寺内に往いて餘の比丘を遮し、六群比丘の爲めに羯磨を作し、若しは自恣を遮することなからしむ、白衣の前に在りて羯磨を作し、若しは自恣を遮すべからず』と。爾の時波斯匿王、兵を遣はして衆僧を衛護す。諸の比丘衆の兵人に語りて言はく、『小しく却け、我曹羯磨自恣を作さん

と欲す』と。彼の人言はく、『我等衆僧を衞護す、今敢て餘處に往かず』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『應さに更に語りて、餘處に避け去らしむべし、若し去らば善し、若し去らざれば、自ら應さに去るべし。不見不聞處に至りて羯磨自恣を作し、未受大戒人の前に在りて、羯磨自恣を作すべからず』と。時に諸天・龍・夜叉來りて自恣を聽く。天眼の比丘ありて見る、見已りて畏愼の心を生ず。佛、我曹に、未受大戒人の前に在りて自恣することを聽したまはず、と、卽ち佛に白す。佛言はく、『人の未受大戒を除き、餘は前に在りて羯磨自恣することを聽す』と。彼れ自恣し竟りて戒を說き、坐すること久うして疲極す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自恣竟りて復戒を說くべからず、自恣は卽ち說戒なり』と。佛說きたまふこと是くの如し。（自恣揵度竟る。）

皮革揵度

爾の時、世尊王舍城に在しき。時に瞻婆城に大長者子あり、字は[三]守籠那、其父母唯一子あり、甚だ之を愛念す。生來樂を習ひて、未だ曾て地を蹈んで行かず、足下に毛を生ず。時に摩竭王、瞻婆城中に大長者ありて子あり、父母甚だ之を愛念し、生來樂を習ひて、未だ曾て地を蹈んで行かず、足下に毛を生ずと聞き、之を見んと欲するに遲し。卽ち瞻婆城主に勅し、諸の長者をして、各其の兒を將ひて、我が所に來至せしむ。時に瞻婆城主卽ち各其の兒を將ひ、摩竭王の所に詣り、到り已りて頭面に王の足を禮して一面に在りて住す。卽ち王に白して言さく、『王瞻婆城中の大長者の子を見んと欲すと、此の子生來樂を習ひ、父母之を愛して、未だ曾て地を蹈んで行かず、足下に毛を生ず、願はくは王、衣を以て地に敷くことを聽したまへ』と。王言はく、『衣を以て地に敷くことを聽す』と。時に長者子守籠那、卽ち衣を以て地に敷き、王の所に詣りて頭面に禮を作す。王足下の生毛を見て、心甚だ歡喜す、王卽ち現世の利益を與へ已りて語つて言はく、『我れ已に汝に現世の

【三】守籠那(Srona)。譯して聞二百億といふ。

利益を與ふ、世尊王舍城の耆闍崛山中に在す、汝往いて見たてまつり禮拜問訊すべし、當さに汝に後世の利益を與ふべし』と。時に瞻婆城主及び諸の長者、王の語を聞き已りて、共に耆闍崛山に詣る。時に長老娑竭陀あり、佛の爲めに給使し、異處に在りて磐石の上に坐す。時に瞻婆城主、長老娑竭陀の所に詣りて問うて言はく、『今世尊何の處にか在る、我等如來を見たてまつらんと欲す』と。娑竭陀言はく、『小しく待て長者、須らく我れ佛に白すべし』と。爾の時長老娑竭陀、卽ち石上に沒し、如力士屈伸臂の間に、彼れより來りて佛前に踊出し、白して言さく、『瞻婆長者世尊を見たてまつらんと欲す』と。佛告げて言はく、『汝屋蔭の中に往いて座を敷け、我れ當さに往いて坐すべし』と。時に娑竭陀卽ち敎を受け、座を敷き已りて、還りて佛所に詣り、頭面禮足して一面に在りて住し、世尊に白して言さく、『我れ已に座を敷き竟る、今正さに是れ時なり』と。爾の時世尊屋中より出でゝ坐し已り、娑竭陀に告げて言はく、『瞻婆長者に來れと語れ』と。時に長老娑竭陀佛前に沒し、如力士屈伸臂の頃に石上に踊出す。時に諸の長者見て未曾有なりと歎じ、『世尊の弟子、神足猶ほ爾り、況んや復如來をや』と。娑竭陀言はく、『長者宜しく知るべし』と。是の時瞻婆城主佛所に來詣し、頭面作禮して却つて一面に坐す。世尊爾の時卽ち諸の長者子及び瞻婆城主の爲めに、種々に方便して說法勸化し、大に歡喜せしむ、布施持戒生天の法なり。卽ち座上に於て法眼淨を得、法を見、法を得、果證を得て、復迴還せず。世尊に白して言はく、『大德、今より已去、佛法僧に歸依しまつる、優婆塞となることを聽したまへ、今より已去、不殺生乃至不飮酒』と。爾の時長者子守籠那會中に在りて坐す。是の念を作して言はく、「我れ佛の所說を聞くに、若し我れ家に在りて妻子と倶にせば、淸淨行を修すること能はず、我れ寧ろ佛に從つて求めて鬚髮を除き、家を捨てゝ道の爲めにすべし」と。意樂をして罷め散ぜしめんと欲す。爾の時瞻婆城主、佛の種々方便して說法したまふを聞き、心大に歡喜し、卽ち坐より起ちて禮を作し、佛を遶りて去る。長者子守籠那、還り

て佛所に詣り、頭面作禮して却つて一面に住す。即ち世尊に白して言さく、『我が世尊の所説を聞くが如き、若し我れ家に在りて妻子と倶にせば、清淨行を修することを得ず、今世尊に從つて求めて鬚髮を除き、家を捨てゝ道の爲めにせんと欲す』と。佛守籠那に問ひたまはく、『汝の父母汝に聽すや不や』と。答へて言はく、『世尊父母は未だ聽さず』と。佛言はく、『若し父母聽さずんば、如來出家を聽さず』と。答へて言はく、『我れ今當さに方便を作して、父母をして聽さしむべし』と。佛言はく、『今正さに是れ時なり』と。時に守籠那瞻婆城に還り、父母の所に至りて白して言さく、『我が佛の所説を聞くが如き、若れ我れ家に在りて妻子と倶にせば、清淨行を修することを得ず、今佛所に於て求めて鬚髮を除き、家を捨てゝ道を爲さんと欲す、願はくは父母聽したまへ』と。父母答へて言はく、『出家の法甚だ難し、沙門と爲ること亦易からず、如かず家に在りて愛欲を樂み、自ら恣にして福を作さんには、須らく出家すべからず』と。時に守籠那、父母の是くの如きの語を聞き、猶ほ故ほ息まず、乃至第二第三も亦是くの如し。守籠那是くの如くにして三たび父母に白す。猶ほ故ほ聽さず。時に守籠那即ち坐より起ちて地に坐し、是くの如きの言を作さく、『今より已去、止めて洗浴せず、香を身に塗らず、飲まず食はず、若しは當さに死すべし、若しは或は出家することを得ん』と。一日食はず、乃ち五日に至る。時に守籠那の諸の親里智識、守籠那の佛に從つて求めて鬚髮を除き、出家して道を爲さんと欲し、父母聽さず、一日不食にして乃ち五日に至ると聞く。時に守籠那の諸の親里智識、守籠那の所に往いて語つて言はく、『起つべし守籠那、身體を洗浴して香を以て身に塗れ、飲食自ら樂み、恣に福德を作せ、出家は易からず、沙門も亦難し、且らく止めよ、須らく出家すべからず』と。守籠那諸の親里智識の、是くの如きの語を聞き、猶ほ故ほ止まず、第二第三も亦是くの如し、親友も亦是くの如し。爾の時守籠那の件等、守籠那の父母の所に詣り、是くの如きの言を作す。『守籠那の家を捨てゝ道を爲すことを聽すべし、若し出家を樂まば、

常に相見ることあらん、若し出家を樂まされば、便ち當さに此に還るべし、守籠那若し死せば、當さに復云何がすべき』と。父母卽ち言はく、『隨意に出家せよ』と。時に守籠那父母の聽許を聞き、心に自ら念じて言はく、「我れ今羸瘦是くの如し、一食に堪へず、小しく自ら將つて養ふべし」と。時に守籠那少多力あり、父母の所に往いて白して言はく、『我れ今出家し去る』と。父母言はく、『今正さに是れ時なり』と。時に守籠那、卽ち王舍城耆闍崛山に往き、世尊の所に到り、頭面作禮して一面に在りて住し、白して言さく、『父母已に聽す、我れ出家して道を爲さん、我れ出家して道を爲さん、願はくは佛我れを度して大戒を受くることを得しめ給へ』と。佛卽ち出家を聽して大戒を受けしむ。爾の時守籠那の父母、兩城の中間に於て七處に驛を安んじ、守籠那の爲めに熱食を送り、時に及んで到らしむ。時に守籠那此の食を以て上座に與へ已り、自ら城に入りて乞食す。其の父母、守籠那送る所の食を以て諸の比丘に與へ、自ら乞食すと聞き、今より已去止めて復ために食を送らず。爾の時守籠那、溫水河邊の尸陀林中に往いて住す。勤行精進にして、經行の處血流れて地を汚すこと屠殺處の如し。時に守籠那靜處に在りて思惟す。心に自ら念じて言はく、「我れ今勤行精進す、佛の弟子中の如き、我れに勝るものあることなし、我れ今何が故に無漏解脫を得ざる、我が家中大に財寶あり、自ら娛樂し、自恣にして福を作すべし、今寧ろ戒を捨てゝ家に還るべし」と、復道を爲さず。爾の時世尊其の心念を知り、譬へば如力士屈伸臂頃に、耆闍崛山より尸陀林中に至り、經行處に往いて、血の地を汚すこと、屠殺處の如きを見、世尊知りて故らに餘の比丘に問ひたまふ。『此れ誰の經行處ぞ、血の地を汚すこと屠殺處の如くなる』と。諸の比丘佛に白して言はく、『是れ守籠那比丘勤行精進して、是れ其の血地を汚すなり』と。佛言はく、『喚び來れ』と。比丘敎を受けて守籠那の所に往いて語りて言はく、『世尊汝を喚びたまふ』と。守籠那佛の喚びたまふと聞き、卽ち佛所に往き、佛足を禮して却つて一面に坐す。佛知りて故らに問ひたまふ、『汝

屏處に於て是くの如きの念を作せり、「我れ勤行精進すること、佛弟子中の如き、我れに勝るものなし、我れ今何が故に無漏解脱を得ざる、我が家中大に財寶あり、自ら娯樂すべし、自ら恣にして福を作さん、今寧ろ戒を捨てゝ家に還るべし」と、復道の爲にせざるや』と。『實に爾り世尊』と。世尊言はく、『我れ今汝に問ふ、隨意に我れに答へよ、汝家に在る時能く琴を彈ずるか不や』と。『是くの如し世尊、家に在りて實に能く琴を彈ず』と。『守籠那、云何ぞ琴絃若し急ならば、音聲好きや不や』と。『不なり世尊』と。『守籠那、云何ぞ琴絃若し緩ならば、音聲好きや不や』と。『不なり世尊』と。『云何ぞ守籠那、琴絃不緩不急ならば、音聲好きや不や』と。『是くの如し世尊』と。佛言はく、『是くの如く守籠那、若しは大に勤めて精進するは掉動なり、若しは少しく精進するは懈怠なり、應さに等精進にして諸根に等しうすべし』と。爾の時守籠那佛の略して教誡を說きたまふを聞き已り、獨り靜處に在りて勤めて修し、精進心にして放逸ならず、初夜にも後夜にも、意を警めて助道の法を修行し、出家を爲す所の得果は、久しからずして、無上の淨行現世に現證し、我が生已に盡き、梵行已に立ち、所作已に辨じ、復身を受けず、守籠那比丘の阿羅漢道を得ることを知る。時に守籠那比丘、阿羅漢道を得已りて佛所に往き、頭面禮足して一面に在りて住し、佛に白して言さく、『若し比丘あり、阿羅漢を得て諸の有漏を盡さば、〔四〕六處を樂む、出離を樂み、不瞋恚を樂み、寂靜を樂み、愛欲を盡すを樂み、受陰を盡すを樂み、無癡を樂む。若し比丘あり、羅漢漏盡を得て此の六處を樂まんに、世尊頗し信に依らずして、出離を得るものありや不や。是くの如きの意を作すべからず、信に依らずして羅漢道を得、有漏を盡し、欲を盡して無欲に、恚を盡して無恚に、癡を盡して無癡にして、出離を樂むと。世尊、頗し持戒に依らずして、故ほ無恚を樂むことを得るありや不や。是くの如きの意を作すべからず、持戒に依らずして羅漢道を得、有漏を盡し、愛を盡して無愛、恚を盡して無恚、癡を盡して無癡にして無恚を樂むと。世尊、頗し諸の

【四】六處樂について、『開宗記』に云く、「此の中寂靜を樂むは、是れ定解脱、餘の五句は是れ慧解脱なり。解脱して縛を絶すれば、稱して出離と爲す。聖情の所欣之を名けて樂と爲す。不瞋を樂む等とは、恒に三善を以て心に居く。盡陰を樂むとは、後有を受けず」云々と。三善は貪・瞋・癡の反對をいふのである。

利養を斷ぜずして、寂靜を樂むものありや不や。是くの如きの意を作すべからず。利養を斷ぜずして羅漢道を得、恚を盡して無恚に、癡を盡して無癡に、寂靜を樂む、と。彼れ欲を盡して無欲に、意を盡して無恚に、癡を盡して無癡に、愛盡き受陰盡きて無癡を樂む、是くの如きの比丘は、心解脫有漏眼に多色を見、慧解脫、心解脫二俱に不染汚識なり、色と雜はらず第四禪に住す、耳・鼻・舌・身・意も亦是くの如し。世尊、大石山の全く一段を爲して缺けず、無孔にして漏れざるが如し。若し東方より大疾風雨の來るあるも、此の山は移らず傾動すべからざるが如し。南西北方も亦復是くの如し。世尊、若し比丘阿羅漢道を得、心に解脫を得、有漏を盡し、眼に多色を見、慧解脫と心解脫と、二俱に不染汚識なれば、色を雜へず第四禪に住す。耳・鼻・舌・身・意も亦是くの如し』と。是の語を說き已りて、重ねて偈を說いて言はく、

出離を樂む者　寂を樂む比丘は　不瞋恚を樂む　及び愛を盡すものは　受陰を盡すを樂む　心愚癡ならざれば　審かに不起を知る　是れに從ふは是れ解脫　正解脫を以て　便ち息滅となす
已に無觀を得れば　作あることなし　譬へば大山の如く　風も壞すること能はず　是くの如きの色　聲香味觸の法　善惡の法に於て　智者は動せず　心解脫に住して　滅盡を見る

是くの如く守籠那、此の偈を說き已りて、佛即ち之を可し、坐より起ちて前んで佛足を禮して去る。去ること久しからずして、佛、諸の比丘に告げて言はく、『應さに是くの如きの自記を作して道を得べし、但其の義を說くに正言ならざれば、餘の愚癡の比丘の、歡喜自記して後に所得なく、空しく自ら疲苦するが如くならざることを得』と。

爾の時、守籠那、異時に於て佛所に往き、頭面禮足して却つて一面に住す。佛守籠那に告げたまはく、『汝生來樂を習ひて苦に串涉せず、汝寺內に於て、一重の革屣を著くることを聽す。』即ち佛に白して言さく、『我れ五象王を捨てゝ出家して道を爲す、或は人の笑言を致さん。「守籠那五象王を

捨てゝ出家して道を爲し、一重の革屣を貪る」と。若し世尊、諸の比丘に畜ふることを聽したまはば、我れ亦當さに畜ふべし』と。佛時に默然として之を可したまふ。卽ち此の因緣を以て比丘僧を集め、諸の比丘の爲めに隨順說法し、無數に方便して、頭陀を行じ、少欲知足にして出離を樂むものを稱讃し、諸の比丘に告げたまはく、『身を護し、衣を護し、臥具を護するが爲めの故に、寺內に在りて一重の革屣を著くることを聽す』と。時に諸の比丘一重革屣を著け、久しからずして便ち穿壞す。樹皮若しは皮を以て之を補ふことを聽す、『當さに縷を以て縫ふべし、若し斷壞すれば、應さに筋、若しは毛、若しは皮縷を以て縫ふべし』と。彼れ時に錐を須ふ、比丘佛に白す。佛言はく、『錐を畜ふることを聽す』と。

四分律卷第三十八

皮革揵度

卷の第三十九（三分の三）

皮革揵度の餘

爾の時、大迦旃延、阿槃提國[一]に在り、拘留歡喜山[二]の山中に在りて住す。億耳優婆塞[三]使人と倶なりき。時に億耳心に自ら念じて言はく、「我が佛の所說を聞くが如き、若し我れ家にありて妻子と倶にせば、清淨行を修することを得ず、寧ろ鬚髮を除き、家を捨てゝ道を爲すべし」と。卽ち大迦旃延の所に往き、是くの如きの言を作す、『我が佛の所說を聞くが如き、若し我れ家に在りて妻子と倶なれば、清淨行を修するを得ず、願はくは大德、我れを度して出家して大戒を受けしめよ』と。大迦旃延言はく、『出家の事難し、沙門易からず、汝但家に在りて佛戒を護持せよ、當さに時節を以て佛教を修行すべし』と。爾の時億耳是くの如く再三迦旃延に白す、時に大迦旃延、億耳の慇懃三たび至るを見、便ち出家を聽す。受戒得難く、三年にして乃ち大戒を受く。何を以ての故に、十僧に滿たざるを以ての故に。億耳受戒未だ久しからずして、便ち阿羅漢道を得、自記得道亦上の如し。爾の時億耳、佛の功德、相好端正にして諸根寂靜、上調伏を得、猶ほし象王の如く、又澄淵の如しと聞き、之を聞いて歡喜し、便ち佛を見たてまつらんと欲し、迦旃延の所に詣りて白して言さく、『我れ佛の功德を聞くこと是の如し、今往いて如來無所著等正覺を見たてまつらんと欲す』と。迦旃延言はく、『佛の功德は汝の所說の如し』と。迦旃延言はく、『汝我が名を持ちて佛所に詣り、頭面禮足して問訊せよ、「起居少病にして安樂なりや不やと」五事を持つて往いて佛に白せ、「阿濕婆阿槃提國[四]には比丘少し、大戒を受くること難く、三年の中に乃ち受戒することを得、何を以ての故に、十僧に滿たざるを以ての故に。今より已去、願はくは世尊、少しく方便を開し、阿濕婆阿槃提國にて大戒を受くることを得るを聽したまへ。阿濕婆阿槃提國には、諸の剌棘瓦石多し、一重の革屣は

【一】阿槃提(Avanti)。
【二】拘留歡喜山(Kururng-hara)。
【三】億耳(Kutikaṇṇa)。
【四】阿濕婆阿槃提は、唯阿槃提と前にありしと同國である。阿濕婆阿槃提は(Aśvaka-avanti)。

久しきを經ること能はず、願はくは世尊、重革屣を著くることを聽したまへ。阿濕婆阿槃提國の世人浴を好む、願はくは世尊、比丘の數々洗浴することを聽したまへ。餘方の如き好臥具多し、伊梨[五]延陀、毾羅、毾々羅、氍氀是くの如し。阿濕婆阿槃提國は皮を以て臥具となす。羖羊皮、白羊皮、鹿皮なり、願はくは世尊、皮臥具を畜ふることを得るを聽したまへ。或は比丘あり、異方に往く、後に住處に衣を得て便ち肯て受けず。何を以ての故に、恐らくは尼薩耆を犯さんをと、願はくは世尊、少方便を開することを聽したまへ」と。時に億耳比丘、大迦旃の語を聞き、默然として受持し、即ち坐より起ちて頭面禮足し、遶り已りて去る。億耳、世尊の王舍城耆闍崛山に在して住したまふと聞く。時に億耳、三衣鉢を持つて往いて佛所に到り、頭面禮足し已りて、却つて一面に住す。佛即ち慰勞して言はく、『住止安樂なりや不や、飲食を以て苦と爲さゞるや』と。佛に白して言さく、『住止安樂なり、飲食を以て苦と爲さず』と。佛阿難に勅したまはく、『客比丘のために座を敷け』と。爾の時阿難自ら常法を知る、世尊客比丘と共に宿せんと欲し、便ち阿難をして座を敷かしむ。時に阿難佛語を聽き已りて、佛屋內に還り、佛座に對して座を敷き、敷座已りて還りて頭面に禮足し、却つて一面に住し、世尊に白して言さく、『已に客比丘のために座を敷き竟ふ、宜しく是れ時を知るべし』と。爾の時世尊即ち起ちて屋に還り、座に就いて坐し、億耳も亦佛屋に入り、佛に對して坐す。爾の時世尊靜に坐したまひ、須臾にして億耳に告げて言はく、『汝法を說くべし』と。億耳佛の敎を聞き已り、佛前に在りて十六句義を說く。不增不減にして音聲淸好に章句に次第了々解すべし。爾の時世尊是の念を作したまふ、「善い哉比丘、十六句義不增不減にして經法を壞せず、音聲淸好にして、章句の次第了々解すべし。佛億耳に問ひたまはく、『本何の作す所ぞ』と。答へて言はく『久しく、欲過を見るも、受戒を得がたし、乃ち三年を經たり。何を以ての故に、十僧に滿たざるを以ての故に』と。億耳念じて言はく、「今正に是れ時なり、和尚迦旃延遣はす所の五事あり」と。即ち佛に白

【五】伊梨延陀（Aiṇeya）。毾羅、毾々羅共に支那にないので譯すること能はずとある。

して言さく、『和尚迦旃延世尊の足下に稽首し、世尊の起居を問訊したてまつる。「康強少病安樂なりや」と。』此の五事を白すこと前に說くところの如し。時に佛默然として聽許したまふ。明日淸旦此の事を以て比丘僧を集め、諸の比丘の爲めに隨順說法し、無數に方便して、頭陀にして威儀齊整に少欲知足に、空閑に樂處するを稱讚し、諸の比丘に告げて言はく、『阿濕婆阿槃提國には、持律五人にして大戒を受くることを得るを聽す。若し餘方にありても亦聽す。餘方とは、東方に國あり、白木調國と名づく、已外は便ち聽す。南方に塔あり、靜善塔と名づく、已外は便ち聽す。西方に國あり、山を一師梨仙人種山と名く、方外は便ち聽す。北方に國あり、柱と名づく、方外は便ち聽す。是くの如く諸の方外は、持律五人にして大戒を受くることを得るを聽す。阿濕婆阿槃提國には、重革屣を著くることを聽す。阿濕婆阿槃提國には、數々洗浴することを聽す。羖羊皮、白羊皮、鹿皮の臥具を聽す。諸の比丘衣を得て入手し、數十日に滿ずることを聽す、若し過ぐれば應さに捨つべし、捨て已つて懺悔せよ』と。爾の時比丘、皮を得て革屣を補ふ、佛を去ること遠からず、便ち擿壞す。重革屣事を犯すを恐る。爾の時世尊知りて故らに比丘に問ひたまふ、『汝何が故に壞革屣を擿するや』と。答へて言はく、『重革屣事を犯すことを恐る』と。佛言はく、『革屣若し穿壞すれば、重ぬることを聽す』と。時に諸の比丘未治皮を得たり。佛言はく、『鞣治することを聽す』と。若しは自ら鞣し、若しは人をして鞣せしめ、皮を鞣し竟りて、裁して一重革屣を作り、刀を須ふ。佛言はく、『刀を畜ふることを聽す』と。裁板を須ふ、佛言はく、『板を畜ふることを聽す』と。筋若しは毛、若しは皮縷等を須ふ。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。剗を須ふ。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。若し刀鈍なれば、磨石を畜ふることを聽す。時に諸の比丘、刀錐筋毛皮鞣剗迸散して地に在り、安處なし。佛言はく、『囊を作りて盛り、若しは竹を織りて籠を作り、若しは樹皮籠を聽す。毛囊を以て、外を裹むことを聽す。十種衣中趣ち一を用ひ、一衣にて囊を作ることを聽す。時に諸

の比丘皮を用ひて作る。佛言はく、『皮を以て作ることを聽さず』と。時に諸の比丘新衣を著く、革屣にて坐に上り、新衣を汚す。佛言はく、『新衣を著けて、革屣上坐すべからず』と。『比丘亦皮上に坐すべからず、阿濕婆阿槃提國を除く』と。時に諸の比丘、革屣を持つて前に在いて便ち睡る。拘銜みて去る。佛言はく、『革屣を持つて前に在いて睡るべからず、應さに草を以て覆ひ、若しは兩底相合して、尼師壇の下に置くべし』と。爾の時比丘、革屣を持つて邊に置いて睡る。轉反して革屣の上に墮つ、畏愼の心あり、眠皮上を犯すを恐る。佛言はく、『不犯なり』と。時に比丘、革屣を以て鉢中に置いて行く。餘の比丘見て、甚だ之を惡む。佛言はく、『革屣を以て鉢中に置くべからず、應さに清淨にして鉢を持つべし』と。時に比丘、一手に革屣と鉢とを捉る。餘の比丘見て之を惡む。佛言はく、『一手に革屣と鉢とを捉るべからず、應さに一手に鉢を捉り、一手に革屣を捉るべし』と。時に諸の比丘泥水を渡り、衣を褰ぐることを得ず、衣泥水の中に墮つ。佛言はく、『指にて革屣を鉤し、鉢を掌中に置き、一手にて衣を褰ぐることを聽す。時に諸の比丘、拘薩羅國の人間に遊行し、無比丘住處村に到り、陶師の舍に宿す。時に泥作の邊に皮あり、比丘上に在りて眠る。淸旦見て皮上眠を犯すを畏る。佛言はく、『不犯なり』と。時に六群比丘大皮を畜ふ。師子皮、虎皮、豹皮・獺皮・野猫皮・迦羅皮・野狐皮なり。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『一切の大皮は畜ふることを得ず』と。六群比丘高大床上に坐す。若しは獨り繩床・木床・象牙床に坐し、馬皮を敷き、象皮・錦褥・雜色の臥具、氍氀若しは獺毛を敷き、貯褥を用ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『高大床上乃至獺毛、貯褥に坐すべからず』と。時に諸の比丘白衣の舍に到る。比丘の爲めに好高の大床を敷き、比丘を請じて坐せしむ。諸の比丘言はく、『佛我等に高大床に坐することを聽したまはず』と。諸の白衣言はく、『我等更に何處にか床を得ん』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『寶床を除いて餘は、白衣の舍に在りては坐すべきことを聽す』と。時に諸の比丘白衣の舍に至る。比丘の爲めに皮

床を敷き、獨り床に坐せしむ。諸の比丘畏愼して敢て坐せず、念じて言はく『佛我等に皮上に坐することを聽したまはず、阿濕婆阿槃提國を除く』と。諸の白衣言はく、『我等更に何處にか床を得ん』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく『白衣の舍內に在りては坐することを聽す』と。時に諸の比丘白衣の舍に至る。爲めに長繩床、木床を敷く。諸の比丘畏愼して敢て坐せず『佛我等に、上座と同床に坐することを聽したまはず』と。諸の白衣言はく『我等更に何處にか人々の別床を得ん』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく『白衣の舍にて坐することを得るを聽す』と。時に諸の比丘白衣の舍に至る。白衣爲めに皮囊を敷く。比丘畏愼の心あり、念じて言はく『佛我等に皮上に坐することを聽したまはず』白衣言はく『我等更に何處にか別の坐を得ん』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく『白衣の舍に在りては、坐することを得るを聽す』と。爾の時、跋難陀釋子、放牛人ありて爲めに檀越となる。淸旦衣を著けて檀越の舍に至り、座を敷いて坐す。時に放牛の兒來り坐して法を聽く。跋難陀釋子善く爲めに法を說き、種々に方便して檀越を勸進し、大に歡喜せしむ。卽ち問うて言はく『大德何の須欲する所ぞ』と。跋難陀言はく『止むべし須むる所なし、便ち供養を得んとするのみ』と。復言はく『願はくは須むる所を說け』と。跋難陀言はく『止みね、語ることを須ひず、若し我れ說くとも俱に我れに與へず』と。答へて言はく『大德、但說け、當さに與ふべし』と。前を去ること遠からずして、一雜色の犢子を見る。跋難陀言はく『我れ此の皮を須む』と。答へて言はく、『小しく待て、我れ之を殺すべし』と。皮を剝いで跋難陀に與ふ。跋難陀皮を得已りて、坐より起ちて持ち去る。時に牛母、大に吼喚して跋難陀を逐ひ、祇洹の門に至る。諸の比丘見て問うて言はく『此の牛何が故に吼喚して汝の後を逐ふや』と。答へて言はく『此れは是れ其の子の皮なり、我れ持ち來るが故に爾るのみ』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく『生皮を乞ふべからず、若し乞はゞ法の如く治す』と。諸の比丘畏愼して、敢て浮囊を帶びて水を渡らず、佛言はく『聽す』と。時に

諸の比丘、牛尾を捉りて、水を渡り、渡り已りて方さに是れ[六]牸牛なることを見て畏愼す。佛言はく『無犯なり、自今已去、牸牛の尾の尾を捉りて水を渡るべからず』と。時に諸の比丘、敢て皮床上に坐して水を渡らず、佛言はく『聽す』と。時に諸の比丘畏愼して敢て皮船に乘りて水を渡らず、佛言はく『聽す皮船上に在りて、若しは坐し、若しは臥すこと隨意なり』と。時に諸の比丘、皮にて刀嚢を作り、物を以て刀を裹まず、壞を生ずればなり。佛言はく『若しは毳を以て、若しは劫貝を以て、若しは大皮を以て刀を裹むことを聽す』と。時に兩重の革屣を畜ふ。佛言はく『兩重の革屣を畜ふることを得ず』と。時に諸の比丘、[七]迦那富羅革屣を畜ふ。佛言はく『迦那富羅革屣を畜ふることを聽さず』と。爾の時比丘、白衣と拘薩羅の道路を共に行く。木刺の爲めに脚を刺し、血大に出で、甚だ之を患ふ、行くこと能はず。時に白衣、著くるところの革屣を以て比丘に與ふ。比丘畏愼して敢て取らず。迦那富羅革屣を犯すことを恐るればなり。佛言はく『是くの如きの因緣あれば、受くることを聽す』と。時に六群比丘、旋角革屣を畜ふ。佛言はく『[八]旋角革屣を畜ふべからず』と。諸の比丘、鹿角革屣を畜ふ。佛言はく『畜ふべからず』と。諸の比丘、[九]阿羅梨革屣を畜ふ。佛言はく『畜ふべからず』と。六群比丘、雜色皮を以て革屣帶を作る。佛言はく『畜ふべからず』と。六群比丘、絹布を以て革屣帶を作る。佛言はく『畜ふべからず』と。六群比丘、富羅跋陀羅革屣を畜ふ。佛言はく『畜ふべからず』と。六群比丘[一〇]眞誓梨革屣を著く。佛言はく『畜ふべからず』と。六群比丘編邊革屣を著く。佛言はく『畜ふべからず』と。六群比丘多帶革屣を著く。佛言はく『畜ふべからず』と。六群比丘捲形革屣を著く。佛言はく『畜ふべからず』と。六群比丘大皮革屣を著く。師子皮・虎皮・豹皮・獺皮・野猫皮・雜色皮・野狐皮なり。佛言はく、『一切畜ふことを得ず』と。六群比丘、大皮を用つて革屣を緣り、或は用つて、[一一]帶を作り、或は用つて縫ふ。佛言はく、『緣・帶・縫に用ふることを得ず』と。時に六群比丘、青色の革屣を著く。佛言はく、『畜ふべから

【六】牸牛は牝牛。今は牝牛なることを知らず、故に無犯である。此の事に因み、若し牝牛と知らば、其の尾を捉りて水を渡ることを禁ずと制せられたのである。

【七】迦那富羅は、巴利語の(Gaṇaṅgaṇupāhana)にて『善見律』には、靴跟革屣なりとある。靴は覆なりとあるから跟卽ちカヽトを覆ふ屣である、卽ち今日の普通の深靴である。

【八】旋角は、野羊の角の形であらう。鹿角は、角に枝のある形を指す。是れは皆革屣に施す裝飾としてつける模樣の樣である。『善見律』に、鹿角革屣を解して「皮に刻して鹿角の形を作す」とあるので知られる。

【九】阿羅梨は巴利の(Khallikabaddhaupāhana)で、象毛を以て、革屣の邊を飾つたものであるといふ。富羅跋陀羅革屣は、(Puṭabaddhaupāhana)で、木綿及び他の雜物を用ひて皮と合せ縫ひ、中央をして起らしむとあるから、靴の上を膨らまして形をよくしたものであらう。

【一〇】眞誓梨は、(Pāliguṇṭhika)で、眞誓梨といふ草で編んで、革屣を裝飾したものかと思ふ。編邊革屣は、孔雀の尾で、緣を飾つたものゝ樣に

ず』と。六群比丘、青を以て革屣を緣り、或は用つて帯縫を作す。佛言はく、『青を以て革屣を緣り、及び帯縫を作すべからず』と。六群比丘黄革屣を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。六群比丘黄緣革屣を著け、若しは帯を作り、若しは縫ふ。佛言はく、『黄にて革屣を緣り、及び帯縫に用ふべからず』と。緣帯縫も亦是くの如し。六群比丘白革屣を著く。佛言はく、『白革屣を著くべからず』と。六群比丘赤革屣を著く。佛言はく、『赤革屣を著くべからず』と。緣帯縫も亦是くの如し。六群比丘、[一二]似孔雀毛革屣を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。六群比丘錦色革屣を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。彼の比丘、成錦色革屣を得たり。佛言はく、『畜ふべからず、若し壞色なれば畜ふることを聽す』と。六群比丘、[一三]毳褚革屣を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。六群比丘、劫貝褚革屣を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。六群比丘、幣帛を以て革屣に褚す。佛言はく、『畜ふべからず』と。六群比丘、芒草・婆娑草・舍羅草・漢陀羅草を以て革屣に褚す。佛言はく、『畜ふべからず』と。『六群比丘は癡人なり、便ち更る餘事を作す、自今已去、一切の褚革屣は畜ふべからず』と。時に比丘、天雨ふりて泥脚を汚し、坐具を汚し、身と臥具を汚す。佛言はく、『身を護し、座具を護するが故に、僧伽藍內に在りて蒲革屣を著け、足を洗ふことを聽す』と。既に蒲革屣を著け、足を洗ひ已りて、水蒲革屣內に入り、脚を汚し、座具を汚し、身を汚し、臥具を汚す。佛言はく、『樹皮若しは皮を以て、底に縫著することを聽す』と。爾の時、舍衞國にて六群比丘、欽婆羅屣を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。是くの如く[一四]四種の草屣は畜ふことを得ず。爾の時佛王舍城に在しき。六群比丘、多羅樹葉を剝いで屣を作る。樹便ち枯乾す。諸の居士見て皆共に譏嫌す。『沙門釋子慚愧あることなし、生命を斷絕して自ら言ふ「我れ正法を知る」と。云何ぞ乃ち多羅樹葉を取りて屣を作り、樹をして枯乾せしむる』と。比丘佛に白す。佛言はく、『畜ふべからず』と。爾の時世尊拘睒彌國に在しき。時に六群比丘木屣を著く、猶ほし馬の行く聲の如し、諸の坐禪の者を亂

『善見論』には出て居る。

【一一】帯は、靴を結ぶ紐の類であらうし、縫は、靴に飾りとして縫ひつけることであらう。

【一二】似孔雀毛革屣は、いづれ孔雀毛に似た裝飾を施したものであらう。

【一三】毳褚以下は、革屣に、褚として皮の間に入れたもので、これは贅澤の意味で禁ぜらるゝものである。

【一四】四種の革屣は、前に擧げし、芒草・婆娑草・舍羅草・漢陀羅草である。但し此の四種の草は、褚として用ふるのであるから、いづれ綿の如く、軟かい溫いものであると思ふが、詳でない。

す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『木屐を畜ふべからず』と。時に諸の比丘、畏愼して敢て大小便屐上に上らず、敢て洗足屐を著けず。佛言はく、『[一五]著けて行くべき者を除き、餘は應さに上るべし』と。爾の時世尊婆竭提國に在しき。時に毘舍離跋闍子比丘、金屐、銀屐を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。卽ち琉璃屐を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。復寶屐を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。復寶塡屐を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。佛言はく、『是くの如きの癡人は、是れ我が遮する所、輒ち更る餘事を作す。自今已去、一切の屐著くることを得ず』と。

爾の時、世尊毘舍離國に在り、六群比丘革屐を著けて佛と共に經行す。佛諸の比丘に告げたまはく、『外の諸の巧師受學の弟子も、亦師を恭敬するあり、此の六群比丘は癡人にして、革屐を著けて佛と共に經行す』と。佛言はく、『自今已去、一切の革屐は畜ふることを得ず』と。時に六群比丘、[一六]和尙・和尙等、阿闍梨・阿闍梨等の前に於て、己れ好經行處に在り、和尙等惡經行處に在り、己れ高處に在り、和尙等下處に在り、己れ前に在り、和尙等後にあり、和尙等と並び語り、並び經行し、衣を反抄し、纏頸し、裹頭し、通肩に衣を披、革屣を著く。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『和尙、和尙等、阿闍梨、阿闍梨等惡經行處に在り、己れ好處に在り、乃至革屣を著くべからず、一切得ず』と。爾の時六群比丘、和尙、和尙等、阿闍梨、阿闍梨等の前に於て、通肩に衣を披、革屣を著け、若し取與する所あれば、右肩を露さず、革屣を脫せず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『爾るべからず』と。佛言はく、『自今已去、和尙、和尙等、阿闍梨、阿闍梨等の前に在りては、偏へに右肩を露はし、革屣を脫して取與するところあれ』と。時に諸の比丘、白衣の舍に在りて、和尙、和尙等、阿闍梨、阿闍梨等の前に於て、取與するところあらんには、偏へに右肩を露はし、革屣を脫せよ』と。時に形露はる。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『白衣の舍にて、和尙、和尙等、阿闍梨、阿闍梨等の前に在りて、右肩を露さず、革屣を脫せず、隨意に取與する所あるを聽す』と。

【一五】著けて行くべき者、卽ち其の木屐を穿いて、あるくことを禁ずるので、其の以外の、便所の穿き物などは、行くためのものでないから、それは聽されるのである。

【一六】和尙・和尙等、阿闍梨・阿闍梨等とあるのは、本律の初頭の婬戒のところに、和尙・同和尙、阿闍梨・同阿闍梨とありしと、同一原語の譯で、同じ意味である。其の說明は、本文の後段にしてある。

爾の時比丘、餘の比丘と共に、道に在りて行く。一比丘、餘の比丘より水を索む。諸の比丘是の念を作さく、「佛革屣を著けて取與する所あるを聽したまはず」と。彼の比丘卽ち革屣を脫して水を取り、是に於て革屣を失ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し道に在りて行かんには、革屣を著けて、隨意に取與する所あることを聽す』と。爾の時比丘あり、暮に比丘より水を索む。彼れ是の念を作さく、「佛革屣を著けて、取與する所あることを聽したまはず」と。時に彼の住處水を去ること遠し、毒虫を畏る。時に彼の比丘、革屣を脫し、往いて水を取る。毒虫脚を嚙み、痛苦して樂まず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し日入りて後、水を去ること遠く、若しは毒虫を畏るれば、革屣を著けて、隨意に取與するを得ることを聽す』と。時に六群比丘、和尙、和尙等、阿闍梨、阿闍梨等を見て、起ちて迎へず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『應さに起つべし、若しは一坐食、若しは餘食法を作して食はず、若しは病まず、是くの如きの語を作すことを聽す、「大德忍せよ、我れに因緣あり、故に起たず」と。』和尙とは、從つて戒を受得するなり、和尙等とは、多く已に十歲なり。阿闍梨とは、五種の阿闍梨あり。出家の阿闍梨、受戒の阿闍梨、敎授の阿闍梨、受經の阿闍梨、依止の阿闍梨なり。出家の阿闍梨とは、所依として出家を得るもの是れなり。受戒の阿闍梨とは、受戒の時羯磨を作す者是れなり。敎授の阿闍梨とは、威儀を敎授する者是れなり。受經の阿闍梨とは、所從の受經の處にて、修妬路を讀み、若しは義を說いて、乃ち一四句偈に至る。依止の阿闍梨とは、乃至依止して住すること一宿なり。阿闍梨等とは、多く已に五歲なり、依止の阿闍梨を除く。

若し比丘所住の房は、應さに掃灑すべし。掃灑已りて、若し故ほ塵あらば、泥は糞し汚は灑することを聽す。泥糞泥灑し已りて、若し故ほ塵あらば、地敷を作ることを聽す。若しは伊梨延陀、毷羅、耄毷羅、氍氀、若しは十種衣、得るところに隨つて之を敷け』と。時に諸の比丘、足を洗はずして地敷に上る。佛言はく、『戸邊に在りて、拭足物を安ずることを聽す。若し故ほ不淨ならば、應さに

戸外に、水器を安んじて足を洗はしむべし。比丘足を洗ひ已り、足未だ乾かざるに地敷に上る、地敷爛壞す。佛言はく、『足未だ乾かざれば、地敷に上ることを得ず。若し急事あらば、應さに足を以て膝を拭ひ、若しは踵を拭ひ、若しは手を以て拭ひ、若しは弊物を以て拭ふべし』と。時に諸の比丘・和尙・和尙等・阿闍梨・阿闍梨等の爲めに取與する所ありて、數々足を洗うて疲勞す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自今已去、若し和尙・和尙等・阿闍梨・阿闍梨等のために取與する所あらば、銅盤、若しは案、若しは杌、飮食所須の物を用ひ、盡く持つて上に置き、一時に授與することを聽す』と。時に比丘あり、足下に惡腫あり、天雨の中に於て、餘の比丘扶けて厠上に往き、泥中に臥して極めて患苦す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『身を護し、衣を護し、臥具を護するが爲めの故に、僧伽藍內にて、一重の革屣を著くることを聽す』と。時に諸の比丘道に在りて行く。和尙・和尙等・阿闍梨・阿闍梨等のために、取與する所あり、偏露右肩にして、革屣を脫し疲極す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し道にありて行き、和尙・和尙等・阿闍梨・阿闍梨等の爲めに取與する所あらば、卽ち頭上に於て、若しは肩上に於て取與せよ』と。

爾の時、佛舍衞國に在しき。時に六群比丘、革屣を著けて聚落に入る。時に諸の居士見て皆共に譏嫌す。『沙門釋子自ら言ふ、「我れ正法を知る」と。云何ぞ革屣を著けて聚落に入る。如今之を觀るに何の正法かある。國王大臣に如似す』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『革屣を著けて聚落に入るべからず』と。時に諸の病比丘、畏愼の心ありて、敢て革屣を著けて聚落に入らず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『病比丘は、革屣を著けて聚落に入ることを聽す』と。時に六群比丘、病に託し、革屣を著けて聚落に入る。餘の比丘見て語りて言はく、『佛革屣を著けて聚落に入ることを得ずと言はずや』と。彼れ言はく、『我れ病む』と。問うて言はく、『何の患苦する所ぞ』と。答へて言はく、『長老、佛是くの如きの說を作したまひ、若し人須臾の間も樂まずと言はゞ、是れを病人と謂はざ

るや、我等病に託す』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『病に託して、革屣を著け、聚落に入るべからず』と。爾の時長老畢陵伽婆蹉、脚跟破れて鞔跟革屣を須ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『鞔跟革屣を著くることを聽す』と。爾の時畢陵伽婆蹉道に在りて行く。眼闇く脚指地を蹴て足を壞る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『鞔足指革屣を著くることを聽す』と。爾の時畢陵伽婆蹉智識多し、道に在りて行くに、大に大麥小麥班豆粳米を得たり。諸の比丘疑つて敢て受けず、佛に白す。佛言はく、『受くることを聽す』と。諸の比丘受け已りて、何の處に置かんを知らず、佛に白す。佛言はく、『若しは嚢、若しは箱に盛ることを聽す』と。爾の時長老畢陵伽婆蹉、道に在りて行き、酥油石蜜を得、敢て受けず、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『受くることを聽す』と。受け已りて何の處に著かんを知らず、佛に白す。佛言はく、『若しは〔一七〕鍵瓷、小鉢、次鉢を以て受くることを聽す。鍵瓷は小鉢に入れ、小鉢は次鉢に入れ、次鉢は大鉢に入れよ』と。諸の比丘、鍵瓷、小鉢、次鉢を畜ふるに、當さに淨施すべきや不やを知らず。佛に白す。佛言はく、『淨施を作さずして畜ふることを聽す』と。時に長老畢陵伽婆蹉、老羸にして歩涉するに堪へず、佛に白す。佛言はく、『歩挽車、若しは輿、若しは乘を作ることを聽す。女人と牸牛馬とを除く』と。

爾の時、畢陵伽婆蹉道に在りて行き、韋を得て敢て受けず、佛に白す。佛言はく、『受くることを聽す』と。皮韋を得、敢て受けず、佛に白す。佛言はく、『取りて皮を却け、十種衣中、隨つて一衣を以て之を裹むことを聽す』と。復織皮韋を得、敢て受けず、佛に白す。佛言はく、『皮繩髮繩を却け、餘繩を以て織り、應さに畜ふべきことを聽す。諸の比丘、韋韉を須ふ、佛に白す。佛言はく、『作ることを聽す』と。諸の比丘、韋繩を須ふ、佛に白す。佛言はく、『畜ふることを聽す。若し繩數ば斷ずれば、皮を用ひて作ることを聽す、若し韋を擔ひて肩痛まんには、枕薦を安んずることを聽す、若し脚の寄痛を患ふれば、橙を作りて枕薦を安んずることを聽す』と。時に何人か應さに擔

【一七】鍵瓷は、犍茨、建鎡にも作る、梵音である。譯して、淺鐵鉢といふとある。之を小鉢に入れ、小鉢は次鉢に入れ等といふのは、鉢を重ねて持つことをいふのである。

ふべきかを知らず。佛言はく『比丘若しは僧伽藍の民、若しは優婆塞、若しは沙彌を聽す。若し車を得んも亦是くの如し』と。若し皮車は應さに皮を卻くべし、十種衣中、隨つて一衣を以て之を裹み畜ふべし。若し織皮車を得んには、皮繩、髮繩を除き、餘は畜ふることを得。何人か應さに牽くべきかを知らず、佛に白す。佛言はく『若しは比丘、若しは僧伽藍の民、若しは優婆塞、若し沙彌牽くことを聽す』と。爾の時長老畢陵伽婆蹉、守僧伽藍人を得。佛言はく『應さに畜ふべし』と。爾の時六群比丘、皮床、皮獨坐床を作る。諸の比丘佛に白す。佛言はく『應さに畜ふべからず』と。復皮褥・皮枕・皮臥具・皮地敷を作る。地に敷いて虫を生じ、屋内臭穢なり、諸の比丘佛に白す。佛言はく『畜ふべからず』と。時に婆羅門あり、出家して道を爲し、伊師[一八]皮を以て拭足物を作り、戸内に置く。佛言はく『畜ふることを聽す』と。時に諸の比丘水を汲み、罐繩數ば斷ず。佛言はく『皮を以て索を作ることを聽す。若し罐破るれば、皮を以て作ることを聽す。若し繩斷ずれば、皮を以て繩を作れ』と。若し戸繩數ば斷ずれば、佛言はく『皮を以て作ることを聽す』と。若しは戸を閉き、若しは戸を閉ぢて手痛を患ふれば、『大皮を以て之を裹むことを聽す』と。『若し戸樞轉ぜざれば、應さに皮を著くべし、若し上樞壞るれば、皮を以て縺することを聽す。[一九]向も亦是くの如し。若し繩床・木床の脚壞るれば、皮を以て縺することを聽す』と。時に比丘あり、脚痛む。佛言はく『大皮を以て脚を裹み、患差ゆることを得しめて、便ち卻けよ』と。若し比丘、屋を覆うて繩斷ぜんに、佛言はく『皮を以て作ることを聽す』と。若し戸扂の繩數ば斷ずれば、『筋若しは毛を以て作ることを聽す』と。時に六群比丘、皮の鉢囊・革屣囊・鍼綖囊を畜ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく『畜ふべからず』と。爾の時木師出家比丘あり、皮囊を畜へ、盛るに器を作る、佛に白す。佛言はく『畜ふべからず、木師出家比丘、一切器を作りて畜ふべからず』と。爾の時衆僧木作器を得、佛に白す。佛言はく『畜ふることを聽す』と。何物に盛るべきかを知らず。佛言はく『十種衣、隨

【一八】　伊師（Isika）。『名義標釋』には、熊羆の皮かとある。『十誦律』に、人ありて熊皮を施す、諸比丘受けず、何に用ひんかを知らず、佛言はく、受けよ、僧房の戸に著けて、拭脚して房に入れと示されたとある。

【一九】　向は、嚮と同じ意味である。窓のことである。これは窓の戸について言つてるのである。

つて一々の衣を以て嚢を作りて盛ることを聽す』と。爾の時比丘の酥油瓶露はなり。佛言はく、『濕皮を以て覆ふことを聽す。若し虫噛まば、應さに泥を以て泥すべし』と。爾の時比丘、花形の皮納器を得、畏愼して敢て畜へず。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。爾の時比丘、角を得て油器を作る、畏愼して敢て畜へず。佛言はく、『畜ふることを聽す、若し下漏、上漏、若し邊漏すれば、皮を以て纏覆することを聽す』と。

爾の時、世尊、王舍城に在しき。比丘あり、木刺脚を刺して破れ、軟革屣を須ふ、畜ふることを聽す。時に世尊、阿難と共に行きたまひ、尸陀林塚間を去ること遠からず、貴價の重革屣あるを見る。世尊知りて故らに阿難に問ひたまふ。『汝何ぞ此の革屣を取らざる』と。阿難言はく、『重革屣を畜ふることを恐る』と。佛言はく、『此の糞掃物は、畜ふることを得るを聽す』と。爾の時比丘道に在りて行く。塚を去ること遠からずして、木あり死人の皮厚を貫くを見る。便ち剝ぎ取りて房に還り、一重の革屣を作る、房内臭穢なり。餘の比丘問ふ、『房內何を以て臭き』と。即ち事を以て答ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『人皮を畜ふべからず、若し畜ふれば偸蘭遮なり。及び餘の不淨可惡の皮は畜ふべからず、若し畜ふれば突吉羅なり』と。爾の時比丘あり、寒雪國より來り、脚凍壞す。佛所に詣りて、頭面に足を禮して、却つて一面に坐す。佛知りて故らに比丘に問ひたまふ。『汝何が故に脚破れたる』と。佛に白して言はく、『寒雪處より來るが故に凍壞す』と。佛比丘に問ひたまふ。『彼の國法何の著くるところぞ』と。比丘言はく、『[20]富羅と菴鞮を著く』と。佛言はく、『著くることを聽す』と。若し[21]韤を須ふれば、韤を作ることを聽す、非親里の居士、居士婦より乞うて作ることを聽す、餘の用を作すことを得ず、若し餘に用ふれば、法の如く治す。時に六群比丘、皮にて腰帶を作る。佛言はく、『畜ふべからず』と。皮にて禪帶を作る。佛言はく、『畜ふべからず』と。比丘皮帽を作る。佛言はく、『畜ふべからず』と。比丘皮の[22]緊殊炭を作る。佛言はく、『畜ふべからず』

【二〇】富羅の短靴の類であることは、前に出て居る。菴鞮は、『音義』に、恐らく靸鞮の誤りではないかといひ、今江南では、靴の無頬なるを靸と言ふとある。鞮は革屣なりと解して居る。『毘尼母經』によれば、雨雪の處は、富羅の上に、重ねて革皮を着けて絡縮するとある。

【二一】韤は韈、或は襪と同じ。足衣なりとあるから、靴下、或は足袋の類である。

【二二】緊殊炭とは何か、未だ考へ得ず。

と比丘革屣を拂拭せず脚を汚し、臥具を汚す。佛言はく、『革屣を拂拭せざるべからず』と。時に比丘、足を洗ひ已りて、未だ乾かざるに便ち革屣を著く、革屣濕ひて爛壞す。佛言はく、『爾るべからず』と。時に比丘、數ば拭脚物を浣はず、諸の比丘汚穢を見て喜ばず。佛言はく、『浣ふことを聽す』と。彼れ浣ひ已りて捩らず曬さず蟲生ず。佛言はく、『應さに浣つて捩り曬燥すべし。』（皮革揵度竟る。）

衣揵度の一

爾の時、世尊、波羅㮈國鹿野苑中に在しき。時に五比丘世尊の所に往き。頭面に禮足して却つて一面に住す。五人佛に白さく、『我等當さに何等の衣をか持つべき』と。佛言はく、『糞掃衣及び十種衣を持つことを聽す。拘舍衣・劫貝衣・欽跋羅衣・芻摩衣・叉摩衣・舍㲲衣・麻衣・翅夷羅衣・拘攝羅衣・嚫羅鉢尼衣なり。是くの如きの十種衣、應さに染めて袈裟色と作して持つべし。爾の時比丘塚間衣を得たり。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。爾の時比丘顚衣を得たり。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。爾の時比丘道に在りて行く。塚を去ること遠からず、貴價の糞掃衣を見る。畏愼して敢て取らず。佛言はく、『取ることを聽す』と。爾の時佛、舍衞國に在しき。時に[二三]大姓の子ありて出家す、市中の巷陌糞掃の中に於て、弊故衣を拾うて、僧伽梨を作りて畜ふ。時に波斯匿王の夫人、見て慈念の心生じ、大價衣を取りて之を破り、不淨を以て塗りて之を外に棄捨す、比丘の爲めの故に。比丘畏愼して敢て取らず。比丘佛に白す。佛言はく、『若し比丘の爲めにせんには、應さに取るべし』と爾の時比丘あり、大姓の出家なり、市中の巷陌厠上糞掃の中に於て、弊故衣を拾うて、僧伽梨を作りて畜ふ。時に舍衞の長者見て、心に慈念を生じ、多くの好衣を以て、捨て〻巷陌若しは厠上に置く、比丘の爲めの故に、人をして守護せしめ、人をして取らしめず。時に諸の比丘あり、直視して行く。村に入る時衣を守護する人語りて言はく、『大德、何ぞ左右を顧視せざるや』と。時に比丘

【二三】大姓は、豪族といふに同じ。

見る、畏愼して敢て取らず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し比丘の爲めにせんには、取ることを聽す』と。爾の時比丘、塹中に死人の衣を得て畏愼し、佛に白す。佛問うて言はく、『汝何の心を用つてか取る』と。答へて言はく『糞掃衣を以て取る、盜心を以て取らず』と。佛言はく、『不犯なり、自今已去、坑塹の中の死人の衣を取るべからず』と。爾の時居士あり、衣を浣ひ已りて、曬して壁上に置く。時に納衣の諸の比丘、見て是れ糞掃衣なりと謂ひて便ち取る。時に居士見て語りて言はく『取ること莫れ、是れ我が衣なり』と。比丘言はく『我れは是れ糞掃衣なりと謂へり、故に取るのみ』と。便ち之を放ちて去る。彼の比丘畏愼して佛に白す。佛言はく、『汝何の心を以て取る』と。答へて言はく『糞掃衣として取る、盜心を以て取らず』と。佛言はく『無犯なり、自今已去、園上、若しは籬上、塹中にある糞掃衣を取るべからず』と。時に大官の斷事處の前に於て、死人の衣あり、比丘此の人の衣を取る。時に大官[二四]旃陀羅に勅し、死人を取りて之を棄てしむ。旃陀羅言はく、『何ぞ衣を取る者をして、之を棄てしめざる』と。大官問うて言はく、『何人か衣を取る』と。答へて言はく、『是れ沙門釋子取る』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『斷事處の前に在りて、死人の衣を取るべからず』と。爾の時比丘道に在りて行く、塚を去ること遠からず、未壞死人の衣あるを見、即ち取りて去る。死人即ち起ちて語りて言はく、『大德、我が衣を持ちて去ること莫れ』と。比丘言はく、『汝は死人、何の處にか衣あらん、故に持ちて去る』と。止めず。死人比丘を逐うて祇洹門外に至る。脚跌いて地に倒る。餘の比丘見て此の比丘に問ふ『彼れ何の說く所ぞ』と。比丘答へて言はく、『此れは死人、我れ其の衣を取り來る』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『未壞死人の衣を取るべからず』と。爾の時牧牛の人あり、衣を以て頭上に置きて眠る。時に糞掃衣の比丘、見て是れ死人なりと謂ひ、彼れ是くの如きの念を作す。「世尊比丘に、未壞死人の衣を取ることを聽したまはず」と、即ち死人の臂骨を取り、此の牧牛の人の頭を打ちて破る。彼れ即ち起

【二四】旃陀羅(Caṇḍāla)。印度にては、社會の最下級に位するもの、漁獵・守獄・屠殺などの業に從事す。

ちて語りて言はく、『大德、何が故に打たるゝ』と。答へて言はく、『我れ向きに汝を死せりと謂へり』と。牧牛の人言はく、『汝我が死生を知らざるや』と。卽ち比丘を打ち、次いで死す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『死人未だ壞せざるに、打ちて壞せしむべからず』と。時に六群比丘、非衣を畜へて、鉢囊・革屣囊・針筒を造り、錦文の臥氈・褥・枕・氍毹・獺皮を畜ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『非衣を以て、鉢囊及び針筒を作るべからず、錦文の臥具、褥枕、氍毹、獺皮を畜ふべからず』と。爾の時比丘、塚間に錦文の臥氈褥枕を得たり、諸の比丘畏愼して敢て取らず、佛に白す。佛言はく、『取用することを聽す』と。時に比丘あり、塚間に伊梨延陀・毫羅・毫々羅・氍毹を得たり、畏愼ありて敢て取らず、佛に白す。佛言はく『取ることを聽す。皮を却け、革を却け、餘を著くる者は、用つて地敷を作りて畜へよ』と。時に比丘あり、塚間に於て、皮繩床・木床・獨坐床を得、佛に白す。佛言はく『取ることを聽す、皮を却けて、十種衣中、隨つて何衣を以て作りて畜ふることを聽す』と。爾の時比丘塚間に在り、繩床・木床・獨坐床を得、畏愼ありて敢て取らず、佛に白す。佛言はく、『取ることを聽す、一種の繩を除く、『皮繩と髮繩となり、餘は應さに畜ふべし』と。時に比丘塚間に在りて輦を得、蓋を得、步挽車を得たり、畏愼して敢て取らず、佛に白す。佛言はく、『取りて畜ふることを聽す』と。時に比丘、塚間に在りて瓶澡罐を得、杖扇を得たり、畏愼して敢て取らず、佛に白す。佛言はく、『取りて畜ふることを聽す』と。時に比丘あり、塚間に在りて鑊鉤刀鎌を得たり、畏愼して敢て取らず、佛に白す。佛言はく、『取りて畜ふることを聽す』と。時に比丘あり、塚間に在りて錢を得、自ら持ち來り、比丘佛に白す。佛言はく、『取るべからず』と。彼の比丘銅を須ふ、佛に白す。佛言はく『打ちて相を破壞し、然る後に自ら持ち去ることを得』と。時に比丘あり、牛嚙衣を得たり、佛に白す。佛言はく、『取用することを聽す』と。比丘あり、燒衣を得たり、佛に白す。佛言はく、『取ることを聽す』と。糞掃衣に十種あり、牛嚙衣・鼠

嚙衣・燒衣・月水衣・產婦衣・神廟中衣・若しは鳥銜み、風吹いて離處する者、塚間衣・求願衣・受王職衣・往還衣なり、是れを十種の糞掃衣と謂ふ。爾の時拘薩羅國の波斯匿王、摩揭陀の阿闍世と、中間に共に鬪ひ、多人死す。時に比丘、往いて死人の衣を取らんと欲し、佛に白す。佛言はく『彼れに往くことを聽す。若し人ありて、先きに「取れ」と語り、若しは人なければ輒ち取れ』と。

爾の時、阿闍世王、毘舍離の梨奢と中間に共に鬪ひ、多人死す。時に比丘、往いて死人の衣を取らんと欲し、佛に白す。佛言はく『應さに往いて語り、然る後に取るべし、若し人無ければ、輒ち自ら取れ』と。爾の時衆多の居士、塚間に於て衣を脫し、聚めて一處に置き、死人を埋む。時に糞掃衣の比丘、見て是れ糞掃衣なりと謂ひ、之を取りて去る。時に諸の居士見て語りて言はく『此れは是れ我が衣、持ち去ること莫れ』と。比丘言はく『我れは是れ糞掃衣なりと謂へり』と。卽ち地に放ちて去る。比丘畏愼して佛に白す。佛言はく『汝何の心を以て取る』と。答へて言はく『糞掃衣を以て取る、盜心を以てせず』と。佛言はく『不犯なり、大聚衣を取るべからず』と。爾の時衆多の居士、塚間に於て死人を燒く。時に糞掃衣の比丘、烟を見已りて餘の比丘を喚び『共に塚間に往き、糞掃衣を取りて去らん』と。彼れ言はく『爾るべし』と。卽ち共に往いて彼れに至り、默然として一處に住す。時に居士見て、卽ち比丘に一貴價衣を與ふ。第二の比丘言はく『持ち來りて當さに汝と共に分つべし』と。彼れ言はく『誰と共にか分たんや、彼れ自ら我れに與へたり』と。二人共に諍ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく『還りて居士に問ふべし「此の衣誰にか與ふ」と。若し居士與ふ所の者に隨へと言はゞ、是れ彼れの衣なり、彼れ若し「知らず」と言ひ、若しは「倶に與ふ」と言はゞ、分ちて二分となすべし』と。爾の時比丘あり、塚間に往いて糞掃衣を取る。遙に糞掃衣あるを見る。一比丘卽ち占して言はく『此れは是れ我が衣なり』と。第二の比丘卽ち走りて往いて取る。二人共に諍ひ、各言ふ『是れ我が衣なり』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく『糞掃衣に

は主なし、先きに取る者に屬す』と。時に二比丘あり、倶に塚間に往き、糞掃衣を取る。遙に糞掃衣あるを見、便ち占して言はく『是れ我が衣なり』と。二人倶に走りて往いて衣を取る、共に諍うて各『是れ我が衣なり』と言ふ。比丘佛に白す。佛言はく、『糞掃衣には主なし、隨つて共に取らば、分ちて二分と作せ』と。爾の時に衆多の居士あり、死人を載せて塚間に置く。糞掃衣の比丘見て卽ち餘の比丘に語りて言はく『我曹今往いて糞掃衣を取らば多く得べし』と。彼の比丘言はく、『汝等自ら去れ、我れは往かず』と。比丘卽ち疾く往いて、大に糞掃衣を得たり、持ち來りて僧伽藍の中に至りて浄浣治す。彼の比丘見て此の比丘に語りて言はく『汝何事をか作す』と。『而も我れと共に往いて衣を取らず、我れ往いて衣を取り、大に得て來る』と。此の比丘言はく『持ち來れ、汝と共に分たん』と。答へて言はく、『汝我れと共に取らず、云何ぞ共に分たん』と。二人共に諍ふ。比丘佛に白す。佛言はく『彼の往いて取る者に屬す』と。爾の時衆多の糞掃衣の比丘あり、共に期要す、「塚間に往き、糞掃衣を取らん」と。一比丘ありて貴價衣を得たり。餘の比丘言はく『持ち來れ、汝と共に分たん』と。彼れ答へて言はく、『我れ此の衣を得たり、何が故に汝と共に分たんや』と。多人共に諍ふ。比丘佛に白す。佛言はく、『先要の所得に隨へ、多少は應さに共に分つべし』と。

爾の時、佛、舍衞國に在しき。時に諸の居士、祖父母・父母死し、幡蓋衣物を以て、祖父母・父母の塔を裹む。糞掃衣比丘見て之を剝取す。諸の居士見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子慚愧あることなし、人の物を盜取す。自ら言ふ「我れ正法を知る」と。如今之を觀るに、何の正法かある。我等祖父母・父母の爲めに塔を起し、幡蓋を以て塔を裹みて供養す。彼れ云何ぞ自ら剝ぎ取る、故ほ沙門釋子の塔を裹みて供養するに如似す。我等實に祖父母・父母の爲めに、幡蓋を以て、塔を裹覆して供養す』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『是くの如き者を取ることを得ず』と。若し風吹き、漂

うて餘處に置き、若しは鳥銜み去りて餘處に著く。比丘畏愼して敢て取らず。比丘佛に白す。佛言はく、『若し風吹き、水漂ひ、鳥銜みて餘處に著かば取ることを聽す。爾の時比丘、莊嚴供養の塔衣あるを見て卽ち取る、取り已りて畏愼す。比丘佛に白す。佛言はく、『汝何の心を以て取る』と。答へて言はく、『糞掃衣を以て取る、盜心を以てせず』と。佛言はく、『無犯なり、莊嚴供養塔衣を取るべからず』と。

爾の時、世尊、王舍城に在しき。時に毘舍離に婬女あり、菴婆羅婆利と字づく、形貌端正なり。共に宿せんと欲するものあれば五十兩金を與ふ。晝も亦五十兩金を與ふ。時に毘舍離、此の婬女を以ての故に、四方の人毘舍離に集まる。時に國法以て觀望極好と爲す。時に王舍城の諸大臣、毘舍離に婬女あり。〔二五〕菴婆羅婆利と字づく、形貌端正なり、共に夜宿せんと欲するものは五十兩金を與ふ、晝も亦爾り。時に毘舍離、婬女を以ての故に四方の人毘舍離に集まり、觀望極好なりと聞く。時に大臣瓶沙王の所に往いて白し言さく、『大王當さに知るべし、毘舍離國に婬女あり、菴婆羅婆利と字づく、形貌端正なり、共に宿せんと欲するものあれば五十兩金を與ふ、晝も亦是くの如し、婬女を以ての故に、四方の人毘舍離に集まり、觀望極好なり』と。王諸臣に勅す、『汝等何ぞ此に於て婬女を安んぜざる』と。時に王舍城に童女あり、〔二六〕婆羅跋提と字づく、端正無比なり、菴婆羅婆利に勝る。時に大臣卽ち此の婬女を安置し、共に宿せんと欲する者あれば、百兩金を與ふ、晝も亦是くの如し。時に王舍城婬女を以ての故に、四方の人王舍城に集まり、觀望極好なり。時に瓶沙王の子を無畏と字づく、此の婬女と共に宿し、遂に便ち娠めるあり。時に婬女守門の人に勅して言はく、『若し我れを見んと求むる者あらば、當さに語りて言ふべし、我れ病む』と。後日月滿ちて一男兒を生む、顏貌端正なり、時に婬女、卽ち白衣を以て兒を裹み、婢に勅して持つて巷中に棄著せしむ、婢卽ち勅を受け、兒を抱いて之を棄つ。時に王子無畏、淸旦車に乘じ、往いて王を見んと欲し、

〔二五〕 菴婆羅婆利(Āmrapālī)。

〔二六〕 婆羅跋提(Bhālavatī)。

人を遣はし道路を屏除せしむ。時に王子、遙に道中に白物あるを見、卽ち車を住めて傍人に問うて言はく『此の白物は是れ何等ぞ』と。答へて言はく『此れは是れ小兒』と。問うて言はく『死すや活くるや』と。答へて言はく『故ほ活く』と。王子人に勅して抱き取らしむ。時に王子無畏兒なし、卽ち抱いて舍に還り、乳母に與へて之を養はしむ、活くるを以ての故に、卽ち爲めに字を作して耆[二七]婆童子と名づく。王子の所取なるが故に童子と名づく。後漸く長大なり、王子甚だ之を愛す。爾の時王子、耆婆童子を喚び來りて語りて言はく『汝久しく、王家に在らんと欲せんも、才技あることなければ、空しく王の祿を食むことを得ず、汝技術を學ぶべし』と。答へて言はく『當さに學ぶべし』と。耆婆自ら念ずらく『我れ今當さに何の術をか學ぶべき、現世に大富財を得て、而も事少き』と。是の念を作し已りて、「我れ今寧ろ醫方を學ぶべし、現世に大に財富を得べし、而も事少し」と。念じて言はく「誰か當さに我れに醫道を學ぶことを教ふべき」と。時に彼れ得叉尸羅國に醫あり、姓は阿提梨、字は賓迦羅、極めて醫道を善くすと聞く、彼れ能く我れに教へん」と。爾の時耆婆童子卽ち彼の國に往き、賓迦羅の所に詣りて白して言さく『我れ師に從つて醫道を受學せんと欲す、當さに我れに教ふべし』と。答へて言はく『爾るべし』と。時に耆婆童子從つて醫術を學び、七事を經已りて自ら念じて言はく「我れ今醫術を習學し、何當有已る」と。卽ち師の所に往き白して言さく『我れ今醫術を習學し、何當有已る』と。時に師卽ち一籠器と及び掘草の具とを與ふ『汝得叉尸羅國に於て、面一由旬に諸草を求覓し、是れ藥にあらざる者あらば持ち來るべし』と。時に耆婆童子卽ち師の勅の如く、得叉尸羅國に於て、面一由旬に是れ藥にあらざる者を求覓し、周り竟りて是れ藥にあらざる者を得ず、見る所の草木一切の物、善く分別して所用の所を知れば、藥にあらざるものなし。彼れ卽ち空しく還り、師の所に往いて、是くの如きの言を白す『師今當さに知るべし、我れ得叉尸羅國に於て、非藥草を求む。面一由旬に、周り竟りて、藥にあらざる者を見ず、見

【二七】 耆婆(Jīvaka)。

る所の草木、盡く能く分別すれば、所入の用處あり』と。師耆婆に答へて言はく、『汝今去るべし、醫道以て成ず、我れ閻浮提中に於て最も第一と爲す、我れ若し死せん後は、次ぎに復汝あり』と。時に耆婆自ら念ずらく『我れ今先づ當さに誰をか治すべき、此の國旣に小なり、又邊方に在り、我れ今寧ろ本國に還り、始めて醫道を開くべし』と。是に於て卽ち婆伽陀城に還歸す。婆伽陀城中に大長者あり、其の婦十二年中常に頭痛を患ふ。衆醫之を治して、而も差やすことを能はず。耆婆之を聞いて卽ち其の家に往き、守門の人に語りて言はく、『汝の長者に白せ、醫あり門外に在り』と。時に守門の人卽ち入りて白す。『門外に醫あり』と。長者の婦問うて言はく、『醫の形貌は何似ぞ』と。答へて言はく、『是れ年少』と。彼れ自ら念じて言はく、『老宿の諸醫之を治して差えず、況んや復年少をや』と。卽ち守門の人に勅して語りて言はく、『我れ今醫を須ひず』と。守門の人卽ち出で、語りて言はく、『我れ已に汝が爲めに長者に白す、長者の婦言はく、「今醫を須ひず」と。』耆婆復言はく、『汝、汝の長者婦に白すべし、但我が治を聽せ、若し差えなば、隨意に我れに物を與へよ』と。時に守門の人復爲めに之を白す、『醫是くの如きの言を作す、「但我が治を聽せ、若し差えなば、隨意に我れに物を與へよ」と。』婦之を聞き自ら念じて言はく、『若し是くの如くなれば損するところなし』と。守門の人に勅して喚び入らしむ。時に耆婆入りて長者婦の所に詣り、問うて言はく、『何の患苦する所ぞ』と。答へて言はく、『患如是如是なり』と。復問ふ、『病何より起る』と。答へて言はく、『如是如是より起る』と。復問ふ、『病來久か近か』と。答へて言はく、『病來爾許時』と。彼れ問ひ已りて語りて言はく、『我れ汝の病を治せん』と。彼れ卽ち好藥を取り、酥を以て之を煮、長者婦の鼻に灌ぐ。病者の口中より、酥唾倶に出づ。時に病人卽ち器にて之を承け、酥は便ち收め取り、唾は別に之を棄つ。時に耆婆童子見已りて心愁惱を懷く。『是くの如くの少酥不淨なり、猶ほ尙慳惜す、況んや能く我れに報いんや、是を以ての故に愁ふるのみ』と。長者の婦答へて言はく、『家を爲すこ

と易からず、之を棄つるも何の益あらん、然燈に用ふべし、是の故に收め取る、汝は但病を治せよ、何ぞ憂ふること是くの如き』と。彼れ即ち之を治し、後病差ゆることを得たり。時に長者の婦、四十萬兩金幷びに奴婢車馬を與ふ。時に耆婆此の物を得已りて、王舍城に還り、無畏王子の門に詣り、守門の人に語りて言はく、『汝往け、王に白して言へ、「耆婆外に在り」と。』守門の人即ち入りて王に白す。王守門の人に勅し、喚びて入らしむ。前んで頭面禮足して一面に在りて住し、前の因緣を以て具さに無畏王子に白して言さく、『今所得の物を以て、盡く以て王に上らん』と。王子言はく、『且らく止みね須ひず』と。便ち爲めに供養を爲し已り、『汝之を用ひよ』と。此の時耆婆童子の最初の治病なり。

卷の第四十（三分の四）

衣犍度の二

爾の時、瓶沙王、大便道中血出を患ふ。諸の侍女皆共に笑つて言はく、『王今患ふる所は、我が女人の如し』と。時に王瓶沙聞き已りて慚愧す。卽ち無畏王子を喚んで言はく、『我れ今是くの如きの病あり、汝、我が爲めに醫を覓むべし』と。卽ち王に答へて言はく、『耆婆童子あり、醫道を善くす、能く王の病を治せん』と。王言はく『喚び來れ』と。無畏王子耆婆を喚び來りて問うて言はく、『汝能く王の病を治するや不や』と。答へて言はく、『能く治せん』と。『若し能くせば、汝往いて之を治すべし』と。時に耆婆童子瓶沙王の所に往き、前んで王の足を禮し、却つて一面に住し、王に問うて言はく、『何の患苦する所ぞ』と。王答へて言はく、『病は如是如是なり』と。復問ふ、『病は何より起る』と。王答へて言はく、『如是如是より起る』と。復問ふ、『患來久か近か』と。王言はく、『患來爾許時なり』と。此くの如く問ひ已り、答へて言はく、『能く治せん』と。時に卽ち鐵槽を取り、煖[一]水を盛滿し、瓶沙王に語りて言はく、『此の水中に入れ』と。王卽ち水に入る。王に語りらく、『水中に坐せよ』と。王卽ち坐す。王に語る『水中に臥せ』と。王卽ち臥す、時に耆婆水を以て王に灑いで之を呪す。王卽ち睡る。疾々に水を却け、卽ち利刀を取りて、王の所著の處を破り、瘡を淨洗し已り、好藥を持つて塗り、藥塗り竟りて、病除き瘡愈ゆ、其の處毛生ず、瘡なき處と別ならず。卽ち復還た槽に水を滿たし、水を以て王に灑いで之を呪す。王卽ち覺む。王言はく、『我が病を治すべし』と。答へて言はく、『我れ已に治し竟る』と。王言はく、『善く治するや不や』と。答へて言はく、『善く治す』と。王卽ち手を以て捫摸して看る、亦瘡處を知らず。王卽ち問うて言はく、『汝云何が病を治する、乃ち瘡處あることなからしむる』と。耆婆報へて言はく、『我れ病を治するに、寧

【一】煖水は、湯のこと。

ろ瘡處あらしむべけんや』と。時に王即ち諸の侍女を集めて、是くの如きの言を作す。『耆婆醫大に我れを利益せり、我れを念ずるものあらば、當さに大に財寶を與ふべし』と。時に諸の侍女、即ち種々の瓔珞、臂脚の釧、及び覆形の密寶形の外、寶錢及び金銀摩尼眞珠毘琉璃貝玉頗梨積んで大聚を爲す。時に王耆婆を喚び來りて語りて言はく、『汝我が病を治して差えしむ、此の物を以て恩を報ず』と。耆婆言はく、『大王且らく止みね』と。便ち供養を爲し已る。『我れ無畏王子の爲めの故に王の病を治す』と。王言はく、『汝餘人の病を治することを得ざれ、唯我が病と、佛と、及び比丘僧と、宮内の人とを治せよ』と。此れは是れ耆婆童子の第二の治病なり。

爾の時、王舍城に長者あり、常に頭痛を患ふ、醫の能く治する者あることなし。時に一醫あり長者に語りて言はく、『却後七年にして當さに死すべし』と。或は言ふものあり、『六年』と。或は『五年』と言ひ、乃至『一年にして當さに死すべき者なり』と。或は醫ありて言ふ、『七月後當さに死すべし』と。或は言ふ『六月』と。乃至『一月にして當さに死すべし』と。或は言ふものあり、『七日を過ぎて後當さに死すべし』と。時に長者自ら耆婆童子の所に往き、語りて言はく、『我が爲めに病を治せよ、當さに汝を百千兩金に雇ふべし』と。答へて言はく、『能はず』と。復重ねて語つて言はく、『汝に二百三百四百千兩金を與へん』と。答へて言はく、『能はず』と。復言はく『當さに汝が爲めに奴となり、家業の一切も亦皆汝に屬すべし』と。耆婆言はく、『我れ財寶の少きを以ての故に、汝を治する能はずとせず。王瓶沙先きに我れに勅して言はく、「汝唯我が病と、佛と及び比丘僧と、宮中人とを治せよ、餘人を治することを得ざれ」と。是の故に能はず。汝今往いて王に白すべし』と。時に彼の長者即ち往いて王に白して言はく、『我れ今病あり、願はくは王、耆婆に我が病を治することを聽したまへ』と。時に王即ち耆婆を喚びて語りて言はく、『王舍城中に長者ありて病む、汝能く治するや不や』と。答へて言はく、『能く治せん』と。『汝若し能くせば、往いて治すべし』と。爾の

時耆婆卽ち長者の家に往き、語りて言はく、『何の患苦する所ぞ』と。答へて言はく、『所患如是如是なり』と。復問うて言はく、『何によりて起る』と。答へて言はく、『如是如是より起る』と。問うて言はく、『得來久か近か』と。答へて言はく、『病來爾許時なり』と。問ひ已りて語りて言はく、『我れ能く汝を治せん』と。爾の時耆婆、鹹食を與へて渇せしめ、酒を飲んで醉はしめ、其の身を繫いで床に在り、其の親里を集め、利刀を取りて頭を破り、頂骨を開いて其の親里に示す。『蟲頭中に滿つ、此れ是の病なり』と。耆婆諸人に語りて言はく、『先きの醫の言ふが如き、「七年にして當さに死すべし」と彼れ此の意を作さく、「七年已後腦盡きて當さに死すべし」と。彼の醫の是くの如きを不善見と爲す。或は「六五四三二年一年にして當さに死すべし」と言ふ、彼れ是の意を作す、「腦盡きて當さに死すべし」と。彼れも亦不善見なり。或は言ふ、「七月乃至一月にして當さに死すべし」とは、彼れも亦不善見なり。言ふものあり、「七日當さに死すべし」とは、彼れ是の意を作して言はく、「腦盡きて當さに死すべし」と。彼れを善見と爲す。若し今治せずして七日を過ぐれば、腦盡きて當さに死すべし』と。時に耆婆頭中の病を淨除し已り、酥蜜を以て頭中に置き滿ち已り、還た髑髏を合して之を縫ひ、好藥を以て塗る、卽時に病除き肉滿ち、還た復毛生ず、瘡なき處と異ならず。耆婆語りて言はく、『汝先要を憶するや不や』と。答へて言はく、『憶す、我れ先きに此の要あり、當さに汝が爲めに奴と作り、家業一切は悉く當さに汝に屬すべし』と。耆婆言はく、『且らく止みね長者』と。便ち供養を爲し已り、還た初語を用ふ。時に彼の長者、卽ち四十萬兩金を與ふ。耆婆一百千兩を以て王に上り、百千兩を父に與へ、二百千兩は自ら入る。此れは是れ耆婆の第三治病なり。

　爾の時、拘睒彌國に長者子あり、輪上に嬉戲し、腸腹内に結す。食飲消せず、亦出づることを得ず。彼の國能く治する者なし。彼れ摩竭國に大臣あり、能く病を治すと聞き、卽ち使を遣はして王

に白す。『拘睒彌の長者子の病、耆婆能く治せん、願はくは王遣來せよ』と。時に瓶沙王、耆婆を喚んで問うて言はく、『拘睒彌の長者子病む、汝能く治するや不や』と。答へて言はく、『能くせん』と。『若し能くせば、汝往いて之を治すべし』と。時に耆婆童子、車に乘じて拘睒彌に詣る。耆婆始めて至る、長者子已に死し、伎樂送出す。耆婆聲を聞いて卽ち問うて言はく、『此れは是れ何等の伎樂皷聲ぞ』と。傍人答へて言はく、『是れ汝の、爲めに來る所なるも、長者子は已に死せり、是れ彼の伎樂の音聲なり』と。耆婆童子能く一切の音聲を分別す、卽ち言ふ、『語りて迴還せしめよ、是れ死人に非ず』と。語り已りて卽ち迴還す。時に耆婆童子、卽ち車を下りて利刀を取り、腹を破りて腸の結處を披き、其の父母諸親に示し、語りて言はく、『此れは是れ輪上に嬉戲して腸をして結せしむ。是くの如く食飮消せず、是れ死するにあらざるなり』と。卽ち爲めに腸を解き、本處に還復し、皮を縫い肉を合せ、好藥を以て之に塗る。瘡卽ち愈えて毛還た生じ、瘡なき處と異ならず。時に長者子、卽ち耆婆に四十萬兩金を報ず、婦も亦四十萬兩金を與ふ、長者の父母も亦爾り、各四十萬金を與ふ。是れ耆婆童子の第四治病なり。

爾の時、尉禪國王波羅殊提、十二年中常に頭痛を患ふ、醫の能く治する者あることなし。彼れ瓶沙王に好醫あり、善く病を治すと聞き、卽ち使を遣はして王に白す。『我れ今病あり、耆婆能く治せん、願はくは遣來して我が爲めに之を治せよ』と。時に王卽ち耆婆を喚びて問うて言はく、『汝能く波羅殊提の病を治するや不や』と。答へて言はく、『能くす』と。『汝往いて之を治すべし』と。王語りて言はく、彼の王〔二〕蠍中より來る。汝能く自ら護せよ、自ら命を斷ずること莫れ』と。答へて言はく、『爾り』と。時に耆婆童子尉禪國に往き、婆羅殊提の所に至り、足を禮して一面に在りて住し、卽ち王に問うて言はく、『何の患苦するところぞ』と。答へて言はく、『如是如是の病あり』と。問うて言はく、『病何れより起る』と。答へて言はく、『如是如是より起る』と。問うて言はく、『病來久

【二】蠍中より來るといふのは、蝎にも作る。「さそり」といふ蟲の名。『有部律』に、此の王の因緣を述べて居る。此の王の名は燈光、不眠症に罹り、酒により睡に就き、之が爲めに酥を嫌ふ。酥の名を說くも、尙ほ死罪とす、其の行暴惡の故に、人呼んで猛暴（或は猛光）といふ。斯く不眠の故は、蝎の子であるがためで、それは坑を掘りて、牛糞を滿塡し、其の上に敷具を安んじて寢れば睡れたといふので證明されたといふのである。蝎といふ蟲は、こんなところに住んでるからだといふ。王は自ら蝎の子であることに疑を抱き、之を母に問うたところが、父王が他國に行つた際、母が欲心を起し、蝎の來たのを見て、これが丈夫であつたなら、これでも欲を行じて樂まんと念じた時に、蝎が變成男子となりて現はれたので、遂に之と欲を行じ、娠んで生んだ子が、此の波羅殊提王、卽ち暴光王だといふのである。

か近か』と。答へて言はく、『病來爾許時なり』と。次第に問ひ已りて語りて言はく、『我れ能く治せん』と。王言はく、『若し酥若しは雜酥を以て藥となさば、我れ服すること能はず、若し我れに雜酥藥を與へんには、我れ當さに汝を殺すべし』と。是の病は餘藥は治せず、唯酥のみ則ち除く。耆婆童子卽ち方便を設け、王に語りて言はく、『我等の醫法病を治するに、朝晡晨夜隨意に出入せん』と。王耆婆に語り、隨意に出入することを聽す。復王に白して言はく、『若し貴藥を須めんには、當さに急乘騎を得べし、願はくは王疾き者を給することを聽したまへ』と。是の時王卽ち日に行くこと五十由旬の駝を給す。卽ち王に醎食を給して食せしめ、屏處に於て酥を煮て藥と爲し、水色水味と作し已り、持つて王母に與へて語りて言はく、『王若し眠覺め、渴して水を須むる時は、此れを持つて與へて之を飮ましむべし』と。水を持つて王母に與へ已り、卽ち五十由旬駝に乘じて去る。時王眠り覺め、渴して水を須む、母卽ち此の水藥を以て之に與ふ。藥消せんと欲する時、酥氣あるを覺る。王言はく、『耆婆我れに酥を與へて飮ましむ、是れ我が怨家なり、何ぞ能く我れを治せん』と。急に往いて覓め來らしむ。卽ち耆婆の住處に往いて之を覓むるに得ず、守門の人に問うて言はく、『耆婆の在る所ぞ』と。答へて言はく、『五十由旬駝に乘じて去る』と。王益怖懼す、『酥を以て我れに飮ましむ、是れ我が怨家なり、何ぞ能く我れを治せん』と。時に一健步あり、名を烏といふ、日に行くこと六十由旬なり、卽ち喚び來る。王語りて言はく、『汝能く耆婆童子を追ふや不や』と。答へて言はく、『能くす』と。『汝往いて喚び來るべし』と。王言はく、『彼の耆婆大に技術を知る、其の食を食する莫れ、或は汝に非藥を與へん』と。答へて言はく、『爾り、王の敎を受く』と。耆婆童子去りて中道に至り、復畏懼せず、便ち住まりて食を作す。時に健步の烏、耆婆に及ぶことを得たり。耆婆に語りて言はく、『王波羅殊提汝を喚ぶ』と。卽ち言ふ、『去るべし』と。耆婆、烏に食を與ふ、肯て食はず。時に耆婆自ら一阿摩勒果を食して半ばを留め、一器の水を飮みて復半ばを留め、爪下

に非藥を安んじ、水果の中に沈著す。烏に語りて言はく、『我れ已に半果を食し、半水を飲む、餘は半果半水あり、汝之を食すべし』と。烏即ち念じて言はく、「彼れ自ら半果を食し半水を飲み、半ばを留めて我れに與ふ、此の中に必ず非藥あることなかるべし」と。卽ち半果を食ひ、半水を飲み已り、便ち嘘を患ひて復去ること能はず。復藥を取りて烏の前に著き、語りて言はく、『汝某れの時此の藥を服せよ、當さに差ゆべし』と。耆婆童子便ち五十由旬駝に乘じて復前に去る。後王、烏の所患と倶に差ゆ。波羅殊提王使を遣はして耆婆を喚びて語りて言はく、『汝已に我が病を治して差えしむ、來るべし。汝彼の國に在りて、所得多少ぞ、我れ當さに倍加して汝に與ふべし』と。耆婆言はく、『且らく止みね』と。王便ち供養を爲し已る。『我れ瓶沙王の爲めの故に王の病を治す』と。時に波羅殊提、一貴價衣の、値半國に直するを送り、耆婆に語りて言はく、『汝肯て來らず、今汝に此の衣を與ふ、以て相報ゆ』と。此れは是れ耆婆の第五の治病なり。

爾の時、世尊水を患ひ、阿難に語りて言はく、『我れ水を患ふ、除去することを得んと欲す』と。時に阿難世尊の言を聞き、王舍城に往いて耆婆の所に至りて語りて言はく、『如來水を患ひたまふ、之を除くことを得んと欲す』と。爾の時耆婆、阿難と倶に佛所に往き、頭面禮足して却つて一面に住す。佛に白して言さく、『如來〔三〕水を患ひたまふや』と。佛言はく、『是くの如し耆婆、我れ之を除かんと欲す』と。佛に白して言さく、『幾下を須ひんと欲したまふや』と。答へて言はく、『三十下を須ふ』と。時に耆婆阿難と倶に王舍城に往き、三把の優鉢花を取り、還た其の家に詣りて一把の花を取り、藥を以て之に熏じ、幷びに呪して說く、『如來此れを嗅ぎたまひ、十下を得たまふべし』と。復第二把の花を取り、藥を以て之を熏じ、幷びに復呪して說く、『之を嗅ぎ、復十下を得たまふべし』と。復第三把の花を取り、藥を以て之を熏じ、幷びに復呪して說く、『之を嗅ぎ、九下を得べし』と。復一掌の煖水を飲み、『一〔四〕下風を得るに足る』と。卽ち隨順して三把の花を以て阿難の手

【三】水を患ふは、下痢である。幾下を須いんとしたまふやとは、蓋し日に幾回下痢したまふやとの意である。

【四】下風は、放屁である。上風は欠(オクビ)であつて、之を上下風とするのである。

中に置く。時に阿難華を持つて王舍城を出で丶世尊の所に詣り、一把の花を以て世尊に授與したてまつり、『如來之を嗅ぎ、十下を得たまふべし』と。復第二把を授けたてまつり、『更に十下を得ん』と。第三把復た『九下を得ん』と。爾の時耆婆、阿難に佛に煖水を與ふるを語ることを忘る。爾の時世尊、耆婆の心の所念を知り、即ち阿難を喚び、煖水を取り來らしむ。爾の時阿難世尊の敎を聞き、即ち煖水を取りて佛に與ふ。佛即ち一掌の煖水を飮みたまうて患即ち消除し、風も亦隨順す。爾の時王瓶沙、佛に患ひありと聞き、八萬四千人と俱に、前後導從して世尊の所に詣り、世尊を問訊し、頭面禮足して却つて一面に坐す。時に憂塡王世尊の患を聞き、亦七萬人を將ひて俱に、波羅殊提王六萬人と俱に、梵施王五萬人と俱に、波斯匿王四萬人と俱に、末利夫人・利師達多・富羅那・四大天王、及び諸の營從、釋提桓因、忉利の諸天と俱に、炎天子は炎天と俱に、兜率天子は兜率諸天と俱に、化樂天は化樂諸天と俱に、他化自在天は他化自在天と俱に、梵天は梵天と俱に、摩醯首羅天子は摩醯首羅諸天と俱に、世尊の所に詣り、頭面禮足して却つて一面に住す。時に舍利弗世尊の病みたまふを聞き、五百の比丘と俱に世尊の所に往き、頭面禮足して却つて一面に住す。爾の時摩訶波闍波提比丘尼、世尊の病みたまふを聞き、五百の比丘尼と俱に、阿難賓坻は五百の優婆塞と俱に、毘舍佉母は、五百の優婆夷と俱に、世尊の所に詣り、頭面禮足して世尊を問訊したてまつる。時に提婆達多世尊の病みたまふを聞き、世尊の所に詣り、頭面に禮足して却つて一面に住す。爾の時提婆達多、世尊の前の四部の衆會を見て是くの如きの念を作さく、「我れ今寧ろ藥を服すべし、佛の如く四部衆をして、來りて我れを問訊せしめん」と。即ち耆婆の所に往き、語りて言はく、『我れ佛所服の藥を服せんと欲す、汝我れに藥を與ふべし』と。耆婆言はく、『世尊の服したまふ此の藥は、那羅延と名づく、此の藥は是れ餘人の服するところに非ず、轉輪王を除き、成就菩薩如來は、乃ち能く之を服す』と。提婆達多語りて言はく、『若し我れに與へざれば、我れ當さに汝を害すべし』

と。爾の時耆婆奪命を畏るゝが故に、卽ち之を與ふ。提婆達多此の藥を服するを以ての故に卽ち重病を得、自心俱に苦む、獨り一已ありて更に餘人なく、亦親厚なし。是くの如きの念を作さく、「我が今日の如き、救ふ者あることなし、唯如來のみあり」と。爾の時世尊、提婆達多の心念を知り、身に施藥の光明を出し、以て提婆達多を照し、一切の苦痛をして卽ち休息することを得せしむ。爾の時提婆達多病差えて久しからず、王舍城の巷陌に往いて唱令す、『太子悉達多、轉輪王を捨てゝ出家して道を爲し、今醫藥を行じて自ら活く。何を以て之を知る、我が病を適治して、差ゆるが故に之を知る』と。時に諸の比丘聞く。少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知るものあり、提婆達多を嫌責す、『如來の慈愍、而も更に【五】反復なし』と。爾の時比丘世尊の所に至り、頭面に禮足し已りて佛に白して言さく、『未曾有なり世尊の慈愍、提婆達多而も更に反復無し』と。佛諸の比丘に告げて言はく、『適ま今日慈愍して、提婆達多而も更に反復なきのみにあらず。何を以ての故に。乃往過去世の時、王あり一切施と名づく、閻浮提の王となる。時に閻浮提國王平博にして人民熾盛、豐樂比なし。時に閻浮提に八萬四千の城あり。五十億の聚落あり、六萬の邊城あり。爾の時病人あり、一切施王の所に詣り、王に白して言さく、「我れ今救護あることなし、唯王あるのみ」と。爾の時王閻浮提の諸醫を集めて、此の病人を示す。王諸醫に問ふ、「此くの如きの病人は、當さに何の藥を須ふべき」と。諸醫病を看已りて王に白して言さく、「此くの如きの病人は、常人の能く藥を與ふる所にあらず、唯成就菩薩ありて能く藥を與ふるのみ」と。王問ふ、「何の藥を須ふとやせん」と。醫言はく、「此の病人若し慈心の菩薩の生肉生血を得て之を食はゞ、二十九日にして乃ち差ゆること得ん」と。一切施王心に念じて言はく、「生死長遠にして轉輪際なし、諸の苦惱を受けて、或は地獄・餓鬼・畜生に墮ち、脚を截り、手を截り、耳を截り、眼を挑り、頭を斫り、竟に何の益する所ぞ」と。卽ち國を以て諸臣に付囑し、內靜處に入り四無量行を思ふ。爾の時一切

【五】反復は、其の恩をかへすこと、感謝の念なきことである。

施王即ち利刀を取り、髀裏の肉血を割き、人をして送りて病者に與へしむ。是くの如くにして二十九日を經、後に王使人に問ふ、『病人云何』と。王に答へて言はく、『已に差ゆ』と。王言はく、『將ひ來れ之を看ん』と。時に即ち病人の爲めに洗浴し、新衣を與へて著せしめ、將ひて王の所に詣る。王問うて言はく、『汝の病云何』と。答へて言はく、『已に差ゆ』と。王言はく、『隨意に去れ』と。時に彼の人門を出て、右脚地を蹴て血出づ。餘人之を見て問うて言はく、『男子、汝の脚何が故に血出づるや』と。即ち言はく、『彼れは非法の王、弊害の王、非法婬著の王、貪著樂邪見の王なり。彼れの門中に於て、脚此の閫を蹴、我が脚をして、壞して血出づること是くの如くならしむ』と。彼の諸人言はく、『未曾有なり、反復なき人、一切施王、二十九日身の血肉を以て、治して差えしむることを得しむ、而も王の所に於て反復あることなし」と』。佛 諸の比丘に告げたまはく、『爾の時の一切施王は我が身是れなり、時に病人とは、今の提婆達多是れなり、我れ前世の時慈心之を愍む、而も反復なし、今も亦是くの如し、反復あることなし』と。爾の時世尊提婆達多の爲めの故に、此の偈を說いて言はく、

一切の諸山海、　我れ以て重しとなさず　共に反復なき者　我れ此れを以て重しとなす　反復
あるなきの報ひ　癩病惡疾の苦　或は白癩の病を受く　反復なければ是くの如し。

是の故に諸の比丘、應さに報恩を念ずべし、應さに反復を存すべし、當さに是くの如く學すべし。爾の時耆婆童子、世尊の病を瞻視し、吐下湯藥及び野鳥の肉を煮て差ゆることを得たり、是れを耆婆童子の第六治病と爲す。

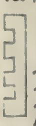
爾の時、耆婆童子、異時に於て一領の貴價衣を持し、世尊の所に往き、頭面禮足して却つて一面に住し、世尊に白して言さく、『我れ若し國王を治し、若しは大臣を治せば、或は一國土を得、或は一聚落を得ん、唯世尊當さに我が願を與ふべし』と。佛言はく、『我れ已に願を過ぐ、人に願を與

へず』と。耆婆復言はく、『願はくは我が淸淨の願を與へたまへ』と。佛言はく、『何等の淸淨の願を求むる』と。答へて言はく、『我が此の貴價衣は、王波羅殊提の間に從つて得たり、價半國に直す、願はくは世尊哀愍の故に、我が爲めに受けたまへ、自今已去、願はくは諸の比丘檀越施衣を著せんと欲するも、糞掃衣を著せんと欲するも、隨意に著することを聽したまへ』と。爾の時世尊默然として之を可したまふ。時に耆婆童子、世尊の可を得已りて、卽ち金澡瓶水を以て佛手を洗ひ、此の大貴價衣を持つて佛に上る。佛慈愍の故に爲めに之を受けたまふ。耆婆童子頭面禮足して却つて一面に坐す、佛爲めに種々に說法し、歡喜を得せしむ。前んで佛を禮し已りて還り去る。時に世尊此の因緣を以て比丘僧を集め、諸の比丘の爲めに隨順說法し、無數の方便を以て頭陀と、威儀を攝持し、少欲知足にして智慧あり、出離を樂むものを讃歎し、諸の比丘に告げたまふ。『此の衣は貴價中の第一なり、牛の乳を出し、乳の中に酪を出し、酪の中に生酥を出し、生酥の中に熟酥を出し、熟酥の中に醍醐を出す、最勝第一なるが如し、此の衣も是くの如し、衆多の衣中最も第一と爲す、自今已去、諸の比丘、隨意に檀越施衣、糞掃衣を著くることを聽す』と。爾の時缾沙王、佛の諸の比丘に檀越施衣を畜ふるを聽したまふを聞き、卽ち著くるところの貴價の欽婆羅衣を持つて比丘に送與す。諸の比丘受けずして言はく、『佛未だ我曹に、大價衣を畜ふることを聽したまはず』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自今已去、貴價欽婆羅衣を畜ふることを聽す』と。後復人を遣はして、王の著くるところの貴價の氍氀を送る。諸の比丘敢て受けず、『佛未だ我曹に、貴價の氍氀を畜ふることを聽したまはず』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自今已去、畜ふることを聽す』と。爾の時六群比丘、廣大長毛の氍氀を畜ふ。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく、『畜ふべからず』と。佛言はく、『自今已去、諸の比丘、氍氀廣さ三肘、長さ五肘、毛長三指の者を畜ふることを聽す、應さに淨器に畜ふべし』と。爾の時耆婆童子、佛の諸の比丘に、檀越施衣を畜

ふるを聽したまふと聞き、卽ち人をして、王の著くるところの短毛氍氀を送りて諸の比丘に與へしむ。諸の比丘敢て受けず。『佛未だ我れに短毛氍氀を畜ふることを聽したまはず』と。諸の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『自今已去、畜ふることを聽す』と。爾の時王舍城の諸の優婆塞、佛の諸の比丘に、檀越施衣を畜ふるを聽したまふと聞き、卽ち人を遣はして、大に種々の好衣を送りて、諸の比丘に與へしむ。諸の比丘云何すべきかを知らず、往いて佛に白す。佛言はく、『分つことを聽す』と。云何が分つかを知らず。佛言はく、『當さに人の多少を數ふべし、若し十分ならば十分と爲せ、若し乃至百人ならば百分と爲せ』と。衣を分つ時好惡相參はる。時に彼の分衣者、輙ち自ら分を取る。佛言はく、『自ら分を取るべからず、應さに異人をして分たしむべし』と。異人をして分を取らしめ、彼れ自ら分を取る。佛言はく、『自ら取るべからず、當さに籌を擲つべし。彼の比丘自ら籌を擲つ。佛言はく、『自ら籌を擲つべからず、見ざるもの丶籌を擲つことを聽す』と。時に王の著くるところの大貴價衣あり、分つべからず。佛言はく、『截破して分ちことを聽す、自今已去、刀を以て衣を截ることを聽す』と。爾の時比丘未浣衣を得たり。佛言はく、『自ら浣ひ、若しは人をして浣はしむることを聽す』と。時に浣器を須ふ。佛言はく、『應さに浣器を畜ふべし、若し浣板なければ、板を畜ふることを聽す。若し剪力を須ふれば畜ふことを聽す』と。

爾の時世尊、王舍城を出で丶南方人間に遊行す。中道に田あるを見る、能く事を作して畦畔齊整なり、見已りて阿難に告げたまふ、『汝此の田を見るや不や』と。答へて言はく、『已に見る世尊』と。佛阿難に問ひたまはく、『汝能く諸の比丘のために、是くの如きの衣法を作すや不や』と。答へて言はく、『能くす』と。佛阿難に語りたまはく、『汝往いて諸の比丘に敎へよ』と。時に阿難彼れより王舍城に還り、諸の比丘に敎へて、是くの如きの割截衣を作らしむ。『此れは是れ長條、此れは是れ短條、此れは是れ葉。此れは第一縫、此れは第二縫、此れは是れ中縫。此の條葉は兩向なり』と。時

に王舍城多く割截衣を著く。爾の時世尊南方人間の遊行已りて王舍城に還り、諸の比丘多く割截衣を著くるを見て告げて言はく、『阿難聰明にして大智慧あり、我れ爲めに略し說けり、而も能く廣く其の義を解す。過去の諸の如來無所著、佛の弟子も、是くの如きの衣を著く。我が今日の如き、未來世の諸の如來無所著佛の弟子も、是くの如きの衣を著く。我が今日の如き、刀截して沙門の衣を成す、怨賊の爲めに剝がれず。今日より已去、諸の比丘、割截安陀會・欝多羅僧・僧伽梨を作ることを聽す』と。時に諸の比丘、割截安陀會を作り、體を襯して著く、葉邊速に破れ、塵垢葉內に入る。自今已去、不割截安陀會を作ることを聽す。諸の比丘、割截欝多羅僧、僧伽梨を著く。葉邊速に破れ、塵垢內に入りて露濕す。佛言はく、『自今已去、割截欝多羅僧、僧伽梨を著くることを聽し、葉は[六]鳥足縫を作し、若しは葉邊を編し、若しは馬齒縫となすことを聽す』と。諸の比丘、當さに幾條衣を作るべきかを知らず。佛言はく、『[七]五條にすべし、六條にすべからず、七條にすべし、八條にすべからず、九條にすべし、十條にすべからず、乃至十九條にし、二十條にすべからず、若し是の條數を過ぐれば畜ふべからず』と。爾の時比丘、反襦して涅槃僧を著けて白衣の舍に入り、解脫して形露はる。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『爾るべからず、帶を作りて著くることを聽す』と。時に六群比丘、上色の帶を畜ふ。佛言はく、『畜ふべからず』と。諸の比丘錦を以て作る。佛言はく、『錦にて作るべからず』と。諸の比丘白帶を畜ふ。佛言はく、『白を以て作るべからず』と。佛言はく、『袈裟色の帶を作ることを聽す』と。爾の時六群比丘廣長の腰帶を作る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『作るべからず、廣さ二指、腰を遶ること三周なるを作ることを聽す。若し已作の者を得ば、應さに二疊・三疊・四疊、若しは三四疊に作るべし、亂れて縫合することを聽す。若し短き者は、繩を作りて續ぐことを聽す。若し帶細軟なれば、結を數へて速に斷じ、應さに紐若しは玦を安んずべし』と。諸の比丘寶を用ひて作る。佛言はく、『寶を用ふべからず。若しは骨を用ひ、若し

【六】鳥足縫とは、袈裟の條葉を縫ふのに、鳥足の形、卽ち絲を入字形、或は人字形に縫ひ連ねることをいひ、馬齒縫とは、馬の齒の形といふことで、是れは倒凹字形、或は横凹字形の連續に縫つて行くことを言ふのである。布に小さく切つて、田畦に形どつて縫ひ合せたのが割截衣である。其の合せ目に縫ひつける細い布が條葉であつて、此の條葉を縫ひつける縫ひ方である。卽ち縱には 横は 或は縱には横は である。前は鳥足、後は馬齒である。葉邊を編すとは絲にて に縫ふことである。

【七】五條にすべし等といふのは、袈裟の條數は、總べて奇數にして、偶數にしてはならないといふことを示したのである。こゝでは十九條までであるが、十九條以上の袈裟はないといふことになる。『薩婆多論』には二十五條まで擧げてあるから、二十五條以上はないので、有部では二十五條を限度とし、『四分』では十九條を限度とするといふことになる。尤も道宣等の古來の律學者は、こゝに十九條としたのは、十九條以上を許さないといふのではない、唯例擧を十九に止めたので、

は牙、若しは角、若しは鐵、若しは銅、若しは白鑞、若しは鉛錫、若しは綖、若しは木、若しは胡膠を用ひて作れ』と。云何が玦を安んぜんかを知らず。佛言はく、『帛を以て縫ひ、若しは孔を穿ちて著けよ』と。時に諸の比丘帶斷壞す、補治することを聽す。復云何が補治せんかを知らず。佛言はく、『若し重は綖にて更に縫へ、若し邊壞すれば、綫にて編するを聽す、若し帶頭の鬚壞すれば、更に綫を以て續ぎ、若しは縫ふことを聽す』と。爾の時比丘、僧祇支を繫けずして聚落に入りて行く、衣墮ち形露はれしむ。佛言はく、『衣を繫けずして聚落に入るべからず、帶若しは縫を安んずることを聽す』と。爾の時舍利弗白衣の舍に入る。風吹き割截衣の肩より墮つるを患ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『肩頭に鉤紐を安んずることを聽す』と。

爾の時世尊王舍城に在しき。千二百五十の比丘と倶に人間に遊行す。爾の時比丘多く衣を持つ。或は頭に戴き、或は肩に擔ひ、或は腰中に帶著す。時に比丘あり、伽梵婆提と名づく。恒水の邊に至り、佛の渡らんと欲する處は、卽ち神力を以て水を斷ず。時に佛水を渡り已りて、諸の比丘多く衣を持ち、或は頭に戴き、或は肩に擔ひ、或は帶にて腰中に著くるを見、見已りて念じて言はく、「此の諸の比丘多く衣を持つこと是くの如し、我れ寧ろ諸の比丘の爲めに、衣の多少を制し、齊限あらしむべし、若し過ぐれば畜ふべからず」と。爾の時世尊婆闍國より人間に遊行して毘舍離に詣る。爾の時、菴婆羅婆提[九]、佛千二百五十の比丘と倶に人間に遊行し、毘舍離に來詣したまふと聞き、卽ち車に乘じて世尊の所に詣り、遙に世尊を見たてまつるに相好端嚴なり、恭敬歡喜して、卽時に車を下りて往いて佛所に詣り、頭面禮足して却つて一面に住す。爾の時世尊爲めに說法勸化して歡喜することを得せしむ。佛の說法を聞き已りて踊躍歡喜し、佛に白して言さく、『唯願はくは世尊、我が明日の請食を受けたまへ、幷びに比丘僧、我が園に在りて一宿したまへ』と。時に世尊默然として許可したまふ。彼の佛の許したまふを知り已りて、頭面に禮足し、佛を遶りて去る。爾の時世尊、

條數は、奇數でさへあれば無制限といふことを言つて居るが、これは穩當の解釋ではあるまいと思ふ。

【八】上色は、正色で、青・黃・赤・白・黑である。

【九】菴婆羅婆提(Āmradārikā)又は(Āmra Pāli)。

毘舍離に住して、菴婆羅園中に在しき。諸の梨奢、佛の千二百五十の弟子と人間に遊行し、毘舍離に來詣したまふと聞き、種々の衣服瓔珞を著け、種々の車に乘じ、往いて世尊を迎ふ。諸の梨奢、或は紺色の瓔珞衣服を著け、紺色の車馬に乘じ、紺色の侍從、紺色の刀鉾幡蓋、紺色の珠毛拂あり。青・黃・赤・白・黑の車馬、侍從嚴飾も亦復是くの如し。是くの如く五百の梨奢あり、世尊の所に詣る。時に菴婆羅婆提、佛を迎へて還り、道に諸梨奢に遇ひ、亦道を避けず、車蓋相突く。時に梨奢中に耆老の者あり、菴婆羅婆提に語りて言はく、『汝何が故に道を避けず、共に相逼斥して車蓋相突くや』と。婆提答へて言はく、『爾る所以の者は、我れ佛及び僧を請じて、我が園に在りて宿す、心佛に在りて餘意あることなし』と。梨奢語りて言はく、『我れ汝に百千兩金を與へん、佛に我が請供養を受くることを聽せ』と。答へて言はく、『我れ已に佛及び僧を請じ、我が園に止宿したまふ、云何ぞ當さに捨つべけんや』と。梨奢復言はく、『我れ汝に二百千兩金、乃至十六百千を與へん、世尊の我が請供養飲食を受くることを聽せ』と。答へて言はく、『能はず』と。梨奢復言はく、『半國の財物を以て汝に與へん、佛の我が請供養飲食を受くることを聽せ』と。答へて言はく、『設ひ我れに全毘舍離國を與ふるも、我れ亦捨てず。何を以ての故に。我れ既に佛及び僧を請じて、園に在りて供養すればなり』と。爾の時五百の梨奢、手を振つて菴婆羅婆提を瞋恨して言はく、『我等を捐棄す』と。即ち菴婆羅園に詣る。爾の時世尊彼の園中に在し、無數の衆のために圍遶せられて、法を說きたまふ。遙に五百の梨奢の來るを見て、諸の比丘に告げたまはく、『其れ比丘ありて、忉利諸天出遊の時を見ずんば、當さに此の諸梨奢を觀るべし、忉利諸天の出遊せんと欲する、此れと異なることなし』と。佛諸の比丘に告げたまはく、『汝の心念を愼み、威儀を攝持せよ、此れは是れ我が敎なり。云何が比丘、汝の心念を愼む。若し比丘内身を觀じて身意止み、精勤して攝持して念散亂せず、貪嫉世間の憂惱を調伏し、内憂惱を調伏し、外身を觀じて身意止み、精勤に攝持して念散亂せず、貪嫉世間の憂惱を調伏し、

外身を觀じて、受心法を觀ずるも亦是くの如し。是くの如くにして比丘正心念を得。云何が威儀を攝持する。比丘若しは出で、若しは入る、屈伸俯仰に衣鉢を執持し、若しは飲み、若しは食し、若しは藥を服し、大小便利し、若しは眠り、若しは覺め、若しは來り、若しは去る、若しは坐し、若しは住す、若しは睡り、若しは覺め、若しは語り、若しは默するに、常爾一心なる、是れを比丘威儀を攝持すと謂ふ。爾の時毘舍離の五百の梨奢、車所住の處に至り、便ち車を下り、世尊の所に詣り、頭面に禮足して却つて一面に坐す。五百の梨奢、佛の邊にありて復威神なし、唯佛大衆の中に在りて、光明威德無比なり、猶ほ秋天の雲翳あることなく、日の虛空を行いて、威曜無比なるが如し。是くの如く世尊、五百の梨奢の中に在りて、神德名稱顏貌無比なり。爾の時衆中に婆羅門あり、字は賓耆羊兒、此の婆羅門座より起ちて偏へに右肩を露はし、右膝地に著け、佛に白して言さく、『我れ所說あらんと欲す』と。佛言はく、『汝の所說を聽す』と。此の婆羅門卽ち佛前に於て偈を說いて佛を讚したてまつる。

摩竭王善利を得　鴦伽王珠鎧を持す　其れ佛ありて此の國に出づ　聲震動する雪山の如し　蓮花の香潔く　開張して香氣の勝るゝが如し　今佛の光曜を觀るに　日の初めて出づるが如く　月の虛空を行くが如く　諸の雲翳あることなし　是くの如く佛世尊　世間を光顯したまふ　佛の智慧を觀ずるに　闇に太火を然やすが如く　衆に施すに明眼を以てし　諸の疑惑を決了す

爾の時、諸の梨奢婆羅門に語りて言はく、『爾重ねて此の偈を說くべし』と。時に婆羅門卽ち再三此の偈を說く。時に諸の梨奢、其の讚偈を以ての故に、卽ち五百領の衣を與ふ。時に婆羅門此の衣を得已りて、卽ち用つて佛に上りて言はく、『願はくは佛、哀愍の故に、而かも爲めに之を受けたまへ』と。爾の時世尊諸梨奢に告げたまはく、『世間に五種の寶ありて得難し、何等か五なる。一には佛世尊の世間に出づる、此の寶得難し、佛世間に出で、佛の說法を聞き、人の爲めに說かんは、

此の寶得難し。佛世間に出で、人の爲めに法を說き、法を聞いて解せんは此の寶得難し。佛世間に出で、佛の法を說くを聞き、如法にして行ぜんは此の寶得難し。信樂を得んは此の寶得難し。是れを五寶は世間得難しと爲す。爾の時五百の梨奢、佛の種々の方便說法開化を聞き、極めて大に歡喜して佛に白して言さく、『願はくは明日我が請を受け、比丘僧と倶にしたまへ』と。佛言はく、『我れ已に菴婆羅婆提の請を受く』と。時に五百の梨奢手を振つて言はく、『菴婆羅婆提我等を捐棄す』と。卽ち座より起ち、前んで佛足を禮し、遶り已りて去る。爾の時菴婆羅婆提家に還り、種々の多くの美飮食を辨具し、明日往いて『時至る』と白す。世尊淸旦衣を著け鉢を持し、比丘僧千二百五十人と倶に、菴婆羅婆提の家に往き、座に就いて坐したまふ。時に婆提、佛及び比丘僧に、種々の多くの美飮食を飯し、食飮足り已りて鉢を地に置き、金澡瓶水を以て佛の手を洗ひ、前んで佛に白して言さく、『毘舍離國に諸の園觀あり、此れ最も第一なり、今世尊に上る、中に在りて住止したまへ、唯願はくは哀愍せられ、爲めに之を受けたまへ』と。佛告げて言はく、『汝佛及び四方僧に奉るべし、何を以ての故に。若し佛の園と園物、若しは房舍と房舍物、若しは鉢、若しは衣、若しは座具針筒は、佛の塔廟の如く、一切世間諸天龍神梵天沙門婆羅門諸天及び人、能く用ふる者あることなし』と。婆提言はく、『今以て佛及び四方僧に上る、願はくは爲めに之を受けたまへ』と。時に佛哀愍の故に、呪願を爲して之を受けたまふ。

　若し爲めに寺廟を作り　諸の果樹を種植し　橋船以て人を度し　曠野に水果を施し　兼ねて復屋舍を施す　是くの如きの人の輩は　日夜に福增長し　如法に能く持戒して　彼の人善道に向はん。

　時に婆提更に小床を取りて一面に於て坐す。時に世尊爲めに種々の法を說き、大に歡喜せしむ。卽ち座上に於て諸垢消除し、法眼淨を得、法を見、法を得、已に果證を成ず。佛に白して言さく、

『自今已去、佛法僧に歸依したてまつり、佛の優婆私と作らん。今より已去殺生せず、乃至飲酒せず』と。時に婆提、佛の種々の方便說法を聞き、極めて大に歡喜し、座より起ちて佛足を禮して去る。爾の時世尊靜處に在りて思惟し、心に自ら念じて言はく、「諸の比丘道路に在りて行くに、多く衣を擔ふ、頭上に戴くあり、或は肩上に擔ふあり、或は腰中に帶著するあり」と。見已りて是くの如きの念を作す。「寧ろ比丘の爲めに、衣の多少を制すべし、過ぐれば畜ふることを得ず」と。時に世尊初夜露地に在りて坐し、一衣を著く。中夜に至り、身の寒きを覺ゆ。卽ち第二衣を著く。後夜に至りて身の寒きを覺ゆ、第三衣を著く。時に世尊是くの如きの念を作したふ。「當來世の善男子、寒に忍びざるものは、三衣を畜へて足ることを聽す、過ぐることを得ず」と。夜過ぎ已りて、世尊此の事を以て比丘僧を集めて告げて言はく『我れ靜處に在りて思惟す、諸の比丘道に在りて行くに大に衣を擔ふ、或は頭上に戴き、肩上に擔ひ、腰中に帶著す。見已りて是くの如きの念を作す、「我寧ろ諸の比丘の爲めに衣の多少を制し、過ぐるものは畜ふることを得ず」と。我れ初め夜に於て露地に在りて坐し、一衣を著く、中夜に至りて寒きを覺え、第二衣を著く、後夜に至り寒きを覺えて第三衣を著く。我れ是くの如きの念を作す、「當來の善男子、寒きに忍びざるものは、三衣を畜へて足る、今寧ろ諸の比丘に、三衣を畜ふることを制すべし、若し過ぐれば畜ふることを得ず」と。自今已去、諸の比丘三衣を畜ふることを聽す、過ぎて畜ふることを得ず』と。時に異住處の四方僧、貴價の僧伽梨を得て臥具を作る。諸の比丘云何せんを知らず、佛に白す。佛言はく、『應さに餘物に貿易し、處に隨つて用ふべし』と。誰をして貿易せしむるかを知らず、佛に白す。佛言はく、『比丘の貿易を聽す、若しは守僧伽藍人、若しは沙彌、優婆塞をして易へしめ、若しは施主自ら易へ、處に隨つて用ひよ』と。時に世尊跋提國に在しき。比丘あり、芻麻衣を得たり、佛に言す。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。比丘あり、〔一〇〕羅睺多衣を得たり、佛に白す。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。比

【一〇】羅睺多衣、阿哆睺多衣の二衣は詳でない。『名義標釋』にも「是れ彼の國の物、此の方には無し、故に翻せず」と言つて居る。

丘あり、阿哆𦘕多衣を得たり、佛に白す。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。時に六群比丘上色染衣を畜ふ。佛言はく、『畜ふべからず』と。時に六群比丘上色の錦衣を畜ふ。佛言はく、『畜ふべからず、錦衣白衣は法畜ふべからず、應さに染めて袈裟色となして畜ふべし』と。時に六群比丘不[一]截鬚衣を著く。佛言はく、『畜ふべからず』と。六群比丘あり、錦にて衣鬚を作る。佛言はく、『畜ふべからず』と。六群比丘[二]頞那陀施衣を畜ふ。佛言はく、『畜ふべからず』と。『是くの如きの癡人、我が制する所に隨ひ、更る餘の衣を作る』と。時に世尊波羅㮈國に在しき。檀越ありて食を送る。諸佛の常法、若し往いて食せざれば、後に在りて房舍を案行す。房舍を案行する時、比丘の僧伽梨を舒べて地に在き、帖を安んぜんと欲するあるを見る。見已りて比丘の所に往き語りて言はく、『汝何が故に衣を舒べて地に在くや』と。比丘言はく、『[三]裏相をして外に著はさしめ、帖を現ずるあらしめんと欲す』と。佛言はく、『善い哉善い哉比丘、汝の作す所の如き』と。時に諸の比丘食より還る。世尊此の因緣を以て比丘僧を集めて告げて言はく、『汝諸の比丘、食後に我れ房舍を案行し、比丘の僧伽梨を舒べて地に在き、帖を安んぜんと欲するあるを見、見已りて比丘の所に往き語りて言はく、「汝何か故に衣を舒べて地に在くや」と。比丘言はく、「裏相をして外に著はし、帖を現ずるあらしめんと欲す」と。我れ卽ち讃歎し、「善い哉汝の所作の如き」と。自今已去、諸の比丘新衣を作らば、一重安陀會・一重欝多羅僧・二重僧伽梨。若し故衣は、二重阿陀會・二重欝多羅僧・四重僧伽梨を聽す。若し糞掃衣は、隨意に多少數を重ぬよ』と。

爾の時世尊曠野國に在しき。時に衆僧善顯現衣を得たり。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。錦衣を得たり。佛言はく、『畜ふることを聽さず』と。諸の比丘蚊厨を得たり。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。爾の時世尊跋耆國に在し、人間に遊行して失守摩羅山に往き、恐畏林鹿野苑中に至りて住す。時に菩提王子あり、新殿堂を作る。未だ沙門婆羅門一切の人の坐する者あらず。爾の時

【一】不截鬚衣、或は錦衣鬚など、いづれ衣に垂れし装飾としての鬚であらうが、詳でない。
【二】頞那陀施衣も不明。
【三】裏相を外に著はすは、所謂裏がへしをすることで、つぎ帖を現ずるといふのは、つぎをあてることである。

王子、佛の跋耆國より人間に遊行し、失守摩羅山恐畏林鹿野苑中に往いて住したまふと聞き、卽ち人を遣はして薩闍婆羅門の子を喚びて語りて言はく、『汝我が名を持つて佛所に往き、頭面禮足して世尊を問訊せよ、「起居輕利なりや、少病少惱にして住止安樂なりや」と。是くの如く佛に白せ、「願はくは佛及び僧我が請食を受けたまへ、我れ新殿堂を造る、未だ沙門婆羅門一切の人民坐する者あらず、願はくは佛先づ坐したまへ、然る後善提王子坐せば、福を得ること無量ならん」と』。時に薩闍婆羅門子、王子の足を禮し已りて、世尊の所に往き、敬んで問訊し已り、却つて一面に坐し、世尊に白して言さく、『善提王子世尊の足下に稽首したてまつり、起居輕利にして少病少惱住止安樂なりやを問訊したてまつる。是くの如く佛に白す。願はくは佛及び僧、我が請食を受けたまへ、我れ新殿堂を造る、未だ沙門婆羅門一切の人民の坐する者あらず、願はくは佛先づ坐したまへ、然る後王子坐せんには、福を得ること無量ならん』と。時に世尊默然として許可したまふ。時に薩闍婆羅門子佛の許可を聞き已り、坐より起ち佛を遶りて去り、善提王子の所に還り、是くの如きの言を白す。『沙門瞿曇、我れ已に白し竟り、默然として許可したまふ、今正さに是れ時なり』と。時に王子卽ち種々の美食を設け、夜過ぎ已りて、明日殿堂を掃灑し、好新衣を布き、階陛より殿に至る。時至りて人を遣はし佛に白す。時に世尊衣を著け鉢を持ち、千二百五十の比丘僧と俱に、善提王子の家に詣る。時に王子外門の裏に至りて佛を迎ふ。遙に佛の來りたまふを見、前んで頭面禮足し已り、佛の後に隨侍すること、順敎の弟子の如し。世尊王子の堂前に入り、默然として立つ。王子言はく、『願はくは衣上に在りて行いて殿に上り、我れをして福安樂を得しめたまへ』と。王子第二第三も是くの如く世尊に白す。世尊默然たり。時に世尊阿難を顧視したまふ。阿難、佛の新衣の上を躡んで行くを欲せざるを知る、後の衆生を利益せんが爲めの故に。阿難王子に語りて言はく、『此の衣を攝すべし、如來は上に在りて行くことを欲したまはず、後の衆生を利益せんが爲めの故に』と。

時に王子疾々に衣を却け已りて佛に白して言はく、『願はくは佛殿に上り、我れをして福を得せしめたまへ』と。時に佛卽ち殿に上り、座に就いて坐す。時に王子佛及び僧に、種々の多くの美飲食を飯し、食已りて鉢を捨て、一小床を取りて一面に在りて坐す。時に世尊種々に方便して、王子の爲めに說法し已り、坐より去りたまひ、本住處に還り、此の因緣を以て比丘僧を集めて告げて言はく、『若し大價衣を地に布かば、上に在りて行くべからず、若し行かば法の如く治す』と。爾の時比丘房舍塵土多し。佛言はく、『灑掃することを聽す』と、灑掃已りて故ほ復塵あり、佛言はく、『泥漿を以て汚灑することを聽す。若し故ほ塵あらば、伊梨延陀・毳羅・毳々羅毛・氀毾・十種衣中の若しは一々の衣にて地敷を作れ』と。

爾の時世尊舍衞國に在しき。王波斯匿に異母あり、佛法を信樂す、王の著くるところの大價の錦衣を以て、四方僧に施し、已りて便ち命過す。時に比丘用ひて地敷を作る。諸の不信樂の大臣あり、僧伽藍の中に至りて觀看す。比丘王の著くるところの大價の錦衣を以て地敷を作るを見、見已りて皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は厭足を知らず、多く貪りて遺餘を畜ふ。自ら言ふ「我れ正法を知る」と。是くの如き之を觀るに何くにか正法ある、王の著くるところの大價衣を以て、用ひて地敷を作る。檀越施すと雖、受くる者當さに足るを知るべし』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『王の著くるところの大價衣を以て、地敷を作るべからず、自今已去、用ひて臥褥坐褥を作り、枕を作り、覆耳衣を作ることを聽す』と。爾の時比丘、頭を裹んで佛所に至り、白して言さく、『大德、此れは是れ頭陀端嚴の法なり、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『比丘は頭を裹むべからず、是れ白衣の法なり、若し頭を裹めば法の如く治す』と。時に諸の比丘、頭冷痛す、佛に白す。佛言はく、『毳若しは劫貝を以て、帽を作りて頭を裹むことを聽す』と。爾の時比丘、(一四)誕陀盧多梨に衣を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法なり、願はくは佛聽したまへ』と。佛言

【一四】 誕陀盧多梨は、白衣着衣の法と見ゆ。『名義標釋』には、男子は腰を繞り、腋を絡し、橫巾右袒す。女は衣を擔いて下垂し、通肩に總べて覆ふ。出家の法は全く俗に殊なり、此の着衣法に順ふべからざるものと釋して居る。

はく、『是くの如く衣を著くることを得ず、僧伽藍内を除く。此れは是れ白衣の法なり。若し是くの如く衣を著くれば、法の如く治す』と。爾の時比丘一衣を著けて佛所に往き、白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法なり、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『一衣を著くべからず、大小便處を除く。此れは是れ白衣の法なり、若し著くれば法の如く治す』と。爾の時比丘〔一五〕串頭衣を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法なり、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『此の衣を著くべからず、是れ白衣の法なり、若し著くれば法の如く治す』と。爾の時比丘襖を著け、世尊の所に往き、白して言さく、「此れは頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ」と。佛言はく、『著くべからず、此れは是れ白衣の法なり、若し著くれば法の如く治す』と。爾の時比丘皮衣を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『著くべからず、此れは是れ白衣の法なり、若し著くれば法の如く治す』と。爾の時比丘褶を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と佛言はく、『著くべからず、此れは是れ白衣の法なり、若し著くれば法の如く治す』と。爾の時比丘袴を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく『著くべらず、此れは是れ白衣の法、若し著くれば法の如く治す』と。爾の時比丘行膝を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『著くべからず、此れは是れ白衣の法、若し著くれば法の如く治す』と。爾の時比丘蒲草行膝を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『著くべからず、此れは是れ白衣の法なり、若し著くれば法の如く治す』と。佛比丘に語りたまはく、『汝癡人、我が制する所に隨ひ、更る餘事を作す、是くの如き一切白衣の法は著くることを得ず』と。時に諸の比丘、假りに編髮螺髻を作し、佛所に來詣して白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、

〔一五〕串頭。襖・褶・袴・行膝等、皆共に實物を詳にせぬ。行膝は、其の脛を纏束すとあるから、脚絆の類であらう。蒲草行膝は、蒲草にて製せし意ならん。

願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『爾るべからず、此れは是れ外道の法なり、若し是くの如きを作さば法の如く治す』と。爾の時比丘あり、木鉢を持ちて佛所に往き、白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『是くの如きの鉢を持つべからず、此れは是れ外道の法なり、若し畜ふれば法の如く治す』と。爾の時比丘鉢樓を持ち、（三奇杖倒まに地に柱して鉢を持し、巾の上に置いて安んず。横に衆物を串して、肩に荷いて行く。故に鉢樓と名づく。）佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『此れは是れ外道の法なり、持つべからず、若し畜ふれば法の如く治す』と。爾の時比丘繡手衣を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは聽したまへ』と。佛言はく、『著くべからず、此れは是れ外道の法なり、若し畜ふれば法の如く治す』と。爾の時比丘草衣を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『著くべからず、此れは是れ外道の法なり、若し著くれば法の如く治す。是くの如きの衣、若しは草衣・娑婆草衣・樹皮衣・樹葉衣・珠瓔珞衣、是くの如きの一切の衣は畜ふることを得ず。若し畜ふれば法の如く治す』と。爾の時比丘外道の皮衣を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『著くべからず、若し著くれば法の如く治す』と。爾の時比丘鷲毛衣を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『著くべからず、此れは是れ外道の法なり、若し畜ふれば法の如く治す』と。爾の時比丘、人髮の欽婆羅衣を著け、佛所に往いて白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、著くべからず、此れは是れ外道の法なり、若し著くれば偸蘭遮なり』と。爾の時比丘、馬毛、犛牛尾の欽婆羅衣を著け、佛所に往いて佛に白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『著くべからず、此れは是れ外道の法なり、若し著くれば法の如く治す』と。爾の時比丘、露身にして

佛所に往き、白して言さく、『此れは是れ頭陀端嚴の法、願はくは佛聽したまへ』と。佛言はく、『爾るべからず、此れは是れ外道の法なり、若し露身すれば偸蘭遮なり』と。佛言はく、『是くの如くの癡人、我が制する所に隨ひ、復餘事を作す。是くの如きの一切外道の法は作すべからず』と。

爾の時住處あり、現前僧大に可分衣物を得たり、諸の比丘云何せんを知らず、往いて佛に白す。佛言はく、『分つことを聽す』と。云何が分つかを知らず、佛言はく、『應さに人の多少を數ふべし。若しは十人、若しは二十人、乃至百人ならば百分と爲せ。若し好惡あらば、當さに相參へて分つべし』と。彼れ便ち自ら分を取る。佛言はく、『自ら分を取るべからず、應さに籌を擲ちて分つべし』と。彼れ便ち自ら籌を擲つ。佛言はく、『自ら籌を擲つべからず、不見の者をして籌を擲たしむべし』と。時に物を分つ時、客比丘ありて來る。佛言はく、『應さに分を與ふべし。分を作し竟りて、客比丘ありて來らば、應さに分を與ふべし。未だ籌を擲たざる時に來らば、應さに分を與ふべし。籌を擲つ時に來らば、應さに分を與ふべし。籌を擲ち竟りて來らば、分を與へず。歡喜して分を受け已りて、客比丘あり來らば、分を與へず。若し餘りありて更に分ち、竟りて來らば分を與ふべからず。若し已に沙彌に與へ、人をして分たしめ已りて來らば、分を與ふべからず。比丘衣を分つ時、客比丘ありて數々來り、衣を分ちて疲極せば、應さに一人を差して分たしめ、白二羯磨し、是くの如くにして衆中に與ふべし。羯磨に堪能なるものを差し、上の如きの白を作せ。『大德僧聽け、此の住處、若しは衣若しは非衣、現前僧應さに分つべし。若し僧時到らば僧忍聽せよ、[一六]僧某甲比丘に與へ、彼れ當さに僧に與ふべきことを。白すること是くの如し』と。「大德僧聽け、此の住處、若しは衣、若しは非衣、現前僧應さに分つべし。僧今某甲比丘に與へ、彼の比丘當さに僧に與ふべし。誰か諸の長老、此の住處、若しは衣、若しは非衣、現前僧應さに分つべし、僧某甲比丘に與へ、彼の某甲當さに僧に與ふべきことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に忍す、

【一六】僧某甲比丘に與へは、僧が一比丘に與へ、此の一比丘を今衣人として擧げて、此の比丘よりまた衆僧に分つのである。

某甲比丘に與へ、彼の某甲僧に與ふることを忍し竟る、僧忍して默するが故に、是の事是くの如く持つ』と。

爾の時比丘、婆輸伽衣[一七]を得たり、佛に白す。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。諸の比丘寒を患ひ、佛に白す。佛言はく、『複貯衣を著くることを聽す』と。爾の時異住處あり、一比丘住す。時に現前僧大に可分衣を得たり。諸の比丘云何せんを知らず、佛に白す。佛言はく『若し比丘、住處に一比丘あり、大に現前僧可分衣を得んに、若し客比丘の來るありて、若しは四人、若しは過四人ならば、應さに衣を持つて一比丘に與へ、白二羯磨して分たしむべし、若し三人あらば、應さに彼此共に三語して、受けて共に分つべし。若し二人ならば、共に三語して受けて共に分つ。若し一人ならば、應さに心念口言して、「此れは是れ我が分」と。爾の時住處あり、比丘あり、比丘想あり、別部に衣を分たんと欲す。諸の比丘、分を成ずるや分を成ぜざるやを知らず、佛に白す。佛言はく、『分を成ぜず、突吉羅を得』と。爾の時住處あり、比丘あり、別部を疑つて衣を分つ。諸の比丘、分を成ずるや、分を成ぜざるやを知らず、佛に白す。佛言はく、『分を成ぜず、突吉羅を得』と。爾の時住處あり、比丘あり、無比丘想を作し、別部に衣を分つ。比丘、分を成ずるや、分を成ぜざるやを知らず、佛に白す。佛言はく、『分を成ぜず、不犯なり』と。爾の時住處あり、比丘なし、比丘想あり、衣を分つ。諸の比丘、分を成ずるや、分を成ぜざるやを知らず、佛に白す。佛言はく、『分を成ず、突吉羅を得。爾の時住處あり、比丘無し、疑あり、衣を分つ。分を成ずるや、分を成ぜざるやを知らず、佛に白す。佛言はく、『分を成ず、突吉羅を得』と。爾の時住處に比丘無し、比丘想無し、衣を分つ。諸の比丘、分を成ずるや分を成ぜざるやを知らず、佛に白す。佛言はく、『分衣を成ず、無犯なり』と。爾の時住處あり、比丘あり、比丘想あり、別部に衣を受く。諸の比丘、受衣を成ずるや不やを知らず、佛に白す。佛言はく、『受衣を成ぜず、突吉羅を得』と。爾の時住處あり、

【一七】婆輸伽衣は詳でない。『名義標釋』にも、「此の方其の名を得ず」と言つて居る。複貯衣は貯を入れて複とせし衣、複貯は衣に綿とか、絮とか羊毛等を加へて、温を保つ様にしたので、我が國の綿入れといふ類のものである。

比丘あり、別部を疑ひ、衣を受く。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『受を成ぜず、突吉羅を得』と。爾の時住處あり、比丘あり、比丘想なし、別部に衣を受く。諸の比丘、受を成ずるや不やを知らず、佛に白す。佛言はく、『受を成ぜず、不犯なり』と。爾の時住處あり、比丘無し、比丘想あり、衣を受く。諸の比丘、受を成ずるや不やを知らず、佛に白す。佛言はく、『受を成ず、突吉羅を得』と。爾の時住處あり、比丘無し、疑つて衣を受く。諸の比丘、受衣を成ずるや不やを知らず、佛に白す。佛言はく、『受を成ず、突吉羅を得』と。爾の時住處あり、比丘なし、比丘想なし、衣を受く。諸の比丘、受を成ずるや不やを知らず。佛に白す。佛言はく、『受を成ず、無犯なり』と。

四分律卷第四十

巻の第四十一（三分の五）

衣揵度の三

爾の時舍衞國に、多智識の比丘ありて死す。多くの僧伽藍あり、多く僧伽藍に屬する園田果樹あり、多くの別房あり、多くの別房に屬する物あり、多くの銅瓶・銅瓮・斧・鑿・燈臺、多くの諸の重物あり、多く繩床、木床、臥褥、枕あり、多く伊梨延陀、耄羅、耄々羅、氍氀あり、多く守僧伽藍人あり、多く車輿あり、多く澡罐、錫杖、扇あり、多く鐵作器、木作器、陶作器、皮作器、剃髮刀、竹作器、多くの衣、鉢、尼師壇、針筒あり。諸の比丘云何せんを知らず、佛に白す。佛言はく『多智識も無智識も一切僧に屬す』と。諸の比丘、僧に園田果樹を分つ。佛言はく『分つべからず、四方僧に屬す』と。彼れ別房及び別房に屬する物を分つ。佛言はく『分つべからず、四方僧に屬す』と。彼れ銅瓶、銅瓮、斧、鑿、及び諸の種々の重物を分ち、佛に白す。佛言はく『分つべからず、四方僧に屬す』と。彼れ繩床、木床、坐褥、臥褥、枕を分つ。佛言はく『分つべからず、四方僧に屬す』と。彼れ伊梨延陀、耄羅、耄々羅、氍氀を分つ。佛言はく『分つべからず、四方僧に屬す』と。自今已去、諸の比丘に、氍氀の廣さ三肘、長さ五肘、毛長三指は、現前僧應さに分つべきことを聽す』と。彼れ車輿、守僧伽藍人を分つ。佛言はく『分つべからず、四方僧に屬す』と。彼れ水瓶、澡罐、錫杖、扇を分つ。佛言はく『分つべからず、四方僧に屬す』と。彼れ鐵作器、木作器、陶作器、皮作器、竹作器を分つ。佛言はく『分つべからず、四方僧に屬す。自今已去、剃刀、衣、鉢、坐具、針筒を分つことを聽す』と。彼れ[一]倶夜羅器を分つ『現前僧に應さに分つべし』と。爾の時異住處に二部の僧あり、多く可分衣物を得たり。時に比丘僧多し、比丘尼僧少し。諸の比丘云何せんを知らず、佛に白す。佛言はく『分ちて二分を作すべし』と。時に比丘尼なし、

【一】倶夜羅器は『名義標釋』に、「即ち貯器なり」とあり、或は翻じて隨鉢器ともいふ、匙箸鍵鎡鉢等を貯ふるの器なりとも釋して居る。

純ら式叉摩那のみなり。『應さに分ちて二分と作すべし』と。時に比丘尼なく、式叉摩那なく、純ら沙彌尼のみなり。佛言はく、『應さに分ちて二分と作すべし、若し沙彌尼なければ、僧應さに分つべし』と。時に住處あり、二部の僧多く物を得たり。比丘少く比丘尼多し、佛に白す。佛言はく、『應さに分つて二分と作すべし』と。比丘なし、沙彌あり。『應さに分ちて二分と作すべし』と。『沙彌なければ、比丘尼分つべし』と。時に比丘あり、拘薩羅國に在り、人間に遊行し、無比丘住處村に到り、到り已りて命過す。諸の比丘、誰か此の衣鉢を分つべきかを知らず。佛に白す。佛言はく『彼處に若し信樂の優婆塞、若しは守園の人あらば、彼れ應さに掌錄すべし。若し五衆の出家人あり、前に來る者は應さに與ふべし。若し來るものなければ、應さに近處の僧伽藍に送與すべし』と。爾の時世尊舍衞國に在しき。住處に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・大臣種々の外道・沙門・婆羅門多し。時に世尊諸の比丘に告げたまはく、『我れ三月靜坐思惟せんと欲す、外人をして入らしむる無れ、唯一供養人を除く』と。時に諸の比丘自ら制限を立つ。『世尊是くの如く語りたまふ、「三月靜坐思惟せんと欲す、外人の入るを聽さず、唯一供養人を除く」と。若し入る者あらば、教へて波逸提懺せしめん」と。爾の時長老和先跋檀陀子、波羅國の六十比丘と倶なりき、盡く是れ阿蘭若、乞食、著糞掃衣、作餘食法不食、一坐食一摶食、塚間坐、露地坐、樹下坐、常坐、隨坐、持三衣なり。舍衞國祇洹精舍に詣り、諸の比丘に問ふ。『如來何處の房に在してか住する、我れ往いて見たてまつらんと欲す』と。諸の比丘言はく、『如來是くの如く言ふ、「我れ三月靜坐思惟す、外人をして入らしむるなかれ、唯一供養人を除く」と。若し入る者あらば波逸提懺を作さしむ』と。和先問うて言はく、『世尊に是くの如きの語ありや』と。比丘答へて言はく、『諸の比丘自ら制を立てゝ言はく、「若し入るものあらば波逸提懺」と。』和先言はく、『我れ諸の長老の制を用ひず、何を以ての故に、佛に是くの如きの言あり、「佛制せざれば制すべからず、若し已に制すれば違ふべからず、所制の法に隨つて應

【三】和先跋檀陀子（Upasenamakāriputra）。

さに學すべし」と。我等悉く是れ阿蘭若、乃至持三衣なり、隨意に世尊を問訊したてまつることを得』と。爾の時長老和先、彼の六十比丘と倶に、徑ちに佛所に詣り、頭面に禮足して却つて一面に住す。時に世尊慰問して言はく、『和先、汝安樂なりや不や、飲食乏しからざるや、住止安靜なりや不や。和先、汝何處より來る、汝餘の比丘の語を聞かずや』と。答へて言さく、『住止安樂なり、飲食を以て苦と爲さず、亦餘の比丘の語を聞く。大德、我れ波羅國の六十比丘と倶なりき、盡く是れ阿蘭若乃至持三衣なり、拘薩羅國に在りて人間に遊行す。舍衞國に至りて祇洹の諸の比丘に問ふ、「世尊何處の房に在りて住する、我等見たてまつらんと欲す」と。諸の比丘是くの如く語る、「世尊三月靜坐思惟したまふ、外人をして入らしむるなかれ、唯一供養人を除く、若し入る者あれば、教へて波逸提懺せしむ」と。我れ卽ち問ふ、「波逸提懺は、世尊に是くの如きの語ありや」と。諸の比丘言はく、「無し、我等自ら制を立つるのみ」と。我れ卽ち語りて言はく、「我れ汝曹の制を用ひず、何を以ての故に、佛に是くの如きの語あり、「佛の制せざる者は制すべからず、若し已に制するは違ふべからず、所制の法に隨つて學すべし」と。我曹は皆是れ阿蘭若乃至持三衣なり、隨意に世尊に問訊したてまつることを得』と。佛言はく、『善い哉善い哉和先、汝等は悉く是れ阿蘭若、若しは持三衣なり、隨意に問訊することを得。若し復是くの如き者あらば、亦隨意に世尊を問訊することを得』と。爾の時諸の比丘、世尊の、阿蘭若に、隨意に世尊を問訊することを得と聽したまふと聞き、或は阿蘭若を作すものあり、或は請を受けざるもの、常乞食するものあり、或は檀越施衣を捨てゝ糞掃衣を持するものあり、或は長衣を捨てゝ三衣を持するあり。時に諸の比丘、衣を捨てゝ大積聚を成す。諸の比丘云何せんを知らず、佛に白す。佛言はく、『應さに衆僧に布施し、若しは佛に施し、若しは塔に施し、若しは一人に與ふべし』と。諸の比丘一人に與ふといふを聞き、持つて白衣に與ふ。比丘佛に白す。佛言はく、『白衣若しは外道に與ふべからず』と。時に諸の比丘畏愼して、敢て比丘尼

に、非衣、鉢嚢、革屣嚢、針筒、禪帶、腰帶、帽、拭脚巾、擣熱巾、裹革屣巾を與へず。佛言はく、『比丘尼に非衣を與ふることを聽す』と。諸の比丘是くの如きの念を作す。『波利婆沙、摩那埵を行ずるの比丘、分を與ふべきや不や』と。佛言はく『與ふべし』と。諸の比丘是くの如きの念を作す、『諸呵責羯磨、(二)若しは擯出羯磨、依止羯磨、遮不至白衣家羯磨、作擧羯磨を被る、是くの如くの諸羯磨を被る人は、當さに分を與ふべきや不や』と。佛言はく、『與へよ、地に置いて與へ、人をして與へしめよ』と。時に諸の比丘、外道の衣を得、染めずして便ち著け、佛に白す。佛言はく、『便ち著くべからず、應さに染め已りて著くべし』と。時に諸の比丘、白衣をして作らしむ。白衣、衣分を索む、佛に白す。佛言はく『功の多少を計り、食を與へ、價を與ふることを聽す。諸の比丘自ら念ずらく、『守僧伽藍人、沙彌は、應さに等しく衣分を與ふべきや不や』と。佛に白す。佛言はく、『若し僧和合すれば、應さに沙彌に等分を與ふべきことを聽す。若し和合せざれば、應さに半ばを與ふべし。若し半ばも聽さゞれば、應さに三分して一を與ふべし。若し與へざれば分つべからす。若し守僧伽藍人は、四分して一を與へよ、若し與へざれば、分つべからず。若し分たば、應さに法の如く治すべし』と諸の比丘畏愼して疑ひ、敢て衣を以て父母に與へず、佛に白す。佛言はく、『應さに與ふべし』と。爾の時、佛舍衞國に在しき。迦維羅衞の釋子新に堂舍を作り、未だ沙門婆羅門及び諸人の、上に在りて坐する者あらず。時に(三)毘琉璃太子最初に上に坐す。諸の釋種皆共に瞋嫌す。『我れ新に堂舍を作る、佛未だ坐を得給はず下賤の婢子先づ中に坐す』と。時に不信樂の婆羅門侍從あり、語りて言はく、『舍夷の諸釋子、汝を罵りて下賤の婢子となす、汝乃ち能く忍ぶや』と。答へて言はく、『我れ今力なし、自在を得ず、若し我が父亡し、我れ王と作る時、當さに我れに語るべし』と。後王波斯匿王位を失ひ、琉璃太子即ち自ら王と作る。不信樂の大臣白して言さく、『先きに諸の釋種子王を罵る、王能く忍ぶや、今往いて罰すべし』と。王即ち四種の兵を集め、舍衞

【三】毘琉璃(Virūḍhaka)。此の太子は波斯匿王の子、傳へ言ふ、波斯匿王釋子の女と婚せんとし、釋子已むを得ず、美貌の婢を以て、釋種の女として之を王に遣はす、王之と婚して生む所の子、是れ即ち此の毘琉璃太子なりといふのである。幼時釋種の國に至り、釋母の國に於て射法を學ぶ、釋迦族は、最も射に巧妙であつたといふことである。此の時太子は、釋迦族の人々より、婢子として罵られたといふのである。

城を出で〻舍夷國に往く。時に世尊慈愍の故に、卽ち先づ琉璃王の所行の道邊に往き、惡樹の下に坐す。時に琉璃王至り、佛の惡樹の下に在りて、坐するを見、卽ち車を下りて頭面禮足し、却つて一面に住し、世尊に白して言さく『多く大好樹無患樹あり、而も坐せず、何が故に此の惡樹の下に在りて坐したまふや』と。佛言はく『大王、親里の蔭下に在りて樂む』と。彼れ是くの如きの念を作す『世尊舍夷國を慈愍したまふが故のみ』と。卽ち軍を廻らして舍衛國に還る。不信樂の大臣婆羅門、第二第三是くの如く語る『諸の釋種、先きに王を罵り、下賤の婢子と作す、今往いて罰すべし』と。時に王卽ち復四種の兵を集め、舍衛國に往き、迦維羅衛國を去ること遠からず、小營を作りて自ら障住す。時に迦維羅衛の釋種等、皆能く遠く射る、枉發する者なし。或は一由旬を射て中的するあり、或は七十里を射て中的するあり、或は六十里、五十里、四三十里にして中的する者あり、時に琉璃王の營を射るあり、蓋頂蓋抖蓋子中たるあり、或は車轅に中たるあり、或は馬勒馬鞚馬韁に中たるあり、或は指印に中たるあり、或は耳珠、髻珠に中たるあるも、珠を破るのみ終に肉に傷けず。時に琉璃大に恐怖して問ふ『諸の釋子此を去ること遠か近か』と。傍臣答へて言はく、『此を去ること七十里』と。王聞き已りて、倍す更に恐怖して言はく『我れ將た諸の釋子の爲めに害せられざるや、及び我が軍衆きや』と。時に不信樂の大臣、王に白して言さく『彼の諸の釋子、皆五戒を持ちて優婆塞たり、死し死するも、終に衆生の命を斷たず、天但前進せよ、以て怖れを爲すこと勿れ。卽ち往いて迦維羅衛城を圍む。諸の比丘、此の因緣を以て佛に白す。佛言はく『彼れ若し與に門を開かざれば、終に得ること能はず』と。時に城内の人自ら和せず、或は言ふ『城を與ふべし』と。或は云ふ『與ふる莫れ』と。卽ち籌を行ふ。時に天魔破旬與に城衆の中に在り、七返籌を取る、卽ち琉璃王に城を與へしむるの籌多し。卽ち爲めに門を開いて之に與ふ。軍人卽ち入り、反つて城門を閉ぢ、街巷に[四]塪を鑿ち、人腰に齊し、諸釋種を埋めて、男女大小相參りて問ふこと

【四】塪は、坎に同じ、陷なり、穴なりとあり。

あるなし、大象をして上を蹈ましむ。時に【五】摩訶男釋子は是れ琉璃王の外祖父、諸の釋種に語りて言はく、『汝曹但琉璃王の大象を放ちて人を蹈殺するを看ること莫れ、當さに昔日の業報の因緣を觀ずべし、諸の釋種の、昔日所造の定業報、今當さに之を受くべし』と。時に琉璃王聞いて摩訶男釋子に語りて言はく、『何の願をか得んと欲する』と。摩訶男言はく、『諸の釋種已に死す、我れ今苦惱す、何の願を用ふることを爲さん、我れに願を與へんと欲せば、我が池水に入ることを聽せ、水に入る時節に隨ふ中間は、諸の釋種を聽し、出して殺すこと莫れ』と。琉璃王念じて言はく、『水中は久しきことを得ず、汝の願ひを與へん』と、摩訶男卽ち池水に入り、髮を以て樹根に繫け、遂に水下に於て命過す。琉璃王卽ち諸大臣に問うて言はく、『釋子摩訶男、水に入ること何ぞ乃ち久しきや、傍人之を見よ』と。答へて言はく、『已に死す』と。王言はく、『之を出せ』と。卽ち出して王に示す。時に琉璃王卽ち慈心を生じて言はく、『摩訶男は乃ち親里たり、故ほ身命を惜まず』と。卽ち人に勅して諸の釋種を放たしむ。彼れ卽ち教を受けて之を放つ。諸の釋種、被破れて剝脫し、露形にして僧伽藍の中に來至す。諸の比丘畏愼して、敢て衣を與へず。『佛我曹に、白衣に衣を與ふることを聽したまはず』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『衣を借せ露形せしむる勿れ、來りて我れを見るには、卽ち衣を借せ』と。

時に舍利弗、佛と拘薩羅國に在りて遊行し、一處に在りて坐し息ふ。僧伽梨を忘れ、地に置いて去る。時に佛憶念し、阿難に語りて言はく、『此の衣を取れ、親友意を作して取れ』と。阿難言はく、『云何が親友意を作して取る』と。佛言はく、『所取に隨つて彼れをして歡喜せしむ』と。『云何が所取に隨つて歡喜せしむ』と。答へて言はく、『七法あり、是れ親友の利益なり、慈愍の故に。何等か七なる。與へ難きを能く與へ、作し難きを能く作し、忍び難きを能く忍び、密事相語りて相發露せず、苦に遭うて捨てず、貧賤にして輕んぜず。是くの如く阿難、此の七法あり、名けて親友の利益

【五】摩訶男(Mahā-nāman)。

慈愍と爲す、彼れをして歡喜せしむ』と。卽ち偈を說いて言はく、

與へ難きを能く與へ　作し難きを能く作し　忍び難きを能く忍ぶ　是れ親しき吾友なり　密事相語り　互に相覆藏し　苦に遭うて捨てず　貧賤にして輕んぜず　此くの如き七法　人能く行ずれば　名けて親友と爲す　應さに之に附近すべし

佛言はく『此くの如きの親友は應さに取るべし』と。彼の比丘親友にあらず、親友意を作して取る。佛言はく『親友にあらざるに、親友意を作して取るべからず』と。彼の比丘親友にあらず、親友意を作して波利迦羅衣を取る。佛言はく『親友意を作して、此の衣を取るべからず、若し不足なるも取るべからず』と。爾の時　佛[六]波婆城にあり、一[七]摩羅あり、[八]樓延と名づく。是れ阿難白衣の時の親友なり。時に阿難衣を著け鉢を持して其の家に往き、座に就いて坐す。樓延出行して在らず。阿難其の婦に問うて言はく『樓延在りや不や』と。答へて言はく『在らず』と。阿難言はく『衣麁を取り來れ』と。卽ち取りて阿難の前に置く。時に阿難卽ち大價衣を取り、持ち還りて僧伽藍の中に至り、諸の上座の爲めに拭面巾、拭身巾を作る。時に樓延摩羅行いて還る。其の婦此の事を以て夫に語る。其の夫卽ち來りて僧伽藍の中に到り、阿難の所に至りて問うて言はく『汝我が家に至るや』と。答へて言はく『至る』と。『汝所取ありや』と。答へて言はく『所取あり』と。『何が故に麁を取りて好者を取らざる』と。阿難言はく『我れ正さに是くの如きの衣を須ふ』と。諸の比丘是くの如きの念を作さく『白衣親厚、應さに是くの如きの衣を取るべきや不や』と。佛に白す。佛言はく『取るべし。何となれば、是れ親厚なれば應さに取るべし。阿難の樓延摩羅に於けるが如き、應さに取るべし』と。諸の比丘言はく『若し主在らざるも取るべきや不や』と。佛言はく『若し親厚の者は、若しは在るも、若しは在らざるも、應さに取るべきを聽す』と。爾の時佛舍衞國に在しき。請食に就かず。諸佛の常法、若し請に就かされば、後に在りて諸房を按行す。時に異處あるを見

【六】波婆(Pāvā)。
【七】摩羅(Malla)。力士と譯す。
【八】樓延(Roja)。

る。比丘ありて病む、瞻視供養の人あることなし、大小便中に臥す。見已りて比丘の所に詣り、知りて故らに比丘に問ひたまふ『汝何が故に大小便中に臥す、瞻視供養の人ありや不や』と。答へて言はく『無し』と。世尊復問ふ『何が故に無き』と。答へて言はく『我れ無病の時他の病を看ず、是の故に今病むも、人の瞻視供養する者なし』と。佛言はく『汝瞻視せず、病人を供養せず、利なく所得なし。汝曹比丘相看視せざれば、誰か當さに看病すべき者ぞ』と。時に世尊、卽ち病比丘を扶け起し、身の不淨を拭ひ、拭ひ已りて之を洗ひ、洗ひ已りて復爲めに衣を浣ひて曬乾す、故壞の臥草あれば之を棄て、住處を掃除し、泥漿を以て塗灑し、更に新草を敷き、幷びに一衣を敷き、還た病比丘を安臥せしめ已り、復一衣を以て上を覆ひて捨てゝ去りたまふ。時に世尊食し已り、此の因緣を以て比丘僧を集め、向きに請に就かず、後に在りて房處に行き、病比丘を見て自ら事を料理するを以て、具さに諸の比丘に告げ已り『汝曹比丘自今已去、應さに病比丘を看るべし、看ざるべからず、應さに瞻病人と作るべし、瞻病人と作らざるべからず。若し我れを供養せんと欲するあらば、當さに病人を供養すべし。彼の比丘の和尙、同和尙、阿闍梨、同阿闍梨、若しは弟子は、應さに瞻視すべきことを聽す。若し都べて人の看ることあるなければ、衆僧應さに與に病人を瞻るべし、若し肯んぜざれば、應さに次第に差すべし。若し次第に差して肯んぜざれば、法の如く治す。若し比丘なければ、比丘尼隨所に應作を作すべし、比丘に觸るべからず。若し比丘尼なければ、式叉摩那隨所に應作を作すべし、比丘に觸るべからず。若し式叉摩那なければ、沙彌應さに作すべし。若し沙彌なければ、沙彌尼隨所に應作を作すべし、比丘に觸るべからず。若し沙彌尼なければ、優婆塞應さに作すべし。若し優婆塞なければ、優婆私隨所に應作を作すべし、比丘に觸るべからず。病人に五事ハ看難きあり、食すべからざる所に、而も食を欲す。肯て藥を服せず。看病人至心あり、而も如實に語らず。行くべくして行かず、住すべくして住せず。身に苦痛ありて堪忍する

能はず、身少しく堪忍あれば、而も他の作を仰ぐことを作さず。病者是くの如きの五事の難あり。看病人に五法の看易きあり。食すべからざれば食せず。喜んで藥を服す。如實に瞻病者に語る。行くべければ行き、行くべからざれば行かず、住すべければ便ち住す。身に苦痛あるも能く忍び、身少しく能作あるも、便ち病人と作る。是くの如き五事の見易きあり。病人に復五法の看難きあり、四事は上の如し、第五事は、靜坐して內心を止息すること能はず、此の五事ありて看難し。病人五事の見易きあり、四事は上の如し。第五に、能く靜坐して內心を止息す。病人に是くの如きの五事の見易きあり。爾の時比丘あり、拘薩羅國に在りて道路に行く。一小住處に至り、病比丘あり、瞻病者あることなく、大小便中に臥すを見る。彼れ是の念を作さく、『世尊敎あり、「應さに病人を看るべし。看ざるべからず、應さに瞻病人と作るべし、瞻病人と作らざるべからず、應さに病人を供養すべし、病人を供養せざるべからず、是れ我れを供養すと爲す」と。』彼れ卽ち病人を瞻る。病者死す。爾の時比丘、亡者の衣鉢を持ちて、舍衞國祇洹精舍の中に往き、佛所に往いて頭面禮足し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊言はく『善い哉善い哉比丘、汝乃ち能く病比丘を瞻視す、正さに病比丘を供養すべし。瞻病比丘人と作りて病比丘を供養するは、是れ我れを供養すと爲す。彼れ亡比丘の衣鉢坐具針筒を持つて來る、此れ住處現前の僧應さに分つべし』と。爾の時世尊諸の比丘に告げたまはく『亡比丘の衣鉢坐具針筒を持つて、瞻病者に與へよ、應さに白二羯磨を作して是くの如く與ふべし。時に瞻病人、應さに僧中に至り、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮して白すること是くの如し。「大德僧聽け、某甲比丘彼の住處に命過す。衣鉢坐具針筒盛衣貯器は、此の住處の現前僧應さに分つべし」と。是くの如く第二第三說く。僧中當さに、作羯磨に堪能なるものを差すべし、若しは上座、若しは次座、若しは誦律、若しは不誦律なり。作羯磨に堪能なる者は、是くの如くの白を作すべし。「大德僧聽け、某甲比丘命過す、所有の衣鉢坐具針筒盛衣貯器は、此の住

處の現前僧應さに分つべし、若し僧時到らば、僧某甲看病比丘に與ふることを忍聽せよ、白することと是くの如し」と。「大德僧聽け、某甲比丘命過す、所有の衣鉢坐具針筒盛衣貯器は、此の住處の現前僧應さに分つべし。僧今某甲看病比丘に與ふ、誰か諸の長老、某甲看病比丘に、衣鉢坐具針筒盛衣貯器を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざるものは說け」と。』僧已に某甲看病比丘に、衣鉢坐具針筒盛衣貯器を與へ竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。若し僧中羯磨は、一人を差して分たしむ。亡者の衣物羯磨も、此れと異なることなし。唯一句を益して言はく、「僧某甲比丘に衣を與ふ、某甲比丘當さに還た僧に與ふべし、白すること是くの如し」と。

爾の時舍衞國に多智識の比丘ありて死す。彼れに多くの三衣あり、諸の比丘、何者を以て瞻病人に與へんかを知らず、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『彼の亡者の常所持の者を以て與ふべし』と。佛瞻病者に衣を與ふることを聽したまふ。時に比丘あり、小々瞻病す。或は一たび起を扶け、或は一たび臥を扶け、或は一たび楊枝と水とを與ふ。便ち彼の衣鉢を取る。佛言はく『是くの如き小々の瞻病は、便ち彼の衣鉢を取るべからず、五法ありて、看病人、病人の衣物を取るべからず。何等か五なる。一には病者の食ふべきか食ふべからざるかを知らず、食ふべくして與へず、食ふべからずして與ふ。二には病人の大小便唾吐を惡賤す。三には慈愍心あることなし、衣食の爲めの故に。四には病人の爲めに湯藥を經理すること能はず、乃ち差ゆ若しは死するに至る。五には病人の爲めに說法し、病者をして歡喜せしむること能はず、已身善法に於て損減す。是くの如きの五法あらば、病人の衣物を取るべからず。五法あり、看病人に衣物を與ふべし。何等か五。一には病人の食ふべきか食ふべからざるかを知り、食ふべきを能く與ふ。二には病人の大小便唾吐を惡賤せず。三には慈愍の心ありて、衣食の爲めにせず。四には能く湯藥を經理して、乃ち差ゆ若しは死に至る。五には能く病人の爲めに說法し、病者をして歡喜せしめ、己身も善法に於て增益す。是くの如きの五法あらば、應さに病人の衣物を取るべし』と。若し病人終らんと欲する時に臨み、是くの如きの

言あり、『我が此の衆物は、佛に與へ、法に與へ、若しは僧に與へ、若しは塔に與へ、若しは人に與ふ。若し我れ終らば後に與へよ、若し死せざらば我れに還せ』と。佛言はく、『是くの如く與ふべからず、應さに現前僧に分つべし』と。彼の病比丘是くの如くの念を作す、「我れ當さに不好の三衣を受くべし、恐らくは瞻病者取り去らん」と。佛言はく、『是くの如きの念を作すべからず、「我れ不好の三衣を受けん、恐らくは瞻病者取り去らん」と。應さに好者を受くべし』と。時に病人、衣鉢を捉りて餘處に送著す、恐らくは瞻病者取らんと。後に病差えて著くる所なし。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『是くの如きの意を作すべからず、「衣を餘處に送らん、恐らくは瞻病者得ん」と』。爾の時舍衛國に、多智識の比丘ありて命過す。彼の比丘三衣多し。諸の比丘、何等の衣を持つて、瞻病比丘に與へんを知らず。比丘佛に白す。佛言はく、『應さに此の瞻病人の云何を看るべし。若し能く極上に病を瞻ば、應さに上の三衣を與ふべし。若し中は中の三衣を與へ、若し下は下の三衣を與へよ』と。爾の時舍衛國に負債の比丘ありて命過す。諸の比丘、誰か當さに償ふべきかを知らず、佛に白す。佛言はく、『長衣を以て償ふことを聽す、若し物なければ、三衣を賣りて與へよ、餘あれば瞻病人に與へよ。瞻病人、病比丘に問ふことを聽す。「何者か是れ三衣、何者か是れ長衣。汝誰にか負ふ、誰か汝に負ふ。汝應さに誰にか與ふべき」と。若し問はざれば、法の如く治す』と。時に病比丘あり、身瘡を患ひ、衣と臥具とを汚す。佛言はく、『覆身衣を畜ふることを聽す。或は衣毛あれば結莚して瘡に著く。或は時に痛みを患ふ。佛言はく、『大價の好衣を取り、身を覆うて內外に著け、涅槃僧を著くることを聽す。若し白衣の舍に至らば、當さに語りて言ふべし、「我れ瘡を患ふ」と。若し白衣、苦るし但坐せよと言はゞ、應さに涅槃僧を褰げて坐すべし』と。爾の時比丘下脫痔病を患ふ。麁木を以て籌草を作り、痛みを患ふ。佛言はく、『毳若しは劫貝、若しは鳥毛、故衣物を以て、之を拭ふことを聽す』と。用ひ竟りて擧置して浣はず。諸の比丘見て便ち汚賤し、佛に白

す。佛言はく、『用ひ竟りて、擧置して浣はずあるべからず、應さに浣ふべし。彼れ浣ひ已りて絞りて水を去らず、爛壞して虫生ず。佛言はく、『應さに絞りて水を去り、曬して乾かしむべし』と。時に病比丘あり、身瘡を患ひ、衣臥具を汚す。佛に白す。佛言はく、『覆瘡衣を畜ふることを聽す。若し自ら衣なければ、僧中に衣を取りて作ることを聽す。作り已りて彼の比丘、敢て此の住處を移すも、覆瘡衣を餘處に著かず。佛に白す。佛言はく、『移すことを聽す』と。比丘後に瘡差ゆ、持つて本處に還さず。佛に白す。佛言はく、『若し差えなば、應さに浣染治して本處に還すべし、若し還さざれば法の如く治す』と。爾の時六群比丘帳を作る。諸の白衣見て皆共に譏嫌す。『沙門釋子止足あることなし、慚愧を知らず、自ら言ふ「我れ正法を知る」と。是くの如きは何くに正法かある。猶ほ國王大臣の如し』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『帳〔九〕を作るべからず』と。時に比丘あり、露處にありて大小便し形を露はす。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『草若しは樹葉、伊梨延陀、耄羅、耄々羅、若しは氍氀にて覆障を作れ』と。爾の時六群比丘〔一〇〕幰を作る。時に諸の白衣見て共に譏嫌して言はく、『沙門釋子止足あることなし、慚愧を知らず、自ら言ふ「我れ正法を知る」と。是くの如きは何くに正法かある、猶ほ國王大臣の如し』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『幰を作るべからず』と。時に諸の比丘、道を行いて熱きを患ふ、佛に白す。佛言はく、『草若しは葉、十種衣中の若しは一々の衣を以て、覆障を作ることを聽す』と。爾の時衆僧複衣を得たり。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。時に比丘三衣を持つことを知らず。佛言はく、『應さに受持すべし。若し疑はゞ、應さに捨て已りて更に受くべし。若し三衣ありて受持せざれば突吉羅なり。佛是くの如く語りたまふ。『應さに三衣を受持すべし』と。彼れ小々の衣を受けて三衣に當つ。若しは拭身巾、若しは拭面巾、臥氈なり、佛に白す。佛言はく、『是くの如きの小々の衣を持ちて、三衣に當つべからず』と。佛言はく、『長さ四肘、廣さ二肘の衣を以て安陀會を作り、廣さ三肘、長さ五肘にて鬱多羅僧を作る

【九】帳は、帷とあるから、幕の種類であらう。

【一〇】幰は、車幔とあり、車上に布帛を張ることである。

ことを聽す。僧伽梨も亦是くの如し』と。時に諸の比丘の衣壞る。佛言はく、『補治することを聽す』と。彼れ云何が補治せんを知らず。佛言はく、『納衣を著くることを聽す、縦を重ね邊を編し、孔の大小方圓に隨つて、補せよ』と。時に諸の比丘、割截衣を著けずして聚落に入る。白衣見已りて皆譏嫌して言はく、『沙門釋子止足あることとなし、慚愧を知らず、自ら言ふ「我れ正法を知る」と。是くの如きは何くに正法かある、割截衣を著けずして聚落に入る、猶ほし外道の如し』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『割截衣を著けずして聚落に入るべからず。五事の因緣ありて僧伽梨を留む、若しは恐怖を疑ひ、若しは雨ふるを疑ひ、若しは僧伽梨を作りて未だ成らず、若しは浣ひ若しは染め、若しは色を壞し若しは堅く擧す。是くの如きの五事の因緣あれば僧伽梨を留む』と。爾の時比丘、反へして僧伽梨を著けて聚落に入る。餘の比丘見て喜ばず、佛に白す。佛言はく、『反へして衣を著け、聚落に入るべからず』と。比丘畏愼して、聚落外にて、反へして衣を著けず。風塵の日に曝らすに、蟲鳥汚穢す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『聚落外は、反へして衣を著くることを聽す』と。爾の時比丘〔一〕縵衣を得たり、廣長足る。卽ち截割して衣を作る。少しく〔二〕帖葉衣を作らんと欲す。佛に白す。佛言はく、『作ることを聽す』と。爾の時比丘縵衣を得たり、廣長足る、五納衣を作らんと欲す。佛に白す。佛言はく、『作ることを聽す』と。時に諸の比丘、衣犯して捨つ。佛に白す。佛言はく、『捨つることを聽す。若しは僧中、若しは衆多人、若しは一人に於て捨つべし。然る後淨施せよ。捨てざるべからず、應さに捨てゝ然る後に遣はすべし、捨てずして遣はすべからず』と。彼の比丘捨てず、便ち受用して三衣を作り、波利迦羅衣を作り、故壞故燒は用ひて非衣を作り、若しは數々著く。『若し捨てざれば、受用して三衣波利迦羅衣を作り、故壞故燒は用ひ非衣を作り、若しは數々著くべからず』と。諸の比丘是くの如きの念を作す。『波利迦羅現在前せざれば、尼薩耆を得るや不や』と。佛言はく、『不犯なり』と。彼れ衣を捨てずして便ち著く。佛

【一】縵衣とは、一幅織成の衣で、つまり割截衣に對して言ふのである。割截衣は、小さく切りて縫合したもの、縵衣は、割截せず、條隔のない、織つたまゝのものである。

【二】帖葉衣とは、其の餘りしもので、小さい帖や葉を作ることである。帖は壞れたところや其の他必要なところへ當てるキレで、衣はキレといふ廣い意味、葉は小さいキレに切つて置くことである。

に白す。佛言はく『捨てずして便ち著くべからず』と。彼の比丘疑ひ、敢て捨墮衣を以て人に與へず、用つて被衣を作る。佛に白す。佛言はく『人に與ふることを聽す、被衣を作ることを聽す。時に比丘畏愼して、燒衣奪衣漂衣を敢て著けず。佛に白す。佛言はく『著くることを聽す』と。時に比丘、衣を捨てずして、便ち他に與へて貿易す。佛に白す。佛言はく『衣を捨てざるべからず、應さに捨てゝ然る後に貿易すべし』と。諸の比丘是くの如く念ず、「衆僧の衣、十日を過ぐれば捨墮を犯すや不や」と、佛に白す。佛言はく『不犯なり』と。時に比丘、衣を淨施して主に還さず、突吉羅を犯す。若し遮して與へざれば突吉羅なり。時に諸の比丘、衣を染めず、色を壞せずして白衣の舍に寄す。白衣取りて著く。佛に白す。佛言はく『染め及び色を壞せずして、便ち白衣の舍に寄すべからず、應さに染め色を壞し、沙門衣と作して、然る後に白衣の舍に寄すべし』と。爾の時比丘、上狹下廣衣を得たり、受用して僧祇支を作る。佛に白す。佛言はく『作ることを聽す』と。爾の時異住處の現前僧、大に可分の衣物を得たり。六群比丘界外に出でゝ共に分つ。諸の比丘佛に白す。佛言はく『界外に出でて、分つべからず』と。時に長老比丘あり、智識多し。人間に遊行して、大に現前僧の分つべき衣物を得たり、分ち離し、彼れ畏愼す。「佛界外に出でゝ衣を分つことを聽したまはず」と。諸の比丘此の事を以て佛に白す。佛言はく『應さに是くの如く唱令して言ふべし「來りて某甲某甲の處に向へ、衣を分たん」と。若し可分衣は應さに分つべし』と。彼れ何の時に分たんかを知らず。『應さに相を作すべし、若しは時を量り、影を量り、若しは烟を作し、若しは貝を吹き、若しは皷を打ち、若しは揵槌を打ち、若しは時至ると白す。若しは自ら來り、若しは人を遣はして來らしめ、應さに與に分つべし』と。彼の比丘臥具を轉易す。佛言はく『移し易ふべからず』と。或は房あり、臥具多し。或は房あり臥具少し。佛言はく『自今已去、舊住人、若しは摩々帝、若しは經營人に、次ぎに房を得る者は、應さに問うて然る後に移轉すべきことを聽す』と。彼の比

丘臥具を移し已り、去る時本處に還復せず、餘の比丘復用ふ。佛言はく、『應さに臥具を復し、本處に著いて去るべし、若しせざれば法の如く治すべし』と。時に房舍崩壞す。諸の比丘畏愼して、敢て臥具を移轉せず。佛是くの如きの言あり、「臥具を移轉すべからず」と』。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し房舍崩壞すれば、臥具を移轉すべし』と。彼れ臥具を移轉して餘房に著く、餘房に敢て臥せず、便ち爛壞す。佛に白す。佛言はく、『應さに臥時に用ふべし』と。佛用ひて臥すことを聽したまふ。諸の比丘便ち脚を洗はず、脚を拭はず、用ひて襯體衣と作す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『脚を洗はず、脚を拭はず、用ひて襯體衣と作すべからず』と。佛既に襯體衣と作すことを聽したまはず、諸の比丘畏愼して、敢て手脚に近けず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『腋より膝に至るまでは、體に襯すべからず』と。時に諸の白衣、比丘に襯體衣を施す、比丘畏愼して敢て受けず。佛に白す。佛言はく、『應さに檀越施衣に隨ふべし、應さに受くべし』と。彼れ房舍を壞して已に治するも、臥具を還復せず。比丘佛に白す。佛言はく、『若し房舍已に治すれば、應さに臥具を還復すべし、若し復せざれば、應さに法の如く治すべし』と。彼の諸の比丘、此の住處より定臥具を移して彼の處に至る。佛に白す。佛言はく、『此の住處の定臥具を移して彼の處に至るべからず』と。國土の人民反亂の恐怖あり、住處亦壞す。彼れ畏愼して敢て臥具を移さず。『佛此の住處の定臥具を移して、彼の處に至ることを聽したまはず』と。彼諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し是くの如きの事あらば移すことを聽す』と。彼れ臥具を移す時、體に襯することを畏れて敢て藏覆せず。言はく、『世尊襯體衣と作すことを聽したまはず』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『隨所に方便覆藏して應さに移すべし。若し餘人驅り起たしむるとも起つべからず、亦他を驅りて起たしむべからず。若し餘の比丘あり、能く愛護せば應さに與ふべし。若の復國土還復し、人民還た安んじ、房舍治め竟りて、臥具を還復せず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し爾臥具を還復せざれば、當さに法の如く

治すべし』と。爾の時舍利弗、上色の碎段の衣財を得、五納衣を作らんと欲す。佛に白す。佛言はく、『作ることを聽す』と。爾の時住處あり、現前僧大に可分衣物を得たり。六群比丘各相推倚し、肯て藏擧せず、遂に失ひ去る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『見るあるに及ぶ者、應さに收擧すべきことを聽す』と。時に客比丘來り、衣物を移して餘房に著く、堅牢ならず。佛に白す。佛言はく、『別房に庫藏屋を結作することを聽す。白二羯磨して房名を唱へよ、若しは溫室、若しは重屋、若しは經行屋なり。是の中能く羯磨を作すに堪能なるものを差し、上の如く是くの如きの白を作す。「大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧某甲の房を結び、庫藏屋を作ることを。白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、僧某甲の房を結び、庫藏屋を作る。誰か諸の長老、僧某甲の房を結び、庫藏屋を作ることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に某甲の房を結び、庫藏屋を作ることを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。時に彼の庫藏屋人の守るなし、堅牢ならず、守物人を差すことを聽す、白二羯磨して差す。衆中當さに羯磨を作すに堪能なるものを差すべし。上の如く是くの如きの白を作す。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧某甲比丘を差して守物人と作すことを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、僧某甲比丘を差して守物人と作す、誰か諸の長老、僧某甲比丘を差して守物人と作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に某甲比丘を差して守物人と爲すことを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。若し比丘守物人と作ることを肯んぜざれば、福饒に粥を與ふべし。若し故ほ肯んぜざれば、一切所受の衣食、分ちて應さに二分を與ふべし。若し故ほ復肯んぜざれば、當さに法の如く治すべし』と。爾の時毘舍佉無夷羅母大に浴衣を作り、人を遣はして、送りて精舍の中に至らしむ。諸の比丘當さに云何がすべきかを知らず、佛に白す。佛言はく、『上座の次に隨つて分つべし。若し足らざれば、應さに次を識るべし。更に得ば、應

さに次を續いで與ふべし』と。彼れ時に大貴價衣を得、次を續いで與ふ。佛言はく、『貴價衣を以て、次を續いで與ふべからず、應さに上座より與ふべし。若し得ること等しからざれば、應さに僧中に可分衣物を取り、足して等しからしめて之を分つべし。爾の時〔三〕僧鴦伽那羅衣を得たり、比丘佛に白す。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。時に比丘、僧の覆身衣を著けて、溫室食堂の中に至る。羹飯汚泥し烟熏坌塵す。佛言はく、『僧の覆身衣を著けて、溫室食堂の中に至るべからず』と。時に諸の比丘、冬月寒を患ひ、佛に白す。佛言はく、『著くることを聽す、當さに愛護すべし、汚泥せしむること勿れ』と。時に比丘卽ち著けて厠上に至る、大小便汚泥して臭穢なり、佛に白す。佛言はく、『著けて厠上に至るべからず』と。時に比丘、衣を送りて房に還り、大小便急なり、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『厠邊若し衣架、若しは龍牙杙あり、若しは屋あり、若しは樹、若し草あり、若しは石あらば、衣を持つて上に著くことを聽す。若し天雨ふりて漬さば、應さに無雨の處に著くべし。若し雨傍より來りて漬さば、應さに著くべし、好く捉りて厠上に觸れしめず、厠に上り、正さに脚を安んじて好く蹲まり、衣を汚さゞらしめよ』と。彼の比丘、衣を著けて經行處に至る。草著き虫著き、塵坌露漬して僧衣を壞す、比丘佛に白す。佛言はく、『僧衣を著けて經行處に至るべからず』と。爾の時上座の病比丘あり、羸老にして遠道より來り、患苦あり『著くることを聽す、臥氈を敷き、上に置いて愛護して臥せ』と。爾の時比丘あり、異住處に在り、夏安居を結し已り、復餘の住處に於て住す。彼れ當さに何れの住處に於て、安居物を取るべきかを知らず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『住日多き處に取るべきことを聽す。若し二處倶に等しければ、各半ばを取れ』と彼の比丘、夏安居に食を分つ、佛に白す。佛言はく、『分つべからず、施に隨つて應さに食すべし』と。爾の時世尊、毘蘭若婆羅門の請を受け竟り、阿難に告げて言はく、『汝往いて毘蘭若婆羅門に語れ、「佛汝の三月請を受け、夏安居竟る、今人間に遊行せんと欲す」と』。阿難世尊の敎を受け、

【三】鴦伽那羅衣詳ならず。

卽ち毘蘭若の所に往き語りて言はく『世尊是くの如く語りたまふ「汝の夏三月の安居の請を受けて已に竟る。今人間に遊行せんと欲す」と』。時に毘蘭若、阿難の語を聞き已り、方さに自ら憶す。「我れ沙門瞿曇及び比丘僧を請じ、九十日中竟に供養せず」と。時に毘蘭若卽ち世尊の所に往き、恭敬問訊し已りて、却いて一面に坐す。時に世尊無數の方便を以て爲めに說法し歡喜せしむ。毘蘭若佛の說法を聞き、極めて大に歡喜し、卽ち佛に白して言さく『唯願はくは世尊及び比丘僧、更に九十日の請を受けたまへ』と。佛答へて言はく『已に汝の九十日の請を受け已る、今人間に遊行せんと欲す』と。復佛に白して言さく『願はくは、我が明日の請食を受けたまへ』と。世尊默然として請を受けたまふ。時に毘蘭若、佛の請を受けたまふを聞き已り、卽ち坐より起ち、歡喜して佛を遶りて去る。卽ち其の夜に於て、種々の飮食を辦具し、明日淸旦「時到る」と白す。爾の時世尊、五百の比丘僧と倶に、衣を著け鉢を持し、往いて其の家に詣り、座に就いて坐す。時に毘蘭若、種々の多くの美飮食を以て、佛及び比丘僧に供養す、食已りて鉢を捨て、三衣を以て世尊及び比丘僧に布施し、人ごとに兩端疊を與へて夏衣と爲す。比丘受けずして言はく『佛未だ我曹に夏衣を受くることを聽したまはず』と。佛に白す。佛言はく『受くることを聽す』と。爾の時六群比丘跋難陀、佛の夏衣を受くることを聽したまふと聞き、春夏冬一切の時に於て、夏衣を求索し、夏安居未だ竟らざるに、亦衣を乞ひ衣を受く。時に跋難陀釋子一住處に在りて安居し、異住處あり、大に夏安居衣を得ると聞き、卽ち彼の住處に往きて問うて言はく『汝曹夏衣を分つや未だしや』と。答へて言はく『未だ分たず』と。語りて言はく『持ち來れ、汝の分を與へよ』と復餘處に往き、問うて言はく『汝夏衣を分つや未だしや』と。答へて言はく『未だ分たず』と。語りて言はく『持ち來れ、汝の分を與へよ』と。時に跋難陀多處にありて衣を分ち、多分衣を得、持ち來りて祇桓に入る。餘の比丘見て問うて言はく「世尊制して三衣を畜ふることを聽したまふ、此の多衣は、是れ誰の衣ぞ

や』と。彼れ言はく、『我れ多住處に於て衣を分ち、故に大に此の多衣を得たり』と。其の中少欲知足にして頭陀を行じ、慚愧を知り、戒を學せんことを樂ふ者あり、六群比丘跋難陀を嫌責して言はく、『世尊、比丘の夏衣を受くることを聽したまふ、汝云何ぞ春夏冬一切の時に於て夏衣を求索し、夏安居未だ竟らざるに亦衣を乞ひ、衣を受け、此處の安居に衣分を受け、復餘處に於て衣分を受くるや』と。諸の比丘世尊の所に往き、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時比丘僧を集め、無數に方便して跋難陀を呵責し、語りて言はく、『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり。跋難陀、我れ比丘に夏衣を畜ふることを聽す、汝云何ぞ春夏冬一切の時に於て夏衣を求索し、安居未だ竟らざるに、亦衣を乞ひ衣を受け、此の安居に於て衣分を受け、復異處に於て衣分を受くるや』と。無數の方便を以て六群比丘跋難陀を呵責し已り、諸の比丘に告げたまはく『自今已去、一切の時に於て、春夏冬に夏衣を求索し安居未だ竟らざるに亦衣を乞ひ衣を受くべからず。亦此處の安居に衣分を受け已り、復餘處に於て衣分を受くべからず、若し受くる者は、應さに法の如く治すべし』と。爾の時比丘あり、未だ夏衣を分たざるに便ち去る。後比丘夏衣を分つ。彼の比丘行いて還り、問うて言はく、『夏衣分つや未だしや』と。答へて言はく『已に分つ』と。問うて言はく、『我が衣分を取るや不や』と。答へて言はく、『取らず』と。時に彼の比丘、餘の比丘を瞋責して言はく、『未だ衣を分たざるに我れ出で行く、後に衣を分つ。我れ此に在りて安居す、而も我が衣分を取らず』と。諸の比丘是くの如きの念を作す。『我れ分衣を成ずるや不や』と。往いて佛に白す。佛言はく、『分衣を成ず。應さに相待つべし、亦は應さに後人に囑授して夏衣分を受くべし』と。時に比丘あり、未だ衣を分たざるに便ち去り、漫に後人に囑授し、我が衣分を受けしむ。後に諸の比丘衣を分つ。問ふ『誰か某甲比丘の爲めに衣分を取る』と。時に爲めに衣分を取る者なし。彼の比丘還りて問ふ『衣を分つや未だしや』と。

答へて言はく、『已に分つ』と。問ふ『我が分を取るや不や』と。答へて言はく、『取らず』と。彼の比丘、餘の比丘を瞋責して言はく、『未だ衣を分たざるに我れ出でゝ行く、後人に囑授して、我が爲めに衣を取らしむ、我れ此に在りて安居す、而かも衣を分ちて我が爲めに分を取らざるや』と。諸の比丘、是くの如きの念を作す、「分衣を成ずとせんや不や」と。往いて佛に白す。佛言はく、『分を成ず、應さに還るを待つべし、亦的に一人に囑授すべし』と。時に比丘あり、未だ衣を分たざるに出で行く、一比丘に囑授し、「我が爲めに夏衣を取れ」と。時に比丘衣を分つ。問うて言はく、『誰か某甲比丘の衣分を取る』と。囑授を受くる者忘れて取らず。諸の比丘即ち衣を分つ。彼の比丘還りて問うて言はく、『夏衣を分つや未だしや』と。答へて言はく、『已に分つ』と。問うて言はく、『我が分を取るや不や』と。答へて言はく、『取らず』と。彼の比丘、餘の比丘を瞋責して言はく、『未だ衣を分たざるに我れ出て行く、後一比丘に囑授して我が衣分を取らしむ、我れ此に在りて安居す、而も我が爲めに衣分を取らず』と。諸の比丘、分衣を成ずるや不やを知らず、往いて佛に白す。佛言はく、『分を成ず、是れ忘るゝ者の過なり』と。時に諸の比丘、夏安居食を留む。佛に白す。佛言はく、『留むべからず、應さに施に隨つて受くべし』と。爾の時舍利弗・目連、般涅槃す、多く可分衣物あり、現前僧應さに分つべし、彼の比丘留めて安居を過ぐ、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『留むべからず、此の衣は現前僧應さに分つべし。彼れ時に一檀越あり、爲めに塔に施し、僧と僧伽藍の房舍に施し、浴池に施さんと欲す。若しは初生兒の爲めに、若しは初剃髮の爲めに、若しは髮を長じ、若しは新舍に入り、若しは亡人の爲めに會を作し、現前僧大に可分衣物を得たり。諸の比丘留めて夏安居に至る。比丘往いて佛に白す。佛言はく、『留むべからず、此れは是れ非時衣、現前僧應さに分つべし』と。爾の時一比丘の住處あり、大に夏安居の衣物を得たり、彼れ是くの如きの念を作す、「我れ當さに云何がすべき、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、「若し一比丘あ

りて安居す、大に夏安居の衣物を得ば、彼の比丘應さに作心して念じて言ふべし、『此れは是れ我が物、若しは受け、若しは受けず」と。餘の比丘ありて來る、分を得べからず』と。爾の時比丘大に可分衣物を得たり。僧破して二部と爲る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『應さに分ちて二分と爲すべし』と。若し未だ可分衣物を得ず、僧破して二部と爲る。佛言はく、『應さに檀越に問ふべし、「當さに誰にか與ふべき」と。若し彼れ某甲某甲上座に與ふと言はゞ、卽ち應さに彼の語に隨ひ、上座所在の處に與ふべし。若し彼れ知らずと言ひ、若しは俱に與へよと言はゞ、應さに分ちて二分と作すべし』と。爾の時諸の比丘、已得衣未得衣あり、僧破して二部と爲る、已得衣は應さに分ちて二分と作すべし、未得衣は應さに檀越に問ふべし、『當さに誰にか與ふべき』と。彼れ若し「某甲某甲上座に與ふ」と言はゞ、卽ち彼の語に隨ひ、上座所在の處に與ふべし。若し彼れ「知らず」と言ひ、若しは「俱に與へよ」と言はゞ、應さに分ちて二分と爲すべし』と。爾の時、諸の比丘可分衣物を得たり。比丘あり、此の部より彼の部に往く。彼れ分を與ふべからず。若し未得衣物は、比丘あり、此の部より彼の部に往かば、分を與ふべからず。爾の時比丘あり、此の部より、彼の部に往き、未だ至らずして便ち死す。諸の比丘、其の衣鉢は誰に與ふべきかを知らず、佛に白す。佛言はく、『其の所欲に隨ひ、往處に當さに與ふべし』と。爾の時比丘あり、此の部より彼の部に往き、至りて便ち死す。諸の比丘、其の衣鉢は誰に與ふべきかを知らず、佛に白す。佛言はく、『彼の所往の部に隨つて應さに與ふべし』と。爾の時比丘あり、擧せられ已りて命過す。諸の比丘、其の衣鉢は誰に與ふべきかを知らず、佛に白す。佛言はく、『共同する所の羯磨擧僧に隨つて與ふべし』と。爾の時住處の僧破して二部と爲る。檀越あり、此の二部の僧を請じ、一處に飲食し、及び衣を布施し、縷を布施す。諸の比丘、誰か衣を得べき、誰か縷を得べきかを知らず、佛に白す。佛言はく、『應さに檀越に問ふべし、「衣は誰にか與へ、縷は誰にか與ふ」と、若し「某甲某甲上座に與ふ」と

言はゞ、應さに彼の語に隨ひ、所在處の上座に與ふべし。若し「知らず」と言ひ、若しは「倶に與へよ」と言はゞ、應さに分ちて二分と作すべし』と。爾の時衆僧夏安居處を得たり。僧破して二部と爲る、佛に白す。佛言はく『應さに人の多少を數へて分つべし』と。若し未だ安居衣を得ず、僧破して二部と爲る、佛に白す。佛言はく『應さに人を數へて分つべし。若しは夏衣を得、若しは未だ夏衣を得ず、僧破して二部と爲る、應さに人を數へて分つべし』と。時に比丘あり、夏衣を得て餘部に往く。佛言はく『與ふべし』と。若し未だ夏衣を得ずして餘部に往かば、佛言はく『應さに與ふべし』と。若しは未だ夏衣を得ず、若しは已に夏衣を得て餘部に往かば、佛言はく『應さに與ふべし』と。爾の時一居士あり、比丘を住處に集め、諸在の僧に飯食を供養し、衣を以て布施す。諸の比丘云何せんを知らず、佛に白す。佛言はく『八種の施衣あり、若しは比丘僧に與へ、若しは比丘尼僧に與へ、若しは二部僧に與へ、若しは四方僧に與へ、若しは界內僧に與へ、若しは同羯磨僧に與へ、若しは名字を稱して與へ、若しは一人に與ふ』と。佛言はく『若し比丘僧に與ふれば、比丘僧應さに分つべし。若し乃至一人に與ふれば、應さに一人に屬すべし』と。爾の時諸の比丘、冬月寒を患ひ、佛に白す。佛言はく『帽を著くることを聽す』と。露地に坐して背痛を患ふ。佛言はく『禪帶を作ることを聽す』と。爾の時比丘身に瘡を患ひ、若しは汚臭す。佛言はく『拭身巾を作ることを聽す、若し面汚るれば、拭面巾を作ることを聽す、若し眼涙を患ふれば、捫涙巾を作ることを聽す』と。爾の時畢陵伽婆蹉大貴價疎衣を得たり、彼れ夏衣を作らんと欲して畜ふ。佛に白す。佛言はく『淨施して持つことを聽す。淨施に二種あり、一には眞實淨施、二には展轉淨施なり。眞實淨施とは、「大德一心に念ず、我れに此の長衣あり、未だ淨施せず今淨の爲めの故に、捨てゝ大德に與ふ、眞實淨の爲めの故」と。展轉淨施とは言はく、「大德一心に念ず、此れは是れ我が長衣、未だ淨を作さず、淨め爲めの故に大德に施與す、展轉淨の爲めの故に」

と。彼の淨を受くる者、即ち應さに是くの如きの言を作すべし、「大德一心に念ぜよ、汝淨衣あり、未だ淨を作さず、淨の爲めの故に我れに與ふ、我れ今之を受く」と。受け已りて語りて言ふべし、「汝誰にか施與する」と。彼れ應さに言ふべし、「某甲に施與す」と。淨を受くる者、應さに是くの如く言ふべし、「大德一心に念ぜよ、汝の此の長衣未だ淨を作さず、淨の爲めの故に我れに施與す、我れ今之を受く、受け已りて汝今某甲に施與す、是の衣某甲已に有つ、汝某甲の爲めに善く護持して著け、因緣に隨つて作せ」と。眞實淨施とは、應さに主に問うて、然る後に著くることを得べし。展轉淨施とは、若しは問ひ、若しは問はず、意に隨つて著けよ」と。爾の時比丘、使を遣はして某比丘に衣を[一四]借與す、彼の親厚意を作して衣取る、取るべきや不や。佛言はく、『親厚意を作して取るべからず』と。若し道路に至り、親厚意を作して取るべきや不や。佛言はく、『取るべからず』と。若し彼れに至り、親厚意を作して取るべきや不や。佛言はく、『取るべからず』と。若し遣衣主の親厚意を作して衣を取る、取るべきや不や。佛言はく、『應さに取るべし』と。若し道路に至りて應さに取るべきや不や。佛言はく、『取るべし』と。若し彼れに至りて取るべきや不や。佛言はく、『取るべし』と。遣す所の借與衣の比丘命過す。即ち彼の命過比丘の衣と作して受く、受くべきや不や。佛言はく、『受くべからず』と。若し道路に至りて受くべきや不や。佛言はく、『受くべからず』と。若し彼れに至りて受くべきや不や。佛言はく、『受くべからず』と。若し人を遣はして比丘に衣を借與する衣主命過するに、彼の比丘應さに即ち命過比丘衣となして受くべきや不や。佛言はく、『受くべし』と。若し道路に至りて受くべきや不や。佛言はく、『受くべし』と。若し彼れに至りて受くべきや不や。佛言はく、『受くべし』と。爾の時比丘あり、衣を遣はして某甲に與ふ。彼れ遣衣主の親厚意を作して衣を取らしむ、取るべきや不や。佛言はく、『取るべからず』と。若し道路に至りて取るべきや不や。佛言はく、『取るべからず』と。若し彼れに至りて取るべきや不や。佛言はく、『取る

【一四】借與は、貸與のこと。

べからず』と。彼の比丘、所遣與衣の比丘に親厚意を作して衣を取る、取るべきや不や。佛言はく、『取るべし』と。若し道路に至りて取るべきや不や。佛言はく、『取るべし』と。若し彼れに至りて取るべきや不や。佛言はく、『取るべし』と。彼の所遣衣主比丘命過す。彼の比丘即ち命過衣と作して受く、受くべきや不や。佛言はく、『受くべからず』と。若し道路に至りて受くべきや不や。佛言はく、『受くべからず』と。若し彼れに至りて受くべきや不や。佛言はく、『受くべからず』と。若し所遣與比丘命過す、彼の比丘、彼の命過衣となして受けんに受くべきや不や。佛言はく、『受くべし』と。若し道路に至りて受くべきや不や。佛言はく、『受くべし』と。若し彼れに至りて受くべきや不や。佛言はく、『受くべし』と。爾の時居士あり、衣を持ち來りて僧伽藍の中に至りて言はく、『某甲比丘に與ふ、此の衣大德に與ふ』と。彼の比丘言はく、『我れ須ひず』と。卽ち衣を持つて比丘の前に置いて去る。彼の比丘畏愼あり、云何せんを知らず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『施主の爲めの故に掌錄することを聽す、若し須ふる時は、受持することを聽す。(衣揵度具足し竟る)

四分律卷第四十一

巻の第四十二（三分の六）

藥揵度の一

爾の時、佛、波羅㮈國に在しき。時に五比丘世尊の所に往き、頭面禮足して却いて一面に住し、佛に白して言さく、『大德、當さに何の食をか食すべき』と。佛言はく、『乞食して五種食を食することを聽す』と。爾の時比丘乞食して飯を得。佛言はく、『食することを聽す』と。種々の飯・粳米飯・大麥飯・〔一〕床米飯・粟米飯・俱跋陀羅飯を得たり。佛言はく、『是くの如くの種々の飯を食することを聽す』と。麨を得たり、佛言はく、『種々の麨を食することを聽す』と。乾飯を得たり、佛言はく、『種々の乾飯を食することを聽す』と。魚を得たり、佛言はく、『種々の魚を食することを聽す』と。羹を得たり、佛言はく、『種々の羹を食することを聽す』と。〔二〕修歩を得たり、佛言はく、『食することを聽す』と。乳を得たり、佛言はく、『種々の乳を食することを聽す』と。酪を得たり、佛言はく、『種種の酪を食することを聽す』と。酪漿を得たり、佛言はく、『種々の酪漿を飲むことを聽す。〔三〕吉羅々を得たり、佛言はく、『食することを聽す』と。蔓菟を得たり、佛言はく、『種々の蔓菟を食することを聽す』と。茶を得たり、佛言はく、『種々の茶を食することを聽す』と。佉闍尼食を得たり、佛言はく、『種々の佉闍尼食を食することを聽す』と。佉闍尼食とは、根食・莖食・葉食・華食・菓食・油食・胡麻食・石蜜食・蒸食なり。

爾の時、世尊、波羅㮈國に在しき。時に五比丘即ち坐より起ち、前んで佛足を禮し、却いて一面に住す。佛に白して言さく、『當さに何の藥をか服すべき』と。佛言はく、『腐爛藥を服することを聽す、病比丘因緣あれば、盡形壽應さに服すべし』と。爾の時世尊繩床の中に在す、時に病比丘あり、醫呵梨を服せしむ、佛言はく、『病比丘因緣あれば、盡形壽呵梨勒を服することを聽す』と。爾

〔一〕床は、高粱とあり。俱跋陀羅は、穇米飯なりと『名義標釋』にある。

〔二〕修歩は、『善見論』によるに青豆羹とあり。

〔三〕吉羅々は、竹箏とあり、筍である。

の時佛舍衛國に在しき。時に比丘あり風を患ふ。醫酢麥汁を服せしむ。佛言はく、『服することを聽す』と。云何が作らんかを知らず。佛言はく、『淨人器を淨洗し、麥を漬し、乃至爛せしめ、漉して汁を取りて飲ましむ。若し麥汁臭ければ應に覆すべし、若し汁滓俱に出づれば、漉器を作ることを聽す』と。云何が器を作るかを知らず。佛言はく、『若しは銅、若しは木、若しは竹にて漉器を作ることを聽す。漉水筒の如く作れ。若しは三角、若しは大、若しは小なり。若し麥中にて燥けば、淨人をして更に水を益さしめよ』と。時に病比丘、多人の前に在りて麥漿を飲む。餘の比丘見て皆共に之を惡穢す。佛言はく、『多人の前に在るべからず、應さに屛處に在りて飲むべし』と。時に一切の僧皆須ふ。佛言はく、『應さに一切共に飲むべし』と。時に諸の比丘あり、各各別に器を用ひて飲む、衆器皆臭し。佛言はく、『各別器にて飲むべからず、共に一器を用ひて飲むべし』と。時に比丘あり、飲み已りて器を洗はず、餘の比丘に與ふ。佛言はく、『爾るべからず、應さに器を洗ひ已りて、餘の比丘に與ふべし』と。爾の時佛舍衛國に在しき。比丘ありて吐下す。粥を煮る比ひ日時已に過ぐ。佛言はく、『完全麥若しは完全稻穀を以て、煮て熟せしむることを聽す、破漉汁を飲ましむる勿れ』と。爾の時病比丘あり、醫鞞醯勒を服せしむ。佛言はく、『服することを聽す』と。醫阿摩勒を服せしむ。佛言はく、『服することを聽す、若し比丘病の因緣あれば、盡形壽服せよ』と。爾の時病比丘あり、醫蓽羅を服せしむ、佛言はく、『比丘病の因緣あれば、盡形壽服することを聽す』と。爾の時病比丘あり、醫菓藥を服せしむ、佛言はく、『服することを聽す、若しは是れ常に食する者に非らず、比丘病の因緣あれば、盡形壽應さに服すべし』と。爾の時病比丘あり、大五種根藥を須ふ。佛言はく、『服することを聽す』と。小五種根藥を須ふ、佛言はく、『服することを聽す。比丘に病の因緣あれば、盡形壽服せよ』と。爾の時病比丘あり、醫[四]質多羅藥を服せしむ。佛言はく、『病比丘因緣あれば、盡形壽服することを聽す』と。爾の時病比丘あり、醫廁沙藥を服せしむ。佛言

【四】 質多羅藥とは、印度にて用ひられし藥の名、如何なる藥か詳でない。廁沙も同じ。以下藥名、今日より知るべきもの少し。

はく、『病比丘因縁あれば、盡形壽服することを聽す』と。此の中の罽沙とは、根莖葉花果の罽沙なり。爾の時病比丘あり、醫婆梨婆婆藥を服せしむ。佛言はく、『病比丘服することを聽す』と。婆梨婆婆とは、根莖葉花果若しは堅靭なる者なり、式渠も亦是くの如し、帝莧も亦是くの如し。爾の時病比丘あり、醫蓽茇椒を服せしむ。佛言はく、『比丘に病の因縁あれば、盡形壽服することを聽す』と。爾の時病比丘、種々細末藥を用ひて洗ふ。佛言はく、『種々の細末藥を用ふることを聽す』と。是の中の細末藥とは、胡桐樹末、馬耳樹末、舍摩羅樹末にて洗ふ。若しは自ら作り、若しは更互に作る、杵臼を須ふ。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。欽賓徙掃帚を須ふ。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。時に諸の比丘畏愼し、敢て塗香を以て末藥中に著けず。佛言はく、『著くることを聽す』と。時に末藥、器の盛るなし。佛言はく、『瓶を作ることを聽す』と。若し坌塵を患ふ、『蓋を作ることを聽す、』と。若し堅牢ならしめんと欲すれば、『當さに床下に著き、若しは壁上の象牙杙上に串すべし』と。爾の時病比丘、麁末藥を以て身を洗ひ痛みを患ふ。佛言はく、『細末、若しは細泥、若しは葉、若しは華、若しは菓より取り、病者をして藥を得しむることを聽す』と。是の中の病者とは、若しは體に瘡、若しは癬、若しは瘑、若しは疥癩、乃至身臭なり。爾の時比丘病む、鹽を須ひて藥と爲す。佛言はく、『服することを聽す。是の中の鹽とは、明鹽・黑鹽・丸鹽・樓魔鹽・支頭鞞鹽・鹵鹽・灰鹽・新陀婆鹽・施盧鞞鹽・海鹽なり。若し比丘病の因縁あれば、盡形壽服することを聽す』と。爾の時病比丘灰藥を須ふ。佛言はく、『灰藥を用ふることを聽す、是の中の灰藥とは、薩闍灰・賓那灰・波羅摩灰なり。比丘病の因縁あれば、盡形壽用ふることを聽す』と。爾の時病比丘、闍婆藥を須ふ。佛言はく、『用ふることを聽す。是の中の闍婆とは、薑牛・薑莪・婆提尸婆黎陀步・梯夜婆提・薩闍羅婆なり。比丘病の因縁あれば、盡形壽應さに服すべし』と。爾の時比丘病み、眼藥を須ふ。佛言はく、『用ふることを聽す。是の中の眼藥とは、陀婆闍那、耆羅闍那なり。比丘に病の因縁あれば、盡形

壽應さに服すべし』と。爾の時比丘眼に白瞖ありて生ず。人血を須ふ。佛言はく、『用ふることを聽す』と。爾の時比丘、眼白瞖を患ふ、人骨を須ふ。佛言はく、『用ふることを聽す』と。爾の時比丘、眼白瞖を患ふ、細軟髪を須ふ、燒末を眼中に著くることを聽す』と。爾の時畢陵伽婆蹉眼痛を患ふ、琉璃篦を得たり。佛言はく、『眼病を治せんが爲めの故に畜用することを聽す』と。爾の時舍利弗風を患ふ。醫藕根を食はしむ。爾の時大目揵連、舍利弗の所に往き問訊し已りて、一面に坐す。舍利弗に語りて言はく、『所患差ゆるとせんや不や』と。答へて言はく、『未だ差えず』と復問ふ、『舍利弗何の須ふる所ぞ』と。答へて言はく、『藕根を須ふ』と。目連言はく、『東方に阿耨大池あり、水清澄にして塵穢あることなし、之を飲むに患ひなし。此を去ること遠からず、更に池あり廣さ五十由旬、其の水清澄にして塵穢あることなし、藕根あり車軸の如し、若し取りて之を折らば、其の汁乳の如し、之を食ふに蜜の如し。池を去ること遠からず、金山あり、崖の高さ五十由旬、是の中に七大龍王兄弟ありて共に住す。其の最少の者は一閻提王に供給す。其の次ぎに大なる者は、二天下王に供給す。其の次ぎに轉た大なる者は、四天下轉輪聖王に供給す。伊羅婆尼龍象王は、天帝釋に供給す。彼の諸の龍象王、來下して池に入り、淨澡浴して水を飲み、鼻を以て藕根を拔取し、泥穢を淨洗して之を食ひ、好容色と氣力充足とを得、彼の池の藕根之を食ふを得べし』と。時に舍利弗默然として之を可す。時に目連、舍利弗の默然たるを見て、即ち舍衛國に於て沒して現ぜず、人の屈伸臂頃の如くに彼の池邊に至り、化して大龍象王となり、彼の七象王の中に於て、形色最勝なり。時に彼の七龍象王見て皆畏怖して毛竪ち、彼の來りて我が池を奪はんことを恐る。爾の時大目連、彼の七龍象王の心に恐怖を懷くを見、即ち故身に還復す。彼れ即ち目連に問うて言はく、『比丘何の須欲する所ぞや』と。答へて言はく、『我れ藕根を須む』と。語りて言はく、『汝藕根を須めんには、何ぞ早く語られず、我をして恐怖して毛竪たしむるや』と。彼れ即ち池に入りて澡浴して水を飲み、

鼻を以て藕根を拔取し、泥を洗ひ去り、目連に授與す。目連藕根を得已りて、此の池より忽然として現ぜず、舍衞國に還り、祇桓中に至り、舍利弗に授與して語りて言はく、『此れは是れ藕根なり』と。舍利弗食し已りて病卽ち除差することを得たり。殘藕根あり、看病人に與ふ、看病人先きに已に受請し肯て之を食はず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『看病人は受請と不受請と、病人の殘食を食ふことを聽す』と。諸の比丘、先きに食を受け已りて彼の聚落に至る、檀越ありて便ち食を請ず。食し已りて來り還りて僧伽藍の中に至り、向きの食を持つて諸の比丘に與ふ。諸の比丘先きに已に受請し、敢て受けず、人の食する者なし、便ち之を棄つ。時に衆烏鳥あり、食を諍うて喚呼す。爾の時世尊、知りて故らに阿難に問ひたまふ『諸の烏鳥何が故に喚呼する』と。阿難此の事を以て具さに世尊に白す。世尊言はく、『自今已去、餘食法を作して食ふことを聽す、彼れ應さに食を持つて彼の比丘の前に至りて語りて言ふべし、「大德、我れ已に受請す、若しは已に食す、是を看よ是れを知れ」と。』餘食法を作すには、彼れ應さに少を取りて之を食ひ、語りて言ふべし。『我れ已に食す、止めよ、爾之を食ふべし』と。應さに是くの如きの餘食法を作して食ふべし。爾の時長老上座あり、知識多し、村間に乞食し來り、聚まりて一處に在りて食す。食已りて、殘食を持つて僧伽藍の中に來至して諸の比丘に與ふ。諸の比丘先きに已に受請す、肯て之を食はず、人の食ふ者なし、便ち之を棄つ。時に衆烏鳥あり、食を諍つて喚呼す。世尊知りて故らに阿難に問ひたまふ。『諸の烏鳥何が故に喚呼する』と。阿難此の事を以て、具さに世尊に白す。世尊言はく、『自今已去、自ら食を持ちて來り、餘食法を作すことを聽す。食を得ば應さに是くの如く作すべし。食を持つて彼の比丘の所に至り、語りて言はく、「大德、我れ已に受請す、若しは已に食す、是れを看よ、是れを知れ」』と。餘食法を作すには、彼れ應さに、少食を取りて食し已り、語りて言ふべし、「我れ止めん、汝食ふべし」と。應さに是の如く餘食法を作すべし』と。爾の時毘舍佉無夷羅母大に新菓を得、彼れ是

くの如きの念を作す。「我れ今寧ろ食を作すに、佛及び僧を請じ、菓を以て布施すべし」と。卽ち人を遣はして僧伽藍の中に往き、白して言はく、『願はくは諸の大德、我が明日の請食を受けたまへ』と。卽れ其の夜に於て種々の美食を辦じ、明日往いて『明至る』と白す。爾の時世尊、衣を著け鉢を持ち、千二百五十の比丘と倶に、毘舍佉無夷羅母の請に就き、座に就いて坐す。毘舍佉種々の多くの美飮食を以て、佛及び僧に飯す。食し已りて鉢を捨て、更に一卑床を取り、却つて一面に坐す。時に世尊、種々に方便開化說法して、歡喜を得せしめ給ふ。爾の時世尊、說を爲し已りて、坐より去りたまふ。時に毘舍佉無夷羅母、食を行じて忘れて菓を與へず。彼れ是くの如きの念を作す。「我れ新菓の爲めの故に、佛及び僧を請じて飯を設く、今正さに食を行じて、忘れて菓を與へず」と。時に卽ち人を遣はして、菓を送りて僧伽藍の中に至り、諸の比丘に與ふ。諸の比丘已に食し竟る。肯て之を受けず、往いて佛に白す。佛言はく、『若し彼れより來らば、應さに餘食法を作して之を食ふべし、上の法の如し』と。爾の時世尊王舍城に在しき。時に顚狂病の比丘あり、殺牛處に至りて、生肉を食ひ血を飮む。病卽ち差えて本心に還復し、畏愼す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『不犯なり、若し餘の比丘あり、是くの如きの病あり、生肉を食ひ血を飮みて、病差ゆることを得ば、食することを聽す』と。爾の時世尊波羅㮈國に在しき。時に世穀貴く乞食得難し。時に諸の比丘乞食して得ず、往いて象厩に至りて乞ふ。時に彼れに鬼神あり、沙門を信敬する者なり、卽ち象をして死せしめ、彼れに於て象肉を得て之を食はしむ。世尊慈念して諸の比丘に告ぐ、『此れは是れ王の兵衆、王若し聞かば、必ず歡喜せず、自今已去、象肉を食ふべからず』と。時に諸の比丘、波羅㮈國に在りて乞食して得ず。馬厩に往いて乞ふ。時に沙門を信敬する鬼神あり、卽ち馬をして死せしめ、彼れに於て馬肉を得て之を食はしむ。世尊慈念して諸の比丘に告げたまふ、『此れは是れ王の兵衆、聞かば必ず歡喜せず、自今已去、馬肉を食ふべからず』と。爾の時比丘、波羅㮈國に於て乞

食して得ず。能く水底を行く人の所に至りて乞ふ。時に沙門を信敬する鬼神あり、諸龍をして死せしめ、彼れに於て龍肉を得て之を食はしむ。爾の時善現龍王己れの池より出で、世尊の所に往き、頭面に禮足し已りて、却つて一面に住して、佛に白して言さく、『世尊、龍ありて能く一國土を燒く、若しは一國土を滅ずるあり、諸の比丘、此の龍肉を食ふ、善い哉、世尊、比丘をして龍肉を食はしむる勿れ』と。時に世尊、善現龍王の語を聞き、默然として之を受けたまふ。時に善現佛の聽許したまふを見、頭面に佛を禮し已りて本處に還往す。爾の時世尊、此の因緣を以て比丘僧を集めて告げて言はく、『此の龍に大神力あり、威德あり、能く一國土を燒き、若しは一國土を滅ず、諸の比丘の肉を食ふ。自今已去、龍の肉を食ふべからず』と。時に比丘あり、波羅㮈國に住して乞食して得ず、旃陀羅の家に往き、彼れに於て狗肉を得て之を食す。諸の比丘乞食するに、諸狗憎みて逐うて之を吠ゆ。諸の比丘是の念を作さく、「我等或は能く狗肉を食ふ、故に衆狗をして、憎み逐うて我を吠えしむるのみ」と。』諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自今已去、狗肉を食することを得ざれ、若し食すれば突吉羅を得』と。時に世尊波羅㮈國に在しき。時に比丘あり吐下藥を服す。優婆私あり、字は蘇卑、僧伽藍の中に至りて房舍を看、病比丘の所に至りて問うて言はく、『何の患苦する所ぞ』と。答へて言はく、『吐下藥を服す』と。問ふ『比丘何の須欲する所ぞ』と。答へて言はく、『肉を須ふ』と。答へて言はく、『我れ當さに肉を送るべし』と。卽ち波羅㮈に還り、人を遣はし、錢を持つて肉を買はしむ。語りて言はく、『男子、此の錢を以て肉を買ひ來れ』と。時に波羅㮈屠殺せず、彼の人周く行いて肉を求むるも得ず。還りて優婆私の所に至りて白して言はく、『大家、知るや不や、今は此れ不殺なり、遍く行いて肉を求むるも得ず』と。優婆私是くの如きの念を作す、「我れ吐下比丘に肉を與ふることを許す、恐らくは此の比丘肉を得ざれば、或は能く命過せん。若し是の[五]生死の比丘命過せば、出家法の中に於て退せん、若し是れ學人ならば前進することを得ず、若

【五】生死の比丘といふのは、未だ聖果を得ざるが故、尚ほ生死を免れざる凡夫の比丘といふことである。

し是れ羅漢ならば、則ち世間をして福田を失はしめん」と、卽ち後室に入り、利刀を持つて自ら髀裏の肉を割き、婢に與へて煮せしめ已り、持ちて僧伽藍中に往き、吐下比丘に與へしむ。婢卽ち勅の如く持つて比丘に與ふ。比丘食し已りて病卽ち除差す。彼の優婆私肉を割く時、擧身痛を患ひ、極めて苦惱と爲す。時に優婆私の夫、先きに出でゝ行き、還りて蘇卑を見ず。卽ち問ふ、『蘇卑優婆私何處に在るや』と。答へて言はく『病んで內に在り』と。卽ち問ふ『何の患ふる所ぞ』と。卽ち具さに因緣を答ふ。彼の夫主言はく、『未曾有なり蘇卑、沙門の所に於て是くの如きの信樂あり、愛惜する所なくして、乃ち身肉に至る』と。蘇卑優婆私是の念を作さく、「我れ今患苦極めて重し、或は能く此れを以て斷命せん、我れ今寧ろ種々の飮食を辦具し、佛及び僧を請ずべし、最後に佛及び僧を見るの因緣を作すべし」と。時に人を遣はして僧伽藍の中に往きて白して言さく、『大德、明日我が請食を受けたまへ』と。時に世尊默然として之を受けたまふ。卽ち其の夜種々美好の飮食を辦具し、明日往いて『時到る』と白す。時に世尊衣を著け鉢を持ち、諸の比丘僧と俱に、蘇卑優婆私の家に往き、座に就いて坐す。知りて故らに問ひたまふ『優婆私蘇卑何處にか在る』と。答へて言はく、『病んで內に在り』と。佛言はく『優婆私蘇卑を喚び來れ』と。彼れ卽ち語りて言はく、『佛汝を喚びたまふ』と。是くの如きの念を作す「世尊我れを喚びたまふ」と。卽ち速に起きぬ、身痛卽ち止み、瘡復故の如く異ならず。時に優婆私蘇卑佛所に往き、頭面禮足して却つて一面に住す。佛告げて言はく、『是れを作すべからず是れを作すべからず蘇卑優婆私、當さに是くの如きの施、是くの如きの學を作すべし、自ら苦痛ならず、亦彼れを惱まさず』と。時に蘇卑優婆私手づから自ら美好の飮食を斟酌す。食已りて鉢を捨て、小床を取りて一處に在りて坐す。時に世尊優婆私の爲めに、種々に方便說法して歡喜を得せしめたまふ。世尊爲めに說法し已りて坐より起ちて去りたまひ、還りて僧伽藍の中に至り、吐下比丘の所に往き問うて言はく、『蘇卑優婆私肉を送りて汝に與ふるや不

や』と。答へて言はく、『我れに肉を與ふ』と。問うて言はく、『汝食するや不や』と。答へて言はく、『食す』と。復問ふ、『美なるや不や』と。答へて言はく、『美なり、是くの如きの美肉は得難し』と。佛言はく、『汝は癡人なり人肉を食ふ。自今已去人肉を食ふことを得ざれ、若し食すれば偸蘭遮なり、及び餘の可惡の肉は食すべからず、若し食すれば突吉羅なり』と。爾の時世尊波羅㮈に在しき。居士あり耶輸迦の父なり。往いて佛所に往き、頭面禮足して却つて一面に坐す。爾の時世尊、無數に方便して爲めに說法開化し、歡喜を得せしめたまふ。耶輸迦の父佛の說法開化を聞き、心大に歡喜し已りて坐より起ち、佛に白して言さく、『願はくは我が請を受けたまへ』と。時に耶輸迦世尊の後に侍從す。時に世尊默然として請を受けたまふ。耶輸迦請を受けず、『佛未だ我等に別請を受くることを聽したまはず』と。佛言はく、『二種の請あり受くることを聽す、若しは請僧、若しは別請』と。爾の時異居士あり是の念を作す、「何の福德を作してか、僧をして常に供養を得しめ、我が施斷絕せざる」と。卽ち佛に白す。佛言はく、『僧の爲めに常に食を作すことを聽す』と。彼れ是くの如きの言を作す、『我れ常に衆僧の爲めに食を作すこと能はず、何の福德を作してか、僧をして常に供養を得せしめ、我が施をして斷絕せざらしむる』と。佛に白す。佛言はく、『比丘其の舍に往き、常に食を與ふることを聽す』と。彼れ是の言を作す、「我れ常に道人の爲に食を作すこと能はず、何の福德を作してか、僧をして常に供養を得しめて、我が施斷絕せざる」と。佛に白す。佛言はく、『僧差し往いて食することを聽す、若しは食を送りて僧中に至らば、若しは八日、若しは布薩日、若しは月初日に食することを聽す』と。時に居士あり是の念を作す、「云何が福を作して衆僧を供養し、便ち施藥を成ずる」と。佛に白す。佛言はく、『衆僧に藥錢を施すことを聽す』と。時に居士あり、新に房舍を作る、道人の住するなし、念じて言はく、「云何が衆僧を供養し、比丘をして此の房に在りて住せしめん」と。佛に白す。佛言はく、『房中に在りて粥を作すことを聽す、若し復住せず

んば、房に在りて、種々の餅及び菓を作し、若し故ほ任せざれば、當さにために飯食を作すべし、若し任せずんば、房錢を與ふることを聽す、若し故ほ任せずんば、繩床・木床・坐褥・臥褥・枕・地敷を與ふることを聽す。若し故ほ任せずんば、應さに襯體衣を與へ、氈と被とを與ふべし。若し故ほ任せずんば、鉢を與へ三衣を與へよ。若し故ほ任せずんば、應さにために房排戸鉤を作り、杖を與へ、革屣を與へ、蓋を與へ、房を與へ、水瓶を與へ、洗瓶器、若しは盛水器を與へ、浴室の瓶と床とを與へ、刮汚刀を與へ、香熏を與へ、丸香を與へ、房衣を與ふべし。若し故ほ任せずんば、沙門一切所須の者を應さに與ふべし』と。爾の時世尊繩床の中に在り、時に諸の比丘乞食す。時に人あり、牛乳を[六]罄り、犢子をして飲ましめ已りて復罄るを見る。犢子の口中より涎沫出で、乳と相似たり。後遂に疑つて復乳を飲まず、佛に白す。佛言はく、『飲むことを聽す、罄乳の法應さに爾るべし』と。爾の時世尊舍衛國に在しき。時に諸の比丘秋月に病を得、顏色憔悴形體枯燥癬白なり。時に世尊靜室に在り、是くの如きの念を作したまふ。『諸の比丘秋月に病を得、顏色憔悴形體癬白枯燥す。我れ今諸の比丘に、何等の味を食することを聽すべき。當さに常藥を食すべし、麁現せしめず』と。卽ち念じて言はく『五種の藥あり、是れ世の常に用ふる者、酥・油・蜜・生酥・石蜜なり。我れ今寧ろ諸の比丘をして之を食せしむべし、當さに常藥を食すべし、麁現せしめず。飯麨の法の如し』と。是の念を作し已りて、晡時に靜處より起ち、此の事を以て比丘僧を集め、向きに靜處にありて、思念する所の事を以て、具さに諸の比丘に告ぐ『自今已去、諸の比丘、病の因緣あれば、五種の藥、酥・油・生酥・蜜・石蜜を服することを聽す』と。諸の病比丘、種々の肥美の食を得、中に至りて食する能はず、況んや復五種の藥中に至りて能く食せんや。爾の時藥多しと雖、病人時に服するに及ぶ能はず。時に諸の比丘患ひ遂に增して形體枯燥し顏色憔悴す。爾の時世尊知りて故らに阿難に問ひたまふ『諸の比丘、何が故に形體顏色是くの如くなる』と。阿難具さに上の因緣を

【六】罄は、牛羊の乳を取ることである。

以て世尊に白す。佛言はく、『自今已去、若し比丘病の因縁あらば、若しは時、若しは非時に、五種藥を服することを聽す』と。時に諸の病比丘肥美食を得て食ふこと能はず、盡く看病人に與ふ。看病人受請し、食はずして卽ち之を棄つ。諸の烏鳥食を諍うて大に喚呼す。佛知りて故らに阿難に問ひたまふ、『烏鳥何が故に爾る』と。阿難具さに因緣の事を以て佛に白す。佛言はく、『看病の比丘、若しは受請も、若しは不受請も、病人の殘食を食ふことを得るを聽す、無犯なり』と。爾の時舍利弗風を患ふ。醫五種脂を服せしむ。羆脂・魚脂・驢脂・猪脂・失守摩羅脂なり。佛に白す。佛言はく、『服することを聽す。時に受け、時に漉し、時に煮、油法の如く服す。非時に受け、非時に漉し、非時に煮る、服すべからず、若し服すれば法の如く治す』と。

爾の時、世尊、舍衞國に在し、人間に遊行し、千二百五十の比丘と倶なりき。時に世穀貴く、人民飢餓し、乞食得難し。五百の乞人あり、常に佛後に隨ふ。爾の時世尊行くこと未だ遠からず、往いて道邊の樹下に至り、尼師壇を敷いて坐したまふ。時に居士あり、[七]私呵毘羅と名づく、調象師なり。五百の乘車に乘じ、石蜜を載せて道より過ぐ。道中に於て佛足の跡、千輻輪相の光明了々たるを見、卽ち跡を尋ねて去り、遙に世尊の樹下に在りて坐したまふを見る。顏貌端正、諸根寂靜にして上調伏を得ること、猶ほ龍象王の如く、最勝にして比なし、譬へば澄淵の如し、濁穢あることなし。世尊を見已りて信敬の心生じ、卽ち前んで頭面禮足し、却つて一面に坐す。時に世尊私呵居士の爲めに、種々に方便說法開化して、歡喜することを得せしむ。時に私呵居士佛の說法を聞き、極めて大に歡喜し、卽ち諸の比丘に、人別に一器の黑石蜜を施す。諸の比丘受けず『世尊未だ我曹に、黑石蜜を受くることを聽したまはず』と。佛に白す。佛言はく、『黑石蜜を受くることを聽す』と。佛私呵に語りたまふ、『一器の黑石蜜を以て、諸の比丘に分與せよ』と。卽ち佛の敎を受け、一器の黑石蜜を以て諸の比丘に分與す。餘の黑石蜜あり。佛言はく、『應さに第二第三、隨意に重ねて

【七】私呵は、譯して師子、卽ち Simha。毗羅は毗羅槃、或は毗羅吒、『名義標釋』は、疑ふらくは其の姓、或は父の名かとあり。蓋し原音 Viradut-ta。

與ふべし』と。故ほ復殘あり。佛私呵に語りて乞兒に與へしむ。乞兒に與へ已りて、故ほ復殘あり。佛私呵に語りたまふ、『更に第二第三、飽くまで乞兒に與へよ』と。故ほ復殘あり。佛私呵に語りたまふ、『殘黑石蜜を以て、淨地若しは無虫水中に著け、何を以ての故に。未だ諸天世人諸魔梵王沙門婆羅門の、此の黑石蜜を食して、能く消する者を見るあらず、如來無所著等正覺を除く』と。時に私呵卽ち敎の如く、餘の黑石蜜を持ち、無虫水中に著く。水卽ち煙出で聲を作して、猶ほ大熱鐵を燒いて水中に著くが如く、其の聲振裂す。餘の黑石蜜を水中に著くに亦是くの如く、水沸いて聲を作す。爾の時私呵此れを見已りて恐怖して毛竪つ。往いて佛所に至り、頭面禮足して却つて一面に坐し、向きの因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時私呵の心に、恐怖を懷き、毛竪つことを知り、種々に方便說法開化して歡喜を得しめ、卽ち座上に於て遠塵離垢し、法眼淨を得、法を見、法を得、增上果を得、世尊に白して言さく、『大德、我れ佛法僧に歸依したてまつり、優婆塞と爲らん、自今已去、殺生せず、乃至飮酒せず』と。私呵佛の說法を聞き、極めて大に歡喜し、頭面に佛を禮して去る。時に比丘乞食の時、白衣の黑石蜜を作り、罽尼を著くるを見る。諸の比丘疑つて敢て過中食せず、佛に白す。佛言はく、『食することを聽す。作法應さに爾るべし』と。時に諸の比丘乞食して軟黑石蜜を得たり。佛に白す。佛言はく、『食することを聽す』と。黑石蜜漿を得たり、佛言はく、『飮むことを聽す』と。[八]摩食緻を得たり。佛言はく、『食することを聽す』と。白石蜜を得たり。佛言はく、『食することを聽す』と。烏婆陀頗尼を得たり。佛言はく、『食することを聽す』と。水を甘蔗汁に和するものを得たり。佛言はく、『飮むことを聽す』と。甘蔗汁を得たり、佛言はく、『飮むことを聽す。醉はざる人は、非時に飮むことを聽す。若し醉ふ人は飮むべからず、若し飮まば法の如く治す』と。甘蔗を得たり。佛言はく、『時食することを聽す』と。爾の時世尊摩竭提に在し、人間に遊行して王舍城に至りたまふ。畢陵伽婆蹉智識多く徒衆多し、多く酥油・生酥・蜜・黑石蜜を得、

【八】摩食緻は、濃石蜜とあり、烏婆陀頗尼は、薄甘蔗糖とある。

持つて徒衆に與へ、遂に多く積聚藏擧して衆器皆滿ち、大盆・小盆・大鉢・小鉢・匳・大釜は絡嚢・漉嚢を持つて、壁上・龍牙杙上・嚮上に串し、或は屋間に懸著し、下漏上濕して房舍臭穢なり。時に衆多の居士、僧伽藍中に來至し、行いて房舍を見、畢陵伽婆蹉の徒衆の、是くの如く多く飲食衆藥を積聚して房に在り、共宿して臭穢不淨なるを見、皆共に譏嫌す。『沙門釋子多食にして厭くことなし、自ら稱す「我れ正法を知る」と。是くの如きは、何れに正法かある。是の沙門を見るに多く飲食衆藥を積み、瓶沙王の厨庫の如し』と。諸の比丘聞く。其の中に少欲知足にして頭陀を行じ、慚愧を知り、戒を學せんことを樂ふ者あり、畢陵伽婆蹉を嫌責して言はく、『云何ぞ多く飲食衆藥を積みて房に在り、共宿して臭穢不淨なる』と。時に諸の比丘往いて佛に白す。爾の時世尊、此の因縁を以て比丘僧を集め、畢陵伽婆蹉の徒衆を呵責したまふ。『汝等の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ多く飲食衆藥を積みて房に在り、共宿して臭穢不淨なる』と。無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『自今已去、若し病比丘、酥・油・蜜・生酥・黑石蜜を須ひんには、乃至七日に應さに服すべし、若し過ぎて服すれば、法の如く治す』と。爾の時世尊王舍城より人間に遊行したまふ。此の一條の事、上の如く展轉し、食戒異なることなし、故に出さず。

爾の時、比丘風を患ひ藥を須ふ。醫漬麥汁を教ふ。佛言はく、『服することを聽す』と。油漬麥汁を須ひ、頗尼漬麥汁を須ふ。佛言はく、『服することを聽す』と。若し時藥を時藥に和し、非時藥を時藥に和し、七日藥を時藥に和し、盡形壽藥を時藥に和し、應さに受けて時藥と作すべし。非時藥を非時藥に和し、七日藥を非時藥に和し、盡形壽藥を非時藥に和し、應さに受けて非時藥と作すべし。七日藥を七日藥に和し、盡形壽藥を七日藥に和し、應さに受けて七日藥と作すべし。盡形壽藥を盡形壽藥に和し、應さに受けて盡形壽藥と作すべし』と。

【九】匳。辭書を見ると、鏡匳なりとあり、鏡を入れるもの、また盛香の器ともある。こゝでは香を入れる器であらう。

爾の時、比丘瘡を患ふ、唾を以て塗り、銚底を以て熨す。比丘佛に白す。佛言はく、『用ふることを聽す』と。時に比丘あり吐を患ふ。細軟髮を須ふ。佛言はく『燒き已りて之を末とし、水を和し、漉し受けて之を飲むことを聽す』と。時に比丘あり、自ら塚間に往き、人髮人脂を取りて持ち去る。時に諸の居士見て皆憎惡汚賤す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『靜にして無人の時取ることを聽す』と。爾の時比丘あり、身熱を患ふ。醫〔一〇〕栴檀を用ひしむ、病を差やすが爲めの故に、比丘佛に白す。佛言はく『用ふることを聽す。若しは沈水、若しは栴檀・畢陵祇・伽羅・㝹婆羅は、佛言はく、『用つて身に塗ることを聽す』と。時に諸の比丘、蛇の屋に入るを患ふ。未離欲の比丘恐怖す。佛言はく、『驚かすことを聽す。若しは筒を以て盛り、若しは繩を以て繫いで之を棄てよ』と。而も彼れ繩を解かずして地に置き、蛇遂に死す。佛言はく、『解かざるべからず、應さに解くべし』と。時に諸の比丘、鼠の屋に入るを患ふ。未離欲の比丘皆驚畏す。佛言はく、『應さに驚かして出でしむべし。若しは鼠檻を作りて、盛りて出して之を棄てよ』。竟に出さずして置く、檻内に即ち死す。佛言はく、『之を出すべし、出さゞるべからず』と。爾の時諸の比丘、蠍・蜈蚣・蚰蜒の屋に入るを患ふ。未離欲の比丘驚畏す。佛言はく、『若しは弊物、若しは泥團、若しは掃帚を以て、盛り裹んで之を棄てよ』と。而も解かずして放ち、便ち死す。佛言はく、『解放せざるべからず、解放すべし』と。爾の時佛王舍城に在しき。諸の比丘、浴室の薪を破る、空木中より蛇出で、比丘を螫して殺す。時に世尊慈念して諸の比丘に告げたまふ。『彼の比丘慈念を彼の八龍王蛇に生せず、是を以ての故に、蛇の爲めに殺さる。何等か八なる。毘樓勒叉龍王、次ぎを伽寧と名づく、次ぎを瞿曇冥と名づく、（　）次ぎを施婆彌多羅と名づく、次ぎを多奢伊羅婆尼と名づく、次ぎを伽毘羅濕波羅と名づく、次ぎを提頭賴託龍王と名づく。比丘若し彼の八龍王蛇に慈心あれば、螫殺せられず、若し此の比丘、一切衆生に慈心あらば、亦彼の蛇の爲めに螫殺せられず』と。佛自護慈念呪を作すこと

【一〇】栴檀（Chandana）。香木、以下皆香木の名である。沈水は惡揭嚕の譯名で、水中に沈むほど、堅い重い木であるので、沈水、或は沈香と譯せられて居る。

を聴したまふ。毘樓勒叉慈・伽寧慈・瞿曇冥慈・施婆彌多羅慈・多耆伊羅摩尼慈・伽毘羅濕波羅慈・提頭賴吒慈・諸の龍王、乾闥婆・[一一]羅刹婆を慈念す。今我れ慈心を作して、諸の毒惡を滅す、是れより平復を得、毒を斷じ、毒を滅し、毒を除く、南無[一二]婆伽婆』と。佛言はく、『刀破して血を出し、藥を以て之を塗ることを聴す。[一三]亦鈹刀を畜ふることを聴す』と。爾の時比丘病毒あり、醫腐爛藥を服せしむ。若し是れ已に腐爛藥地に墮つる者は、應さに器を以て水を盛り、之に和し、漉して受け、然る後に服すべし。若し未だ地に墮ちざれば、器を以て之を承け、水を和し、漉して之を服し、受くべからず。爾の時病毒の比丘あり、醫田中の泥を服せしむ。佛言はく、『器を以て水を盛り、之に和して漉し、然る後に受けて飲むべし』と。爾の時世尊王舍城に在しき。時に耆婆童子、比丘の大小便處、兩脇下の病を刀治す。時に世尊慈念して諸の比丘に告げたまはく、『此の耆婆童子、比丘の大小便處及び兩腋下の病を刀治す。刀を以て治すべからず。何を以ての故に、刀利にして肉を破り、深く入るが故に。自今已去、筋若しは毛繩を以て急に之を結び、若しは爪にて取りて皮を斷ぜしめ、然る後に藥を著くべし。佛言はく、『灰藥を作ることを聴す』と。手に持ち堅牢ならず。佛言はく、『盛灰藥器を作ることを聴す』と。時に器若し破れ易ければ、角にて作ることを聴す』と。爾の時世尊風を患ふ。醫[一四]三種の藥を和せしむ。阿難を喚び、三種和藥を取り來らしむ。時に阿難佛の敎を受け、自ら三種和藥を煮、已りて佛に授與す。時に世尊知りて故らに阿難に問ふ、『誰か此の藥を煮る』と。答へて言はく、『我れ自ら煮る』と。佛阿難に告げたまはく、『自ら煮て服すべからず、若し自ら煮れば法の如く治す』と。爾の時世尊王舍城に在し、千二百五十の比丘僧と倶に人間に遊行したまふ。時に世穀貴く人民飢餓し、乞求得難し。時に六百の乘車あり、飲食を載滿して世尊に隨逐す。世尊爾の時波闍國より人間に遊行し、毘舍離に至る。時に諸の淨人淨食を辨具し、高聲にして大に語り、或は藏器物を蓋ふ。時に世尊知りて故らに阿難に問ふ。諸の比丘、何を以て此の大聲を

【一一】羅刹婆(Rākṣasa)。

【一二】婆伽婆(Bhagavat)。世尊と譯す。

【一三】鈹刀は、大鍼とある。醫者が癰を破る時に用ふる針だといふ。

【一四】三種藥とは、『名義標釋』には、薑と椒と蓽茇との三なりとある。『十誦』には、胡麻と秋米と大小豆ともある。

作すこと、猶ほ捕魚人の聲の如くなるや』と。阿難佛に白して言さく、『諸の淨人淨食を辨具し、高聲にして大に語り、或は藏器物を蓋ふ、故に是くの如きの大聲あり』と。佛阿難に告げたまはく、『界內共食し、宿煮食を食すべからず、若し食すれば法の如く治す』と。爾の時諸の比丘、食飲を以て露地に著きて牢藏せず。牧牛羊人若しは賊持ち去る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『應さに邊房の靜處に在りて、淨廚屋を結作すべし』と。爾の時世尊毘舍離に在しき。時に私呵將軍あり、是れ【一五】尼揵の弟子なり。時に斷事堂に五百の梨奢あり、共に坐して食す、無數に方便して佛法僧を讚歎す。爾の時私呵將軍、座中に在りて、無數に方便して佛法僧を讚歎するを聞き、心に信樂を生じ、往いて佛を見たてまつらんと欲し、是くの如きの念を作す。『我れ今寧ろ師尼揵に白し、瞿曇の所に往くべし』と。時に私呵卽ち往いて尼揵に白して言はく、『我れ瞿曇沙門の所に往かんと欲す』と。尼揵語りて言はく、『汝は作法ありと說く、瞿曇は作法なしと說き、以て弟子を化す、止みね須らく往くべからず』と。爾の時私呵將軍本より佛を見たてまつるの心あり、卽ち退く。梨奢是くの如く、第二第三佛法僧を讚歎す。時に私呵將軍第二第三に讚するを聞き、是くの如きの念を作す、「我れ今寧ろ尼揵師に辭せずして、往いて瞿曇を見ん、師能く我れをして何等をか作さしむる」と。時に私呵卽ち佛所に往き、頭面禮足して却つて一面に坐す。時に世尊、爲めに無數に方便して說法開化し、歡喜を得せしめたまふ。私呵佛の方便說法を聞き、心大に歡喜し、佛に白して言さく、『我れ聞く瞿曇は作法なしと說き以て諸の弟子を化すと、若し人ありて、大德作法なしと說き、以て諸の沙門を化すと言はゞ、是れ實語法語とせんや不や』と。佛私呵に語りたまふ『或は因緣ありて方便して、我れ作法なしと說き、以て諸の弟子を化すと言はゞ、是れ實語法語なり。或は因緣ありて、方便して我れ作法ありと說き、以て諸の弟子を化すと言はゞ、是れ實語法語す。或は因緣あり、方便して、我れ斷滅を說き、以て弟子を化すと言はゞ、是れ實語法語なり。或は因緣あり、方便して我れ穢惡の

【一五】尼揵は、裸行外道、卽ちジヤイナ派の祖尼揵子(Nirgranthaputra)である。

法を說き、以て弟子を化すと言はゞ、是れ實語法語なり。或は因緣あり、方便して我れ調伏の法を說き、以て弟子を化すと言はゞ、是れ實語法語なり。或は因緣あり、方便して我れ滅闇の法を說き、以て弟子を化すと言はゞ、是れ實語法語なり。或は因緣あり、方便して我生已盡不受後身と說き、以て弟子を化すと言はゞ是れ實語法語なり。或は因緣あり、方便して我れ無畏處に到り、無畏法を說き、以て弟子を化すと言はゞ、是れ實語法語なり。何を以ての故に。我れ作法なし、乃至無畏處に到ると說き、以て諸の弟子を化すと言ふは、是れ實語法語なり。我れ不作を說くは、身に惡を行じ、口に惡を言ひ、心に惡を念ず、三種の惡不善の法は、作すべからず。我れ作法を說くは、三種の善法は應さに作すべし。我れ斷滅の法を說くと言ふは、貪欲瞋恚愚癡を斷滅するなり。我れ穢惡の法を說くとは、身に意業の不善の法を穢惡するなり。我れ調伏の法を說くとは、貪欲瞋恚愚癡を調伏す。我れ滅闇を說くとは、諸惡不善の闇法を滅す。我れ我生已盡と說くとは、我が生已に盡きて胞胎を受けず、亦復人を化して生死を斷ずるなり。我れ無畏處に到ると說くとは、自ら所畏なし、復衆生を安慰す。是を以ての故私呵、因緣あるが故に、我れ作法なし、乃至無畏處に到ると說き、以て弟子を化す、是れ實語化語なり』と。私呵世尊に白して言さく『我れ佛法僧に歸依したてまつる、自今已去、不殺生乃至不飮酒』と。佛私呵に語りたまふ『好く自ら宜しきを量りて、然る後に戒を受けよ。汝は國の大臣たり、人の知識する所、當さに衆人を益すべし、輕しく擧動して、後に悔ゆることある莫れ』と。私呵答へて言はく『我れ外道の沙門婆羅門に於て弟子と作る時、幡を持つて國中に唱令して言はく、「私呵尼揵の爲めに弟子と作る」と。我れ今世尊の重ねて我れに勅して言ふを聞くに、「好く自ら宜しきを量りて然る後に戒を受けよ、汝は國の大臣たり、人の智識する所、當さに衆人を益すべし、輕しく擧動すること莫れ」と。益々信樂を增せり』と。復佛に白して言さく、『大德、我れ今第二に、盡形壽佛法僧に歸依したてまつる、不殺生乃至不飮酒、自今已去、我が

門中に於て、尼犍外道の來入を聽さず、佛の諸弟子・比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷は、我が門中に於て罣礙する所なし』と。佛私呵に語りたまはく、『先きに尼犍外道、汝が家中に於て晝夜供養を受くること泉水を取るが如し、今何ぞ便ち斷ずることを得ん』と。復佛に白して言さく、『我れ外人より聞く、沙門瞿曇自ら稱して言はく、『布施は應さに我れに與ふべし、餘人に與ふべからず、我れに與ふれば大に果報を得、餘人に與ふれば、果報を得ず。應さに我が弟子に與ふべし、餘人の弟子に與ふべからず、我が弟子に與ふれば大に果報を得、餘の弟子に與ふれば果報を得ず』と。』佛私呵に語りたまはく、『我れに是の語なし、若し人慈心あれば、[一六]米泔汁、若しは湯滌汁を以て、不淨水虫の中に棄著し、彼の虫をして此の食氣を得せしむ。我れ說く彼れ猶ほ福あり。況んや復人に與ふるをや。我れは說く、布施持戒の人は大果報を得ること破戒に勝る』と。私呵佛に白して言さく、『世尊の說きたまふ所の如し。世尊の說きたまふ所の如し、我曹自ら之を知る』と。爾の時世尊、無數に方便して爲めに說法開化し、歡喜を得せしめ、即ち座上に於て遠塵離垢して法眼淨を得、法を見、法を得、果證を得、佛に白して言さく、『我れ今第三に、盡形壽、佛法僧に歸依したてまつる。不殺生乃至不飮酒、唯願はくは世尊、我が明日の請食を受けたまへ』と。世尊默然として之を受けたまふ。時に私呵、佛の許したまふを見已りて、即ち起ちて佛足を禮して去る。其の夜に於て種々の美食を辦具し、明日往いて『時到る』と白す。世尊衣を著け鉢を持し、千二百五十の比丘と俱に其の家に往き、尼師壇を敷いて座に就いて坐す。爾の時尼犍子等往いて離奢の住處に詣り、手を擧げて大に哭して怨言を稱ふ『此の私呵將軍自ら大牛を殺し、沙門瞿曇及び諸の比丘に與へて飯食を設け、已れがために殺すを知りて、故ほ之を食ふ』と。爾の時人あり、即ち私呵の所に往いて語りて言はく、『當さに知るべし、諸の尼犍子あり、離奢の住處に往き、手を擧げて大哭し、怨言を稱ふ『私呵將軍自ら牛を殺し、沙門瞿曇及び比丘僧に與へて飯食を設く』と。私呵言はく、『此れは常に日夜に、佛と比

【一六】米泔汁は、淅米汁である、淅は汰米とあるから、米をとぐことである。湯滌は澡器のこと、食器などを洗つた水を湯滌水といふのである。

丘僧の爲めに怨家たり。我れ終に命の爲めの故に、衆生の命を斷せず』と。爾の時私呵將軍、多くの美飲食を以て、佛及び比丘僧に飯し已りて鉢を攝し、更に一卑床を取りて、一面に在りて坐す。佛方便の爲めに方便して說法開化し、歡喜を得せしめ、說法を爲し已りて、坐より起ちて去りたまふ。僧伽藍中に還りて、此の因緣を以て比丘僧を集めて告げて言はく、『自今已去、若し故らに殺す者は、食すべからず。是の中故らに爲めに殺すとは、若しは故見・故聞・故疑なり。此くの如きの三事の因緣あるは不淨肉なり、我れ食ふべからずと說く。若し我が爲めに故らに殺すを見、若しは可信人の邊より、我が爲めに故らに殺すと聞く。若しは家中に頭あり、皮あり、毛あり、若しは脚血あるを見る。又復此の人能く十惡業を作す、常に是れ殺者なり、能く我が爲めに故らに殺すならん。是くの如く三種の因緣不清淨の肉は食ふべからず、三種の淨肉あらば食ふべし。若し故見ならず、故聞ならず、故疑ならざれば食ふべし。若し我が爲めに故殺するを見ず、我が爲めに故殺するを聞かず、若しは家中に頭脚皮毛血あることを見ず、又彼の人は是れ殺者に非ず、乃至十善を持ち、彼れ終に我が爲めの故に衆生の命を斷ぜず。是くの如きの三種の淨肉は應さに食すべし。若し大祀を作す處の肉は食すべからず、何を以ての故に。彼れ是くの如きの意を作す。『辦具し來る者は當さに與ふべし』と。是の故に食すべからず、若し食すれば法の如く治す』と。

爾の時世尊、毘舍離より人間に遊行し、千二百五十比丘と俱に〔一七〕蘇彌に至り、蘇彌より跋提城に至りて住したまふ。時に跋提城に大居士あり、旻荼と名づく。是れ〔一八〕不蘭迦葉の弟子なり、大富にして諸の珍寶多し、多く象馬車乘あり、奴婢僕使食飮は食庫に溢滿し、大威力あり、意の所欲に隨ひ、周く人物に給す。彼の居士倉に入る時、車軸の孔の如く、自然に穀出でゝ休まず、乃ち居士出でゝ去るに至る、其の婦も復是くの如くの福力あり。八斗の米を以て食を作り、四部の兵及び四方來の乞者に供して皆飽足せしめ、食故ほ盡きず。乃ち起ちて去るに至る。其の兒も亦是くの如き

【一七】蘇彌、『十誦』に蘇摩として居る、蓋し Soma、跋提 Bhadra は蘇摩の內の城市の名である。
【一八】不蘭迦葉(Purana-kāśyapa)。

の福力あり、嚢に千兩金を盛り、四部の兵及び四方來の乞者に與へ、隨意に足らしめて故ほ盡きず、乃ち起ちて去るに至る。其の兒の婦も亦是くの如きの福力あり、一裹の香を以て、四部の兵及び四方來の乞者に塗り、隨意に足らしめて香故ほ盡きず、乃ち起ちて去るに至る。其の奴も是くの如きの福力あり、一犂を七壟出を耕す。其の婢も是くの如きの福力あり、八斗の穀を以て四部兵に與へて盡きず、乃ち起ちて去るに至る。其の家裏各々に誇うて言はく『是れ我が福力なり』と。爾の時旻荼居士、佛の蘇彌より人間に遊行し、跋提城に至りたまふと聞き、彼れ是くの如きの念を作す。「我れ今寧ろ師不蘭迦葉を辭して、沙門瞿曇の所に至らん」と。念じ已りて師の所に往いて白して言さく『大師、我れ佛の蘇彌より人間に遊行し、跋提城に至ると聞く、我れ今往いて沙門瞿曇を見んと欲す』と。不蘭迦葉語りて言はく『居士汝大福力あり、隨意自在なり、往いて沙門瞿曇を見るべからず、沙門瞿曇應さに來りて汝を見るべし。又法應さに爾るべし、出家人應さに來りて白衣を問訊すべし』と。彼れ是くの如きの念を作す。「未曾有の沙門なり、沙門の爲めに刺を作す、我れ何ぞ不蘭迦葉を辭することを用ひん、辭せずして去るも、能く我をして何等をか作さしめん、卽ち往いて瞿曇を見ん」と。旻荼居士世尊の所に往き、頭面禮足して却つて一面に住す。世尊爲めに種々に方便して說法開化し、歡喜を得せしむ。爾の時旻荼佛の說法を聞き、心大に歡喜し、佛に白して言さく、『我れは是れ跋提城の居士にして、是れ不蘭迦葉の弟子なり』と。具さに已れの家業福力の事を以て世尊に白して言さく『我が家中各々誇うて言はく、「是れ我が福力なり」と。唯願はくは世尊、爲めに說きたまへ是れ誰の福力ぞ』と。佛旻荼居士に語りたまはく『汝往過去世の時波羅㮈國に於て居士と作り、大に富みて諸の財寶多し、庫藏に溢滿す。前世の時に婦・兒・兒婦及び奴婢は、卽今の者是れなり。居士爾の時に、時世穀貴く人民飢饉し乞求得難し。時に居士の家中共に食す。時に辟支佛あり多呵樓支と字づく、來り入りて乞食す。居士言はく『汝曹但食せよ、我が分を持つて

此の仙人に與へん』と。婦是くの如きの言を作す、『居士但食せよ、我が分を以て此の仙人に與へん』と。其の兒復是くの如きの言を作す、『父母但食したまへ、我が分を以て此の仙人に與へん』と。兒婦及び奴婢亦是くの如きの言を作す、『大家但食したまへ、我が分を以て此の仙人に與へん』と。是に於て各食分を分ちて辟支佛に施せり。居士知るや不や、是の因緣果報を以て、今日等しく共に是くの如きの福力あり』と。爾の時世尊、無數に方便して爲めに說法開化し、歡喜を得せしめ、卽ち座上に於て遠塵離垢して法眼淨を得、法を見、法を得、果證を得たり。佛に白して言さく、『我れに自今已去、盡形壽佛法僧に歸依したてまつり、優婆塞と爲ることを聽したまへ、不殺生乃至不飮酒、唯願はくは世尊、我が跋提城中七日請を受けたまへ』と。時に世尊默然として之を受けたまふ。時に居士、世尊及び比丘僧默然として受請し已るを以て、卽ち跋提城中に於て、衆味を自ら具し、七日佛及び比丘僧を供養す。時に世尊七日の受請已りて曠野に往かんと欲す。時に旻荼居士千二百五十の牸牛を以て人を遣はし、象を以て種々飮食の具を載せ、道路に於て佛及び比丘僧に供養す。世尊爾の時七日供養を受け已りて卽ち曠野に往く。諸の比丘道に在りて行く、人あり牛を搆し、犢子をして飮ましめ、已りて復搆す。犢子口中より涎出でゝ乳に似たり。諸の比丘後終に乳を飮まず、佛に白す。佛言はく、『飮むことを聽す、搆乳の法應さに爾るべし。五種の牛乳あり、乳・酪・生酥・熟酥・醍醐なり』と。行いて曠野を過ぎ已りて故ほ餘の飮食あり。彼れ人をして是くの如きの念を作さしむ。『居士大富多く財寶あるが故に、比丘の爲めの故に此の飮食を送る、我れ今寧ろ都べて此の飮食を以て諸の比丘に與ふべし」と。時に卽ち飮食を以て諸の比丘に與ふ。諸の比丘受けずして言はく、『佛未だ我曹に、道路糧を受くることを聽したまはず』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自今已去、檀越食受を作すことを聽す、淨人をして掌擧せしめ、自ら受くべからず、若し所須あれば、隨意に索取せよ』と。爾の時世尊、阿牟多羅國より人間に遊行し、阿摩那城に至り、翅兔編髮婆羅

門園中に在りて住したまふ。爾の時編髪婆羅門、沙門釋種の出家、阿牟多羅國より阿摩那城に至り、我が園中に在りて住したまふと聞き、是くの如きの念を作す、「沙門瞿曇大名稱あり、是れ如來無所著應供正遍知明行足爲善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊と言ふ、善い哉我れ今當さに是くの如きの無著人を見るべし」と。爾の時編髪婆羅門往いて世尊の所に往き、恭敬問訊し已りて、却づて一面に坐す。佛爲めに無數に方便して說法開化し、歡喜を得せしむ。時に婆羅門佛の說法を聞き、極めて大に歡喜して佛に白して言さく、『願はくは佛及び比丘僧、我が明日の請食を受けたまへ』と。佛言はく、『今比丘僧多し、汝は外道を信ず』と。婆羅門言はく、『我れ外道を信ずと雖、衆僧多しと雖、但我が明日の請食を受けたまへ』と。世尊是くの如く再三之に語る。婆羅門も亦是くの如く再三世尊に白す。世尊爾の時默然として請を受けたまふ。婆羅門佛の受けたまふを見已りて、坐より起ちて去りて家に還り、親屬に語りて言はく、『我れ明日佛及び比丘僧を請じて供養す、施設すべき所、願はくは當さに我れを助くべし』と。其の諸の親屬之を聞いて皆喜ぶ。或は薪を破るものあり、或は飯を作るものあり、或は水を取るものあり。時に婆羅門自ら堂舍を莊嚴し、床座を敷き、佛及び比丘僧當さに此の座に在るべしと。時に阿摩那城中に施盧婆羅門あり、五百の婆羅門と共に往く。翅㝹婆羅門常に恭敬し之を宗仰す。時に施盧婆羅門、五百の婆羅門と倶に其の家に往く。翅㝹婆羅門の常法、其の來るを見れば、起ちて出でゝ之を迎へ、請じて屋に入りて坐せしむ。其の日來るを見るも亦出でゝ迎へず、亦坐に請ぜず、但自ら堂舍を莊嚴し、好床座を敷く。施盧問うて言はく、『婦を娶らんと欲すとせんや、女を嫁せんと欲すとせんや、王を請ぜんと欲すとせんや、大祠せんと欲すとせんや』と。彼れ即ち答へて言はく、『我れ亦婦を娶り、乃至王を請はず、我れ大祠を作さんと欲す、佛及び比丘僧千二百五十人を請ず、瞿曇は大名稱あり。如來無所著應供正遍知明行足爲善逝世間解無上士調御丈夫天人師佛世尊なり』と。施盧は翅㝹に問うて言はく、『實に是れ佛な

りや」と。答へて言はく、『實に是れ佛なり』と。問うて言はく、『佛は何處に在して住したまふや、我れ今見たてまつらんと欲す』と。時に翅㝹右手を擧げて示して言はく、『乃ち彼の青林の中に在して住したまふ』と。施盧是くの如きの念を作す、『我れ空しく往くべからず、當さに何物を持つて往いて沙門瞿曇を見るべき』と。卽ち自ら念じて言はく、『今八種の漿あり、是れ古昔無欲仙人の飮む所、梨漿・閻浮漿・酸棗漿・甘蔗漿・蕤菓漿・[一九]舍樓伽漿・婆樓師漿・蒲桃漿なり。爾の時施盧婆羅門、此の八種の漿を持ちて佛所に往詣し、恭敬問訊して却つて一面に坐す。時に世尊爲めに方便して說法開化し、歡喜を得せしむ。施盧法を聞いて極めて大に歡喜し、卽ち八種の漿を以て比丘僧に施す。比丘僧敢て受けずして言はく、『佛未だ我曹に、八種の漿を受くることを聽したまはず』と。比丘佛に白す。佛言はく、『八種の漿を飮むことを聽す。若し醉はざる人は、應さに非時に飮むべし、若し醉ふ人は飮むべからず、若し飮めば法の如く治す。亦今日を以て漿を受け、留めて明日に至るべからず、若し留むれば法の如く治す』と。爾の時世尊、此の住處より[二〇]摩羅に至り、人間に遊行し、波婆城に向ふ。自共制を作し、世尊當さに來りたまふべし、皆應さに迎ふべし、若し迎へざれば、金百兩を罸すと。時に摩羅子あり、盧夷と字づく。佛法僧に信樂あることなし、是れ阿難白衣の時の親友なり。時に阿難遙に盧夷を見て語りて言はく、『甚だ善し盧夷、汝能く自ら出でゝ佛を迎ふること』と。彼れ答へて言はく、『大德、我れ是れを以て出でゝ迎へず、波婆城中皆共に制を作し、若し出でゝ佛を迎へざれば、金百兩を罸すと。是の因緣を以ての故に來る、信敬の故に來るには非ず』と。阿難之を聞いて樂まず、卽ち世尊の所に往き白して言さく、『此の波婆城中に摩羅子あり、盧夷と字づく、是れ我が白衣の時の親友なり。善い哉世尊、願はくは佐助を爲し、彼れをして信樂を得せしめたまへ』と。佛阿難に語りたまはく、『此れ何の難きことかあらん、若し復是くの如き者あらば、猶ほ難しと爲さず』と。爾の時世尊卽ち慈心を以て、盧夷摩羅を感じて世尊に詣らしむ。猶ほ

【一九】舍樓伽は、蓮根のこと、婆樓師は、菓物の名である。

【二〇】摩羅は、或は末羅、力士の義、前に在り。

人の引導するありて往くが如し。是くの如く盧夷佛所に往き、頭面に禮足し已りて、却つて一面に住す。爾の時世尊、無數に方便して其れが爲めに説法開化し、歡喜を得せしめ、即時に遠塵離垢を得て法眼淨を得、法を見、法を得、果證を得たり。佛に白して言さく、『大德、我れ自今已去佛法僧に歸依したてまつり、優婆塞と爲りて不殺生乃至不飲酒せん。唯願はくは世尊常に我が衣服飲食醫藥臥具を受けたまへ』と。佛盧夷に告げたまはく『汝今學人、明智あるを以て遠塵離垢して法眼淨を得、便ち言ふ「常に我が衣服飲食醫藥臥具を受け給へ」と。復更に餘の學人あり、已に明智あり、遠塵離垢して法眼淨を得、亦當さに言ふべし「常に我が衣服飲食醫藥臥具を受け給へ」と』。爾の時、世尊波婆城中にて偏へに一人の請を受けず。時に城内の家々各飲食を斂めて聚めて一處に在り、佛及び僧を飯す。時に盧夷食を作る處に往き、唯餅なきを看、彼れ即ち夜に於て、種々の餅を辨具し、明日諸の比丘に與ふ。諸の比丘受けずして言はく、『佛未だ我曹に、前食に餅を受くることを聽したまはず』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『受くることを聽す』と。時に世尊波婆城より阿頭に至る。時に阿頭の住處に二の比丘あり、是れ常剃髮の人なり。父子出家の時、二比丘佛の波婆より阿頭に至りたまふと聞き、彼れ是くの如きの念を作す。「我曹當さに何等を辨具して、世尊を供養したてまつるべき」と。其の父、兒に語りて言はく、『我れ今當さに剃髮處を求むべし、汝作錢處に往き、求め作すべし。若し所得あらば、當さに粥を辨具し、世尊を供養したてまつるべし』と。時に父即ち往いて人の爲めに剃髮し、兒は即ち往いて錢を作し賃作す。所得の物あれば、盡く爲めに粥を辨じ、持つて往いて世尊を供養す。世尊知りて故らに阿難に問ひたまふ『何の處より此の粥を得たる』と。阿難即ち此の事を以て具さに佛に白す。佛言はく『出家人は、白衣の爲めに剃髮すべからず、出家せんと欲する者を除く。若し剃髮人出家せんに、剃刀を畜ふべからず、若し畜ふれば法の如く治す』と。時に衆僧剃髮刀を得たり、佛に白す。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。爾の時

世尊阿頭より迦摩羅に至りたまふ。諸の比丘是くの如きの根藥を得たり、[二一]阿漏・彌那漏・比那漏・提婆檀豆檀盧乾漏・私羅漏なり。諸の比丘受けずして言はく、『佛未だ我曹に是くの如きの根藥を受くることを聽したまはず』と。佛に白す。佛言はく、『受くることを聽す』と。是の中迦摩羅國の諸の比丘、是くの如きの盡形壽藥を得たり、沙蔓那・摩訶沙蔓那・[二二]杏子人・兜々漏・秦敵梨蓼なり。諸の比丘受けずして言はく、『佛未だ我等に、是くの如きの盡形壽藥を受くることを聽し給はず』と。比丘佛に白す。佛言はく、『受くることを聽す』と。爾の時世尊迦摩羅より迦維羅衞國に至りたまふ。畢陵伽婆蹉彼の國に在りて住し、脚の劈破を患ふ、醫脚を塗らしむ、佛に白す。佛言はく、『塗ることを聽す』と。何の藥を以て塗らんかを知らず。佛に白す。佛言はく、『酥・油、若しは脂を以て塗ることを聽す』と。手に酥油を捉りて臭し。佛言はく、『塗藥篦を用ふることを聽す』と。時に手にて脚を塗る、手に膩す。佛言はく、『脚々相塗ることを聽す』と。塗脚藥淺器の中に著くに、堅密ならず。佛言はく、『瓶を作ることを聽す』と。若しは坌塵を患ふ。佛言はく、『蓋を作ることを聽す』と。時に油瓶の擧處堅牢ならず。佛言はく、『床下に著く、若しは壁上、龍牙杙上に懸著するを聽す』と。時に諸の比丘頭痛を患ふ。醫頂上に油を著けしむ。佛に白す。佛言はく、『著くることを聽す』と。彼れ畏愼して、敢て香油を用つて著けず。佛言はく、『著くることを聽す。油法應さに爾すべし』と。時に比丘風を患ふ、醫除風藥を作らしむ、是の中の除風藥とは、稻穀を蒸し、酒糟を蒸し、若しは大麥、若しは諸の治風草、若しは麸糠、若しは煮小便なり。佛に白す。佛言はく、『聽す』と。時に畢陵伽婆蹉銚を須ひて煮る。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。衆僧大銚を得。佛言はく、『畜ふることを聽す』と。畢陵伽婆蹉三種の釜を得たり、銅釜・鐵釜・土釜なり。佛言はく、『畜ふることを聽す、衆僧も亦爾り、畜ふることを聽す』と。後に瓶を得たり、銅瓶・鐵瓶・瓦瓶なり。佛言はく、『畜ふることを聽す、衆僧も亦爾り、畜ふることを聽す』と。畢陵伽婆蹉煎餅鏊[二三]を得たり。佛言はく、

【二一】五種の根藥は詳でない。

【二二】杏子人は、杏子仁、他は明でない。

【二三】鏊は、燒器とあり、釜の屬ともある。印度にて用ひし實際のものは詳にしがたい。

『畜ふることを聽す、衆僧も亦爾り、畜ふることを聽す』と。畢陵伽婆蹉銅杓を得、椁を得たり。佛言はく、『畜ふることを聽す、衆僧も亦爾り、畜ふることを聽す』と。

四分律卷第四十二

巻の第四十三（三分の七）

薬揵度の二

爾の時吐下の比丘あり、舍衞城中の人をして粥を煮しむ。時に因縁ありて城門晩く開く。未だ粥を得るに及ばずして便ち死す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧伽藍内に在りて淨地を結することを聽す。白二羯磨して、應さに是くの如く結すべし。應さに房、若しは處、若しは溫室、若しは經行處と唱ふべし。衆中能く羯磨を作すに堪能なる者を差す、若しは上座、若しは次座、若しは誦律、若しは不誦律なり。羯磨を作すに堪能なる者是くの如く白す。『大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今某處を結して淨地と爲す、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、僧今某處を結して淨地と作す、誰か諸の長老、僧某處を結して淨地と作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に某處を結して淨地と作すことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。」四種の淨地あり、一には檀越若しは經營人、僧伽藍を作る時、分に處して是くの如く言ふ。『某處に僧の爲めに淨地を作る』と。第二には、若し僧の爲めに僧伽藍を作りて、未だ僧に施さず。第三には、若しは半ば籬障あり、若しは多く籬障なし、若しは都べて籬障なし。若しは垣牆、若しは塹も亦是くの如し。第四には、僧白二羯磨結を作すとなり』と。諸の比丘是の念を作す、「比丘の房も、應さに結して淨地と作すべきや不や」と。佛に白す。佛言はく、『應さに作すべし、比丘・比丘尼を除いて、若しは式叉摩那・沙彌・沙彌尼の房も亦是くの如し、若し鬼神の廟屋も亦是くの如し、淨地と作すことを得』と。時に諸の比丘、何の處か是れ淨地なりやを知らず、佛に白す。佛言はく、『應さに結すべし、若し先きに淨地あるを疑はゞ、應さに解いて然る後に結すべし』と。爾の時比丘故僧伽藍を治す。淨地と作すを得んや不やを知らず、佛言はく、『作すことを得』と。爾

【一】四種の淨地は、處分淨、檀越淨、院相不周淨、白二羯磨結である。淨地は食物を置くところで、處分淨は、僧伽藍を造る時、一部分の場所を淨地とすると言つて食物の置場をきめるのである。檀越淨は、寺を造つて、未だ僧に引き渡さない間で、引渡さない間は僧物ではない、檀越の物であるから、中に食物を置いても差支のないわけであるから、之を淨地とする。院相不周とは、寺の周圍の籬や牆壁の不完全なことで、其の不完全な所は、寺の範圍内として認められないから、こゝを淨地とするのである。最後の羯磨結の淨地が、こゝにいふ眞の淨地である。

の時不淨地に樹の生ずるあり、枝葉淨地に蔭覆す。時に諸の比丘、淨物を安んじて上に著けんと欲す、淨地とせんや不やを知らず。佛言はく、『根不淨地に在れば即ち不淨なり』と。時に樹根淨地に在るあり、枝葉不淨地を蔭覆す。諸の比丘、淨物を安んじて上に著けんと欲す、淨とせんや不やを知らず。佛言はく『根淨地に在れば淨なるを得』と。時に樹あり、根不淨地に在り、枝葉淨地を覆ひ、菓墮ちて淨地に在り。諸の比丘淨とせんや不やを知らず。佛言はく『若し人の觸るゝなく、自ら墮つる者は淨なり』と。風吹き雨打ち、獼猴諸鳥ありて觸れて墮つ、淨とせんや不やを知らず。佛言はく、『若し意を作して、墮ちしめんと欲せざれば淨なり』と。樹根淨地に在り、菓不淨地に墮つ。比丘淨とせんや不やを知らず。佛言はく淨なり』と。時に諸の比丘不淨地に在りて、胡瓜甘蔗菜を種え、枝葉淨地を覆ふ。比丘淨とせんや不やを知らず。佛言はく、『不淨なり』と。時に淨地に在りて、胡瓜甘蔗菜を種え、枝葉不淨地を覆ふ、淨とせんや不やを知らず。佛言はく『淨なり』と。時に六群比丘不淨菓を便ち食す。諸の居士見て皆共に譏嫌して言はく『沙門釋子慚愧を知らず、厭足あることなし、自ら稱して言はく「我れ正法を知る」と。是くの如きは何くに正法かある、菓を食して淨を作さず』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『不淨菓は即ち食すべからず、應さに淨し已りて之を食すべし。應さに五種淨法を作して食すべし。火淨・刀淨・瘡淨・鳥啄破淨・不中種淨なり、此の五種淨は應さに食すべし。是の中の刀淨・瘡淨・鳥淨は、應さに子を去りて食すべし、火淨・不中種淨は、都べて食せよ。復五種淨あり、若しは皮剝、若しは剝皮、若しは腐、若しは破、若しは瘀燥なり。爾の時衆僧菓園を得たり。佛言はく、『受くることを聽す』と。復誰か料理すべきかを知らず。佛言はく『若しは守僧伽藍民、若しは沙彌、若しは優婆塞なり』と。彼の守視人分を得んと欲す。佛言はく、『應さに食を計りて價を作し、直を與ふべし』と。爾の時比丘不破菓を食し、大便已りて子生ず。比丘畏愼して言はく『我れ食して種を生ず』と。佛に白す。佛言はく、『不犯なり、即

ち是れ淨なり』と。時に諸の比丘菜を種え、自ら種子を散ず。後に疑つて言はく、『我れ自ら種う』と。敢て食せず。佛に白す。佛言はく、『種子已に變じ盡す、食することを聽す』と。時に比丘菜を餘處に移して殖う。疑つて言はく、『自ら殖う』と、敢て食せず。佛に白す。佛言はく『重生を以ての故に、食することを聽す、若し自ら胡瓜・甘蔗・蒲桃・梨・奈呵梨勒・鞞醯勒・阿摩勒・椒・薑・蓽茇を種え、及び移殖するは食すべし』と。爾の時小沙彌あり、淨食を取りて水を過す、自ら擧ぐるに勝へず。佛言はく『大比丘沙彌を扶けて過せしむるを聽す』と。時に小沙彌あり、淨食を持つて岸に上ること能はず。佛言はく、『大比丘扶けて上らしむることを聽す』と。時に沙彌あり小なり、淨食を擧げて、壁上若しは龍牙杙上に懸著する能はず、又下す能はず。佛に白す。佛言はく、『下に床若しは机を安んじ、蹬上して上下することを得せしむるを聽す』と。時に諸の比丘、酥瓶油瓶ありて覆はず。佛に白す。佛言はく、『淨人をして覆はしむることを聽す、若し淨人なければ、應さに自手蓋を捉り、其の上に懸置すべし、手觸すべからず』と。時に六群比丘不淨菜を噉ふ。諸の居士見て皆共に譏嫌して言はく、『沙門釋子は慚愧を知らず、厭足あることなし、衆生の命を斷ず。自ら言ふ、「我れ正法を知る」と。是くの如きは何くに正法かある。不淨菜をば便ち之を食ふ』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『不淨菜を噉ふべからず、應さに淨すべし』と。時に彼れ便ち自ら淨を作す。佛言はく、『自ら淨を作すべからず、應さに淨人をして淨を作さしむべし』と。時に比丘自手に食を捉り已りて、人をして淨を作さしむ。佛言はく、『自手に食を捉り已り、人をして淨を作さしむべからず、應さに地に置いて、人をして淨を作さしむべし』と。彼れ淨を作し已り、受けずして便ち食す。佛言はく、『淨を作し已りて、受けずして便ち食すべからず、應さに淨を作し已らば、手を洗つて受けて食すべし』と。彼れ蓮根菜を洗ひ已りて、更に淨を作す。佛言はく、『洗ひ已りて更に淨を作すべからず、此の洗は卽ち是れ淨なり』と。時に比丘あり、先きに相嫌ひ、便ち他の淨食に觸れて、

是くの如きの意を作す、「比丘をして不淨食を得せしめん」と。彼の比丘淨不淨を知らず。佛に白す。佛言はく、『觸るゝ者に於ては是れ不淨なり、觸れざる者は淨なり、觸るゝ者は突吉羅を犯すと。』時に比丘あり、彼の比丘を嫌ひ、彼の小沙彌の邊に於て、彼の淨食に觸れ、是くの如きの意を作す、「彼の和尙阿闍梨をして、不淨食を得せしめん」と。彼の比丘淨不淨を知らず。佛に白す。佛言はく、『觸るゝ者は不淨なり、觸れざる者は淨なり、觸るゝ者は突吉羅を得』と。時に淨人是くの如きの意を作す、「强えて多く比丘に與へんに、彼れ食して盡きず、餘りあらば我曹當さに食すべし」と。彼の比丘應さに口に遮して、『著くる莫れ』と言ふべし。若し止まざれば、彼れ應さに小しく食器草を離すべし。彼の比丘淨不淨を知らず。佛に白す。佛言はく、『淨なり』と。時に 諸 の居士、食飲の具を持ちて僧伽藍に往き、諸の比丘に與へて掌擧せしむ。後に諸の居士來り、若しは自ら食し．若しは持ちて歸り、若しは比丘に與へて食せしむ。比丘畏愼して敢て食せず、是くの如きの意を作す。「我曹先きに自ら掌擧す」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『此れは是れ檀越の所有なり、檀越の爲めの故に、手を洗つて食を受くることを聽す』と。時に病比丘粥を須ふ。佛言はく、『煮ることを聽す、若し人なければ、自ら煮若しは更互に煮ることを聽す』と。云何が煮んかを知らず。佛言はく、『淨人をして器を淨洗せしめ、水を著け、米を著け、煮て沸せしめ、手を洗ひて受け、然る後に自ら煮て熟せしめよ』と。時に熟するや熟せざるやを知らず。佛言はく、『應さに勺を以て揚げ看よ、若し流下し勺に順へば則ち熟す、若し熟すれば、應さに餘の器中に瀉著すべし』と。彼の粥を瀉ぐ者、復器を具し、疲極す。佛言はく、粥を瀉ぐ者は、幷びに器を具すべからず、應さに更に一人器を具すべし、若しは熱くして手を燒かんには、應さに鑷熱巾若しは草を捉るべし。若し虫粥中に墮ちなば、應さに却くべし』と。彼れ手を燒く。佛言はく、『應さに勺を以て之を去るべし』と。彼れ分たんと欲す。佛言はく、『分つことを聽す』と。復何の器に分たんかを知らず。佛言はく、『若しは鍵

鍇、若しは小鉢、若しは次鉢、若しは勺を以て分を作せ。鉢若し正しからざれば、應さに鉢支を作るべし。若し塵坌すれば、應さに蓋を作るべし』と。彼れ鉢器を洗はずして擧す。餘の比丘見て之を惡む。佛言はく、『應さに淨洗して後に擧すべし』と。旣に洗ひ、灰と澡豆を以て不淨を洗はず。佛言はく、『應さに灰と澡豆とを用ひて洗ふべし』と。洗ひ已りて乾かさず。便ち器を擧するに、便ち虫生ず。佛言はく、『乾かさずして擧すべからず、應さに乾燥して然る後に擧すべし』と。彼れ器に陷孔處ありて食を中に入る、數ば摘して穿壞を洗ふ。佛言はく、『洗ふべき處に隨ひて洗ひ、餘らば無犯なり』と。諸の比丘是くの如きの念を作す。「界內共粥宿界內煮、自煮するを得るや不や」と。佛言はく、『界內共宿し、界內にて煮、自ら煮るべからず』と。諸の比丘是くの如きの念を作す。「重ねて粥を煮るに、界內共宿、界內煮、自煮することを得るや不や」と。佛言はく、『界內共宿、界內煮すべからず、自煮することを聽す』と。諸の比丘是くの如きの念を作す。「盡形壽藥は、界內共宿、界內煮、自煮することを得るや不や」と。佛言はく、『盡形壽藥は、界內共宿、界內煮、自煮することを聽す』と。

時に比丘あり、酥を受けんと欲して錯りて油を受く、受を成ずるや不やを知らず。佛言はく、『受を成ぜず』と。此れを受けんと欲して、錯りて彼れを受く、受を成ずるや不やを知らず。佛言はく、『受を成ぜず』と。比丘あり、忘れて食を受けず、便ち持ちて道にありて行く。水を渡り已つて憶念す、「我れ當さに云何がすべき」と。卽ち佛に白す。佛言はく、『若し是くの如く忘れて食を受けず、便ち持ちて道に在り行くは、若し淨人あるを見れば、應さに食を置いて地に著け、手を淨洗して更に食を受くべし』と。爾の時世尊波羅㮈國に在しき。時に世穀貴く、人民飢餓して乞食得難し。諸の比丘食を以て露處に著き、蓋藏せず、放牛羊人若しは賊持ちて去る。諸の比丘是くの如く念ず、「國土飢餓す、世尊應さに界內共食宿を聽したまふべし」と。佛に白す、佛言はく、『若し穀貴き時

は、界内共食宿を聽す』と。時に諸の比丘、露處に食を煮て蓋藏せず。放牛羊人若しは賊見て持ち去る。丘比是くの如きの念を作す。「穀貴き時は、界内にて應さに煮食することを聽したまふべし」と。佛に白す。佛言はく『穀貴き時は、界内煮を聽す』と。時に諸の比丘、淨人をして食を煮せしむるに、或は分に食を取り、或は都べて食し盡くす。諸の比丘是くの如きの念を作す。「穀貴き時は、應さに自煮食を聽したまふべし」と。佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、自煮食を聽す』と。時に諸の比丘、道路を行き、地に菓あるを見る。比丘淨人を求むる頃に、他人已に取り去る。佛に白す。佛言はく、『草若しは葉を以て菓上を覆ふことを聽す』と。而も人故ほ取り去る。佛に白す。佛言はく『取ることを聽す。若し淨人を見れば、應さに地に置き、手を洗つて受けて食すべし』と。諸の比丘是くの如く念ず。「穀貴き時は、世尊應さに我曹に自ら食を取ることを聽したまふべし」と。佛言はく、『穀貴き時は、自ら取りて食することを聽す』と。時に諸の比丘、早く起きて食を受け已り、食を置いて村に入り、彼れ請を受けて還り、餘の比丘の邊に餘食法を作し、彼れ或は分に食し、或は食し盡す。比丘是くの如きの念を作す。「穀貴き時は、世尊應さに我等に、早く起きて食を受け已り、餘食法を作さずして食することを聽したまふべし」と。佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、餘食法を作さずして食することを聽す』と。時に多知識の長老比丘あり、村に入りて乞食す。食を得已りて持ちて一處に往き、食し已りて、餘食を持つて還りて僧伽藍の中に至り、餘の比丘の間に於て、餘食法を作して更に食し、彼の比丘或は分に食し、若しは都べて食し盡す。諸の比丘是の念を作す。「穀貴き時は、世尊應さに我曹に、食處より食を持ち來り、餘食法を作さずして食することを聽したまふべし」と。佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、食處より食を持ち來り、餘食法を作さずして食することを聽す』と。時に諸の比丘食を受け已りて、菓・胡桃・椑桃・婆陀・菴婆羅阿婆梨を得、餘の比丘の邊に於て餘食法を作し、彼れ或は分に食し、或は都べて食し盡す。諸の比丘是

【三】婆陀、『名義標釋』に、「西方一類の小棗なり」と言つて居る。菴婆羅阿婆梨、是れ菴摩羅果と同じと同書は言つて居る。

くの如きの念を作す。『穀貴き時は、世尊應さに我曹に、是くの如きの菓を得て、餘食法を作さずして食することを聴したまふべし」と。佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、是くの如きの菓を得て、餘食法を作さずして食することを聴す』と。時に諸の比丘、食し已りて水中可食を得たり、藕根、[三]迦婆陀、菱芰藕子なり。比丘の邊に於て餘食法を作し、或は分に食し、或は都べて食し盡くす。

諸の比丘是くの如きの念を作す。「世尊應さに我曹に、穀貴き時は、食し已りて是くの如き水中可食物を得、餘食法を作さずして食することを聴したまふべし」と。佛に白す。佛言はく、『穀貴き時は、食し已りて是くの如き水中可食物を得、餘食法を作さずして食することを聴す』と。時に世穀還た賤し。世尊知りて故らに阿難に問ひたまふ。『我れ穀貴き時に於て、諸の比丘を憐愍するが故に八事を聴す、界内共宿・界内煮・自煮・自手取食・早起受食、食處より餘食を持ち來る、胡桃菓等の食、水中可食物は、足食已りて餘食法を作さずして食することを聴す、諸の比丘今故ほ食するや』と。答へて言はく、『故ほ食す』と。佛言はく、『食すべからず、若し食する者は法の如く治す』と。

爾の時衆僧の食厨壞す。諸の比丘木を以て之を拄ふ。木は不淨地に在り、疑ひあり、淨なるや不やを知らず。佛言はく、『淨なり、食することを得』と。時に夜食移して不淨地に墮つ。諸の比丘淨か不やを知らず。佛に白す。佛言はく、『淨なり』と。夜食を移す、食淨不淨地の間に墮つ。諸の比丘淨か不淨かを知らず。佛に白す。佛言はく、『淨なり』と。時に狗あり、淨處より食を銜んで不淨地に至る。諸の比丘、淨か不淨かを知らず。佛に白す。佛言はく、『淨なり、諸の惡獸鳥銜み去ること亦是くの如し』と。時に比丘あり、彼の比丘を嫌ひ、便ち他の食を移して不淨地に著き、是くの如きの念を作す、「彼れをして淨を得ざらしめん」と。比丘淨か不淨かを知らず。佛に白す。佛言はく、『觸るゝ者は不淨なり、突吉羅を得、觸れざる者は淨なり』と。時に比丘彼の比丘を嫌ひ、是くの如きの意を作す。「淨地に觸れて彼れをして不淨を得せしめん」と。諸の比丘淨か不淨かを知らず。佛

【三】迦婆陀、『名義標釋』に「鷄頭子一名雁喙」等とあり、「水澤中に生じ、菓荷の如し」と言つてる。

に白す。佛言はく、『觸るゝ者は不淨、突吉羅を得、觸れざる者は淨なり』と。時に客比丘あり、來りて淨地を覓め、食を安んぜんと欲す、未だ淨地に至らずして明相出づ。彼れ淨か不淨かを知らず。佛に白す。佛言はく、『淨なり、遠行せんと欲する者も亦是くの如し』と。時に六群比丘、升斗斛秤を畜ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『畜ふべからず』と。時に諸の比丘、胡麻、粳米を得、大豆・小豆・大麥・小麥を得、自ら量らんと欲し、佛に白す。佛言はく、『手にて抄量し、若しは鍵鎡、若しは鉢、若しは小鉢にて量るべし。即ち此の器の大小を以て、准じて斛斗と爲す。時に諸の比丘、酥油蜜黑石蜜を得、稱量せんと欲し、佛に白す。佛言はく、『木に刻して銖兩を作すこと秤の如くし、四五兩を齊限し、准じて以て斤數と爲すことを聽す』と。彼れ上好房を結びて淨處と爲す。酥油脂塗りて泥汚し、或は煙熏汚す。佛に白す。佛言はく、『上房を結んで淨と作すべからず、應さに下なる者を結んで淨處と作すべし』と。諸の比丘菓を得たり。佛言はく、一々分つことを聽す、若し足らざれば、應さに次第を憶し、若し更に得れば、續いて與ふべし。若し多菓を得ば、應さに一人に四五枚を與へ、若しは一抄、若しは一鍵鎡、若しは次鉢、若しは能噉者に隨つて與ふべし。若し故ほ餘りあらば、應さに更に與ふべし。時に彼れ白衣若しは外道に與ふ。佛言はく、『外道白衣に與ふべからず』と。彼の比丘後畏愼して、敢て父母若しは病人、小兒、若しは妊身の婦人、若しは被繫閉者、若しは白衣の僧伽藍中に來至する者に與へず。佛に白す。佛言はく、『是くの如き人には應さに與ふべし。若し故ほ餘りあらば、應さに壓して汁を取りて飲むべし』と、時壓具を須ふ。佛言はく、『畜ふることを聽す。若し汁未だ沸せざるは、醉はざる人は飲むことを得、若し醉ふ人は飲むべからず、若し飲まば法の如く治す』と。爾の時世尊毘舍離に在り、時に衆僧多く供養の飲食あり、諸の比丘濕を患ふ。佛に白す。佛言はく、『吐下藥を作ることを聽す、羹粥を須むれば羹粥を與へ、野鳥肉を須むれば、應さに與ふべし』と。爾の時比丘あり頭痛を患ふ。醫灌鼻せしむ。佛言は

く、『聽す』と。何物を灌ぐかを知らず。佛言はく、『酥油脂を以て灌ぐ』と。云何が灌ぐかを知らず。佛言はく、『羊毛若しは劫貝鳥毛を以て油中に漬し、然る後に滴して鼻中に著くべし』と。四邊に流出す。佛言はく、『灌鼻筒を作ることを聽す』と。彼れ便ち寶を持つて筒を作る。佛言はく、『寶を用ひて作るべからず、應さに骨、若しは牙、若しは角、若しは鐵、若しは銅、若しは白鑞、若しは鉛錫、若しは葦、若しは竹、若しは木を用ふべし』と。彼れ洗はずして便ち擧置す。佛言はく、『洗はずして擧置すべからず』と。洗ひ已りて燥かさず、後虫生ず。佛言はく、『洗ひ已りて燥かさゞるべからず、應さに燥かさしめて擧置すべし』と。時に比丘あり頭痛を患ふ。醫鼻に灌がしむ、藥入らず。佛言はく、『手にて摩頂し、若しは脚の大指を摩し、若しは凝酥を以て鼻を塞ぐことを聽す』と。爾の時比丘あり、風を患ふ。醫煙を用ひしむ。佛言はく、『煙を用ふることを聽す』と。時に煙筒を須ふ。佛言はく、『作ることを聽す』と。彼れ寶を以て作る。佛言はく、『寶を用ひて筒を作るべからず、應さに骨、若しは牙、若しは角、若しは鐵、若しは銅、若しは白鑞、若しは鉛錫、若しは木にて作るべし。若し火燒を患ふれば、煙出處に鐵を安んずることを聽す。若しは筒の零落を患ふ。佛言はく、『嚢を作りて盛ることを聽す。手持堅ならず、佛言はく、『帶を作りて肩上に繋著すべし』と。彼れ丸藥を須ふ。佛言はく、『作ることを聽す』と。手持堅ならず、『應さに熏筒嚢中に盛著すべし』と。時に比丘あり瘡を患ふ。醫塗瘡藥を作らしむ。佛言はく、『作ることを聽す』と。彼れ瘡熟す、應さに刀を以て破りて藥を著くべし。『自今已去、刀を以て瘡を破ることを聽す。瘡を患ひて臭ければ應さに洗ふべし。若し根湯、莖葉羊菓湯及び小便を以て洗へ。洗ふ時手を以て洗ひ痛を患ふれば、鳥毛を以て洗へ。若し藥汁を流し棄つるには、物を以て四邊を擁障せよ。若し燥を患ふれば、油を以て塗れ、若し上り棄つるには、物を以て覆へ。若し瘡臭ければ香を塗れ』と。時に諸の比丘瘧を患ふ。佛言はく、『厚衣にて覆ふことを聽す。若し故ほ寒ければ、應さに臥具氈褥を以

て上を覆ふべし、若し寒止まざれば、一比丘共に臥すべし』と。彼れ畏愼して、敢て病者と共に臥さず。佛言はく、『病人と共に臥すことを聽す』と。時に白衣あり、病みて僧伽藍に來至す。比丘爲めに看病す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『應さに方便して喩し遣はすべし、若し佛法僧を稱擧する者にして、能く事を作さば爲めに作せ』と。病人死す。諸の比丘畏愼して敢て棄てず、世尊是くの如きの語あり、「白衣の喪を棄つべからず」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『應さに僧伽藍淨の爲めの故に之を棄つべし』と。時に六群比丘三處毛を剃る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『三處毛を剃るべからず』と。時に六群比丘互に尾を看る。『誰の尾長く誰の尾短き、何の藥を著く』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『更る尾を相見、其の長短と、何等の藥を著くるやを問ふべからず』と。時に六群比丘酥油を以て大便道に灌ぐ。佛言はく、『灌ぐべからず』と。彼れ人をして灌がしむ。佛言はく、『人をして灌がしむべからず』と。爾の時比丘北方に在りて住し、安居し已りて、形體枯燥し顏色憔悴す。祇桓精舍に至りて佛所に詣り、頭面禮足して却つて一面に坐す。世尊客比丘を慰問したまふ。『汝住處安樂なりや、和合するや不や、乞食を以て疲苦せざるや』と答へて言はく、『住處安樂なり、和合して諍ひなし。彼の國に粥なし、粥を得ざるが故に氣力羸乏す』と。佛問うて言はく、『彼の國にては、常に何等の食を食するや』と。答へて言はく、『彼の國常に餅を食す』と。佛言はく、『餅を食することを聽す』と。爾の時波羅㮈國の市馬人あり、舍衞國に來至し、衆僧の爲めに餅を作り、豆麨を作り、麨を作り、麨籢を與へ、量麨器を與へ、鹽を與へ、盛鹽籢を與へ、苦酒と苦酒瓶とを與へ、[四]木欓を與へ、巵を與へ、匕を與へ、勺を與へ、摩膏を與へ、巵椀を與へ、食を與ふ。根食・莖食・葉食・華食・菓食・油食・胡麻食・石蜜食・細末食なり。佛言はく、『一切受けて食することを聽す』と。諸の比丘是くの如く食し、此の粥は是れ食か非食か、是れ請か非請か、是れ足食か非足食かを知らず。佛言はく、『若し草葉を持つて畫して跡なければ、非食非請非足食なり』と。時

【四】木欓は、大甯なりとあり、桶より短くて潤いとある。

に比丘是くの如きの念を作す。『煮飯汁を飲むは、是れ食か非食か、請か非請か、是れ足食か不や』佛言はく、『若し滓を合して飲まざれば、非食非請非足食なり』と。時に諸の比丘是くの如きの念を作す。『餅は是れ食か非食か、是れ請か非請か、是れ足食か不やを知らず』と。佛言はく、『非食乃至非足食なり』と。時に六群比丘、共宿鹽合食[五]を以て食す。佛言はく、『共宿鹽合食を食すべからず』と。時に優波離偏露右肩にして右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『何等か是れ盡形壽藥の應さに服すべき』と。佛優波離に語りたまふ。『食を爲すに任へざる者は、比丘病の因緣あり、盡形壽應さに服すべし』と。（藥揵度具足し竟る。）

迦絺那衣揵度第八

爾の時世尊舍衞國に在しき。時に衆多の比丘あり、拘薩羅國に在りて安居し、十五日自恣竟り、十六日往いて世尊を見たてまつる。彼れ道路に天雨に値ひ、衣服皆濕ひ、僧伽梨重くして疲極す。舍衞國の世尊の所に詣り、頭面に禮足し已りて、却つて一面に坐す。爾の時世尊、諸の比丘を慰勞して言はく、『汝等の住止和合して安樂なりや不や、乞食を以て苦と爲さゞるや不や、道路疲極せざるや』と。答へて言さく、『住止和合して安樂なり、乞食を以て苦と爲さず。大德、衆多の比丘あり、拘薩羅國の異處に在りて夏安居し竟る。十五日自恣已り、十六日に、便ち衣鉢を持ち、來りて世尊を見たてまつる。道路に天雨に遇ひ、衣服濕ひ、僧伽梨重くして疲極す』と。衆多の糞掃衣の比丘あり、寒雪國の異處に在りて夏安居す。十五日自恣竟り、十六日所得の新故の衣を持ち、便ち往いて世尊を見たてまつる。道路天雨に遇ひ、衣服濕ひ重くして疲極す。祇桓精舍に詣り、佛所に到りて頭面に禮足し已りて、却つて一面に坐す。佛、諸の比丘を慰勞して言はく、『汝等住止和合して安樂なりや不や、乞食を以て苦と爲さゞるや』と。『大德、衆多の持糞掃衣の比丘あり、寒雪國の

【五】共宿鹽合食は、鹽を貯へて置き、經宿して、其の鹽に食物を合して食ふことで、つま所謂宿食の一種である。り鹽漬物を貯へて置いて食ふことである。

異處に在りて夏安居し、十五日自恣竟り、十六日新故の衣を持ちて、來りて世尊を見たてまつる。道路に天雨に遇ひ、衣服濕ひ、重くして疲極す』と。爾の時世尊、此の因緣を以て比丘僧を集め、諸の比丘に告げたまはく『安居竟らば、四事あり應さに作すべし。何等か四と爲す。自恣すべし、界を解くべし、界を結すべし、功德衣を受くべし、此の四事あり應さに作すべし。五事の因緣ありて功德衣を受く、何等か五なる。長衣あり、失衣せず、別衆食す、展轉食す、食前食後比丘に囑せずして聚落に入る、此くの如きの五事の因緣あり、功德衣を受く。功德衣を受け已りて五事を得。何等か五なる。長衣を畜ふることを得、離衣宿す、別衆食す、展轉食す、食前食後比丘に囑せずして聚落に入る、功德衣を受け已りて五事を作すことを得、衆僧應さに是くの如くにして功德衣を受くべし。若しは新衣、若しは檀越施衣、若しは糞掃衣を得、若し是れ新衣、若し是れ故衣、新物帖は作淨せよ。若し已に浣ひ、浣ひ已らば納して作淨せよ。邪命を以て得ざれ、相を以て得ざれ、激發して得ざれ、經宿して得ざれ。捨墮せずして作淨し、卽日來り、法に應ず、四周に緣あり、五條に十隔を作る、是くの如きの衣は、僧應さに受けて功德衣を作るべし。若し復是れに過ぐる者も亦應さに受くべし。應さに自ら浣染舒張輾治し、裁して十隔に作りて縫治すべし、應さに衆僧の前に在りて受くべし、僧已に功德衣を受け竟る。云何が僧功德衣を受くることを成ぜざる。但浣ひ已るは功德衣を受くることを成ぜず。但輾治せず、但安緣せず、但裁隔已ず、但編邊せず、但安紐せず、但作葉せず、但安鉤せず、若しは邪命にして得、若しは諂曲にして衣を得、相にて衣を得、激發して衣を得、經宿して衣を得、捨墮して作淨せず、卽日來らず、法に應ぜずして衣を受け、四周安緣せず、僧前に在りて受けず、若しは有難に僧伽梨なし、若しは僧如法に功德衣を受け、而かも彼れは界外に在りて住し、自ら衣を受く、是くの如きは功德衣を受くることを成ぜず。云何が功德衣を受くることを成ずる。若し新衣・檀越衣・糞掃衣を得、若しは是れ新衣、若しは是れ故衣、新

物を帖するは作淨し、若し已に浣ひ、浣ひ已りて納して作淨し、邪命に得るにあらず、諂曲して得るにあらず、相を以て得るにあらず、激發を以て得るにあらず、經宿せず、捨墮せずして作淨し、卽日來り、法に應じ、四周に縁を安んじ、五條に十隔を作り、若しは過ぐ、是くの如きの衣を受けて功德衣を作る。自ら浣染舒張し輾治して裁して十隔と作して縫治し、衆僧の前に在りて受け、衆僧已に功德衣を受け竟り、若しは如法に功德衣を受けて界內に在り、是くの如きは功德衣を受くることを成ず。時に六群比丘、大色の染衣を以て、僧の爲めに受けて功德衣を作る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『大色の染衣を以て功德衣を作るべからず』と。彼れ錦を用ひて作る。佛言はく、『錦を用ふべからず』と。彼れ白色を用ふ。佛言はく、『白色を用ふべからず、自今已去、袈裟色を用ふることを聽す』と。爾の時異住處あり、現前僧大貴價の功德衣を得たり。彼の比丘云何せんを知らず。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『白を作すことを聽す。應さに是くの如く白すべし。「大德僧聽け、今日衆僧功德衣を受く、若し僧時到らば、僧衆僧の和合して功德衣を受くることを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。是くの如く白し已りて、一比丘を差し、應さに問うて言ふべし。「誰か能く僧の爲めに功德衣を持つ」と。能くする者答へて「我れ能くせん」と言はゞ、衆中羯磨を作すに堪能なる者を差し、是くの如く白す。「大德僧聽け、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧某甲比丘を差し、僧の爲めに功德衣を持つことを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、僧某甲比丘を差し、僧の爲めに功德衣を持つ、誰か長老、僧某甲比丘を差し、僧の爲めに功德衣を持つことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に某甲比丘を差し、僧の爲めに功德衣を持つことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。僧卽ち應さに羯磨衣を、功德衣を持つ比丘に與へ、是くの如きの言を作すべし。「大德僧聽け、此の住處の僧可分衣を得たり、現前僧應さに分つべし。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今此の衣を持つて某甲比丘に與へ、此の比丘當

さに此の衣を持つて僧の爲めに受けて功德衣を作り、此の住所に於て持つべし、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の住處の僧可分衣を得たり、現前僧應さに分つべし。僧今此の衣を以て某甲比丘に與ふ、此の比丘當さに此の衣を持つて、僧の爲めに受けて功德衣を作り、此の住處に於て持つべし。誰か諸の長老、僧此の衣を持つて某甲比丘に與へ、某甲比丘當さに此の衣を持つて、僧の爲めに受けて功德衣を作り、此の住處に於て持つことを忍せざる者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に此の衣を持つて某甲比丘に與へ、某甲比丘當さに此の衣を持つて、僧の爲めに受けて功德衣を作り、此の住處に於て持つことを忍し竟る。僧忍して默然たるが故に、是の事是くの如く持つ。彼の比丘應さに起つて衣を捉りて諸の比丘に隨ひ、手衣に及ぶを得ば、「相了るを得たり」と言ひ、應さに是くの如きの言を作すべし。「此の衣衆僧當さに受けて功德衣を作るべし、此の衣衆僧今受け功德衣を作れ、此の衣衆僧已に受け、功德衣を作り竟る」と。是くの如く第二第三說く。彼の諸の比丘應さに是くの如きの語を作すべし。「其の受くる者は已に善く受く、此の中の所有の功德は名稱は我れに屬す」と。』彼れ應さに答へて『爾り』と言ふべし。爾の時優波離座より起ちて、偏袒右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、世尊に白し言さく、『過去の三句を以てせんや、未來を以てせんや、現在を以て功德衣を受くるとせんや』と。佛優波離に語りたまふ。『滿足語の爲めの故に九句を說く、過去の三句を以て功德衣を受けず、亦未來の三句を以て功德衣を受けず、現在の三句を以て功德衣を受けず。何を以ての故に。優波離、過去は已に滅し、未來は未だ至らず、是の故に現在の三句を以て功德衣を受く。若し未成衣を得ば、應さに衆僧中に羯磨して、比丘を差して作らしむべし。若し已成の者を得ば、應さに如法に受くべし』と。六群比丘、春夏冬一切時中、僧の爲めに功德衣を受く。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『春夏冬一切時中功德衣を受くべからず、自今已去、自恣竟りて功德衣を受けず、一月功德衣を受くることを聽す』と。五月彼の六

群比丘功德衣を出さず、是くの如きの意を作す。「久しく五事放捨を得るを以ての故に」と。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『是くの如きの意を作すべからず、「久しく五事放捨を得るを以ての故に」と。而も功德衣を出さず。自今已去、冬四月竟りて、僧應さに功德衣を出すべきことを聽す、應さに是くの如く出すべし。僧集まりて和合し、未受大戒の者も出で、來らざるものは欲を說く。「僧今何の作爲する所ぞ。」と、答へて言ふべし、「功德衣を出す」と。「大德僧聽け、今日衆僧功德衣を出す、白すること是くの如し」と。應さに是くの如きの白を作して功德衣を出すべし。若し出さゞれば、功德衣の分齊を過ぐ、突吉羅なり。八の因緣ありて功德衣を捨つ。去と竟と不竟と失と斷望と聞と出界と共出となり。若し比丘功德衣を受け竟りて界外に出で、不還意を作して出で去り、去れば便ち功德衣を失ふ。若し比丘功德衣を受け竟り、界外に出でゝ衣を作る、彼れ衣を作り竟れば、便ち功德衣を失ふ。若し比丘功德衣を受け竟り、界外に出でゝ是くの如きの念を作す、「亦衣を作らず、亦還らず」と。[六]衣不竟なり、功德衣を捨つ。若し比丘功德衣を受け已り、界外に出でゝ衣を作り竟り、彼の比丘衣を失すれば、功德衣も亦失ふ。若し比丘功德衣を受け竟り、界外に出でゝ、衣を得んことを悕望す。彼の比丘界外に出でゝ、衣を得んと悕望する處に至る、比丘見已りて衣を得ず、望み斷ゆ。更に有望の處なし、彼れ望み斷ゆれば功德衣を失ひ已る。若し比丘功德衣を受け竟り、界外に出で去りて衣を作る、衣を作り竟りて衆僧功德衣を出すと聞く、彼れ聞けば便ち功德衣を失ひ已る。若し比丘功德衣を受け竟り、界外に出でゝ衣を作り竟り、數ば還意を作して界外に在り、衆僧功德衣を出せば、彼れ界外に在りて功德衣を失ひ已る。若し比丘功德衣を受け竟り、界外に在りて衣を作る、彼の衣若しは竟り若しは竟らず住處に還りて、彼の比丘和合して衣を出す。是れを八事と爲す。

復六事あり、若し比丘功德衣を受け竟り、界外に出でゝ不還意を作して去る、未だ衣を得ずして

【六】衣不竟は、衣を作り竟らずといふ意である。

去れば便ち功德衣を失ふ。上の八事中の、失衣及び斷望の二句を除き、餘は上の如し。復六事あり、若し比丘功德衣を受け竟り、衣を持ちて界外に出でゝ衣を作る、衣を作り竟りて便ち功德衣を失ふ。上の八事中の、去及び望斷の二句を除き、餘は上の如し。未得衣に復十五句あり次ぎに已得衣にも亦十五句あり。得衣未得衣に復十五句あり、此れは上の八事を錯互す、更に異なし、故に出さず。復十二事あり、若し比丘功德衣を受け已りて出で去り、悕望衣を求めて所望衣を得、界外に在りて衣を作る、衣を作り竟れば功德衣を失ふ。不竟の句も亦是くの如し。失も亦是くの如し。望斷上の如し。若し比丘功德衣を受け竟り、出て去りて衣を得んと望む、人に語らず、當さに還るべし。界外に出でゝ、所望衣處にて而も所望の衣を得ず、乃ち非所望衣を得、界外に在りて衣を作る、衣を作り竟れば便ち功德衣を失ふ。不竟も亦是くの如し、失も亦是くの如し、望斷上の如し。若し比丘功德衣を受け竟り、出て去りて人に語らず、當さに還るべし、亦還意を作さず、界外に在りて望衣處に至り、所望の衣を得、所望の衣を得ず、界外に在りて衣を作り、衣を作り竟れば便ち功德衣を失ふ。不竟も亦是くの如し、失衣も亦是くの如し、望斷は上の如し。復十二事あり、所望の衣を得、所望の衣を得ず、上の十二事に同じ。復九事あり、若し比丘功德衣を得竟りて出で去り、未だ衣を得ずして界外に在り。餘の比丘問うて言はく、『汝何處に在りて宿する。衣は何處に在る、何ぞ持ち來らざる、汝衣を作るとせんや』と。彼の比丘還りて住處に至り、衆僧功德衣を出すと聞き、彼れ是くの如きの念を作す。「僧今功德衣を出す、方さに衣を作らん」と、彼れ卽ち衣を作り竟れば功德衣を失ふ。不作衣も亦是くの如し、失衣も是くの如し、此れは是れ界內に在りて聞くの三句、衣を持って界外に出で、道路に聞くの三句も亦是くの如し。衣を持ちて彼の比丘の所に至るの三句も亦是くの如し。是れを九句事と爲す。次ぎに已に衣を得るの九句も亦是くの如し。衣を得衣を得ざる、各九事あり、亦是くの如し。若し比丘功德衣を受け已り、界外に出でゝ餘方に至る、彼れ是の念を作して言はく、「若し善件を得ば當さに去るべし、若し善件を得ざれば當さに還るべし」と、中道に至りて衆僧功德衣を出すと聞き、彼れ是くの如く念ず。「我れ當さに衣を作るべし」と。衣を作り竟れば、彼れ功德衣を失ふ。不竟も亦是くの如し、失衣も亦是くの如し。界外も亦是くの如し。聞も亦是くの如し。五句あり。若し比丘功德衣を竟り、靜處に往かんと欲す、清淨若しは樂ならば、彼れ當さに住すべし、樂ならずん

ば當さに還るべし。彼の比丘彼の間に至り、衆僧功德衣を出すと聞き、彼れ是の言を作す、『我曹當さに衣を作るべし』と。衣を作り竟れば功德を捨つ。不竟も亦是くの如し、失衣も亦是くの如し、界外も亦是くの如し、聞も亦是くの如し、五句あり。二種の捨功德衣あり。功德衣を持つて比丘界外に出でゝ宿する。衆僧和合して共出するとなり。

（迦絺那衣揵度具足し竟る。）

拘睒彌揵度第九

爾の時世尊拘睒彌に在しき。時に比丘ありて戒を犯す。或は言ふあり、『犯戒なり』と。或は言ふあり、『不犯なり』と。是の中見犯の比丘、不見犯の比丘に語りて言はく、『此の比丘實に犯す、是れ不犯に非ず』と。彼の不見犯の比丘意に解し、卽ち言ふ『是くの如し、是の比丘實に戒を犯す、是れ不犯に非ず』と。彼れ卽ち和合して擧罪す。犯罪の比丘言はく『我れ不犯なり、擧を成ぜず、非法に我れを擧するも羯磨成ぜず』と。彼れ卽ち人間に往いて朋黨を求め、餘の比丘に語つて言はく『我れ不犯なり、擧を成ぜず、非法に我れを擧するも羯磨成ぜず』と。彼の比丘の見も是くの如し。『此の比丘不犯なり、擧を成ぜず、非法の擧羯磨は成ぜず』と。犯罪の比丘卽ち餘の部黨の隨擧の比丘を將ひ、來りて先に不見犯と言ひし比丘の所に至り、語りて言はく『長老此の比丘は戒を犯さず、擧を成ぜず、非法に他を擧するも羯磨成ぜず』と。彼の比丘還た不犯を見、便ち言はく『彼れ不犯なり、擧を成ぜず、非法の擧羯磨は成ぜず』と。彼の被擧隨擧の比丘、見犯の比丘と別部說戒羯磨す。時に擧罪比丘世尊の所に往き、頭面禮足して却つて一面に坐し、佛に白して言さく『此の被擧隨擧の比丘、我等と別部說戒羯磨す』と。佛言はく『此の癡人僧を破す。若し彼れ我が所說の如く、羯磨說戒せんには、羯磨成就す不犯なり。汝等も若し我が所說の如く羯磨說戒せば、亦成就して不犯なり。何を以ての故に。二の不同住處あり。何等か二なる。彼の比丘自ら不同住を作す

と、若しは僧ために、不同住を作すとなり。云何が比丘自ら不同住を作す。若し比丘、僧破して外の朋黨を求む、是れを比丘自ら不同住を作すと爲す。云何が僧ために不同住を作す。僧ために不見羯磨・不懺悔羯磨・惡見不捨羯磨を作す、是れを僧ために不同住を作すと爲す。是れを二種の不同住と爲す。二種の同住處あり、是の比丘自の同住處を作すと、若しは僧ために同住處を作すとなり。云何が自ら同住を作す。此の比丘僧自ら部黨を破し、外の善部黨を求め、此の比丘自ら同住を作す。云何が僧ために同住を作す。衆僧和合して、先きにために不見羯磨・不懺悔羯磨・惡見不捨羯磨を作し、後に和合して僧還た解く、是れを僧ために同住を作すと爲す。是れを二種の同住處と爲す』と。彼の被擧の比丘、隨擧の比丘、此の擧比丘と鬪諍し、共に相罵詈誹謗して互に長短を求む。時に衆多の比丘、世尊の所に往き、頭面に作禮して、却つて一面に坐し、世尊に白して言さく、『大德、彼の被擧の比丘、隨擧の比丘、此の擧比丘と鬪諍し、共に相罵詈誹謗して互に長短を求む我等當さに云何がすべき』と。佛言はく、『衆僧に非法和合を破することを聽す。應さに是くの如き處に在りて坐し、身口をして惡を出さゞらしむべし。應さに一人を隔てゝ坐すべし』と。爾の時世尊被擧比丘の所に往き、是くの如きの言を作したまふ。『汝曹罪を犯して、而かも犯さずと言つて、懺悔せざること莫れ、何を以ての故に。若し比丘罪を犯さば、餘の比丘言はく、「長老罪を犯す、自ら見るや不や」と。答へて言はく、「見ず」と。彼の比丘多聞にして阿含を知り、法を持ち律を持ち摩夷を知り、多く伴黨を得、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・大臣、種々の沙門外道なり。彼の犯罪の比丘是の念を作さく、「彼の比丘多聞にして、阿含を知り、法を持ち、律を持ち、摩夷を知り、多く伴黨あり、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・大臣、種々の沙門外道なり。我れ若し罪を見ざれば、此の比丘今即ち當さに我が爲めに不見罪羯磨・不懺悔羯磨・惡見不捨羯磨を爲すべし。若し彼の比丘我がために、不見罪羯磨・不懺悔羯磨・惡見不捨羯磨を作さば、彼の比丘復我れと與に羯磨說戒を共

にせず、我れと共に自恣し、同一屋に住し、一處に坐し、一床一板に在りて前食後食せず、亦歳數の大小に隨つて、恭敬禮拜執手迎逆せず、若し彼の比丘我れと同一羯磨し、共に說戒せず、乃至手を執り、迎逆せざれば、衆僧便ち鬪諍の事生ずるあり、共に相罵詈誹謗して長短を伺求し、僧便乃ち破すべし、僧をして塵垢せしめ、僧をして別異に住せしむ」と。若し比丘此の破僧事を重んずる者は、應さに彼の言の如くすべし、罪あらば應さに如法に懺悔すべし。止みね止みね比丘、共に鬪諍罵詈し、共に相誹謗し、共の長短を伺求すること莫れ。汝等一切當さに共に和合して齊しく集まり、同一師學にして水乳の合するが如くし、佛法を利益して安樂に住すべし』と。爾の時世尊、彼擧比丘、隨擧比丘に告げて是くの如く言ひ已り、便ち擧他比丘の所に往きて語りて言はく、『汝等數ば他の比丘の事を擧する莫れ、何を以ての故に。是の中の比丘事を犯さば、彼の比丘問うて言へ、『長老自ら犯罪を見るや不や」と。彼れ「見ず」と言はゞ、彼の比丘若し多聞にして阿含を知り、法を持ち、律を持ち、摩夷を知り、朋黨多く、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・大臣、種々の沙門外道ならば、彼の比丘是くの如きの念を作さん、『彼の比丘多聞にして阿含を知り、法を持ち、律を持ち、摩夷を知り、朋黨多く、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・大臣、種々の沙門外道なり。若し彼れ罪を見ずと言はじ、我等今卽ち當さに擧して不見罪羯磨・不懺悔羯磨・惡見不捨羯磨を作すべし。我等若しために不見罪羯磨・不懺悔羯磨・惡見不捨羯磨を作さば、我等便ち彼れと羯磨說戒を共一にせず、共に自恣せず、乃至執手迎逆せず、我等共一に羯磨說戒せず、乃至執手迎逆せざれば、衆僧便ち當さに鬪諍して、共に相罵詈誹謗して長短を伺求すべし、僧をして破せしめ、僧をして塵垢せしめ、僧をして別住せしむ」」と。若し比丘此の破僧事を重んずる者は、彼の比丘の事を擧すべからず。止みね止みね比丘、鬪諍して共に相罵詈誹謗し、長短を伺求すること莫れ、汝等一切當さに共に齊しく集まり、同一師學にして水乳の合するが如くし、佛法を利益して安樂に住すべし』と。爾の時世尊彼の比丘

に語り已りて此の夜過ぎ、明旦衣を著け鉢を持ち、拘睒彌に入りて乞食し已り、還りて僧伽藍の中に至り、此の因縁を以て比丘僧を集めて告げて言はく、『乃往過去世に、伽奢王[七]、梵施[八]あり、拘薩羅王長生の父祖の怨仇なり。梵施王兵衆威力勇健にして財寶復多し。長生王兵衆威力如かず、財寶も復少し。後異時に梵施王、四部の兵と拘薩羅國に來至し、長生王と鬪し、一切の國土兵衆庫藏珍寶を奪ふ。時に王長生第一夫人と逃走して波羅㮈國に來至し、假りに螺髻婆羅門と作り、夫婦陶師の家に在りて住す。後異時に長生王第一の夫人、心に是くの如きの念を生ず「其の地平整にして、四交道頭に、日初出の時、四部兵の共に鬪つて、刀を洗ふ汁を見て飮むことを得んと欲す」と。卽ち王の所に至りて白して言さく、「王知らんと欲するや不や、我れ今是くの如く念ず、其の地平整にして、四交道頭に、日初出の時、四部兵の共に鬪つて刀を洗ふ汁を見て飮むことを得んと欲す」と。王言はく、「汝何によりてか、是くの如きの願に從ふを得ん。梵施王は我が父祖と怨仇なり、我が國土兵衆庫藏珍寶を奪ひて遺餘あることなし」と。夫人言はく、「我れ若し是くの如きの願に從ふことを得ずんば、便ち死時に當る」と。梵施王に大臣あり、富盧醯侈[九]と字づく、是れ長生王の伴なり。長生王婦に語りて言はく、「我れ伴に語りて知らしむべし」と。時に長生王卽ち富盧醯侈の所に至り、是くの如きの言を語る『伴今知るや不や、我が第一の夫人是くの如きの念を作す。「其の地平整にして、四交の道頭に於て、日初出の時、四部兵の鬪つて刀を洗ふ汁を見て、飮むことを得んと欲す」と。念じ已りて卽ち來りて我れに白して是くの如きの事を說く。我れ語りて言はく、「汝今何によりてか是くの如きの願に從ふを得る、梵施王我が父祖と怨仇なり、我が一切の國土兵衆庫藏財寶を奪つて都べて盡く」と。夫人言はく、「是くの如きの願に從ふを得ざれば、便ち當さに死すべし」と。我れ卽ち言はく、「我れ此の因縁を以て、伴に語りて知らしむべし」と。』富盧醯侈言はく、『小しく止みね、我れ其の腹內を瞻ん」と。時に富盧醯侈往いて長生王の第一夫人の腹內を瞻已りて、卽

【七】伽奢(Kāśī)。
【八】梵施(Brahmadatta)。
【九】富盧醯侈(Purohita)。

ち偏へに右肩を露はし、長跪して手を執り、三反稱へて言はく、「拘薩羅王腹内に在り」と。夫人に語りて言はく、「當さに其の地平整にして、四交の道頭に於て、日初出の時、四部の兵の共に闘つて刀を洗ふの汁を見て、飲むことを得、某處に在りて住すべし」と。時に富盧醯修梵施王の所に往き、白すこと是くの如し。言はく、「王知らんと欲するや不や、是くの如きの星ありて出づ、時應さに淸旦日初出の時に、四交道頭に在りて四部の兵をして、共に闘つて刀刄を洗はしむべし」と。王言はく、「富盧醯修今正さに是れ時なり」と。時に富盧醯修卽ち四部の兵を集め、四交道頭に於て共に闘つて刀刄を洗ふ。時に長生王の夫人、其の地平整にして、四交道頭に於て、日初出の時、四部兵共に闘つて刀刄を洗ふを見ることを得、時に夫人洗刀汁を得て飲む、已りて胞胎足るを成じ、遂に便ち男兒を生む、顏貌端正なり、卽ち字けて長と爲す。其の年長大なり、王長生甚だ之を愛念す。時に王梵施、拘薩羅王長生と、第一夫人と逃走し、螺髻婆羅門と作り、陶師の家に在りて住すと聞き、卽ち傍人に勅して言はく、『汝陶師の家に往き、長生王及び第一夫人を收め取り、堅牢に執持して將來し、幷びに惡聲皷を打ち、爲めに死相を現じ、右門より出で、破して七分となし、尖標頭に著けよ』と。時に王長生、梵施王の是くの如きの敎勅を作すと聞き、卽ち兒の長を喚びて語りて言はく、『汝知るや不や、伽奢國王梵施は、是れ我が父祖の怨仇なり、彼れ我が一切の國土兵衆財寶を奪ひて都べて盡く、幷びに傍人に勅して我等を殺さしむ、汝は逃走すべし、梵施王の爲めに殺さるゝこと勿れ』と。時に王子長卽ち逃走す。時に梵施王、人をして卽ち王長生及び第一夫人を收めしめ、執へ縛し、幷びに惡聲皷を打ちて死相を現ず、衆人聚集す。時に長生王子、微服して父母の後を尋ね、啼泣涙を流す。時に王長生、顧みて其の子を見、是くの如きの言を作す。「怨みに輕重なし、皆報ずるに足らず、怨みを以て怨みに報ずれば、怨み終に除かず、唯怨みなくして怨を除くあるのみ」と。是くの如く再三言ふ。時に衆人是くの如きの念を作す。「拘薩羅王顚狂心亂す、今日方さに長摩納を

教ふ、今誰か是れ長摩納ならんや」と。時に衆人亦是くの如く三たび言ふ。時に梵施王、人をして長生王を將ひて右門より出で、分ちて七分となし、尖標頭に著けしむ、時に長生王子長、彼れより還つて波羅㮈城に入り、種々の技術を學び、書を學び、瞻相星宿祕讖算數を學び、及び諸の形像を畫き、音樂戲笑も、衆中に在りて最も第一たり。爾の時梵施王の妓女所住の處、邊を去ること遠からずして調象師あり。時に王子長、象師の所に往いて語つて言はく、「我れ調象を學ばんと欲す」と。答へて言はく、「學ぶべし」と。時に長摩納、夜時半ばを過ぎ、琴を彈じて歌戲し美音聲を出す。時に王梵施夜に於て彈琴歌戲の聲を聞く、其の音調美なり、聞き已りて卽ち傍人に問うて言はく、「誰か夜過半に於て彈琴歌戲し其の音調好き」と。答へて言はく、「王今知るや不や、王の妓女を去ること遠からずして調象師あり、彼れに弟子あり長摩納と名づく、是れ彼れ夜の過半に於て彈琴歌戲するの聲なり、其の音調好し」と。聞き已りて卽ち言はく「喚び來れ、我れ之を見んと欲す」と。卽ち教を受けて往いて喚び來る。頭面に王足を禮し、已りて一面に住す。王問うて言はく、「汝實に夜過半に於て、彈琴歌戲して美音聲を出せるや」と。答へて言はく『爾り』と。王言はく、「汝今我が前に於て、彈琴歌戲して美音聲を出すべし」と。時に卽ち王の前に於て、彈琴歌戲して美音聲を出す。王之を聞いて極めて大に歡喜す。王言はく、「此に住せよ、常さに汝に食を與ふべし」と。答へて言はく、「爾り」と。時に王梵施の第一夫人屋に住して人の入るを得る者なし。唯王と夫人と及び長摩納のみ。後異時に、夫人摩尼珠を失ふ。夫人王の所に至りて白して言さく、「王知るや不や、我れ摩尼珠を失ふ」と。王言はく、「誰か入る者ある」と。夫人言はく、「更に人の入るなし、唯王と及び我が長摩納のみ」と。時に王卽ち長摩納を喚びて問うて言はく、「我が第一夫人珠を失ふ、汝取るや」と。彼れ是くの如きの念を作す。「王夫人の屋は、更に人の入るなし、唯王と夫人と及び我れのみあり、若し我れ取らずと言はゞ、恐らくは王必ず常さに我れを治すべし、我れ且つ由來樂を習ふ、

苦毒に堪へず」と。即ち報へて言はく、「我れ取る」と。王言はく、「誰と共に取る」と。答へて言はく、「王の太子と共にす」と。「更に復誰かある」と。答へて言はく、「復第一有智慧の大臣と共にす」「更に復誰かある」と。答へて言はく、「王の國中の第一の長者と與にす」と。「更に復誰と共にする」と。答へて言はく、「第一の婬女と共にす」と。時に王即ち長摩納と太子と大臣と、長者と第一婬女とを收めて之を繫ぐ。王の太子長摩納に語つて言はく、「汝我れは實に珠を取らざることを知る、而も我れ取れりと虛言するや」と。長摩納言はく、「汝實に取らず、我れも亦取らず、汝は是れ王の第一の太子、王の愛重する所、必ず珠の爲めの故に汝の命を斷ぜず、是れを以ての故に相引くのみ」と。第一有智慧の大臣長摩納に語りて言はく、「汝實に我れ珠を取らざることを知る、而も我れ取ると虛言するや」と。長摩納言はく、「汝實に取らず、我れも亦取らず、汝は是れ有智慧の大臣、能く覓むれば珠を得ん、是の故に相引くのみ」と。大長者長摩納に語りて言はく、「汝實に我が珠を取らざることを知る、而も我れ取ると虛言するや」と。長摩納答へて言はく、「汝實に取らず、我れも亦取らず、汝は國の大長者なり、大富にして財寶無數なり、若し王珠を須むれば、汝能く之を與へん、是れを以ての故に相引くのみ」と。第一の婬女長摩納に語りて言はく、「汝我が珠を取らざることを知る、而も我れ取れりと虛言するや」と。答へて言はく、「汝實に取らず、我れも亦取らず、汝は是れ第一の婬女、多人意を繫けて汝に在り、未だ汝を得ざるものは、必ず求覓して珠を得ん、是れを以ての故に相引くのみ」と。時に波羅㮈國の白賊、王の第一夫人珠を失ひ、王は摩納と太子と大臣と大長者と婬女とを收繫すと聞き、即ち長摩納の所に來至して問うて言はく、「王夫人實に珠を失ふや不や」と。答へて言はく、「珠を失ふ」と。問うて言はく、「誰か夫人の屋に入る」と答へて言はく、「唯王と夫人と及び我れとなり」と。問うて言はく、「誰か中に在りて行く」と。答へて言はく、「獼猴あり中に在りて行く」と。彼れ言はく、「今珠得べきのみ」と。時に賊即ち梵施王の所に行

き、王に白して言さく、「王今知るや不や、今珠得べし、王女人の莊嚴具を出すべし」と。王即ち種種の莊嚴具の瓔珞とを出す。衆の獼猴を集め、瓔珞を著けしめて置いて宮中に在り。時に彼れ先きに内にある獼猴、諸の獼猴の皆瓔珞を著くるを見、便ち偸むところの夫人の珠を出し、以て自ら身を嚴る。時に賊即ち四方圍遶して獼猴を捕取し、以て王に白して言さく、「王今知るや不や、我れ已に珠を得たり」と。時に王梵施、長摩納を喚び來らしめて言はく、「汝珠を取らず、何が故に取ると言ふや」と。即ち王に答へて言はく、「我れ是くの如きの念を作す。夫人の屋、人の入る者なし、唯王と夫人と及び我れのみ。我れ若し取らずと言はゞ、恐らくは我を治めて苦毒せん。而も我れは苦毒に堪へず、故に之を取ると言ふのみ」と。「汝何が故に太子を引くや」と。答へて言はく、「我れ是の念を作す、太子は王甚だ愛念す、必ず珠を以ての故に、而も其の命を斷ぜず、是れを以ての故に太子を引くのみ」と。「汝何が故に第一大臣を引く」と。答へて言はく、「我れ是の念を作す、大臣は多知、必ず能く方便を作して、還求して珠を得ん、是れを以ての故に引くのみ」と。「汝復何が故に大長者を引く」と。答へて言はく、「我れ是の念を作す、王若し寶を須むれば、長者大富、能く王に珠を與ふるに足る、是の故に引くのみ」と。「汝復何が故に婬女を引く」と。答へて言はく、「我れ是の念を作す、國中の人と及び衆賊と、心を繫けて彼の婬女に在り、其の未だ得ざる者は、必ず能く婬女の爲めの故に、還覓して珠を得ん、是の故に引くのみ」と。王言はく、「未曾有なり長摩納、是くの如きの智慧あり」、王即ち長摩納を用ひて一切處の尊と爲す。後異時に於て、梵施王四部の兵を嚴にして出行遊獵す。時に王及び四部の兵、各々衆亂して鹿を逐ふ。時に天熱くして疲極す。時に長摩納即ち王車を將つて屏處に至りて止息す。王車を下りて車陰中に在り、長摩納の膝上を枕にして眠る。時に長摩納是くの如きの念を作す、「此の王は是れ我が父祖の怨仇なり、我が國土を破り、我が父祖の四部の兵及び庫藏の寶物を奪ひて一切皆盡く、我が父母を殺し、拘薩羅の王種を斷ず、

昔日の怨みを念ずるが故に、卽時に劍を拔いて王の頭を斷ぜんと欲す。父の往言を念ずるに、「怨みは輕重なし、報ゆるに足らず、怨みを以て怨みを除けば、怨みは已む時なし。唯無怨ありて怨みは自ら除くのみ」と。卽ち還た劍を內る。時に梵施王驚き覺む。長摩納王に問うて言はく、「何が故に驚くや」と。王言はく、「拘薩羅王に兒あり、長摩納と字づく、劍を拔いて我が命を斷ぜんと欲す」と。卽ち王の答へて言はく、「今何の處にか長生王の子長摩納ある、唯王と及び我れとあるのみ、王唯安眠せよ」と。王第二に眠るに亦是くの如し。乃至第三に眠る。長摩納前の如く思惟し、復劍を拔く、王卽ち驚き覺む。時に長摩納卽ち王の頭を撮る。王言はく、「汝我れを殺さんと欲するや」と。答へて言はく、「爾り」と。「何を以ての故」と。答へて言はく、「我れは是れ長生王の子長摩納なり、王は是れ父祖の怨仇、我が國土を破り、我が父の一切の兵衆庫藏の寶物を奪ひて都べて盡く、我が父母を殺し、拘薩羅の王種を斷ず、此の怨仇を念ずるが故に、是の故に王を殺さんと欲するのみ」と。王卽ち語りて言はく、「今汝が父祖の兵衆國土一切の珍寶を還さん、我れを殺すことを得る莫れ」と。答へて言はく、「我れ當さに王命を活かすべし、王も亦我れを殺すこと莫れ」と。王答へて言はく、「亦汝の命を赦さん」と。時に彼れ共に父祖の時の怨みを除き、卽ち共に和合して猶ほ父子の如し、共に同一乘して波羅㮈國に還る。時に王梵施諸の大臣を集めて是くの如きの言を告ぐ。「若し長生王の子長摩納を見ば、當さに取るべきや云何」と。或は言ふものあり、「治めて如是ならしめよ」と。或は言ふあり、「刀を以て之を殺せ」と。或は言ふあり、「之を車輾せよ」と。或は言ふあり、「高く其の頭を懸けよ」と。或は言ふあり、「然やして炬の如くならしめよ」と。或は言ふあり、「熱油にて之を煎よ」と。或は言ふあり、「其の身を劖せよ」と。或は言ふあり、「利鉤にて肉を鉤せよ」と。或は言ふあり、「蜜を以て之を煮よ」と。或は言ふあり、「身を纏うて火を放て」と。或は言ふあり、「衣に裹んで之を燒け」と。或は言ふあり、「手を截り脚を截り、耳を截り鼻を截れ」と。或は言ふ、「生貫して

尖標頭に著けよ」と。或は言ふ、「頭を截れ」と。王卽ち諸臣に示して言はく、「此れは是れ長生王の子長摩納なり、自今已去一切の衆人論說することを得ざれ、何を以ての故に。彼れ我が命を活かせり、我れも彼れの命を活せり」と。時に王卽ち其の父の時の兵衆及び一切の國土、庫藏の珍寶を還し、卽ち其の女を莊嚴して之に與ふ」と。汝等諸の比丘、彼れ刀劍を執れる長摩納すら、父祖の怨仇あるも還た共に和合すること、猶ほ父子の如し。汝等出家して道を爲す。同一師同一學にして水乳の和合するが如し、佛法を利益し、安樂に住止せよ。止みね諸の比丘、共に鬪諍し、共に相罵詈し誹謗し、互に長短を求むること莫れ、和合して共に諍ふこと莫れ、同一師學は水乳の合するが如し、佛法を利益し安樂に住せよ』と。中に異比丘あり、佛に白して言さく、『世尊、但自ら安住したまへ、如來は是れ法主たり、諸の比丘鬪諍の事は自ら當さに知るべし』と。時に世尊第二第三拘睒彌比丘に語りたまはく、『止みね止みね。共に鬪諍罵詈誹謗して、互に長短を求むること莫れ、和合共住同一師學にして、水乳の合するが如し、佛法を利益し安樂に住せよ』と。彼の比丘是くの如く言す。『世尊、但自ら安住したまへ、如來は是れ法主、比丘鬪諍の事自ら當さに知るべし』と。爾の時拘睒彌の比丘のために、此の偈を說いて言はく、

衆の惡聲流布し　尊上の法を求めず　衆僧を破する時は　亦餘事を以てせず　骨を斷じ生命を害し　牛馬財を盜取し　國土鬪諍して亂るゝも　亦還つて和合あり　汝曹種々の罵詈する者有ることなかるべし　其れ是くの如き者あれば　彼の怨みは終に除かず　種々の惡罵詈も　終に還た報を加へざれ　其れ能く忍默すれば　彼の怨みは自ら除くを得　怨みを以て怨仇を除くも　怨仇は終に除かず　無怨なれば怨み自ら息む　其の法は勇健にして樂し　亦他をして作さしめず　己身も亦爲さず　能く是くの如きを行ず　雨の衆塵を淹すが如し　無堅にして堅牢を說く　堅牢も堅を見ず　彼れ堅牢を解せず　邪憶念中に墮つ　堅牢にして堅牢を知り　不堅にし

て不堅を知る　彼れ堅牢の法を解す　正念中に入る　猶ほ人の箭を執るが如し　執る緩なれば自ら手を傷く　沙門善良ならざれば　地獄を増益す　若し能く箭を執れば　執ること急なるも手を傷けず　沙門善く自ら良ければ　便ち善道に生ずることを得　袈裟服ありと雖　結使を懐抱し　怨害を除くこと能はず　彼れ袈裟に應ぜず　結使已に除滅すれば　持戒自ら莊嚴し　怨仇を調伏す　彼れ則ち袈裟に應ず　處々に遍く伴を求むるも　己れに稱ふ者あることなし　寧ろ獨り其の心を堅うし　愚者と同じうせず　若し處々に伴を求むるも　己れの如き者を得ず　寧ろ獨り自ら善を行ひ　愚惡を伴せず　獨行惡を作すなきこと　山頂の野象の如くなれ　若し審かに善伴を得　共に行ずれば勇健に住す　遊處は諸衆に在り　其の心常に歡喜す　若し善伴を得ざれば　獨行常に勇健なり　郡國邑を捨つれば　無事なること野象の如し

爾の時、世尊、拘睒彌の比丘、鬪諍して共に相誹謗し罵詈して衆僧惱亂するを以て、世尊喜びたまはず、衆僧及び供養人に語らず、自ら臥具を擧げて本處に著き、衣鉢を執持して、神足力を以て拘睒彌より舍衞國に還りたまふ。時に拘睒彌の諸の優婆塞、世尊の諸の比丘鬪諍して、共に相誹謗罵詈して、衆僧惱亂するを以て、世尊喜びたまはず、衆僧及び供養人に語らずして、自ら臥具を擧げて本處に置き、衣鉢を執持して、神足力を以て、拘睒彌國より舍衞國に還りたまふと聞く。時に諸の優婆塞、自ら共に制限を作す。「我等衆人は、都べて拘睒彌の比丘を見ては、起つて迎へ、恭敬禮拜問訊語言し、及び衣服飲食病瘦の醫藥を供養すべからず」と。彼の諸の比丘は、被擧して住するに似たり。比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・大臣、種々の沙門外道、悉く皆遠離して、與に語るものあることなし。彼の諸の鬪諍の比丘、遂に利養あることなし。是くの如きの念を作さく、「我等世尊の所に於て、此の鬪諍事を滅すべし」と。即ち舍衞國に往く。時に舍利弗、拘睒彌の比丘鬪諍して、共に相誹謗罵詈して、口刀劍の如く、拘睒彌より舍衞國に來ると聞き、即ち五百の比丘と與に佛所

に往き頭面に禮足して却つて一面に住し、世尊に白して言さく、『此の拘睒彌の比丘、鬪諍して共に相誹謗罵詈して口刀劍の如し、拘睒彌より舍衛國に來至す、我曹當さに云何がすべき』と。佛舍利弗に告げたまはく、『應さに二部の所説を聞くべし。若し比丘如法に語るあらば、則ち應さに彼の語を受くべし、稱譽長養して、與に伴黨となるべし』と。舍利弗復佛に白して言さく、『云何が彼の比丘の、是れ法語非法語を知らん』と。佛舍利弗に告げたまはく、「十八事の破僧あり、法非法・毘尼非毘尼・犯不犯・輕言はく重、有餘無餘・麁惡不麁惡、以て應行不應行、制不制、說不說なり。佛舍利弗に告げたまはく、『汝此の事を觀れば、則ち彼の比丘の如法語非法語を知る』と。復佛に白して言さく、『云何が拘睒彌比丘に房舍臥具を與へん』と。佛言はく、『應さに屛處の房舍臥具を以て與ふべし、若し屛處なければ、應さに屛處を作りて與ふべし。衆僧分臥具法の如き、等しく與へよ』と。舍利弗言はく、『衆僧の衣物は、云何が拘睒彌比丘に分を與へん』と。佛言はく、『上座の次に隨つて、到らば應さに與ふべし』と。舍利弗佛に白して言さく、『拘睒彌比丘、若し小食に粥を與ふる時は、當さに云何が坐すべき』と。佛舍利弗に告げたまはく、『我れ先きに是くの如きの語を作さずや、衆僧破して非法に和合すれば、應さに身口に惡を生ぜざる處に在りて坐すべし、衆僧破して如法に和合し、事已に滅すれば、應さに間に一人の坐處を闕いて坐すべし』と。爾の時摩訶波闍波提比丘尼、拘睒彌比丘鬪諍誹謗し、共に相罵詈して、互に長短を求め、拘睒彌より舍衛國に來至すと聞き、即ち五百の比丘尼と倶に世尊の所に詣り、頭面に禮足して却つて一面に住し、佛に白して言さく、『大德、此の拘睒彌比丘鬪諍誹謗して共に相罵詈し、互に長短を求め、拘睒彌より舍衛國に來至すと、我等當さに云何がすべき』と。佛瞿曇彌に告げたまはく、『應さに二部の語を聽くべし、若し比丘如法に語る者あれば、則ち應さに彼れの語を受け、稱譽長養して與に伴黨と爲るべし』と。復佛に白して言さく、『云何が彼の比丘の法語非法語を知らん』と。佛瞿曇彌に告げたまはく、『十八事

の破僧あり、法非法乃至說不說上の如し。汝此の事を觀ば、則ち彼の比丘の如法語非法語を知らん瞿曇彌比丘尼、應さに衆僧に從つて教授を乞ひ、如法比丘部の中に在りて求むべし』と。爾の時一〇阿難邠坻、拘睒彌比丘の鬪諍誹謗して相罵詈し、互に長短を求めて口刀劍の如く、拘睒彌より舍衞國に來至すと聞き、五百の優婆塞と俱に世尊の所に詣り、頭面禮足して却つて一面に坐し、佛に白し言さく、『拘睒彌の比丘鬪諍誹謗し、共に相罵詈して互に長短を求め、口刀劍の如し、拘睒彌より舍衞國に來至すと、我等當さに云何がすべき』と。佛言はく『應さに二部の語を聽くべし、上の如し。若し檀越の布施あらば、應さに分ちて二分を作すべし、此れも亦是れ僧、彼れも亦是れ僧なり。居士、金杖を破して二分と爲すが如し、二俱に是れ金なり。是くの如く居士、布施物は應さに分ちて二分と爲すべし、此れも亦僧、彼れも亦僧なり』と。爾の時毘舍佉無夷羅母、拘睒彌の比丘、鬪諍誹謗し、共に相罵詈して互に長短を求め、口刀劍の如し、拘睒彌より舍衞國に來至すと聞き、五百の優婆私と俱に世尊の所に詣り、頭面に禮足して却つて一面に住し、佛に白して言さく、『拘睒彌比丘鬪諍誹謗し、共に相罵詈して互に長短を求め、口刀劍の如し、拘睒彌より舍衞國に來至すと、我等當さに云何がすべき』と。佛言はく『應さに彼の二部の所說を聽くべし、上の如し、若し布施の衣物あらば、應さに分ちて二分と爲すべし、此れも亦僧、彼れも亦僧なり、金杖を破して二分と爲すが如し、彼此是れ金なり。若し布施の衣物あらば、應さに分ちて二分と爲すべし、此れも亦僧、彼れも亦僧なり』と。爾の時被擧比丘道路に行き、靜處に心自ら念じて言はく、「我が此の諍事、應さに修多羅・毘尼・阿毘曇を引いて佛法を檢校すべし、是擧か非擧か是れ如法擧にして羯磨成就すとせんや、是れ不如法擧にして羯磨成就せずとせんや」と。時に卽ち修多羅・毘尼・阿毘曇を看て、佛の法律を檢校して是の念を作す。「是れ犯にして不犯と爲すにあらず、是擧にして不擧と爲すに非ず、如法擧にして羯磨成就す、不如法擧にして羯磨成就せずと爲すにあらず」と。彼れ卽ち隨擧比丘の

【一〇】阿難邠坻(Anāthapiṇḍada)。是れ卽ち給孤獨長者である。

所に至り、是くの如きの言を作す。『我れ道路に在りて行く、靜處に在りて思惟して是の念を作さく、『我が今此の鬪諍の事、是れ犯か是れ非犯か』と。卽ち修多羅・毘尼・阿毘曇を看て佛の法律を檢校するに、是れ犯にして不犯と爲すにあらず、是れ擧にして不擧と爲すにあらず、如法擧にして羯磨成就す、不如法擧にして羯磨成就せずと爲すにあらず』と。時に隨擧の比丘卽ち被擧の比丘を將ひ、擧罪の比丘の所に至りて白して言はく、『此の被擧の比丘我れに語りて是くの如く言ふ、『道路に在りて行き、靜處に思惟して心に自ら念じて言はく、上の所說の如し』と。爾の時擧罪の比丘卽ち隨擧の比丘、被擧の比丘を將ひて世尊の所に詣り、頭面禮足し已りて、却つて一面に坐し、佛に白して言さく、『此の隨擧の比丘、被擧の比丘を將ひて我が所に來至し、被擧の比丘の因緣を以て具さに我れに向つて說く、今卽ち復此の因緣を以て具さに世尊に白す』と。世尊諸の比丘に告げたまはく、『是れ犯にして不犯にあらず、是擧にして不擧にあらず、如法擧にして此の比丘の羯磨成就す、若し彼の比丘衆僧に順從にして、懺悔改過し、不見羯磨を解かんことを求索すれば、卽ち應さに白四羯磨すべし、應さに是くの如く解くべし。應さに僧中に至り、偏へに右の肩を露はし、革屣を脫し僧足を禮し、已りて右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す、『大德僧聽け、我れ某甲比丘、僧我れを擧して不見羯磨を作す。我れ今衆僧に順從し改過懺悔す、不見羯磨を解かんことを乞ふ、願はくは僧慈愍の故に我が爲めに解け』と。是くの如く第二第三說く。是の中應さに能く羯磨を作すに堪能なる者を差すべし、若しは上座、若しは次座、若しは誦律、若しは不誦律なり。羯磨を能くする者是くの如く白す。『大德僧聽け、此の某甲比丘、僧不見羯磨を作す、今衆僧に順從して改過懺悔し、不見羯磨を解かんことを乞ふ。若し僧時到らば、僧某甲比丘に、ために不見羯磨を解かんことを忍聽せよ、白すること是くの如し』と。『大德僧聽け、某甲比丘、僧ために不見羯磨を作す、彼れ衆僧に順從して改過懺悔す、今僧に求めて不見擧羯磨を解かんことを乞ふ、誰か諸の長老、彼

の某甲比丘の不見擧羯磨を解かんことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。』是れ第一羯磨なり、是くの如く第二第三說く。僧已に某甲比丘のために、不見擧羯磨を解くことを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。佛言はく、『白羯磨和合を作すことを聽す。應さに是くの如く白すべし。「大德僧聽け、所因の事、僧をして鬪諍誹謗し、共に相罵詈して互に長短を求めしむ。彼の人の犯事擧せられ、今已に還た解き已る、僧の塵垢を滅す、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧和合を作すことを、白すること是くの如し」と。應さに是くの如きの白和合を作すべし』と。時に優波離坐より起ちて、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して世尊に白して言さく『所因の事、僧をして鬪諍誹謗し、罵詈して互に長短を求めしめ、僧をして破せしめ、僧をして別異に住せしめ、僧をして塵垢せしむ。彼の事未だ料理せず、未だ處分せず、未だ僧の塵垢を滅せざるに、頗し如法に和合するを得るや不や』と。佛言はく『如法に和合するを得ず、優波離、彼の所因の諍事、僧をして鬪諍誹謗し、互に長短を求めしめ、僧をして破せしめ、僧をして別住せしめ、僧をして塵垢せしむ。彼の諍事は已に料理し、已に分處し、已に僧の塵垢を滅し、如法に和合することを得たり』と。佛言はく『自今已去、白羯磨和合布薩を作すことを聽す、應さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、彼の所因の事、僧をして鬪諍誹謗し、罵詈して互に長短を求めしめ、僧をして破せしめ、僧をして別住せしめ、僧をして塵垢せしむ。彼の人は僧ために擧罪を作し已りて還た解を爲し、已りて僧の塵垢を滅す。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧和合布薩を作すことを、白すること是の如し」と。應さに是くの如く白し、已りて和合布薩すべし』と。爾の時佛優波離に告げたまはく『五種の犯罪人あり、何等か五なる。比丘是くの如く犯罪す。餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく、「見ず」と。彼れ此の比丘に語りて言はく、「若し此の罪を見ば、應さに懺悔すべし」と。此れは是れ第一の犯罪人なり。比丘是くの如く罪

【二】五種の犯罪の中、前の三は衆滿せず、或は和合せざる等のことで、慰喩して懺悔せしむるのである。若し强えて治すれば、破僧等の事が起り、或は羯磨成ぜぬのである。此の中で第一は波逸提である。第二は僧殘であるから、僧中懺悔と言つたのである。第三は乞鉢を犯すので、乞鉢は、現在僧の作處で、僧庫の在るところにて、鉢を捨てゝ懺悔するのであつて、前の乞鉢戒の捨墮について、法礪は「是の中の捨とは、此の住處の僧中に捨す」と言つて居るのである。第四、第五の二は、衆滿じ、和合した場合、正式に治罰するのである。

を犯す。餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく、「見ず」と。彼の比丘言はく、「汝若し罪を見ば、應さに僧中に懺悔すべし」と。是れ第二の犯罪人なり。比丘是くの如きの罪を犯す、餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。彼の比丘言はく、「見ず」と。彼の比丘言はく、「汝若し罪を見ば、當さに此の僧中に於て懺悔すべし」と、是れ第三犯罪人なり。比丘是くの如く罪を犯す。餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく、「見ず」と。衆僧應さに捨棄して問ふことなく、是くの如きの言を語るべし、「汝今罪を見ず、汝往くところの處、彼れも亦當さに汝の罪を擧し、汝が爲めに自言を作すべし。汝に【二】阿毘婆陀を作すことを聽さず、布薩自恣を聽さず。調馬師の惡馬の調し難きは、即ち所繫の杙を合せて之を棄つるが如し。汝比丘も自ら罪を見ざる、亦復是くの如し、一切捨棄す、汝所往の處乃至汝の布薩自恣を聽さず、是くの如き人は求聽に從ふべからず、是くの如きは此れ即ち是れ聽なり、此れは是れ第四の犯罪人なり。比丘是くの如く罪を犯す。餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく、「見ず」と。彼れ應さに衆僧中に、不見擧白四羯磨を作すべし。此れは是れ第五の犯罪人なり』と。時に長老優波離坐より起ちて偏露右肩にして革屣を脱し、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『幾法ありて、應さに料理事人と作すを得べき』と。佛言はく、『五法あり、應さに料理すべし。何等か五なる。事を作さんと欲する比丘、應さに此の事實なりやを觀察すべし。或は事不實なるあり、彼の比丘若し此の事不實なりと知らば作すべからず。彼の比丘若し此の事實なりと知らば、應さに更に、此の事利益ありや、利益なきやを觀察すべし。或は事の利益なきあり、彼の比丘若し此の事利益なしと知らば作すべからず。若し比丘此の事利益ありと知らば、應さに更に【三】時作と非時作とを觀察すべし。或は事の非時作なるあり、彼の比丘若し是の事非時作と知れば作すべからず、彼の比丘若し此の事是れ時作と知れば、更に重ねて觀察すべし、若し此の事を作

【二】阿毘婆陀(Anuppada)。僧のこゝに隨喜と譯すとある。僧の非時集會なりと解釋されて居る。非時といふのは、布薩とか、自恣とかいふ一定の集會以外の一切の集會のことゝもあり、『毘尼母』には、食時・粥時・甜漿時を除いて、是の餘の一切の作法事の時にして、如法・如毗尼・如佛教なるは、是れ非時集であると言つて居る。蓋し規定の布薩自恣には、此の犯罪人は、勿論出ることが出來ない。食事の折は別として、他の一般の集會にも、そこに隨喜して出席すべからずとの意である。故に此の非時集會を隨喜ともいふのである。

【三】時作と非時作は、之を作すに時に適するか否かといふことで、時機の得否をいふのである。

し、僧をして鬪諍誹謗して言はしめ、僧をして破せしめ、僧をして別住せしめ、僧をして塵垢せしむるか、僧をして鬪諍せしめず、乃至僧をして塵垢せしめずとせんやと、若し彼の比丘、事を作して僧をして鬪諍せしめ、乃至僧をして塵垢せしむと知らば作すべからず、若し比丘、事を作して僧をして鬪諍せしめず、乃至僧をして塵垢せしめずんば、彼の比丘應さに重ねて更に觀察すべし。若し比丘事を作して伴黨を得るとせんや、伴黨を得ざるやと。或は事を作して、比丘の伴黨を得ざるあり、彼の比丘、若し事を作して、比丘の伴黨を得ずと知らば、作すべからず、彼の比丘若し比丘の伴黨を得ると知らば、應さに時を知るべし、好心善念して應さに作すべし。優波離、比丘此の五法を知らば、應さに料理事人と作すことを得べし』と。爾の時優波離卽ち坐より起ちて、偏露右肩にして右膝地に著け、合掌して佛に向ひて偈を說いて言はく、

僧のために此の語を說く　義利決定するが故に　云何が勝を知ることを得　比丘堅持することを得ん

爾の時、世尊、偈を說いて優波離に答へて言はく、

第一に持戒して毀壞せず　比丘の威儀自ら身を端うす　怨家も如法に呵する能はず　彼れ能く是の他の無語を得　彼れ是くの如き淸淨戒に住し　無畏を得て說き疑難なし　衆に在りて怖れず變異なし　義を失はず問ひに隨つて答ふ　是くの如く衆中にして義を問ふ　卒答不思にして憂慮なし　時に隨つて義を問ふに皆能く答ふ　諸問に應答して心異なし　長老と諸の比丘上座中座及び下座を恭敬し　能く因本を說き善く分別し　諸の怨家欺詐の語を解く　怨家も其の勝を得る能はず　亦能く多人を調伏す　常に師となり教へて斷かず　智慧を莊嚴し衆の可する所なり　若し是くの如き事を犯す　犯さざれば罪除くことを得　此の垢二倶に知る　垢を知れば懺悔して除く　悔いざれば衆に遣はされ　若し悔ゆれば衆驅らず　是くの如き人は應さに

勸むべし　分別して是くの如く知る　信あれば則ち能く受け　僧のための故に而も遣はす　衆遣はせば能く語を用ふ　能く作して自ら高ぶらず　恭敬す長老と　上中及び下座と　智慧は利益多し　是の人能く法を護すと。（拘睒彌揵度具足し竟る。）

四分律巻第四十三

卷の第四十四（三分の八）

瞻波揵度第十

爾の時世尊、[一]瞻波城[二]伽尸國婆娑婆聚落に在しき。時に異住處に舊比丘あり、常に衆人に接して猶ほ泉水の如し、是くの如きの言を作す『若し未だ來らざる客比丘には、我れ當さに所須を供給すべし、爲めに洗浴飲食の供養を作さん』と。時に衆多の比丘あり、伽尸國に在りて人間に遊行し、婆娑婆聚落に至る。時に彼の比丘卽ち所須の食飲を供給して供養す。彼の比丘異時に是くの如きの念を作す『我れ能く常に白衣より飲食供具を乞索し、洗浴を作し、粥を作りて供養すること能はず。此の客比丘道路遠くより來る、今已に懈怠す。本未だ智識あらず、今已に智識あり、我れ今寧ろ復求索すべからず』と。是に於て卽ち止む。彼の客比丘是の念を作す『此の比丘我曹を憎む、本我が所須の飲食洗浴の具を供給す、今止めて復我れに與へず、我等寧ろ此の比丘を擧すべきか』と。卽ち和合して此の比丘を擧す。彼の比丘是の念を作す『我れ今自ら是れ犯か非犯か、是れ擧か非擧か、如法擧羯磨成就とせんや、不如法擧羯磨不成就とせんやを知ること能はず、我れ今寧ろ瞻波の世尊の所に往き、此の因緣を以て具さに世尊に白すべし、世尊若し言教あらば、世尊の敎へたまふ所に隨つて、我れ當さに施行すべし』と。爾の時此の舊比丘、衣鉢を持して瞻婆に詣り、世尊の所に往き、頭面作禮し已りて、却つて一面に住す。爾の時世尊客比丘を慰勞したまふ『乞求得易きや不や、住止和合するや不や、道路疲極せざるや不や』と。答へて言はく『住止和合し乞求得易し、道路疲極せず』と『汝比丘何所より來る』と。彼の比丘言はく『我れ伽尸國の婆娑婆聚落に在り、異住處に於ける舊比丘なり、常に衆客に接す、所須猶ほ泉水の如し『若し未だ來らざる客比丘ありて來らば、所須の飲食、若しは作粥、洗浴の具を供給せん』と。後に衆多の比丘あり、伽尸國に在

【一】瞻波(Campā)。
【二】伽尸(Kāśi)。

りて人間に遊行し、婆娑婆聚落に至る。我れ時に即ち所須の飲食若しは作粥、洗浴の具を供給す。大德、我れ時に是くの如きの念を作す「我れ常に白衣の家に至りて、飲食所須の具を乞索すること能はず、此の諸の比丘は今已に懈息す、本未だ知識あらず、今已に知識あり、我れ今寧ろ復求索せざるべし」と。是に於て即ち止む。彼の客比丘是くの如きの語を作す「舊比丘我等を憎む、先きに常に我が所須の飲食作粥洗浴の具を供給す、今復供給せず、我曹寧ろ彼の比丘の罪を擧すべし」と、即ち共に和合して共に擧す。大德、我れ是くの如きの念を作す「是れ犯か非犯か、是擧か非擧か、是れ如法擧羯磨成就とせんや、是れ不如法擧羯磨不成就とせんやを知ること能はず、我れ寧ろ瞻波往き、世尊の所に詣り、此の因緣を以て具さに世尊に白すべし、世尊若し言教あらば、世尊の敎に隨つて施行せん」と。佛彼の比丘に告げたまはく『汝比丘は無犯なり。非犯非擧不成擧非法擧なり、汝比丘の羯磨は成就せず、汝比丘還り去りて、婆娑婆聚落に至るべし。還りて衆客の所須を供給すること、猶ほ泉水の如くせよ、比丘我れ汝と共に伴と作らん、如法にして不如法にあらず』と。時に彼の客比丘、婆娑婆聚落より人間に遊行し、伽尸國に至りて世尊の所に往き、頭面に禮足して却つて一面に住す。爾の時世尊客比丘を慰勞したまふ『汝曹住止和合するや不や、乞食を以て疲苦とせざるや』と。彼の比丘答へて言はく『住止和合す、乞食を以て苦と爲さず』と。問うて言はく『汝何所より來る』と。答へて言はく『我れ婆娑婆聚落より來る』と。問うて言はく『彼れに頗し舊比丘の常に衆客の所須を供給すること、猶ほ泉の如きあり、汝等擧するや』と。答へて言はく『實に擧す世尊』と。佛問うて言はく『汝等何事を以ての故に擧する』と。答へて言はく『事なく緣なし』と。爾の時世尊無數の方便を以て彼の比丘を呵責したまふ『汝の所爲は非なり、威儀にあらず、沙門の法にあらず、淨行にあらず、隨順行にあらず、爲すべからざる所なり、云何ぞ癡人、舊比丘の客比丘に供給すること猶ほ泉水の如し、而も汝等事なくして而も擧する』と。爾の

時世尊比丘を呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『四の羯磨あり、非法羯磨、非法別衆羯磨、非法和合羯磨、法別衆羯磨なり。是の中の二羯磨、非法羯磨、別衆羯磨は作すべからず、若し作せば法の如く治す。法羯磨、和合羯磨は作すべし。四の滿數あり、人あり滿數を得れば呵すべからず、人あり滿數を得ざれば呵すべし。人あり滿數を得ざるも亦呵すべからず、人あり滿數を得るも亦呵すべし。何等か人滿數を得れば呵すべからざる。若し呵責羯磨、擯羯磨、依止羯磨、遮不至白衣家羯磨を作さんに、彼の人滿數を得れば呵すべからず。何等か人滿數を得ざれば應さに呵すべき。若し大戒を受けんと欲する人は、此の人滿數を得ざれば呵することを得。何等か人滿數を得ざるも亦呵することを得ざる。若し比丘の爲めに羯磨を作さんに、比丘尼滿數を得ざるも呵することを得ず。式叉摩那沙彌沙彌尼、若しは言はく邊罪を犯す、若しは比丘尼を犯す、若しは賊心受戒、若しは二道を壞す、若しは黃門、若しは父母を殺す、若しは阿羅漢を殺す、若しは僧を破す、若しは惡心にて佛身より血を出す、若しは非人畜生、若しは二根、若しは被擧、若しは滅擯、若しは應滅擯、若しは別住、若しは戒場上にあり、若しは神足空に在り、若しは隱沒、若しは見聞處を離る、若しは爲めに羯磨を作す所の人、是くの如き等の人は、滿數を得ざるも呵すべからず。何等か人滿數を得るも亦呵することを得る。若し善比丘同一界に住し、神足を以て空にあらず、隱沒せず、見聞處を離れず、乃至傍人に語る、是くの如き等は、人滿數を得るも呵すべし』と。時に六群比丘、一人にして一人を擧し、一人にして二人を擧し、或は三人を擧し、或は僧を擧す。二人にして一人を擧し、二人にして二人を擧し、或は三人を擧し、或は僧を擧す。三人にして一人を擧し、或は二人を擧し、或は三人を擧し、或は僧を擧す。僧僧を擧す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『一人にして一人を擧し、二人三人にして僧を擧することを得ず。二人にして一人二人三人を擧し、僧を擧することを得ず。三人にして一人二人三人を擧し、僧を擧することを得ず、僧僧を擧することを得

ず。若し一人にして一人を擧すれば、非法羯磨、非毘尼羯磨なり、爾すべからず。若し一人にして二人三人僧を擧し、若しは二人にして一人二人三人僧を擧し、若しは三人にして一人を擧し、二人を擧し、三人を擧し、僧を擧し、僧僧を擧すれば、非法羯磨、非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。爾の時六群比丘重ねて羯磨を作し、呵責羯磨を作し已りて復擯羯磨を作し、依止を作し、遮不至白衣家を作し、ために擧を作し、ために波利婆娑を作し、ために本日治を作し、摩那埵を與へ、阿浮呵那を與へ、現前毘尼を與へ、憶念毘尼を與へ、不癡毘尼を與へ、自言治を與へ、ために多覓罪を作し、ために多覓罪相を作し、如草覆地を與ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく『重ねて羯磨を作すべからず。呵責羯磨を作し已りて、復擯羯磨乃至如草覆地を作すべからず』と。爾の時佛諸の比丘に告げたまはく『四種の僧あり、四人僧、五人僧、十人僧、二十人僧なり。是の中四人僧とは、自恣と受大戒と出罪とを除き、餘の一切の如法羯磨は應さに作すべし。是の中の五人僧とは、中國に在りて、受大戒と出罪とを除き、餘の一切如法の羯磨は應さに作すべし。是の中の十人僧とは、出罪を除いて、餘の一切の如法羯磨は應さに作すべし。是の中の二十人僧とは、一切の羯磨は應さに作すべし。況んや復二十を過ぐるをや。若し四人羯磨すべきは、四人に一人を少き羯磨を作さば、非法非毘尼羯磨なり。若し比丘尼を以て第四人となし、若しは式叉摩那、沙彌、沙彌尼を以てし、若しは邊罪を犯す、若しは比丘尼を犯す、若しは賊心受戒、若しは壞二道、若しは黃門、若しは父母を殺し、阿羅漢を殺し、惡心出佛身血、若しは非人、若しは畜生、若しは二根、若しは被擧、若しは滅擯、若しは應滅擯、所爲作羯磨人と言ふ、是くの如き人を以て、足して四人を滿ずれば、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。五人僧、十人僧、二十人僧も亦是くの如し』と。爾の時六群比丘、非法非毘尼羯磨を作し、彼れ非法別衆羯磨、非法和合羯磨、法別衆羯磨、法相似別衆羯磨、法相似和合羯磨を作し、呵不止羯磨を作す。諸の比丘佛に白す。佛言はく『非法非毘尼羯磨を作すべ

からず、非法別衆羯磨を作すべからず、非法和合羯磨を作すべからず、法別衆羯磨を作すべからず、法相似別衆羯磨を作すべからず、法相似和合羯磨を作すべからず、呵不止羯磨を作すべからず。云何が非法非毘尼羯磨。白二羯磨に、白を作し已つて羯磨を作さず、是れを非法非毘尼羯磨と名づく、爾すべからず。二白を作して羯磨を作さず、三白を作して羯磨を作さず、衆多白を作して羯磨を作さざるは非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白二羯磨に、一白二羯磨を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。一白三羯磨、一白衆多羯磨を作し、二白一羯磨を作し、二白二羯磨を作し、二白三羯磨を作し、二白衆多羯磨を作し、三白一羯磨を作し、三白二羯磨を作し、三白三羯磨を作し、三白衆多羯磨を作し、衆多白一羯磨を作し、衆多白二羯磨を作し、衆多白三羯磨を作し、衆多白衆多羯磨を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白二羯磨に一羯磨を作して白を作さざるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。二羯磨を作して白を作さず、三羯磨を作して白を作さず、衆多羯磨を作して白を作さざるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白二羯磨に、一羯磨二白を作すは非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。一羯磨三白を作し、一羯磨衆多白を作し、二羯磨一白を作し、二羯磨二白を作し、三羯磨三白を作し、二羯磨衆多白を作し、三羯磨一白を作し、三羯磨二白を作し、三羯磨三白を作し、三羯磨衆多白を作し、衆多羯磨一白を作し、衆多羯磨二白を作し、衆多羯磨三白を作し、衆多羯磨衆多白を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白二羯磨に、不如白法に白を作し、不如羯磨法に羯磨を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白四羯磨に、一白を作して羯磨を作さざるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。二白を作して羯磨を作さず、三白を作して羯磨を作さず、衆多白を作して羯磨を作さざるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。一白一羯磨を作し、一白二羯磨を作し、一白衆多羯磨を作し、二白一羯磨を作し、二白二羯磨を作し、二白三羯磨を作し、二白衆多羯磨を作し、三白一羯磨を作し、三白二羯磨

を作し、三白三羯磨を作し、三白多羯磨を作し、衆多白一羯磨を作し、衆多白二羯磨を作し、衆多白三羯磨を作し、衆多白衆多羯磨を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白四羯磨に、一羯磨を作して白を作さゞるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。二羯磨を作して白を作さず、三羯磨を作して白を作さず、衆多羯磨を作して白を作さゞるは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。一羯磨一白を作し、一羯磨二白を作し、一羯磨三白を作し、一羯磨衆多白を作し、二羯磨一白を作し、二羯磨二白を作し、二羯磨三白を作し、二羯磨衆多白を作し、三羯磨二白を作し、三羯磨三白を作し、三羯磨衆多白を作し、衆多羯磨一白を作し、衆多羯磨二白を作し、衆多羯磨三白を作し、衆多羯磨衆多白を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。白四羯磨を作すに、不如白法にて白を作し、不如三羯磨法にて羯磨を作すは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、無罪を見る。餘の比丘語りて言はく『汝罪を見るや不や』と。答へて言はく『見ず』と。彼れ即ち不見罪羯磨を作す。佛言はく『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、懺悔罪なし、餘の比丘語りて言はく『汝罪を犯す、懺悔すべし』と。答へて言はく『我れ懺悔せず』と。彼れ即ち擧して不懺悔羯磨を作す。佛言はく『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、惡見なければ捨てず、餘の比丘語りて言はく『汝惡見あり、應さに捨つべし』と。答へて言はく『我れ捨てず』と。彼れ即ち擧して惡見不捨羯磨を作す。佛言はく『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、無罪を見、罪の懺悔するなし。餘の比丘語りて言はく『汝罪を見るや不や、汝應さに懺悔すべし』と答へて言はく『我れ罪を見ず、我れ懺悔せず』と。彼れ即ち擧して不見罪不懺悔羯磨を作す。佛言はく『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、無罪を見、惡見なし捨てず。餘の比丘語りて言はく『汝罪あるを見る、惡見應さに捨つべし』と答へて言はく『我れ罪を見ず、惡見なければ捨てず』と。彼れ即ち

不見罪惡見不捨羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、罪の懺悔するなし、惡見なければ捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪あり、應さに懺悔すべし、惡見を捨てよ』と。答へて言はく、『我れ懺悔せず、我れ惡見なければ捨てず』と。彼れ卽ち擧して、不懺悔不捨惡見羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、罪あるを見る。餘の比丘語りて言はく、『汝罪あり、見るや不や』と。答へて言はく、『見る』と。彼れ卽ち擧して不見罪羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、罪ありて懺悔す。餘の比丘語りて言はく、『汝罪あり、應さに懺悔すべし』と。答へて言はく、『我れ當さに懺悔すべし』と。彼れ卽ち擧して不懺悔羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、惡見ありて捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝惡見あり、應さに捨つべし』と。答へて言はく、『當さに捨つべし』と。彼れ卽ち擧して不捨惡見羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、罪あるを見る、罪あるは應さに懺悔すべし。餘の比丘語りて言はく、『汝罪あるを見る、應さに懺悔すべし』と。答へて言はく、『我れ罪を見る、當さに懺悔すべし』と。彼れ卽ち擧して、不見罪不懺悔羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、罪あるを見る、惡見ありて捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪あるを見る、惡見應さに捨つべし』と。答へて言はく、『我れ罪を見る、當さに惡見を捨つべし』と。彼の比丘卽ち擧して、不見罪惡見不捨羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、罪ありて懺悔し、惡見ありて捨てず。餘の比丘語りて言はく、『汝罪あり懺悔すべし、惡見當さに捨つべし』と。答へて言はく、『我れ當さに懺悔すべし、當さに惡見を捨つべし』と。彼れ卽ち擧して不懺悔不捨惡見羯磨を作す。佛言はく、『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是の中に比丘あり、罪あるを見懺悔し、惡見捨

てず。餘の比丘語りて言はく『汝罪を見る、當さに懺悔すべし、惡見應さに捨つべし』と。答へて言はく『我れ罪を見る、當さに懺悔し、惡見を捨つべし』と。彼れ卽ち擧して不見罪不懺悔不捨惡見羯磨を作す。佛言はく『非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。是れを非法非毘尼羯磨と爲す。云何が如法如毘尼羯磨なる。白二羯磨に、白法の如く白を作し、羯磨法の如く羯磨を作す、如法如毘尼羯磨なり、應さに爾すべし。白四羯磨に、白法の如く白を作し、三羯磨法の如く羯磨を作すは、如法如毘尼羯磨なり、應さに爾すべし』と。是の中に比丘あり、罪あるを見る。餘の比丘問うて言はく『汝罪あり、見るや不や』と。答へて言はく『見ず』と。彼れ卽ち擧して不見罪羯磨を作す。佛言はく『如法如毘尼羯磨なり、當さに爾すべし』と。是の中に比丘あり、罪ありて應さに懺悔すべし。餘の比丘語りて言はく『汝罪あり、應さに懺悔すべし』と。答へて言はく『我れ懺悔せず』と。彼れ卽ち擧して不懺悔羯磨を作す。佛言はく『如法如毘尼羯磨なり、爾すべし』と。是の中に比丘あり、惡見にして捨てず。餘の比丘語りて言はく『汝惡見あり、應さに捨つべし』と。答へて言はく『捨てず』と。彼れ卽ち擧して惡見不捨羯磨を作す。佛言はく、『如法如毘尼羯磨なり、應さに爾すべし』と。是の中に比丘あり、罪あるを見、罪あり、懺悔するあり。餘の比丘語りて言はく『汝罪あるを見る、罪あり懺悔せよ』と。答へて言はく『見ず、懺悔せず』と。彼れ卽ち其の所犯の如く、不見罪、不懺悔羯磨を作す。佛言はく『如法如毘尼羯磨なり、應さに爾すべし』と。是の中に比丘あり、罪あるを見、惡見ありて捨てず。餘の比丘語りて言はく『汝罪あり、惡見あり、應さに捨つべし』と。答へて言はく『我れ罪を見ず、惡見は捨てず』と。彼れ卽ち其の所犯の罪の如く、ために不見罪、惡見不捨羯磨を作す。佛言はく『如法如毘尼羯磨なり、應さに爾すべし』と。是の中に比丘あり、罪あり懺悔するあり、惡見捨てず。餘の比丘語りて言はく『汝罪あり懺悔すべし、惡見當さに捨つべし』と。答へて言はく『我れ懺悔せず、惡見を捨てず』と。彼れ卽

ち其の所犯の如く、不懺悔、不捨惡見羯磨を作す。佛言はく、『如法如毘尼羯磨なり、應さに爾すべし』と。是の中に比丘あり、罪あるを見、懺悔するあり、惡見捨てず。餘の比丘語りて言はく『汝罪あるを見る、應さに懺悔すべし、惡見應さに捨つべし』と。答へて言はく『我れ罪を見ず、懺悔せず、惡見を捨てず』と。彼れ卽ち所犯の罪の如く、不見罪、不懺悔、不捨惡見羯磨を作す。佛言はく『如法如毘尼羯磨なり、應さに爾すべし』と。是れを如法如毘尼羯磨と爲す。云何が非法別衆羯磨。同一住處に羯磨の時、來らざる者あれば應さに欲を與ふべし、而も欲を與へず、現前に在りて呵すべき者は便ち呵す。彼れ白二羯磨を作し、白四羯磨を作し、此の事を白して乃ち彼の事の爲めに羯磨を作す、是れを非法別衆羯磨と爲す。云何が非法和合羯磨。同一住處にありて、和合して一處に羯磨する時、來らざるあり、應さに欲を與ふべきものは欲を與ふ。現在前に在りて呵を得べき者を呵せず、白二羯磨を作し、白四羯磨を作し、此の事を白して、乃ち彼の事の爲めに羯磨を作す。是れを非法和合羯磨と作す。云何が法別衆羯磨。同一住處に羯磨する時、來らざる者あり、應さに欲を與ふべきに欲を與へず、現前に在りて呵を得べき者は彼れを呵し、白二白四羯磨を作し、如法に作す、是れを法別衆羯磨と爲す。云何が法相似別衆羯磨、同一住處に羯磨の時、來らざる者あり、應さに欲を與ふべきに欲を與へず、現前に在りて呵すべき者は呵し、白二白四羯磨を作し、前に羯磨を作して後に白を作す、是れを法相似別衆羯磨と爲す。云何が法相似和合羯磨。同一住處に羯磨の時、來らざる者あり、欲を與ふべき者は欲を與ふ、現前に在りて呵を得べき者を呵せず、白二白四羯磨し、前に羯磨を作し、後に白を作す、是れを法相似和合羯磨と爲す。何等の人か呵責を作して呵を成ずる。或は人あり、呵して呵を成ず、或は人あり、呵して呵を成ぜず。何者か呵して呵を成ぜざる。比丘の爲めに羯磨を作すに、比丘尼呵して呵を成ぜず。式叉摩那、沙彌、沙彌尼・若しは邊罪を犯し、比丘尼を犯し、或は賊心受戒、或は壞二道、黄門、殺父母、殺阿羅漢、惡心佛

身出血、破合僧、非人、畜生、二根、若しは被擧、若しは滅擯、若しは應滅擯、若しは戒場上に在り、若しは別住を作す、若しは神足を以て空に在り、若しは隱沒、若しは離見聞處、若しは所爲作羯磨人と言ふ、是くの如き人は、呵して呵を成ぜず。云何が呵して呵を成ずる。若し善比丘、同一界内に在りて住し、空に在らず、隱沒せず、見聞處を離れず、乃至比坐に語る。是くの如き人は、呵して呵を成ず。是れを呵羯磨と爲す』と。爾の時優波離坐より起ち、偏露右肩にして、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『應さに呵責羯磨を作すべきに、乃ちために擯羯磨を作さば、如法如毘尼羯磨なりや不や』と。佛優波離に語りたまはく『此れ不如法羯磨なり』と。優波離復佛に白して言さく、『應さにために、呵責羯磨を作すべきに、乃ちために依止羯磨を作し、若しは乃ち遮不至白家家羯磨、乃至如覆草地を作すは、是れ如法如毘尼羯磨なりや不や』と。佛言はく、『不如法なり、ために呵責羯磨を作すに、乃ち擯羯磨乃至如草覆地を作すべからず、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず。是くの如く展轉して、乃ち如草覆地に至るは、非法非毘尼羯磨なり、爾すべからず』と。佛優波離に語りたまはく、『若し呵責羯磨をなすべきに、ために呵責羯磨を作すは、此れは是れ如法如毘尼羯磨なり、應さに爾すべし。是くの如く乃ち如草覆地羯磨に至るまで、如法如毘尼羯磨なり、應さに爾すべし』と。爾の時異住處あり、衆僧比丘のために呵責羯磨を作し、乃ち非法別衆羯磨を作す。餘の衆僧、彼の衆僧の、比丘のために呵責羯磨を作し、乃ち非法別衆羯磨を作し、羯磨成ぜずと聞き、我曹當さに呵責羯磨を作すべしと、即ち呵責羯磨を作し、非法和合なり。復餘處の僧あり、彼の衆僧比丘の爲めに呵責羯磨を作し、非法和合にして羯磨成ぜずと聞き、我曹當さに爲めに呵責羯磨を作すべしと、彼れ即ち呵責羯磨を作し、法別衆なり。餘處の僧、彼の衆僧比丘の爲めに呵責羯磨を作し、法別衆羯磨にして羯磨成ぜずと聞き、我曹當さに爲めに呵責羯磨を作すべしと、即ち呵責羯磨を作す、法相似別衆なり。餘處の僧、彼の衆僧比丘の爲めに呵責羯

磨を作し、法相似別衆にして羯磨成ぜずと聞き、我曹當さに爲めに呵責羯磨を作すべしと。法相似和合羯磨なり。彼の比丘是くの如きの念を作す、『我れ當さに云何すべき』と。即ち諸の比丘に白す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『諸の是くの如き不如法羯磨は成就せず、是くの如き一切の羯磨は亦成就せず』と。爾の時住處あり、衆僧比丘のために非法別衆羯磨を作す。爾の時衆多の僧皆共に諍ふ。或は言はく、『非法別衆羯磨なり』と。或は言はく、『非法和合なり』と。或は言はく、『法別衆なり』と。或は言はく、『法相似別衆なり』と。或は言はく、『法相似和合なり』と。或は言はく、『羯磨成就す』と。或は言はく、『成就せず』と。諸の比丘云何せんを知らず、餘の比丘に告ぐ。餘の比丘往いて佛に白す。佛言はく、『彼の住處の衆僧、比丘の爲めに呵責羯磨を作して非法別衆なり。是の中の衆多僧、各々共に諍ひ、或は言はく、「非法別衆」、或は言はく、「非法和合」と、乃至「成ず」、「成ぜず」と言ふ。是の中の僧非法別衆と言ふ者は、此れは是れ法語なり、乃至法相似和合とは、此れ亦是くの如く[三]是れ法語なり』と。

爾の時優波離、坐より起ちて偏露右肩し、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『若し比丘あり、僧先きに羯磨を與へ、後に衆僧解を與ふ、解を成ずるや成ぜざるや』と。佛優波離に語りたまはく、『或は成じ、或は成ぜず』と。復問ふ、『云何が成じ成ぜざる』と。佛優波離に告げたまはく、『[四]十三種の人あり、僧先きに爲めに羯磨を作せば、解を成ぜず、此の十三種人を除き已れば、餘人のために羯磨を作し已り、若し僧解を與ふれば、解を成ずることを得』と。優波離復佛に問ひたてまつる。『若し僧先きに羯磨を作し、解羯磨を爲し已りて、[五]驅出すれば、驅出を成ずるや、成ぜずとせんや』と。佛言はく、『或は驅出を成ずるあり、或は驅出を成ぜざるあり、若し十三種人のために羯磨を作し已りて驅出すれば、驅出を成ず、此の十三種を除き、餘人の爲めに羯磨を作し、後羯磨を解かば解くことを得、若し驅出すれば驅出を成ぜず。(瞻波犍度具足し竟る。)

【三】是れ法語といふのは、こゝに五人の異說と成と不成と七人あり、此の七人の中、最初の非法別衆と不成との二人が、正當には是れ法語である。然し五人共に之を非法とするに於ては一致して居る。今佛が皆法語と言つたのは、之を非法とする正しきを認めたのである。

【四】十三種の人とは、即ち前に擧げし十三難のある人で、邊罪・犯比丘尼・壞二道以下二根までゞある。

【五】驅出は、擯出である。擯出に二種あり、一は永擯で、二は調伏擯出である。永擯は純粹の敎團追放で、懺悔歸復を許さないものであり、調伏の爲めに擯出する者は、其の懺悔するまでは、飮食坐起言語一切の事、僧と同じくすることを許されないものである。故にこれは敎團追放ではない、追放同樣の待遇である。十三種人は驅出を成ずるが、調伏擯出のものは、驅出を成じない、其の他は勿論である。

呵責揵度第十一の一

爾の時佛舍衞國に在しき。二比丘あり、一を智慧と名づけ、二を盧醯那と名づく。鬪諍を憙みて共に相罵詈し、口刀劍を出し、互に長短を求む。彼れ自ら共に鬪諍罵詈し、若し復餘の比丘ありて鬪諍すれば、卽ち復彼れに往いて勸めて言はく、『汝等好く自ら勉力して他に如かざること莫れ、汝等多聞にして、智慧財富も亦勝れ、多くの智識あり、我等汝が爲めに伴黨と作らん』と。是の中の衆僧未だ諍事あらざるに便ち諍事あり、已に諍事あれば、而も除滅せず。諸の比丘是くの如きの念を作す『何の因緣を以て、衆僧未だ諍事あらざるに、諍事をして起らしめ、已に諍事あれば、而も除滅せざる』と。諸の比丘卽ち此の二比丘、智慧と盧醯那と、憙んで共に鬪諍し、共に相罵詈して口より刀劍を出し、互に長短を求めて自ら共に鬪諍罵詈し、若し餘の比丘ありて鬪諍すれば、卽ち彼れに往いて勸めて言はく『汝等好く自ら勉力して他に如かざること莫れ、汝等多聞にして智慧財富も亦勝れ、多く智識あり『我等當さに汝が爲めに伴黨と作るべし』と。是の故に僧未だ諍事あらざるに便ち諍事あり、已に諍事あれば、而も除滅せざることを知る。時に衆中に比丘ありて聞く。少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ふ者なり。彼の二比丘を嫌責し已りて、世尊の所に往き、頭面に禮足して却つて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時、此の因緣を以て比丘僧を集め、彼の二比丘を呵責したまはく『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり。云何ぞ智慧と盧醯那、共に相鬪諍罵詈して、口より刀劍を出し、互に長短を求め、僧未だ諍事あらざるに、而も諍事あり、已に諍事あれば、而も除滅せざらしむる』と。世尊無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく『諸の比丘、智慧と盧醯那のために、呵責白四羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く作

【六】盧醯那(Rohitaka)。

すべし。僧を集め、僧を集め已りて、智慧等の爲めに擧を作し、擧を作し已りて爲めに憶念を作し、憶念を作し已りて應さに罪を與ふべし。衆中應さに能く羯磨を作すに堪へたる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の智慧と盧醯那の二比丘は、憙んで共に鬪諍し、共に相罵詈して、口に刀劍を出し、互に長短を求む。彼れ自ら共に鬪諍し已りて、若し復餘の比丘ありて鬪諍すれば、卽ち復彼れに往いて勸めて言はく、「汝等勉力して他に如かざること莫れ、汝等多聞にして智慧財富も亦勝れ、多く智識あり、我等も當さに汝が爲めに伴黨と作るべし」と。僧をして未だ諍事あらざるに、而も諍事あり、已に諍事あれば、而も除滅せざらしむ。若し僧時到らば、僧智慧等二比丘の爲めに、呵責羯磨を作すことを忍聽せよ。若し後に更に鬪諍して共に相罵詈せば、衆僧當さに更に罪を增して治すべし、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の智慧、盧醯那の二比丘、憙んで共に鬪諍し、共に相罵詈して口に刀劍を出し、互に長短を求め、彼れ自ら共に鬪諍し已り、若し復餘の比丘ありて鬪諍すれば、卽ち復彼れに往いて勸めて言はく、「汝等勉力して他に如かざること莫れ、汝等智慧多聞にして財富亦勝る、多く智識あり、我等も當さに汝が爲めに伴黨となるべし」と、僧をして未だ諍事あらざるに、而も諍事あり、已に諍事あれば、而も除滅せざらしむ。僧智慧等二比丘の爲めに、呵責羯磨を作す。誰か諸の長老、僧智慧等二比丘の爲めに、呵責羯磨を作し、若し後に復更に鬪諍し共に相罵詈せば、衆僧當さに更に罪を增して治することを忍せよ、忍する者は默然せよ、忍せざる者は說け」と。此れは是れ第一羯磨竟る。是くの如く第二、第三說く。僧已に智慧等のために、呵責羯磨を作すことを忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是の事是くの如く持つ、爲めに呵責を作し竟らば、五事作すべからず。一には人に大戒を授くべからず、二には人の依止を受くべからず、三には沙彌を畜ふべからず、四には僧差を受けて、比丘尼を敎授すべからず、五には若し僧差するも敎授すべからず、是れを呵責羯磨竟りて、五事作すべから

ずと爲す。復五事ありて作すべからず。說戒すべからず、若し僧中に毘尼の義を問ふも答ふべからず、若し衆僧差して羯磨を作すも作すべからず、若し僧中智慧者を揀集して、共に衆事を評論するも、其の例に在るを得ず、若し僧差して信命を作すも作すべからず、是れを呵責羯磨竟りて、五事作すべからずと爲す。復五事あり、作すべからず、早く聚落に入ることを得ず、暮に逼りて還ることを得ず、比丘に親近すべし、外道に親近すべからず、應さに好く諸の比丘の敎に順從すべし異語を作すべからず、呵責竟りて五事作すべからず。復五事あり作すべからず。衆僧所犯に隨つて爲めに呵責羯磨を作し已り、復更に此の罪を犯すべからず、餘も亦犯すべからず、若しは相似、若しは此れより生ずる者、若しは此れより重き者なり。羯磨及び羯磨人を嫌ふべからず。呵責竟りて五事作すべからず。復五事あり作すべからず。善比丘爲めに座を敷いて供養を爲すも受くべからず、他の洗足を受くべからず、他の洗足物を安んずるを受くべからず、他の革屣を拭ふを受くべからず、他の身を摩揩するを受くべからず、呵責羯磨竟らば、五事作すべからず。復五事あり作すべからず。善比丘の禮拜・合掌・問訊・迎逆し、衣鉢を持つを受くべからず。呵責羯磨竟りて五事作すべからず。復五事あり作すべからず。善比丘を擧して爲めに憶念を作し、自言を作すべからず、他の事を證すべからず、布薩自恣を遮すべからず、善比丘と共に諍ふべからず。是れを呵責竟りて、[七]五事作すべからずと爲す。應さに是くの如く作すべし。衆僧智慧と盧醯那の爲めに、呵責白四羯磨を作し竟る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『三法ありて呵責羯磨を作すも、非法非毘尼にして羯磨成就せず。云何が三なる。擧を作さず、憶念を作さず、首罪に伏せず。復三事あり、無犯と[八]犯して懺悔すべからざると、若しは罪を犯し已りて、懺悔し竟るとなり。復三事あり、擧を作さゞると、非法と別衆となり。復三事あり、憶念を作さざると、非法と別衆となり。復三事あり、罪に伏せざると、非法と別衆となり。復三事あり、不

【七】以上七種の五事あり、合して三十五事となる。但し第三の五事は、早入聚落と、逼暮還との二は明なるも、其の下の三は明瞭を缺く様である。親近比丘と不親近外道と順從比丘敎と、不作異語となつて居るが、前の二は一で、後の二に加へ、之を三とするのか、それにしても、比丘の敎に順從せよといふのは、作すべからずと、禁止の意味の五事に數ふるは少しく變である。前の親近も同じ類である。

【八】犯して懺悔すべからずとは、四重と僧殘である。

犯と非法と別衆となり。復三事あり、不應懺罪を犯すと非法と別衆となり。復三事あり、罪を犯し已りて懺悔竟ると非法と別衆となり。復三事あり、不現前と非法と別衆となり。[九]是くの如きの三法は、呵責羯磨を作すも、非法非毘尼にして羯磨成就せず。復三事あり、呵責羯磨を作し、如法如毘尼にして羯磨成就す。何等か三なる。爲めに擧を作し、憶念を作し、自言を爲す。復三事あり、犯罪と可懺罪を犯すと、犯して未だ罪を懺せざるとなり。復三事あり、擧を作すと、法と、和合となり。憶念を作すと、法と和合となり。自言を作すと、法と和合となり。犯罪と法と和合となり。可懺罪を犯と法と和合となり。犯して未だ罪を懺悔せざると、法と和合となり。現前と法と和合となり。是れを三法の呵責羯磨を作して、[一〇]如法如毘尼にして羯磨成就すと爲す。五法あり、呵責羯磨を作し、非法非毘尼にして羯磨成就せず。現前に在らず、自言せず、清淨者の爲めにす、非法、別衆なり。是れを五事と爲す、呵責羯磨を作して、非法非毘尼にして羯磨成就せず。五法あり、如法如毘尼にして羯磨成就す。何等か五なる。現前に在り、自言す、清淨ならず、法、和合なり。是れを五法と爲し、呵責羯磨を作して、如法如毘尼にして羯磨成就す。若し衆僧小食上後食上に在り、若しは説法、若しは布薩に、被呵責羯磨人、衣服を正し、革屣を脱し、一面に在りて住し、胡跪合掌して是くの如きの言を白す。「大德我が懺悔を受けたまへ、自今已去自ら心を責め、止めて復作さず」と。時に智慧と盧醯那比丘と、衆僧に隨順して違逆する所なし、呵責羯磨を解かんことを求む。諸の比丘佛に白す。佛言はく『若し衆僧に隨順して違逆する所なく、呵責羯磨を解かんことを求むる者は、解くことを聽す、白四羯磨を作せ。五法あり、呵責羯磨を解くことを爲すべからず。人に大戒を授くべからず、乃至善比丘と共に鬪ふ。呵責する者、是くの如きの五法あり、呵責羯磨を解くことを爲すべからず。五法あり應さに解くべし。人に大戒を授けず、乃至善比丘と共に鬪はず。呵責羯磨する者、是くの如きの五法あり、應さに解くべし。人に大戒を授けず、乃至善比丘と共に

【九】以上九種の三法である。

【一〇】以上如法如毘尼にして、羯磨成ずるに八種の三事である。

鬪はず。呵責羯磨とは、是くの如きの五法ありて、應さに解くべし。應さに是くの如く解くべし、被呵責羯磨人、應さに衆僧中に至り、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して白して言すべし。「大德僧聽け、我れ比丘某甲、僧ために呵責羯磨を作す、我れ今衆僧に隨順して違逆する所なし、僧に從つて呵責羯磨を解かんことを乞ふ、願はくは僧慈愍の故に、我が爲めに呵責羯磨を解け」と。是くの如く第二、第三白す。衆中當さに作羯磨なるものを差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、某甲比丘、僧爲めに呵責羯磨を作す、彼の比丘衆僧に隨順して違逆するところなし、衆僧に從つて呵責羯磨を解かんことを乞ふ。若し僧時到らば、僧某甲比丘の呵責羯磨を解くことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘、僧爲めに呵責羯磨を作す、彼の比丘衆僧に隨順して違逆する所なし、今衆僧に從つて呵責羯磨を解かんことを乞ふ、誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲めに、呵責羯磨を解かんことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざるものは解け」と。』此れは是れ第一羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に某甲比丘の呵責羯磨を解くことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。

爾の時世尊舍衛國に在しき。時に覊離那國に二の舊住の比丘あり、一を阿濕卑と名づけ、二を富那婆娑と名づく。覊離那國にありて惡行を行じ、他家を汚す。惡行を行ずることは亦見亦聞く、他家を汚すことも亦見亦聞く。自ら華樹を植え、他をして植えしめ、自ら漑ぎ、他をして漑がしめ、自ら華を摘み、他をして摘ましめ、自ら華鬘を作り、他をして作らしめ、自ら種々の華を持ちて往き、他をして持ちて白衣の家に往かしめ、男あり女あり同一床に坐し、同一器に食し、同一器に飲み、歌舞戲笑して衆伎樂を作し、若し他作せば、卽ち復唱和して共に作し、或は脣を吹き、或は鼓簧を彈じ、或は吹貝の聲を作し、或は孔雀の聲を作し、或は鶴鳴を作し、或は走り、或は佯りて跛行を作し、或は嘯き、或は俳說人となり、或は屜を受けて戲笑す。時に衆多の比丘伽尸國より人間

に遊行し、羇離那國に至り、清旦衣を著け鉢を持ち、城に入りて乞食す。行歩進止威儀庠序たり。視瞻安諦屈伸俯仰し、衣鉢を執持し、直視して前み、諸根亂れず、戲離那國に於て乞食す。諸の居士見已りて是くの如きの言を作す『此れ復是れ何等の人ぞ、諦視して戲笑せず、左右を顧視せず、相親近娯樂せず、亦相慰問せず、我曹此の人に食を與ふべからず、我曹の沙門阿濕卑、富那婆娑の、亦諦視せず、言語戲笑し、左右顧視し、共に相娯樂して相慰問するに如かず、是くの如き人は、我曹當さに飲食を與ふべし』と。時に諸の比丘、羇離那國にありて乞食し、飽足を得難し、彼の比丘是くの如きの念を作す、「此の中の舊住の比丘惡しゝ、惡比丘中に在りて住し、善比丘を遠離し、彼れ是くの如きの惡行を作し、若干の華樹を種え、乃至他の雇使を受く」と。時に諸の比丘羇離國より人間に遊行して舍衛國に還り、世尊の所に詣りて、頭面禮足して却つて一面に坐す。爾の時世尊諸の比丘を慰勞したまふ。『汝曹住止和合して安樂たりや不や、飲食を以て疲苦を爲さゞるや』と。佛に白して言さく、『衆僧住止和合して安樂なり。我曹伽尸國より人間に遊行し、羇離那國に至る』と、具さに因縁を以て世尊に白す。世尊爾の時無數の方便を以て呵責して言はく、『汝の所爲は非なり、威儀にあらず、沙門の法にあらず、淨行にあらず、隨順行にあらず、爲すべからざる所なり、云何ぞ阿濕卑・富那婆娑、他家を汚し、惡行を行ずる。他家を汚すことを亦見亦聞く、惡行を行ずることも亦見亦聞く。衆の惡行を作して、雜華樹を種え、乃至他の雇使を受く』と。爾の時世尊阿濕卑・富那婆娑を呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『僧阿濕卑・富那婆娑の爲めに、擯白四羯磨を作すことを聽す、應さに是くの如く作すべし。僧を集め、僧を集め已りて、阿濕卑・富那婆娑のために擧を作し、擧を作し已りて憶念を作し、憶念を作し已りて罪を與ふ。是の中應さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の阿濕卑・富那婆娑比丘、羇離那國に於て、他家を汚し惡行を行ず。彼れ他家を汚すことを亦見亦聞く、惡行を行ずることも

亦見亦聞く。若し僧時到らば、僧阿濕卑・富那婆娑のために擯羯磨を作すことを忍聽せよ、汝他家を汚し惡行を行ず。他家を汚すことを亦見亦聞く、惡行を行ずることも亦見亦聞く。汝此の住處を離れて去るべし、此の住處に在るべからず、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の阿濕卑・富那婆娑比丘、羇離那國にありて、他家を汚し惡行を行ず。他家を汚すことを亦見亦聞く、惡行を行ずることも亦見亦聞く。僧今阿濕卑・富那婆娑の爲めに擯羯磨を作す、汝他家を汚し惡行を行ず、他家を汚すことを亦見亦聞く、惡行を行ずることも亦見亦聞く。汝此の住處を離れて去れ、此に在りて住すべからず。誰か諸の長老、僧阿濕卑・富那婆娑比丘の爲めに擯羯磨を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。此れは是れ初羯磨竟る、第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に阿濕卑・富那婆娑の爲めに、擯羯磨を作すことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。擯羯磨を作す者は、五法あり作すべからず。人に大戒を授くることを得ず、乃至善比丘と鬪ふことを得ず。應さに是くの如く作すべし、上の呵責羯磨の如し、餘の衆中說戒を除く、[一]衆僧已に阿濕卑・富那婆娑比丘の爲めに擯白四羯磨を作し已る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『三法あり、五法あり、擯羯磨を作すは非法非毘尼なり、羯磨成就せず、上の如し。三法あり、五法あり、擯羯磨を作せば、如法如毘尼なり、羯磨成就す、上の如し。彼の被擯比丘喚ばざるに自ら來りて界內に至る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『喚ばざるに界內に來至すべからず、外に在りて住し、好信を遣はして僧中に來至して白すことを聽す。『大德僧懺悔す、自今已去自ら心を責め、更に復爾せず』と。彼の阿濕卑比丘等衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて擯羯磨を解かんことを乞ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し衆僧に隨順して違逆する所なく、僧に從つて擯羯磨を解かんことを乞はゞ、應さに解を與へて白四羯磨を作すべし。五法あり、解擯羯磨を與ふべからず、人に大戒を授くるより、乃至善比丘と共に鬪ふ。復五法あり、應さに解擯羯磨を與ふべし、人に大

【一】餘の衆中說戒を除くといふのは、上の呵責羯磨の中に、說戒すべからずといふ一條があるが、こゝでは說戒のことは除くといふのである。

戒を授けざるより、乃至善比丘と共に闘はず。是くの如くにして被擯比丘を解く。應さに僧中に至り、偏露右肩にして革屣を脱し、右膝地に著け、合掌して是くの如く白す。「大德僧聽け、我れ某甲比丘、僧我がために擯羯磨を作す。我れ今衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて擯羯磨を解かんことを乞ふ、願はくは僧慈愍の故に、我がために擯羯磨を解け」と。是くの如く第二、第三も說く。衆中當さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘、僧ために擯羯磨を作す。衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて擯羯磨を解かんことを乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今某甲比丘の爲めに擯羯磨を解かんことを、白すること是くの如し」と。大德僧聽け、此の某甲比丘、僧爲めに擯羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて擯羯磨を解かんことを乞ふ、僧今某甲比丘のために擯羯磨を解く、誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲めに擯羯磨を解くことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。』是れは初羯磨なり、是くの如く第二、第三も說く。僧已に某甲比丘のために、擯羯磨を解くことを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。

爾の時、世尊舍衞國に在しき。比丘あり僧芻と名づく。癡にして知るところなし、多く衆罪を犯す。諸の白衣と共に雜住して相親附し、佛法に順ぜず。諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり、僧芻比丘を嫌責して言はく『汝癡にして知るところなし、多く衆罪を犯す。云何ぞ諸の白衣と共に雜住して相親附し、佛法に隨順せざるや』と。諸の比丘世尊の所に往き、頭面禮足して一面に在りて坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時比丘僧を集め、無數の方便を以て僧芻比丘を呵責したまはく『汝の所爲は非なり、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ汝諸の白衣と共に雜住して相親附し、癡にして知るところなく、多く衆罪を犯し、佛法に順ぜざる』と。呵責し已りて諸

の比丘に告げたまはく僧僧芻比丘のために、依止白四羯磨を爲すことを聽す。應さに是くの如く作すべし。僧を集め、僧を集め已りてために擧を作せ、擧を作し已りてために憶念を作せ、憶念を作し已りて罪を與へよ。衆中當さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の僧芻比丘、癡にして知るところなし、多く衆罪を犯す。白衣と共に雜住して相親附し、佛法に順ぜず。若し僧時到らば、僧芻比丘のために依止羯磨を作すことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、僧芻比丘癡にして知るところなし、多く衆罪を犯し、白衣と共に雜住して相親附し、佛法に順ぜず。僧今僧芻比丘のために依止羯磨を作す、誰か諸の長老、僧僧芻比丘のために、依止羯磨を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。此れは是れ第一羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に僧芻比丘の爲めに、依止羯磨を作すことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。依止羯磨を作し竟りて、五事作すべからず。人に大戒を授くることを得ず、乃至善比丘と共に鬪ふことを得ず、應さに是くの如く作すべし。是の中の衆僧、僧芻比丘のために、依止白四羯磨を作し竟る。佛言はく『三法あり、五法あり、依止羯磨を作すを得、依止羯磨を作すを得ず、上の如し。彼れは稱す、『方を依止羯磨と作す』と。彼の方は破壞し人民反叛す。佛言はく、『方を依止羯磨と作すと稱すべからず』と。彼れは稱す、『國土を依止羯磨と作す』と。彼の國土は破壞して人民散亂す。佛言はく、『國土を依止羯磨と作すと稱すべからず』と。彼れは稱す、『住處を依止羯磨と作す』と。彼の住處は人民破壞す。佛言はく『住處を依止羯磨と作すと稱すべからず』と。彼れは稱す『人を依止羯磨と作す』と。彼の人或は破戒し、或は破見し、或は破威儀し、或は擧せられ、或は滅擯し、沙門の法を增益すること能はず。佛言はく、『人を依止羯磨と作すと稱すべからず』と。彼れは稱す、『安居を依止羯磨と作す』と。彼の人安居中に智慧を得。佛言はく、『安居に依りて依止羯磨と作すべからず。語言は、汝

應さに依止を受けて住すべきことを聽す』と。爾の時僧蒭比丘、聚落中の比丘と親厚なり、多聞にして智慧あり、善く語言す。僧蒭比丘即ち彼の所に往き、法と毘尼とを學び、安居中に智慧を得、衆僧に隨順して敢て違逆せず、衆僧に從つて依止羯磨を解かんことを乞ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し僧蒭比丘衆僧に隨順して敢て違逆せず、衆僧に從つて依止羯磨を解かんことを乞はゞ、應さに解を與へて白四羯磨を作すべし。五法あり、ために依止羯磨を解くべからず、人のために大戒を授くるより、乃至善比丘と共に闘ふまでなり。五法あり、應さにために依止羯磨を解くべし。人のために大戒を授けざるより、乃至善比丘と闘はざるまでなり。是くの如きの五法は、應さにために依止羯磨を解くべし。應さに是くの如く解くべし。彼の被依止羯磨の者、應さに僧中に來りて、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、我れ比丘某甲、僧我がために依止羯磨を作す、我れ今衆僧に隨順し、僧に從つて依止羯磨を解かんことを乞ふ、願はくは僧慈愍の故に、我が爲めに依止羯磨を解け」と。是くの如く第二、第三白す。衆中應さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、某甲比丘、僧ために依止羯磨を作す、彼れ衆僧に隨順し、敢て違逆せず、僧に從つて依止羯磨を解かんことを乞ふ。僧若し時到らば、僧忍聽せよ、僧今某甲比丘のために依止羯磨を解くことを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、某甲比丘、僧爲めに依止羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて依止羯磨を解かんことを乞ふ。僧今某甲比丘のために依止羯磨を解く、誰か諸の長老、僧某甲比丘のために、依止羯磨を解くことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、是くの如く第二、第三說く。僧已に某甲比丘のために、依止羯磨を解くことを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。

爾の時、世尊舍衛國に在しき。時に舍利弗、目連、五百の比丘と俱に、伽尸國より人間に遊行し、

密林中に至る。時に舍利弗・目連、阿摩梨園中に在り。時に質多羅居士あり、舍利弗・目連の、伽尸國より人間に遊行して密林中に至り、阿摩利園中に在りて住すと聞く。時に彼の居士、舍利弗・目連の所に至り、頭面禮足して却つて一面に坐す。舍利弗・目連爲めに種々に說法開化して歡喜を得せしむ。時に居士舍利弗等の說法を聞き、開解歡喜し已りて白して言さく、『願はくは大德、衆僧と倶に、我が明日の請を受けたまへ』と。舍利弗・目連默然として之を受く。居士、舍利弗・目連の許すことを知り已りて、坐より起ちて禮を作して去る。卽ち其の家に還り、種々の飲食世間の美饌を辦具し、味として有せざるなし。爾の時阿摩梨園中の舊住の比丘を善法と名づく。是くの如きの念を作す。「我れ寧ろ質多羅居士の家に往き、其の辦具飲食を看るべし。云何が客比丘の爲めに食を作り、云何が舊住比丘の爲めに食を作る」と。爾の時善法比丘、卽ち其の家に往いて作食處に至りて看る。其の辦ずるところは、最上世間の所有にして飲食の具味として有せざるなし。見已りて是くの如きの言を作す。『居士客比丘のために、異種の飲食を作り、舊住比丘のためには、異種の飲食を作る。』と。彼れ嫉妬して心に瞋恚を生じ、便ち是くの如きの惡言を作す。『居士辦具する所は、飲食中の最勝、世間所有の飲食の具、味として有せざるなし、唯胡麻滓なし』と。彼の質多羅居士卽ち語りて言はく、『長老善法、是くの如きの多寶なる根力覺意禪定正受を懷き、是くの如きの麁言を作す。善法、我れ是くの如きの美食を辦ずるに、胡麻滓を用ひて何等をか作さん』と。卽ち復言はく、『我れ今當さに譬喩を說くべし。有智の人は喩を以て自ら解す。譬へば國土ありて鷄なきが如し。是の中に賈客あり、雌鷄を持ちて來りて國中に至る。時に彼の雌鷄、雄鷄あることなく、烏と共に通ず。時に鷄便ち卵を生み、子ありて出づ、鷄鳴を作さず、復烏喚せず、卽ち之を名づけて烏鷄と爲す。是くの如く善法、是くの如きの多寶の根力覺意禪定正受を懷いて此の麁言を作す、是くの如き上饌の美食を辦具し、方さに胡麻滓を求む、用ひて何等をか作す』と。彼れ是くの如きの言を作す。『居

士我れを罵る、我れ今去らんと欲す』と。居士言はく、『大德善法、我れは惡言せず、亦罵詈せず。大德善法、樂んで此の密林の中に在りて住すべし、我れ當さに衣被臥具・飲食湯藥を供給すべし』と。彼れ是くの如きの言を作す。『居士我れを罵る、我れ去らんと欲す』と。即ち問うて言はく、『大德、何處に至りて去らんと欲する』と。答へて言はく、『我れ舍衞國の世尊の所に至らんと欲す』と。居士言はく『我が所に共に言語するが如く、具さに世尊に白せ、增減せしむること無れ、何を以ての故に。汝當さに還りて我が所に來至すべし』と。爾の時善法比丘、衣鉢を持ちて世尊の所に詣り、頭面に禮足し已りて、却りて一面に坐す。時に世尊諸の比丘を慰問したまふ。『住止安樂なりや不や、飲食を以て疲苦と爲さゞるや』と。答へて言はく『住止安樂なり、飲食を以て苦と爲さず』と。居士所言の事を以て、具さに世尊に白す、增減あることなし。爾の時世尊無數の方便を以て善法比丘を呵責して言はく『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ善法、彼の居士信樂あり、檀越となして多く利益あり、衆僧に供給す。乃ち下賤の言を以て他を罵る』と。時に世尊善法を呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく『諸の比丘、善法比丘の爲めに、遮不至白衣家白四羯磨を作すことを聽す。[二]五法あり、比丘爲めに遮不至白衣家羯磨を作すべからず。父母を恭敬せず、沙門・婆羅門を敬せず、持つべき所の者を、而も堅持せず、是くの如きの五法あり、僧ために遮不至白衣家羯磨を作すべからず。五法あり、應さに爲めに遮不至白衣家羯磨を作すべし。父母沙門・婆羅門を恭敬し、持つべき所の者は、堅持して捨てず、是くの如きの五法あり、僧應さに爲めに遮不至白衣家羯磨を作すべし。比丘に十法あり、應さにために遮不至白衣家羯磨を作すべし。惡說して白衣の家を罵る、方便して白衣家をして損減せしむ、無利を作す、無住處を作す、白衣を鬪亂せしむ、白衣の前に於て[三]佛法僧を誹る、白衣の前に在りて下賤の罵りを作す、如法に白衣に許して而も實ならず、比丘是くの如きの十法あり、應

【二】五法あり、此の五法ある白衣家に對しては、此の遮不至白衣家羯磨は作さぬといふのである。

【三】佛法僧を誹るは、佛と法と僧と、十法中の三と數へるのである。

さにために遮不至白衣家羯磨を作すべし。是くの如く、九法八法乃至一法ありて、惡說して白衣を罵らば、應さにために遮不至白衣家羯磨を作すべし。應さに是くの如く作すべし。僧を集め、僧を集め已りて爲めに擧を作し、擧を作し已りて爲めに憶念を作し、憶念を作し已りて罪を與ふ。衆中應さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く、是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の善法比丘、質多羅居士は信樂の檀越なり、常に布施を好みて衆僧に供給す、而も下賤の言を以て之を罵詈す、若し僧時到らば僧忍聽せよ。僧今善法比丘の爲めに、遮不至白衣家羯磨を作す、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、善法比丘、質多羅居士は信樂の檀越なり、常に布施を好み、衆僧に供給す、而も下賤を以て之を罵詈す、僧今善法比丘の爲めに遮不至白衣家羯磨を作す、誰か諸の長老、僧善法比丘の爲めに、遮不至白衣家羯磨を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、第二、第三亦是くの如く說く。僧已に善法比丘のために、遮不至白衣家羯磨を作すことを忍し竟る、僧默然たるが故に、是の事是くの如く持つ』と。彼れ遮不至白衣家羯磨を作し已り、五法あり、作すべからず。人に大戒を授くるを得ず、乃至善比丘と共に鬪ふことを得ず。應さに是くの如く作すべし。僧善法比丘のために、遮不至白衣家白四羯磨を作し竟る。諸の比丘佛に白す。佛言はく『三法あり、五法あり、遮不至白衣家羯磨を作すは、非法非毘尼にして羯磨成就せず、上の如し。三法あり、五法あり、遮不至白衣家羯磨を作すは、如法如毘尼にして羯磨成就す、上の如し』と。佛言はく『使を差して質多羅の家に至り、善法比丘の爲めに、質多羅居士に懺悔し、白二羯磨を作すことを聽す。八法あり、應さに使を差すべし。一には聞く、二には能く說く、三には已れ自ら解す、四には能く人の意を解す、五には人の語を受く、六には能く憶持す、七には闕失なし、八には善惡の言義を解す。是くの如きの八法あり、應さに使を差すべし。即ち偈を說いて言はく、

衆智人の前に在りて　言に錯謬あることなく　亦増減あることなし　所言の教を失はず　言破壞すべからず　聞いて以て傾動せず　此くの如きの比丘あり　能く爲めに使と作すに堪ゆ　是くの如きの八法あり、阿難は盡く能く持ち聞く、能く説く、己身自ら解す、能く人の意を解す、人の語を受く、能く憶持して闕失あることなし、善惡の言義を解す。佛言はく、『僧阿難を差して使と爲し、善法比丘の爲めに質多羅居士に懺悔し、白二羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く作すべし。衆中羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし「大徳僧聽け、若し僧時到らば、僧阿難を差して使と爲し、善法比丘の爲めに、質多羅居士に懺悔することを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大徳僧聽け、今僧阿難を差して使と爲し、善法比丘の爲めに質多羅居士に懺悔す、誰か諸の長老、阿難を差して使と爲し、善法比丘の爲めに、質多羅居士に懺悔することを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は説け』と。僧已に、阿難を差して使と爲し、善法比丘の爲めに、質多羅居士に懺悔することを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。僧使を差し竟り、居士の家に至りて、是くの如く語る。『居士、懺悔す、僧已に善法比丘の爲めに罰謫を作す」と。彼れ若し懺悔を受くれば善し、若し受けざれば、應さに眼見耳不聞處に至り、羯磨比丘を安んじて眼見耳不聞處に著き、教へて如法懺悔せしむ。復來りて居士に語りて言はく、『居士、懺悔す、彼の比丘先きに罪を犯す、今已に懺悔を爲す、罪已に除く』と。彼れ若し懺悔を受くれば善し、若し受けざれば、犯罪の比丘、應さに自ら往いて懺悔すべし』と。是の如く阿難、世尊の教を聞き已り、善法比丘を將ひ、質多羅居士の家に至りて語りて言はく、『懺悔す居士、彼の比丘は、僧已に爲めに謫罰を作す』と。質多羅居士卽ち共に懺悔す。時に善法比丘、衆僧に順從して敢て違逆せず、衆僧に從つて遮不至白衣家羯磨を解かんことを乞ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し善法比丘、衆僧に隨順して違逆する所なく、遮不至白衣家羯磨を解かんことを乞は

ど、應さに解白四羯磨を與ふべし。五法あり、ために遮不至白衣家羯磨を解くべからず。人に大戒を授くるより、乃至善比丘と共に鬪ふまでなり。五法あり、應さにために遮不至白衣家羯磨と解くべし。人に大戒を授けざるより、乃至善比丘と共に鬪はず、是くの如きの五法あり、應さにために遮不至白衣家羯磨を解くべし。應さに是くの如く解くべし。彼の被羯磨人、應さに僧中に來至し、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す。「大德僧聽け、我れ比丘某甲、僧ために遮不至白衣家羯磨を作す、我れ今衆僧に隨順して敢て違逆せず、衆僧に從つて遮不至白衣家羯磨を解かんことを乞ふ、願はくは僧慈愍の故に、我が爲めに遮不至白衣家羯磨を解け」と。是くの如く、第二、第三說く。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如く白すべし。「大德僧聽け、某甲比丘、僧ために遮不至白衣家羯磨を作す、彼の比丘衆僧に隨順して敢て違逆せず、衆僧に從つて、遮不至白衣家羯磨を解かんことを乞ふ、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、今僧爲めに遮不至白衣家羯磨を解くことを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、彼れ某甲比丘、僧爲めに遮不至白衣家羯磨を作す、彼の比丘衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて遮不至白衣家羯磨を解かんことを乞ふ、僧今某甲比丘のために、遮不至白衣家羯磨を解く、誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲めに、遮不至白衣家羯磨を解くことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、是くの如く第二、第三說く。僧已に某甲比丘の爲めに、遮不至白衣家羯磨を解くことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。

四分律卷第四十四

巻の第四十五（三分の九）

呵責揵度の餘

爾の時、拘睒彌に在しき。時に闡陀比丘罪を犯す。餘の比丘語りて言はく、『汝罪を犯す、見るや不や』と。答へて言はく、『見ず』と。時に諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知るものあり、闡陀比丘を嫌責して言はく、『云何ぞ罪を犯す』と。諸の比丘語りて言はく、『汝罪を犯す、見るや不や』と。答へて言はく、『見ず』と。時に諸の比丘、卽ち世尊の所に往き、頭面禮足して却つて一面に住し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時此の因緣を以て比丘僧を集め、闡陀比丘を呵責したまふ。『云何ぞ闡陀比丘、汝罪を犯し、諸の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく、「見ず」と』。世尊無數の方便を以て闡陀比丘を呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『衆僧、闡陀比丘のために不見罪擧白四羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く作すべし、應さに僧を集むべし、僧を集め已りて擧を作せ、擧を作し已りてために憶念を作せ、憶念を作し已りて罪を與ふ。衆中當さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の闡陀比丘罪を犯す。餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく、「見ず」と。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、今僧闡陀比丘の爲めに、不見罪擧羯磨を作すことを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、闡陀比丘罪を犯す、餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、見るや不や」と。答へて言はく「見ず」と。今僧爲めに不見罪擧羯磨を作す、誰か諸の長老、僧闡陀比丘のために、不見罪擧羯磨を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、是くの如く、第二、第三說く。僧已に闡陀比丘の爲めに、不見罪擧羯磨を作すことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是

の事是くの如く持つ』と。不見罪擧羯磨を作し已らば、五法あり作すべからず。人に大戒を授くるを得ず、乃至善比丘と共に闘ふを得ず。應さに是くの如く作すべし、衆僧闡陀比丘の爲めに、不見罪擧羯磨を作し已る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『三法あり、五法あり、不見罪擧羯磨を作すは、非法非毘尼にして羯磨成就せず、上の如し。復三法あり、五法あり、不見罪擧羯磨を作さば、如法如毘尼にして羯磨成就す、上の如し』と。彼の不見罪擧の比丘、衆僧若しは小食大食上に在り、若しは說法、若しは布薩の時、應さに衆僧中に往き、一面に在りて住し、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して白して言さく『大德、我が懺悔を受けよ、自ら心意を責め、今より已去、敢て復作さず、闡陀比丘衆僧に隨順して、敢て違逆せず、僧に從つて不見罪擧羯磨を解かんことを乞ふ』と。諸の比丘佛に白す。佛言はく『若し闡陀比丘衆僧に隨順して違逆あることなく、僧に從つて不見罪羯磨を解かんことを乞はゞ、應さにために白四羯磨を作して解くべし。五法あり、ために不見罪擧羯磨を解くべからず。人に大戒を授くるより、乃至善比丘と共に闘ふまでなり。五法あり、應さに不見罪擧羯磨を解くべし。人に大戒を授けざるより、乃至善比丘と共に闘はざるまでなり。應さに是くの如く解くべし。衆中應さに羯磨を作すに堪能なるものを差し、上の如く、是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、彼の某甲比丘、僧ために不見罪擧羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、今僧に從つて不見罪擧羯磨を解かんことを乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、今僧某甲比丘の爲めに、不見罪擧羯磨を解くことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、某甲比丘、僧爲めに不見罪擧羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不見罪擧羯磨を解かんことを乞ふ。誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲めに、不見罪擧羯磨を解くことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と、是れは初羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に某甲比丘の爲めに、不見罪擧羯磨を解くことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事

是くの如く持つ」と。

爾の時、世尊拘睒彌に在しき。時に闡陀比丘罪を犯す。諸の比丘語りて言はく、『汝罪あり、懺悔せよ』と。答へて言はく、『懺悔せず』と。諸の比丘聞く、中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり、闡陀比丘を嫌責して言はく、『云何ぞ罪を犯す』と。餘の比丘語りて言はく、『汝罪を犯す、懺悔せよ』と。答へて言はく、『懺悔せず』と。諸の比丘世尊の所に往き、頭面に禮足して却つて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊此の因緣を以て比丘僧を集め、無數の方便を以て闡陀比丘を呵責したまふ。『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ罪を犯し、餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、懺悔せよ」と。答へて言はく、「懺悔せず」と。』呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『衆僧闡陀比丘の爲めに、不懺悔罪擧白四羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く作すべし。應さに僧を集むべし、僧を集め已りてために擧を作せ、擧を作し已りてために憶念を作せ、憶念を作し已りて罪を與ふ。衆中應さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如く白すべし。『大德僧聽け、此の闡陀比丘罪を犯す、餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、懺悔せよ」と、答へて言はく、「懺悔せず」と。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今闡陀のために不懺悔罪擧羯磨を作すことを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の闡陀比丘罪を犯す、餘の比丘語りて言はく、「汝罪を犯す、懺悔せよ」と、答へて言はく、「懺悔せず」と。誰か諸の長老、僧闡陀のために、不懺悔罪擧羯磨を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、第二、第三是くの如く說く。僧已に闡陀比丘の爲めに、不懺悔罪擧羯磨を作すことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ」と。彼れ不懺悔罪擧を作し已りて、五法あり、作すべからず。人に大戒を授くるを得ずより、乃至善比丘と共に鬪ふを得ずまでなり。應さ

に是くの如く作すべし、衆僧闡陀の爲めに、不懺悔擧白四羯磨を作し已る。諸の比丘佛に白す。佛言はく『三法あり、五法あり、不懺悔罪擧羯磨を作す、非法非毘尼にして羯磨成就せず、上の如し。三法あり、五法あり、不懺悔罪擧羯磨を作し、如法如毘尼にして羯磨成就す、上の如し』と。彼の被作不懺悔罪擧羯磨人、若し衆僧小食大食上に在らんに、若しは說法、若しは布薩の時、應さに僧中に至りて一面に在りて住し、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して白して言さく、『大德、我が懺悔を受けよ、自ら心意を責め、今より已去敢て復作さず』と。彼の闡陀比丘衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不懺悔懺擧羯磨を解かんことを乞ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく『若し闡陀比丘、衆僧に隨從して敢て違逆せず、不懺悔罪擧羯磨を解かんことを乞はゞ、應さに解を與へて白四羯磨を作すべし。五法あり、ために不懺悔罪擧羯磨を解くべからず。人に大戒を授くるより、乃至善比丘と共に鬪ふまでなり。五法あり、應さにために不懺悔罪擧羯磨を解くべし、人に大戒を授けざるより、乃至善比丘と共に鬪はざるまでなり。應さに是くの如く解くべし、彼の不懺悔罪擧の比丘、應さに僧中に往いて偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して白し言さく、「大德僧聽け、我れ某甲比丘、僧ために不懺悔擧羯磨を作し、衆僧に隨順して敢て違逆せず、今僧に從つて、不懺悔罪擧羯磨を解かんことを乞ふ、願はくは僧慈愍の故に、我が爲めに不懺悔罪擧羯磨を解け、白すること是くの如し」と。第二、第三說く。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く、是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘、僧爲めに不懺悔罪擧羯磨を作す、彼れ衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不懺悔罪擧羯磨を解かんことを乞ふ、若し僧時到らば、僧今僧某甲比丘の爲めに、不懺悔罪擧羯磨を解くことを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、某甲比丘、僧ために不懺悔罪擧羯磨を作し、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不懺悔罪擧羯磨を解かんことを乞ふ、誰か諸の長老、僧某甲比丘の爲めに、不懺悔罪擧羯磨

を解くことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に某甲比丘のために、不懺悔罪擧羯磨を解くことを忍し竟る。僧默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。

爾の時、世尊舍衞國に在しき。時に比丘あり、阿利吒と字づく。是くの如きの惡見ありて生ず。「我れ佛所說の法義を知る。婬欲を犯すも障道の法に非ず」と。時に諸の比丘、阿利吒比丘惡見の生ずるを聞き、卽ち阿利吒比丘の所に往き、恭敬問訊し已りて一面に在りて坐し、阿利吒に語りて言はく、『汝實に佛所說の法、婬欲を行ずるも障道の法に非ずと知るや』と。答へて言はく、『我れ實に、佛所說の法は、婬欲を行ずるも障道の法に非ずと知る』と。時に諸の比丘、阿利吒比丘の惡見を除かんと欲し、卽ち慇懃に之を問ふ。『阿利吒、是くの如きの語を作すこと莫れ、世尊を謗ずること莫れ、世尊を謗ずる者は不善なり、世尊は是くの如きの語をなしたまはず、阿利吒、世尊無數の方便にて、欲を斷ずるの法と、欲想を斷じ、欲念を滅し、欲熱を除散し、愛結を越度することを說きたまふ。世尊無數の方便して、欲は大火坑の如し、草炬を執るが如し、亦熟果の如し、亦假借の如し、猶ほ枯骨の如し、欲は段肉の如し、夢の所見の如し、鋒刄を履むが如し、欲は新瓦器に水を盛りて日中に置くが如し、欲は毒蛇の頭の如し、刀を輪轉するが如し、利戟に如似すと說きたまふ、世尊は是くの如く說きたまふ。阿利吒、如來は是くの如く善く法を說き、欲を斷じて欲なく、垢を去りて垢なく、渴愛を調伏して巢窟を除滅し、一切の諸の結縛を出離して愛盡涅槃なりと。佛は是くの如く說法したまふ。汝云何ぞ行欲は障道の法にあらずと言ふ』と。時に諸の比丘慇懃に阿利吒比丘に問ひ、是くの如く說く時、阿利吒比丘惡見を堅持して、審定して言はく、『此れは是れ眞實なり、餘は皆虛妄なり』と。時に諸の比丘、阿利吒の惡見を除くこと能はず、世尊の所に往き、頭面禮足して却いて一面に坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時異比丘に告げて言は

く、『汝我が言を持つて、往いて阿利吒比丘を喚び來れ』と。時に彼の比丘、世尊の敎を受け、阿利吒比丘の所に往いて是くの如きの言を語る。『世尊汝を喚びたまふ』と。阿利吒世尊の喚びたまふを聞き、卽ち世尊の所に往き、頭面に禮足して、却つて一面に坐す。世尊阿利吒に告げて言はく、『汝實に是の語ありや、我れ世尊の說法を知る、婬欲を行ずるも障道の法に非ず』と。答へて言はく、『大德、實に是くの如きの語あり』と。問うて言はく、『汝云何ぞ我が所說是くの如しと知るや、我れ無數に方便して、欲愛を斷ずるの法を說くこと、上の所說の如くならずや』と。爾の時世尊、無數に方便して阿利吒比丘を呵責し已りて、諸の比丘に告げたまはく、『僧阿利吒比丘の爲めに、呵諫を作すことを聽す、此の事を捨つるが故に、白四羯磨を作し、應さに是くの如く諫むべし。衆中當さに羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是くの如く白すべし。「大德僧聽け、此の阿利吒比丘是くの如きの語を作す、「婬欲を行ずるも障道の法に非ず」と。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今阿利吒比丘のために呵諫を作す、此の事を捨つるが故に。阿利吒、是の語を作すこと莫れ、世尊を謗ずること莫れ、世尊を謗ずるは善からず、世尊は是くの如きの語を作したまはず、世尊無數に方便して、婬欲を行ずるは是れ障道の法と說きたまふ、若し欲を犯さば卽ち道を障ふと爲す、白すること是くの如し」と。『大德僧聽け、此の阿利吒比丘是くの如きの言を作す、「我れ佛所說の法は、欲を行ずるも障道の法にあらずと知る」と。僧今ために呵諫を作す、此の事を捨つるが故に、阿利吒、是くの如きの語を作すこと莫れ、世尊を謗ずること莫れ、世尊を謗ずるは善からず、世尊は是の語を作したまはず、世尊無數に方便して、欲は是れ障道の法と說きたまふ、若し欲を犯せば、卽ち障道の法なり、誰か諸の長老、僧阿利吒比丘の爲めに、呵諫を作し、此の事を捨つるを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く。僧阿利吒比丘の爲めに、呵諫を作し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。僧ために呵諫

を作し已る、故ほ惡見を捨てず。時に比丘聞く、中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり、阿利吒比丘を呵責して言はく、『云何ぞ僧ために呵諫を作し已る、故ほ惡見を捨てざる』と。時に諸の比丘世尊の所に往き、頭面に禮足して却つて一面に坐し、此の因縁を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時此の因縁を以て比丘僧を集め、阿利吒比丘を呵責したまふ。『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ僧呵諫を作し已り、故ほ惡見を捨てざる』と。無數の方便を以て、呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『諸の比丘に、阿利吒比丘のために、不捨惡見白四羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く作すべし。僧を集め、僧を集め已りてために擧を作し、擧を作し已りてために憶念を作し、憶念を作し竟りて應さに罪を與ふべし。衆中當さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如く白すべし。「大德僧聽け、阿利吒比丘の惡見、僧ために呵諫を作す、故ほ惡見を捨てず、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今阿利吒比丘のために惡見不捨羯磨を作すことを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、阿利吒比丘惡見を捨てず、僧ために呵諫を作す、故ほ惡見を捨てず、今阿利吒比丘の爲めに、不捨惡見擧羯磨を作す、誰か諸の長老、僧今阿利吒比丘のために、惡見不捨羯磨を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に阿利吒比丘のために、不捨惡見羯磨を作すことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。惡見不捨を作し已りて、五事あり、作すべからず、人に大戒を授くるを得ざるより、乃至善比丘と共に闘ふを得ざるまでなり。應さに是くの如く作すべし、僧阿利吒比丘の爲めに、惡見不捨白四羯磨を作し竟る。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『三法あり、五法あり、惡見不捨擧羯磨を作して、非法非毘尼にして羯磨成就せず、上の如し。復三法五法あり、惡見不捨擧羯磨を作し、如法如毘尼にして羯磨成就す、上の如し』

と。彼の被惡見不捨擧の比丘、若しは僧小食大食上に在らん、說法の時若しは布薩の時、應さに彼れに往いて一面に在りて住し、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す。『大德、我れ懺悔す、自ら心意を責め、今より已去復作さず』と。彼の阿利吒衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不捨惡見擧羯磨を解かんことを乞ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し阿利吒比丘、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不捨惡見羯磨を解かんことを乞はゞ、僧應さに白四羯磨を與へて解くべし。復五法あり、應さにために不捨惡見羯磨を解くべし。人に大戒を授けざるより、乃至善比丘と共に鬪はざるまでなり。應さに是くの如く解くべし、彼の被惡見不捨擧羯磨の比丘、應さに僧中に往き、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著き、合掌して是くの如きの言を白すべし。「大德僧聽け、我れ某甲比丘、僧ために惡見不捨擧羯磨を作す、今衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて惡見不捨擧羯磨を解かんことを乞ふ、願はくは僧我が爲めに、不捨惡見擧羯磨を解け、慈愍の故に」と、第二、第三も說く。衆中應さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如く白すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘、僧ために惡見不捨擧羯磨を作す、今衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて不捨惡見擧羯磨を解かんことを乞ふ、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今某甲比丘の爲めに、惡見不捨擧羯磨を解くことを白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘、僧ために惡見不捨擧羯磨を作す、衆僧に隨順して敢て違逆せず、僧に從つて惡見不捨擧羯磨を解かんことを乞ふ、僧今某甲比丘の爲めに、不捨惡見擧羯磨を解く、誰か諸の長老、僧某甲比丘のために、不捨惡見擧羯磨を解くことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、是くの如く第二、第三も說く。僧已に某甲比丘の爲めに、不捨惡見擧羯磨を解くことを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ」』と。（呵責揵度具足し竟る。）

爾の時、世尊舍衛國に在しき。時に比丘あり、僧殘罪を犯して覆藏し、是くの如きの念を爲す、「我れ云何がすべき」と。諸の比丘に白す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧彼の比丘の爲めに、覆藏日に隨つて、ために覆藏罪を治することを聽す。白四羯磨を作して、應さに是くの如く與ふべし。彼の比丘應さに僧中に來至し、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し、合掌胡跪して是くの如きの言を白すべし。「大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す、我れ某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨つて今僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、願はくは僧我れに[一]隨覆藏日羯磨を與へよ、慈愍の故に」と。是くの如く第二、第三說く。衆中應さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如くの白を作すべし。「大德僧聽け、某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す、彼れ某甲比丘、僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧某甲比丘に覆藏日羯磨を與ふることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す。彼れ某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、僧今某甲比丘に覆藏日羯磨を與ふ、誰か諸の長老、僧某甲比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に某甲比丘に隨覆藏日羯磨を與へ竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。彼れ覆藏を行ずる時、更に重ねて犯す。彼れ是くの如きの念を作す、「我れ當さに云何がすべき」と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧彼の比丘の爲めに、本日治白四羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く治すべし。彼の比丘應さに僧中に來至し、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す。「大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏

【一】隨覆藏日とは、覆藏の日數に應じ、一日覆藏すれば一日別住、二日覆藏すれば、二日別住するから斯く言ふのである。別住とは、他の比丘衆と別處に住するので、其の間種々の制裁がある。

す、我れ某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に覆藏羯磨を乞ふ。僧已に我れに隨覆藏日羯磨を與ふ。我れ某甲覆藏を行ずる時、更に重ねて犯す。我れ某甲、今僧に從つて、覆藏本日治羯磨を乞ふ、願はくは我れ某甲比丘に、覆藏本日治羯磨を與へよ、慈愍の故に」と。是くの如く第二、第三說く。衆中應さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す、此の某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧已に某甲比丘に覆藏日羯磨を與ふ。彼れ覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す。今僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧某甲比丘に本日治羯磨を與ふることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す、此の某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏日羯磨を乞ひ、僧已に某甲比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ。彼れ覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す、彼れ僧に從つて、覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧今某甲比丘に覆藏本日治羯磨を與ふ。誰か諸の長老、僧某甲比丘に覆藏本日治羯磨を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、是くの如く第二、第三說く。僧已に某甲比丘に、覆藏本日治羯磨を與ふることを忍し竟る。僧忍して默然する故に、是の事是くの如く持つ」と。彼の比丘覆藏を行じ竟り、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧彼の比丘の爲めに、六夜[二]摩那埵白四羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く與ふべし。彼の比丘應さに僧中に至り、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す。「大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す、我れ某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏日羯磨を乞ひ、僧已に我れに隨覆藏日羯磨を與ふ。我れ覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す、僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に我れに覆藏本日治羯磨を與ふ。我れ某甲比丘、覆藏本日治を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵と乞ふ、願はくは僧我れ

【二】摩那埵(Mānatva)は、悅衆意或は意喜などゝ譯さる。七日間別住され、六夜に跨るから六夜摩那埵といひ、此の別住終れば、出罪するので、十分自己の非を懺悔し終り、再び本に還り、衆の意を悅ばすので此の名がある。

に六夜摩那埵を與へよ、慈愍の故に」と。是くの如く第二、第三說く。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す。某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ひ、僧已に某甲比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ。彼れ覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す、此の某甲比丘僧に從つて、覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に某甲比丘に、覆藏本日治羯磨を與ふ。此の某甲比丘覆藏本日治を行じ竟り、六夜摩那埵羯磨を乞ふ。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧某甲比丘に六夜摩那埵羯磨を與ふることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏す、此の某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ひ、僧已に某甲比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふ。此の某甲比丘覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す。僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ひ、僧已に此の比丘に、覆藏本日治羯磨を與ふ。此の某甲比丘覆藏本日治を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵羯磨を乞ふ。僧今某甲比丘に、六夜摩那埵羯磨を與ふ、誰か諸の長老、僧某甲比丘に、六夜摩那埵羯磨を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に某甲比丘に六夜摩那埵羯磨を與ふることを忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是の事是くの如く持つ』と。彼れ摩那埵を行じ竟り、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『僧彼の比丘のために、白四羯磨出罪を作すことを聽す。應さに是くの如く出罪すべし。彼の比丘應さに僧中に至り、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し已りて右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す。「大德僧聽け、我れ某甲比丘、僧殘罪を犯して覆藏す。我れ某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨つて、已に僧に從ひ覆藏日羯磨を乞ふ。僧已に我れに隨覆藏日羯磨を與ふ。我れ某甲比丘覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯す。僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に我れに覆藏本日治羯磨を與ふ。我れ某甲比丘覆藏本日治を行じ竟り、僧に從つて六夜

摩那埵羯磨を乞ふ。僧已に我れに六夜摩那埵羯磨を與ふ。我れ比丘某甲六夜摩那埵を行じ竟り、今、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、慈愍の故に」と、是くの如く第二、第三說く。衆中應さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す、此の某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧已に某甲比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふ。此の某甲比丘覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に某甲比丘に、覆藏本日治羯磨を與ふ。此の比丘覆藏本日治を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵羯磨を乞ひ、僧已に某甲比丘に六夜摩那埵羯磨を與ふ。此の比丘六夜摩那埵を行じ竟り、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今某甲比丘の爲めに出罪することを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す。某甲比丘僧殘罪を犯し、覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、僧已に某甲比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふ。此の比丘覆藏を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に某甲比丘に、覆藏本日治羯磨を與ふ。此の某甲比丘覆藏本日治を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵羯磨を乞ふ。僧已に比丘某甲に六夜摩那埵羯磨を與ふ。此の某甲比丘六夜摩那埵を行じ竟り、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。僧今比丘某甲の爲めに出罪す、誰か諸の長老、僧此の某甲比丘のために、出罪することを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。此れは是れ初羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く、僧已に某甲比丘の出罪を忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是の事是くの如く持つ』と。

爾の時、比丘あり、僧殘罪を犯して覆藏せず、是くの如きの念を作す、「我れ當さに云何がすべき」と。諸の比丘に白す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧彼の比丘に六夜摩那埵白四羯磨を與ふることを聽す。應さに是くの如く與ふべし。彼の比丘應さに僧中に至り、偏露右肩にして革屣を脫

し、僧足を禮し已り、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す。「大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、願はくは僧六夜摩那埵を與へよ、慈愍の故に」と、是くの如く第二、第三說く。僧中應さに羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧某甲比丘に六夜摩那埵を與ふ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧今某甲比丘に六夜摩那埵を與ふ、誰か諸の長老、僧某甲比丘に六夜摩那埵を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、是くの如く第二、第三說く。僧已に某甲比丘に六夜摩那埵を與ふることを忍し竟る、僧忍して默然たるが故に、是の事是くの如く持つ」と。彼れ摩那埵を行じ、中間に更に犯す。彼の比丘是くの如きの言を作す『我れ當さに云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『僧彼の比丘のために、摩那埵本日治白四羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く與ふべし。彼の比丘應さに僧中に來至し、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し已りて、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す。「大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ひ、僧已に我れに六夜摩那埵を與ふ。我れ六夜摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯す。今僧に從つて摩那埵本日治羯磨を乞ふ。願はくは僧我れに摩那埵本日治羯磨を與へよ、慈愍の故に」と、是くの如く第二、第三說く。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ひ、僧已に六夜摩那埵を與ふ。彼の比丘六夜摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて摩那埵本日治羯磨を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧某甲比丘に摩那埵本日治羯磨を與ふることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某

甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ひ、僧已に六夜摩那埵を與ふ。此の比丘六夜摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて摩那埵本日治羯磨を乞ふ、僧今某甲比丘に、摩那埵本日治羯磨を與ふ。誰か諸の長老、僧某甲比丘に、摩那埵本日治羯磨を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に某甲比丘に、摩那埵本日治羯磨を與ふることを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。彼れ摩那埵を行じ竟りて諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧彼の比丘の爲めに出罪して白四羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く作すべし。彼の比丘應さに僧中に來至し、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し已りて、右膝地に著け、合掌して白し言ふべし、「大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ひ、僧已に我れに六夜摩那埵を與ふ。我れ六夜摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて六夜摩那埵本日治羯磨を乞ふ、僧已に我れに摩那埵本日治羯磨を與ふ、我れ某甲比丘、摩那埵本日治を行じ竟る。今僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、願はくは僧我れに出罪羯磨を與へよ、慈愍の故に」と、是くの如く第二、第三說く。僧中應さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧已に六夜摩那埵を與ふ。彼の比丘六夜摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて摩那埵本日治羯磨を乞ふ。僧已に彼の比丘に、摩那埵本日治羯磨を與ふ。彼れ摩那埵本日治を行じ竟り、今僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧某甲比丘の爲めに出罪す、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧已に六夜摩那埵を與ふ、彼れ摩那埵を行ずる時、更に重ねて罪を犯し、僧に從つて摩那埵本日治羯磨を乞ふ、僧已に摩那埵本日治羯磨を與ふ。此の比丘摩那埵本日治を行じ竟る、今僧に從

つて出罪羯磨を乞ふ。僧今某甲比丘に出罪羯磨を與ふ。誰か諸の長老、僧某甲比丘に出罪羯磨を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に某甲比丘に出罪羯磨を與ふることを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と

時に一比丘あり、衆多の僧殘罪を犯す、或は犯して覆藏一夜なるあり、或は犯して覆藏二夜なるあり、是くの如く乃ち十夜に至る。彼の比丘に是くの如きの念を作す、「我れ當さに云何がすべき」と諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『僧彼の比丘のために、共に犯衆多僧殘罪覆藏十夜白四羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く與ふべし。彼の比丘應さに僧中に來至し、偏露右肩にして革屣を脱し、僧足を禮し已りて、右膝地に著け、合掌して白して言ふべし。「大德僧聽け、我れ某甲比丘衆多僧殘罪を犯し、或は覆藏一夜、或は覆藏二夜、乃至十夜なる者あり、今僧に從つて、覆藏一夜乃至十夜羯磨を與へよ、慈愍の故に」と。是くの如く第二、第三も說く。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作す。「大德僧聽け、此の某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、或は覆藏一夜乃至十夜なるあり、今僧に從つて覆藏一夜乃至十夜羯磨を乞ふ、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧某甲比丘に、覆藏一夜乃至十夜羯磨を與ふることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、或は覆藏一夜乃至十夜なるあり、今僧に從つて、覆藏一夜乃至十夜羯磨を乞ふ、今僧某甲比丘に、覆藏一夜乃至十夜羯磨を與ふ、誰か諸の長老、僧彼の比丘に、覆藏一夜乃至十夜羯磨を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、是くの如く第二、第三も說く。僧已に某甲比丘に、覆藏一夜乃至十夜羯磨を與へ竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。彼の比丘覆藏を行じ竟りて諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『僧彼の比丘に六夜摩那埵白四羯磨を與ふる

ことを聽す。彼の比丘應さに僧中に來至し、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し已り、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す。「大德僧聽け、我れ某甲比丘衆多僧殘罪を犯し、覆藏一夜、或は二夜乃至十夜なり、僧に從つて覆藏一夜乃至十夜羯磨を乞ふ、僧已に我れに覆藏羯磨を與ふ。我れ某甲比丘、已に覆藏を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、願はくは僧我れに六夜摩那埵を與へよ、慈愍の故に」と、是くの如く第二、第三說く。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘衆多僧殘罪を犯し、覆藏すること或は一夜、或は二夜乃至十夜なり。僧に從つて覆藏十夜羯磨を乞ふ、僧已に此の某甲比丘に覆藏十夜羯磨を與ふ。此の比丘覆藏を行じ竟し、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今某甲比丘に六夜摩那埵を與ふ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘衆多僧殘罪を犯し、覆藏或は一夜、或は二夜乃至十夜なり、已に僧に從つて、覆藏十夜羯磨を乞ふ、僧已に覆藏十夜羯磨を與ふ。彼の比丘十夜羯磨を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧今彼れに六夜摩那埵を與ふ。誰か諸の長老、僧彼の比丘に、六夜摩那埵を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初羯磨なり、第二、第三亦是くの如く說く。僧已に彼の比丘に、六夜摩那埵を與ふることを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。彼れ摩那埵を行じ竟りて、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、「僧彼の比丘に、出罪白四羯磨を與ふることを聽す。彼の比丘應さに僧中に來至し、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し已りて、右膝地に著け、是くの如きの言を白す。「大德僧聽け、我れ某甲比丘、衆多僧殘罪を犯し、覆藏すること或は一夜、或は二夜、乃至十夜なり、僧に從つて覆藏十夜羯磨を乞ふ、僧已に我れに覆藏十夜羯磨を與ふ。我れ覆藏を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。僧已に我れに六夜摩那埵を與ふ、我れ六夜摩那埵を行じ竟り、今僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、願はくは

僧我れに出罪羯磨を與へよ、慈愍の故に」と。是くの如く第二、第三說く。衆中應さに羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘衆多僧殘を犯し、覆藏すること或は一夜、或は二夜乃至十夜なり。僧に從つて覆藏十夜羯磨を乞ふ、僧已に十夜羯磨を與ふ、彼の某甲比丘十夜羯磨を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。僧已に彼の比丘に六夜摩那埵を與ふ、彼の比丘六夜摩那埵を行じ竟り、今僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今某甲比丘に出罪羯磨を與ふることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘衆多僧殘罪を犯し、覆藏すること或は一夜、或は二夜乃至十夜なり、僧に從つて覆藏十夜羯磨を乞ふ、僧已に十夜羯磨を與ふ。某甲比丘十夜覆藏を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。僧已に彼の比丘に六夜摩那埵を與ふ。彼の某甲比丘六夜摩那埵を行じ竟り、今僧に從つて出罪羯磨を乞ふ。今僧彼の某甲比丘に出罪羯磨を與ふ、誰か諸の長老、僧彼の某甲比丘に、出罪羯磨を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是くの如く第二、第三說く。僧已に彼の某甲比丘に、出罪羯磨を與ふることを忍し竟る。僧忍して默然たるが故に、是の事是くの如く持つ」と。

時に一比丘あり二僧殘罪を犯し、二俱に覆藏し、一罪を憶して一罪を憶せず。彼の比丘、所憶の罪に隨ひ、覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏日羯磨を乞ふ。僧彼の比丘に、隨所憶罪隨覆藏日羯磨を與ふ。彼の比丘覆藏を行ずる時、第二罪を憶す、云何せんを知らず、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す、佛言はく『僧に彼の比丘のために、第二罪覆藏日を憶するに隨ひ、覆藏羯磨を與ふることを聽す』と。時に比丘あり、二僧殘罪を犯して二俱に覆藏す。一は疑あり、二は疑なし。彼れ疑なき罪の中に於て、覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏日羯磨を乞ふ。僧彼の比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ。彼の比丘覆藏を行ずる時、第二罪中に於て卽ち疑なきを得たり。自ら念ずらく、「我れ當さに

云何すべき」と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『僧に覆藏日に隨つて、覆藏羯磨を與ふることを聽す』と。時に比丘あり、二僧殘罪を犯して、二倶に覆藏す。一罪を識りて一罪を識らず。彼れ所識の罪に、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧隨覆藏日羯磨を與ふ。彼れ覆藏を行ずる時、卽ち還た第二罪を識る、自ら念ずらく「我れ當さに云何がすべき」と。卽ち諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『僧彼の比丘の爲めに、所還識第二罪覆藏日に隨つて、覆藏羯磨を與ふることを聽す』と。時に比丘あり、二僧殘罪を犯して、二倶に覆藏す。彼れ覆藏を乞ふ時一罪を說いて一罪を覆藏す。彼れ所說の罪に隨つて、僧に從ひ覆藏羯磨を乞ふ。僧覆藏羯磨を與ふ。彼れ覆藏を行ずる時、第二犯に於て慚愧の心生じ、自ら念ずらく「我れ當さに云何がすべき」と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『僧應さに所犯の第二罪覆藏日に隨ひ、覆藏羯磨を與ふべし』と。佛言はく『汝曹善く聽け、若し比丘二僧殘罪を犯して二倶に覆藏し、一罪を憶して一罪を憶せず。彼の比丘所憶の罪、不憶の罪、倶に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧彼れに二罪の覆藏羯磨を與ふ。彼れ覆藏を行ずる時、客比丘の來るあり、法を知り、律を知り、摩夷を知る。彼の客比丘舊比丘に問ふ。「此の比丘何の犯す所ぞ、何が故に覆藏を行ずる」と。舊比丘答へて言はく、「長老、此の比丘二僧殘罪を犯して二倶に覆藏す。一罪を憶して一罪を憶せず。二倶に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧彼れに倶に覆藏羯磨を與ふ。是の故に彼の比丘覆藏を行ず」と。客比丘言はく、「長老、彼の覆藏羯磨を與ふることを成ぜず、何を以ての故に、彼の比丘所憶の罪に、覆藏羯磨を與ふるは善からず、非法なり羯磨成就せず、衆僧應さに突吉羅懺を作すべし、彼れ應さに摩那埵を與ふべし、疑と不疑と、識と不識とも亦是くの如し」と。』時に比丘あり、僧殘罪を犯して覆藏すること兩月なり、彼れ一月を憶して一月を憶せず。彼れ所憶の一月に隨つて、僧に從ひ覆藏羯磨を乞ふ。僧一月の覆藏羯磨を與ふ。彼れ覆藏を行ずる時第二月を憶す、自ら念ずらく「我れ云何がすべき」

と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧彼の比丘に、隨憶第二月覆藏羯磨を與ふることを聽す。疑と不疑も亦是くの如し、識と不識も亦是くの如し。覆藏を乞ふ時、一月を覆藏し、一月を發露ずるも亦是くの如し』と。佛諸の比丘に告げたまはく、『善く聽け、若し比丘僧殘罪を犯し、覆藏兩月なり、一月を憶して一月を憶せず、二俱に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧彼れに兩月覆藏羯磨を與ふ。彼れ覆藏を行ずる時、客比丘ありて來る、法を知り、律を知り、摩夷を知る。彼の客比丘、舊比丘に問うて言はく、「長老、彼れ何の犯す所ぞ」と。答へて言はく、「此の比丘僧殘罪を犯す、覆藏すること兩月なり、一月を憶して一月を憶せず、彼の憶と不憶との二俱に僧に從つて兩月覆藏を乞ふ、僧彼れに隨つて兩月の覆藏羯磨を與ふ。是の故に彼の比丘覆藏を行ず」と。彼の客比丘、舊比丘に語りて言はく、『善からず覆藏を與ふること。何を以ての故に、彼の比丘一月を憶す、覆藏を與ふるは善し、一月を憶せず、覆藏を與ふるは善からず、非法にして羯磨成せず、僧應さに突吉羅懺を作すべし、彼の比丘には、應さに摩那埵を與ふべし」と、疑と不疑とも亦是くの如し、識と不識とも亦是くの如し」と。時に比丘あり、二僧殘罪を犯して、二俱に覆藏す。彼れ道を罷め、道を罷め已りて復還りて大戒を受け、大戒を受け已りて二罪を覆藏す。自ら念ずらく、「我れ當さに云何がすべき」と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し比丘二僧殘罪を犯して二罪を覆藏し、彼れ道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて二罪を覆藏せば、僧應さに先きに犯すところの覆藏日、及び後の覆藏日に隨つて、覆藏羯磨を與ふべし、覆藏羯磨を與へ已りて摩那埵を與へよ』と。時に比丘あり、二僧殘罪を犯して二俱に覆藏す。彼れ道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて二罪を發露せば、僧應さに彼の比丘の先きの所覆藏日に隨ひ、覆藏羯磨を與ふべし、覆藏羯磨を與へ已りて摩那埵を與へよ』と。時に比丘あり、二僧殘罪を犯して二俱に覆藏せず。彼れ道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を

受け、大戒を受け已りて二罪を覆藏す。彼れ自ら念じて言はく、「我れ當さに云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し比丘二僧殘罪を犯し、二倶に覆藏せず、彼れ道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて二罪を覆藏せば、僧應さに彼の比丘の、後の覆藏日に隨つて覆藏羯磨を與ふべし、然る後に摩那埵を與へよ』と。時に比丘あり、『二僧殘罪を犯し、二倶に覆藏せず、彼れ道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて二罪を發露せば、僧卽ち應さに二罪摩那埵を與ふべし』と。時に比丘あり、二僧殘罪を犯し、一罪を覆藏し、一罪を覆藏せず、彼れ道を罷め、道を罷め已りて復還つて大戒を受け、大戒を受け已りて先きに一罪を發露するに、後に二倶に覆藏す。彼れ是の念を作さく、「我れ當さに云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し比丘二僧殘罪を犯し、一罪を覆藏し、一罪を覆藏せず、彼れ道を罷め道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて、先きに一罪を發露するに、後には二倶に覆藏せば、僧彼の比丘に、所犯に隨ひて、一罪前後覆藏と一罪後覆藏日羯磨を與ふべし』と。時に比丘あり、二僧殘罪を犯し、一罪を覆藏し、一罪を發露す。彼れ道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて、先きに覆藏する所は、後に復覆藏し、先きに發露する者は、後にも亦發露す。『僧應さに前後所覆藏の一罪に隨つて、覆藏羯磨を與ふべし。覆藏せざるところの第二罪は應さに摩那埵を與ふべし』と。時に比丘あり、二僧殘罪を犯し、一罪を覆藏し、一罪を發露す。彼れ道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて、先きに覆藏するところは後に發露し、先きに發露するところは、後に便ち覆藏す。『僧應さに先きに覆藏する所に隨ひ一罪を與へ、覆藏羯磨を與ふべく、後に覆藏する所の第二罪に隨つて、覆藏羯磨を與ふべし』と。時に比丘あり、二僧殘罪を犯し、一罪を覆藏し、一罪を發露す。彼れ道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて、先きに覆藏するところは、二倶に發露す。『僧

應さに彼の比丘に、前に犯すところの一罪覆藏日に隨つて覆藏羯磨を與ふべし、第二罪は、二俱に摩那埵を與ふべし、一罪を憶し、一罪を憶せずも、四句を作れば亦是くの如し。一罪を疑ひ、一罪を疑はず、四句を作るも亦是くの如し。一罪を識り、一罪を識らず、四句を作るも亦是くの如し。覆藏を乞ふ時、一罪を覆藏し、一罪を發露する四句を作るも亦是くの如し。〔三〕此の中覆藏一罪不覆藏一罪より、此に至るまで凡そ五句あり、一句に各四句あり、覆一不覆一の如き、四句を作れば、凡そ二十句あり。覆藏を行ずる時二十句亦是くの如し、覆藏を行じ竟りて二十句亦是くの如し、摩那埵を行ずる時二十句亦是くの如し、摩那埵を行じ竟りて二十句亦是くの如し。沙彌還た大戒を受くるの百句を作るに亦是くの如し、癲狂百句亦是くの如し、心亂百句亦是くの如し、痛惱百句亦是くの如し、僧ために不見罪擧を作す百句亦是くの如し、不懺悔罪百句亦是くの如し。惡見不捨罪、百句亦是の如し』と。爾の時覆藏を行ずる比丘道を罷め。道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて自ら念ずらく、「我れ當さに云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す、佛言はく、『覆藏を行ずる比丘道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて應さに續いて前日の次行の覆藏を行ずべし』と。時に比丘あり、應さにために本日治を作すべし。彼の比丘道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて、僧應さに彼の比丘の爲めに、本日治白四羯磨を作すべし。時に比丘あり、覆藏を行じて道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて、僧應さに六夜摩那埵白四羯磨を與ふべし。時に比丘あり、摩那埵を行じて道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて、摩那埵を行ずる日は便ち止め、未だ行ぜざる日は、應さに還た續行すべし。時に比丘あり、摩那埵を行じ竟りて道を罷め、道を罷め已りて還た大戒を受け、大戒を受け已りて、僧應さに彼れに出罪白四羯磨を與ふべし。還た沙彌の五句を作るも亦是くの如し、癲狂の五句も亦是くの如し、心亂の五句も亦是くの如し、痛惱の五句も亦是くの如し、僧ために不見罪擧、不懺悔、惡見不捨擧羯磨を作す、各五句亦是くの如し。

【三】此の中の云々の註の意は、一罪覆藏、一罪發露に四句あり、
先覆藏、後覆藏
先發露、後發露
先覆藏、後發露
先發露、後覆藏
となる。若し一憶一不憶、一疑一不疑、一識一不識、覆藏羯磨を乞ふ時、一説一不説と、此の四にまた四句ありとすれば、總べて五句について、計二十句あることゝなる。

時に覆藏を行ずる比丘あり、中間に罪を犯し、日數を知りて覆藏す。彼れ自ら念ずらく、「我れ當さに云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し覆藏を行ずる比丘、中間に罪を犯し、日數を知りて覆藏すれば、僧應さに中間犯罪に隨つて覆藏羯磨を與ふべし、覆藏羯磨を與へ竟りて本日治を與へ、覆藏本日治を行じ竟りて摩那埵を與へ、摩那埵を與へ竟りて應さに出罪を爲すべし。日數を知らずして覆藏するも亦是くの如し、數を知り數を知らず覆藏するも亦是くの如し、覆藏を行じ竟るも亦是くの如し、爾の時摩那埵を行ずる比丘あり、中間に罪を犯し、日數を知りて覆藏せず、彼れ是の念を作さく、「我れ當さに云何がすべき」と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し摩那埵を行ずる比丘、中間に重ねて犯し、日數を知りて覆藏せざれば、僧應さに摩那埵を與ふべし、摩那埵を與へ已りて、應さに摩那埵本日治を與ふべし、摩那埵本日治を行じ已りて、應さに出罪羯磨を與ふべし、日數を知らずして覆藏せざるも亦是くの如し、日數を知り日數を知らず覆藏せざるも亦是くの如し。摩那埵を行じ竟り、日數を知りて覆藏せざるも亦是くの如し、日數を知らずして覆藏せざるも亦是くの如し。日數を知り、日數を知らず覆藏せざるも亦是くの如し』と。爾の時比丘あり、僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、覆藏す、覆藏せず、等覆し、等覆せず、一名と多種、自性と非自性、別異に住するとなり、彼れ是くの如きの念を作す、「我れ當さに云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧彼の比丘のために、覆藏する所の日に隨ひ、覆藏羯磨を與ふることを聽す。應さに是くの如く與ふべし。彼の比丘應さに僧中に至り、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し已りて、右膝地に著け、合掌して白し言すべし。「大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、覆藏す、覆藏せず、等覆し、等覆せず、乃至別異に住す。覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、願はくは我れに覆藏日羯磨を與へよ、慈愍の故に」と、是くの如く第二、第三說く。衆中應さ

に羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、覆藏す、覆藏せず、等覆し、等覆せず、乃至別異に住す、彼れ覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧彼の比丘に、覆藏日羯磨を與ふることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、彼の某甲比丘僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。彼れ覆藏日に隨ひ、僧に從つて隨覆藏日羯磨を乞ふ、僧今某甲比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ、誰か諸の長老、僧彼の某甲比丘のために、覆藏日羯磨を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是くの如く第二、第三說く。「僧已に某甲比丘に隨覆藏日羯磨を與ふることを忍し竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。彼れ覆藏を行ずる時、中間重ねて更に罪を犯し、日數を知りて覆藏し、彼れ是くの如きの念を作す、「我れ當さに云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『僧彼の比丘に、前罪中間覆藏を與へ、本日治白四羯磨を與ふべし、應さに是くの如く與ふべし。彼の比丘應さに僧中に來至し、偏露右肩にして僧足を禮し已り、右膝地に著け、合掌して是くの如きの白を作す。「大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。我れ覆藏する所の日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ひ、僧已に我れに覆藏羯磨を與ふ、我れ某甲比丘覆藏を行ずる時、重ねて更に罪を犯し、日數を知りて覆藏し、僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、願はくは僧我れに前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與へよ、慈愍の故に』と。是くの如く第二、第三說く。衆應さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す、此の比丘僧に從つて隨覆藏日羯磨を乞ふ。此の比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて更に罪を犯し、日數を知りて覆藏す。今僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。若し僧時到らば、僧

忍聽せよ、僧此の比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。此の比丘覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、僧已に此の比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふ。此の比丘羯磨を行ずる時、中間更に罪を犯し、日數を知りて覆藏す。今僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧今此の比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ、誰か長老、某甲比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是くの如く第二、第三說く。僧已に某甲比丘に前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與へ竟る、僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ」と。彼の比丘覆藏を行ずる時、中間に第二に重犯するも亦是くの如し。彼の比丘覆藏を行じ竟り、佛に白す。佛言はく「僧此の比丘に、六夜摩那埵白四羯磨を與ふることを聽す。應さに是くの如く與ふべし。彼の比丘應さに僧中に來至し、偏露右肩にして革屣を脫し、僧足を禮し已りて、右膝地に著け、合掌して白し言ふべし。「大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯す。日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。覆藏日に隨ひ、僧に從つて隨覆藏日羯磨を乞ふ。僧已に我れに隨覆藏日羯磨を與ふ。我れ覆藏を行ずる時、中間重ねて犯す、日數を知りて覆藏す。僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に我れに前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。我れ覆藏を行ずる時中間更に第二犯し、僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に我れに前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふ。我れ某甲比丘覆藏を行じ竟る。今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、願はくは我れに六夜摩那埵を與へよ、慈愍の故にと。是くの如く第二、第三說く。衆中應さに羯磨を作すに堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。此の某甲比丘覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧已に此の比丘に覆藏羯磨を與ふ。此の

比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて犯し、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に此の比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。此の比丘覆藏を行ずる時、中間更に第二重犯す。僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼の比丘覆藏を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧某甲比丘に六夜摩那埵を與ふることを、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の某甲比丘僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧已に此の比丘に、隨覆藏日羯磨を與ふ。此の比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて犯し、日數を知りて覆藏す。僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧彼の比丘に前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼の比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて第二犯を犯す、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧彼の比丘に前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼の比丘覆藏を行じ竟り、今僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ。僧今彼の比丘に六夜摩那埵を與ふ。誰か諸の長老、僧某甲比丘に六夜摩那埵を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是くの如く第二、第三說く。僧已に某甲比丘に六夜摩那埵を與ふることを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ』と。時に彼の比丘摩那埵を行じ竟り、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『僧應さに彼の比丘に、出罪白四羯磨を與ふべし。上の如く是くの如く出罪すべし』と。若しは衆僧彼の比丘の爲めに出罪すること如法ならず。佛諸の比丘に告げたまはく『善く聽け、比丘僧殘罪を犯し、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す、彼の比丘僧に從つて隨覆藏日羯磨を乞ふ、僧隨覆藏日羯磨を與ふ。彼れ覆藏を行ずる時、中間に重ねて犯し、日數を知りて覆藏す、彼れ僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧彼の比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼の比丘覆藏を行ずる時、中間に第二犯す、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前

犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に彼の比丘に前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふるに非法なれば、彼の比丘謂ふ便ち覆藏を行じ竟ると、僧に從つて六夜摩那埵を乞ひ、僧彼の比丘に六夜摩那埵を與ふるも非法なり。彼の比丘謂へらく、便ち摩那埵を行じ竟ると、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、僧彼の比丘に出罪を與ふるは非法なり。我は此の比丘は非清淨なり、罪は不出なりと說く。是の中比丘あり、僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す。彼の比丘覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ。僧已に彼の比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ。彼の比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて犯す、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に彼の比丘に前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ、彼の比丘覆藏を行ずる時、中間に第二犯す、日數を知りて覆藏す、僧に從ひ前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に彼の比丘に前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふ如法なり。彼の比丘覆藏を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧彼の比丘に六夜摩那埵羯磨を與ふるに不如法なり、彼の比丘謂へらく、摩那埵を行じ竟ると、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、僧彼の比丘に出罪を與ふれば非法なり。我れ彼の比丘は不清淨なり、罪不出なりと說く。時に比丘あり、僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、乃至別異に住す、彼の比丘所犯に隨ひ、僧に從つて覆罪羯磨を乞ふ、僧已に彼の比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ、彼の比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて犯し、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に彼の比丘に前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼の比丘覆藏を行ずる時、中間第二に重犯す、僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧已に彼の比丘に前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與へて如法なり。彼の比丘覆藏を行じ已り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧已に彼の比丘に六夜摩那埵を與へて如法なり。彼の比丘摩那埵を行じ竟り、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、僧彼の比丘に出罪を與へて非法ならば、我れ此の人は不清淨な

り、罪不出なりと說く。此の中日數を知りて覆藏せざる三句も亦是くの如し。日數を知りて覆藏し、覆藏せざる三句も亦是くの如し。日數を知りて覆藏する三句も亦是くの如し。日數を知らず、覆藏せざる三句も亦是くの如し。日數を知らず、覆藏し、覆藏せざる三句も亦是くの如し。日數を知り、日數を知らず覆藏する三句も亦是くの如し。日數を知り、日數を知らず、覆藏せざる三句も亦是くの如し。日數を知り、日數を知らず、覆藏し、覆藏せざる三句も亦是くの如し。是の中比丘あり、僧殘罪を犯す、日數を知り、日數を知らず、乃至別異なり。彼の比丘覆藏日に隨ひ、已に僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、僧已に彼の比丘に隨覆藏日羯磨を與ふ。彼の比丘覆藏を行ずる時、中間重ねて犯し、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を乞ふ。僧已に彼の比丘に、前犯中間重犯覆藏本日治羯磨を與ふ。彼の比丘覆藏を行ずる時、中間第二に重犯す、日數を知りて覆藏す、僧に從つて前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を乞ふ、僧彼の比丘に、前犯中間重犯第二犯覆藏本日治羯磨を與ふ、如法なり。彼の比丘覆藏を行じ竟り、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧彼の比丘に六夜摩那埵を與ふ、如法なり。彼の比丘摩那埵を行し竟り、僧に從つて出罪羯磨を乞ふ、僧彼の比丘に出罪を與ふ、如法なり。我れは此の淸淨にして無犯なり、罪出づることを得と說く。數を知りて覆藏せず三句亦是くの如し、數を知りて覆藏し、覆藏せず三句亦是くの如し、數を知らず、覆藏し、覆藏せず三句亦是くの如し。數を知り、數を知らず、覆藏す三句も亦是くの如し、數を知り、數を知らず、覆藏せず三句も亦是くの如し、數を知り、數を知らず、覆藏す、覆藏せず、三句亦是くの如し。

爾の時異住處あり、二比丘あり僧殘罪を犯す、彼の比丘即日住處より出て去りて言はく、『若し淸淨比丘を得ば、我れ當さに懺悔すべし』と。一比丘初め去る時覆藏す。第二比丘、異比丘の便ち覆藏するを見、是れ二俱に覆藏すと爲す。一は罪を憶し、第二は憶せず、彼れ憶して覆藏する者は、

是れを覆藏と爲す、憶せざる者は覆藏にあらず。一は疑ひ、二は疑はず、彼れ疑つて覆藏する者は、是れを覆藏と爲す、疑はずして覆藏する者は、是れを覆藏となす。一は知り、二は知らず、彼れ知つて覆藏する者は、是れを覆藏と謂ひ、彼れ知らずして覆藏する者は、是れを不覆藏と爲す。時に比丘あり、僧殘罪を犯し、波羅夷を犯すと謂ひて覆藏す。彼れ是くの如きの念を作す「我れ當さに云何がすべき」と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『若し比丘僧殘罪を犯し、是れ波羅夷と謂ひて覆藏するは、應さにために突吉羅懺を作し、後に摩那埵を與ふべし』と。時に比丘あり、僧殘罪を犯し、彼れは是れ波逸提、波羅提〻舍尼、偸蘭遮、突吉羅、惡説と謂ひて覆藏す。彼れ是くの如きの念を作す「我れ當さに云何すべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す、佛言はく『若し比丘僧殘罪を犯し、是れ波逸提、乃至惡説と謂ひ、故らに覆藏する者は、應さに教へて突吉羅懺悔を作さしめ、已りて摩那埵を與へよ』と。時に比丘あり、波逸提を犯し、是れ波羅夷と謂ひて覆藏す。佛言はく、『若し比丘波逸提を犯し、是れ波羅夷と謂ひて覆藏せば、教へて突吉羅懺を作さしめ、後に如法に懺せよ』と。時に比丘あり波逸提を犯し、僧殘乃至惡説と謂ひて覆藏す。佛言はく『應さに突吉羅懺せしめ、懺し已りて後如法に懺せよ、波羅提〻舍尼、偸蘭遮、突吉羅、惡説も亦是くの如し。應さに教へて突吉羅懺を作さしめ、懺し已りて覆藏を與ふべし、波逸提乃至惡説を犯すも亦是くの如し。時に異住處に比丘あり、衆多の僧殘罪を犯す、彼の比丘犯數を憶せず、日數を憶せず、彼れ是くの如きの念を作す「我れ當さに云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『若し比丘僧殘罪を犯し、犯數を憶せず、日數を憶せざれば、應さに清淨已來覆藏を與ふべし。若し犯數を憶して日數を憶せざるも、亦應さに清淨已來覆藏を與ふべし。若し日數を憶して犯數を憶せざれば、應さに日を數へて覆藏を與ふべし。疑と不疑も亦是くの如し、識と不識も亦是くの如し。彼の比丘或は一罪の數を憶し、或は一罪の數

を憶せず、或は一罪の日數を憶し、或は一罪の日數を憶せず、應さに淸淨已來覆藏を與ふべし。若し犯數を憶し、或は一罪の日數を憶し一罪の日數を憶せず、應さに淸淨已來覆藏を與ふべし。若し日數を憶し、或は犯數を憶し、或は犯數を憶せず、應さに日を數へて覆藏を與ふべし。疑と不疑も亦是くの如し、識と不識も亦是くの如し。時に比丘あり、僧殘罪を犯し、數を知りて覆藏せず、彼れ僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧六夜摩那埵を與ふ。其の日に於て中間に重ねて犯す、數を知りて覆藏す。彼れ是くの如きの念を作す「我れ當さに云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『若し比丘僧殘罪を犯し、數を知りて覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧六夜摩那埵を與ふ。卽ち其の日に於て中間重ねて犯し、數を知りて覆藏す、僧應さに更に彼の比丘に摩那埵を與ふべし、語りて言へ「汝比丘、應さに更に摩那埵を行ずべし」と。若し摩那埵を行じて一夜乃至六夜の中間に重ねて犯し、數を知りて覆藏せば、僧應さに此の比丘に摩那埵を與ふべし、摩那埵を與へ已りて、應さに摩那埵本日治を與ふべし、摩那埵本日治を行じ已りて、應さに出罪を與ふべし。時に比丘あり僧殘罪を犯す、數を知りて覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧彼の比丘に六夜摩那埵を與ふ。後比丘其の日に於て、中間重ねて犯す、數を知らずして覆藏す。僧應さに彼の比丘に六夜摩那埵を與ふべし、語りて言へ「比丘汝更に摩那埵を行ぜよ」と。若し行ずること一夜、乃至六夜の中間に重ねて犯す、數を知らず、覆藏す、僧應さに彼れに摩那埵を與ふべし、彼れに摩那埵を與へ已りて、應さに摩那埵本日治を與ふべし、摩那埵本日治を與へ已りて應さに出罪を與ふべし。時に比丘あり僧殘罪を犯す、日數を知りて覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧彼の比丘に六夜摩那埵を與ふ、彼の比丘卽ち其の日に於て、中間重ねて犯す、數を知り、數を知らず、覆藏す、僧應さに彼の比丘に六夜摩那埵を與ふべし、語りて言へ「汝比丘更に摩那埵を行ぜよ」と、若し行ずること一夜乃至六夜の中間に重ねて犯し數を知り、數を知

らず覆藏す、僧應さに彼の比丘に六夜摩那埵を與ふべし、彼れ摩那埵を行じ已り、應さに摩那埵本日治を與ふべし、摩那埵本日治を與へ已りて、應さに出罪を與ふべし。數を知らず、覆藏せず、亦是くの如し。數を知り、數を知らず、覆藏せず、亦是くの如し。（人揵度具足し竟る。）

四分律卷第四十五

卷の第四十六（三分の十）

覆藏揵度第十三

爾の時、世尊、舍衞國に在しき。時に六群比丘覆藏を行じ、更互に覆藏羯磨・本日治・摩那埵・出罪羯磨を與ふ。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『自ら覆藏を行じ、他に覆藏羯磨・本日治・摩那埵・出罪を與ふべからず』と。彼の本日治を行ずる比丘、更互に覆藏、本日治・摩那埵・出罪を作す。佛言はく、『自ら本日治を行じ、更互に覆藏・本日治・摩那埵・出罪を作すべからず』と。彼れ自ら摩那埵を行ずる比丘、更互に覆藏を作す。佛言はく、『自ら摩那埵を行じ、他のために覆藏羯磨乃至出罪を作すべからず』と。彼れ自ら出罪す、更互に覆藏羯磨乃至出罪を作す。佛言はく、『自ら出罪し、他に覆藏羯磨乃至出罪を與ふべからず』と。彼れ覆藏を行じ、更互に覆藏羯磨・本日治・摩那埵を作し、足滿二十人出罪す。佛言はく『爾すべからず。自ら覆藏本日治を行ずるも亦是くの如し、自ら摩那埵を行ずるも亦是くの如し、自ら出罪を行ずるも亦是くの如し。彼れ覆藏を行ずる者は、他のために大戒を受けしめ、他に依止を與へ、沙彌を畜へ、僧差を受け、差し已りて比丘尼を教授す、佛言はく、『覆藏を行ずる者は爾すべからず』。と彼れ覆藏を行ずる者、餘の比丘能く說戒する者あるを知り、而も他のために說戒す。僧中に於て或は毘尼の義を問ひ、或は答ふ。衆僧の作羯磨人の數中に在りて僧羯磨を受け、差して事を平斷す、衆僧の差使を受く。佛言はく、『覆藏を行ずる者は爾すべからず』と彼の覆藏を行ずる者、或は早く聚落に入り、暮れ逼りて還り、或は沙門に親附せずして外道に親近し、比丘に隨順せず、異教を說く。佛言はく、『爾すべからず』と。彼れ覆藏を行ずる者、若しは此の罪を犯し、若しは相似、若しは此れより生じ、若しは彼れより重し、他の羯磨及び作羯磨者を呵す。佛言はく、『爾すべからず』と。彼れ覆藏を行ずる者、清淨比丘の敷座、洗脚・拭革屣・揩

摩身を受く。佛言はく、『爾すべからず』と。彼れ覆藏を行ずる者、清淨比丘の起迎逆・禮拜・執手・恭敬問訊・爲持衣鉢を受く。佛言はく、『爾すべからず』と。彼れ覆藏を行ずる者、清淨比丘を擧して、憶念を作し、自言を作し、他の爲めに證を作し、說戒を遮し、自恣を遮し、清淨比丘と共に闘ふ。佛言はく『爾すべからず』と。彼れ覆藏を行ずる者、清淨比丘と共に白衣の家に入り、或は他の比丘に隨つて行き、或は他の比丘を將ひて行き、或は他の供養を受け、或は清淨比丘の剃髮を受け、或は清淨比丘の作使を受く。佛言はく『爾すべからず』と。彼れ覆藏を行ずる比丘、清淨比丘と行き、前食後食の上に至り、前に在りて行き、或は並び語り、並び行き、或は衣を反抄し、或は通肩に衣を披、或は裹頭し、或は兩肩を覆ひ、或は革屣を著く。佛言はく『爾すべからず、自今已去、偏露右肩にして革屣を脫し、後へに隨從して行くことを聽す』と。彼れ覆藏を行ずる者、是くの如きの意を作す「食上に行かざれば、恐らくは餘の比丘我が覆藏を行ずるを知らん」と。佛言はく『爾すべからず』と。彼れ覆藏を行ずる者、是くの如きの意を作す。「食上に至りて坐せずんば、恐らくは餘の比丘、我が覆藏を知らん」と。彼れ覆藏を行ずる比丘、是くの如きの意を作す「請うて食を取りて食せば、恐らくは、餘の比丘我が覆藏を行ずるを知らん」と。佛言はく『爾すべからず』と。彼の覆藏を行ずる者、清淨比丘と次に隨つて坐す。佛言はく『爾すべからず』末行に在りて坐することを聽す、世尊是くの如きの敎あり、犯罪人は下行に在りて坐せよ』と。彼れ白衣の下に在りて坐す、佛言はく『爾すべからず』と。彼れ沙彌の下に在りて坐す。佛言はく『爾すべからず、應さに大比丘の末行に在りて坐すべし』と。彼れ覆藏を行ずる者、清淨比丘と共に經行處に行き、彼れ下經行處に在り、已れ高經行處に在り、或は前に在りて行き、或は並び語り、或は共に行き、衣を反抄し、通肩に衣を披、或は裹頭し、兩肩を覆ひ、革屣を著く。佛言はく『爾すべからず』と。佛言はく『偏露右肩にして革屣を脫し、後に在りて行くことを聽す』と。彼れ覆藏を行

ずる者、道路を行き、是くの如きの意を作す。「正道に在りて行かざれば、恐らくは餘の比丘、我が覆藏を行ずるを知らん」と。佛言はく、『爾すべからず』と。彼れ覆藏を行ずる者、道に在りて行く、是くの如きの意を作す、「後に在りて行かば、恐らくは餘の比丘我が覆藏を行ずるを知らん」と。佛言はく、『爾すべからず』と。彼れ覆藏を行ずる者、清淨比丘と共に、一座一床一板に坐す。佛言はく、『爾すべからず』と。若しは長床板は、佛言はく、『隔斷を作りて然る後に坐することを聽す。若し餘床を取らば、後に在りて坐せよ』と。彼れ覆藏を行ずる者、若しは求食大食上に在りて、應さに掃灑し、坐を敷き、水瓶洗瓶を具し、盛殘食器を具すべし。應さに清淨比丘の爲めに、坐具を敷き、乃ち洗足器物・拭足巾・盛水器に至るべし。清淨比丘來らば、應さに出で﹅、遠く迎ひ、爲めに衣鉢を持つべし。若し鉢床・鉢支あらば、應さに上に安置すべし。若し僧伽梨頭上肩上に在らば、應さに取りて之を看るべし。垢穢汚なきや不やと。若し塵垢穢汚あらば、應さに却くべし、便ち却けて應さに浣ふべきは當さに浣ふべし、浣ひ已らば、曬して繩床上に著け。應さに清淨比丘に、洗足器・拭足巾・盛水器を與ふべし。革屣を拭ひ已らば、左面に著いて之を看よ、泥水をして汚さしめざるや不やと。若し汚水の汚すあらば、當さに移して之を避くべし。清淨比丘の爲めに、足を洗ひ已らば石水器を除去し、本處に安置せよ。彼れ應さに手を淨洗し、清淨比丘に與へて食を過し、清淨比丘食する時は、應さに所須を供給すべし、若しは酪漿、若しは蔓菟・苦酒・鹽・菜・應さに與ふべし、若し熱ければ當さに扇ぐべし、水を須むれば應さに水を與ふべし、若し時の過ぐるを恐るれば、當さに俱に食すべし。清淨比丘食し已らば、當さに爲めに鉢を取り、與に手を洗ひ、若し自ら食し已りて殘食あれば、人若しは非人に與へ、若しは無虫水中、若しは無菓處に著き、食器を洗ひ、本處に還復すべし。應さに食堂を掃灑し、糞土を除去すべし。彼の比丘便ち用ひ已りて、常食の鉢に、糞掃を盛りて棄つ。餘の比丘見て之を惡む。佛言はく、『鉢を用ひて糞掃

を棄つべからず、瓮若しは澡盤、若しは掃箒鉢を以て、應さに淨潔に畜ふべし。彼れ覆藏を行ずる比丘、若し僧洗浴すれば、應さに清淨比丘の所に至りて問ふて言ふべし。『大德、洗ふや不や』と。若し彼れ答へて『當さに洗ふべし』と。言はゞ、此の比丘便ち應さに先づ浴室を看るべし。塵穢なきや不や』と。若し塵穢あらば、應さに掃ふべきは便ち掃ふべし、應さに水灑すべきは、便ち灑げ、應さに薪を取るべければ便ち取れ、應さに破るべきは便ち破れ、應さに水を然やすべければ便ち火を然せ、應さに薪を著くべきは便ち著け、應さに清淨比丘のために、洗浴瓶、若しは浴床、若しは刮汗刀、若しは水器、若しは泥器、若しは樹皮、若しは細末藥、若しは泥を具すべし。應さに上座に問ひ巳りて燃火すべし。若し清淨比丘病み、若しは老羸ならば、應さに扶け將ひて浴室所に至るべし。若し行く能はざれば、繩床・木床若しは衣を以て舁ぎ、浴室所に至り、應さに清淨比丘の衣を取り、衣架上若しは龍牙杙上に安んずべし、若し油あらば、應さに爲めに身に塗るべし。彼の油器安處なくして堅牢ならず、佛言はく『龍牙杙上に安著し、若しは壁上に懸著せよ』と。若し清淨比丘病み、老羸せば、應さに扶け將ひて浴室の中に入り、繩床・木床・浴瓶・刮汗刀・水器・泥器を與へ、樹皮・細末藥・泥を與ふべし。若し烟來りて眼を熏すれば、當さに爲めに障を安んずべし。若し頭熱く背熱ければ、應さに覆を爲すべし。若し洗浴せんと欲して浴室に入らば、應さに清淨比丘に白すべし。若し是くの如きの意を作さんには、『清淨比丘を白さんと欲するも、恐らくは炊亂して共に相逼迮せん』と。直爾に浴室に入り、清淨比丘の後に在りて住し、身を揩摩せよ、彼れ卽ち浴室に入り、清淨比丘の後ろに在りて住し、應さに餘の比丘の爲めに身を揩摩すべし、他の身を揩摩するを受くべからず。清淨比丘のために洗浴し巳り、然る後に自ら浴せよ。若し清淨比丘老ゆれば、應さに將ひ出づべし、若し病まば、繩床若しは木床を以て、舁いて浴室を出でよ。應さに清淨比丘に敷座を與へ、洗脚器・拭巾・洗脚・革屣を與ふべし。應さに清淨比丘の衣を取り、舒看抖擻すべし、

蛇蝎諸の毒虫あらしむるなかれ。然る後授與せよ。若し眼藥丸香あらば與ふべし。若し甜・蒲桃漿・蜜・石蜜あらば、手を淨洗して受けて、清淨比丘に授與せよ。若し清淨比丘にして氣力に乏しければ、應さに扶けて、若しは縄床・木床若しは衣を以て、舁いで房に還るべし。應さに先づ清淨比丘の房内に入り、臥具を敷くべし。若くは氈を手にて捫摸して看、清淨比丘を扶けて臥せしめ、襯體衣を以て内に著け、被を上に覆へ。若し房を出づる時は、應さに戸を閉づべし。浴室の中に至りて看よ、若し縄床・木床、若しは浴瓶、若しは刮汗刀・水器・泥器・樹皮・細末藥・泥あらば、本處に還復し、應さに浴室を洗ふべければ便ち洗へ。不淨水あらば、應さに出すべきは便ち出せ。火ありて應さに滅すべければ便ち滅し、應さに覆ふべきは便ち覆へ。若し浴室の戸は、應さに閉づべきは便ち閉ぢ、應さに脫擧すべきは便ち擧せよ。應さに日に三時清淨比丘を見るべし。彼れ應さに作すべきは如法に作すべし。若し清淨比丘所作あらば、違逆すべからす、若し違逆すれば如法に治すべし。彼れ覆藏を行ずる者は、布薩日に至らば、應さに布薩處を掃灑し、坐を敷き、水瓶・洗脚瓶・然燈を具し、舍羅を具すべし。彼れ覆藏を行ずる者は、布薩竟らば、應さに床座・水瓶・洗脚瓶・舍羅を還復して本處に著くべし。彼れ覆藏を行ずる比丘、上好房中に在りて住し、餘の客比丘住處なし。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『覆藏を行ずる比丘、上好房中に在りて住すべからず、小房中に在りて住することを聽す』と。客比丘來りて、覆藏を行ずる比丘を遣りて出でしむ。佛言はく、『遣るべからず、亦去るべからず、是くの如きの語を作すことを聽す。「大德、我曹二三人共宿することを得ず」と。』覆藏を行ずる比丘是くの如きの念を作す、「衆僧の衣物、次に隨つて取るとせんや、坐處にて取るべきや」と。佛言はく、『次に隨つて取り、已りて下行に在りて坐すべし』と。彼れ覆藏を行ずる比丘、是くの如きの念を作す、「我曹更互に作使することを得るや不や」と。佛言はく、『聽す』と、「我曹自ら相恭敬禮拜し、迎逆執手問訊することを得るや不や」と。佛言はく、『聽す』と。彼れ

是くの如く念ず、「我曹僧伽藍人、沙彌を使ふるを得るや不や」と。佛言はく、『聽す』と。「我等僧伽藍人、沙彌の禮拜、迎逆執手問訊を受くるを得るや不や」と。佛言はく、『受くることを得』と。彼れ覆藏を行ずる、清淨比丘に白さず、佛言はく、『白すことを聽す、應さに是くの如く白すべし、布薩の日、彼の比丘應さに僧中に至りて偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、是くの如きの白を作す。「大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯す、覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏羯磨を乞ふ、僧已に我れに隨覆藏日羯磨を與ふ。我れ某甲已に若干日を行じ、餘は若干日の在るあり、大德に白す、「我が覆藏を行ずるを知らしめよ」と。若しは大衆集まり難く、若しは行くを欲せず、若しは彼の人軟弱にして多く羞愧あらば、應さに清淨比丘の所に至りて白して言すべし、『大德上座、我れ今日敎勅を捨て、作さず』と、若しは作さんと欲する時は、清淨比丘の所に至りて白して言すべし、「我れ今日敎勅する所に隨つて作すべし』と。彼れ覆藏を行ずる者、餘處に至りて餘の比丘を見て白さず。佛言はく、『應さに白すべし、白さずして一夜を失へば突吉羅を得』と。世尊既に白すことを聽す。餘の比丘便ち此れより餘處に至る。白する此處より餘處に至りて疲極す。佛言はく、『此處より餘處に至りて白すべからず。若し因緣あり往かば、應さに白すべきことを聽す、若し復白さずして一夜を失へば突吉羅罪を得。彼れ覆藏を行ずる者、客比丘ありて來るに白さず。佛言はく、『白すべし、若し白さずして一夜を失へば突吉羅罪を得』と。世尊既に彼れに客比丘に白すことを聽したまふ。便ち道路に至り、諸の疾行の比丘に白して疲極す。佛言はく、『道路に往いて疾行の比丘に白すべからず、應さに僧伽藍内に在り、徐行の者に白すべし、若し白さずして一夜を失へば、突吉羅罪を得』と。覆藏を行ずるもの病む、信を遣はして白さず。佛言はく、『白すべし、若し白さずして一夜を失へば、突吉羅罪を得』と。彼れ覆藏を行ずる者二三人、一屋を共にして宿す。佛言はく、『爾すべからず、若し二三人一屋を共にして宿し、一夜を失へば突吉羅罪を得。彼れ覆藏を行ずる者、比丘な

き處に在りて住す。佛言はく『爾すべからず、若し住して一夜を失へば突吉羅罪を得』と。彼れ覆藏を行ずる者、半月半月說戒の時白さず。佛言はく『白すことを聽す、若し白さずして一夜を失へば突吉羅罪を得』と。八事の失夜あり、餘寺に往いて白さず、客比丘の來るあり白さず、緣事あり、自ら外に出でゝ白さず、寺內徐行の者に白さず、病んで信を遣して白さず、二三人一屋を共にして宿す、無比丘の處に在りて住す、半月半月說戒の時白さず、是れを八事の失夜と爲す。佛半月半月說戒の時白すを聽す。應さに是くの如く白すべし。彼れ覆藏を行ずる者、應さに僧中に至りて、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して白し言すべし。『大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏す。我れ某甲比丘覆藏日に隨ひ、僧に從つて覆藏日羯磨を乞ふ。僧已に我れに隨覆藏日羯磨を與ふ。我れ某甲比丘已に若干日を行じ、未だ若干日を行ぜず、大德に白す。我が覆藏を行ずるを知らしむ』と。摩那埵を行ずる比丘も、亦行ずること上の諸事の如くすることを聽す。摩那埵を行ずる者は、應さに常に僧中に在りて宿し、日々白すべし。應さに是くの如く白すべし。偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して白せ。『大德僧聽け、我れ某甲比丘僧殘罪を犯して覆藏せず、僧に從つて六夜摩那埵を乞ふ、僧已に我れに六夜摩那埵を與ふ。我れ某甲比丘已に若干日を行じ、未だ若干日を行ぜず、諸の大德に僧に白す、我が摩那埵を行ずることを知らしむと。』(覆藏揵度具足し竟る。)

遮揵度第十四

爾の時、世尊、舍衞國に在しき。時に六群比丘是くの如きの念を作す。『世尊無數に方便して諸の比丘を敎へたまひ、展轉して相敎へ、更る相受語せしむ』と。便ち清淨無罪の比丘を擧す。佛言はく、『清淨無罪の比丘を擧すべからず』と 佛言はく、『先づ求聽することを聽す』と。六群比丘、佛の

先づ求聽せしむるを聞き、彼れ卽ち淸淨比丘の、先づ六群比丘に從つて求聽する者に求聽す。佛言はく、『爾すべからず、自今已去、內に五法あらば、求聽すべきを聽す。時を知りて非時を以てせず、眞實にして不實を以てせず、利益ありて損減を以てせず、柔軟にして麁獷を以てせず、慈心にして瞋恚を以てせず』と。時に六群內に五法なし、餘の比丘內に五法あり、六群比丘に從つて求聽す、而も聽を與へず。諸の比丘佛に白す、佛言はく、『若し內に五法ありて聽を求むる者は、應さに與ふべし』と。時に六群比丘、他求聽すれば便ち去り、他の聽を許し已れば亦去る。佛言はく、『爾すべからず、自言を作すことを聽す』と。時に六群比丘、他自言を求むるを許し已れば便ち去る、自ら自言を作し已れば復去る、佛言はく、『爾すべからず』と。佛言はく、『布薩說戒の時、應さに說戒を遮すべきことを聽す』と。時に六群比丘、佛の說戒を遮するを聽したまふと聽き、便ち淸淨比丘の說戒を遮す。佛言はく、『爾すべからず』と。佛言はく、『爾等善く聽け、如法に說戒を遮するあり、不如法に說戒を遮するあり、一非法一如法・二非法二如法・三非法三如法・四非法四如法・五非法五如法・六非法六如法・七非法七如法・八非法八如法・九非法九如法・十非法十如法あり。何等か一非法なる。若し無根作を遮すれば是れを一非法となす。何等か一如法なる。有根作を遮すれば、是れを一如法と爲す。何等か二非法なる。無根作不作を遮すれば、是れを二非法となす。何等か二如法なる。有根作不作を遮すれば、是れを二如法と爲す。何等か三非法なる。無根破戒破見破威儀を遮すれば、これを三非法と爲す。何等か三如法なる。有根破戒破見破威儀を遮すれば、是れを三如法と爲す。何等か四非法なる。無根破戒破見破威儀無根邪命を遮すれば、是れを四非法と爲す。何等か四如法なる。有根破戒破見破威儀有根邪命を遮すれば、是れを四如法と爲す。何等か五非法なる。無根波羅夷僧殘波逸提波羅提々舍尼を遮し、無根突吉羅を遮すれば、是れを五非法と爲す。何等か五如法なる。有根波羅夷僧殘波逸提波羅提々舍尼有根突吉羅を遮すれば、是れを五如法と爲す。何等か六非法なる。

無根破戒作不作破見作不作破威儀作不作を遮する、是れを六非法と爲す。何等か六如法なる。有根破戒作不作破見作不作破威儀作不作を遮す、是れを六如法と爲す。何等か七非法なる。無根波羅夷僧殘波逸提波羅提々舍尼偸蘭遮突吉羅惡説を遮す、是れを七非法と爲す。何等か七如法なる。有根波羅夷僧殘波逸提波羅提々舍尼偸蘭遮突吉羅惡説を遮す、是れを七如法と爲す。何等か八非法なる。無根破戒作不作破見破威儀無根邪命作不作を遮する、是れを八非法と爲す。何等か八如法なる。有根破戒作不作破見破威儀作有根邪命を遮する、是れを八如法と爲す。何等か九非法なる。無根破戒若しは作、若しは不作、若しは作不作、破見若しは作若しは不作、若しは作不作、破威儀若しは作若しは不作、若しは作不作を遮する、是れを九非法と爲す。何等か九如法なる。有根破戒、若しは作、若しは不作、若しは作不作、破見破威儀若しは作若しは不作、若しは作不作を遮するは、是れを九如法と爲す。何等か十非法なる。非波羅夷波羅夷説中に入らず、非捨戒、捨戒説中に入らず、如法僧要に隨ふ、如法僧要に隨つて違逆せず、如法僧要違逆説中に入らず、破戒不見不聞不疑、破見破威儀不見不聞不疑なり、是れを十非法と爲す。何等か十如法なる。波羅夷、波羅夷説中に入る。捨戒、捨戒説中に入る、如法僧要は如法僧要に違犯す、如法僧要呵説、如法僧要呵説中に入る、破戒見聞疑あり、破見破威儀見聞疑あり、是れを十如法と爲す。云何が波羅夷を犯す、相貌に因縁して波羅夷を犯せる。比丘を、此の相貌を見て波羅夷を犯すと知るが如し。若しは此の比丘波羅夷を犯すを見ず、彼の比丘に波羅夷を犯すを聞く、比丘若し此の見聞疑を以て、彼の比丘の前に於て布薩せんと欲する時、坐より起ちて、偏露右肩にして右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作す、「此の某甲比丘波羅夷を犯す、衆僧此の比丘の前に在りて説戒すべからず、今此の比丘の説戒を遮す、説戒を遮することを成ず」と。説戒を遮する時、衆僧八難事あり、一々の難事起る、王難・賊難・火難・水難・病難・人難・非人難・虫難なり。此の比丘若し此の見聞疑を以て、此の住處、彼の住處

に說戒せんと欲する時、彼の比丘の前に於て、坐より起ちて偏露右肩し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作す、「某甲比丘波羅夷說中に入り、此の事未だ決定せず、今應さに決定すべし、此の比丘の前に在りて說戒すべからず、今此の比丘の說戒を遮す、說戒を遮することを成ず」と。云何が捨戒。相貌に因緣するに、是れ捨戒の比丘なりと知り、是の相貌を見て、此の比丘の捨戒を知る、若しは此の比丘の捨戒を見ず、彼の某甲比丘に捨戒を聞く、若し此の見聞疑を以て、布薩の時に於て、比丘の前に在り、偏露右肩して右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作さんと欲す。「某甲比丘捨戒す、此の比丘の前に在りて說戒すべからず、我れ今此の比丘の說戒を遮す、遮を成ず」と。說戒を遮する時八難事の起るあり、王難乃至惡虫難なり。彼の比丘若し此の見聞疑を以て此の住處彼の住處に布薩せんと欲する時、彼の比丘の前に在り、坐より起ちて偏露右肩し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作す。「某甲比丘捨戒說中に入る、此の事未だ決定せず、今應さに此の事を決定すべし、此の比丘の前に在りて說戒すべからず、今此の比丘の說戒を遮す、遮を成ず」と。如何が如法僧要不隨なる。相貌に因緣するに如法僧要不隨なるが如し、比丘此の相貌を見て、此の比丘如法僧要不隨なりと知る。若しは此の比丘の如法僧要不隨なるを見ず、彼の某甲比丘に如法僧要不隨なりと聞く。比丘若し此の見聞疑を以て布薩せんと欲する時、此の比丘の前に在りて、偏露右肩にして右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作す。「某甲比丘、僧要に隨はず、此の比丘の前に在りて說戒すべからず、我れ今此の比丘の說戒を遮す、遮を成ず」と。云何が如法僧要違逆なる。相貌に因緣するに、如法僧要違逆なるが如し、比丘此の相貌を見て、此の比丘如法僧要違逆なりと知る。若しは此の比丘の如法僧要違逆を見ず、彼の某甲比丘に如法僧要違逆を聞く。比丘若し此の見聞疑を以て布薩せんと欲する時、彼の比丘の前に在りて坐より起ち、偏露右肩にして右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作す。「某甲比丘如法僧要に違逆す、此の比丘の前に在りて說戒すべから

ず、我れ今此の比丘の說戒を遮す、遮を成ず」と。說戒を遮する時、八難事中の一々の事起るあり、王難乃至惡虫難なり。彼の比丘若し此の見聞疑を以て、此の住處彼の住處に布薩せんと欲する時、此の比丘の前に在りて坐より起ち、偏露右肩にして右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作す。「某甲比丘、如法僧要違逆說中に入り。此の事未だ決定せず、今應さに決定すべし。此の比丘の前に在りて說戒すべからず、我れ今此の比丘の說戒を遮す、遮を成ず」と。云何が破戒する。相貌に因緣するに是れ破戒なるが如し。比丘此の相貌を見て彼の比丘の破戒を知る。若しは此の比丘の破戒を見ず、彼の某甲比丘に破戒を聞く。此の比丘若し此の見聞疑を以て布薩せんとする時、此の比丘の前に在りて、偏露右肩にし、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を作す、「某甲比丘破戒す、此の比丘の前に在りて說戒すべからず、我れ今此の比丘の說戒を遮す、遮を成ず」と。破見、破威儀も亦是くの如し。是れを十如法と爲す』と。

若し比丘他を擧せんと欲せば、內に五法ありて應さに他を擧すべし。何等か五なる。時を以てして非時を以てせず、眞實にして不實を以てせず、有益にして損減を以てせず、柔軟にして麁獷を以てせず、慈心にして瞋恚を以てせず。比丘此の五法ありて、應さに他を擧するを得べし。何を以ての故に。我れ比丘の他を擧するものを見るに、非時を以てし時を以てせず、不實にして實を以てせず、或は損減を以てして利益を以てせず、或は麁獷を以てして柔軟を以てせず、或は瞋恚を以てして慈心を以てせず。彼の餘の比丘應さに此の比丘に語りて言ふべし。『汝を擧するに、非時にして時を以てせず、瞋恚を起すこと莫れ。不眞實を以てして實を以てせず、損減を以てして利益を以てせず、麁獷を以てして柔軟を以てせず、瞋恚を以てして慈心を以てせず、此の語を以て瞋恚すること莫れ』と。若し比丘他の不實擧を被らば、應さに此の五事を以て解喩すべし、『汝を擧するに、非時と不眞實と損減と麁獷と瞋恚となり、是れを以て愁憂すること莫れ』と。不實擧を被る者も、應さに此

の五事を以て解喩すべし。彼れ不實にして他を擧する者は、應さに五事を與へて呵責すべし。『汝他を擧するに、非時にして時を以てせず、不實を以てして實を以てせず、損減を以てして利益を以てせず、麁獷を以てして柔軟を以てせず、瞋恚を以てして慈心を以てせず、慚愧すべし』と。不實を以て他を擧する者は、此の五事を以て呵責すべし。何を以ての故に。後に復不實を以て清淨比丘を擧せざらしむ。呵責し已りて、如法に治すべし。眞實擧を被る比丘は、應さに五事を以て呵責すべし。『汝を擧するに時を得非時を以てせず、瞋恨を生ずること莫れ、眞實にして不實を以てせず、利益にして損減を以てせず、柔軟にして麁獷を以てせず、慈心にして瞋恚を以てせず、愼恨を生ずること莫れ』と。眞實擧を被る比丘、應さに此の五事を以て呵責すべし。呵責し已りて如法に治せよ。彼の眞實に他を擧する者は、應さに五事を以て讃美すべし。他を擧するに時を得、非時を以てせず、悔恨を生ずること莫れ。眞實にして不實を以てせず、利益にして損減を以てせず、柔軟にして麁獷を以てせず、慈心にして瞋恚を以てせず、悔恨を生ずること莫れ』と。眞實に他を擧する者は、應さに五事を以て讃美すべし。何を以ての故に。後に復他を擧すれば、當さに眞實を以て擧すべし。

說戒を遮する比丘、上座の前に至りて是くの如きの語を作す。『我れ某甲比丘の說戒を遮せんと欲す、願はくは聽されよ』と。上座應さに問ふべし。『汝內に五法ありや不や』と。若し『無し』と言はゞ、教へて遮するなからしめよ、若し『有り』と言はゞ、當さに問ふべし。『何等か五なる』と。若し說く能はずんば、語りて遮する莫らしめよ、若し能く說かば、應さに問うて言ふべし。『汝已に中座に問うや未だしや』と。若し『未だ問はず』と言はゞ、應さに教へて問はしむべし。彼れ應さに中座比丘の前に至り、語りて言ふべし。『我れ某甲比丘の說戒を遮せんと欲す、願はくは長老聽せ』と。中座應さに問ふべし。『汝內に五法ありや不や』と。若し『無し』と言はゞ、應さに語りて遮する莫らしむべし。若し『有り』と言はゞ、應さに問うて言ふべし。何等か五なる。若し說く能はずんば、

應さに語りて遮する莫らしむべし。若し能く說かば、應さに問うて言ふべし、『汝已に上座に問ふや未だしや』と。若し『未だし』と言はゞ、應さに語りて問はしむべし。若し『已に問ふ』と言はゞ、應さに問うて言ふべし、『汝復下座に問ふや未だしや』と。若し『未だし』と言はゞ、應さに教へて問はしむべし。彼れ應さに下座比丘の前に至りて、是くの如きの言を作すべし。『我れ某甲比丘の說戒を遮す、願はくは聽されよ』と。彼れ應さに問ふべし、『汝內に五法ありや不や』と。若し『無し』と言はゞ、應さに語りて遮する莫らしむべし。若し說く能はざれば、應さに問うて言ふべし、『何等か五なる』と。若し說く能はざれば、應さに教へて遮するなからしむべし。若し『有り』と言はゞ、應さに問うて言ふべし、『汝上座に問ふや未だしや』と。若し『未だし』と言はゞ、應さに教へて問はしむべし。若し『已に問へり』と言はゞ、應さに問うて言ふべし、『汝中座に問ふや未だしや』と。若し『未だし』と言はゞ、應さに教へて問はしむべし。若し已に『問へり』と。言はゞ、『汝已に彼の比丘に問ふや未だしや』と。若し未だ『問はず』と言はゞ、教へて問はしむべし。此の比丘應さに彼の比丘の所に往きて語りて言ふべし、『我れ長老の說戒を遮せんと欲す、願はくは聽されよ』と。彼れ應さに問うて言ふべし、『汝內に五法ありや不や』と。若し『無し』と言はゞ、應さに教へて遮するなからしむべし。若し『有り』と言はゞ、應さに問うて言ふべし、『何等か五なる』と。若し說く能はざれば、應さに教へ遮するなからしむべし。若し能く說かば、應さに問うて言ふべし、『汝上座に問ふや未だしや』と。若し未だ問はざれば、應さに教へて問はしむべし、中下座も亦是くの如し。彼の比丘應さに自ら觀察すべし、「我が此の事比丘の伴を得るや不や」と。若し伴を得ざれば、應さに彼の比丘に語つて言ふべし、『遮すること莫れ』と。比丘の伴を得れば、應さに語りて言ふべし、『便ち時に隨ふべし』と。

爾の時、異住處あり、布薩の時比丘ありて僧殘を犯す。是くの如きの念を作す、「我れ當さに云何

がすべき」と。即ち諸の比丘に白す。諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し異住處あり、比丘ありて僧殘罪を犯さば、衆僧應さに[一]波利婆沙を與ふべし。波利婆沙を與へ已りて、應さに本日治を與ふべきは、便ち與へよ、應さに摩那埵を與ふべきは、便ち與へよ、應さに出罪を與ふべきは、便ち出罪を與へよ』と。

爾の時、異住處あり、比丘あり波逸提を犯す、是の中比丘あり、或は波逸提を犯すといひ、或は波羅提々舍尼を犯すといふ。彼の比丘是の念を作す、「我れ當さに云何がすべき」と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『異住處あり、比丘あり波逸提を犯す、或は言ふ波逸提を犯すと、或は言ふ波羅提々舍尼を犯すと。是の中波逸提を犯す比丘を見る者あらば、彼の比丘を將ひて眼見不聞處に至り、如法に懺悔せしむ、懺悔し已りて、彼の比丘の所に至りて語りて言はく、『此の比丘已に如法に懺悔す」と。是くの如く作し已りて說戒せよ』と。時に異住處あり、比丘あり偸蘭遮を犯す、是の中の比丘、或は偸蘭遮を犯すと言ひ、或は波羅夷を犯すといふ。是の中偸蘭遮を犯すといふ者は、皆是れ多聞にして阿含を學し、法を持し、律を持し、摩夷を持し、伴黨を得、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・大臣、種々の外道、沙門・婆羅門たり。是の中波羅夷を犯すといふ者も、皆多聞にして阿含を學し、法を持し、律を持し、摩夷を持し、伴黨を得、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・國王・大臣、種々の外道、沙門・婆羅門なり。彼れ是くの如きの念を作す、「若し今日說戒すれば、僧をして鬪諍して共に相誹謗せしめ、僧をして破壞せしめ、僧をして塵垢せしめ、僧をして別異に住せしめん、我れ當さに云何すべき」と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく、『若し異住處の比丘ありて偸蘭遮を犯す、是の中或は偸蘭遮を犯すといひ、或は波羅夷を犯すといふ。偸蘭遮を犯すといふ者は、皆是れ多聞にして乃至摩夷を持し、比丘・比丘尼の伴黨を得、乃至沙門・外道・婆羅門なり。波羅夷を犯すといふ者も、皆是れ多聞にして乃至摩夷を持し、比丘・比丘尼の伴

【一】波利婆沙(Parivāsa)。こゝに別住と譯す、僧と別處に住せしむるのである。

黨を得、乃至沙門・外道・婆羅門なり。彼れ是くの如きの念を作す、「若し今日說戒せば、僧をして鬪諍して共に相誹謗せしめ、僧をして破壞せしめ、僧をして塵垢せしめ、僧をして別異に住せしめん」と。若し比丘此の破僧事を重んぜば、此の日に說戒すべからず』と。佛言はく『說戒を遮することを聽す』と。時に六群比丘、佛の說戒を遮するを聽したまふと聞き、便ち淸淨比丘の說戒を遮す。佛言はく『淸淨比丘の說戒を遮すべからず、汝曹善く聽け、說戒を遮すと雖、遮を成ぜず。無根作を遮すれば遮を成ぜず、有根作を遮すれば遮を成ず。無根不作を遮すれば遮を成ぜず、有根不作を遮すれば遮を成ず。無根作不作を遮すれば遮を成ぜず、有根作不作を遮すれば遮を成ず。無根有餘作不作も亦是くの如し。無根無餘作不作も亦是くの如し。若し五種說戒は、未說戒に說戒を遮するも遮を成ぜず、若し說戒竟りて說戒を遮すれば遮を成ぜず、若し說戒の時說戒を遮すれば遮を成ず。若し說戒を遮する比丘、身に不淸淨を行じ、口に不淸淨を行じ、邪命に、癡にして言ふこと能はず、方便を知らず、問答を解せざれば、餘の比丘應さに語りて言ふべし、『長老止みね、此の鬪諍を作すべからず』と。應さに作すこと是くの如くし已りて說戒すべし。比丘身に淸淨を行じ、口に不淸淨を行じ、邪命、癡にして言ふ能はず、方便を知らず、問答を解せざれば、餘の比丘應さに語りて言ふべし、「長老止みね、此の鬪諍を作すべからず」と、應さに是くの如くし已りて說戒すべし。若し說戒を遮する比丘、身に淸淨を行じ、口に淸淨を行じ、邪命、癡にして言ふこと能はず、方便を知らず、問答を解せざれば、餘の比丘應さに語りて言ふべし、「長老止みね、此の鬪諍を作すべからず」と。應さに作すこと是くの如くにし已りて說戒すべし。說戒を遮する比丘、身に淸淨を行じ、口に淸淨を行じ、不邪命にして智慧あり、能く言ひ、方便を知り、能く問答す。餘の比丘應さに問うて言ふべし、「長老、此の比丘の說戒を遮す、何事を以ての故とする。破戒と爲さんや、破見、破威儀と爲さんや」と。若し破戒と言はゞ、問うて言ふべし、「何等の戒を破する」と。若しは波羅夷と言

ひ、若しは僧殘、若しは偸蘭遮と言はゞ是れを破戒と爲す。若し破戒せず、破見の故に遮すと言はば、應さに問うて言ふべし、「何等の見をか破する」と。若し「六十二見」と言はゞ、此れは是れ破見なり。若し破見せず、破威儀の故に遮すと言はゞ、應さに問うて言ふべし、「何等の威儀を破す」と。若し波逸提・波羅提々舍尼・突吉羅・惡說を破すと言はゞ、是れを破威儀と爲す。應さに問うて言ふべし、『何を以ての故に、此の比丘の說戒を遮する、見を以ての故か、聞疑を以ての故か」と。若し見と言はゞ、應さに問うて言ふべし、「何事をか見る、云何が見る、汝何處に在り、彼れ何處に在りて見る。何等か是れ波羅夷とする、是れ僧殘とする、是れ波逸提とする、是れ波羅提々舍尼・偸蘭遮・突吉羅・惡說とするや」と。若し見ず聞くと言はゞ、應さに問うて言ふべし、「何事をか聞く、誰に從つて聞く、是れ比丘とせんや、是れ比丘尼とせんや、是れ優婆塞とせんや、是れ優婆夷とせんや、何の聞く所ぞ、此の比丘波羅夷を犯すとせんや、僧殘とせんや、波逸提とせんや、波羅提々舍尼とせんや、偸蘭遮とせんや、突吉羅とせんや、惡說とせんや」と。若し聞かず、疑を爲すが故に遮すと言はゞ、應さに問うて言ふべし、「何事をか疑ひ、云何が疑ひ、誰の許に從つて疑を聞くや、比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷とせんや、何事を犯すと疑ふとやする、波羅夷とせんや。僧殘・波逸提・波羅提々舍尼・偸蘭遮・突吉羅・惡說とせんや」と。說戒を遮する比丘、答へて智慧持戒の比丘をして歡喜せしむること能はざれば、若し波羅夷を遮すれば、應さにために僧殘を作し、已りて便ち說戒すべし。若し僧殘を遮すれば、應さに波逸提を與へ、已りて便ち說戒すべし。若し波逸提を遮すれば、應さに餘罪を以て、懺悔し、已りて便ち說戒すべし、若し說戒を遮する比丘、能く答へて、智慧持戒の比丘をして歡喜せしむれば、若し波羅夷を以て遮すれば應さに滅擯を與へ已りて說戒すべし、若し僧殘を遮すれば、應さに覆藏を與へ已りて說戒すべし。若し本日治を與ふべきは本日治を與へ已りて說戒し、若し摩那埵を與ふべきは、摩那埵を與へ已りて便ち

説戒し、出罪羯磨を與ふべきは、出罪を與へ已りて説戒せよ。若し波逸提を以て遮する者は、應さに如法に懺悔し已りて説戒すべし。若し餘事を以て遮すれば、應さに如法に懺悔し已りて、説戒すべし』と。爾の時異住處に説戒す。病比丘、病比丘の説戒を遮す。病比丘是くの如きの念を作す。「我れ當さに云何がすべき」と、諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『若し病比丘、病比丘の説戒を遮すれば、餘の比丘應さに語りて言ふべし「世尊是くの如きの敎あり、病比丘を遮すべからず」と。長老の病差え、彼の比丘の病亦差ゆるを須ちて、長老如法に説け」と。彼の比丘亦當さに如法に説くべし、應さに作すこと是くの如くにし已りて説戒すべし。時に異處の説戒あり、時に病比丘・不病比丘の説戒を遮す。餘の比丘應さに語りて言ふべし「世尊是くの如きの敎あり、病人は他の説戒を遮すべからず」と。病差ゆるを須ちて如法に説くべし」と。彼れ亦當さに如法に説くべし。應さに作すこと是くの如くし已りて説戒すべし』と。時に異處の説戒あり、時に無病の比丘あり、病比丘の説戒を遮す。餘の比丘應さに語りて言ふべし「長老、世尊是くの如きの敎あり、病比丘を遮すべからず」と、病差ゆるを須ちて如法に問へ、彼の比丘も如法に答へん」と。應さに作すこと是くの如くにし已りて説戒すべし。時に異處あり、衆多比丘説戒の日、彼の處に比丘あり、喜んで鬪諍罵言し、共に相誹謗し、口より刀劍を出す「此に來りて説戒せんと欲すと、我曹當さに云何がすべき」と、諸の比丘佛に白す。佛言はく『若し此くの如き事ありて起らば、應さに二三種の布薩を作すべし。若しは十五日説き、十四日作すべし、若しは十四日説き、十三日作すべし。若し今日來ると聞かば、卽ち應さに疾々に一處に集まりて布薩すべし。若し已に界內に至ると聞かば、應さに外に出でゝ布薩すべし。若し已に僧伽藍に入ると言はゞ、便ち應さに浴室を掃除し、浴床・浴瓶・刮汗刀・水器・泥器・樹皮・細末藥、若しは泥を具し、上座に問ひ已りて ために火を然やし、彼の客比丘、浴室に入りて浴する時、應さに一々浴室中より界外に出でゝ説戒すべし。若し客比丘、舊

比丘を喚び共に説戒せんには、應さに答へて言ふべし、「我曹已に説戒し已る」と。客比丘説戒を遮すれば遮を成ぜず。若し説戒の時、舊比丘説戒を遮すれば遮を成ず。若し能く是くの如くする者は善し、若し能はざれば、應さに白を作して説戒日を却くべし。應さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、僧今説戒せず黑月に至りて當さに説戒すべし、白すること是くの如し」と、應さに是くの如きの白を作して、説戒を却くべし。若し客比丘便ち待ちて去らざれば、彼の比丘應さに白を作して、第二却説戒を作すべし。應さに是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、僧今説戒せず、白月に至りて當さに説戒すべし」と、應さに是くの如く第二却説戒を白すべし。若し客比丘去らずして白月に至らば、舊比丘應さに如法に、強えて客比丘と問答ずべし。（遮揵度具足して竟る。）

破僧揵度第十五

爾の時、世尊、王舍城に在しき。因緣ありて衆僧集會す。時に提婆達多坐より起ちて舍羅を行ず、『誰か諸の長老此の〔二〕五事は是れ法なり、是れ毘尼なり、是れ佛の所説と忍する者は籌を捉れ』と。時に五百の新學無智の比丘籌を捉る。爾の時阿難坐より起ち、欝多羅僧を以て一面に著け、是くの如きの言を作す。『誰か諸の長老、此の五事は、法に非ず、毘尼に非ず、佛の教に非ることを忍する者は欝多羅僧を以て一面に著けよ』と。是の中に六十の長老比丘あり、欝多羅僧を以て一面に著く。時に提婆達多諸の比丘に語りて言はく、『長老、我曹佛及び衆僧と、自ら共に羯磨説戒を作すことを須ひず』と。卽ち往いて伽耶山中に至る。爾の時提婆達多伽耶山中に至り、佛及び僧を離れて、自ら羯磨説戒を作す。爾の時衆多の比丘世尊の所に往き、足を禮し已りて却つて一面に坐し、世尊に白して言はく、『王舍城中因緣の事あり、衆僧集會す。時に提婆達多坐より起ちて籌を行じて言はく、「誰か諸の長老、此の五事は是れ法なり、是れ毘尼なり、是れ佛の所教なりと忍する者は、便ち籌

【二】こゝに五事といふのは、提婆主張の五條目で、一乞食、二糞掃衣、三露坐、四不食酥鹽、五不食魚肉である。

を捉れ」と。中に五百の新學無智の比丘あり、即ち籌を捉る。時に長老阿難即ち坐より起ち、欝多羅僧を以て一面に著けて言はく、「誰か諸の長老、此の五法は法に非ず、毘尼に非ず、是れ佛教にも非ざることを忍する者は、欝多羅僧を捨てゝ、一面に著け」と。時に六十の長老比丘あり、欝多羅僧を捨てゝ一面に著く、時に提婆達多諸の比丘に語らく、「我等佛及び僧を捨てゝ、自ら羯磨說戒を作すべし」と。即ち伽耶山中に往き、佛及び僧を捨てゝ羯磨說戒を作す』と。佛言はく、『此の癡人僧を破す。八非正法ありて纏縛覆障し、善心を消滅し、提婆達多非道に趣き、泥梨中に在りて一劫救はず。何等か八なる。利と無利と、譽と不譽と、恭敬と不恭敬と、惡知識と樂惡友と、是くの如きの八非正法あり、纏縛覆翳して善心を消滅し、提婆達多非道に趣き、泥梨中に在りて一劫救はず。我れ若し提婆達多に、毛髮の如き善法だもあるを見ば、終に記して言はず、泥梨中に在りて、一劫救はずと。提婆達多に毛髮の如き善法だもあることを見ざるが故に、記して泥梨の中に在りて一劫救はずといふ。譬へば人ありて屎中に沒在す、人ありて出さんと欲するに、毛髮の如き處の淨の、手を以て捉りて之を出すべきあるを見ざるが如し、今提婆達多を觀るに亦復是くの如し、毛髮の如きの白法あるを見ず、是の故に我れ、提婆達多は泥梨の中に在りて、一劫救はずと言ふ』と。爾の時舍利弗・目連・伽耶山中に往く。比丘あり、見て涕泣して涙を流し、世尊の所に往き、頭面禮足して却つて一面に坐し、世尊に白して言さく、『世尊第一の弟子も亦伽耶山中に往く』と。佛比丘に告げたまはく、『汝恐怖すること莫れ、舍利弗、目連の伽耶山中に往くは、利益を求むるが故なり』と。爾の時提婆達多伽耶山中に在り、無數の衆のために圍遶せられて說法す、遙に舍利弗、目連の來るを見、即ち言はく、『善來、汝大弟子、先きに忍せずと雖、而も今忍せば、後るゝと雖而も善し』と。舍利弗、目連到り已りて座を敷いて坐す。爾の時提婆達多大衆の前に於て、佛の常法の如くし、舍利弗に告げ、衆僧のために說法せしむ。『我れ今背痛す、小しく自ら停息せん』と。時に提婆達多

の法世尊に像どり、自ら僧伽梨を襞疊して四重と爲し、右脇を以て地に著け、猶ほ弟子の如し。覺えず左脇地に著く、猶ほ野干の偃臥して鼾眠するが如し。時に舍利弗、目連に語りて言はく、『今此の大衆の爲めに、示して厭離心を生ぜしむべし』と。目連、舍利弗の語を聞き已りて、卽ち神通を以て虛空に上昇し、或は形を現じて說法す。或時は烟を出し、或時は火を出し、或時は身下に火を出し、或時は身上に水流を出す。或時は身上に火を出し、身下に水流を出す。或時は火然え、毛孔より水を出す。時に舍利弗、大目連の、此の大衆の爲めに、示して厭離心を生ぜしむることを知り已り、卽ち爲めに四諦の法、苦集盡道を說く。時に諸の比丘、卽ち座上に於て遠塵離垢して法眼淨を得たり。爾の時舍利弗、目連諸の比丘に告ぐ。『其れ是れ世尊の弟子なる者あらば、便ち我れに隨つて來れ』と。時に舍利弗、目連、五百の比丘と與に卽ち座より起ちて去る。舍利弗、目連外に出でゝ未だ久しからず、三聞達多、提婆達多の脚指に觸れて言はく、『提婆達多起つべし、舍利弗、目連、五百の比丘を將ひて坐より去る』と。彼れ卽ち驚怖して起ち、熱血面孔より出づ。諸の比丘、舍利弗、目連の五百の比丘を將ひて來るを見、歡喜して佛の所に往詣し、頭面禮足して、却つて一面に坐し、佛に白して言さく、『舍利弗、目連、五百の比丘を將ひて來る』と。佛比丘に告げたまはく、『舍利弗は、直に今提婆達多を破するのみにあらず、此れは是れ第二の舍利弗の破提婆達多なり。乃往過去世の時、年少の婆羅門あり、散若[三]と名づく。往いて射師の所に詣りて白して言はく、『師我れ射術を學ばんと欲す』と。師答へて言はく、『學ぶべし』と。時に散若、七年の中に於て射を學び、七年を過ぎ已りて便ち是くの如きの念を作す。「我れ今射を學ぶも何の時か已るべけん」と。卽ち師の所に往いて白して言はく、「我れ今故ほ幾時か射を學ばん』と。師卽ち敎へて弓を牽いて、箭を著けしめて語りて言はく、『我れ因緣ありて村に入る、我が還るを須ちて乃ち箭を放つべし』と。時に師勅し已りて便ち村に入る。時に散若是の念を作す、「師何が故に我をして弓を牽き箭を著け、還る

【三】散若(Sañjaya)。

を待つて放たしむるや、我れ今箭を放つべし、知る何事かあらんや」と。散若の前に大婆羅樹あり、卽ち箭を放ちて樹に著く、箭過つて地に入りて現ぜず。時に師村に入り、事訖りて便ち還る。散若の所に至りて問うて言はく、『汝未だ箭を放たざるや』と。答へて言はく、『已に放つ』と。師言はく、『汝の作善からず、若し汝箭を放たざれば、閻浮提に於て最も大師たらん。今我れ閻浮提に於て、第一の大師たり、若し我れ死せば、次ぎには當さに汝あるべし』と。時に師其の女を莊嚴し、五百枚の箭と、幷びに一馬車とを以て之に與ふ。時に散若受け已りて、當さに曠野を度るべし。散若卽ち其の婦を安んじて車上に著け、五百枚の箭を持つて曠野を度る。時に五百の群賊あり、曠野の中に於て食す。時に散若卽ち婦に語りて言はく、『汝賊所に往いて食を乞へ』と。時に婦卽ち往いて賊に語りて言はく、『散若汝に從つて食を乞ふ』と。時に賊師言はく、『今其の所使を觀るに、是れ常人にあらず、宜しく食を與ふべし』と。時に一賊あり、便ち起ちて是の言を作す、『我曹猶ほ活く、此の人婦を將ひ、車に乘じて去るをや』と。時に散若卽ち箭を放つ、箭に應じて死す。餘の者も復起ち、是くの如きの言を作す。『我曹猶ほ活く、此の人婦を將ひ、車に乘じて去るをや』と。散若復一箭を放つ、箭に應じて死す。是くの如く其の一々起つものあれば、箭に應じて死す。時に散若餘すに一箭あり、唯賊師の在るあり、未だ其の便を得ずして箭を放たず、卽ち婦に語りて言はく、『汝衣を脫して地に置け』と。婦卽ち衣を脫す。卽ち賊の便を得て箭を放つ、箭に應じて死す』と。佛諸の比丘に告げたまはく、『汝知らんと欲するや不や、若し五百の賊とは、卽ち今の五百の比丘是れなり、賊師とは提婆達多是れなり。散若婆羅門とは、豈異人ならんや、卽ち舍利弗是れなり。舍利弗昔日の破の爲めに、今は第二破なり』と。爾の時舍利弗、目連、五百の比丘を將ひて往いて佛所に至り、頭面に禮足して却つて一面に坐し、佛に白して言さく、『此の五百の比丘、提婆達多に隨順して別衆を作す、今應さに更に大戒を受くべし』と。佛、舍利弗と目連とに告げたまはく、『提婆達多

に隨順するは、先戒卽ち是なり、但應さに敎へて偸蘭遮懺悔を作さしめよ』と。目連佛に白し言さく、『世尊無數衆中に在りて舍利弗に告げたまはく、「汝說法すべし、我れ今背痛む、小しく自ら停息せん」と。提婆達多も亦復是くの如し、法世尊に傚どりて、僧伽梨を疊んで四重と爲し、右脇を以て地に著け、猶ほし師子の如し。覺えず左脇地に著け、猶ほし野干の偃臥鼾眠するが如し』と。佛目連に告げたまはく、『提婆達多は、但今日法我れに傚どりて此の苦惱を得るのみにあらず、此れは是れ第二の苦惱なり。目連、乃往過去世に、雪山王の右面に大池水あり、一大象ありて邊に在りて止住す。時に彼の大象、池水の中に入りて洗浴して水を飲み、鼻を以て藕根を拔取し、洗つて淨ならしめて之を食し、氣力充足し、形體光澤あり。復一小象あり、常に相隨逐す。彼の小象法大象を學ぶ。池水に入りて洗浴し、藕根を拔取し、洗はずして泥を合せて食す。彼れ藕根を食して氣力足らず、形に光澤なし、遂に便ち病を致す。而も偈を說いて言はく、

我曹大に欲なし　藕を食するも甚だ淸淨　小象泥を雜て食す　我れを學んで病を致す　死屍
の臭は息むことあり　食消すれば噫も自ら止む　人非法を行ずれば　長夜に氣滅せず　貪欲瞋
恚と癡と　丈夫惡心あり　癡人は自ら毀傷す　果繁りて枝折るゝが如し　芭蕉は實を以て死し
竹蘆亦復然なり　佞人利養を傷り　騾驢は懷妊して死す

佛目連に告げたまはく、『時に大象とは我が身是れなり、小象とは提婆達多是れなり』と。佛目連に告げたまはく、『此れは是れ提婆達多の、第二に我れを學して此の苦惱を致すなり』と。時に諸の比丘是くの如きの念をなさく、「未曾有なり、提婆達多は是れ世尊の弟子なり、乃ち是くの如く恩に背くことを作し、非法を作し、邪敎を以て五百の弟子を破壞す」と。爾の時世尊、諸の比丘の所念を知り、卽ち諸の比丘に告げたまはく、『提婆達多は、但今日我が弟子を破壞するのみにあらず、乃往過去世に、二閻浮提王あり、一を月と名づけ、二を月益と名づく。十四日に生るゝが故に、名づけ

て月と爲し、十五日に生るゝが故に、名づけて月益と爲す。彼此同意にして嫌隙あることなし。閻浮提中一河水あり、修羅吒と名づけ、其の兩邊に各四萬二千の城あり、國土平博にして嚴好、人民財富熾盛にして飲食豐饒なり。時に月益王、修羅吒河水の邊に城あり、亦修羅吒と名づく。東西十二由旬、南北七由旬なり。二王要を作す、若し我れ男を生まば、當さに汝の女を取るべし、若し汝男を生まば、當さに我が女を取るべしと。時に王月益男女を生まず、兒を求めんが爲めの故に、水神を祠祀し、種々の諸天に禮事す。滿善天・寶善天・日月釋梵地水風神・摩醯首羅天・園神・林神・空野神・市神・鬼子母神・城郭神なり。天の爲めに福を作して兒あらんことを希望す。時に修羅吒河邊に、二五の通仙人ありて住す。時に河水神、王に白して言はく、『修羅吒河邊に二五の通仙人ありて住す、若し彼れ王家に生れんことを求願すれば、王當さに兒あるべし』と。時に月益即ち河邊に至り、漸く行いて求覓者、仙人の所に至り、仙人に語りて言はく、『知るや不や、我が家に兒なし、若し汝等我が家に生れんと求願すれば、命終して便ち生るゝことを得ん、若し我が家に生るれば、五欲自ら恣にして快樂乏しきなし』と。仙人答へて言はく、『爾るべし』と。時に王月益歡喜して還歸す。時に一仙人後七日に於て命終し、即ち彼の第一夫人の胎中に處す。女人に三種の智あり、娠時を知り、從得する所を知り、男子に欲意ありて著はるゝを知る。時に夫人王に白して言さく、『王今知るや不や、我れ今娠めるあり、』と。王言はく、『善快なり、當さに重く供養すべし』と。即ち一切に勅し、供具增益すること一倍す。時に第二仙人七日にして復命終し、即ち第二夫人の胎中に處す。夫人王に白さく、『王今知るや不や、我れ今娠めるあり、』と。王即ち供具を增すこと上の如し。時に王即ち人を遣はして、往いて修羅吒河邊に幾仙人あるかを看せしむ。使即ち往いて看、二仙人の已に死するを見、即ち還りて王に白して言はく、『仙人已に死せり』と。王自ら念じて言はく、

「彼の二仙人命終し、我が二夫人の胎中に生る」と。彼れ九月滿じて一男兒を生む、顏貌端正なり。王の第一夫人男兒を生む時、衆善自ら至り、五百賈客ありて來至し、五百の賈客海より寶を取りて還り、五百の伏藏あり、悉く自ら發出し、五百の死囚あり、獄より出づることを得。時に王月益自ら思惟して言へらく、「當さに此の兒の爲めに何等の字をば作すべき。彼の國法、若し初めに男兒を生まば、或は父母、若しは沙門、婆羅門字を作す。時に王自ら念ずらく、「何ぞ沙門婆羅門の字を作すことを須つことをせん。此の兒生るゝ日多く善事ありて現ず。卽ち字づけて善行と爲さん」と。時に王卽ち四種の母を與ふ、一には治身、二には洗浴浣濯、三には乳を與ふ。四には當さに娛樂を爲すべし。象馬車乘、衆の伎樂種々の戲笑を作し、又孔雀の尾を持つて後へに在り、是くの如く嚴飾して娛樂す。善行王子年八九に至り、種々の技藝・書數・印畫・戲笑・歌舞・伎樂を敎ふ、又象馬車乘に騎し、射御鬪戰の事を學ぶ。時に彼の王子一切皆學す。時に王の第二夫人子を生む。時に多く衆惡事の起るあり、野干鳴き、阿修羅日を捉へ、五百應さに死すべき者來至す。彼の國の法、若し初めて兒を生む、當さに沙門、婆羅門をして字を作さしむ。王自ら念ずらく、「何ぞ沙門、婆羅門の字を作すことを須たん、此の兒生るゝ日、多く衆惡事出づ、卽ち之を字づけて惡行と爲す。王亦四母を與ふ。一には治身、二には洗浴浣濯、三には乳を與ふ、四には當さに娛樂を爲すべし、象馬車乘、衆伎樂と種々の戲笑を作すと、乃至鬪戰の事を學ばしむ。時に善行王子を王甚だ愛念す、及び諸の餘の小國王子夫人大臣侍從一切の人民亦愛念せざるなし。而も惡行王子は、王愛念せず、諸の餘の一切も亦愛念せず。時に惡行王子是くの如きの念を作す。善行王子は、王及び一切の人民甚だ之を愛念す、而も我れは獨り爾も王愛念せず、及び餘の一切も亦愛念せず、我れ方便を伺求して、當さに其の命を斷ずべし」と。爾の時隣國の王月の第一夫人女を生む。卽ち使を遣はして月益王の所に來至し、語りて言はく、『我が第一夫人女を生む、當さに汝の兒善行に與へて婦と作すべし』と。

異時に於て善行王子是くの如きの念を作す、「閻浮提の衆生は皆多く貧苦なり、我れ當さに海に入りて如意珠を取り、閻浮提の衆生をして、貧者あることなからしめん」と。時に卽ち王の所に至りて白して言さく、『閻浮提の衆生は皆多く貧苦なり、我れ海に入りて如意珠を取り、閻浮提の衆生をして、貧者あることなからしめん』と。王卽ち答へて言はく、『我れ大に金銀七寶あること無數なり、庫藏盈滿す、意の與ふる所に隨ふべし』と。卽ち王の答へて言はく、『能はず、必ず大海に入りて如意珠を取り、閻浮提の衆生をして、貧者あることなからしめんと欲す』と。王言はく、「汝の意のまゝにせよ」と。時に惡行王子卽ち是の念を作さく、「今正さに是れ時なり、其の便を得て其の命を斷つべし」と卽ち王所に至りて白して言さく、「善行は是れ我が敬重するところ、今海に入らんと欲す、若し我れ見ずんば、將さに恐らくは命を失はんとす、今與に相隨つて海に入らんと欲す」と。王言はく、『意のまゝにせよ』と。時に王子、王及び夫人眷屬と辭別し已り、往いて[四]修婆羅城中に詣り、鈴を搖かして唱へて言はく、「誰か能く父母・妻子・兄弟姉妹及び諸の親屬を捨離し、金銀珍寶無價の寶珠を須めんと欲する者は、我れに隨つて海に入れ、一切の所須飮食莊嚴の具は、我れ當さに供給すべし」と。時に卽ち五百の賈客あり、其の所に來集す。時に善行五百の賈客と倶に修婆羅城に至り。彼の城中に於て船を買ひ、幷びに船師を求む。船師は海中の諸難、涌浪難・洄澓難・大魚難を知る。船を莊嚴し已りて、復重ねて唱ふること上の如くならしむ。卽ち船を放ちて海に入る。善行福德を以ての故に、風其の船を吹き、七寶所に詣り、諸の賈人に告げて言はく、「今已に寶渚に至る、好く堅牢に船を莊ひ、自ら恣に寶取りて船に滿たし、沈沒せしむること勿れ」と、時に諸の賈人教を受けて寶を取る。善行衆賈人を教授し已り、更に餘處に至る。惡行王子惡言を以て衆賈人に向つて之を說く。「善行王子若し安隱に還り至らば、當さに汝等の寶を奪ふべし、寧ろ未だ還らざるに、船を推して海に置いて去るべし」と。時に惡行五百の賈人に說く、賈人已に其の說を受け、

【四】修婆羅、或は須婆羅(Su-varṇa)。金と譯す。

船を推して海に入りて去る。彼れ薄福の果報、風其の船を破り、五百賈人海に沒して死す。惡行王子一船板を得、風吹いて展轉して還ることを得て岸に趣く。彼れ海邊に於て貧賤聚落に在り、家々に乞食して自活す。時に善行還りて故處に至るに、衆賈人を見ず、亦船を見ず、卽ち推胸して啼泣懊惱す。「恐らくは諸の賈人、惡鬼羅刹等の爲めに寄せらる」と。時に寶渚神善行に語りて言はく、『五百の賈人惡鬼羅刹等に害せらるゝに非ず、是れ惡行王子惡言して五百の賈人を破壞し、船を推して海に入りて去らしむ、薄福の果報、風其の船を破り、五百の賈人海に沒して死す、惡行王子は、一船板を得、風吹いて岸に至り、彼れ海邊に於て、乞食して自活す』と。善行自ら念ずらく、「我れ今寧ろ前んで海龍王宮に至りて、如意珠を乞ふべし」と。卽ち道を引いて去り、羅刹渚に到る。時に五百の羅刹女出でゝ迎へ、遙に見て慰問す。「善來童子、何所に至らんと欲する」と。答へて言はく、「閻浮提の衆生皆多く貧苦なり、海龍王宮に往き、如意寶珠を乞ひ、閻浮提の衆生をして、貧苦の者なからしめんと欲す」と。卽ち復問うて言はく、「何の乘を取らんと欲する」と。答へて言はく、「大乘を取らんと欲す」と。羅刹女言はく、「善い哉、若し汝最正覺を成ぜば、我れ當さに出家して汝の弟子と作るべし」と。報へて言はく、「爾るべし」と。彼れ遙に金城を見る、中に一金床あり、龍其の上に坐す。時に善行王子卽ち金城に行き、彼の龍の所に至る。時に龍王遙に見て慰問す。「善來童子、何の所に至らんと欲する」と。答へて言はく、「龍王知るや不や、閻浮提の衆生皆多く貧苦なり、我れ海龍王の宮に至り、如意寶珠を取り、閻浮提の人をして、貧苦あることなからしめんと欲す」と。彼れ卽ち答へて言はく、海龍王宮は、至るを得べきこと難し、七日中水を行き、常に膝に至る。復七日中水を行きて臍に至り、七日中行いて水腋に至り、七日中は浮んで過ぎ、七日中は蓮華上を行き、七日中は毒蛇の頭上を行き、然る後乃ち海龍王宮に至る。汝今止むべし、我れ

に寶珠あり、能く東方二千由旬に七寶を雨らす、今當さに汝に與ふべし」と。答へて言はく、「取らず、要らず當さに海龍王宮に至るべし」と。卽ち復問うて言はく、「何の乘を取らんと欲する」と。答へて言はく、「大乘を取らんと欲す」と。復言はく、「若し汝最正覺を成ぜば、我れ當さに出家して、汝が爲めに第一智慧の弟子とならん」と。卽ち金城を捨てゝ遙に銀城を見る。中に龍王あり、銀床の上に在りて坐す、時に善行王子銀城に往詣し、龍王の所に至る。龍王遙に見て慰問す。「善來童子、何の所に至らんと欲する」と。答へて言はく、「龍王知るや不や、閻浮提の衆生、皆多く貧苦なり、我れ海龍王宮に至り、如意珠を取りて、閻浮提の人をして、貧苦あることなからしめんと欲す」と。答へて言はく、海龍王宮は至るを得べきこと難し、七日中水を行き、常に膝に至り、七日中は臍に至り、七日中は腋に至り、七日中は浮びて過ぎ、七日中は蓮華上を行き、七日中は毒蛇の頭上を行き、然る後乃ち海龍王宮に至る。汝今止むべし、我れに寶珠あり、能く南方四千由旬に七寶を雨らす、今當さに汝に與ふべし」と。答へて言はく、「取らず、我れ要らず當さに海龍王宮に至るべし」と。卽ち復問うて言はく、「何の乘を取らんと欲する」と。答へて言はく「大乘を取らんと欲す」と。復言はく、「汝若し最正覺を成ぜば、我れ當さに出家して、汝が爲めに第一神足の弟子と作らん」と。卽ち銀城を捨てゝ去る。復琉璃城あるを見る、龍王ありて坐すること上の如し。卽ち如意珠を與ふ、能く西方六千由旬に寶を雨らす。答へて言はく「取らず、我れ要らず當さに海龍王宮に至るべし」と。復問うて言はく、「何の乘を取らんと欲する」と、答へて言はく、「大乘を取らんと欲す」と。「若し汝最正覺を成ずる時は、我れ當さに出家して、汝が爲めに第一多聞の弟子と作るべし」と。時に善行卽ち復前行して、七日中水膝に至り、乃至蓮華上を行き、乃ち毒蛇の處に至る。是くの如きの念を作す。「何の行の報ひを以て毒蛇の中に生まるゝ、豈前世瞋毒の報ひにあらずや、當さに何の法を以て之を降伏すべき、唯慈心あり」と。卽ち慈心三昧を思惟する時、諸の

毒蛇皆悉く頭を垂れ、上を行いて過ぎ、海龍王宮に至る。時に海龍王遙に見て、慰問して言はく、「善來童子、何の須欲する所ある」と。答へて言はく、「我れ今汝の髻中の如意寶珠を得んと欲す」と。答へて言はく、「汝等短壽なり、此の珠價大なり、相與へざるに非ず、今當さに汝に與ふべし、但汝命終らんと欲する時、珠を還送し來れ」と。即ち珠を解いて、之を與へ、幷びに二龍を遣はし、後より珠を持ちて還らしむ。時に善行珠を捉りて求願して言はく、「若し是れ如意珠ならば、便ち當さに忽然として還りて修婆羅城に至るべし」と。如意念頃に即ち修波羅城に還る。時に惡行王子、善行の海より安隱にして還ると聞き、即ち善行の所に往いて語りて言はく、「汝知るや不や、我れ今貧窮聚落に在り、家々乞食して以て自ら生活す、汝大海より安隱にして還る、何の得る所とやする」と。即ち答へて言はく、『此の如意寶珠を得來る』と。時に善行語りて言はく、「我れ今疲極す、小しく眠息せんと欲す」と。即ち惡行の膝上に枕して眠る。時に惡行佉陀羅木[五]の刺を以て其の兩眼を刺し、珠を持ちて去る。彼れ兩眼を傷け、血流れて身を汚し、東西に慞惶して道を見ず、遂に月王の園中に至る。時に守園の老母に二小兒あり、遙に其の來るを見る、血流れて身を汚し、行くに道を見ず、即ち之を愍傷し、問うて言はく、「汝何が故に、乃ち月王の園中に於て東西に行き、慞惶して道を見ざる」と。即ち具さに爲めに因緣を說く。老母語りて言はく、「我れに二兒あり、汝と共に戲るべし、汝今此に在りて住すべし、當さに相看視すべし、猶ほ二兒の如し」と。時に惡行即ち修羅吒城に還り、王月益の所に至り、王に白して言さく、「王今知るや不や、我れ海中大風に遇ひて船を破り、五百賈人海中に沒在す、唯我れ安隱にして還る」と。王言はく、「汝海より安隱にして還る、何等をか得るとせん」と。答へて言はく、「此の如意寶珠を得たり」と。王即ち問うて言はく、「此の珠何の能く作す所ぞ」と。答へて言はく、「知らず」と。時に王即ち珠を取り、藏に付して之を掌らしむ。時に惡行即ち使を遣はして隣國の王月に語る、「善行五百の賈人と海に入りて寶を取り、水

【五】佉陀羅(Khadira)。木の名、檐木と譯す。トゲのある木で、其のトゲで眼を刺したのである。

に漂沒せらる、汝今我れに女を與ふべし」と。王卽ち報へて言はく、「須らく我れ女に語るべし」と。王卽ち女を喚びて之に告ぐ。「善行五百の賈人と海に入りて寶を取り、水の爲に漂はされ、惡行は安隱にして還る。今汝を索めて婦と爲さんと欲す」と。答へて言はく、「能はず、我れ自ら出でゝ夫を求めんと欲す」と。時に王卽ち國中をして皆聚集せしめ、其の女を莊嚴して外に出で、東西に夫を求覓す。時に善行卽ち其の琴を調して之を彈じ、美音聲を出して園中に在りて住す。時に王女之を見て、卽ち往いて王に白して言はく、「王今知るや不や、我れ此の人を得て夫と爲さんと欲す」と。王言はく、「此れは是れ盲人なり」と。女、王に答へて言はく、「苦なし」と。時に王月、卽ち善行を喚び問うて言はく、「童子汝は是れ何人ぞ」と。答へて言はく、「王、今知るや不や、我れは是れ王月益の第一の太子善行なり」と。王言はく、「何が故に眼を傷ふや」と。卽ち上の因緣を以て具さに王に白す。王言はく、「汝若し是れ王月益の子ならば、今當さに發願して眼をして平復せしむべし」と。善行卽ち善願を發し、若し我れ閻浮提の衆生の貧苦苦厄の爲めの故に、海に入りて如意寶珠を求め、閻浮提の衆生をして、窮乏あるなからしめんと欲す。幷びに及び惡行王子、惡言を以て五百の賈人を破壞し、我れを捨てゝ還り復佉陀羅木刺を以て我が兩眼を刺し、我が如意珠を持つて還る。我れ彼の人に於て惡心あることなし、若し我れ眞誠に虛りなくんば、眼當さに平復すること故の如くなるべし」と。時に發願亦竟りて眼も尋いで平復す。時に王卽ち極好に其の女を莊嚴し、以て之に適かしむ。王卽ち使を遣はして王月益に語りて言はく、「汝今知るや不や、王子善行安隱海より還り、今極好に我が女を莊嚴して以て之に適かしむ。今當さに修羅吒城に往くべし」と。時に王月益、卽ち國內に勅し、種々に莊嚴す。是に於て王子善行修羅吒城に往き、頭面に王足を禮し已りて、具さに因緣を以て王に白す。王卽ち人に勅して惡行を殺さしむ。善行王に白して言さく、「王願はくは殺すことを須ひざれ」と。時に王月益惡行を遣はして國を出でしむ。善行王に問うて言はく、「惡行珠

を持ち來るや、今所在とせんや」と。王言はく、「今庫中に在り」と。王に白して言さく、「珠を出したまふべし」と。王卽ち珠を出す。善行卽ち淨く身を洗浴し、新白淨衣を著け、珠を取りて幢頭に安置し、高好殿上に著け、發願して言はく、「若し審かに是れ如意珠ならば、當さに閻浮提に七寶を雨滿すべし、其れ病者あらば皆除愈せしめよ」と、發願頃の間に、卽ち閻浮提に七寶を雨滿す。後異時に於て王月盆喪す。卽ち善行を以て王と爲す。時に王子惡行、善行の所に來至して白して言さく、「我れ今外に在り、家々乞食して以て自ら存活す」と。王答へて言はく、「汝我が頭を守護すべし、當さに我が食ふ所を以て汝に與ふべし」と。王に答へて言はく、「爾り」と。後異時に於て王小しく睡眠す。惡行念じて言はく、「今命を斷ずべし」と。卽ち刀を拔いて之を斫る。時に惡行の臂尋いで自ら墮つ、卽ち自ら禍と稱す。王便ち覺めて問うて言はく、「童子何が故に禍と稱する」と。王に答へて言はく、「天自ら其の業を造る」と。王言はく、「何が故ぞや」と。此の因緣を以て王に白す。王言はく、「實に是れ汝自ら其の業を造る」と』。佛諸の比丘に告げたまはく、『王月盆とは豈異人ならんや、今の[六]白淨王是れなり、第一の夫人とは、卽ち今の母[七]摩耶是れなり、爾の時の月王とは、今の執杖釋種是れなり、時に月王の女とは、今の[八]瞿夷是れなり。時に守園の老母とは、今の[九]摩訶波闍波提比丘尼是れなり、二兒とは今の難陀と阿難是れなり、時に善行とは我が身是れなり、時に惡行とは、今の提婆達多是れなり、五百の賈人とは、今の五百比丘是れなり。昔しは惡教を以て此の諸人を破し、今亦復惡教を以て之を破す』と。

爾の時優波離、卽ち坐より起ち、偏露右肩にして右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく、『云何が破僧、幾人を齊り名けて破僧と爲す、誰か和合僧を破する』と。佛言はく、『優波離、二事の破僧あり、妄語と相似語なり。此の二事を以ての故に破僧す。優波離復二事の破僧あり、羯磨を作すと舍羅を取るとなり。優波離、一比丘は破僧すること能はず、方便を求むと雖、亦破僧すること能

【六】白淨は、淨飯に同じ、釋尊の父(Suddhodana)。
【七】摩耶(Māyā)。
【八】瞿夷(Gautami)。
【九】摩訶波闍波提(Mahāprajāpati)。

はず。亦比丘に非ず、式叉摩那・沙彌・沙彌尼の破僧に非ず、方便を求めて破僧すと雖、破僧すること能はず。優波離、此の衆一比丘、彼の衆一比丘、彼れ破僧舍羅を行じ、羯磨を作すも、是くの如きは破僧すること能はず、但僧をして塵垢せしむ、二人三人も亦是くの如し。優波離、若し此の衆四人若しは過ぎ、彼の衆四人若しは過ぐれば、破僧舍羅を行じ、若しは羯磨を作さば、優波離、是れを齊りて名けて破僧と爲し、是れを破和合僧と爲す。優波離復問ふ、『破和合僧は、何等をか得ると爲す』と。佛言はく、『破和合僧は、泥梨中に罪を受け、一劫療せず』と。僧破已りて能く和合すれば、何等をか得る』と。佛言はく、『梵天の福を得、一劫樂を受く』と。偈を說いて言はく、

衆僧和合して樂む　和合すれば諍ひ競はず　和合すれば則ち法あり　常に修道を勤むるを得
能く衆僧を和合すれば　一劫天の樂を受く

優波離復問ふ、一切破僧する者は、皆地獄に墮ちて一劫苦を受くるや不や』と。佛優波離に語りたまはく、『一切破僧の人、必ずしも地獄に墮ちて苦を受くること一劫ならず。優波離、若し比丘非法を法と言ひ、此の法を堅持して和合僧を破し、彼れ自ら非法の想を知りて破し、便ち非法想を作して是くの如きの言を說く、『此れは是れ法、此れは是れ毘尼、此れは是れ佛の所教と、異見異忍にして破僧舍羅を行ず。優波離、此くの如きの破僧は、一劫泥梨中に苦を受けて療せず。若し比丘、非法を法と說き、此の事を堅持して方便して僧を破す、非法想、破法想して說く、此れは是れ法、是れは毘尼、是れは佛の所教と、破僧舍羅を行じ、羯磨を作す。優波離、是くの如き破僧の人は、一劫泥梨の中に苦を受けて療せず、法想して破し、非法想して說くも亦是くの如し。優波離、若し比丘、非法を法と說き、此の事を堅持して和合僧を破し、彼れ法想して破し、法想して說く、此れは是れ法、是れ毘尼、是れ佛の所教と、不異見、不異忍にして破僧舍羅を行じ、羯磨を作す、是くの如きは優波離、此の人は地獄に墮して一劫苦を受けず、疑と不疑の四句も亦是くの如し。非法想

と疑の四句も亦是くの如し。是くの如く乃至說と不說も亦是くの如し。（破僧揵度具足して竟る。）

四分律卷第四十六

滅諍揵度第十六の一

爾の時世尊舍衛國に在しき。時に迦留陀夷、六群比丘と、阿夷羅跋提河中に往いて浴す。時に迦留陀夷浴し竟りて岸に上り、六群比丘の衣を著け、是れ己れの衣と謂ひ、看ずして去る。六群比丘洗浴し已りて岸に上り、己れの衣を見ず、正しく迦留陀夷の衣を見る。卽ち言ふ『迦留陀夷我が衣を偸む』と。人現在前せざるに、便ち滅擯羯磨を作す。迦留陀夷聞き已りて疑あり、卽ち世尊の所に往き、頭面に禮足して却つて一面に坐し、此の因緣を以て具さに佛に白す。佛問うて言はく『汝何の心を以て取る』と。答へて言はく『是れ我が衣と謂ひて取る、賊心を以てせず』と。佛言はく『不犯なり、衣を看ずして著くべからず、人不現前にして、而も羯磨を作すべからず。呵責羯磨・擯羯磨・依止羯磨・遮不至白衣家羯磨、舉羯磨・滅擯羯磨なり。若し作すも、羯磨成ぜず、突吉羅を得。自今已去、諸の比丘の爲めに、現前毘尼滅諍を結す。應さに是くの如く現前毘尼を說くべし。

爾の時世尊王舍城に在しき。時に沓婆羅摩子、重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯さず。時に諸の比丘皆言ふ『重罪を犯す』と。卽ち問うて言はく『汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すことを憶するや不や』と。彼れ波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すことを憶せず。答へて言はく、『我れ是くの如き罪を犯すことを憶せず』と。卽ち諸の比丘に語りて言はく『長老、數ば我れを詰問すること莫れ』と。諸の比丘故ほ詰問して止まず。彼れ是くの如きの念を作す、『我れ當さに云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『自今已去、沓婆羅摩子のために、憶念毘尼白四羯磨を作すことを聽す。應さに是くの如く與ふべし。沓婆羅摩子、應さに僧中に往き、

【一】阿夷羅跋提河(Ajitavati)。

偏露右肩にして革屣を脱し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの言を白す。「大德僧聽け、我れ沓婆羅摩子重罪を犯さず、諸の比丘言はく、我れ重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すと。諸の比丘我れに問うて言はく、汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すを憶するや不やと。我れ重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すことを憶せず。答へて言はく、我れ是くの如き重罪を犯すことを憶せず、諸の長老數々難詰して我れに問ふことを須ひざれと。而も諸の長老故ほ難詰して止まず、我れ今憶念せず、僧に從つて憶念毘尼を乞ふ、願はくは僧我れに憶念毘尼を與へよ、慈愍の故に」と』。是くの如く第二、第三乞ふ。衆中羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の沓婆羅摩子、重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯さず、諸の比丘皆言ふ、重罪波羅夷、乃至偸蘭遮を犯すと。諸の比丘問うて言はく、汝重罪波羅夷乃至偸蘭遮を犯すを憶するや不やと。彼れ重罪を犯すことを憶せず、諸の長老、我れを難詰することを須ひざれと、而も諸の比丘故ほ難詰して止まず。彼れ罪を犯すことを憶せず、今僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。若し僧時到らば、僧彼れに憶念毘尼を與ふることを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の沓婆摩羅子、重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯さず、諸の比丘皆言ふ、波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すと。卽ち問うて言はく、汝重罪波羅夷、乃至偸蘭遮を犯すを憶するや不やと。彼れ重罪を犯すことを憶せず、卽ち答へて言はく、我れ重罪を犯すことを憶せず、諸の長老、數々難詰して我れに問ふことを須ひざれと。而も諸の比丘故ほ數々難詰して疑はず、彼れ罪を憶せず、今僧に從つて憶念毘尼を乞ふ。今僧沓婆羅摩子のために憶念毘尼を作す、誰か諸の長老、僧沓婆羅摩子に憶念毘尼を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。此れは是れ初羯磨なり、第二、第三も亦是くの如く說く。僧已に沓婆羅摩子に、憶念毘尼を與ふることを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。自今已去、諸の比丘のために、憶念毘尼滅

諍を結す、應さに是くの如く說くべし』と。

爾の時世尊王舍城に在しき。時に比丘あり［二］難提と名く。癲狂心亂にして多く衆罪を犯す、沙門の法に非ず言に齊限なし、行來出入威儀に順ぜず。後還た心を得る時諸の比丘言はく『彼れ重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯す』と。諸の比丘問うて言はく『難提、汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すことを憶するや不や』と。彼れ卽ち答へて言はく『我れ先きに癲狂心亂の時、多く衆罪を犯す、行來出入威儀に順ぜず、我れ故らに作すにあらず、是れ癲狂の故のみ、諸の長老、數々難詰せらるべからず』と。諸の比丘故ほ難詰して止まず。彼の比丘是くの如きの念を作す『我れ當さに云何がすべき』と。諸の比丘に白す、諸の比丘佛に白す。佛言はく『僧難提比丘に、不癡毘尼白四羯磨を與ふることを聽す。應さに是くの如く與ふべし。難提比丘應さに僧中に至り、偏露右肩にして革屣を脫し、右膝地に著け、合掌して是くの如きの白を作して言はく「大德僧聽け、我れ難提比丘、癲狂心亂の時、多く衆罪を犯す、行來出入威儀に順ぜず、後に還た心を得、諸の比丘我れに問うて言はく、汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すことを憶するや不やと。我れ答へて言はく、先きに癲狂心亂の時多く衆罪を犯し、行來出入威儀に順ぜず、我れ故作するに非ず、是れ癲狂心亂の故なり、諸の長老、數々難詰して我れに問ふことを須ひざれと。而も諸の比丘、故ほ難問して止まず、我れ今は不癡なり、僧に從つて不癡毘尼を乞ふ、願はくは僧我れに不癡毘尼を與へよ、慈愍の故に」と是くの如く第二、第三說く。衆中應さに羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の難提比丘、癲狂心亂にして多く衆罪を犯す、言に齊限なし、出入行來威儀に順ぜず、後還た心を得。諸の比丘語りて言はく、汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すを憶せりや不や」と。卽ち答へて言はく、「我れ先きに癲狂の時多く衆罪を犯す、言に齊限なし、出入行來威儀に順ぜず、此れは是れ癲狂なり、是れ故作にあらず、諸の長老、數々

【二】難提(Nandi)。

我れを難詰すること莫れ」と。而も諸の比丘故ほ難詰して止まず。此の比丘今は不癡なり、僧に從つて不癡毘尼を乞ふ、若し僧時到らば、僧難提比丘に、不癡毘尼を與ふることを忍聽せよ、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の難提比丘、癲狂心亂にして多く衆罪を犯す。言に齊限なく、出入行來威儀に順ぜず、後に還た心を得。諸の比丘語りて言はく「汝重罪波羅夷、僧伽婆尸沙、偸蘭遮を犯すを憶するや不や」と。即ち答へて言はく「我れ先きに癲狂心亂にして多く衆罪を犯す、出入行來威儀に順ぜず、此れは是れ我が癲狂心亂にして、是れ故作にあらず。諸の長老、數々難詰して我れに問ふこと莫れ」と。而も諸の比丘、故ほ難詰して止まず。此の比丘今は不癡なり、僧に從つて不癡毘尼を乞ふ、僧今難提比丘に不癡毘尼を與ふ、誰か諸の長老、僧難提比丘に不癡毘尼を與ふることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れ初羯磨なり、是くの如く第二、第三說く。僧已に難提比丘に、不癡毘尼を與ふることを忍し竟る。僧默然するが故に、是の事是くの如く持つ。自今已去、諸の比丘のために不癡毘尼滅諍を結す、應さに是くの如く不癡毘尼を說くべし。

爾の時世尊瞻波城に在し、伽渠池邊に在しき。時に世尊、十五日布薩し、白月滿ずる時、前後圍遶せられて衆僧の前に在り、露地に於て坐したまふ。時に阿難初夜過ぎ已りて坐より起ち、偏露右肩にして右膝地に著け、合掌して白して言さく『初夜已に過ぐ、願はくは世尊說戒したまへ』と。時に世尊默然たり。阿難卽ち還た坐に復す。時に阿難中夜後夜過ぎて明相已に出づ。復坐より起ちて偏露右肩し、右膝地に著け、合掌して佛に白して言さく『中夜後夜已に過ぎ、明相已に出づ、衆僧坐すること久し、唯願はくは說戒したまへ』と。佛阿難に告げたまはく『衆中不清淨なり、如來をして不清淨の衆中に於て、羯磨說戒せしめんと欲す、此の處りあることなし』と。時に阿難默然として復坐に復す。爾の時長老目連是くの如きの念を作す。「衆中何等の人ありて不清淨なる、如來

是くの如きの言をなしたまふ、「衆中不淸淨なり、如來をして不淸淨の衆中に於て、羯磨說戒せしめんと欲す、是の處りあることとなし」と』。時に目連卽ち自ら思惟して衆中を觀察し、天眼淸淨を以て彼の比丘の坐するを見る。佛を去ること遠からず、沙門に非ずして、自ら是れ沙門なりといひ、淨行に非ずして、自ら是れ淨行なりと言ふ、但破戒の諸惡不淨あり、白法あることなし、邪見所犯の衆惡を覆藏して、空中樹の如し、外に枝葉ありと雖、而も內に實なし。見已りて念じて言はく、『世尊此の比丘を見たまふ、故に是くの如きの言を作したまふ、「如來をして不淸淨衆中に於て羯磨說戒せしめんと欲するは、是の處りあることとなし」と。』時に目連坐より起ちて、彼の比丘の所に往いて語りて言はく、『汝今起つべし、世尊汝を知り、汝を見たまふ、出で去れ滅し去れ、汝此の中に住すべからず』と。時に目連彼の比丘の臂を捉り、牽いて門外に著け、還りて世尊に白して言さく、『衆已に淸淨なり、願はくは世尊說戒したまへ』と。世尊目連に告げたまはく、『是くの如くすべからず、若し異時に於ても亦是くの如くすべからず。目連、彼れをして罪に伏せしめ、然る後に罪を與へよ、自ら罪に伏せざるに、而も罪を與ふべからず。自今已去、諸の比丘の爲めに、自言治滅罪を結す、應さに是くの如く自言治を說くべし』と。

　爾の時佛舍衞國に在しき。時に舍衞の諸の比丘諍ふ。衆僧罪を求覓すること、法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如くす。爾の時、佛、諸の比丘に告げたまはく、『應さに多く罪を求覓し、多人知法の者の語を用ふべし。自今已去、諸の比丘の爲めに、用多人語滅諍法を結す、應さに是くの如く多人語を用ふべし』と。

　爾の時世尊釋翅瘦に在しき。比丘あり象力と字づく、論議を憙び、外道と共に論ず。切問を得る時は、前後の言語相違す。僧中に於て問ふ時も、亦復是くの如し、前後の言語相違し、衆中に在りて、故らに妄語を作す。時に諸の外道皆共に譏嫌す。『沙門釋子慚愧を知らず、但妄語を作す、自ら言ふ

「我れ正法を知る」。と是くの如き何の正法かある。切問を得る時は、前後の言語相違す、故らに妄語を作す」と。時に諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり、象力釋子を嫌責して言はく、『云何ぞ外道と論じ、切問を得る時は、前後の言語相違する、衆僧中に在りて問ふ時も、前後の言語相違するや』と。諸の比丘佛所に往き、頭面禮足し、此の因縁を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時此の因縁を以て比丘僧を集め、象力釋子を呵責し言はく、『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり。云何ぞ汝外道と論議し、切問を得る時は前後の言語相違する、衆中に在りて問ふに亦復前後の言語して、故らに妄語を作すや』と。世尊無數の方便を以て象力を呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『應さに彼の比丘のために、罪處所白四羯磨を作すべし。應さに是くの如く與ふべし。僧を集め、僧を集め已りて爲めに擧を作し、擧を作し已りて爲めに憶念を作し、憶念を作し已りて罪を與へよ、衆中應さに羯磨に堪能なるものを差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、此の象力釋子論議を好み、外道と論じ、切問を得る時は前後の言語相違し、設し衆僧中に於て問ふも、亦前後の言語相違し、衆中に故らに妄語を作す。若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今象力釋子のために、罪處所羯磨を作す、汝象力利なくして不善を得。汝切問を得る時、前後の言語相違す、設し衆中に問ふ時も亦復是くの如し、衆中に在りて故らに妄語を作す、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、此の象力釋子、論議を好み外道と論じ、切問を得る時は前後の言語相違す。衆僧中に在りて問ふ時も亦復是くの如し。衆中に在りて故らに妄語を作す。今僧象力釋子のために、罪處所羯磨を作す、汝象力、利なくして不善を得。汝切問を得る時前後の言語相違す。衆中に在りて問ふ時も亦復是くの如し、衆中に在りて故らに妄語を作す。誰か長老、僧象力釋子のために、罪處所羯磨を作すことを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。是れは初

【三】罪處所は、覓罪相のことである。事實を推問して罪相の明白を證するのである。

羯磨なり、第二、第三も是くの如く說く。僧已に象力釋子のために、罪處所羯磨を忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ。自今已去、諸の比丘の爲めに、罪處所滅諍法を結す。應さに是くの如く罪處所を結することを說くべし』と。

爾の時世尊舍衞國に在しき。時に舍衞の諸の比丘共に諍ふ。諸の比丘多く衆戒を犯す、沙門の法に非ず、亦は作し、亦は說く、出入限なし。彼の諸の比丘自ら是くの如きの念を作す。『我曹多く衆戒を犯す、沙門の法に非ず、亦は作し、亦は說く、出入限なし。若し我曹還た自ら共に善く此の事を問はゞ、或は能く此の諍事をして、轉だ深重ならしめて、年月を經歷せん。法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如く諍事を除滅することを得ず、僧をして安樂を得ざらしめん』と。時に諸の比丘佛に白す。佛言はく『應さに此の諍を滅すべし、猶ほし草覆の如し。自今已去、諸の比丘のために、如〔四〕草覆地滅諍法を結す。應さに是くの如く如草覆地を說くべし』と。

爾の時世尊拘睒彌に在しき。拘睒彌の比丘、比丘と共に諍ひ、比丘、比丘尼と共に諍ひ、比丘尼、比丘と共に諍ひ、比丘尼、比丘尼と共に諍ひ、闡陀比丘あり、比丘を捨てゝ比丘尼を助けて伴黨と作る。時に諸の比丘聞く。中に少欲知足にして頭陀を行じ、戒を學せんことを樂ひ、慚愧を知る者あり。諸の比丘を嫌責し已りて世尊の所に往き、頭面禮足して一面に在りて坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊爾の時此の因緣を以て比丘僧を集め、無數の方便を以て諸の比丘を呵責したまふ『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ拘睒彌の比丘共に諍ひ、比丘は比丘と共に諍ひ、比丘は比丘尼と共に諍ひ、比丘尼は比丘と共に諍ひ、比丘尼は比丘尼と共に諍ひ、闡陀比丘、比丘を捨てゝ比丘尼を助けて與に伴黨と作るや』と。無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまふ。四種の諍あり、言諍と覓諍と犯諍と事諍となり。云何が言諍なる。比丘と比丘と共に諍ひ、言十八諍事を引

【四】草覆は、譬喩である。比丘互に多く罪を犯して居るので、互に罪を言ひ合へば、到底諍の底止する所はない。此の時は、皆互に罪を懺悔し合いて、悉く低頭して地に伏すこと、草の覆ふに似たりといふ意である。

き、法と非法、若しは毘尼と非毘尼、乃至說と不說なり。若し是くの如きの相を以て、共に言語を諍ひ、遂に彼此共に鬪ふ、是れを言諍と爲す。云何んが覔諍なる。若し比丘、比丘の爲めに罪を覔むるに三擧事を以てす。破戒と破見と破威儀と見聞疑なり。是くの如きの相を作して罪を覔め、共に妄ならずと語り、伴の勢力を求めて其の意を安慰す。若し擧すれば憶念を作し、若しは此の事を安んず、此の事を安んぜず、不癡、不脫是れを覔諍と爲す。云何が犯諍なる。七種の罪波羅夷、僧伽婆尸沙乃至惡說を犯す、是れを犯諍と爲す。云何が事諍なる。言諍中の事作、覔諍中の事作、是れを事諍と爲す。言諍は何を以て[五]根とする。貪恚癡を根と爲し、無貪、無恚、無癡を根と爲し、僧を根と爲し、界を根と爲し、人を根と爲し、[六]六諍を根となし、[七]十八破事を根と爲す、是れを言諍根と爲す。覔諍は何を何て根と爲す。貪恚癡を根となし、無貪無恚無癡を根と爲し、僧を根と爲し、界を根と爲し、人を根と爲し、三擧事を根と爲す。是れを覔諍の根と爲す。犯諍は何を以て根と爲す。貪恚癡を根と爲し、僧を根と爲し、界を根と爲し、人を根と爲し、三擧事を根と爲し、[八]六犯所起を根と爲す、是れを犯諍の根と爲す。事諍は何を以て根と爲す。貪恚癡を根と爲し、無貪無恚無癡を根と爲し、僧を根と爲し、界を根と爲し、人を根と爲す、是れを事諍の根と爲す。言諍は是れ善不善無記なりや。言諍は或は善、或は不善、或は無記なり。云何が言諍は是れ善なる。比丘と比丘と善心にて言を諍ひ、法・非法、乃至、說・不說なりと、是くの如きの相を作して、共に彼此言を諍ふ是れを言諍善と爲す。云何が言諍不善なる。若し比丘、比丘と、不善心にて言を諍ひ、法・非法、乃至、說・不說なりと、是くの如き相を以て共に言を諍ひ、此れを以て遂に鬪諍を成す、是れを言諍不善と爲す。云何が言諍無記なる。若し比丘無記心を以て言を諍ひ、十八事を引き、法・非法、乃至、說・不說なりと。此くの如き事を以て互に言を諍ふ、是れを言諍無記と爲す。覔諍は是れ善、不善無記なりや。覔諍は或は善、或は不善、或は無記なり。云何が覔諍は是れ善、是の中比丘善心に

【五】根といふのは、諍の生ずる因である。三善、三不善心は內心・僧・界・人は事、六諍は因十八事は法に約して根とす。

【六】六諍は、『中阿含經』に出づ、瞋惱・不語結・慳嫉・諂誑・無慚愧・惡欲邪とある。

【七】十八事は、法・非法・律・非律・犯・不犯・輕・重・有殘・無殘・麁惡・非麁惡・常所行・非常所行制・非制・說・非說の十八。

【八】六犯所起は、本律の毘尼增一に出づ。

て共に相伺覓し、三擧事を以てす、破戒、破見、破威儀と見聞疑なり。內に五法あり、此の人をして無犯、無垢汚、淸淨にして、罪出づることを得せしめ、此の人をして惡名稱流布あらしむる莫れと。是くの如きの相を以て覓罪して共に語り、妄に伴の勢力を求めて其の心を安慰せず、擧を作し憶念を作し、此の事を安んじ、此の事を安んぜず、不癡にして脫せしむ、是れを覓罪事善と爲す。云何が覓罪事不善なる。若し比丘、比丘と共に、不善心を以て罪を覓むるに三擧事、破戒、破見、破威儀と見聞疑とを以てし、內に五法なく、此の人をして有犯垢穢不淸淨にして、罪をして不出ならしめんと欲し、此の人をして、不善名を流布せしめんと欲す。是くの如き相を以て、罪を覓めて共に語り、妄に伴の勢力を求めず、其の心を安慰せず、擧を作し、憶念を作し、此の事を安んじ、此の事を安んぜず、癡にして脫せず、是れを覓諍事不善と爲す。云何が覓諍事無記なる。比丘、比丘と共に無記心にて罪を覓むるに三擧事、破戒、破見、破威儀と見聞疑とを以てす。是くの如き相を以て、罪を覓めて共に語り、妄に伴の勢力を求めて其の心を安慰せず、擧を作し、憶念を作し、此の事を安んじ、此の事を安んぜず、無癡にして脫せしむ、是れを覓諍事無記と爲す。犯諍は是れ善、是れ不善、是れ無記なりや。犯諍は或は不善、或は無記なり。云何が犯諍は是れ不善なる。若し凡夫人の學人、故らに罪を犯す、是れを犯諍不善と爲す。云何が犯諍無記なる。若し凡夫人の學人、故らに戒を犯さず、無著人故らに戒を犯さず、是れを犯諍無記と爲す。事諍は是れ善、是れ不善、是れ無記なりや。事諍は或は善、或は不善、或は無記なり。云何が事諍善なる、比丘善心を以て言諍中に事を作し、覓諍中に事を作し、犯諍中に事を作す、是れを事諍善と爲す。云何が事諍不善なる。不善心を以て言諍中に事を作す、覓諍中に事を作す、犯諍中に事を作す、是れを事諍不善と爲す。若し無記心を以て作せば、是れを事諍無記と爲す。

言、　言諍、　言諍言、　言諍諍言、

或は言あり、是れ言諍。或は言あり言諍にあらず、或は言諍あり、即ち是れ言、或は言あり、即ち是れ諍、或は言あり、諍に非ず、或は諍あり、即ち是れ言、或は諍あり、言にあらず。云何が言あり、即ち是れ言諍。若し比丘と比丘と、共に言を諍ひ、十八事を以て、法・非法、乃至說・不說と、是くの如きの相を以て共に言を諍ひ、互に共に鬪ひて彼此和せず、是れを言あり、即ち是れ言諍と爲す。云何が言ありて言諍に非る。若し父、兒と共に語り、兒、父と共に語り、兒、母と共に語り、母、兒と共に語り、兄、弟と共に語り、弟、兄と共に語り、妹、姉と共に語り、姉、妹と共に語り、若しは復餘人共に語る、是れを言あり、言諍に非ずと爲す。云何が言諍即ち是れ言。若し比丘、比丘と共に言を諍ひ、十八事を以て、法・非法、乃至、說・不說と。是くの如き相を以て共に言を諍ひ、互に共に鬪つて彼此和せず、是れを言諍即ち是れ言と爲す。云何が言即ち是れ諍。若し比丘、比丘と共に言を諍ひ、十八事を以てし、法・非法、乃至・說・不說と、是くの如きの相を以て共に言を諍ひ、互に共に鬪ひて彼此和せず、是れを言あり、即ち是れ諍となす。云何が言にして不諍。兒、父と共に語り、父、兒と共に語り、兒、母と共に語り、母、兒と共に語り、弟、兄と共に語り、兄、弟と共に語り、妹、姉と共に語り、姉、妹と共に語り、若しは復餘人と共に語る、是れを言にして不諍と爲す。云何が諍にして即ち是れ言。若し比丘、比丘と共に諍ひ、十八事を以てし、法・非法、乃至、說・不說と、是くの如きの相を以て共に言を諍ひ、互に共に鬪つて彼此和せず、是れを諍にして即ち是れ言と爲す。云何が諍にして言にあらざる。言諍を除いて、若しは餘の諍事・覔諍・犯諍・事諍、是れを諍にして言に非ずと爲す。覔覔諍・覔諍覔・覔諍、諍覔なり。此の四句曲さに解するに上の言諍の四句の如く異ならず、故に復重ねて出さず、此の言覔は、即ち是れ覔諍・犯諍・事諍、亦上の如し。

若し一比丘、一比丘の現前に在り、好言にて教へて語り、若し非法・非毘尼・非佛所教を擯けて、彼れ是くの如きの言をなす、『是れ法、是れ毘尼、是れ佛の所教なり、當さに受けて是れを行ず

べし』と。是くの如くすれば、諍事滅することを得、是れを非法滅諍非法相似現前毘尼と爲す。一比丘、二比丘の爲めにし、三比丘の爲めにし、僧の爲めにする亦是くの如し。三比丘、一比丘の爲めにし、二比丘の爲めにし、三比丘の爲めにし、僧の爲めにする亦是くの如し。若し僧一比丘の爲めにし、二比丘の爲めにし、三比丘の爲めにし、僧の爲めにする亦是くの如し。若し一比丘、一比丘の前に在りて、好言にて教へて語り、法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如くし、彼れ是くの如きの言を作す『此れは是れ法、是れ毘尼、是れ佛の所教なり。汝當さに是の忍可を受くべし』と。若し作すこと是くの如くなれば、諍ひ滅することを得、是れを如法滅諍現前毘尼と爲す。是の中云何が現前法毘尼人。云何が法現前とは、所持の法滅諍する者是れなり。云何が毘尼現前とは、所持の毘尼滅諍する者是れなり。云何が人現前とは、言識往返する者是れなり。若し比丘諍事滅し已り、若し更に發起する者は波逸提なり。若しは後來の比丘、若しは新受戒の者、是れ初諍と謂ふ、若し更に發起する者は波逸提なり。是くの如く一比丘、二比丘の爲めにし、三比丘の爲めにし、僧の爲めにするも亦是くの如し、二比丘の一比丘、二比丘、三比丘の爲めにし、僧の爲めにするも亦是くの如し。三比丘の一比丘、二比丘、三比丘の爲めにし、僧の爲めにするも亦是くの如し。僧、一比丘の爲めに、好言にて教へて語り、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如くにし、彼れ是くの如きの言を作す『是れは法、是れは毘尼、是れは佛の所教なり、是れを受け、是れを忍せよ』と。若し是くの如くすれば諍事滅す、是れを如法滅諍現前毘尼と爲す。云何が現前法、毘尼、人、僧、界なる。云何が法現前とは、所持の法滅諍する者是れなり。云何が毘尼現前とは、所持の毘尼滅諍する者是れなり。云何が人現前とは、同羯磨和合して一處に集まり、來らざる者は囑授し、現前に在りて應さに呵すべき者を呵せざる是れなり。云何が界現前とは、界内に在りて羯磨し、制限を作す者是れなり。若し諍事滅して、若し更に發起するは波逸提なり。若し後來の比丘、新受戒の者、是れ初諍

と謂ふ、而も更に發起するは波逸提なり。與欲し已りて後に悔ゆる者は波逸提なり。僧の二比丘、三比丘、僧の爲めにするも亦是くの如し』と。

爾の時、阿難坐より起ち、偏露右肩にして右膝地に著け、合掌して世尊に白して言さく『言諍は幾滅を以て滅する』と。佛阿難に告げたまはく『言諍は二滅を以て滅す、現前毘尼を以て多人語を用ふ』と。阿難又問ふ。『頗し言諍の、一滅を以て滅し、現前毘尼にして、多人語を用ひざるありや』と。佛阿難に告げたまはく、『有り』と。問うて言はく、『何者か是れなる』と。佛言はく、『若し一比丘、一比丘の爲めに現前に好言にて敎へて、「是れ法、是れ毘尼、是れ佛所敎、是れを受け、是れを忍せよ」と言ふ、是くの如くにして諍事滅することを得、是れを阿難、言諍の一滅を以て滅し、多人語を用ひずと爲す、現前の義は上の如し。一比丘の二比丘・三比丘・僧の爲めにする亦是くの如し。二比丘の一比丘・二比丘・三比丘、僧の爲めにするも亦是くの如し。三比丘の一比丘・二比丘・三比丘、僧の爲めにするも亦是くの如し。僧、一比丘のために好言にて敎へて語る、法の如く、毘尼の如く、佛所敎の如くし、是くの如きの言を作す。「是れ法、是れ毘尼、是れ佛所敎なり、是れを受け、是れを忍せよ」と。若し是くの如くすれば諍事滅す、是れを阿難、言諍の一滅を以て滅し、現前毘尼にして多人語を用ひずと爲す。現前の義上の如し。僧の二比丘・三比丘、僧の爲めにするも亦是くの如し』と。佛阿難に語りたまはく『彼の諍比丘忍可せず、僧是くの如きの滅諍を作す。異住處に好衆僧、好上座の智慧人ありと聞き、彼の諍比丘、此の諍事を以ての故に、應さに彼の住處に往くべし。若し道路に在りて、能く法の如く、毘尼の如く、佛所敎の如く滅諍することを得ば、阿難、是れを言諍の、一滅を以て滅し、現前毘尼にして多人語を用ひずと爲す。是の中現前毘尼は前の如し。若し彼の諍比丘、道路に在りて、法の如く、毘尼の如く、佛所敎の如く滅諍すること能はざれば、彼の諍比丘、應さに彼の僧中の上座、有智人の前に至り、是くの如きの言を作す。「我が此

の諍事是くの如くにして起り、實の如く是れに因りて起る、僧是くの如きの滅を爲す、我れ忍可せず、是の故に長老の所に來至す、善い哉長老、我が爲めに法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此の諍事を滅せよ、若し長老能く我等が爲めに此の諍事を滅すること、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如くせば、我等當さに長老の前に於て此の諍事を捨つべし、若し長老、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此の諍事を滅すること能はざれば、我等自在に諍ひを作し、更に罪をして深重ならしめ、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く滅諍せず、諸の比丘住止安樂ならず」と。彼の諍比丘、應さに是くの如く僧前に在りて此の諍事を捨つべし。此の僧應さに彼の諍比丘に語りて言ふべし、『長老の諍事、若し是くの如くにして起り、實の如く、所因の如く起る。彼の衆僧の諍事の如き、若し能く實の如く說かば、我等當さに宜しきを量り、能く此の諍事を滅すべきや不や、若し長老の諍事、是くの如く起り、實の如く所因の如く起り、衆僧の滅諍の如く、而も不如實に說く、是くの如くなれば長老、此の諍事は滅するを得ず、諸の比丘安樂に住するを得ず』と。彼の僧應さに作すこと是くの如くにして諍ひを受くべし、受け已りて應さに斷決すべし。若し彼の諍比丘是れ下座ならば、應さに語りて言ふべし、「小しく出でよ、我等自ら共に此の事を評し、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如くせん」と。若し諍比丘是れ上座ならば、僧應さに自ら避けて餘處に至り、共に此の事を評斷し、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如くすべし。衆僧是くの如きの念を作す、「我等若し僧前に在りて、此の事を評せば、恐らくは更に餘事の起るありて、彼此をして善惡の言說不了ならしめん、我等寧ろ諸の智慧人と別に一處に集まり、共に此の事を評すべし」と。』佛阿難に告げたまはく、『彼の時僧卽ち應さに白を作して、共に此の事を評すべし、是くの如きの白を作せ、『大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今諸の智慧者を集め、共に別に事を評斷せん、白すること是くの如し」と、應さに是くの如きの白を作し已りて、共に事を評斷すべし。若し比丘十法あら

ば、應さに差して別に事を評斷すべし。何等か十なる。一には持戒具足、二には多聞、三には若しは二部の毘尼を誦して極めて利、四には若しは廣く其の義を解す、五には若し善巧の言語辭辯了々にして、問答して彼れをして歡喜せしむるに堪任す、六には若し諍事起れば能く滅す。七には不愛、八には不恚、九には不怖、十には不癡なり。此くの如きの十法ある者は、應さに差して、共に別に事を評斷すべし、彼れ十法ある者は、應さに別に一處に住し、共に此の事を評斷すべし。斷事比丘中不誦戒の者あり、戒毘尼を知らず、便ち正義を捨てゝ非法語を作さば、僧應さに白して此の比丘を遣り出すべし。應さに是くの如く白すべし。「大德僧聽け、彼の某甲比丘戒を誦せず、戒毘尼を知らず、便ち正義を捨てゝ非法語を作す、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今此の比丘を遣りて出す、白すること是くの如し」と。應さに是くの如きの白を作して遣出すべし。佛阿難に語りたまはく、『彼の斷事比丘中に坐し、戒を誦して戒毘尼を誦せざるあり、彼れ正義を捨てゝ少許の文を說く』と。佛阿難に告げたまはく、『僧應さに白を作して、此の斷事の比丘を遣りて出すべし、應さに是くの如く白すべし。「大德僧聽け、彼の某甲比丘、戒を誦し戒毘尼を誦せず、彼れ正義を捨てゝ少許の文を說く、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧今此の比丘を遣りて出す、白すること是くの如し」と。白已りて遣出せよ。若し評斷事比丘中に、法師ありて座に在り、彼れ正義を捨て、言辭の力を以て强えて說く」と。佛阿難に告げたまはく、『僧應さに白を作し、此の比丘を遣り出すべし、是くの如きの白を作せ。「大德僧聽け、此の某甲比丘法師、正法の義を捨て、言辭の力を以て强えて說く、若し僧時到らば僧忍聽せよ、僧今此の比丘を遣り出す。白すること是くの如し」と。應さに是くの如きの白を作し已りて遣出すべし』と。若し評斷事の比丘の坐中にて、戒を誦し、毘尼を誦し、彼れ正義に順じ、如法に說かば、佛阿難に告げたまはく、『僧應さに、法の如く毘尼の如く、佛の所教の如く、此の比丘を佐助すべし。若し彼の諍事、彼の僧、法の如く、毘尼の如く、佛所敎の如く、此の

諍ひを滅せざれば、今此の僧應さに法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此の諍事を滅すべし。若し彼の僧、法の如く、毘尼の如く、佛の所教の如く、此の諍事を滅せば、今此の僧亦此の事を忍可せよ。僧卽ち應さに彼の諍比丘に語りて言ふべし。「若し彼の僧、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此の諍事を滅せば、我等も亦此の事を忍可し、如法に滅諍す。今、我等亦當さに是くの如きの滅諍を作すべし」と。若し作すこと是くの如くにして滅諍を得ば、是れを阿難、言諍の一滅を以て滅し、現前毘尼にして多人語を用ひずと爲す。現前の義法乃至界も亦上の如し。若し諍事如法に滅し已り、後に發起すれば波逸提上の如し。彼の諍比丘第二僧を忍可せざれば、是くの如きの滅諍を作す。彼の住處に衆多の比丘あり、法を持し、律を持し、摩夷を持す。彼の諍比丘應さに彼の持法、持律、持摩夷の比丘の所に往くべし。若し彼の比丘中道に至りて能く諍事を滅せば、是れを阿難、言諍の一滅を以て滅し、現前毘尼にして多人語を用ひずと爲す。是の中の現前とは、云何が現前法・毘尼・人・僧・界とは上の如し。如法に滅諍已りて、後更に發起すれば、波逸提を得ること上の如し。若し彼の諍比丘、中道にして法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、諍事を滅する能はざれば、彼の諍比丘、應さに彼の衆多比丘の、持法・持律・持摩夷者の所に往き、是くの如きの言を作すべし。「長老、我が此の諍事、因是くの如く、起ること是くの如く、實に是れに因りて起る、僧是くの如きの滅諍を作し、第二僧亦是くの如きの滅を作す、我れ忍可せず、故に長老の間に來至す、善い哉長老、能く法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此の諍事を滅せば、我れ當さに長老の間に於て、此の諍事を捨つべし、若し長老、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此の諍事を滅せざれば、我等便ち自在に諍ひを作し、更に罪をして深重ならしめん。法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此の諍事を滅せざれば、諸の比丘住止安樂ならず」と。彼の諍比丘、應さに彼の衆多比丘の前に在りて此の諍事を捨つべし。彼の衆多比丘、應さに此の諍比丘に語りて言ふべし。「若し長

老、此の諍事所起の如く、實の如く、所因の如く起らば、第二僧の滅諍の如く、實の如く說き、說き已りて諍ひを捨てよ、我等當さに宜しきを量りて、此の諍ひを滅すべきや不や。若し長老、如實に說かざれば、此の諍事は自在にして、罪を作すこと更に深重に、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く滅諍せざれば、諸の比丘住止安樂ならず」と。阿難、彼衆多比丘、應さに作すこと是くの如くにして諍を受くべし。諍を受け已りて決斷せよ。若し彼の諍比丘是れ下座ならば、應さに語りて言ふべし「汝小しく避けよ、我等事を評斷せんと欲す」と。若し是れ上座ならば、應さに自ら餘處に避け、共に此の事を評斷すべし。若し彼の僧法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く滅諍せず、第二僧も亦法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く此の諍事を滅せざれば、衆多比丘應さに、法の如く、毘尼の如く、佛所教の如く、此の諍事を滅すべし。若し彼の僧如法に滅諍し、第二僧も亦如法に滅諍すれば、衆多比丘亦應さに此の事を忍可すべし。應さに彼の諍比丘に語りて言ふべし。彼の第二僧の滅諍の如く、我等亦忍可す」と。今當さに是くの如きの滅諍を作すべし。是れを阿難、言諍の一滅を以て滅す、現前毘尼にして多人語を用ひずと爲す。是の中の現前とは、法、毘尼、人も亦上の如し。如法に滅諍し已りて後更に發起せば、波逸提を得ること上の如し、二比丘の所に往く、持法・持律・持摩夷亦是くの如し。一比丘の所に往く、持法乃至持摩夷も亦是くの如し』と。

爾の時、舍衞國の比丘諍ふ。時に舍衞の衆僧如法に滅諍す。彼の諍比丘、僧の滅諍事を忍可せず、彼の聞住處亦上の如く、衆多比丘亦上の如し。二比丘、亦上の如し。彼の諍比丘、舍衞の僧の滅諍を忍可せず、乃至一比丘なり。便ち往いて佛所に至り、頭面禮足して一面に在りて坐し、此の因緣を以て具さに世尊に白す。世尊即ち比丘僧を集め、無數に方便して彼の諍比丘を呵責して言はく、『汝の所爲は非なり、威儀に非ず、沙門の法に非ず、淨行に非ず、隨順行に非ず、爲すべからざる所なり、云何ぞ癡人、舍衞の僧如法に滅諍す、而も忍可せず、乃至一比丘の滅諍も亦忍可せざる』

と。世尊無數の方便を以て呵責し已りて諸の比丘に告げたまはく、『應さに此の諍ひを滅するに多人語を用ふべし。舍羅を行じ、行舍羅人を差し、白二羯磨することを聽す。五法あり、差して舍羅を行ぜしむべからず。愛あり、恚あり、怖あり、癡あり、已に行ずるや行ぜざるやを知らず、是くの如きの五法あらば、差して舍羅を行ぜしむべからず。不愛・不恚・不怖・不癡にして、已に行ずるや、行ぜざるやを知る、是くの如きの五法あらば、應さに差して舍羅を行ずべし。衆中應さに是くの如く、羯磨に堪能なる者を差し、上の如く是くの如きの白を作すべし。「大德僧聽け、若し僧時到らば、僧忍聽せよ、僧某甲比丘を差して舍羅を行ず、白すること是くの如し」と。「大德僧聽け、僧今某甲比丘を差して舍羅を行ず。誰か諸の長老、僧某甲比丘を差して舍羅を行ずることを忍する者は默然せよ、誰か忍せざる者は說け」と。僧已に某甲比丘を差して、舍羅を行ずることを忍し竟る。僧忍して默然するが故に、是の事是くの如く持つ」と。三種の行舍羅あり、一は顯露、二に覆藏、三に就耳語なり。云何が顯露なる。彼の諸の比丘是くの如きの念を作す。「衆中非法の比丘多し」と。然も彼の和尙、阿闍梨、皆法の如く應さに顯露に舍羅を行ずべし。摩の諸の比丘是くの如きの念を作す。「衆中非法の人多し、而も上座の智人、法を持し、毘尼を持し、摩夷を持する者、皆如法に語る」と。應さに顯露に舍羅を行ずべし。諸の比丘是くの如きの念を作す『此の諍事、如法語を作す者多きや、非法語を作す者多きやを知らず、然も彼の和尙、阿闍梨、皆如法なり」と。彼の比丘應さに顯露に舍羅を行ずべし。諸の比丘是くの如きの念を作す、「此の諍事、法語多きや、非法語多しとせんやを知らず、然も彼の上座の智人、法を持し、毘尼を持し、摩夷を持し、皆如法に說く」と。彼の比丘應さに顯露に舍羅を行ずべし。彼の諸の比丘、是くの如きの念を作す。「此の諍事法語の人多し」と。卽ち應さに顯露に舍羅を行ずべし。應さに是くの如く行ずべし。應さに二種の舍羅を作るべし、一は破、一は完なり。舍羅を作り已りて應さに白を作すべし。「是くの如きの語を作す者

は、不破舍羅を捉れ、是くの如きの語を作す者は破舍羅を捉れ」と。舍羅を行じ已らば、應さに別處に數ふべし。若し如法語の比丘多ければ、彼れ應さに白を作すべく、「是くの如きの語を作すは、諍事滅す」と。若し如法語の比丘少ければ、即ち應さに禮を作し已りて便ち起ちて去るべし。應さに信を遣はして比丘の住處に往き、僧中に白して言すべし。『彼の住處非法の比丘多し、善い哉長老、能く往いて彼れに至れ、若し如法語の比丘多ければ、諍事滅して功德多し」と。此の比丘聞かば應さに往くべし、若し往かざれば法の如く治す。若し作すこと是くの如くにして諍事滅すれば、是れを阿難、言諍の二滅を以て滅し、現前毘尼にして多人語を用ふと爲す。是の中の現前とは、法・毘尼・人・界、僧の義上の如し。是の中云何が多人語を用ふる。若し多人の說を用ふるは持法・持毘尼・持摩夷なり。若し如法に滅し已りて、後更に發起するは、波逸提上の如し。云何が覆藏行舍羅なる。諸の比丘是くの如きの念を作す、「此の諍事如法の比丘多し、而も彼の和尙、阿闍梨不如法なり、我等若し顯露に舍羅を行ずれば、恐らくは諸の比丘、和尙、阿闍梨に隨和して舍羅を捉らん」と。彼の比丘應さに覆藏して舍羅を行ずべし。彼れ是くの如きの念を作す。「此の諍事如法の比丘多し、彼の衆中に上座あり、標者の智人は持法・持律・持摩夷なるも、而も非法に住す。若し我等顯露に舍羅を行ずれば、諸の比丘、彼の衆中の上座智人の、非法に住する者に隨つて舍羅を捉らん」と。是の比丘應さに覆藏にして舍羅を行ずべし。二句不知亦上の如し、應さに是くの如く舍羅を行ずべし。二種より乃至如法滅諍已りて、後更に發起すれば波逸提を得ること上の顯露行舍羅の如し。云何が耳語行舍羅と爲す。彼の比丘是くの如きの念を作す。「如法の比丘多し、彼の和尙、阿闍梨は非法に說く」と。彼れ應さに耳語して舍羅を行ずべし。彼の比丘是くの如きの念を作す。「此の諍事は如法の比丘多し、而も彼の衆中に上座の智人標首の比丘非法に住す、持法・持毘尼・持摩夷なり。彼の比丘應さに耳語して舍羅を行ずべし。二句不知上の如し。應さに二種の舍羅を作るべし、一は破、

二は完なり。應さに白を作すべし。「是くの如く語る者は完舍羅を捉れ、是くの如く語る者は破舍羅を取れ」と。彼れ舍羅を行ずる時、應さに稀に坐間に一人を容れ、身小しく障翳すべし。彼の比丘耳語を作して語りて言はく「汝の和尚・同和尚・阿闍梨・同阿闍梨・親厚智識は、已に舍羅を捉る。善い哉、汝も亦當さに舍羅を捉るべし、慈愍の故に」と。若し如法の比丘多くして、諍事滅することを得ば、功徳を得ること多し。舍羅を行じ已りて、一面に在りて之を數ふ。此れより乃至如法滅諍已りて後、更に發起すれば波逸提を得ること上の如し。十六不如法ありて舍羅を捉る。不解にして舍羅を捉る、善く伴と共にせずして舍羅を捉る、非法の者をして多からしめんと欲して舍羅を捉る、非法比丘の多きを知りて舍羅を捉る、衆僧を破せしめんと欲するが故に舍羅を捉る、衆僧の破すべきを知るが故に舍羅を捉る、非法に舍羅を捉る、別衆舍羅を捉る、小犯を以ての故に舍羅を捉る、所見の如くならざる故に舍羅を捉る。云何が不解にして舍羅を捉る。此の諍事に於て決了せず、是法・非法・乃至說・不說を知らず、是れを不解にして舍羅を捉ると爲す。云何が善く伴と共にせずして舍羅を捉る。若し比丘多聞にして、持法・持毘尼・持摩夷ならば、與に伴を作さずして、法、非法乃至說、不說なり。是れを善く伴と與にせずして舍羅を捉ると爲す。云何が非法比丘をして多からしむる舍羅を捉る。彼の比丘是くの如きの念を作す「此の諍事多く如法比丘あり、我れ今當さに非法舍羅を捉り、非法比丘をして多からしめん」と。是れを非法比丘をして多からしむる舍羅を捉ると爲す。云何が非法比丘の多きを知りて舍羅を捉る。彼の比丘是くの如きの念を作す「此の諍事は非法の比丘多し、非法の伴の爲めに舍羅を捉らん」と。是れを非法比丘の多きを知りて舍羅を捉ると爲す。云何が僧をして破せしめんと欲して舍羅を捉る。彼れ是くの如きの念を作す「此の諍事如法の比丘多し、我れ今非法舍羅を捉り、衆僧をして破せしめん」と。是れを衆僧をして破せしめんと欲して舍羅を捉ると爲す。云何が僧の當さに破すべきを知りて舍羅を捉る。彼の比丘、非法比丘

の多きを知り、非法伴黨の爲めに舍羅を捉る。是れを僧の當さに破すべきを知りて舍羅を捉ると爲す。云何が非法に舍羅を捉る、白二に白四羯磨し、白異に羯磨異なり、是れを非法に舍羅を捉ると爲す。云何が別衆舍羅を捉る。同一界羯磨に盡く集まらず、應さに囑授すべき者は囑授せず、現前に在りて呵すべき者は便ち呵す、是れを別衆舍羅を捉ると爲す。云何が小犯事を以て舍羅を捉る。或は念ず「罪を犯す」と、或は「故らに犯さず」と、或は發心す、是くの如くにして舍羅を捉る、是れを小犯事にして舍羅を捉ると爲す。云何が所見の如くならずして舍羅を捉る。異見、異忍にして舍羅を捉る、是れを所見の如くならずして舍羅を捉ると爲す。是れを十種の非法捉舍羅と爲す。復十如法の捉舍羅あり。解して舍羅を捉る、乃至所見の如く舍羅を捉る、是れを十種の如法捉舍羅と爲す。此れ卽ち十不如法捉舍羅に反す。五種の平當人あり。或は人あり、身に作さずして口に作す、或は人あり、口に作さずして身に作す、或は人あり、身に作さず、口に作さず、或は人あり、身に作し、口に作す、或は人あり、不愛・不恚・不怖・不癡なり。云何が人あり、身に作さず口に作すとは、人あり、身に現相せずして口に言教を説く、是れを人あり、身に作さず、口に作すと爲す。云何が人あり、口に作さず、身に作すとは、人あり身に相を現じて、口に言教を説かず、是れを人あり、口に作さず身に作すと爲す。云何が人あり、身に作さず、口に作さずとは、人あり、身に相を現ぜず、口に言教を説かず、是れを身に作さず、口に作さずと爲す。云何が身に作し、口に作すとは、人あり身に相を現じ、口に言教を説く、是れを身に作し、口に作すと爲す。是の中に人あり、不愛・不恚・不怖・不癡なり、此の人、彼の人の中に於て、最も尊貴殊勝第一と爲す。猶ほし乳の酪を出し、酪の酥を出し、酥の醍醐の最勝無比なるを出すが如し。是くの如く不愛・不恚・不怖・不癡は、彼の人の中に於て尊貴殊勝無比と爲す。是れを五種の平當人と爲す。

四分律卷第四十七

小鉢 174
上色 197
眞誓梨革屣 169
瞋恚人受具 63

—ス—

醉者授戒 62
隨覆藏日 329

—セ—

說戒揵度 71
旃陀羅(Candāla) 178
旋角革屣 169
栴檀(Chaṇ ana) 248
瞻波(Campā) 295

—ソ—

蘇彌 253
草覆 389
澡豆 23
賊心入道 65

—タ—

大姓 177
大迦賓寃(Mahākappina) 77
提婆檀豆檀慮乾漏 259
誕陀盧多梨 205
煖水 186
畜生 65
鳥足縫 197
帖葉衣 223

—テ—

癲瘓 63

—ト—

毾㲪 121

—ナ—

那提迦葉(Nadi-kaśyāpa) 7
難提(Nandī) 385

—ニ—

二形 65
二歲 17
尼揵 250
似孔雀毛革屣 170
如法如毘尼 309

—ネ—

年不滿二十受具 70

—ハ—

波婆(Pāvā) 217
波利婆沙(Parivāsa) 364
破僧 65
頗那陀施衣 203
婆伽婆(Bhagavat) 249
婆陀 266
婆輸伽衣 209
婆羅跋提(Bhālavalā) 182
反復 193

—ヒ—

非人 65, 92
比那漏 259
比丘の相 109
皮革揵度 157
毘琉璃(Virūḍhaka) 214
白淨(Suddhadana) 380

—フ—

不截鬚衣 203
不蘭迦葉(Puraṇakāsyāpa) 253
富盧醯修(Purahita) 280
佛法僧 317
米泔汁 252
別部衆 88
邊罪 65

—ホ—

梵施(Brahmadatta) 260

—マ—

摩羅(Malla) 217
摩訶男(Mahā-naman) 216
摩訶波闍波提(Mahāparajapatī) 380
摩那埵(Manatva) 330
摩耶(Māyā) 385
摩羅 257
磨飡緻 246
縵衣 223
縵指 63

—ミ—

彌那漏 259
命過 88

—メ—

眠人授戒 62

—モ—

毳衎革屣 170

—ヤ—

鑰牡 26
藥揵度 235

—ユ—

輸頭檀那(Śuddhodana) 49
勇健 55

—ヨ—

餘事の緣 92

—ラ—

羅睺多衣 202
羅刹娑(Rākśasa) 249
裸形人受具 63

—リ—

裏相 203

—ル—

樓延(Roja) 217

—ロ—

盧醯那(Rohitaka) 206
六處樂 161
六諍 390
六犯所起 390

—ワ—

和光跋檀陀子 212
和尙 16, 171

—四分律三索引終—

索引

（頁數は通頁を表す）

—ア—

阿夷羅跋提河(Ajitavatī) 383
阿濕婆阿槃提 164
阿濕卑(Aśvajit) 13
阿闍梨 171
阿難邠坻(Anāthapiṇḍada) 289
阿㝹婆陀(Anuppada) 292
阿槃提(Avanti) 164
阿羅梨革屣 169
阿漏 259
安居揵度 116
菴羅 176
菴婆羅婆提(Āmradārika) 198
菴婆羅婆利(Āmrapālī) 182

—イ—

伊師皮 175
伊梨延陀(Aiṇeya) 165
因緣生の法 14

—ウ—

烏波陀頗尼 246
鬱鞞羅(Urvirvā) 7

—エ—

衣揵度 177
衣鉢 55
衣不竟 275
壞二道 65

—オ—

黃門 65
鴦伽那羅衣 227
億耳(Kutikaṇṇa) 164

—カ—

呵責 32
伽尸(Kaśī) 295
伽奢(Kāśi) 280
伽耶(Gāya) 7
迦那富羅 169
迦婆陀 267
楷摩 27
串頭衣 206

—キ—

耆婆(Jīvaka) 183
吉羅羅 235
佉陀羅(Khadira) 378
客比丘十四日說戒 106
杏子人 256
狂人授戒 63
經勞 126
緊殊炭 176

—ク—

九十事 22
休息 10
俱跋陀羅飯 235
俱夜羅器 211
拘留歡喜山(Kururaghara) 164
舊比丘十五日說戒 106
瞿夷(Gaūtamī) 380
共宿鹽合食 271
空中樹 98

—ケ—

稽留 90
賢聖八正道 98
揵稚(Ghaṇṭā) 76

—コ—

五根 98
五事 308, 368
五條 197
五法 317
五力 98
劫貝袴革屣 179
强與具足 63

—サ—

菜茹 24
罪處所 388
三語 16
三種藥 249
三十事 92
散若(Saṁjaya) 370
删若 13

—シ—

四依 55
四月共住 40
四事 93
四種の革屣 170
四種の淨地 261
四正勤 98
四禪 98
四如意足 98
四念處 98
私呵(Siṁha) 245
私羅漏 259
殺阿羅漢 65
殺父 65
殺母 65
次鉢 174
自恣揵度 134
時作と非時作 292
七覺意 98
質多羅藥 236
舍樓伽 257
舍羅(Śalākā) 79
責數 130
守護那(Srona) 157
受戒揵度 1
出佛身血 65
修婆羅(Suvarṇa) 375
修步 235
衆中說戒 312
十三事 93
十八破事 390

昭和五年二月五日印刷
昭和五年二月十日發行

國譯一切經 律部 三

不許複製

編輯兼發行者 岩野眞雄
東京市芝區芝公園地七號地一番

印刷者 渡邊通夫
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

印刷所 日進舍
東京市芝區芝浦町二丁目三番地

發行所
東京市芝區芝公園地七號地一番
大東出版社
振替東京一九四七一番
電話芝（二一一六番
　　　（三〇四〇番

製本所　兩角製本所

EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03148 8406